

高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第1集

後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

具 同 中 山 遺 跡 群

第1分冊 1989・1990年度

1 9 9 2 ・ 3

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

具 同 中 山 遺 跡 群

第 1 分冊 1989・1990年度

1 9 9 2 ・ 3

高 知 県 教 育 委 員 会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター



遺跡空撮



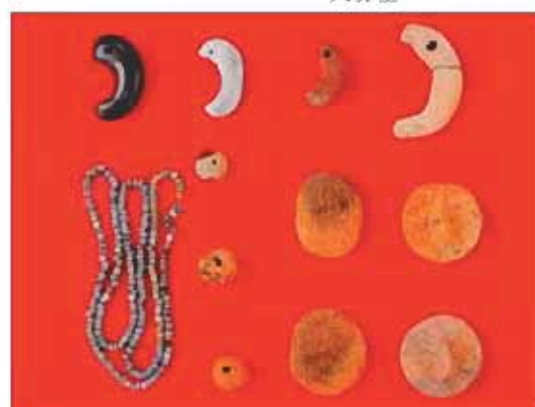
古墳時代祭祀跡 (SF 17)



古代・中世検出遺構



火葬墓



古墳時代祭祀遺物



泥塔

序

高知県教育委員会では、建設省四国地方建設局の委託を受けて昭和 61 年度から継続して中筋川の河川改修に伴う緊急発掘調査を実施してきております。昭和 61 年度と 63 年度に実施した調査結果については、既に報告をまとめ多大な成果を収めることができました。

本書は、平成元年度から 2 年度にかけて調査を実施しました具同中山遺跡群の成果をまとめたものです。縄文時代から近世までの複合遺跡として、県内でも貴重な資料を得ることができました。特に古墳時代の祭祀跡や、古代から近世にかけての集落の変遷を明らかにすることができたと考えます。遺物では、泥塔や革帯装飾具等遺跡の性格を窮わせる資料も出土しています。この報告書が埋蔵文化財の保護・保全、更には今後の考古学研究の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施や報告書の作成にあたっては、建設省四国地方建設局の埋蔵文化財に対する深い御理解と御協力を賜ったことに心から謝意を表するとともに、関係各位から寄せられました多大な御指導と御協力に対し、厚く御礼申し上げます。

平成 4 年 3 月

高知県教育委員会

教育長 西 森 久米太郎

例 言

1. 本書は、中筋川の河川改修工事に伴う埋蔵文化財 ― 具同中山遺跡群の平成元・2年度の発掘調査報告書である。
2. 調査は、建設省四国地方建設局より、高知県教育委員会が委託を受け、実施した。発掘調査期間は、平成元年5月8日から12月15日までが元年度調査で、平成2年4月26日から11月28日までが2年度調査とし、出土遺物整理作業及び報告書作成は平成2・3年度に実施した。
3. 調査体制は次のとおりである。

調査顧問	岡本健児	(高松短期大学教授・高知県文化財保護審議会会長)
調査員	廣田佳久	(高知県教育委員会文化振興課 主幹)
	前田光雄	(　　　　　　〃　　　　　　主事)
	松田直則	(　　　　　　〃　　　　　　〃)
	吉原達生	(　　　　　　〃　　　　　　〃)
庶務	堀川郁夫	(　　　　　　〃　　　　　　埋蔵文化財班長)
	松田直則	(　　　　　　〃　　　　　　主事)

事務補助 吉原美香、川崎典子、影山洋子
4. 本報告書の作成及び編集は、前田、松田が協議し行った。本文執筆は、前田、松田、廣田が主に分担し、江戸秀輝(高知県埋蔵文化財センター調査員)に執筆の協力を願った。文責は執筆者名を文末に記した。
5. 発掘調査、整理作業及び報告書作成を通じて、調査顧問岡本健児教授に御指導、御助言をいただいた。記して感謝する次第である。
6. 検出遺構については、祭祀跡と考えられる集中地点をSF、土壌をSK、掘立柱建物跡をSB、溝状遺構をSD、集石遺構をSXで表示した。尚、中世の遺物について従来土師質土器を呼称したものについては、今回土師器に統一した。
7. 報告書に掲載の縮尺率は、それぞれに示した。高度値は海拔高であり、方位は磁北である。
8. 調査にあたっては、建設省四国地方建設局中村工事事務所、及び中村市教育委員会の御協力をいただいた。また地元の現場作業員の皆様には多大な御協力をいただき深く感謝する次第である。尚調査補助員、整理作業員は以下に記したとおりである。

調査補助員	藤方正治
整理作業員	大原喜子・竹村延子・浜田雅代・松木富子・矢野 雅
	山中美代子・山本利恵・山本裕美子・吉本睦子・宮添充加
	西 由紀子
9. 出土遺物、その他の関係資料は高知県教育委員会において保管している。

報告書要約

1. 遺跡名 具同中山(ぐどうなかやま)遺跡群
遺跡番号 070052 遺跡地図 No. 22-46
2. 所在地 高知県中村市具同中山 1254-6
3. 立地 中筋川下流域左岸 沖積地 標高 1~5 m
4. 種類 (縄文時代) 遺物包蔵地。(弥生~古墳時代) 祭祀跡。(奈良~平安時代) 遺物包蔵地, 集落跡。(鎌倉~室町時代) 遺物包蔵地, 集落跡。
5. 調査主体 高知県教育委員会
6. 調査契機 中筋川河川改修
7. 調査期間 1989年5月8日~12月15日, 1990年4月26日~11月28日
8. 調査面積 9,100 m²
9. 検出遺構 (弥生時代) 祭祀跡 1 基。(古墳時代) 祭祀跡 8 基。(古代~近世) 掘立柱建物跡 29 棟, 土坑 31 基, 溝跡 8 条, 集石遺構 25 基, 火葬墓 1 基, 水田址, 柵列 1 列。
10. 出土遺物 (縄文時代) 晚期深鉢。(弥生時代) 後期壺・甕等。(古墳時代) 土師器甕・壺・高杯・碗・脚付碗・甑・鉢・手捏ね土器, 土製有溝円板・模造鏡・勾玉・玉土錘・滑石製白玉, 叩き石, 擦石等。(古代~近世) 須恵器碗・皿・杯・壺・土師器皿・杯・碗・鍋・羽釜・瓦質土器鍋・釜, 東播系コネ鉢, 青磁碗・皿, 白磁碗・皿, 香炉, 備前焼, 緑釉陶器, 灰釉陶器, 瀬戸美濃系陶器, 常滑焼, 土製泥塔, 砥石, 石鍋, 革帯装飾具, 硯, 有孔石製品, 金属製品, 古銭等。
11. 内容要約 今回の調査は, 具同中山遺跡群の中で 1989・1990 年に実施したものである。縄文時代から近世に亘る良好な資料を得ることができた。縄文時代の遺物は, 晩期後半の中村Ⅱ式に相当する深鉢が出土している。弥生時代後期から古墳時代にかけては, 祭祀跡を検出している。特に古墳時代においては, 土師器, 須恵器を中心とした祭祀跡を 8ヶ所検出しており, 前回の調査とあわせて 18ヶ所となった。古墳時代を中心とする祭祀としては県下最大規模であり, 貴重な資料を提供することができた。古代から中世にかけては, 奈良時代が空白となっているが, 平安時代頃から集落が出現し, 火葬墓も検出している。鎌倉時代になると集落が最盛期をむかえており, 掘立柱建物跡も数多く検出している。室町時代になると徐々に集落が散在し, 小規模化してくる。さらに 14 世紀前半には方形の石組みの基礎をもった中世墓が出現してくる。この時期本遺構では墓地化が始まり大きな画期となっている。16 世紀後半には, 水田跡も広範囲になり建物跡も小規模化になり静かな農村の景観を見ることが出来る。その後近世においても同様に水田地として現在に至っている。

本文目次

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査の方法と経過	2
第3節 基本層序	4
第2章 遺跡の地理的・歴史的環境	7
第3章 遺構と遺物	11
第1節 縄文時代	11
第2節 弥生時代・古墳時代	12
1) 検出遺構	12
2) 出土遺物	23
第3節 古代・中近世	107
1 検出遺構	107
1) 掘立柱建物跡	107
2) 土坑	128
3) 火葬墓	132
4) 集石遺構	133
5) 溝跡	136
6) ピット群	138
7) 水田跡	138
8) 柵列	138
2 遺構内出土遺物	154
1) 掘立柱建物跡出土遺物	154
2) 土坑出土遺物	155
3) 火葬墓	156
4) 集石遺構出土遺物	156
5) 溝出土遺物	159
6) ピット出土遺物	160
7) 水田出土遺物	160
3 遺構外の出土遺物	180
1) 土師器	180
2) 瓦質土器	183
3) 瓦器	184

4) 須恵器	185
5) 東播系コネ鉢	185
6) 備前焼	186
7) 緑釉陶器	186
8) 灰釉陶器	186
9) 瀬戸美濃系陶器	186
10) 常滑焼	186
11) 亀山焼	187
12) 輸入陶磁器	187
13) 近世陶磁器	188
14) 産地不明陶器	188
15) 土製品	188
16) 石製品	188
17) 金属製品	189
18) 古銭	189
第4章 総括	257
1) 古墳時代	257
2) 祭祀遺物及び土師器の分類	261
3) 古代～近世	275
写真図版	

挿 図 目 次

- | | | | |
|--------|------------------|--------|-------------------|
| 第 1 図 | 具同中山遺跡群調査区位置図 | 第 33 図 | SF 15 出土遺物(6) |
| 第 2 図 | 第 I・II 調査区セクション図 | 第 34 図 | SF 15 出土遺物(7) |
| 第 3 図 | 基本土層柱状図 | 第 35 図 | SF 15 出土遺物(8) |
| 第 4 図 | 周辺の遺跡分布図 | 第 36 図 | SF 15 出土遺物(9) |
| 第 5 図 | 縄文土器実測図 | 第 37 図 | SF 16 出土遺物 |
| 第 6 図 | 弥生・古墳時代祭祀跡全体配置図 | 第 38 図 | SF 17 出土遺物(1) |
| 第 7 図 | SF 10 遺物出土状況図 | 第 39 図 | SF 17 出土遺物(2) |
| 第 8 図 | SF 12 遺物出土状況図 | 第 40 図 | SF 17 出土遺物(3) |
| 第 9 図 | SF 14 遺物出土状況図 | 第 41 図 | SF 17 出土遺物(4) |
| 第 10 図 | 須恵器実測図(1) | 第 42 図 | SF 18 出土遺物(1) |
| 第 11 図 | 須恵器実測図(2) | 第 43 図 | SF 18 出土遺物(2) |
| 第 12 図 | 須恵器実測図(3) | 第 44 図 | 掘立柱建物跡配置図 |
| 第 13 図 | 須恵器実測図(4) | 第 45 図 | SB 1・2 実測図 |
| 第 14 図 | 須恵器実測図(5) | 第 46 図 | SB 3・4 実測図 |
| 第 15 図 | 須恵器実測図(6) | 第 47 図 | SB 5・6 実測図 |
| 第 16 図 | 須恵器実測図(7) | 第 48 図 | SB 7・8 実測図 |
| 第 17 図 | SF 10 出土遺物(1) | 第 49 図 | SB 9・10 実測図 |
| 第 18 図 | SF 10 出土遺物(2) | 第 50 図 | SB 11・12 実測図 |
| 第 19 図 | SF 11 出土遺物(1) | 第 51 図 | SB 13・14 実測図 |
| 第 20 図 | SF 11 出土遺物(2) | 第 52 図 | SB 15・16 実測図 |
| 第 21 図 | SF 11 出土遺物(3) | 第 53 図 | SB 17・18 実測図 |
| 第 22 図 | SF 12 出土遺物 | 第 54 図 | SB 19・20 実測図 |
| 第 23 図 | SF 13 出土遺物(1) | 第 55 図 | SB 21～23 実測図 |
| 第 24 図 | SF 13 出土遺物(2) | 第 56 図 | SB 24・25 実測図 |
| 第 25 図 | SF 13 出土遺物(3) | 第 57 図 | SB 26・27・SA 1 実測図 |
| 第 26 図 | SF 13 出土遺物(4) | 第 58 図 | SB 28・29 実測図 |
| 第 27 図 | SF 14 出土遺物 | 第 59 図 | SK 1～14 実測図 |
| 第 28 図 | SF 15 出土遺物(1) | 第 60 図 | SK 15～31・火葬墓 実測図 |
| 第 29 図 | SF 15 出土遺物(2) | 第 61 図 | SX 1・2 実測図 |
| 第 30 図 | SF 15 出土遺物(3) | 第 62 図 | SX 3・4・7・9 実測図 |
| 第 31 図 | SF 15 出土遺物(4) | 第 63 図 | SX 8 上 実測図 |
| 第 32 図 | SF 15 出土遺物(5) | 第 64 図 | SX 8 下 実測図 |

- 第 65 図 SX 10 実測図
- 第 66 図 SX 11・12・16・17 実測図
- 第 67 図 SX 13 実測図
- 第 68 図 SX 14 実測図
- 第 69 図 SX 15・23・25 実測図
- 第 70 図 SX 18~20 実測図
- 第 71 図 SX 21 実測図
- 第 72 図 SX 24 実測図
- 第 73 図 遺構出土遺物(1)
- 第 74 図 遺構出土遺物(2)
- 第 75 図 遺構出土遺物(3)
- 第 76 図 遺構出土遺物(4)
- 第 77 図 遺構出土遺物(5)
- 第 78 図 遺構出土遺物(6)
- 第 79 図 遺構出土遺物(7)
- 第 80 図 遺構出土遺物(8)
- 第 81 図 遺構出土遺物(9)
- 第 82 図 遺構出土遺物(10)
- 第 83 図 遺構出土遺物(11)
- 第 84 図 遺構外出土遺物(1)
- 第 85 図 遺構外出土遺物(2)
- 第 86 図 遺構外出土遺物(3)
- 第 87 図 遺構外出土遺物(4)
- 第 88 図 遺構外出土遺物(5)
- 第 89 図 遺構外出土遺物(6)
- 第 90 図 遺構外出土遺物(7)
- 第 91 図 遺構外出土遺物(8)
- 第 92 図 遺構外出土遺物(9)
- 第 93 図 遺構外出土遺物(10)
- 第 94 図 遺構外出土遺物(11)
- 第 95 図 遺構外出土遺物(12)
- 第 96 図 遺構外出土遺物(13)
- 第 97 図 遺構外出土遺物(14)
- 第 98 図 遺構外出土遺物(15)
- 第 99 図 遺構外出土遺物(16)
- 第 100 図 遺構外出土遺物(17)
- 第 101 図 遺構外出土遺物(18)
- 第 102 図 遺構外出土遺物(19)
- 第 103 図 遺構外出土遺物(20)
- 第 104 図 遺構外出土遺物(21)
- 第 105 図 遺構外出土遺物(22)
- 第 106 図 遺構外出土遺物(23)
- 第 107 図 遺構外出土遺物(24)
- 第 108 図 遺構外出土遺物(25)
- 第 109 図 遺構外出土遺物(26)
- 第 110 図 遺構外出土遺物(27)
- 第 111 図 出土遺物
- 第 112 図 土製模造鏡分類
- 第 113 図 手捏ね土器分類(1)
- 第 114 図 手捏ね土器分類(2)
- 第 115 図 土師器碗分類(1)
- 第 116 図 土師器碗分類(2)
- 第 117 図 土師器脚付碗分類
- 第 118 図 土師器高坏分類
- 第 119 図 土師器壺分類
- 第 120 図 土師器甕分類(1)
- 第 121 図 土師器甕分類(2)
- 第 122 図 土師器甕分類(3)
- 第 123 図 土師器甕分類(4)
- 第 124 図 掘立柱建物跡変遷図

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯と経過

四万十川支流 四万十川の支流中筋川流域には、本遺跡を始め古墳時代を中心とする遺跡が
遺跡の発見 数多く所在している。その中でも具同中山遺跡群は、昭和20年代の堤防工事
の際に偶然発見されて以来、数多くの表採資料をもとに古墳時代の祭祀遺跡と
して全国に紹介され、河川祭祀を研究するに注目される遺跡となった。具同中
山遺跡群は、当初出土地点の小字名を付け東神木・ボケ遺跡として紹介された
遺跡群の名称 が、昭和61年度の調査で小字の範囲以上に遺跡の範囲が広がることが確認され、
同年実施された分布調査で広域的に具同中山遺跡群と改称された。

洪水の原因 一級河川である中筋川は、県下でも屈指の洪水地帯である。その原因のひとつとして中筋川の下流域が上流域よりも降水量が多く、洪水ともなれば四万十川の本流から逆流現象が起り、内陸部まで泥水が侵入することが上げられる。そこで河川改修の必要に迫られるのであるが、その古くは江戸時代までさかのぼることができるようである。『四万十川四十年史』によると江戸時代初期に野中兼山が中筋川の改修を行っていると言われ、その後も多くの洪水に見舞われている。四万十川を始め中筋川・後川と大規模な河川を持つ中村の地は水害との戦いの歴史を持つ所である。

調査の原因 建設省四国地方建設局中村工事事務所は、堤防の造築と護岸の強化を進めるため、昭和60年度から河川敷の掘削を始めとする改修工事計画を策定した。しかし中筋川流域は、埋蔵文化財の宝庫として周知されている所であり、文化財保護法による事前の発掘調査が必要となった。高知県教育委員会は、建設省四国地方建設局中村工事事務所と数度の協議を実施した結果、対象面積も広く長期間の調査となる可能性があるため、中筋川両岸にまたがって存在する遺跡群を掘削計画に合わせ各年度ごとに調査を実施していくこととまとまった。

調査の開始 調査の開始は、具同中山遺跡群の一部を昭和61年度に、対岸のアゾノ遺跡と風指遺跡を昭和63年度に実施している。既に『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ』で調査成果を報告している。今回報告する具同中山遺跡群の調査は、昭和61年度調査区に隣接する地点で平成元年から3年に実施したものである。(松田)

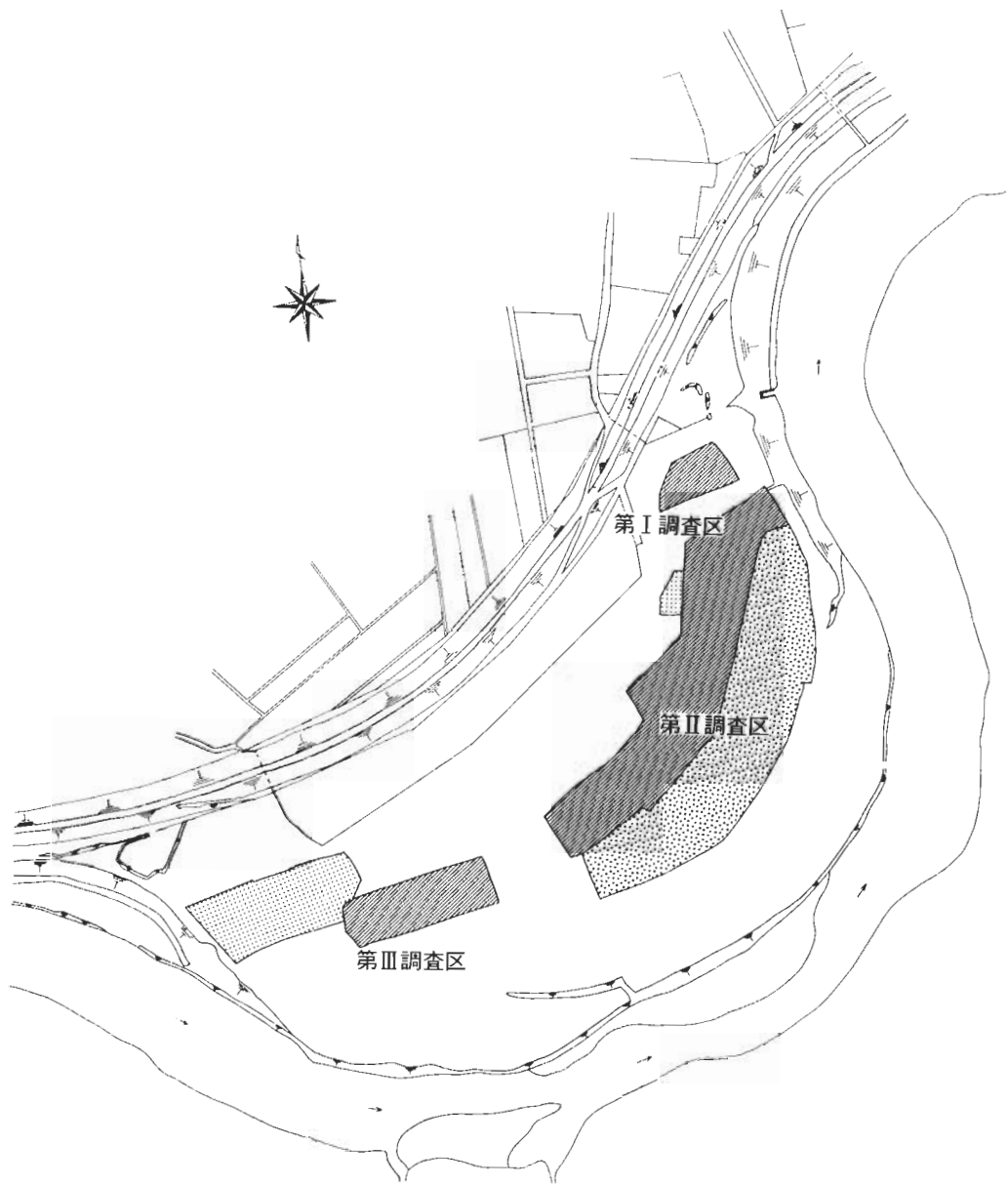
第 2 節 調査の方法と経過

具同中山遺跡群は、昭和 63 年度に実施した試掘調査の結果、古墳時代から近世にかけての包含層を確認した。昭和 61 年度に実施した調査では古墳時代の大規模な祭祀跡を検出したが、さらに祭祀跡の範囲が広がり、平安時代から室町時代の集落跡の存在も明らかになった。調査範囲が広く、河川敷の掘削という工事計画から現状の河川に沿って二ヶ年度に亘って調査を実施した。

本遺跡周辺には、測量のための基準点が設置されていないため、調査に先立ち基準点の設定を行った。基準点は、任意座標とし X 軸は真北に向かう値を正、Y 軸は X 軸に直交する軸とし真東に向かう値を正とするようにとり、トラバースポイントを設定した。平成元年度・2 年度の調査区に応じて多角測量を実施したが、基準となる座標は昭和 61 年度に実施したトラバースポイント (TP 10) とした。尚 TP 10 の座標は、 $X = 1,506,952$ 、 $Y = 1,440,666$ である。調査は、遺物の包含されている上面まで重機で掘削し、この段階でトラバースポイントを利用して、基準方位を真北にとる 4 m を最小単位とするグリッドを調査対象地全域に設定した。グリッドは、 20×20 m の中に 4×4 m の小グリッドを設定し、呼称については 20×20 m の方眼を基本に東西を西から 1 → 2 → 3、南北を北から A → B → C とし、その中の小グリッドは 100 m 方眼内を 25 個に分割し左上より平行式に 1 ~ 25 とした。グリッド名は北西端を A 1-1 のように呼ぶことにした。

平成元年度の調査は、昭和 61 年度調査区に隣接する部分で流路に沿って調査区を設定した。調査は、調査区の南西部から開始して便宜的に I ~ IV 区を分割し実施した。元年度の調査は下層 (古墳時代面) まで予算的なことから十分な調査ができなかったことが残念であった。平成 2 年度の調査は、元年度の調査区に隣接する部分を実施した。元年度と同じく便宜的に I ~ IV 区に分割し調査を進めた。両年度に亘って調査を実施してきたが、I ~ IV 区とした部分は隣接しており遺跡の性格も同様であることから、今回の報告の段階では第 II 調査区とした。第 II 調査区の北側部分では、工事計画が変更となり下層 (古墳時代面) まで掘削されないことから古代面までの調査を実施することにした。この調査区は、V 区として平成 2 年度に調査を実施したが上層面までの調査ということで第 I 調査区として報告している。さらに第 II 調査区の西側部分で、川側に削平されている斜面から土師器・須恵器片が表採されたため、急遽調査を実施することとした。古墳時代の祭祀跡を検出することができ、報告の段階では第 III 調査区としている。

具同中山遺跡群で、今回調査した部分は従来東榊木・ボケ遺跡と呼称されていた小区域である。河川の氾濫で調査区がたびたび侵水の被害を受けた調査であった。発掘調査は、第 I 調査区が 400 m^2 、第 II 調査区が 8000 m^2 (元年度 4500 m^2 、2 年度 3500 m^2)、第 III 調査区 700 m^2 であった。(松田)



'89年度調査区
 '90年度調査区
 '91年度調査区

0 50 100m

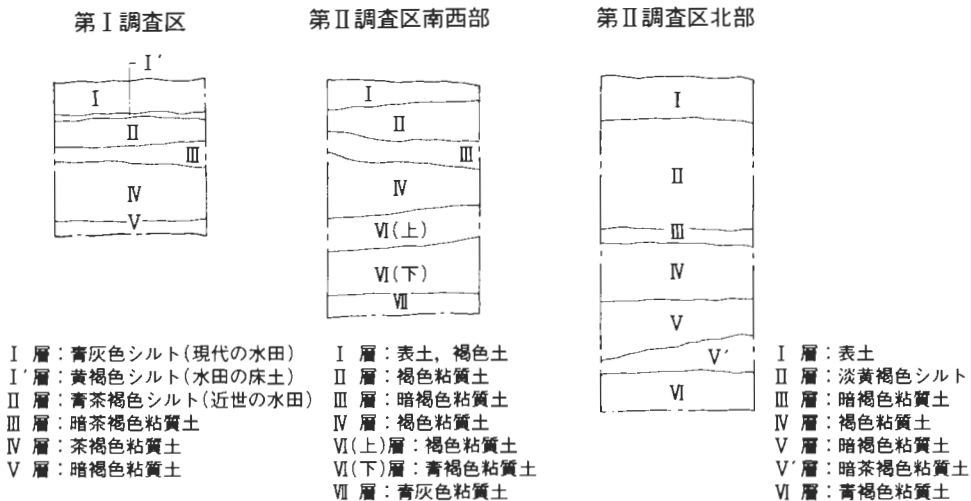
第1図 具同中山遺跡群調査区位置図

第3節 基本層序

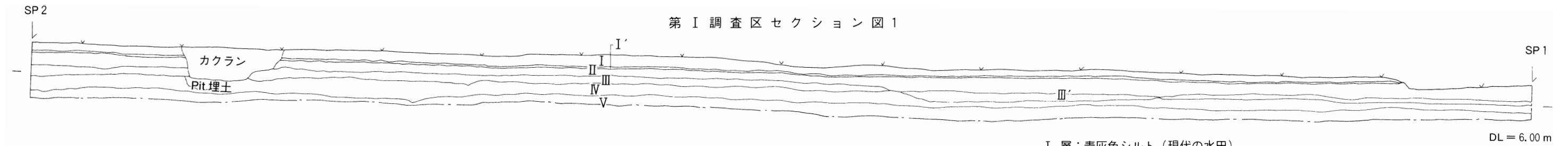
第Ⅰ調査区の基本層序は、調査区のセクション1のとおりである。Ⅰ層は現代の水田面で青灰色シルト層である。Ⅰ'層は水田の床土で、黄褐色シルト層。Ⅱ層は近世の水田面で青茶褐色シルト層であるが床土は確認できない。Ⅲ層は暗茶褐色粘質土層で16世紀後半の時期を考えることができる包含層である。Ⅲ'層とした面は、Ⅲ層面から掘り込まれており色調もⅡ層と酷似し青茶褐色シルト層であることから、16世紀後半代の水田の埋土と考えられる。Ⅳ層は茶褐色粘質土層、Ⅴ層は暗褐色粘質土で炭化物を多量に含有している。第Ⅰ調査区は、ほぼ平坦に層が堆積しているが、調査区西側部分はⅡ層まで削平している。

第Ⅱ調査区の基本層序は、範囲が広く中央部、南西部とで若干層が異なる。調査区中央部セクション図2では、Ⅰ層が青褐色シルト層である。近・現代の水田面であり、下部に床土が残る部分もある。Ⅱ層は褐色粘質土で色調がやや明るくきめ細かい土質である。Ⅲ層は、褐色粘質土で鉄分を少量と炭化物を微量含む。Ⅳ層は暗褐色粘質土であり炭化物を少量含む層である。Ⅴ層はこの地点では確認できない。Ⅵ層は上・下に分層でき、上層は青褐色粘質土で、下層はさらに青味が強い層で粘性が強く古墳時代の遺物を包含する層である。

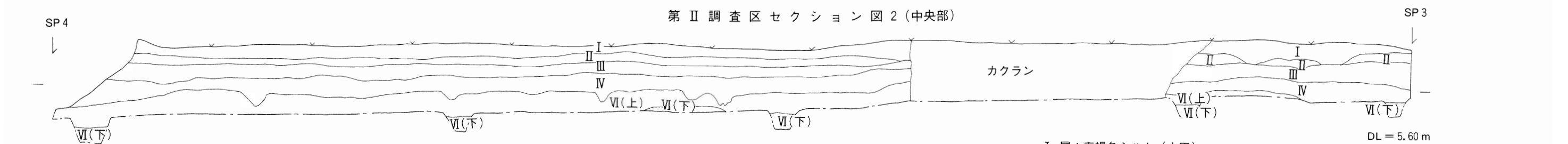
調査区南西部のセクション図3は、Ⅰ層表土で褐色土である。Ⅱ層は褐色粘質土で炭化物を多量に含有している。Ⅲ層は暗褐色粘質土で炭化物を少量含有するが、北側で消滅している。Ⅳ層は褐色粘質土で、炭化物を微量ながら含み粘性が強い。Ⅴ層は確認できず、Ⅵ層は上・下層に細分できる。Ⅵ層上は、褐色粘質土でやや青味があり、下層は鉄分を多く含む青褐色粘質土である。Ⅶ層は、青灰色粘質土で粘性が強い。Ⅵ層下からⅦ層にかけて古墳時代の包含層である。(松田)



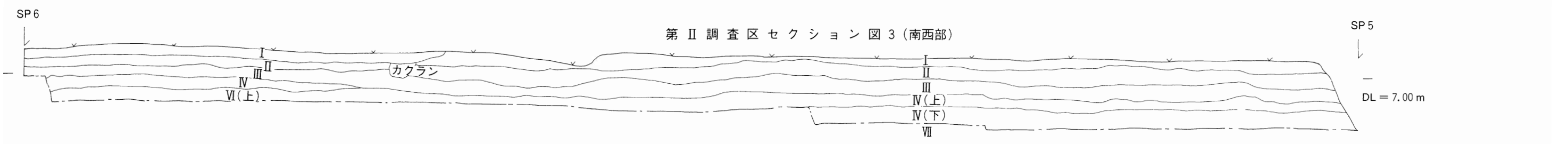
第3図 基本土層柱状図



- I 層：青灰色シルト（現代の水田）
- I' 層：黄褐色シルト（水田の床土）
- II 層：青茶褐色シルト（近世の水田）
- III 層：暗茶褐色粘質土
- III' 層：青茶褐色シルト
- IV 層：茶褐色粘質土
- V 層：暗褐色粘質土



- I 層：青褐色シルト（水田）
- II 層：褐色粘質土
- III 層：褐色粘質土
- IV 層：暗褐色粘質土
- VI(上)層：青褐色粘質土
- VI(下)層：青褐色粘質土



- I 層：表土，褐色土
- II 層：褐色粘質土
- III 層：暗褐色粘質土
- IV 層：褐色粘質土
- VI(上)層：褐色粘質土
- VI(下)層：青褐色粘質土
- VII 層：青灰色粘質土

※ 付図 7, 8 参照



第 2 図 第 I・II 調査区セクション図

第2章 遺跡の地理的・歴史的環境

具同中山遺跡群の所在する中村市は、高知県の南西部、幡多地方のほぼ中央に位置し、四国第2の長流四万十川の下流域にあたり、四万十川は中村市を西部から南東に流れ、中心地の中村を貫流したのち、河口部の下田で土佐湾に注ぐ。四万十川の支流中筋川・後川の分岐点に中村の市街地が開け、北部と西部は山間部になる。中筋川・後川の流域にも集落が広がる。四万十川流域から河口部に中村平野が形成され、幡多郡の中心地として、政治・経済・文化等活動が盛んである。

具同中山遺跡群は、市街地から西方、宿毛方面に向った具同地区の南部に位置し中筋川左岸の沖積地に立地している。

中筋川は、高知県南西部の宿毛市・中村市・幡多郡三原村を流れ、四万十川下流右岸に合流する。流路延長36.4km。水源は中筋地溝帯南縁に沿って東西に走る貝ヶ森山地の西部に位置する白皇山(457.7m)の南東斜面の水を集めながら東流、宿毛市と三原村の境界をなしたのち、大きく北へ曲流し貝ヶ森山地を横断、宿毛市平田で平田川として中筋平野に入り、東に向きを変え、北部から南流してきた山田川と横瀬川を中村市有岡付近であわせ中筋川となり、さらに平野内を曲流しながら東流し、中村市坂本から向きを南東に変え、実崎で四万十川右岸に合流する。流域面積144.5km²である。もとは坂本で四万十川に合流していたもので、古くから明治末まで舟便が就航し交通運輸に利用されていた。

中筋川の中流および下流域は、東西にのびる平野で傾斜は非常に少なく、ほとんど高低差がないばかりでなく、中央部では、下流より低い所もあり、河床は海拔0m以下の部分もあり、流路は西から東へ選択浸食するため曲流が多く、流れを阻害し、洪水の害も多く、江戸期以来、曲流部や支流の付け替えなどの改修が行われてきた。洪水時四万十川からの逆流が強く、中流域まで氾濫する。この氾濫を防ぐため、昭和12年11月、合流位置を下流に付け替える工事に着工。四万十川に瀬割堤を設け、合流点を1850m下流の山路まで下げ、さらに山路の甲ヶ嶺を開削し、中筋川を山路川に合流させ、再び瀬割堤で2650m下流の実崎地先で四万十川右岸に合流させるもので、昭和39年2月に完成。上流部・中流部でも曲流部の改修や支流の付け替え、築堤などの工事、水門や内水汲出しポンプの設置など、改修工事が行われてきている。

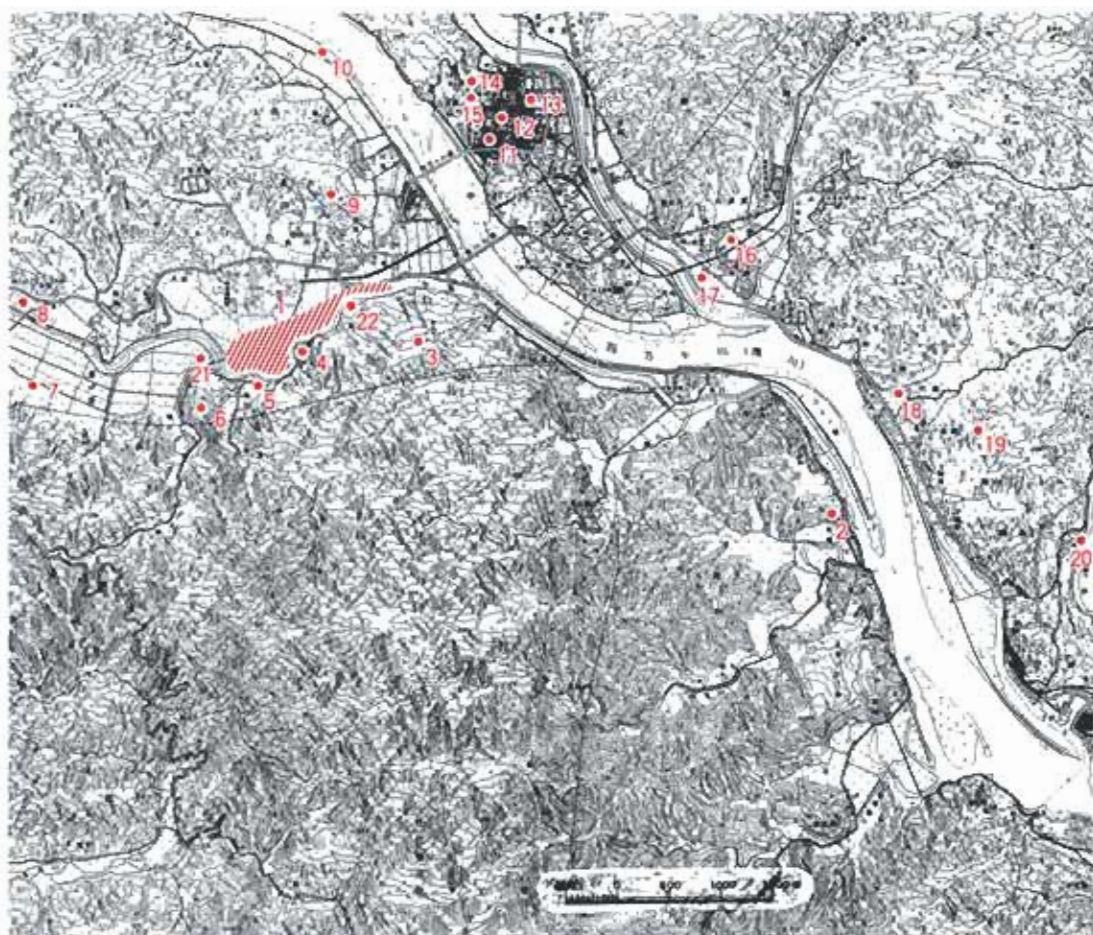
周辺において、縄文時代を見ていくと、早期～後期にわたる遺跡として国見遺跡がある。後期の遺跡としては、三里遺跡がある。三里遺跡は四万十川中流の河岸自然堤防上から発見されたもので、遺構として炉跡が数ヶ所発見されている。時期は縄文後期中葉で、漁業関係遺物である石錘の出土が多い。さらに晩期の遺跡には久保畑遺跡とツグロ橋下遺跡と中村貝塚がある。これらの遺跡は晩期を主体とした時期に位置づけられているが、ツグロ橋下遺跡からは前期の遺物が出土しているという指摘もある。縄文晩期終末から弥生前期にかけては、四万十川下流

右岸の自然堤防跡上に立地する入田遺跡がある。弥生中期後半にいたると山上に立地する集落がみられるようになり、入田遺跡の東南の対岸には高地性集落遺跡の古城山遺跡がある。具同中山遺跡群でも、前回の調査でも若干であるが包含層中より中期中葉から後葉にかけての弥生土器が出土している。

古墳時代に入ると、中筋川水系では宿毛市平田町に、平田曾我山古墳・高岡山古墳などの古墳が造営されている。また、具同中山遺跡群では以前の調査以来、古墳時代の祭祀遺跡が、そして、後川流域では古津賀遺跡から祭祀遺跡が発見されている。中村市域の古墳については5基発見されているが、現在残存しているのは古津賀古墳1基のみにすぎない。そのうち平田曾我山古墳については『国造本紀』の記載によると、天韓襲命が波多の国造に任命され、国造所在地は、現在の中村市内説と、平田曾我山古墳の地とする両説がある。

古代の幡多については、律令制下の中村市域は幡多郡に属し、『和名類聚抄』によれば幡多郡5郷のうち、山田郷・宇和郷が市域付近と考えられている。山田郷は四万十川以西の当市域から宿毛市山奈町あたりの地とされ、宇和郷は市内南部にある不破八幡宮あたりとされ、宇和が不破となったといわれているが、別の説によると伊予南宇和郡から土佐国幡多郡にかかる大宇和郷のことであろうともいう。また、『南路志』所収の蹉陀山古文書によると、平安末期の応保年間（1161～63）頃、郡司宗我部氏が没落し、幡多郡の勢力は大きく変化したと推定される。平安期には、当地方にも仏教の地方浸透の影響があり、行基や空海の巡錫を伝えており、空海が建立したという伝承をもつ寺院も市域にいくつかあり、本遺跡群近くでは香山寺がある。文献面のみならず考古学面では、対岸の風指遺跡で平安時代中期について調査されている。中世においては、まず幡多荘についてだが、幡多荘は、蹉陀山古文書（金剛福寺文書）所収の嘉禎3年（1237）10月18日香山寺へ出された法橋某田地寄進状に、「在土佐国幡多御庄本郷内」と記され、嘉禎3年にはすでに成立していた。まず九条家領の荘園となり、建長2年（1250）には九条道家から一条実経へ譲られて、以後幡多と一条家との結びつきが、戦国末期に土佐一条氏が滅亡するまで続いた。道家から一条実経へ譲渡された幡多荘は、幡多郡とも記され、その構成は、「本庄・大方庄・山田庄・以南村・加納久礼別符」とあり、幡多荘の中心地域本荘（本郷）、大方荘（大方郷、のち東福寺領、現大方町）、山田荘（山田村、現宿毛市）、以南村（現土佐清水市）、久礼別符（現中土佐町）などである（九条家文書）。荘園成立時の規模は判明しないが、のち拡大して幡多郡全体を覆う荘園となり、さらに郡域を越えて高岡郡の一部を包含するに至ったものと考えられる。

応仁元年（1467）8月、応仁の乱の戦火を避けて、前関白一条教房は大乗院尋尊（教房の弟）のもとに赴き、続いて翌2年、土豪たちに荒らされた家領を回復し、荘園を経営するために幡多荘へ下向した。こうして100余年続いた土佐一条氏の支配が始まる。土佐一条氏の統治は、応仁2年の一条教房土佐下向から房家元服の明応2年（1493）頃までの約26年の草創期、房家元服から天文10年（1541）房冬没年までの約47年にわたる発展期、房冬没年から天正2年



第4図 周辺の遺跡分布図

周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	種別	時期	No.	遺跡名	種別	時期
1	具同中山遺跡群	祭祀・集落跡	縄文～近世	12	一条教房墓	墓	中世
2	ナシ古城跡	城跡	中世	13	玉姫の墓	墓	中世
3	香山寺跡	社寺跡	中世～近世	14	古城山遺跡	散布地	弥生・奈良・平安
4	アノノ遺跡	集落跡	中世	15	中村(為松)城跡	城跡	中世
5	風指遺跡	集落跡	弥生・平安・中世	16	古津賀古墳	古墳	古墳
6	森沢城跡	城跡	中世	17	古津賀遺跡	祭祀・集落跡	古墳～中世
7	間城跡	城跡	中世	18	白阜山古墳	古墳	古墳
8	国見遺跡	散布地	縄文・古墳	19	福重古墳	古墳	古墳
9	扇城跡	城跡	中世	20	磯ノ上遺跡	散布地	縄文
10	入田遺跡	散布地	縄文・弥生	21	船戸遺跡	祭祀遺跡	古墳
11	中村日塚	日塚	縄文	22	具重遺跡	祭祀遺跡	古墳

(1574) 兼定の土佐追放までの約 33 年の衰退・滅亡期に 3 区分される。中でも房家は卓越した政治手腕を発揮して国司の権威と実力を増して、版図を拡大した。公家衆でありながら大名化した特異な一例とみなされる。

また、日明貿易については、応仁の乱中の大内氏によって瀬戸内の海上封鎖が行われたので、やむなく九州の南を迂回して土佐沖を通過する航路がとられた。文明 15 年 12 月「幡多」が遣明船 3 艘の停泊地として登場する（大乘院寺社雑事記）。唐船の停泊地は、おそらく四万十川の河口にあったと推定される。鎌倉末期、一条氏の下文に「船所職付横浜」とあり、莊園年貢の集積地に船所が設置されている。これは、四万十川と後川の合流する、小塚（古津賀）の東南端にあった木ノ津（木津）という所ではないかと推定されている。土佐一条氏が日明貿易に積極的に関与したとする説もあり、堺商人との結びつきがあり、土佐一条氏の本拠、中村の都市としての発達に寄与したことは、まちがいない。中村市周辺の中世に関する遺跡の発掘調査では、多数の青磁・白磁・中国古銭などを出土してきている。それからも、当時、対明貿易の盛んであったことを物語っている。この対明貿易の中継地である中村を擁することによっても一条氏は富強を誇っていた。

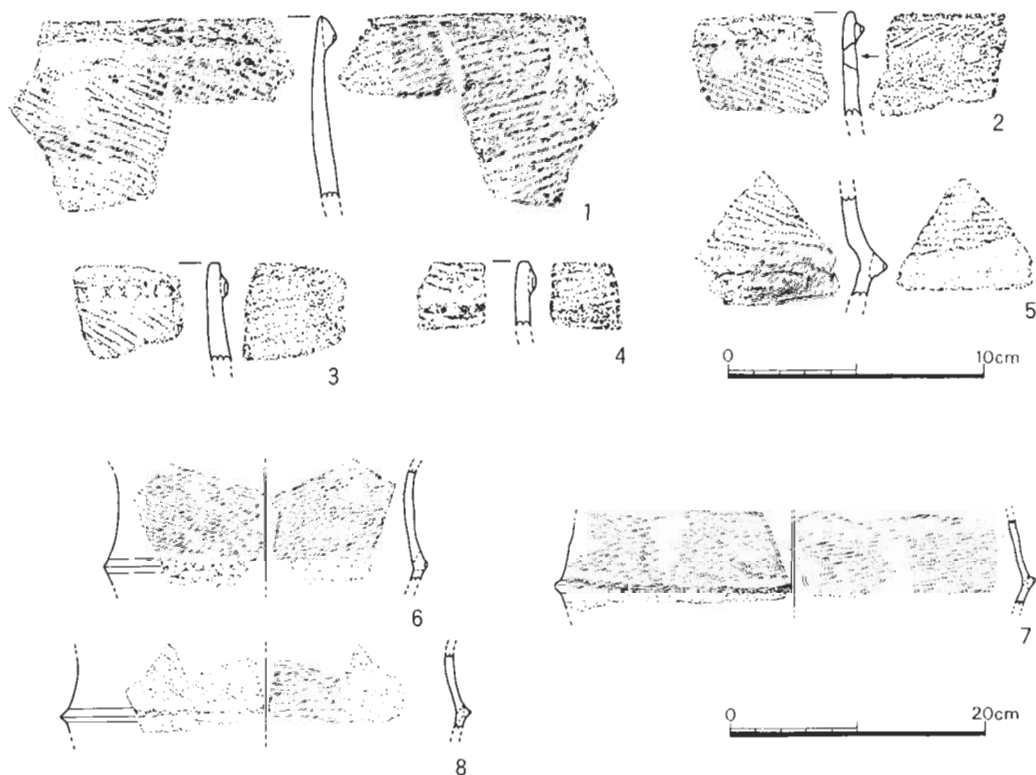
天正 2 年 2 月一条兼定が豊後へ追放されたのち、土佐全域は長宗我部氏の支配下におかれた。その後、慶長 5 年関ヶ原の戦の結果、山内一豊が土佐国主となり、一豊は弟康豊に 3 万石を与えて中村支藩主とし、中村山内家が誕生し、土佐藩内における以後の中村の位置づけが確立した。以後 89 年を中村山内時代という。そして廃藩以後一時幕府領とされた 3 万石管下は、元禄 9 年本藩山内家に返還され、本藩は中村に幡多郡奉行を置いて幡多 7 万石を統轄した。これらの歴史について、この地域での考古学的側面での調査も進められており、文献のみではなく物的にも実態が明らかにされてきている。（江戸）

第3章 遺構と遺物

第1節 縄文時代

第5図の8点が出土した。河の水位程度のレベルまでに工事掘削された後に発見されたものであり、原位置、層位については不明である。但し、8点が余り散在しない状態で採集されていることからして、表土下約4m程の青灰色粘土層中から出土した可能性が強い。

1~8は全て刻目突帯を有するもので、口縁下及び胴部上位の屈曲部に夫々突帯を付し、2条突帯になるものと思われる。刻目は丸味を持つ。内外面共に条痕を施す。1~4の4点は口縁部で、やや内傾気味に立ち上がる。1は口縁端部に突帯を貼付する。2~4は口縁端部よりやや下に突帯を貼付する。5~8は胴部屈曲部破片で屈曲部に突帯を付し、突帯より下は条痕をナゲ消す。1~8は全て縄文時代晩期後半の中村Ⅱ式に相当するものと考えられる。(前田)



第5図 縄文土器実測図

第2節 弥生時代・古墳時代

弥生時代の祭祀跡の1ヶ所、古墳時代の祭祀跡8ヶ所を検出した。現場では各遺構名にはユニット名を付したものの、前回までの調査ではSF9まで検出されており、整理作業の段階で祭祀名は継続して呼称することにし、以下のように変更して本報告書では述べる。

1 ユニット→SF 10, 2 ユニット→SF 11, 3 ユニット→SF 12, 4 ユニット→SF 13,
5 ユニット→SF 14, 6 ユニット→SF 15, 7 ユニット→SF 16, 8 ユニット→SF 17,
9 ユニット→SF 18

1) 検出遺構

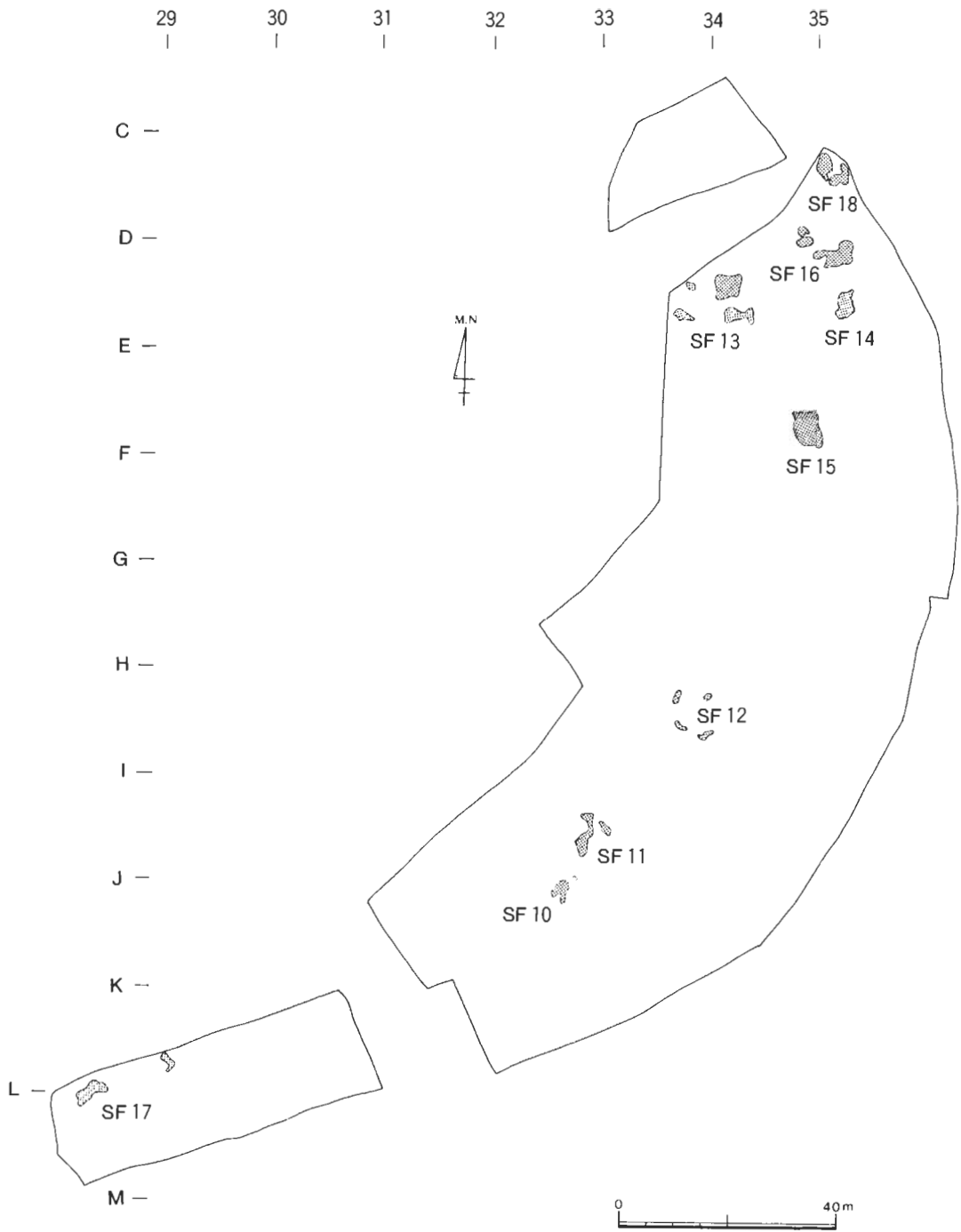
SF10 (第7図)

第Ⅱ調査区の最南西端部に位置し、平坦面に所在する。J 32-4 グリッドを中心にして3×5mの範囲に集中がみられ、外周にも遺物が点在する。遺物集中地点は環状を呈し、手捏ね土器の集中する箇所と須恵器坏・蓋の集中する箇所に大きく括ることができる。本祭祀跡出土遺物総点数は1995点を数え、内訳は土師器1698点、須恵器117点、祭祀遺物178点、石器2点である。比率は85:6:9:0.1で土師器が大部分を占める。土師器の器種は甕が1673点と多いものの、大部分が細片であり、次いで碗13点出土している。須恵器も甕片54点、次いで坏身32、坏蓋21、高坏・甃各5点である。祭祀遺物は白玉154、手捏ね土器18、土製模造鏡6点が出土している。土師器甕片は他の器種と比べると一見多いものの、他のSFに比べると少ないのが特徴である。また土師器甕及び碗は祭祀跡外周域に散在し、中心部では少ない。手捏ね土器は北側部で8点程まとまって出土し、南側部では手捏ね土器9点、土製模造鏡1点、須恵器坏蓋5点、坏身5点、高坏1点、土師器碗1点が出土している。第11図21の須恵器坏蓋、同27の坏身、同31の高坏が破片となって散らばっていた。他の遺物については散在せず、一ヶ所にまとまって出土している。

SF11 (付図1)

第Ⅱ調査区の南西部に位置する。I 32-15・19グリッドを中心として8×7mの範囲内に長く面的に広がり、平坦面に所在する。遺物総点数は3054点で、土師器2888点、須恵器47点、祭祀遺物118点、礫1点である。比率は94.6:1.5:3.9:0.1である。土師器が全体の95%程を占め、中でも甕片が2857点と大多数を占める。須恵器は高坏が比較的多く21点、次いで坏身13点、甕11点、甃2点となっている。祭祀遺物は手捏ね土器が多く49点、白玉40点、土製模造鏡15点、棒状土製品、土製玉が各5点、土製勾玉4点である。

本祭祀跡は5ヶ所の小ブロックに分かれ、北側からA、B、Cブロックの3ヶ所を中心として、やや離れD、Eブロックが配置する。Aブロックでは手捏ね土器6点、土製模造鏡が6点



第6図 弥生・古墳時代祭祀跡全体配置図

と目立って多く、土製玉1点、脚付碗と考えられるものが1点、土師器甕1点、須恵器坏・蓋が各々1点ずつ出土している。BブロックはCブロックと接近し、手捏ね土器12点を主体とし、土製模造鏡はみられず、土師器甕4点、須恵器坏蓋、有蓋高坏が各々1点出土している。Cブロックは土製勾玉3点、土製玉3点、土製模造鏡5点、手捏ね土器14点と祭祀遺物が夫々揃って出土し、土師器碗2点、甕2点と土師器類は少ない。須恵器は坏蓋2点、坏身2点、有蓋高坏1点、同蓋1点、無蓋高坏1点が各々出土しており、土師器類を除いて各器種がみられる。逆にDブロックは土師器類が狭い範囲内でまとまって出土している。土師器甕2点、碗1点と復元可能なものも少ない。Eブロックも小さなブロックで本体よりやや離れた位置にある。土師器碗1点、須恵器坏2点、同蓋1点が出土している。他にA、B、Cブロックより滑石製白玉40点が出土している。また、外周域には遺物が散在し、第20図121の叩き目のみられる土師器甕底部破片が南端にみられるが、本祭祀跡に伴うかどうか不明である。

SF 12 (第8図)

第Ⅱ調査区の中央部よりやや南側部分の平坦面に位置する。H 34-11グリッドを中心に範囲14×7mと面的に広く遺物が散在するものの、遺物総点数は2012点とやや少ない分類に含まれよう。土師器1956点、須恵器48点、祭祀遺物6点、石器2点である。比率は97.2:2.4:0.3:0.1で土師器類の占める割合が高い。土師器甕片1936点、高坏13点、碗4点である。須恵器は甕片21点、坏身2点、蓋6点である。祭祀遺物は少なく滑石製白玉1点、土製有溝円板2点、手捏ね土器3点と比較的少ない。

本祭祀跡は東西に長く広がりを見せ、大きく2ヶ所の小ブロックに括ることが可能である。東側Aブロック、西側Bブロックは環状に展開しており、環状の中央部分には遺物がみられず、空白となっている。A・Bの小ブロックの交わる地点辺りで焼土跡1ヶ所を検出している。土製有溝円板2点はAブロックの中心部で近接し合って出土している。Bブロックでは土師器甕、高坏、甗及び擦石が散らばるように出土している。

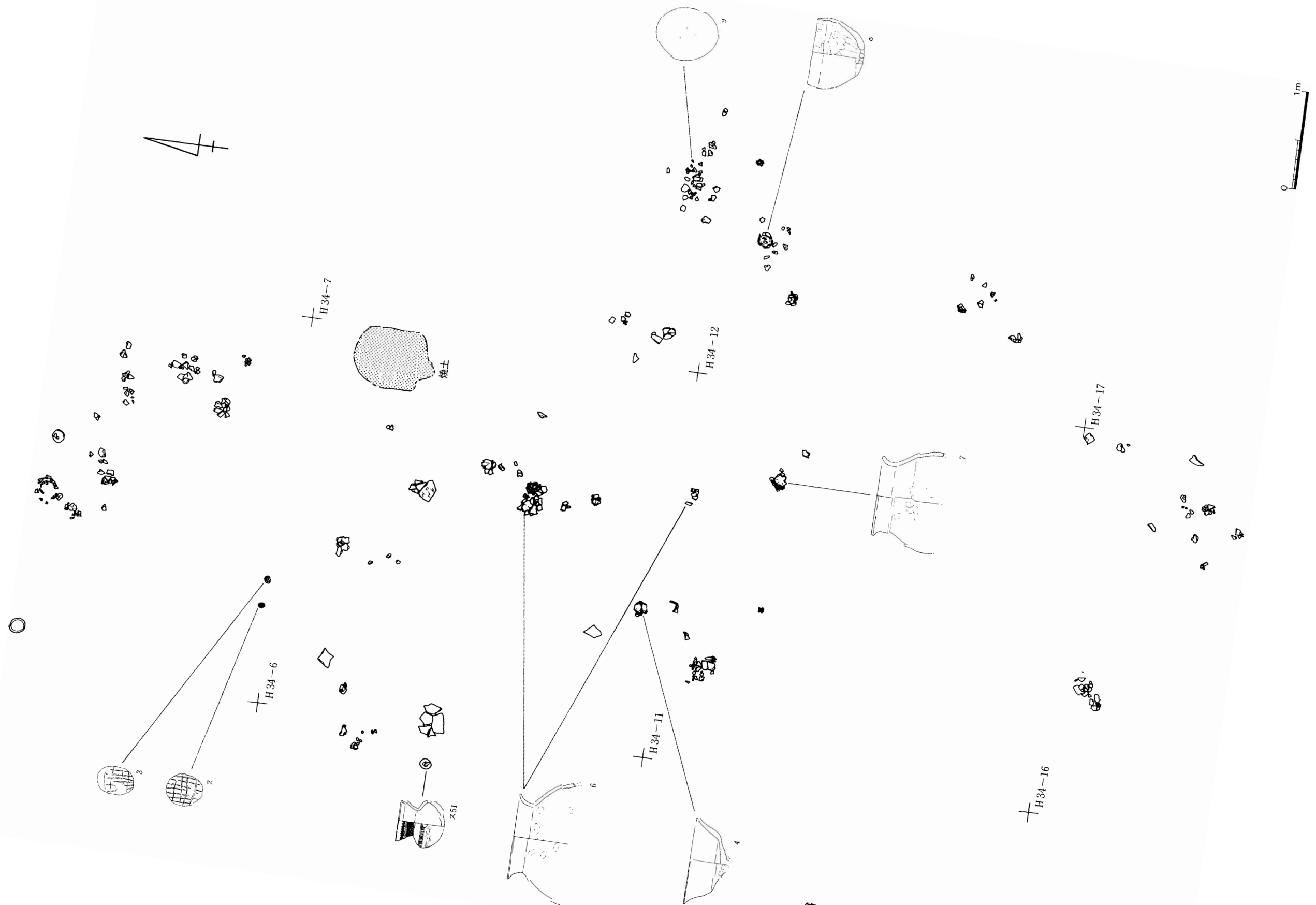
SF 13 (付図2)

第Ⅱ調査区の北西隅の平坦面に位置する。D 34-11・12グリッドを中心として、範囲10×11m内に面的に散在し、規模的には大きな分類に含まれる。遺物総点数は4650点で内訳は土師器4596点、須恵器46点、祭祀遺物1点、礫7点である。土師器が約99%を占め、中でも甕片が4545点と大部分を占める。土師器は他に高坏26点、碗12点、鉢7点、甗4点、脚付碗2点、須恵器は坏身28点、同蓋2点、甕片13点、高坏2点、甗1点が出土している。祭祀遺物としては手捏ね土器が1点と少ない。

本祭祀跡は4ヶ所の小ブロックに分かれ、北東部のAブロックを中心に回りをとり囲むように他3ヶ所の小ブロックが配置する。Aブロックは調査区外へと更に広がる。Aブロックを構成する遺物は土師器甕を主体とし、碗、高坏、甗、須恵器坏・蓋、甗である。手捏ね土器1点が出土している。小ブロック内に於いても器種が比較的まとまって出土する傾向にあり、土師



第7図 SF 10 遺物出土状況図



第8图 SF12 遺物出土状況図

器高坏類，土師器碗類が3～4点まとまり，土師器甕は満遍なく出土するものの，まとまりのある箇所も認められる。また北東部には長さ20cm余りの自然の垂角礫が6点まとまって出土している。

他のBブロックでは土師器破片がまとまり，C，Dブロックでは須恵器坏が小さくまとまって出土している。Cブロックからは第12図の須恵器坏蓋52，54，坏身61，Dブロックからは第12図の須恵器坏蓋53，55，坏身57，60がそれぞれ出土している。

SF 14 (第9図)

第Ⅱ調査区の北側部分の平坦面に位置する。D 35-17グリッドを中心に範囲5.4×3.8m内に面的に散在し，本遺跡では比較的小規模な分類に入る。また，遺物総点数も540点と少ない。土師器530点，須恵器9点，白玉1点である。土師器甕片514点と最も多く，高坏が14点と占める割合は高い。須恵器は甕片7点，坏身2点，同蓋1点である。中心部よりはずれた南西で焼土跡を1ヶ所検出している。

SF 15 (付図3)

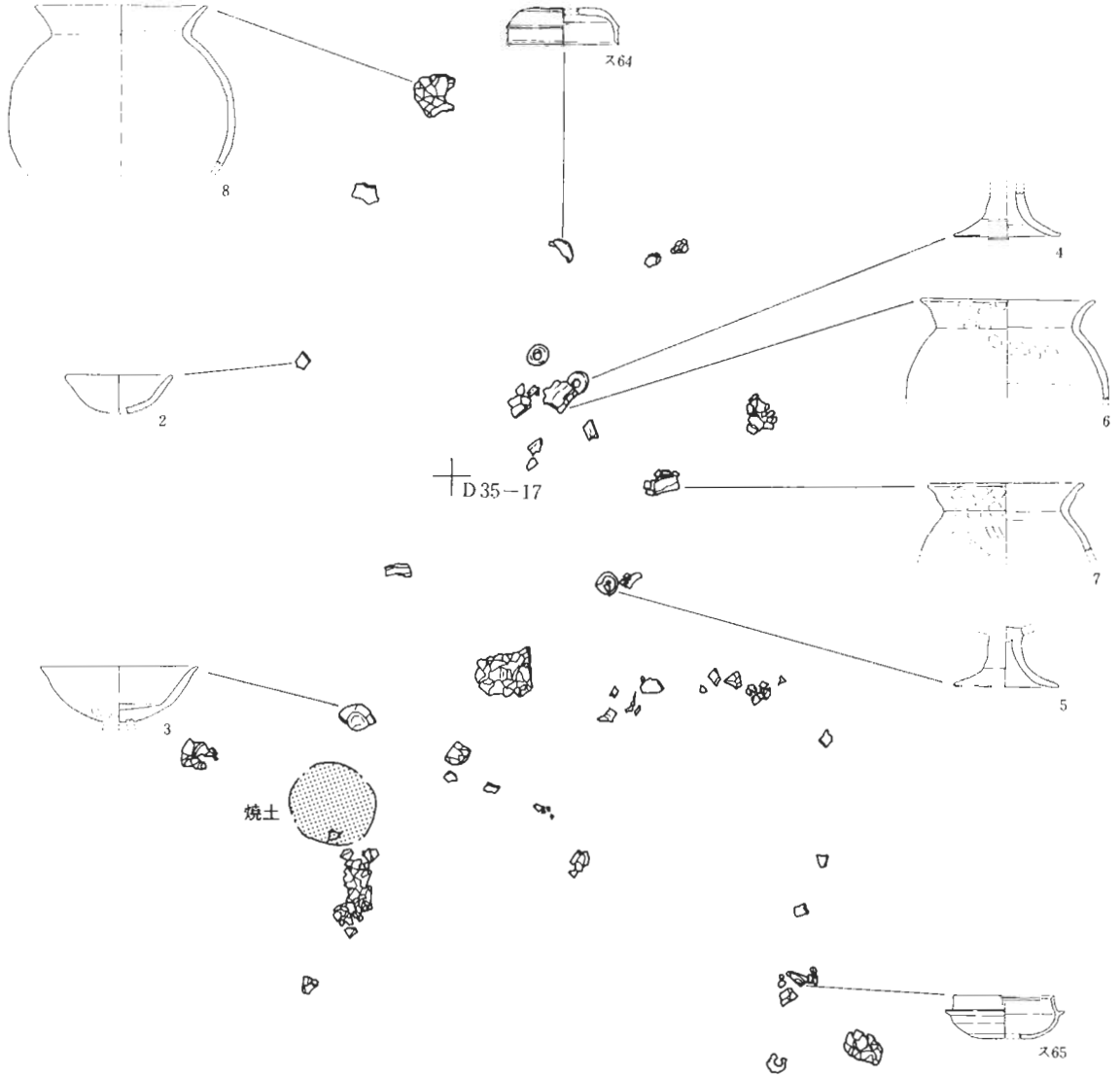
第Ⅱ調査区の北側寄りSF 4・5より南側の中央部に位置する。E 34-20・25グリッドを中心とした範囲8×8mの広い範囲内に多量の遺物がまとまって出土し，本遺跡では最大規模である。東側の河方向に向かってやや緩やかに傾斜をみせている。遺物総点数は5600点で内訳は土師器5496点で全体の98%を占め，中でも甕片5403点と97%程度を占めている。高坏45点，碗22点，鉢9点，壺5点，脚付碗5点，甑1点である。須恵器は94点と全体の1.6%を占めるのみだが，甕片34点，坏身19点，同蓋19点，高坏5点，甗4点である。祭祀遺物は少ないものの石製の大型勾玉が1点出土している。他に土製模造鏡2点，手捏ね土器6点である。石器として叩き石2点，台石1点が出土している。

本祭祀跡は北側のAブロック，南側のBブロックに大きく分けることが可能ではあるが，共に極く接近し合っている。Aブロックは破碎した須恵器甕（第14図106，107）の2点を中心として，須恵器坏9点，同蓋12点，有蓋高坏3点，同蓋1点，甗4点が出土している。Aブロックを構成する遺物は先の須恵器が多く，他の遺物としては土師器類は比較的少なく，実測可能なものとして，土師器碗2点，甕4点，高坏2点である。祭祀遺物としては大型の石製勾玉1点，スタンプ状の土製模造鏡1点，手捏ね土器2点が出土したのみである。

Bブロックは土師器甕と須恵器坏を主体とし，やや環状を呈するような状況で出土している。土師器は甕以外の実測可能なものとしては碗7点，高坏4点，脚付碗2点，鉢1点，壺2点，甑1点が出土している。祭祀遺物は土製模造鏡1点，手捏ね土器3点と比較的少なく日常雑器が主体を占めている。

尚，本祭祀跡より弥生時代後期からは古墳時代初頭の遺物が共に出土しているものの，立地が重なり合った結果と考えられる。本祭祀跡に伴わない遺物は第28図22～25の鉢，第29図39の壺，第35図82の甕と考えられる。

† D 35-12



† D 35-22

第9图 SF 14 遺物出土状況图

SF 16 (付図 4)

第Ⅱ調査区の北側部 SF 18 と SF 14 に挟まれた地点に位置する。C 34-25, D 34-1・5 グリッドと広範囲に展開するものの、遺物の出土量は希薄である。SF 18 地点では旧地形が急傾斜をみせているものの、本祭祀跡は西から東に向って緩傾斜地に所在する。遺物総点数は 1198 点で土師器 1188 点が 99 % を占め、内訳は甕片 1163 点、高坏片 22 点、碗 1 点、脚付碗 1 点、甑 1 点である。須恵器は 7 点と少なく、坏 3 点、同蓋 2 点で祭祀遺物も手捏ね土器 1 点のみで他に礫が 2 点出土しているだけである。

本祭祀跡は北西部の A・B ブロック、東南部の C・D ブロックの 4 ケ所に分かれる。しかし、それぞれの小ブロックは共に遺物量が少なく、祭祀遺物も先の手捏ね土器 1 点のみである。A ブロックは須恵器坏 3 点の他は土師器甑 1 点と土師器細片であった。B ブロックは土師器細片を主体とし、土師器甕 2 点、高坏 1 点の実測可能で、他に須恵器破片 2 点が出土している。C ブロックは須恵器坏蓋 2 点、土師器脚付碗、高坏、甕が各々 1 点、手捏ね土器 1 点の他は土師器細片である。D ブロックについては土師器細片が散在する中で実測可能な土師器碗、須恵器坏が各 1 点出土したに留まる。

SF 17 (付図 5)

第Ⅲ調査区の北西寄りに位置する。K 27-23・24, L 27-3 グリッドにまたがり、円形ブロック 3 ケ所に分かれて配置し、平坦面に立地する。遺物総点数は 2773 点で土師器が 2558 点で全体の 92 % を占め、その中で甕片 2518 点で約 91 % と大部分を占めている。土師器類は他に高坏 19 点、碗 14 点、鉢 1 点、壺 5 点、甑 1 点である。須恵器 67 点で甕片 40 点、高坏 3 点、坏身 9 点、同蓋 13 点となっている。祭祀遺物も多く全体で 52 点である。内訳は白玉 4 点、土製勾玉 6 点、土製模造鏡 3 点、手捏ね土器 31 点、土製玉 7 点、棒状土製品 1 点である。小礫も多く 95 点、また土製錘 1 点が出土している。

小ブロックは西端を A ブロック、B ブロックは A ブロックに近接する。C ブロックは A・B ブロックから 5 m 程離れており、SX として報告すべきかもしれないが、ここでは SF 17 内祭祀として扱った。A ブロックは 2.4 m 程の円形を呈し、土製勾玉 6 点、土製模造鏡 3 点、土製玉 6 点、土製錘 1 点、棒状土製品 1 点、手捏ね土器 20 点、白玉等の祭祀遺物が数多く出土していることが特徴である。須恵器坏蓋は 3 点出土しているものの、坏身は含まれていない。土師器類は碗 7 点、脚付碗 1 点、壺 2 点、甕は実測可能なものが 5 点、多孔式の甑 1 点が出土している。甕の中には径 4~5 cm の自然礫数個を納めたものも認められた。ブロックの外回りを土師器が巡り、中程に土製勾玉等の祭祀遺物が配置される傾向を読みとれる。

B ブロックは A ブロックに比べ祭祀遺物は少なく手捏ね土器 8 点のみである。須恵器大甕 3 点が押し潰されたような状態で出土しており、範囲 2 m 弱内に遺物が集積したような状況で検出されている。須恵器大甕の他に坏 3 点、同蓋 3 点、有蓋高坏 2 点、同蓋 2 点がまとまって出土している。土師器類は碗 2 点、高坏 1 点、壺 2 点、甕 6 点で土師器類はやや少ない。B ブロ

ックはAブロックと違い、日常雑器類で祭祀が構成されているようである。

Cブロックは20点程の遺物が散在する程度であり、土師器甕片が10点程と須恵器坏1点、土師器高坏1点、やや離れた地点で叩き石が1点出土している。祭祀遺物は皆無であった。

SF 18 (付図6)

第Ⅱ調査区北端に位置する。C 36-6・11グリッドを中心に5.6×7.6mの範囲に広がりを持つ。西南から東北方向に向けて急激に落ち込むところからして、旧河道と考えられる。西南部分は河岸部分に相当するものと考えられるが、この部分についても旧河道方向に傾斜をみせている。東北部分の河床と西南部の河岸との比高差は1.9mを測る。また、河道内でも河床と上部との遺物出土レベルにばらつきが認められ、比高差1.2mを測る。おそらく、河床近くから出土した遺物は初期の段階で投入されたもので、上部出土遺物は後に流入したものと考えられよう。

遺物は旧河岸に沿って、7.6mの長さで分布しており、鉢、壺、甕がまとまって出土している。旧河道内出土遺物は実測可能なものが少なく、河床から土製錘1点、甗と思われるもの1点、鉢1点で、他は破片が多い。旧河道上部出土のものは、やや離れて出土した叩き目のある壺と考えられるものが1点出土しているのみである。遺物総点数は3612点、内訳は甕片3576点、鉢21点、壺13点、甗1点、土製錘1点である。

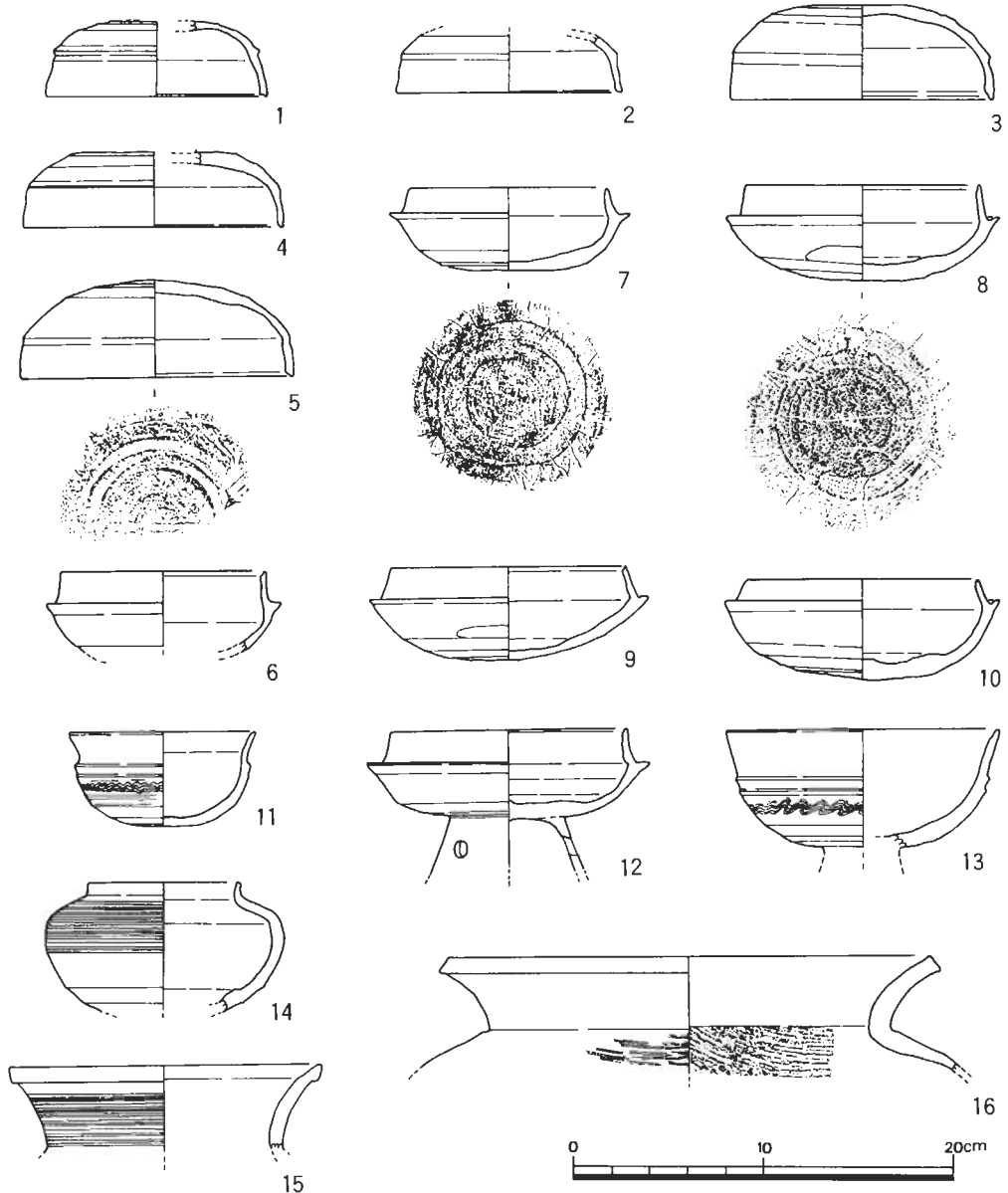
尚、本祭祀跡は弥生時代後期後半以降と考えられ、第16図140の須恵器坏蓋は混入であろう。

(前田)

2) 出土遺物

1989年度遺構外出土須恵器（第10図1～16）

1～5は坏蓋で、1はC類、2はD類、3はE類、4・5はF類に属す。6～10は坏身で、6・7はC類、8・9はD類、10はE類に属す。11は坏で、本遺跡では極めて珍しい器形であり、体部外面には2条の凸帯を巡らした下に1条の波状文を施す。約1/3が残存するが、把手の有無



第10図 須恵器実測図(1)

挿入番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 脚径 底径	形態・文様	手法	備考
10-1	V 感	須忠器 坏(蓋)	口径 11.9 4.0 口径部高 11.2 2.4	口径部は内湾気味に下り、端部は内傾する浅い凹面をなす。稜は小さい断面三角形をなす。天井部はやや丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	3区 ロクロ回転方向は左方向。	
〃-2	〃	〃	口径部高 12.2 (3.1) 11.7 2.1	口径部は下外方に下り、端部は内傾する極めて浅い凹面をなす。稜は極めて小さい。天井部は大半が欠損する。	〃	1区 天井部外面は自然剥落。ロクロ回転方向は不明。	
〃-3	〃	〃	口径部高 14.0 5.0 口径部高 13.8 2.3	口径部は内湾気味に下り、端部は内傾する浅い凹面をなす。稜は凹線により造りだす。天井部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面約1/2に回転ヘラ削り調整。天井部内面の一部ナデ調整。他は回転ナデ調整。	1・2区 ロクロ回転方向は左方向。	
〃-4	〃	〃	口径部高 14.0 4.0 口径部高 13.6 2.1	口径部は下外方に下り、端部は内傾する浅い凹面をなす。稜は1条の沈線によって造りだす。天井部はほぼ平らである。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	1・2区 ロクロ回転方向は右方向。	
〃-5	〃	〃	口径部高 14.6 5.2 口径部高 14.4 2.1	口径部は下外方に下り、端部は内傾する凹面をなす。稜は1条の凹線によって造りだす。天井部は高く、丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。天井部内面は同心円文のタタキの後ナデ調整。他は回転ナデ調整。	〃	
〃-6	〃	〃 坏(身)	口径部高 11.0 12.7 口径部高 12.7 1.7	たち上がりはやや内傾してのび、端部は外傾する凹面をなす。受部は水平にのび、端部は丸い。底部は欠損するが、丸味がある。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	1区 ロクロ回転方向は右方向。	
〃-7	〃	〃	口径部高 10.6 4.4 口径部高 12.9 1.4	たち上がりは内傾してのび、端部は鋭い。受部は細く水平にのび、端部は鋭い。底部はやや丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。底部内面の一部ナデ調整。他は回転ナデ調整。	1・2区 ロクロ回転方向は右方向。	
〃-8	〃	〃	口径部高 12.5 5.1 口径部高 14.5 1.7	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する極めて浅い凹面をなす。受部は細く上方向へのび、端部は鋭い。底部は比較的深く、丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約3/4に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	〃	
〃-9	〃	〃	口径部高 12.6 4.9 口径部高 15.0 1.6	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する浅い凹面をなす。受部は水平にのび、端部は鋭い。底部は深く、丸い。	〃	〃	
〃-10	〃	〃	口径部高 12.3 5.3 口径部高 14.5 1.3	たち上がりは内傾してのび、端部は丸い。受部は細く上方向へのび、端部は鋭い。底部は深く、丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約1/2に回転ヘラ削り調整。底部内面の一部ナデ調整。他は回転ナデ調整。	1・2区 ロクロ回転方向は左方向。	
〃-11	〃	〃 坏	口径部高 10.0 5.0 — —	口径部は外反してのび、端部を細く仕上げ。体部外面には小さいが2条の凸帯を巡らし、その下に回転カキ目調整を加えた後1条(4本)の波状文を施す。底部は深く、丸く仕上げる。約2/3が欠損しており、把手の有無は不明である。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面3/4に回転ヘラ削り調整。体部外面、波状文を施す前に回転カキ目調整。他は回転ナデ調整。	1・2区 ロクロ回転方向は右方向。	
〃-12	〃	〃 有蓋高坏	口径部高 12.5 (8.4) 15.1 口径部高 15.1 1.8 基部径 6.3	たち上がりは内傾してのび、端部は丸く、内側に一条の沈線を巡らす。受部は比較的太く水平にのび、端部は丸く仕上げられる。底部は比較的深く、平らに近い。脚部は下外方に開くが、基部は欠損する。径1.2cmの円形の透しを三方に穿つ。	マキアゲ、ミズビキ成形。坏、脚部はハリツケによる。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	1・2区 ロクロ回転方向は右方向。 受部とたち上りの境には一条の沈線が巡る。	
〃-13	V 感	〃 無蓋高坏	口径部高 14.4 (6.3) 4.0 —	口径部は上外方へのび、端部は丸い。体部外面には段状をなす2条の凸帯を巡らす。その下に1条(7本)の波状文を施す。底部は深く丸い。脚部は付根から欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	2区 ロクロ回転方向は左方向。	

挿入番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
10-14	Ⅲ層	須恵器 短頸壺	8.0 (6.9) 13.0 —	口頸部は短く直立し、端部は丸く仕上げる。 肩部はやや張り、胴部最大径を上 部1/3に求めることができる。 下胴部は内湾気味に下り、底部へ 至る。	マキアゲ、ミスビキ成形。 肩部から中胴部外面にかけて回 転カキ目調整。 底部外面には回転ヘラ削り調整。 他は回転ナデ調整。	1・2区 ロクロ回転方向は 左方向。 肩部外面は自然軸 剥落。
〃-15	〃	〃 広口壺	16.6 (4.6) — —	口頸部は外反してのび、端部は外 傾するやや丸味のある平面をなす。 胴部以下は欠損。	マキアゲ、ミスビキ成形。 口頸部外面は回転カキ目調整。 他は回転ナデ調整。	1・2区 口頸部内面は自然 軸剥落。
〃-16	Ⅲ層	〃 壺	25.8 (6.3) (29.0) —	口頸部は大きく外反してのび、端 部は内傾する浅い凹面をなす。 肩部はやや張り気味に下る。 上胴部以下は欠損。	マキアゲ、ミスビキ成形。 肩部外面は平行のタタキ目が残 存。 肩部内面は同心円文のタタキの 後にナデ調整を加える。	1区 肩部外面に自然軸 がかかる。

は不明である。12は有蓋高坏で、C類に属す。脚部には円形の透かしが三方に穿たれる。13は無蓋高坏でB類に属す。脚部は欠損するが、体部外面には2条の凸帯の下に1条の波状文を施す。14は短頸壺で、最大径は胴部上位1/3にある。肩部外面を中心に回転カキ目調整を施す。15は広口壺で、口頸部外面には回転カキ目調整が施される。16は甕で、B類に属す。

須恵器の分類

平成元年度の調査では須恵器の出土は少なく、復元できたのも16点であったのに対し、平成2年度は比較的多く出土し、141点を復元することができた。また、前者はすべて遺構外出土であったが、後者の大半は遺構出土であり、一つのまとまりとして捉えることが可能である。これら須恵器の器種には、坏（蓋・身）、有蓋高坏、無蓋高坏、甗、壺（短頸壺・広口壺）、甕などがあり、各器種とも多少の形態変化を認めることができる。以下、まず2年分をまとめて各器種ごとに形態分類を行い記述していく。なお、今回は出土していないが、前回の調査の際（昭和61年度に調査し、『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』として報告済）出土した形態についても合わせて記述することとした。

坏蓋

口縁部と天井部の境に明瞭な稜を有するものから全くその痕跡をとどめないものまでがあり、これらは7類に大別することができる。

A類

口縁部高が高く、器高の1/2以上あり、口縁部はハの字形に開き、端部は丸味を有す。稜は鈍い断面三角形を呈す。天井部は丸味を有するが比較的平らに近くになっている。

B類

口縁部高が高く、器高の1/2以上あり、口縁部はやや開き気味で、端部は浅い凹面をなすものも存在するが、一般に平面に近くになっている。稜は鋭い断面三角形を呈するものが多い。天井部はやや丸味を有するものもあるが、ほぼ平らになる。

C類

口縁部は比較的高く、器高の1/2前後であり、口縁部はやや開き気味で、端部は段または凹面をなすものが多く、中には平面をなすものも認められ、口径は12cm以上を測る。稜は断面三角形をなすものや段をなすものが存在するが一般に小さくなる。天井部は丸味を有するものがほとんどである。

D類

口縁部高は器高の1/2以下となり、口縁部はほぼ真下にあり、端部は段または凹面をなすものがほとんどであり、口径は12cm以下を測るものが大半である。稜は小さく、鈍いものが目立つ。天井部は丸くなり、坏の身と合わすと球体に近い形を呈するものが多くみうけられる。

E類

口縁部は低く、器高の2/5以下であり、口縁部は開き気味で、端部は段または凹面をなすものが多い。稜は下に凹線を巡らすことにより明確にしたものが多い。口径は13 cm以上と大きくなる。天井部は丸い。

F類

口縁部高は低く、器高の1/3以下であり、口縁部は開き気味で、端部を丸く仕上げるものが大半である。稜は凹線を巡らすことによって表現している。口径はE類同様大きく、天井部も丸くなっている。

G類

口縁部はハの字形に開き、端部は丸くまたは鋭く仕上げたものに限られる。稜は全くなくなり口縁部と天井部の境が不明瞭となる。天井部は平坦なものもみられるが、丸味を有するものが大半を占める。

坏身

たち上がりが高く、端部が外傾する平面をなすものから、たち上がりが短く、端部を丸く仕上げるものまでが出土しており、これらは7類に大別することができる。

A類

たち上がりは内傾し、その高さは器高の1/2以上を占め、端部は外傾する平面をなすものが多い。底部は比較的深く、平らである。

B類

たち上がりは内傾し、その高さは器高の1/2前後であり、端部は外傾する平面をなすものから丸く仕上げられたものまであり、バラエティーに富む。口径10.5 cm以上を測る。底部は比較的深く、丸味を有す。

C類

たち上がりは内傾し、その高さは器高の1/2以下であり、端部はB類同様バラエティーに富む。口径は10 cm前後と小さくなる。底部は丸く、坏蓋と合わすと球体に近い形を呈するものが多い。

D類

たち上がりは内傾し、その高さは器高の2/5以下であり、端部はB類同様バラエティーに富むが、丸くなる傾向が認められる。口径は11.0 cm以上と大きくなる。底部は丸味を有す。

E類

たち上がりは内傾し、その高さは器高の1/3以下と低くなり、端部はほぼ丸く仕上がるものか鋭く仕上げるものに限られてくる。口径はD類同様大きく、底部は丸い。

F類

たち上がりは内傾し、その高さは1 cm前後とさらに低くなり、端部はほぼ丸く仕上げるものか鋭く仕上がるものに限られてくる。口径はD類同様大きく、底部は丸味を有す。

G類

たち上がりは内傾し、その高さは1cm以下非常に低くなり、端部は丸く仕上げるものと鋭く仕上げるものに限られる。口径はやや小さくなり、底部は丸味を有す。

坏

極めて珍しいもので1点のみ出土している。形態的には無蓋高坏の坏部を一回り小さくしたものである。把手の有無については残存部が僅かで不明である。

有蓋高坏

蓋は坏蓋と単に天井部外面中央につまみが付く点で異なるだけで、形態的には全く同じであるといえる。ただ、坏蓋ほどバラエティーに富んでいない。坏部も形態的には坏身と全く同じであり、底部外面に脚台が付いただけである。これらは、3類に大別することができる。

A類

蓋は坏蓋C類の天井部外面につまみが付いたもので、坏部は坏身B類に脚台が付いたものである。脚部には台形状の透かしが三方に穿たれる。

B類

蓋は坏蓋D類の天井部外面につまみが付いたもので、坏部は坏身C類に脚台が付いたものである。脚部には台形状の透かしが三方に穿たれる。

C類

蓋は坏蓋D類の天井部外面につまみが付いたもので、坏部は坏身C類に低い脚台が付いたものである。脚部には円形の透かしが三方に穿たれる。

無蓋高坏

坏部に施文がされるものから無文のものまであり、3類に大別される。

A類

坏部は深く、口縁部は直立気味に上がり、外面には断面三角形の凸帯が三カ所に巡る。下方の凸帯の下から把手が付く。脚部には台形状の透かしが四方に穿たれる。

B類

坏部は比較的深く、口縁部は上外方のび、外面には鈍い凸帯が巡り、凸帯と凸帯の間には1条の波状文を施す。把手が付くものもある。脚部には台形状の透かしが三方に穿たれる。

C類

坏部は浅く、外面には稜が巡るが、施文は全くみられない。

甕

小型と大型の2種類があるが、出土量は少ない。口頸部は全般に短く、その高さが体部の高さを上回るものは出土していない。また、口径が体部最大径をはるかに上回るものも出土していない。これらは3類に大別される。

A類

口径が体部最大径を上回るものはない。肩の張りは少なくなだらかに下り、体部の断面は楕円形に近い。円孔は体部上位 1/3 から穿たれる。大型甕もみられる。

B類

口径が体部最大径に近くなるが、それを上回るものはない。体部は全体に丸味を帯び、球体に近い形となり。円孔は体部中位より上から穿たれる。

C類

口径が体部最大径と同じかやや上回るものである。口頸基部がB類に比べ太くなる。体部はB類以上に丸味を帯び、球体となる。円孔は体部中位よりやや上から穿たれる。

壺

頸の長短から長頸壺、短頸壺の2種類に分けることができるが、全般にその出土量は少ない。

長頸壺

口頸部は上外方へ外反気味にのび、端部は丸い。外面には鈍い稜が巡り、波状文が施される。

短頸壺

A類

小型で、口頸部は短く直立し、頸部はやや張り、最大径は胴部上位 1/3 にある。

B類

小型で、口頸部は短く直立し、胴部は球体となり、最大径は胴部中位にある。

甕

口縁部外面に断面三角形の凸帯を巡らしたのから口縁部が短く外反し、外面に施文しないものまでがあるが、その出土量は少ない。これらは4類に大別される。

A類

口頸部は緩やかに外反し、端部外面近くに凸帯を巡らし、その下に波状文を施すもの、無文のもの、回転カキ目調整を加えるものがある。最大径は胴部 1/2 ないし上位 1/3 に求めることができる。胴部内面は同心円文のタタキの後丁寧なスリケシ調整を行っている。

B類

口頸部は外反して上り、外面に凸帯が巡るものや施文したものはみられない。最大径は胴部上位 1/3 に求めることができ、内面は同心円文のタタキの後スリケシ調整を行っている。

C類

口頸部は外反して上り、端部を肥厚させる。口頸部外面には全く施文されていない。胴部内面には同心円文のタタキ目が明瞭に残る。

D類

口頸部は短く外反し、端部を肥厚したものと肥厚しないものがみられる。口頸部外面には全く施文されていない。胴部内面にはC類同様同心円文のタタキ目が明瞭に残る。

以下この形態分類に基づき記述する。

遺構内出土須恵器

SF 10 (第 11 図 17~33)

17~22 は坏蓋ですべて概ねD類の範疇で捉えられるものである。口縁端部はすべて内傾する凹面をなす。稜の形態には断面三角形をなすもの(17・18・21・22)、段状をなすもの(19・20)がある。21の天井部外面には回転ヘラ削り調整後回転カキ目調整を加えている。23~29は坏身で、すべて概ねC類の範疇で捉えられるものである。たち上がりは内傾し、端部は外傾する凹面をなすもの(23~28)、平面をなすもの(29)がある。ロクロ回転方向は、26が右方向である以外は左方向である。30~33は有蓋高坏で、すべてB類に属す。30は蓋で、稜は鈍い断面三角形をなし、天井部外面中央部には扁平なつまみが付く。31~33のたち上がりは内傾し、端部は凹面をなすもの(31・32)と丸いもの(33)がある。透かしは台形状を呈し、31が五方に32, 33が三方に穿たれる。

SF 11 (第 11, 12 図 34~50)

34~40は坏蓋で、34がB類、35~37がC類、38~40がD類とややバラエティーがある。口縁端部はすべて内傾する凹面をなす。稜は断面三角形をなすもの(34~38)、段状をなすもの(39・40)がある。ロクロ回転方向は35~37が右方向で他は左方向である。41~44は坏身で、41がB類、他がC類に属す。たち上がりはすべて内傾するが、端部は外傾する平面をなすもの(41)と凹面をなすもの(42~44)がある。45~49は有蓋高坏である。45はA類の蓋で、稜は段をなし、天井部外面中央部には比較的大きく、真中が凹んだつまみが付く。46・47はA類に属し、比較的しっかりした脚台が付く。透かしは台形状のものが、46には三方に、47には四方にそれぞれ穿たれる。48・49はB類に属す。48には小振りの脚台が付く。透かしは2点とも台形状のものが三方に穿たれる。50は無蓋高坏でC類に属す。体部外面には凹線で造り出した2条の鈍い凸帯が巡る。施文は施されていない。脚部は小さく、長方形の透かしが三方に穿たれる。

SF 12 (第 12 図 51)

51は甗でB類に属す。口頸部外面には凸帯を挟んで各1条の波状文を施す。体部中位やや上に刺突文を施し、その上から円孔を穿つ。

SF 13 (第 12 図 52~63)

52~56は坏蓋で、52がC類、他がD類に属す。口縁端部はすべて凹面をなす。稜は概ね断面三角形をなすが、鈍いものか小さいものである。57~61は坏身で、57~59がC類、60・61がD類に属す。たち上がり端部はどれも外傾する凹面をなす。57・59の底部外面にはヘラ記号があり、58の底部外面にはヘラ状工具による放斜線状の圧痕が残る。62は甗でB類に属す。頸部外面には2条(4・6本)の波状文を施す。体部外面上位下端にハケ状工具による刺突文を施し、その上から円孔を穿つ。63は甗で、A類に属す。口頸部外面には一条の断面三角形の凸帯を巡らし、その下に1条(5本)の波状文を施す。

SF 14 (第 12 図 64・65)

64 は坏蓋で、C 類に属し、稜は断面三角形をなす。65 は坏身で B 類に属し、たち上がりは内傾し、端部は外傾する凹面をなす。

SF 15 (第 12~14 図 66~107)

66~78 は坏蓋で、66~68 が C 類、他が D 類に属す。66~68 の稜は断面三角形をなす。69~74 の稜も断面三角形をなすが鈍く、75~78 の稜は段状をなす。69~78 にかけては器形が小型化する傾向がみえ、天井部も高く丸くなる。79~95 は坏身で、形態的に古い要素を示すものもみられるが概ね C 類の範疇で捉えることができる。たち上がりは内傾し、端部が凹面をなすもの (79~93)、丸く仕上げるもの (94・95) がある。全般に口径が小さく、底部は丸味を有す。96~101 は有蓋高坏である。96 は蓋で B 類に属し、稜は小さな段をなし、天井部外面中央には擬宝珠形の扁平なつまみが付く。97~101 も B 類に属し、それぞれ小さな脚台が付く。坏部たち上がりは内傾し、端部は外傾する凹面をなす。透かしは台形ないし三角形のものが三方に穿たれる。透かしを穿つ前に回転カキ目調整を施したもの (97~100) と施さないもの (101) がある。102~104 は小型甕で概ね C 類に属す。口径と体部最大径がほぼ同じである。口頸部外面には波状文、体部外面上位下端には刺突文 (102) や波状文 (103・104) を施す。円孔はその上から穿たれる。底部外面は静止ヘラ削りの後にナデ調整を施すもの (102・104) と格子目のタタキ目が残るもの (103) がある。105 は壺であるが口頸部が欠損する。形態的には甕に酷似したものであるが、円孔は穿たれていない。底部外面には平行のタタキを施した後ナデ調整を加えている。106・107 は甕で双方とも A 類に属す。口頸部外面には、106 が 1 条の鈍い凸帯を挟んで各 1 条 (5・7 本) の波状文、107 が凸帯と 2 条の凹線に挟まれて 1 条 (14 本) の波状文を施す。胴部最大径は胴部上位 1/3 に求めることができる。胴部外面には双方ともタタキ目が残るが、内面にはナデ調整を加えスリケシている。

SF 16 (第 14 図 108~116)

108~112 は坏蓋で、108 が B 類、109 が C 類、110~112 が D 類に属す。108 は天井部が低く平らである。109 の稜は小さいが鋭い。110~112 は小型化の傾向を呈し、器高が比較的高く、天井部は丸味を有す。113~116 は坏身でほぼ C 類の範疇で捉えることができる。たち上がりは内傾し、端部は外傾する凹面をなす。113 の底部外面には須恵器片が付着する。

SF 17 (第 14~16 図 117~139)

117~123 は坏蓋で、117・118 が C 類、119~121 が D 類、122・123 が E 類に属す。117・118 の稜は小さいが断面三角形をなし、口縁部高が比較的高く、器高の 1/2 前後である。119~121 は口径が小さく、器高が高く、全体に丸味を帯びる。122・123 は大型化しており、稜も小さな段をなす。ただし、口縁端部は内傾する凹面をなす。124~131 は坏身で、124 が B 類、125~130 が C 類、131 が D 類に属す。124 のたち上がりは比較的高く、底部は平らである。124~131 は小型化し、口径が小さく、底部は丸くなる。たち上がりは内傾し、端部が外傾する凹面

をなすもの(124~130)、丸いもの(131)がある。131は大型化の傾向を呈したものである。底部は比較的浅く、平らである。132~135は有蓋高坏である。132はB類の蓋である。稜は断面三角形をなすが鈍い。天井部外面中央には中凹みのやや扁平なつまみが付く。133はC類の蓋とみられる。稜は小さな断面三角形をなし、天井部外面中央には中凹みの小さなつまみが付く。134・135もC類に属す。この形態のものは今回初めて出土したもので、B類の坏部に低い脚台が付く。脚部にはヘラ状工具によるタテ方向の線刻がある。透かしは、134が円形のもの三方に、135が六角形状のものが四方不均等に穿たれている。136は甕でA類に属す。口頸部外面には凸帯を挟んで三段に各1条の波状文(10・15・10本)が施される。137~139も甕で、137がB類、138・139がC類に属す。胴部内面にはすべて同心円文のタタキ目が残存する。

SF 18 (第 16 図 140)

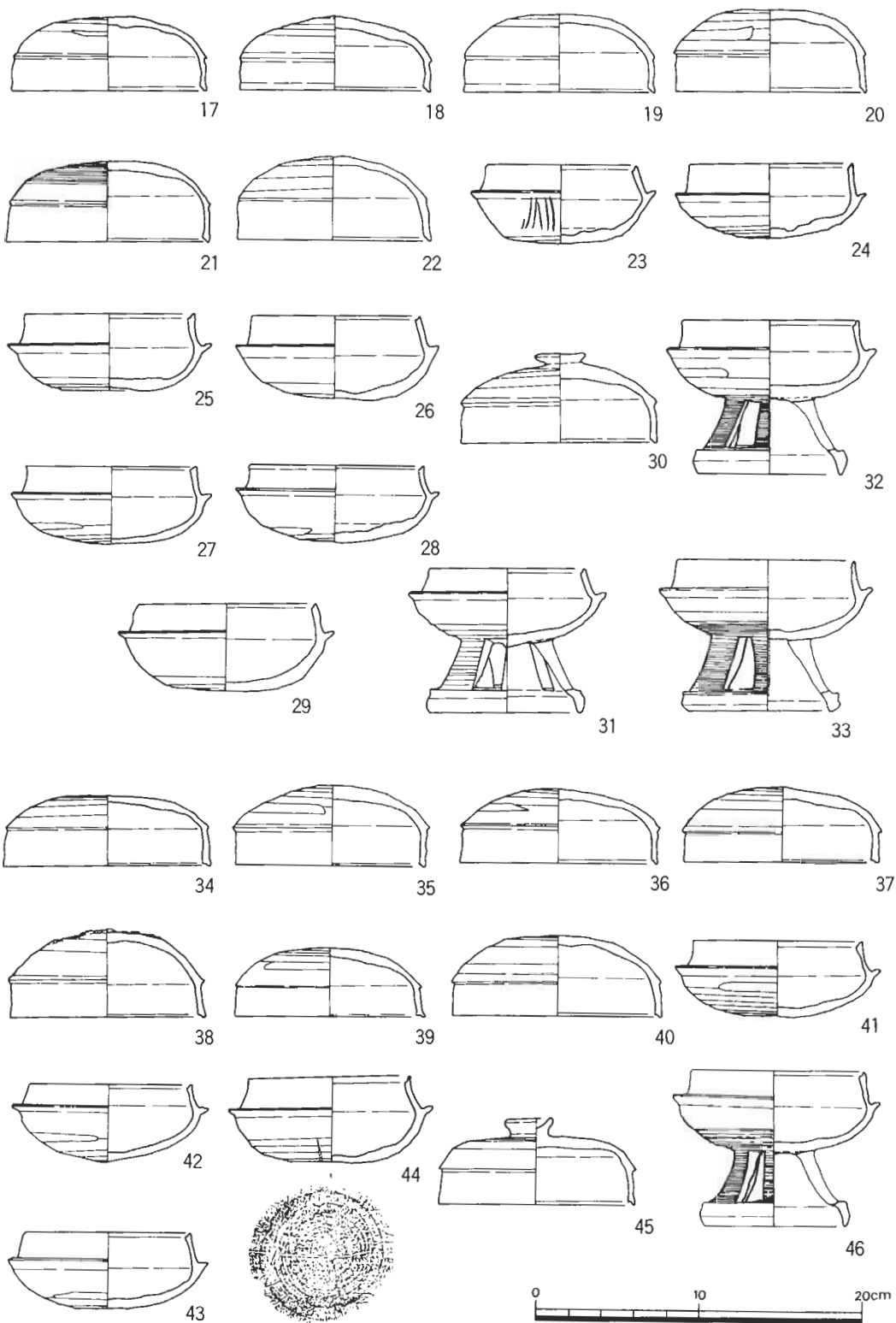
140は坏蓋でA類に属す。以前にもこの形態と似たものは出土していたが、明確なセット関係がつかめなかったため今まではB類の範疇で捉えていたが、今回出土したものはB類と識別できるものであることからA類を新たに設定した。口縁部はハの字形に開き、端部は丸味を有す。稜は鋭い断面三角形をなす。天井部はやや丸味を有し、外面はほぼ全面に回転ヘラ削り調整を施す。

1990年度遺構外出土須恵器(第16図141~157)

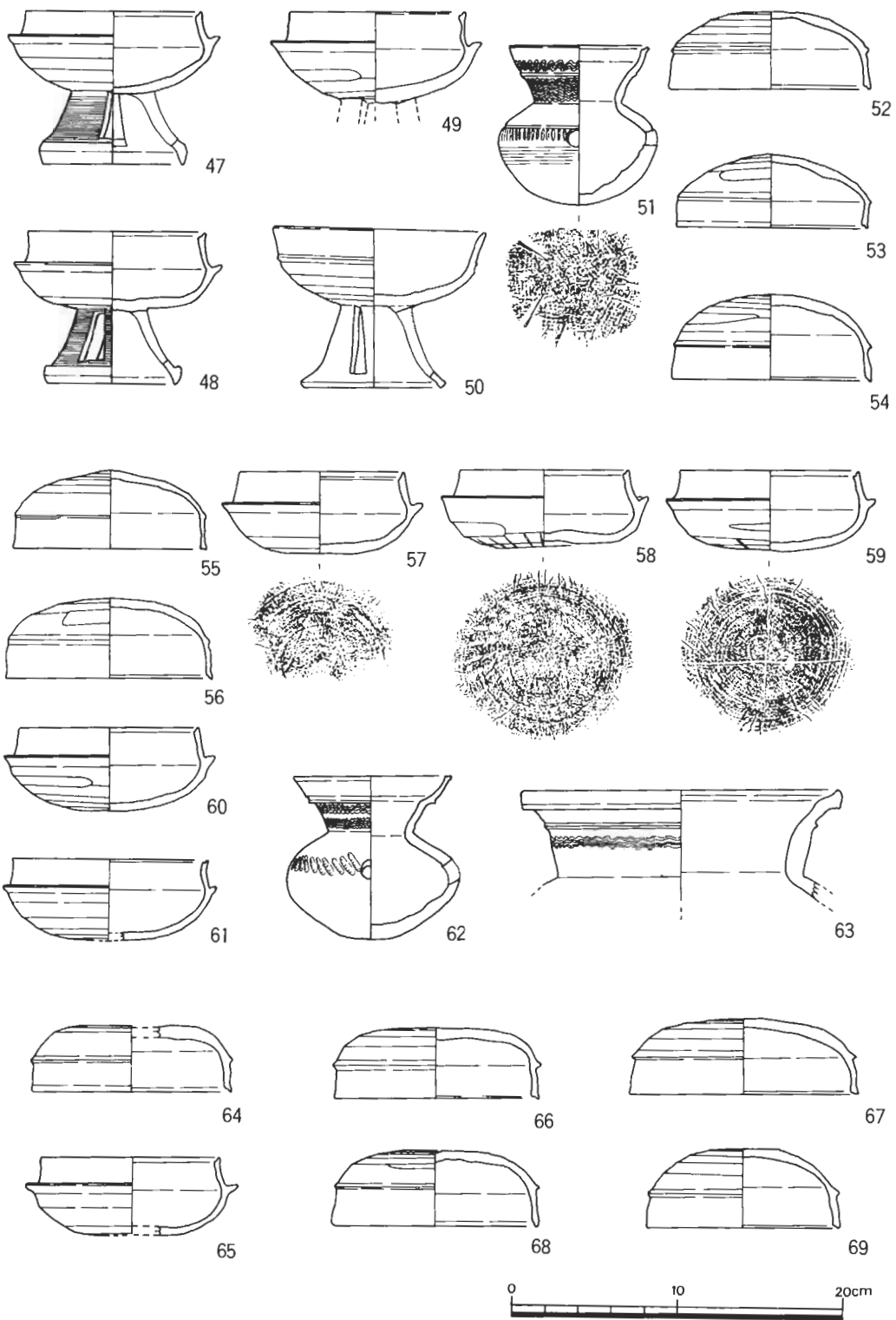
141~143が坏蓋で、141がB類、142がD類、143がF類に属す。141の稜は断面三角形をなし、口縁部はハの字形に開き、端部は内傾する浅い凹面をなす。142の稜は段をなし、口縁部はやや開き気味で下り、端部は内傾する凹面をなす。143はF類に属す。稜は弱い段となる。144~154は坏身で、144・145がC類、146~148がD類、149がE類、150がF類、151~154がG類に属す。144・145は小型の坏で、146~148から大型化する。149からはたち上がりの退化が進む。155は有蓋高坏の蓋でB類に属す。稜は鈍い断面三角形をなし、天井部外面中央に宝珠形のつまみが付く。156は無蓋高坏でB類に属す。体部外面には2条の凸帯が巡り、その下に1条(4本)の波状文を施す。157は大型甕でA類に属す。頸部外面には1条(12本)の波状文、体部上位下端には凹線に挟まれた1条(6本)の波状文を施す。円孔は波状文の下半分から内下方へ穿たれる。

陶質土器(第16図158)

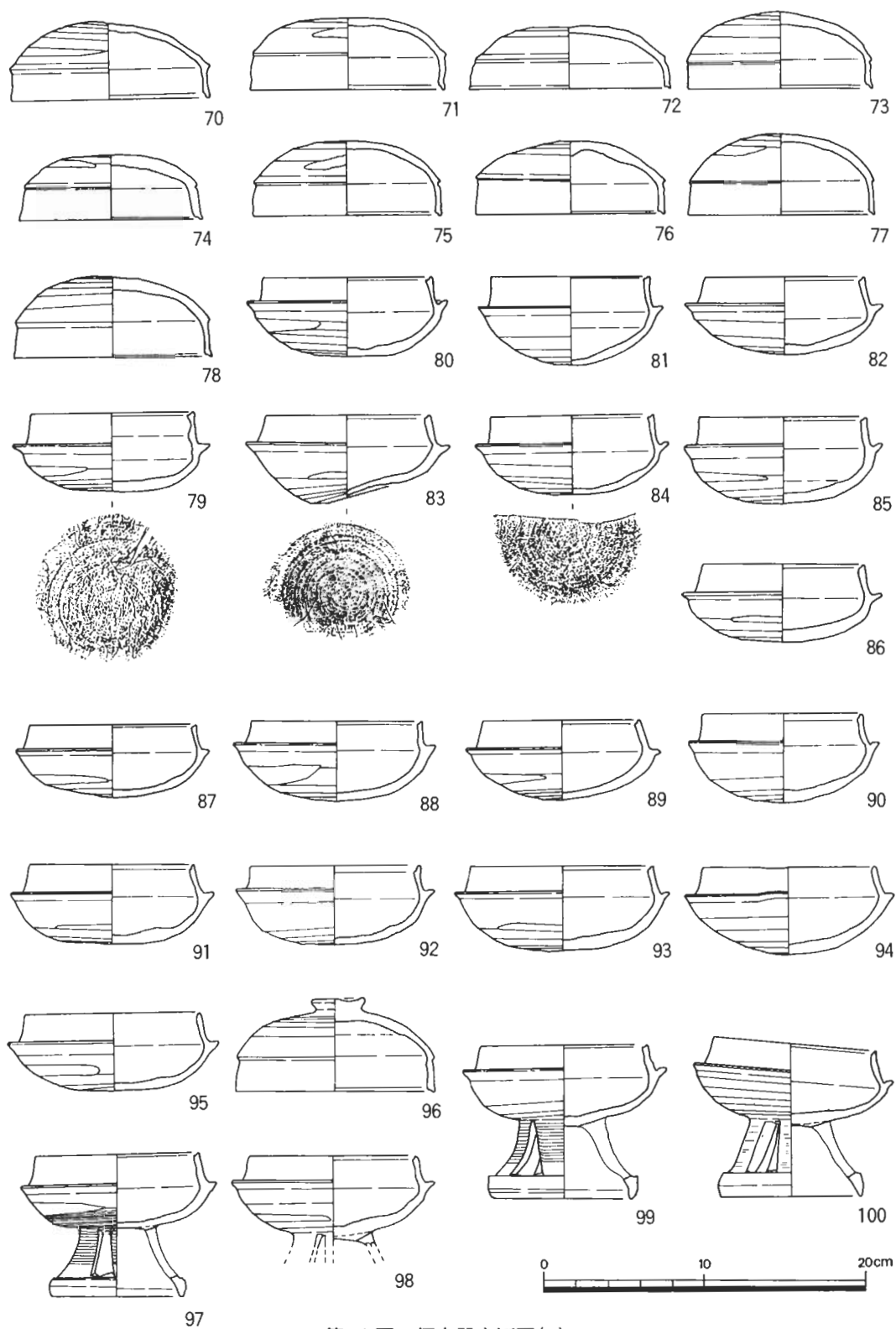
県下初出土のもので、SF 10から検出した。器形は、残部が少なく明確ではないが器台で坏部の一部ではないかとみられる。成形はマキアゲ・ミズビキによる。外面にはヘラ状工具によるやや粗雑な波状文が2条、その下部にはヘラ状工具による凹線が3条それぞれ施される。内面には濃緑色の自然釉がかかる。色調は青みの強い青灰色を呈し、胎土は精良で2mm大の白色砂粒を若干含む。焼成は良好である。(廣田)



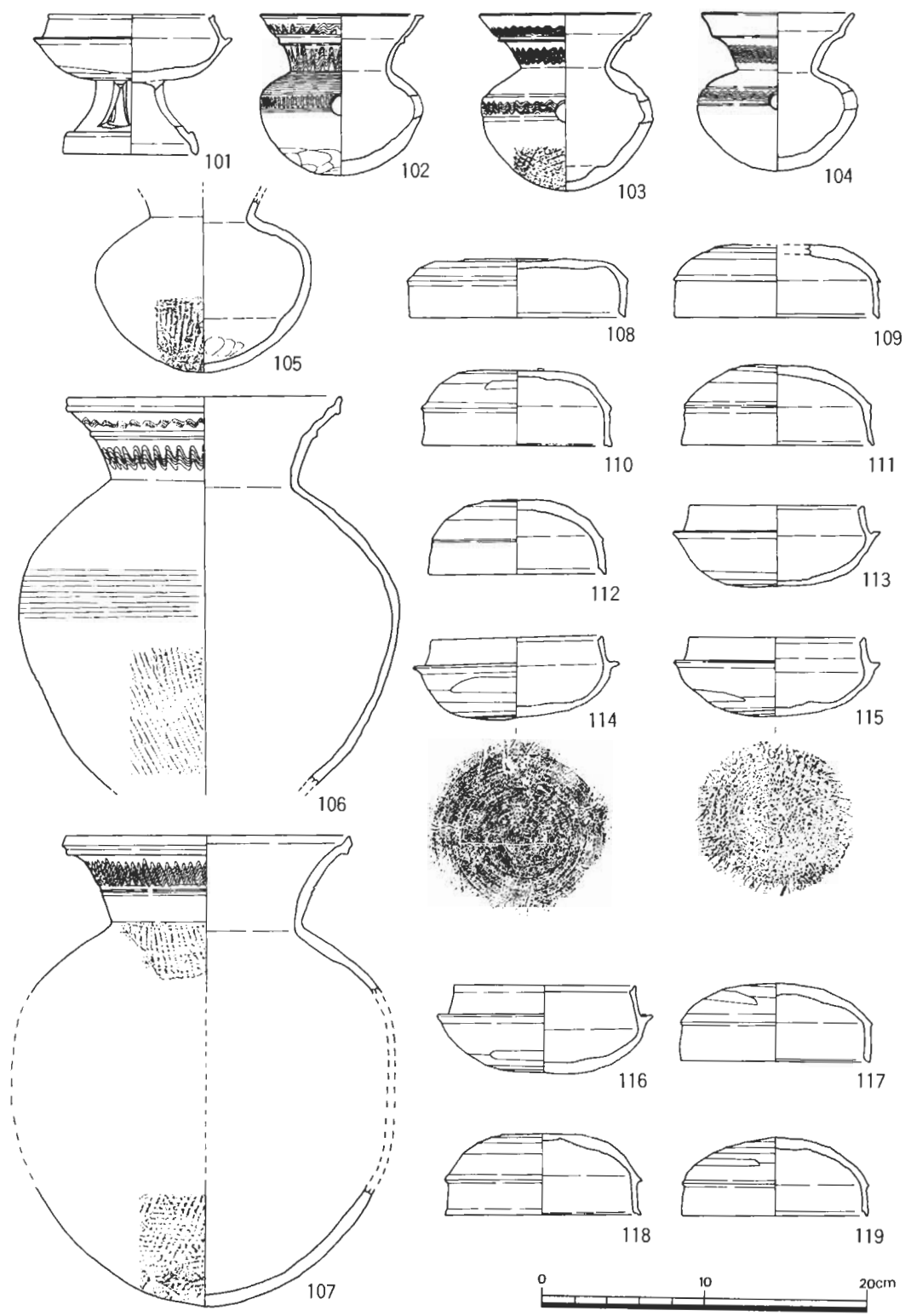
第 11 図 須恵器実測図(2)



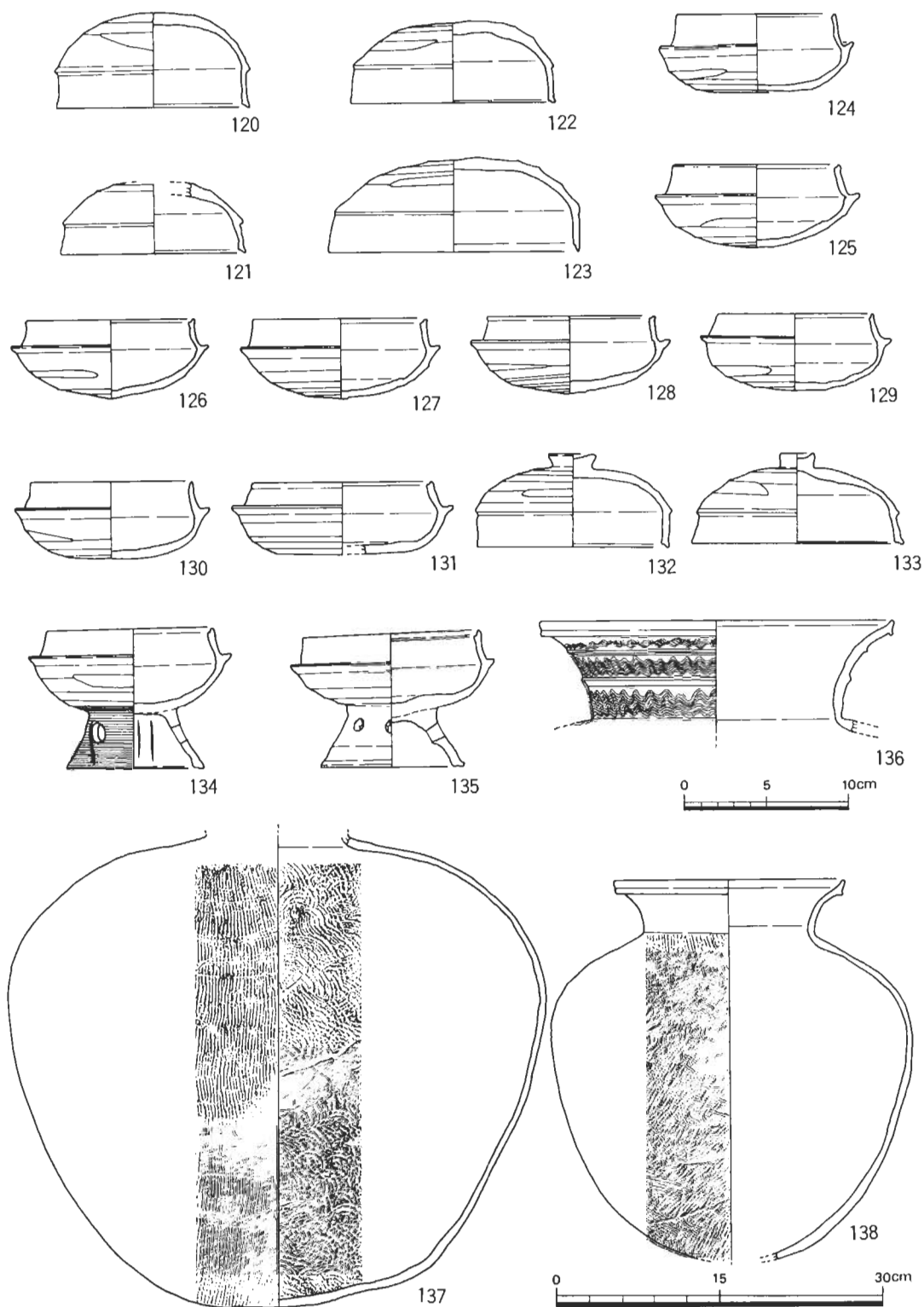
第12図 須恵器実測図(3)



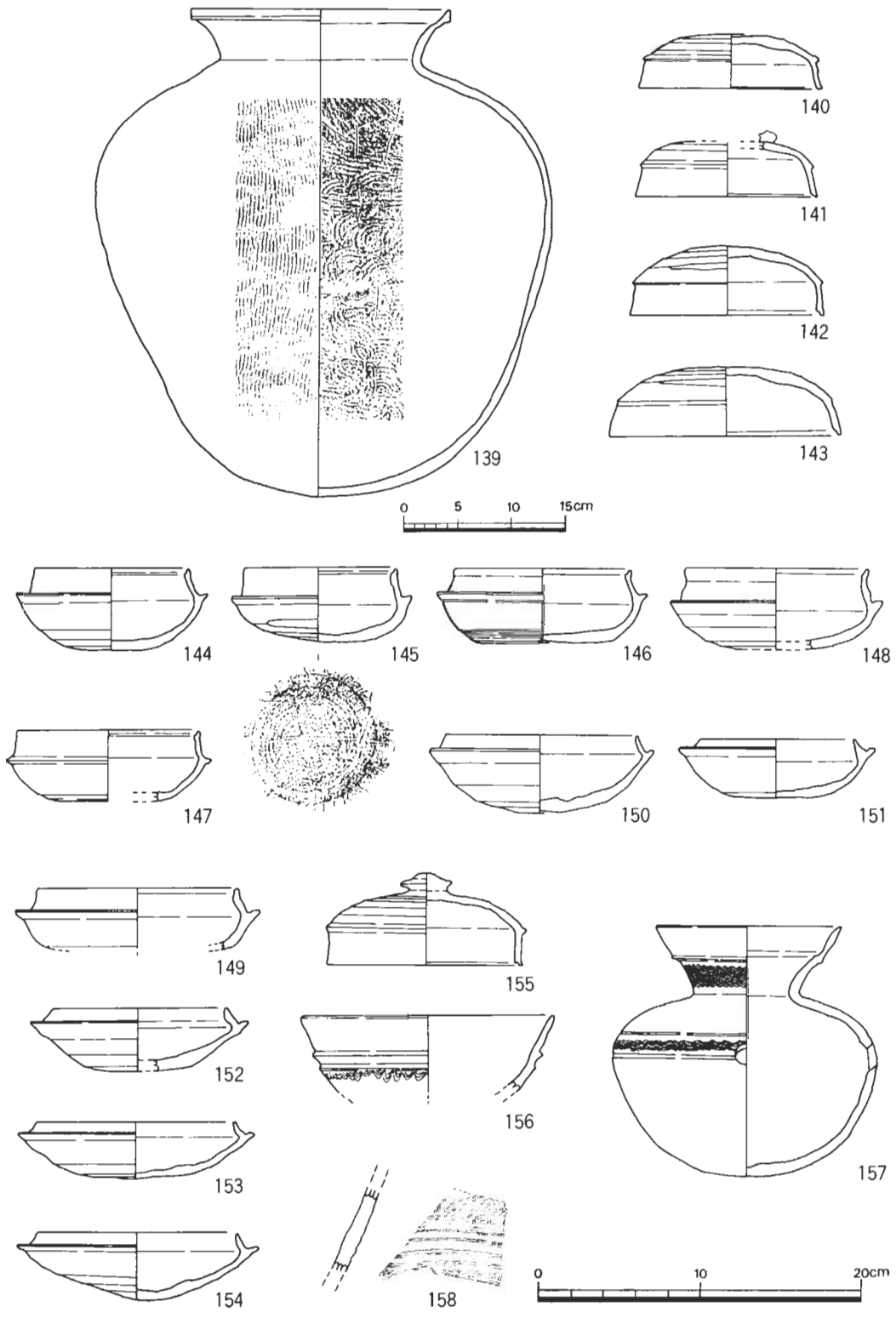
第13图 須恵器実测图(4)



第14図 須恵器実測図(5)



第15図 須恵器実測図(6)



第16図 須恵器実測図(7)

挿入番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
11-17	SF 10	須忠器 坏(蓋)	12.2 4.5 12.2 2.0	口縁部は内湾気味に真下に下り、 端部は内傾する凹面をなす。 稜は小さいが断面三角形をなす。 天井部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面約3/4に回転ヘラ削 り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は 左方向。
〃-18	〃	〃	12.0 4.5 12.0 1.8	〃	〃	ロクロ回転方向は 右方向。
〃-19	〃	〃	12.0 4.8 12.0 2.1	口縁部は内湾気味に真下に下り、 端部内傾する凹面をなす。 稜は段をなす。 天井部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面約2/3に回転ヘラ削 り調整。他は回転ナデ調整。	〃
〃-20	〃	〃	11.8 5.0 12.0 2.3	口縁部はやや開いて下り、端部は 内傾する凹面をなす。 稜は段をなし、下方に凹線を巡ら すことにより明瞭にする。 天井部は高く、丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面約4/5に回転ヘラ削 り調整。他は回転ナデ調整。	〃
〃-21	〃	〃	12.6 4.9 12.6 2.2	口縁部は内湾気味に真下に下り、 端部は内傾する凹面をなす。 稜は極めて小さいが、断面三角形 をなす。天井部は高く、丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面約4/5に回転ヘラ削 り調整後、約2/3に回転カキ目 調整を加える。他は回転ナデ調 整。	〃
〃-22	〃	〃	12.2 5.2 11.8 2.5	口縁部はやや開いて下り、端部は 内傾する凹面をなす。 稜は極めて小さな段をなす。 天井部は高く、丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面約4/5に回転ヘラ削 り調整。天井部内面の一部にナ デ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は 左方向。
〃-23	〃	〃 坏(身)	9.4 4.8 11.6 1.8	たち上がりは内傾してのび、端部 は外傾する凹面をなす。 受部は細く上外方へのび、端部は 丸い。底部は比較的深く、丸味を 有す。底部外面にヘラ状工具によ る6条の刻線文を施す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面約1/2に回転ヘラ削り 調整。底部内面の一部にナデ調 整。他は回転ナデ調査。	〃
〃-24	〃	〃	10.2 4.5 12.0 1.9	たち上がりは内傾してのび、端部 は外傾する凹面をなす。 受部は短く斜め上外方へのび、端部 は鋭い。底部は比較的深く、丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面約4/5に回転ヘラ削り 調整。他は回転ナデ調整。	〃
〃-25	〃	〃	10.7 4.7 12.8 1.9	たち上がりは外湾気味に内傾して のび、端部は外傾する凹面をなす。 受部は細く、斜め上方へのび、端 部は鋭い。底部は平らである。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面約2/3に回転ヘラ削り 調整。底部内面の一部にナデ調 整。他は回転ナデ調整。	〃
〃-26	〃	〃	10.6 5.2 12.7 1.8	たち上がりは内傾してのび、端部 は内傾する凹面をなす。 受部は太く短く、端部は鋭い。 底部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面約2/3に回転ヘラ削り 調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は 右方向。
〃-27	〃	〃	10.7 4.7 12.6 1.7	たち上がりはやや外湾気味に内傾 してのび、端部は内傾する凹面を なす。受部はやや太く短く、端部 は鋭い。底部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面約3/4に回転ヘラ削り 調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は 左方向。
〃-28	〃	〃	10.8 4.8 12.7 1.7	たち上がりは外湾気味に内傾して のび、端部は内傾する凹面をなす。 受部は細く、斜め上方へのび、端 部は丸味を有す。底部は丸味を有 す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面約1/2に回転ヘラ削り 調整。他は回転ナデ調整。	〃
〃-29	〃	〃	11.4 5.4 13.6 1.8	たち上がりは内湾気味に内傾して のび、端部は内傾する凹面をなす。 受部は細く、斜め上方へのび、端 部は鋭い。 底部は比較的深く、丸味を有す。	〃	〃
〃-30	〃	〃 高坏(蓋)	12.4 5.5 12.4 2.5 3.2	口縁部はほぼ真下に下り、端部は 内傾する凹面をなす。 稜は鈍いが、断面三角形をなす。 天井部は丸味を有し、偏平なつま みか付く。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面約3/4に回転ヘラ削 り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は 右方向。

挿入番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
11-31	SF 10	須臾器 有蓋高杯	9.6 8.9 受部径 12.4 たち上がり高 1.7 基部径 5.8 脚底径 9.4	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する凹面をなす。受部は斜め上方へのび、端部は鋭い。底部は丸味を有す。脚はハの字形に開き、裾部で真下に屈曲し、端部は丸味を有す。幅広い回転カキ目調整の後に台形状の透しを五方に穿つ。	マキアゲ、ミズビキ成形。坏、脚部はハリツケによる。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。脚部外面は幅広い回転カキ目調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
〃-32	〃	〃	11.4 9.5 受部径 13.1 たち上がり高 1.8 基部径 5.6 脚底径 9.0	たち上がりは外湾気味に内傾してのび、端部は外傾する凹面をなす。受部は斜め上方へのび、端部は鋭い。底部は平らに近い。脚はハの字形に開き、裾部で真下に屈曲し、端部は丸味を有す。透しは回転カキ目調整後台形状のものが三方に穿たれる。	マキアゲ、ミズビキ成形。坏、脚部はハリツケによる。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。脚部外面は回転カキ目調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は左方向。
〃-33	〃	〃	11.2 9.4 受部径 13.4 たち上がり高 1.9 基部径 6.5 脚底径 8.9	たち上がりは外湾気味に内傾してのび、端部は丸味を有す。受部は斜め上方へのび、端部は丸い。底部は平らに近い。脚はハの字形に開き、裾部で小さく下方へ屈曲し、端部は丸い。透しは回転カキ目調整後台形状のものが三方に穿たれる。	マキアゲ、ミズビキ成形。坏、脚部はハリツケによる。底部外面約3/4に回転ヘラ削り調整の後、約1/2に回転カキ目調整を加える。底部内面の一部にナデ調整。脚部外面は回転カキ目調整。他は回転ナデ調整。	〃
〃-34	SF 11	〃 坏(蓋)	13.0 4.4 稜径 12.8 口縁部高 2.4	口縁部は真下により、端部はやや内傾する凹面をなす。稜は小さいが、断面三角形をなし鋭い。天井部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面約4/5に回転ヘラ削り調整。天井部内面の一部にナデ調整。他は回転ナデ調整。	〃
〃-35	〃	〃	11.8 5.0 稜径 12.3 口縁部高 2.5	口縁部は真下により、端部はやや内傾する凹面をなす。稜は小さな断面三角形をなす。天井部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面約4/5に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
〃-36	〃	〃	12.4 4.6 稜径 12.5 口縁部高 2.2	〃	〃	〃
〃-37	〃	〃	12.0 4.6 稜径 12.5 口縁部高 1.9	〃	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面約4/5に回転ヘラ削り調整。天井部内面の一部にナデ調整。他は回転ナデ調整。	〃
〃-38	〃	〃	12.4 5.2 稜径 12.4 口縁部高 2.2	口縁部は開き気味に下り、端部は内傾する浅い凹面をなす。稜は断面三角形をなすが、鈍い。天井部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は左方向。天井部外面に自然釉等が付着する。
〃-39	〃	〃	11.9 4.4 稜径 11.6 口縁部高 1.8	口縁部は開き気味に下り、端部は下方を向く凹面をなす。稜は小さな段状をなす。天井部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。天井部内面の一部にナデ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
〃-40	〃	〃	13.0 5.0 稜径 13.0 口縁部高 2.2	口縁部は内湾気味に下り、端部は内傾する凹面をなす。稜は小さな段状をなす。天井部は丸い。	〃	ロクロ回転方向は左方向。
〃-41	〃	〃 坏(身)	10.6 4.7 受部径 12.8 たち上がり高 1.9	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する凹面をなす。受部は斜め上方へのび、端部は丸味を有す。底部は比較的深く、丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約4/5に丁寧な回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
〃-42	〃	〃	10.2 4.8 受部径 12.4 たち上がり高 1.4	たち上がりは内傾してのび、端部は内傾する凹面をなす。この凹面は細い棒状工具により造り出す。受部は水平にのび、端部は丸味を有す。底部は比較的深く、丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。	ロクロ回転方向は左方向。

挿入番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
11-43	SF 11	須恵器 罎(身)	10.6 4.7 受部径 12.5 たち上がり高 1.9	たち上がりは内湾気味にのび、端部は内傾する凹面をなす。受部はやや斜め上方を向き、端部は丸味を有す。底部は丸味がある。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。底部内面の一部にナデ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
〃-44	〃	〃	10.2 5.3 受部径 12.9 たち上がり高 2.0	たち上がりは外湾気味に内傾してのび、端部は外傾する段状をなす。受部は斜め上方を向き、端部は丸味を有す。底部は比較的深く、平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。底部外面にヘラ記号あり。
〃-45	〃	有蓋高坏 (蓋)	12.2 5.3 稜径 12.4 口縁部高 2.3	口縁部はやや開き気味に下り、端部は内傾する段状をなす。稜は段をなす。天井部は平らで、ほぼ中央部に扁平なつまみが付く。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面約4/5に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
〃-46	〃	有蓋高坏	10.8 9.6 受部径 12.9 たち上がり高 2.0 基部径 5.0 脚底径 8.7	たち上がりは内傾してのび、端部は内傾する凹面をなす。受部はやや斜め上方を向き、端部は丸い。底部は丸味を有す。脚はやや外湾して下方へ下り、裾部で下方へ屈曲する。端部は丸味を有す。透しは台形状のものが三方に穿たれる。	マキアゲ、ミズビキ成形。坏、脚部はハリツケによる。底部外面約4/5に回転ヘラ削り調整。脚部外面には回転カキ目調整を行った後に透しを穿つ。底部内面の一部にナデ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は左方向。
12-47	〃	〃	10.8 9.3 受部径 13.0 たち上がり高 1.5 基部径 5.2 脚底径 8.8	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する凹面をなす。受部はやや斜め上方を向き、端部は鋭い。底部は比較的深く丸味を有す。脚はやや外湾気味に下方へ下り、裾部で下方へ屈曲する。端部は丸味を有す。透しは台形状のものが四方に穿たれる。	マキアゲ、ミズビキ成形。坏、脚部はハリツケによる。底部外面約4/5に回転ヘラ削り調整。底部内面は同心円文のタタキの後にナデ調整。脚部外面には透しを穿つ前に回転カキ目調整を施す。他は回転ナデ調整。	〃
〃-48	〃	〃	11.0 9.2 受部径 12.9 たち上がり高 2.0 基部径 4.3 脚底径 7.8	たち上がりは外湾気味に内傾してのび、端部は外傾する凹面をなす。受部はやや斜め上方を向き、端部は鋭い。底部はほぼ平らである。脚はハの字状に開き、裾部で下方へ屈曲する。透しは台形状のものが三方に穿たれる。	マキアゲ、ミズビキ成形。坏、脚部はハリツケによる。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。脚部外面には透しを穿つ前に回転カキ目調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
〃-49	〃	〃	11.0 5.5 受部径 13.2 たち上がり高 2.0 基部径 4.7	たち上がりはほぼ真上に上がり、端部は内傾する凹面をなす。受部は斜め上方を向き、端部は丸味を有す。受部の基部には一条の凹線が巡る。底部は丸味を有す。脚部は欠損するが、透しは台形状のものが三方に穿たれていたとみられる。	マキアゲ、ミズビキ成形。坏、脚部はハリツケによる。底部外面約3/4に回転ヘラ削り調整。底部内面の一部にナデ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は左方向。
〃-50	〃	無蓋高坏	13.1 9.6 基部径 4.4 脚底径 8.4	口縁部は外傾してのび、端部は丸味を有す。体部外面には2条の凹線で鈍い凸帯を造り出す。底部は比較的浅く、丸味を有す。脚はハの字形に開き、裾部でさらに開き、端部で小さく屈曲する。透しは長形状のものが三方に穿たれる。	マキアゲ、ミズビキ成形。坏、脚部はハリツケによる。底部外面のほぼ全域に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	〃
〃-51	SF 12	〃 甗	8.6 9.6 9.7 基部径 5.3	口頭部は上外方へのび、断面三角形の凸帯を境に内湾気味に上外方へさらにのび、端部は外傾する浅い凹面をなす。口縁部外面には1条(6本)、頸部外面には1条(13本)の波状文を施す。肩部は比較的緩やかに下り、体部最大径は体部上位1/3にある。底部は丸い。下部下端に一条の凹線を配し、その下にハケ状工具による刺突文を施す。円孔は凹線の下端刺突文の上からやや斜めに穿たれる。底部外面にはヘラ記号が残存する。	マキアゲ、ミズビキ成形。体部下位に回転カキ目調整を施し、底部外面はナデ調整。他は回転ナデ調整。	外面は自然釉の剥離が著しい。

種別番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
12-52	SF 13	須恵器 坏(蓋)	12.4 4.7 12.1 2.4	口縁部開き気味に下り、端部は内傾する凹面をなす。 4.7 12.1 2.4 口縁部高 2.4 天井部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面のほぼ全域に回転ヘラ削り調整。天井部内面の一部にナデ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は左方向。
〃-53	〃	〃	11.8 4.4 11.9 1.6	口縁部はやや内傾して下り、端部は内傾する段状をなす。 4.4 11.9 1.6 口縁部高 1.6 天井部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	〃
〃-54	〃	〃	12.3 5.3 12.2 2.1	口縁部は開き気味に下り、端部は内傾する浅い凹面をなす。 5.3 12.2 2.1 口縁部高 2.1 天井部は高く、丸い。	〃	ロクロ回転方向は右方向。
〃-55	〃	〃	12.0 4.8 11.8 2.0	口縁部は開き気味に下り、端部は下方を向く凹面をなす。 4.8 11.8 2.0 口縁部高 2.0 天井部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面約3/4に回転ヘラ削り調整。天井部内面の一部にナデ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は左方向。
〃-56	〃	〃	12.8 4.9 12.5 2.3	口縁部は内湾気味に下り、端部は内傾する浅い凹面をなす。 4.9 12.5 2.3 口縁部高 2.3 天井部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面約3/4に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	〃
〃-57	〃	〃 坏(身)	10.0 5.0 12.4 2.0	口縁部は開き気味に下り、端部は外傾する凹面をなす。 5.0 12.4 2.0 口縁部高 2.0 天井部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底面外面約3/4に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
〃-58	〃	〃	10.4 4.3 12.8 1.8	口縁部は開き気味に下り、端部は外傾する凹面をなす。 4.3 12.8 1.8 口縁部高 1.8 天井部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底面外面約3/4に回転ヘラ削り調整。底面内面の一部にナデ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は左方向。
〃-59	〃	〃	11.0 4.9 12.8 1.8	口縁部は開き気味に下り、端部は外傾する凹面をなす。 4.9 12.8 1.8 口縁部高 1.8 天井部は丸味を有す。	〃	ロクロ回転方向は右方向。
〃-60	〃	〃	11.0 5.1 13.1 1.8	口縁部は開き気味に下り、端部は外傾する小さな凹面をなす。 5.1 13.1 1.8 口縁部高 1.8 天井部は丸味を有す。	〃	ロクロ回転方向は左方向。
〃-61	〃	〃	12.0 (5.0) 13.1 1.7	口縁部は開き気味に下り、端部は外傾する凹面をなす。 (5.0) 13.1 1.7 口縁部高 1.7 天井部は丸味を有す。	〃	〃
〃-62	〃	〃 甗	9.8 10.0 10.7 5.3	口縁部は開き気味に下り、端部は外傾する凹面をなす。 9.8 10.0 10.7 5.3 口縁部高 5.3 天井部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底面内外面がナデ調整である以外は回転ナデ調整。	口頸部内面と肩部外面は自然釉の剥落が著しい。
〃-63	〃	〃 甗	19.4 (6.8) — —	口縁部は開き気味に下り、端部は外傾する凹面をなす。 (6.8) — — 口縁部高 — 天井部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 残部は回転ナデ調整。	口頸部内面と肩部外面には青緑色の自然釉がかかる。

挿入番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
12-64	SF 14	須忠器 坏(蓋)	12.8 4.0 12.5 2.0 口径 器高 胴径 底径	口縁部はやや開き気味に下り、端部は内傾する浅い凹面をなす。稜は断面三角形をなす。天井部は平らである。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。天井部内面の一部にナデ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
〃-65	〃	〃 坏(身)	11.2 4.8 13.2 1.7 口径 器高 胴径 底径	たち上がりは外湾気味に内傾してのび、端部は外傾する凹面をなす。受部は斜め上方へのび、端部は丸味を有す。底部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は左方向。
〃-66	SF 15	〃 坏(蓋)	12.6 4.3 12.8 2.0 口径 器高 胴径 底径	口縁部はほぼ真下に下り、端部は内傾する凹面をなす。稜は断面三角形をなし、鋭い。天井部は平らである。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面約4/5に回転ヘラ削り調整。天井部内面の一部にナデ調整。他は回転ナデ調整。	〃
〃-67	〃	〃 〃	14.0 4.6 13.6 2.3 口径 器高 胴径 底径	口縁部は内湾気味に下方へ下り、端部は内傾する平面をなす。稜は断面三角形をなし、鋭い。天井部はやや丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面約4/5に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
〃-68	〃	〃 〃	12.4 4.6 12.6 2.4 口径 器高 胴径 底径	口縁部は開き気味に下り、端部は内傾する浅い凹線を配すが、丸味を有す。稜は小さいが、断面三角形をなす。天井部は平らに近い。	〃	ロクロ回転方向は左方向。 外面には青緑色の自然釉がかかる。
〃-69	〃	〃 〃	11.7 4.8 11.7 2.2 口径 器高 胴径 底径	口縁部は開き気味に下り、端部は内傾する浅い凹面をなす。稜は断面三角形をなす。天井部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面約4/5に回転ヘラ削り調整。天井部内面の一部にナデ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
13-70	〃	〃 〃	12.6 4.9 12.8 2.0 口径 器高 胴径 底径	〃	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面約4/5に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	〃
〃-71	〃	〃 〃	12.4 4.5 12.3 2.2 口径 器高 胴径 底径	口縁部は内湾気味に下り、端部は内傾する浅い凹面をなす。稜は小さいが、断面三角形をなす。天井部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は左方向。 天井部外面に自然釉が若干かかる。
〃-72	〃	〃 〃	12.8 3.9 12.0 1.8 口径 器高 胴径 底径	〃	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。天井部内面の一部にナデ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
〃-73	〃	〃 〃	11.8 4.8 11.8 1.8 口径 器高 胴径 底径	口縁部はほぼ真下に下り、端部は内傾する凹面をなす。稜は段状をなす。天井部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面約3/4に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は左方向。
〃-74	〃	〃 〃	11.8 4.1 11.1 2.1 口径 器高 胴径 底径	口縁部は斜め下方に下り、端部は内傾する浅い凹面をなす。稜は小さく段状を呈す。天井部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面約3/4に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
〃-75	〃	〃 〃	12.0 4.6 11.8 2.1 口径 器高 胴径 底径	口縁部は内湾気味に下り、端部は内傾する浅い凹面をなす。稜は段状をなす。天井部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は左方向。
〃-76	〃	〃 〃	12.0 4.5 12.0 2.0 口径 器高 胴径 底径	口縁部は開き気味に下り、端部は内傾する凹面をなす。稜はほぼ段状をなす。天井部は丸い。	〃	ロクロ回転方向は右方向。 天井部外面にヘラ記号あり。
〃-77	〃	〃 〃	12.0 5.0 11.8 2.1 口径 器高 胴径 底径	口縁部は内湾気味に下り、端部は内傾する凹面をなす。稜は小さく段状をなす。天井部は丸い。	〃	ロクロ回転方向は右方向。 天井部外面は自然釉が剥落。
〃-78	〃	〃 〃	12.6 5.0 12.4 2.3 口径 器高 胴径 底径	〃	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面約3/4に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は左方向。 天井部に焼成時の歪みが残る。

種別番号	通稱番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
13-79	SF 15	須恵器 杯(身)	10.4 5.0 受部径 12.6 たち上がり高 2.0	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する凹面をなす。受部は太く、水平にのび、端部は丸い。底部は比較的深く、丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約4/5に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は左方向。底部外面にヘラ記号あり。
〃-80	〃	〃	10.8 4.9 受部径 12.8 たち上がり高 1.7	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する凹面をなす。受部は斜め上方を向き、端部は丸い。底部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約4/5に回転ヘラ削り調整。底部内面の一部にナデ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は左方向。
〃-81	〃	〃	10.0 5.6 受部径 11.6 たち上がり高 1.9	たち上がりは外湾気味に内傾してのび、端部は外傾する凹面をなす。受部はほぼ水平にのび、端部は鋭い。底部は深く丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約4/5に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	〃
〃-82	〃	〃	10.1 4.8 受部径 12.5 たち上がり高 1.7	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する浅い凹面をなす。受部は斜め上方を向き、端部は鋭い。底部は丸味を有す。	〃	〃
〃-83	〃	〃	10.4 5.5 受部径 12.9 たち上がり高 1.9	〃	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。底部内面の一部にナデ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。底部外面にヘラ記号あり。
〃-84	〃	〃	10.4 4.9 受部径 12.4 たち上がり高 1.8	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する凹面をなす。受部は斜め上方を向き、端部は丸い。底部は丸味を有す。	〃	〃
〃-85	〃	〃	10.6 5.4 受部径 12.6 たち上がり高 1.8	〃	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約3/4に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は左方向。
〃-86	〃	〃	10.2 4.9 受部径 12.6 たち上がり高 1.9	〃	〃	ロクロ回転方向は右方向。
〃-87	〃	〃	10.6 4.5 受部径 12.3 たち上がり高 1.5	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する凹面をなす。受部は短く、水平にのび、端部は丸い。底部は丸味を有す。	〃	〃
〃-88	〃	〃	10.8 5.0 受部径 12.8 たち上がり高 1.5	たち上がりはほぼ直立して上がり、端部は外傾する凹面をなす。受部は太く短く、水平にのび、端部は丸い。底部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約3/4に回転ヘラ削り調整。底部内面の一部にナデ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は左方向。
〃-89	〃	〃	10.0 5.0 受部径 12.4 たち上がり高 1.8	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する凹面をなす。受部は水平にのび、端部は鋭い。底部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約3/4に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	〃
〃-90	〃	〃	10.0 5.5 受部径 12.0 たち上がり高 1.9	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する凹面をなす。受部は水平にのび、端部は鋭い。底部は深く、丸い。	〃	〃
〃-91	〃	〃	10.6 5.0 受部径 13.1 たち上がり高 1.8	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する凹面をなす。受部は斜め上方を向き、端部は丸い。底部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約3/4に回転ヘラ削り調整。底部内面の一部にナデ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
〃-92	〃	〃	10.8 4.9 受部径 12.7 たち上がり高 1.6	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する凹面をなす。受部は水平にのび、端部は丸い。底部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。底部内面の一部にナデ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は左方向。

種別番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
13-93	SF 15	須恵器 坏(身)	11.6 5.4 受部径 13.6 たち上がり高 1.7	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する浅い凹面をなす。受部は小さく、斜め上方を向き、端部は鋭い。底部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
〃-94	〃	〃	11.0 5.5 受部径 13.2 たち上がり高 1.7	たち上がりは内傾してのび、端部を丸く仕上げる。受部は短く水平にのび、端部は丸い。底部は深く、丸い。受部を中心に歪みがある。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約4/5に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は左方向。
〃-95	〃	〃	11.2 4.8 受部径 13.5 たち上がり高 1.8	たち上がりは内傾してのび、端部を丸く仕上げる。受部は短く水平にのび、端部は丸い。底部は平らに近い。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約3/4に回転ヘラ削り調整。底部内面の一部にナデ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
〃-96	〃	有蓋高坏 (蓋)	12.7 5.9 後径 12.6 口縁部高 2.1 つまみ径 3.4	口縁部はやや開き気味に下り、端部は内傾する凹面をなす。後には段状をなす。天井部は比較的高く、中央部に扁平なつまみが付く。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面約3/4に回転ヘラ削り調整。天井部内面の一部にナデ調整。他は回転ナデ調整。	〃
〃-97	〃	有蓋高坏	10.4 9.1 受部径 12.6 たち上がり高 1.7 基部径 4.8 脚底径 8.2	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する浅い凹面をなす。受部は太く、短く、水平にのび、端部は丸い。底部は丸味を有す。脚はハの字形に開き、裾部で下方へ屈曲する。透しは台形状のものを三方に穿つ。	マキアゲ、ミズビキ成形。坏、脚部はハリツケによる。底部外面約4/5に回転ヘラ削り調整後、回転カキ目調整を加える。脚部外面には透しを穿つ前に回転カキ目調整を施す。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は左方向
〃-98	〃	〃	10.6 (5.7) 受部径 12.9 たち上がり高 1.6 基部径 5.5	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する浅い凹面をなす。受部は斜め上方を向き、端部は丸味を有す。底部は丸い。脚は大半が欠損するが、三角形の透しが三方に穿たれている。	マキアゲ、ミズビキ成形。坏、脚部はハリツケによる。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	〃
〃-99	〃	〃	10.6 9.7 受部径 13.0 たち上がり高 1.6 基部径 5.5	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する凹面をなす。受部は水平にのび、端部は丸い。底部は丸味を有す。脚はハの字形に開き、裾部で下方へ屈曲し、端部は丸い。透しは三角形のものを三方に穿つ。	マキアゲ、ミズビキ成形。坏、脚部はハリツケによる。底部外面約3/4に回転ヘラ削り調整。底部内面の一部にナデ調整。脚部外面には透しを穿つ前に回転カキ目調整を施す。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
〃-100	〃	〃	10.4 10.1 受部径 12.7 たち上がり高 1.9 基部径 5.2	たち上がりは外湾気味に内傾してのび、端部は内傾する浅い凹面をなす。受部は斜め上方を向き、端部は丸い。底部は丸味を有す。脚はハの字形に開き、そのまま裾部に至る。透しは台形状のものを三方に穿つ。	マキアゲ、ミズビキ成形。坏、脚部はハリツケによる。底部外面には全域に回転ヘラ削り調整。脚部外面には透しを穿つ前に回転カキ目調整を施し、さらにナデ調整を加える。他は回転ナデ調整。	〃
14-101	〃	〃	10.5 8.7 受部径 12.5 たち上がり高 1.8 基部径 4.2	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する浅い凹面をなす。受部は細く斜め上方を向き、端部は鋭い。底部は平らに近い。脚は外湾して下方に下り、裾部で下方へ屈曲し、端部は丸い。透しは三角形ないし台形状のものを三方に穿つ。	マキアゲ、ミズビキ成形。坏、脚部はハリツケによる。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	〃
〃-102	〃	〃 甗	10.2 9.9 基部径 6.3 体部最大径 10.2	口頸部は外反気味に上がり、口縁部でやや内湾し、端部は上方を向く浅い凹面をなす。口縁部外面下端に断面三角形の凸帯を配し、上方に1条(6本)、下方に1条(12本)の波状文を施す。体部最大径は体部中位より上にあり、そこに刺突文を施した後に円孔を穿つ。	マキアゲ、ミズビキ成形。肩部外面には刺突文の前に回転カキ目調整。底部外面は静止ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	口頸部内面と肩部外面は自然極脱落。

挿入番号	遺構番号	器種	法量 口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
14-103	SF 15	須臾器 甌	口径 10.8 器高 11.0 胴径 5.6 底径 10.7	口頸部は外反気味に上がり、口縁部でやや内湾し、端部は外傾する凹面をなす。口縁部外面下端に断面三角形の凸帯を配し、上方に1条(10本)、下方に1条(13本)の波状文を施す。体部最大径は体部中位より上にあり、2条の凹線に挟まれて、1条(9本)の波状文を施す。円孔はその上から穿つ。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面は回転ヘラ削り調整の後にナデ調整を行い、さらに格子目のタタキを施す。他は回転ナデ調整。	口頸部内面と肩部外面は自然釉剥落。
〃-104	〃	〃	口径 9.6 器高 9.8 胴径 5.0 底径 10.0	口頸部は外反して上がり、口縁部で角度を変え外反気味に上がり、端部を丸く仕上げ上げる。頸部外面には、1条(13本)の波状文を施す。肩部はやや張り、体部最大径は体部上位1/3にある。肩部下端には2条の凹線に挟まれて1条(6本)の波状文を施す。円孔はその上から穿つ。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面は静止ヘラ削り調整の後に丁寧にナデ調整を加える。他は回転ナデ調整。	口縁部内面と肩部外面では自然釉剥離。
〃-105	〃	〃 壺	口径 10.7 器高 13.7 胴径 —	口頸部は上外方を向くが、大半が欠損する。肩部はやや張り、胴部最大径は胴部上位1/3にある。底部はやや内湾気味である。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面は平行のタタキの後に胴部に近いほどナデ調整を丁寧に施し、擦り消す。底部内面はナデ調整で指頭止痕が残る。他は回転ナデ調整。	
〃-106	〃	〃 甌	口径 17.5 器高 (24.2) 胴径 24.1 底径 —	口頸部は外湾して上がり、端部はやや外傾する凹面をなす。口頸部外面には断面三角形の凸帯を挟んで2条(5・7本)の波状文を施す。肩部はやや緩やかに下り、胴部最大径は胴部中位よりやや上に求めることができる。底部は欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。口頸部と胴部はハリツケによる。胴部外面中位に回転カキ目調整、下位に格子目のタタキを施す。他は回転ナデ調整。	
〃-107	〃	〃	口径 17.5 器高 (30.2) 胴径 (24.0) 底径 —	口頸部は外湾して上がり、端部は内傾する凹面をなす。口縁部外面上端に一条の断面三角形の凸帯、下端に一条の小さな凸帯を巡らし、その間に1条(14本)の波状文を施す。肩部はやや緩やかに下る。底部は丸い。胴部の大半は欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。口頸部と胴部はハリツケによる。肩部外面は平行のタタキ、底部外面には格子目のタタキを施す。胴部内面はナデ調整。他は回転ナデ調整。	焼成が悪く、器面は摩耗する。
〃-108	SF 16	〃 罎(蓋)	口径 13.6 器高 3.6 胴径 13.8 底径 2.3	口縁部は内湾気味に真下に下り、端部は内傾する平面をなす。稜は断面三角形をなすが鈍い。天井部は低く、平らである。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面約1/5に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
〃-109	〃	〃	口径 12.8 器高 (4.5) 胴径 13.0 底径 2.2	口縁部は真下に下り、端部は内傾する凹面をなす。稜は断面三角形状をなし、斜め下方を向き鋭い。天井部はほぼ平らである。	〃	ロクロ回転方向は左方向。
〃-110	〃	〃	口径 12.0 器高 4.7 胴径 11.9 底径 2.4	口縁部はほぼ真下に下り、端部は内傾する凹面をなす。稜は断面三角形で鋭い。天井部はほぼ平らである。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面約4/5に回転ヘラ削り調整。天井部内面の一部にナデ調整。他は回転ナデ調整。	〃
〃-111	〃	〃	口径 12.0 器高 5.0 胴径 11.8 底径 2.4	口縁部は斜め下外方に下り、端部は内傾する平面をなす。稜は小さな断面三角形をなす。天井部は比較的高く、丸い。	〃	〃
〃-112	〃	〃	口径 11.0 器高 4.6 胴径 10.6 底径 2.1	口縁部は内湾気味に下り、端部は内傾する凹面を出す。稜は小さな段状をなす。天井部は丸い。	〃	〃
〃-113	〃	〃 罎(身)	口径 10.8 器高 5.0 胴径 12.8 底径 1.6	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する凹面をなす。受部は細く、やや斜め上方を向き、端部は丸い。底部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。底部外面に須臾器片が付着する。

挿入番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
14-114	SF 16	須恵器 坏(身)	10.8 5.0 受部径 13.0 たち上がり高 1.6	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する段をなす。 受部は水平にのび、端部は丸い。 底部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。 底部外面にヘラ記号あり。
〃-115	〃	〃 〃	11.0 4.9 受部径 12.9 たち上がり高 1.5	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する面をなす。 受部は水平にのび、端部は鋭い。 底部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。底部内面の一部にナデ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は左方向。 底部外面にヘラ記号あり。
〃-116	〃	〃 〃	11.4 5.5 受部径 13.4 たち上がり高 1.8	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する面をなす。 受部は斜め上方を向き、端部は丸い。底部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
〃-117	SF 17	〃 坏(蓋)	11.8 4.9 稜径 12.0 口縁部高 2.4	口縁部は真下になり、端部は内傾する平面をなす。 稜は小さく、段状をなす。 天井部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面約3/4に回転ヘラ削り調整。天井部内面の一部にナデ調整。他は回転ナデ調整。	〃
〃-118	〃	〃 〃	12.3 5.1 稜径 12.5 口縁部高 2.2	口縁部は開き気味に下り、端部は内傾する面をなす。 稜は断面三角形をなす。 天井部は比較的高く、丸味を有す。	〃	ロクロ回転方向は左方向。
〃-119	〃	〃 〃	11.6 4.9 稜径 11.7 口縁部高 1.9	口縁部はほぼ真下になり、端部は内傾する面をなす。 稜は小さな断面三角形をなす。 天井部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面約3/4に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
15-120	〃	〃 〃	12.2 5.9 稜径 12.3 口縁部高 2.3	〃	〃	ロクロ回転方向は左方向。
〃-121	〃	〃 〃	11.6 (4.3) 稜径 11.3 口縁部高 1.9	口縁部は開き気味に下り、端部は内傾する面をなす。 稜は段状をなす。 天井部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面約1/2に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	〃
〃-122	〃	〃 〃	12.9 5.0 稜径 12.6 口縁部高 2.3	口縁部はやや開き気味に下り、端部は内傾する面をなす。 稜は段状をなす。 天井部は比較的高く、丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
〃-123	〃	〃 〃	15.7 5.7 稜径 15.5 口縁部高 2.5	口縁部はほぼ真下になり、端部は内傾する浅い面をなす。 稜は小さな段状をなす。 天井部は高く、丸味を有す。	〃	ロクロ回転方向は左方向。
〃-124	〃	〃 坏(身)	10.0 4.7 受部径 12.1 たち上がり高 2.0	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する面をなす。 受部は斜め上方を向き、端部は鋭い。 底部は平らである。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面約4/5に回転ヘラ削り調整。底部内面の一部にナデ調整。他は回転ナデ調整。	〃
〃-125	〃	〃 〃	10.3 5.1 受部径 12.8 たち上がり高 1.9	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する面をなす。 受部は斜め上方を向き、端部は丸い。底部は丸い。	〃	ロクロ回転方向は右方向。
〃-126	〃	〃 〃	10.6 4.9 受部径 12.4 たち上がり高 1.6	〃	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面約4/5に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は左方向。
〃-127	〃	〃 〃	10.6 4.9 受部径 12.4 たち上がり高 1.7	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する面をなす。 受部は斜め上方を向き、端部は鋭い。底部は丸い。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面約4/5に回転ヘラ削り調整。底部内面の一部にナデ調整。他は回転ナデ調整。	〃
〃-128	〃	〃 〃	10.6 4.7 受部径 12.6 たち上がり高 1.6	〃	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面約4/5に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	〃

挿入番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
15-129	SF 17	須忠器 坏(身)	9.6 4.7 受部径 11.9 たち上がり高 1.5	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する凹面をなす。 受部はほぼ水平にのび、端部は丸味を有す。底部は比較的深く、丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面約4/5に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は左方向。
〃-130	〃	〃 〃	10.2 4.8 受部径 12.4 たち上がり高 1.7	たち上がりは内傾してのび、端部を細く仕上げる。 受部は斜め上方を向き、端部は丸い。底部は丸味を有す。	〃	〃
〃-131	〃	〃 坏(身)	11.2 4.4 受部径 13.9 たち上がり高 1.5	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する浅い凹面をなす。 受部は斜め上方を向き、端部は丸い。底部は平らである。	マキアゲ、ミズビキ成形。 底部外面はほぼ全域に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は左方向。
〃-132	〃	〃 有蓋高坏 (蓋)	12.0 5.8 後径 12.2 口縁部高 2.3 つまみ径 2.9	口縁部は真下に下り、端部は内傾する凹面をなす。 稜は鈍い断面三角形をなす。 天井部は丸味を有し、ほぼ中央に扁平なつまみが付く。	マキアゲ、ミズビキ成形。 天井部外面約4/5に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	〃
〃-133	〃	〃 〃	13.2 5.6 後径 12.6 口縁部高 1.8 つまみ径 2.2	口縁部は下方外に下り、端部は内傾する凹面をなす。 稜は小さな断面三角形をなす。 天井部は比較的高く、丸味を有し、ほぼ中央にボタン状のつまみが付く。	〃	〃
〃-134	〃	〃 有蓋高坏	10.3 7.7 受部径 12.7 たち上がり高 1.7 基部径 5.6	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する凹面をなす。 稜は斜め上方を向き、端部は鋭い。底部は丸い。 脚は短く、ハの字形に開き、裾部で下方を向く。透しは円孔を三方に穿ち、外面に1条、内面に2条のヘラ状工具による線刻文が残る。	マキアゲ、ミズビキ成形。 坏、脚部はハリツケによる。 底部外面約4/5に回転ヘラ削り調整後、その約1/2に回転カキ目調整を加える。脚部外面には透しを穿つ前に回転カキ目調整を施す。 他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
〃-135	〃	〃 〃	11.0 8.3 受部径 12.9 たち上がり高 1.9 基部径 5.6	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する段をなす。 受部は短く、端部は丸い。 底部は丸味を有す。 脚は短く、ハの字形に開き、そのまま裾部に至る。端部は下方を向く凹面をなす。透しは六角形をなすものを四方に不均等に穿つ。外面に1条のヘラ状工具による線刻文が残る。	マキアゲ、ミズビキ成形。 坏、脚部はハリツケによる。 底部外面約4/5に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	〃
〃-136	〃	〃 甕	22.2 7.0 — —	口頸部は外反してたち上がり、端部を拡張し、外傾する凹面をなす。外面には2条の断面三角形の凸帯を巡らし、凸帯を境に3条(10・15・10本)の波状文を施す。肩部は口頸部から屈曲し、斜め下方外に下る。胴部の大半は欠損する。	マキアゲ、ミズビキ成形。 残部は回転ナデ調整。	
〃-137	〃	〃 〃	— (45.8) 50.0 —	口頸部は欠損する。 脚部はやや張り、脚部最大径は胴部上位1/3にある。底部は丸味を有す。	外面にはタテ方向の平行のタタキ目、内面には同心円文のタタキ目が残存。	
〃-138	〃	〃 〃	21.3 (31.3) 33.0 —	口頸部は外反してたち上がり、端部を拡張し、外傾する凹面をなす。口頸部は緩やかに下り、胴部最大径は胴部中位よりやや上にある。底部はやや尖り気味である。	胴部外面には格子目のタタキ目、内面には同心円文のタタキ目が残存。 口頸部内外面は回転ナデ調整。	
16-139	〃	〃 〃	23.6 46.4 42.0 —	口頸部は外反してたち上がり、端部を拡張し、やや内傾する凹面をなす。 肩部はやや張り気味で下り、胴部最大径は胴部上位1/3にある。底部は丸い。	胴部外面にはタテ方向の平行のタタキ目、内面には同心円文のタタキ目が残存。口頸部内外面は回転ナデ調整。	焼成不良で摩耗が著しい。

挿入番号	遺構番号・層位	器種	口径 器高 胴径 底径 法尺 (cm)	形態・文様	手法	備考
16-140	SF 9	須忠器 坏(蓋)	口径 11.6 器高 3.4 胴径 11.2 底径 11.2 口径部高 1.8	口縁部は斜め下外方へ下り、端部は内傾する平面をなす。稜は鈍いか断面三角形をなす。天井部は低く、やや丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面約4/5に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は左方向。
〃-141	3区VI層	〃 〃	口径 11.4 器高 3.4 胴径 10.8 底径 10.8 口径部高 2.0	口縁部は斜め下外方へ下り、端部は内傾する浅い凹面をなす。稜は鈍いか断面三角形をなす。天井部は低く、やや丸味を有す。外面には窯体が付着。	〃	ロクロ回転方向は右方向。
〃-142	表探	須忠器 坏(蓋)	口径 12.0 器高 4.3 胴径 11.9 底径 12.0 口径部高 2.0	口縁部はやや開き気味に下り、端部は内傾する凹面をなす。稜は段状をなす。天井部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面約4/5に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は左方向。
〃-143	〃	〃 〃	口径 14.5 器高 4.3 胴径 13.4 底径 13.4 口径部高 2.3	口縁部はハの字形に開き、端部は内傾する凹面をなす。稜は段状をなす。天井部は低く、丸い。	〃	〃
〃-144	4区VII層	〃 坏(身)	口径 9.6 器高 5.1 胴径 12.0 底径 12.0 口径部高 1.7	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する凹面をなす。受部は斜め上外方を向き、端部は鋭い。底部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	〃
〃-145	表探	〃 〃	口径 9.7 器高 4.6 胴径 11.3 底径 11.3 口径部高 1.8	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する段状をなす。受部は大きく、斜め上方を向き、端部は丸い。底部は丸く、歪みがある。底部外面にはヘラ記号あり。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約4/5に回転ヘラ削り調整。底部内面の一部にナデ調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
〃-146	3区VI層	〃 〃	口径 11.0 器高 4.5 胴径 13.2 底径 13.2 口径部高 1.5	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する凹面をなす。受部は短く、斜め上方を向き、端部は鋭い。底部は平らである。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整後、回転カキ目調整を加える。他は回転ナデ調整。	〃
〃-147	表探	〃 〃	口径 11.2 器高 (4.4) 胴径 12.8 底径 12.8 口径部高 1.6	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する凹面をなす。受部は斜め下外方を向き、端部は丸味を有す。底部は平らである。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約1/2に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は左方向。
〃-148	3区VI層	〃 〃	口径 11.6 器高 (5.0) 胴径 13.4 底径 13.4 口径部高 2.0	たち上がりは内傾してのび、端部は外傾する凹面をなす。受部は大きく、水平にのび、端部は鋭い。底部は丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約2/3に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
〃-149	表探	〃 〃	口径 12.6 器高 (3.7) 胴径 15.4 底径 15.4 口径部高 1.5	たち上がりは内傾してのび、端部は丸い。内側に浅い凹面を巡らし、一見、外傾する浅い凹面を造り出すが加くみせる。受部は斜め上外方へのび、端部は丸い。底部の大半が欠損するが、ほぼ平らとみられる。	〃	ロクロ回転方向は左方向。
〃-150	〃	〃 〃	口径 12.0 器高 4.8 胴径 14.2 底径 14.2 口径部高 1.0	たち上がりは内傾してのび、端部を細く仕上げず。受部は上外方を向き、端部は丸い。底部は比較的深く、丸い。	〃	ロクロ回転方向は右方向。
〃-151	〃	〃 〃	口径 9.8 器高 3.6 胴径 12.6 底径 12.6 口径部高 0.6	たち上がりは内傾してのび、端部を細く仕上げず。受部は上外方を向き、端部は丸い。底部はほぼ平らである。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面はヘラ起して、一部に回転ヘラ削り調整を施す。	〃
〃-152	〃	〃 〃	口径 10.8 器高 3.9 胴径 13.6 底径 13.6 口径部高 0.9	たち上がりは内傾してのび、端部は鋭い。受部はほぼ水平にのび、端部は鋭い。底部はやや丸味を有す。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約1/2に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	〃
〃-153	〃	〃 〃	口径 12.3 器高 3.5 胴径 14.8 底径 14.8 口径部高 0.7	たち上がりは内傾してのび、端部は丸い。受部は斜め上方を向き、端部は鋭い。底部は丸味を有す。	〃	〃

種別番号	層位	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
16-154	表探	須恵器 罎(身)	12.4 4.2 15.1 0.9	たち上がりは内傾してのび、端部を細く仕上げる。受部は斜め上方を向き、端部は鋭い。底部は丸いゆびみがある。	マキアゲ、ミズビキ成形。底部外面約1/2に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は右方向。
ク-155	4区Ⅲ層	有蓋高罎(蓋)	12.3 5.7 12.5 2.2 3.1	口縁部は真下に下り、端部は内傾する段状をなす。椀は断面三角形をなす。天井部は比較的高く、丸味を有す。天井部外面はほぼ中央に宝珠形のつまみが付く。	マキアゲ、ミズビキ成形。天井部外面約4/5に回転ヘラ削り調整。他は回転ナデ調整。	ロクロ回転方向は左方向。
ク-156	表探	無蓋高罎	15.8 (4.8) — —	口縁部はやや内湾して上がる体部から上外方へはほぼ真直く上がり、端部を丸く仕上げる。体部外面には2条の断面三角形の凸帯が巡り、その下方に1条(4本)の波状文を施す。底部と脚部は欠失する。	マキアゲ、ミズビキ成形。残存部は回転ナデ調整。	外面は自然釉の剥落が著しい。
ク-157	4区Ⅲ層	大型罎	11.6 16.5 6.7 16.7	口頸部は外湾気味に上がった後、口縁部で角度を変え上外方に真直くのび、端部を細く仕上げる。口縁部と頸部外面の境に1条の小さな凸帯を巡らし、その下方に1条(12本)の波状文を施す。肩部はやや張り、体部最大径は体部上位1/3にある。体部は緩やかに内湾して下り、丸い底部に至る。肩部外面下端に2条の門線に挟まれた1条(6本)の波状文を施し、波状文下半分から径1.2cmの円孔を斜めに穿つ。	マキアゲ、ミズビキ成形。口頸部と体部はハリツケによる。底部内外面はナデ調整。他は回転ナデ調整。	下腹部に窯体の付着がみられる。

祭祀遺物・土師器類・石器類

SF 10 (第 17, 18 図 1~103)

滑石製白玉 (1~72)

全て滑石製である。本祭祀跡よりは 154 点出土している。径 5 mm, 厚 3 mm, 孔径 2 mm 程度の大きさを基本とする。

土製模造鏡 (73~77)

全て鈕を有するもので、部分的に破損しているものも孔を穿っているものと考えられる。73, 74 は径 4.1 cm, 4.7 cm で I A 類に含まれ, 75~77 は径 5 cm 以上の I B 類に含まれる。

手捏ね土器 (78~95)

78~86 の 9 点は丸底で I 類に含まれるものである。78 は器高 2.6 cm の小型品, 79~85 の器高は 3 cm から 4 cm の中型品, 86 の器高は 4.5 cm でやや大型の分類に含まれる。87~92 の 6 点は底部が平底気味で体部にやや丸味を持ち I 類に比べ更に大きなものである。88~91 は器高 5.0 cm から 5.4 cm 内の大きさ, 92 は 6.3 cm と大型品である。93 は VI C 類に含まれ, 平底で器高 7.5 cm を測る。94, 95 は脚付のもので脚は「ハ」字状に短かく開き, 体部は短く内湾気味に立ち上がる。共に IX A 類に含まれる。

土師器碗 (96, 97)

96, 97 は共に丸底で体部は丸味を持ち, 口縁はやや内湾気味である。口径は 12.0 cm, 12.5 cm をそれぞれ測り, II A 1 類に含まれる。

土師器脚付碗 (98)

脚付碗は 98 の 1 点のみである。碗部, 口縁は欠損する。脚部は短かく「ハ」字状に開き, A 類に含まれよう。

土師器甕 (99~101)

99, 100 は II 類に含まれ, 胴部がやや張る。頸部もややくびれ, 口縁は緩やかに外傾するものである。101 は III 類に含まれる胴張り甕である。口縁は短く外反する。

石器 (102, 103)

102 は叩き石で楕円形の自然礫を利用し, 表裏面共に中心部に僅かに敲打痕がみられ, 下部先端部にも僅かに敲打痕が認められる。砂岩製である。103 は板状礫で鋤型を呈する。全長 18.1 cm を測り, 表裏面共に僅かに擦痕が認められる。

SF 11 (第 19~21 図 1~121)

滑石製白玉 (1~37)

径 5 mm, 厚 1~5 mm, 孔径 2 mm 程を測る。算盤玉状を呈するものもみられる。

土製勾玉 (38~41)

38, 39 は長さ 4.6 cm, 5.4 cm を各々測り, 頭部分に小孔を穿つ。40 は土製勾玉としては最大になるものと思われるが半欠損品である。41 は長さ 5.1 cm で細長いものである。

土製模造鏡 (42~56)

42~53 までは鈕に孔を有するもので, 42~47 はⅠA類に含まれ, 径 4 cm 前後のもので, 46 は方形に近い形状を呈する。48~53 は径 5 cm 以上を測るⅠB類である。54~56 は鈕を有するものの孔を穿たないもので, 54 がⅡA類, 55, 56 がⅡB類に含まれる。

不明土製品 (57~59)

3 点共に棒状を呈する。57 は完形品で先端部がすぼまり, 後尾がやや曲る。58 は把手状のもので先端部が曲がる。59 は勾玉の尾のように曲る。

土製玉 (60~64)

60~63 は径 2 cm 強, 孔径 4 mm, 重さ 10 g 前後を量る。64 はやや小型でいびつな形を呈する。

手捏ね土器 (65~102)

65~67 はⅠA類に含まれ, 小型で丸底のものである。68~78 は丸底でⅠA類に比べやや大きいものである。このタイプは 11 点と一番多い。79~85 はⅠC類に含まれ, ⅠB類よりも更に大型品である。7 点とⅠB類に次いで多いタイプである。86 は口径 8.6 cm と更に一回り大きいものである。87~93 はⅡ類に含まれ, 底部はやや平底気味のものであり, 大きさにより 87 はⅢA類, 88, 89, 93 はⅡB類, 90~92 はⅡC類に含まれる。94 は平底気味で体部が直線的に伸びる。95 は平底で体部が開く。96 も平底で体部が直線的に外反し坏型を呈する。97, 98 は丸底で体部が丸味を持ち口縁端のくびれるⅦ類に含まれ, 99 は口縁端部が更に強くくびれ壺型を呈する。100~102 は脚付碗型のもので, 102 は碗部のみである。

土師器碗 (103~107)

103~105 は丸底の碗で 103 は他の 2 点に比べ深い。106 は平底で箱型を呈する。107 は口径 17.7 cm を測る大型品で底部は平底である。

土師器脚付碗 (108)

108 は脚部と碗底部が残存する。脚部は短く「ハ」字状に開く。手捏ね土器 100 と同様にⅨB類の手捏ね土器に含まれる可能性がある。

土師器甕 (109~121)

109, 110 は長胴の分類に含まれ, 111~114 はやや胴の張るものである。111 は器高 18.8 cm と小型である。115, 116 は胴張りの分類に含まれる。117, 118, 120 はⅡ類に含まれるものと思われ, また 119 はⅢ類の可能性もある。121 は叩き目のみられる甕の破片と考えられる。

SF 12 (第 22 図 1~9)

滑石製白玉 (1)

本祭祀跡からは1点のみであった。

土製有溝円板 (2, 3)

2, 3は表裏面共に格子状に条を施す。本遺跡下流域の試掘調査の際に破片が1点出土しており、また幡多郡大方町早咲遺跡の古墳時代の包含層中より5点出土している。

土師器高坏 (4)

4は高坏の坏部で脚部は欠損する。坏部と脚部との接合は玉状の粘土塊のはめ込みによる。

土師器甕 (5~7)

5はやや胴の張るもので、6は胴張り甕である。共にナデ及び指頭による整形である。7は胴部上位は欠損する。丸底で胴部は余り丸味を持たない。

土師器甑 (8)

8は鉢型を呈する多孔式で円形の孔を3ヶ所穿つ。

石器 (9)

9は擦石である。中央部に打痕がみられ、側縁部に擦痕、打痕が認められる。

SF 13 (第 23~26 図 1~36)

手捏ね土器 (1)

1は平底の底部より体部は開き気味に立ち上がり、口縁部は直立気味に立ち上がる。

土師器碗 (2~11)

2~4は底部が丸底で口径は14cm以下のやや小振りのもので、ⅡA1類に含まれる。5は口径9cmの小型で、口縁端部が外反りし、ⅡA3類である。6, 7はⅡB1類, ⅢB1類に含まれ、口径14.4cm, 15.0cmを各々測り、7の底部はやや尖り気味である。8も同様に底部が尖り気味で口径17.2cmと大型品である。9~11はやや平底気味の碗である。

土師器脚付碗 (12)

12は碗部分のみである。体部は丸味を持ち、口縁部は沈線状になる。

土師器高坏 (13~19)

13, 14はⅠC類で坏底部に段を有する。13は坏部と脚部との接合は玉状の粘土塊による。脚部裾はやや立ち上がる。15~19は脚部を欠損する。15はⅠ類であるものの、13, 14に比べ坏底部は明瞭な段とはならない。16~18も更に段は不明瞭となる。19は坏外面が段の部分が沈線状となる。

土師器甕 (20~32)

20~22がⅠ類, 23~28はⅡ類, 29~32はⅢ類に分類できる。20は器高21.8cmとやや小型で、22もやや小型のものと思われる。20~22は共に頸部がくびれず、口縁が緩やかに立ち上がり、胴部は余り張りのないものである。23~28のⅡ類に含まれるものは、頸部がくびれ口縁は外傾し、胴部は張りを持つ。その中でも23は胴部の張りが強い。26はやや小型のもので

ある。Ⅲ類の胴張り甕に含まれる29～32は種々の形態がみられ、29は小型甕で頸部がくびれず、口縁が短く緩やかに外傾するものである。30は器高25.9cmでやや大型の分類に含まれ、頸部がくびれ口縁は強く外反するものであり、胴部も強く張る。31は頸部はくびれず、口縁は緩やかに立ち上がる。32は頸部がややくびれ、口縁は緩やかに外傾する。

土師器甕 (33～35)

33は鉢型の単孔式で、34は甕型を呈するものと思われ、35は胴部が強く丸味を持ち、共に単孔式の甕である。

石器 (36)

36は叩き石で表裏面共に中央部に敲打痕がみられ、また側縁には敲打痕及び擦痕がみられる。

SF 14 (第27図1～8)

滑石製白玉 (1)

1点のみでやや平らなものである。

土師器碗 (2)

2は丸底で体部は外傾気味に開き、Ⅴ類に分類される。

土師器高坏 (3～5)

3はⅢ類の坏部、4、5は脚部で各々裾部が立ち上がるA、B類である。

土師器甕 (6～8)

6、7はⅡ類でやや胴部の張るものでナデ、指頭整形、8はⅢA2類に相当する。

SF 15 (第28～36図1～86)

石製勾玉 (1)

全長5.5cmを測り、頭部には孔が穿たれ、全体が丁寧に研磨されている。石質は葉老石か碧玉製と考えられる。

土製模造鏡 (2, 3)

2は径4.6cmを測り、鈕部分に孔を穿つ。3はスタンプ状を呈し、柱状の鈕には小孔を有し、鏡面部分は膨みを持つ。

手握ね土器 (4～9)

4、5は小型のもので底部が丸底で体部は直線的に開き、共にⅠB類に含まれる。6は口径8.5cmを測る大型で丸底のものである。7、8は平底で体部が外傾して立ち上がり、口径7.8cm、7.6cmを各々測り、やや大型でⅥA類に含まれる。9は壺型を呈し、体部上位がくびれるⅧD類に含まれる。

土師器碗 (10～20)

10～12はⅡA1類に含まれるが、12は浅めの碗である。13は丸底で口縁がやや内湾気味の

ものである。14は口縁端部が外反する。15～18はⅡB1類に含まれ口径に比して、器高がやや低いものである。その中で18は深い碗で、鉢に近く、他の分類に含まれるかもしれない。19は皿状を呈し、V類に含まれる。20は丸底で体部も強く丸味を持ち、外面にはハケ目がみられ、本SFの分類外とした。本SFに伴うかどうかは不明であり、時期的にもやや古いものと考えられる。

土師器鉢 (21～25)

21のみ本SFに伴うもので、他の22～25の4点は弥生時代後期から古墳時代初頭に属するものと思われる。21は口径19.2cmを測る大型品である。22～25は外面に叩きがみられ、またハケ目もみられる。24は弥生時代後期後半に属すると考えられ、底部は小さな平底である。

土師器脚付碗 (26～28)

26～28の3点共にⅠ類に含まれる。共に脚部は欠損する。碗部は丸味を持ち、口縁は内湾する。

土師器高坏 (29～35)

29～32は坏部、33～35は脚部である。29は坏底部で段を有しⅠ類に含まれる。30、31は段がやや残るⅡ類である。32は段を有せず丸味を持つⅢ類である。33～35の脚部裾は各々違った形態のものである。33は立ち上がり、34はやや立ち上がる。35はベタ状のものである。

土師器壺 (36～39)

36はやや甕型に近い形態のもので器高11.4cmの小型のものである。37は口縁は欠損するものの、長頸になる可能性があり、体部は強く丸味を持ち外面には赤彩を施す。38は短頸で胴部は強く張り、底部はやや尖り気味である。ハケ目整形がみられる。39は複合口縁壺である。器高41.4cmを測る大型品である。36を除き、他は本SFに伴わないと思われ、古墳時代初頭から5C代の所産のものと考えられる。

土師器甕 (40～82)

82の甕は弥生時代後期後半に属するものと思われ、本SFには伴わないものと考えられる。他のものは本SFに伴い、種々の形態が認められる。40～46はⅠ類に含まれ、長胴のものであり頸部が僅かにくびれ、口縁が外傾するものを基本とする。47～66の20点はⅡ類で、本SF出土甕の半数近くを占める。底部は丸底で胴部はやや丸味を持ち、頸部はややくびれ、口縁は緩やかに外傾するものである。しかし、70、71は他のものに比べ頸部のくびれは弱い。72～77は頸部のくびれはやや弱く、口縁が開くものでⅢB2類に含まれる。78はⅣ類に含まれ、胴部中位が強く張り、他は余り丸味を持たず、頸部は短く外傾する。79～81はⅡ類に含まれるものと思われるが上部のみしか残存していない為、細分は判然としない。

土師器甗 (83)

83は鉢型を呈する多孔式のものである。3孔みられるものの、内1孔は途中までしか穿孔されていない。

石器 (84~86)

84, 85 は叩き石である。84 は表裏面共中央部に敲打痕が認められ、側縁全周に敲打痕がみられる。86 は台石である。全長 20.5 cm を測る大型のもので扁平な自然礫で、敲打痕等は余り顕著でない。

SF 16 (第 37 図 1~9)

手捏ね土器 (1)

祭祀遺物は 1 の手捏ね土器 1 点のみであった。平底の底部より体部は外反気味に大きく開き、坏型を呈するものでⅦ類に含まれる。

土師器碗 (2)

2 は丸底の底部より体部が丸味を持って立ち上がるもので、口径 14.8 cm, 器高 6.5 cm を測り、Ⅱ B 1 類に含まれる。

土師器脚付碗 (3)

3 は輪高台状の短かい脚が付き、碗部は全体的に丸味を持つものである。

土師器高坏 (4, 5)

4 は坏底部に段を有するものでⅠ類, 5 は僅かに坏底部に段を有するものでⅡ類に含まれ、共に脚部は欠損し、坏部と脚部との接合は玉状粘土塊による。

土師器甕 (6~8)

6 は胴部がやや張るもので頸部はややくびれ、口縁は緩やかに外傾する。7 は胴部に張りを持ち、頸部はくびれ、口縁が内湾気味に立ち上がる壺状のものである。8 は口縁が欠損する。

土師器甑 (9)

9 は鉢型を呈し、単孔式のもので底部は尖り、体部が開く。

SF 17 (第 38~41 図 1~87)

滑石製臼玉 (1~4)

径 5 mm, 厚 3~4 mm, 孔径 2 mm 程のもので、全て滑石製である。

土製勾玉 (5~10)

10 は全長 7.2 cm の大型のもので、他は全長 4~5 cm のものである。9 は背部が剥落している。

棒状土製品 (11)

11 は残存長 6.0 cm, 径約 2.0 cm を測る棒状のもので、両端は共に欠損するものの、一端部は潰したようにやや平らになる。

土製模造鏡 (12~14)

12~14 は全て鈕に孔を有するもので、12 は径 4.8 cm, 13 は 4.5 cm, 14 はやや大型で 5.6 cm を測り、共にほぼ円形を呈する。

土製玉 (15～21)

15～21 は径約 2 cm 前後、孔径 2～5 mm を測る丸玉である。

土製錘 (22)

22 は全長 4.2 cm、孔径 0.2 cm を測り、重さ 10.5 g を量る。

手捏ね土器 (23～50)

23 は小型のもので口径 2.4 cm、器高 2.1 cm を測り、丸底のものでⅠ A 類に含まれる。24～28 はⅠ B 類に含まれる一群で、28 はその中でもやや大きなもので口径 4.2 cm、器高 4.7 cm を測るものである。全て丸底で体部は丸味を持ち、口縁は直立気味に立ち上がる。30 はⅠ C 類に含まれ、口径 5.2 cm を測り、やや大型のものである。31 はⅢ B 類に含まれ平底気味で体部はやや丸味を持ち、口縁端部がやや内湾気味である。33～39 は器形にややバラエティーがあるものの、平底気味のもを基本とし、Ⅲ B 類に分類した。全体的に器高が高く、4～5 cm 程を測る。40、41 はⅢ C 類に含まれ、更に器高が高く、5.2 cm、5.6 cm を各々測る。29、32、42 はⅣ A 類に含まれ、底部は平底で体部が丸味を持たず箱型に近い形状を呈し、口縁端部が僅かにくびれる。Ⅶ 類に含まれるものは 43～46 で、平底気味で器高がやや高く、丸味を持ち、口縁端部がくびれるものである。47、48 はⅣ 類に含まれ、全体的に丸味を持ちやや壺型に近いものである。49 はⅧ A 類に含まれ、頸部がくびれ口縁はやや長く立ち上がる。50 は甕型を呈し、体部が余り丸味を持たず、口縁は僅かにくびれた後、口縁端部がやや外反気味である。Ⅹ 類に含まれる。

土師器碗 (51～60)

60 を除いてすべてⅡ 類に含まれる。丸底より体部は丸味を持ち、口縁が直立気味のもの 51、52 でⅡ A 1 類、口縁端部が反る 53～56 はⅡ A 3 類、57～59 は口縁が直立し、Ⅱ A 1 類よりやや大振り度でⅡ B 1 類に含まれる一群である。60 は平底気味のものでⅣ B 2 類に含まれよう。

土師器脚付碗 (61～63)

61、62 は共に碗部が丸味を持ち、脚部が長く「ハ」字状に開くものでⅡ B 1 類、63 の碗部は直立気味に外傾するもので、脚部は短く「ハ」字状に開き、Ⅲ A 類に含まれよう。

土師器高坏 (64)

64 は脚部が欠損する。坏底部に強い段を有するものである。

土師器壺 (65～71)

65 は小型のもので体部が強く張る。口縁は部分的に残るのみだが、長頸の可能性もある。66～69 はⅠ 類に一括したものの、69 は口縁が直立し、他のものは外傾する。70、71 はⅠ 類に似るものの、Ⅰ 類程度体部に丸味を持たないものでⅡ 類に分類した。

土師器甕 (72～84)

Ⅰ 類に含まれるものは 72 のみで、73～80 はⅡ 類、81～84 はⅢ 類に含まれる。72 は小型甕の範疇に含まれ、体部は丸味を持たず、体部下位に最大径を有する。73～75 は体部が余り張

らず、口縁が緩やかに外傾しⅡB1類に含まれる。76、77は口縁がやや強く「く」字状に外傾しⅡB2類に含まれる。78は更に胴部が張り、口縁が緩やかに外傾しⅡC1類に含まれる。79、80は口縁が「く」字状に外傾しⅡC2類に含まれる。81～84は胴部が強く張り、丸甕の範疇に入るものである。84の口縁は欠損している。85は大甕で分類外とした。口径27.9cm、器高30.5cmを測り、頸部はくびれず、体部全体が直立気味である。

土師器甑 (86)

86は体部上位は欠損する。底部は平底で多孔式のものである。孔は7ヶ所穿れており、不整長方形の大きな孔である。

石器 (87)

87は叩き石である。楕円形のやや扁平な自然礫を利用し、表裏面中央部が敲打で凹む。側縁部は僅かに敲打痕がみられる。

SF 18 (第 42, 43 図 1～30)

土製錘 (1)

1は長さ3.9cm、径1.5cm、重さ7gを量り、筒状を呈し両端がすぼまり、径4mmの小孔が貫通する。

鉢 (2～11)

2は小型のもので底部はやや尖り気味である。外面には叩き目、内面には強いナデがみられる。3、6は内外面共にハケ、4、7～10は外面が叩き目、内面がハケ目整形を主とする。全体的に底部は丸底で体部が開くものである。その中で5のみは小さな平底気味の底部を有し、内面整形もナデのみである。11は大型のもので口径24cm、器高15.2cmを測り、体部は大きく開く。体部外面に粘土帯がみられ、その部分は叩き目、ナデ整形で下部はハケ目である。内面もハケ目整形である。

壺 (12～16)

12～16は口縁がラッパ状に大きく開くものである。肩部は張らず、頸部が強くくびれる。12はナデ整形、13は内面に細かいハケ、14は口縁端部を外に折り返し、口縁下に僅かにハケが認められる。15、16は共に頸部に斜格子状の刻みの貼付突帯を付す。肩部はやや張り、頸部がくびれ、頸部が外反気味に長く直立する。共に体部下位、底部及び口縁は欠損する。

甕 (17～24)

17は外面に叩き目がみられ、胴部は余り丸味を持たず、頸部はくびれ、口縁が「く」字状に外傾する。18は内外面共にハケで器形は17に似る。19も内外面共にハケで頸部は緩やかにくびれ、口縁端部をわずかに折り返す。20、21は外面が叩き目、内面がハケで、器形は17、18に似る。22は外面が叩き目、内面に僅かにハケがみられ、頸部はくびれ、口縁端部を19と同様に折り返し肥厚させる。23の口縁は短かく外傾する。外面は叩き目、内面は強い指ナデで

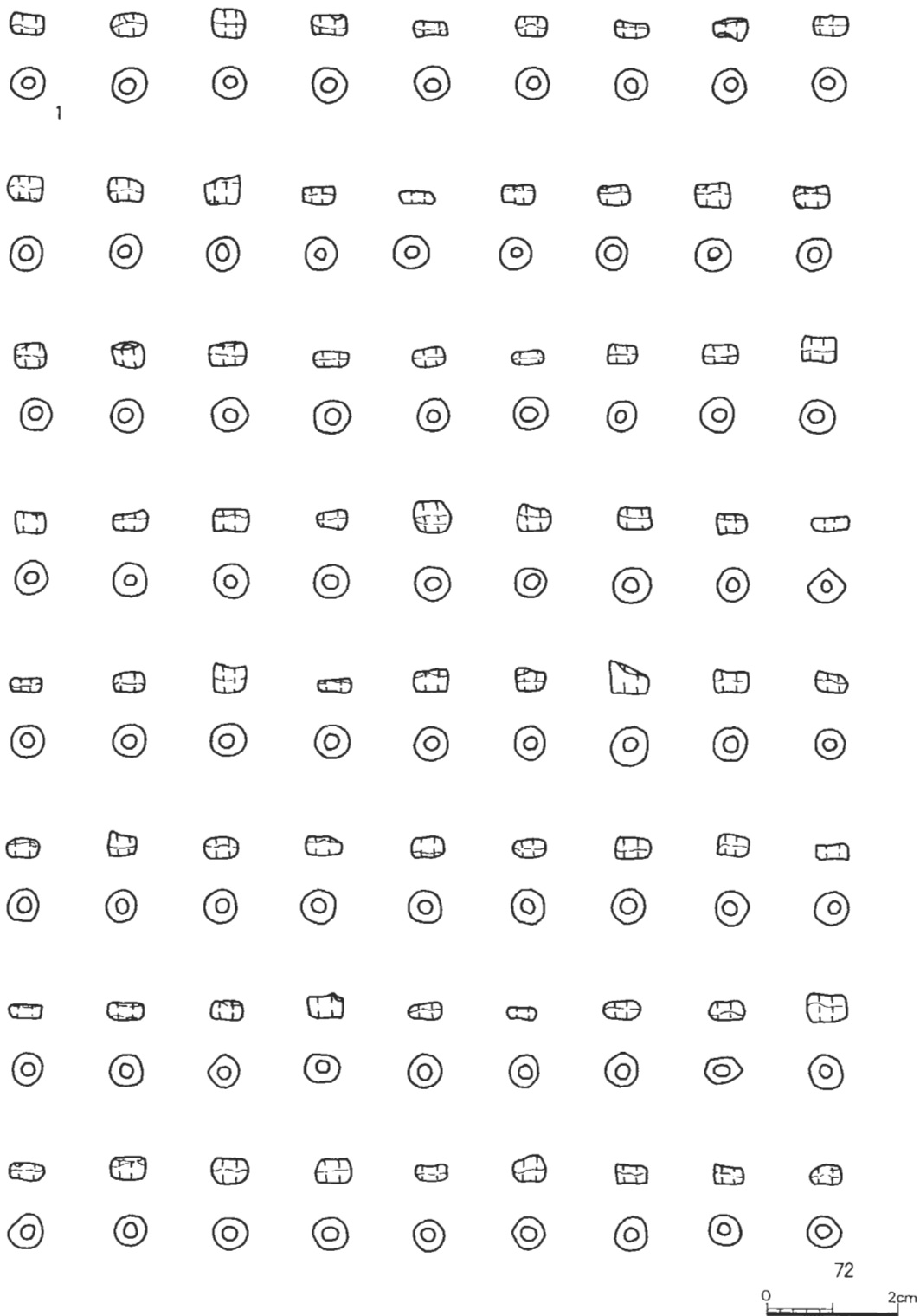
ある。24は内面に僅かにハケがみられるのみで、器形は胴部が他のものに比べやや強く張る。

底部 (25～29)

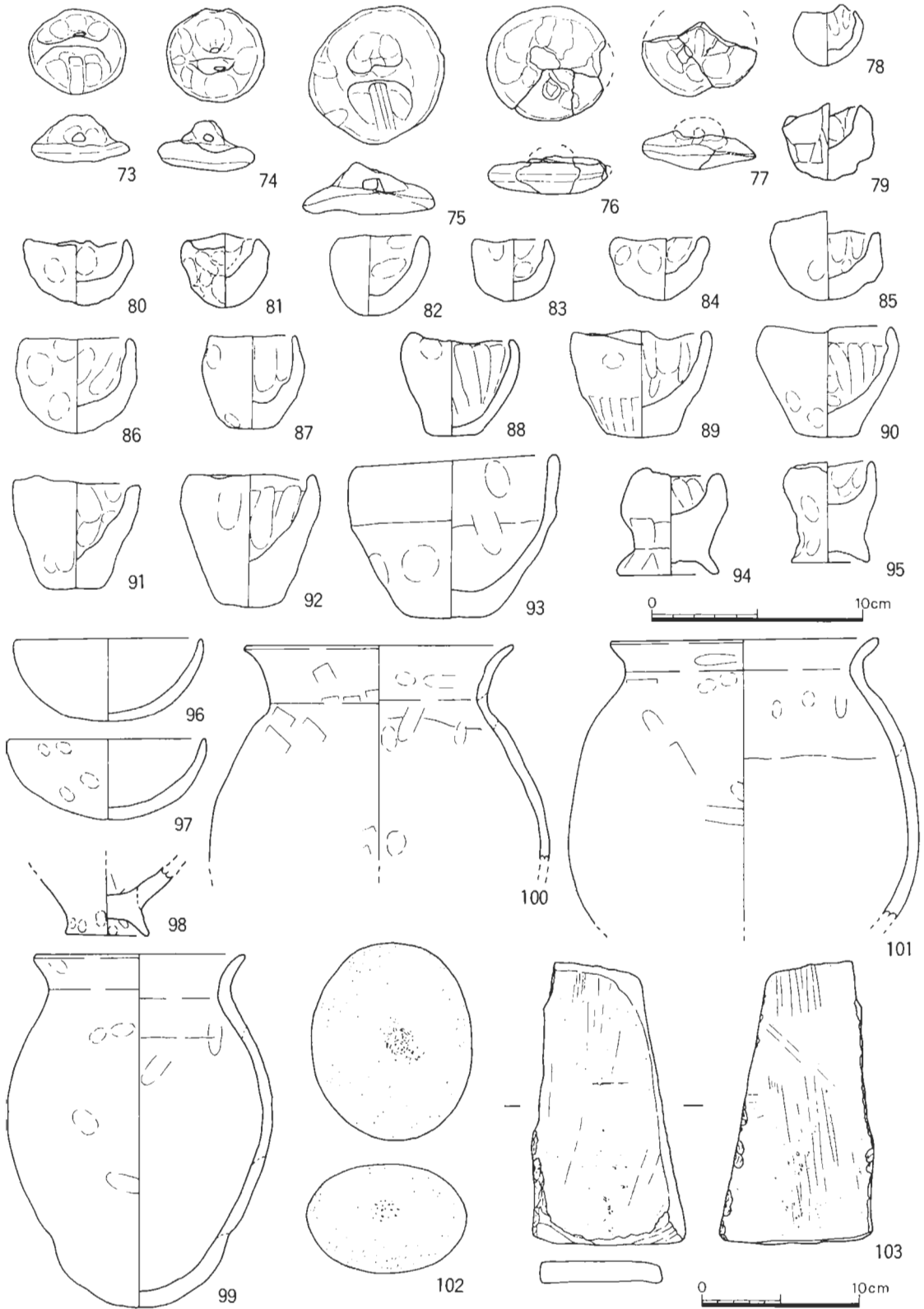
25, 26は壺と考えられ、25は丸底の大型の底部に輪高台状の粘土紐を貼付する。外面は叩き目である。26の小さな底部は平底で胴部以下もすぼまる。肩部が張り、頸部はすぼまる。口縁部は欠損する。外面は叩き目である。27は小さな平底の底部より胴部上位は丸味を持ち、頸部はくびれるものの、口縁は欠損する。外面が叩き目、内面は上位が粗いハケ、下位が細かいハケである。28は丸底で器形は下位がすぼまり、上位は緩やかに丸味を持つ。外面のみ叩き目である。29は小さな平底で外面は叩き目、内面はヘラケズリである。

甑 (30)

底部は欠損するものの甑になるものと考えられる。口径 27.0 cm と大きく開き、体部は直線的にすぼまり鉢型を呈する。外面は叩き目である。(前田)



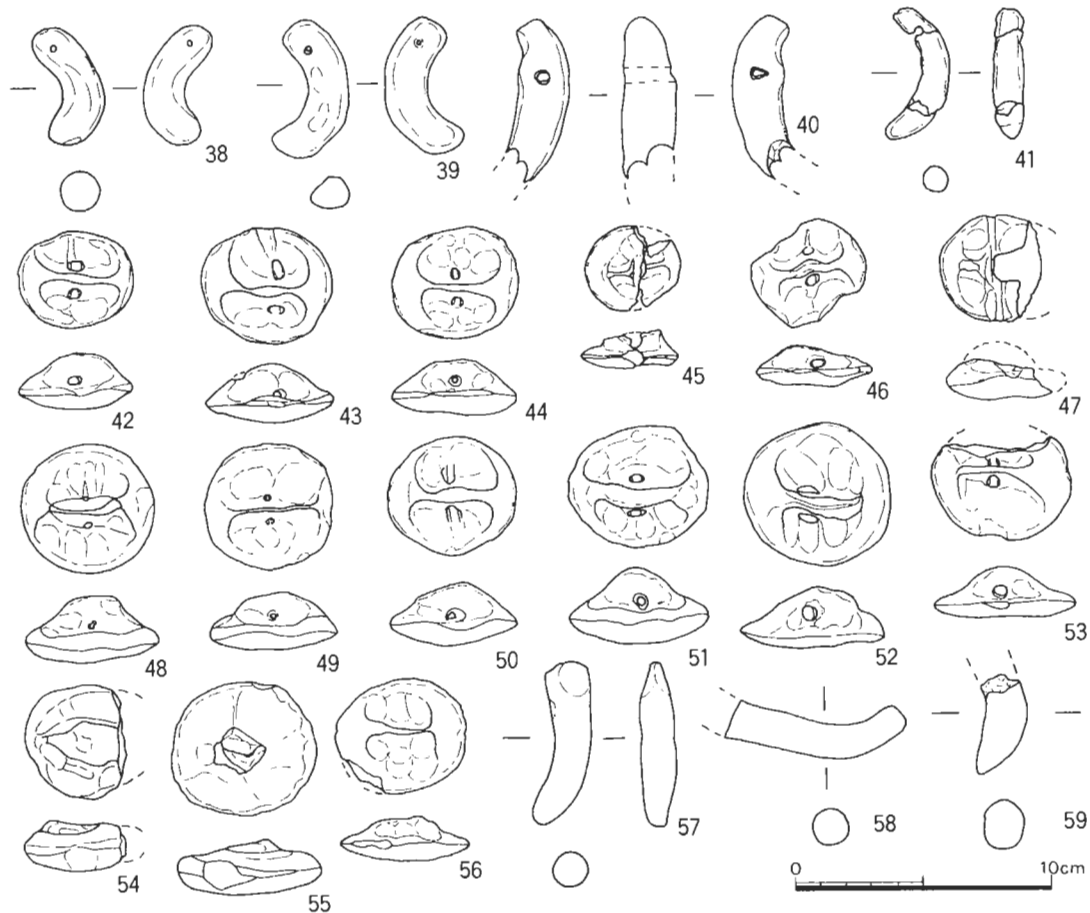
第 17 図 SF10 出土遺物(1)



第18図 SF10 出土遺物(2)

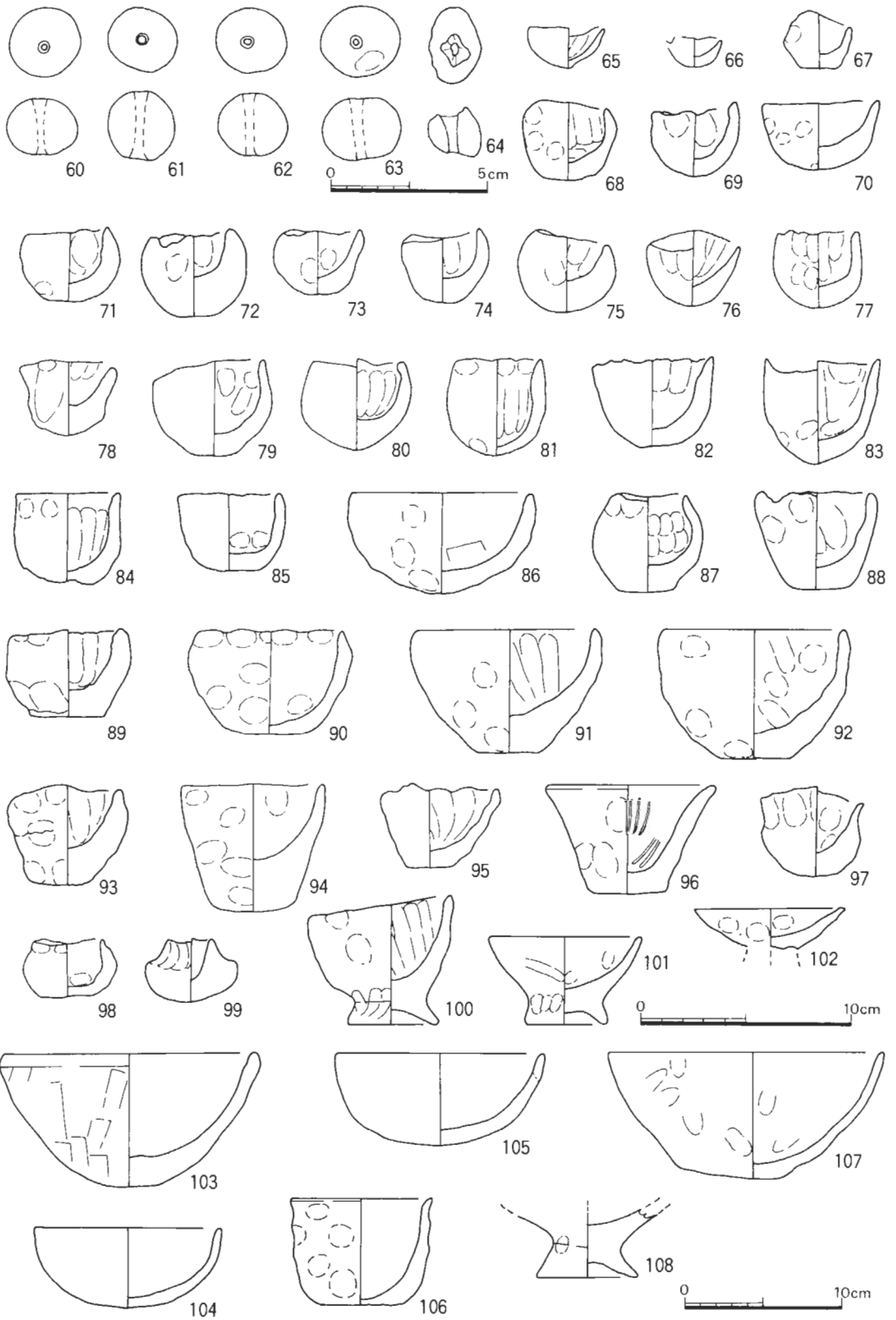


0 1cm

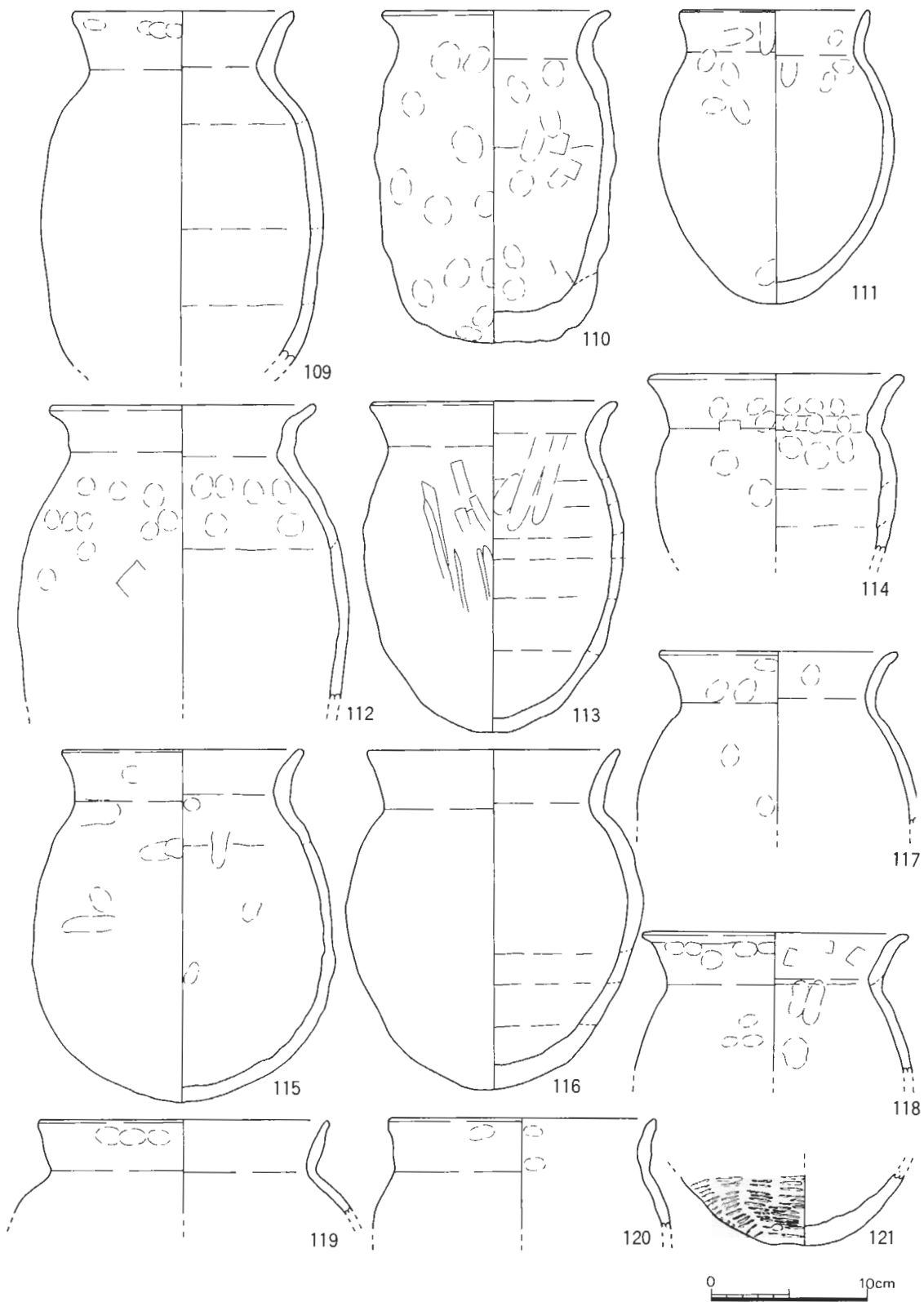


0 10cm

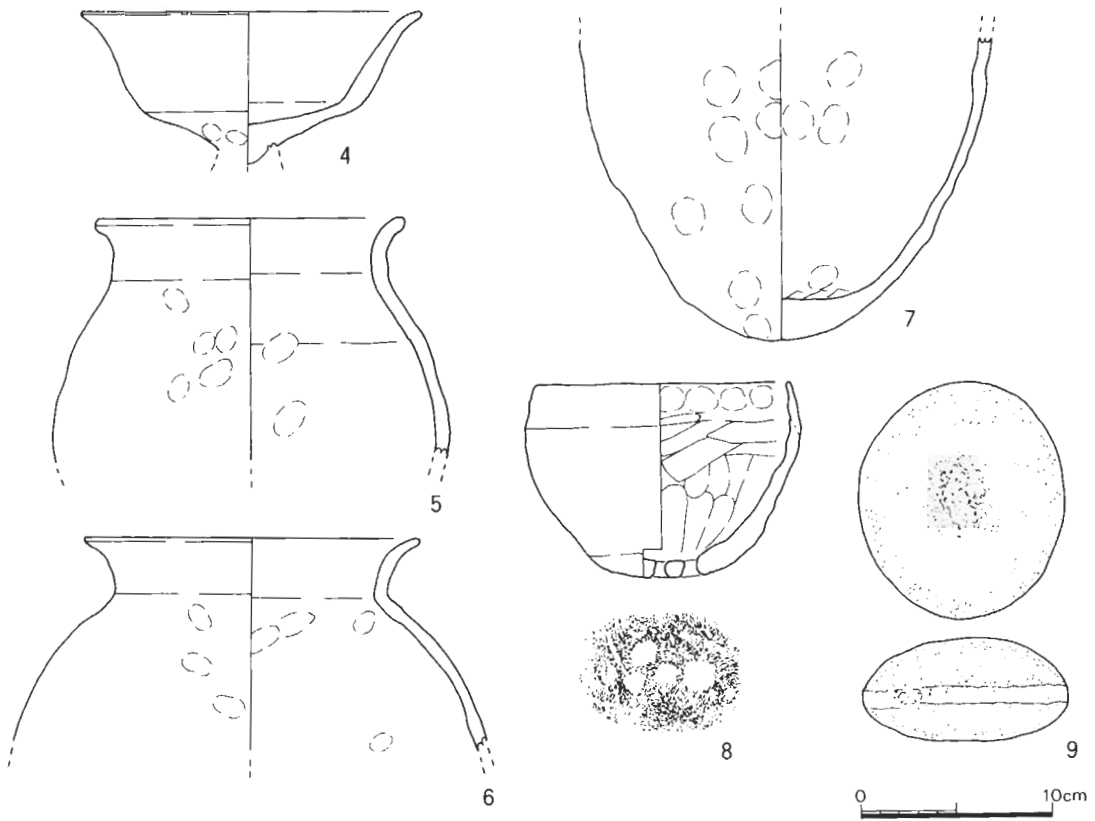
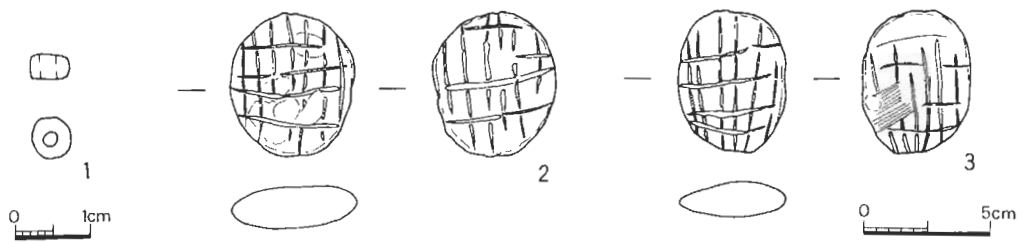
第19图 SF11 出土遺物(1)



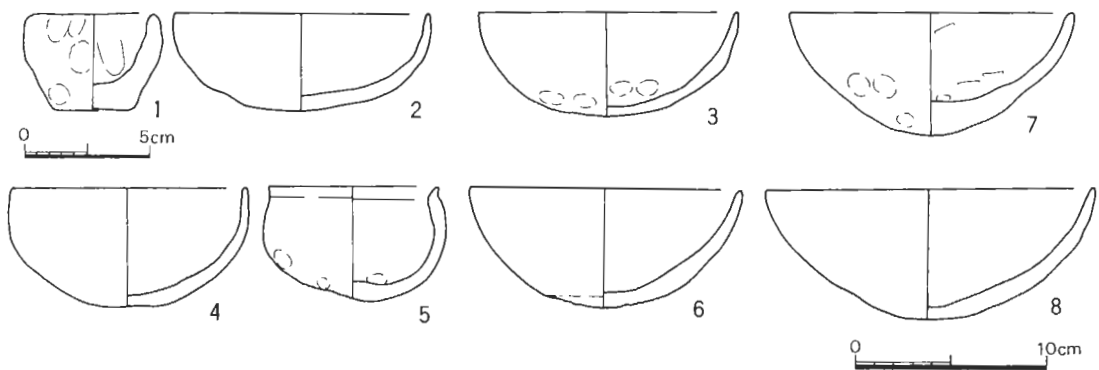
第20図 SF 11 出土遺物(2)



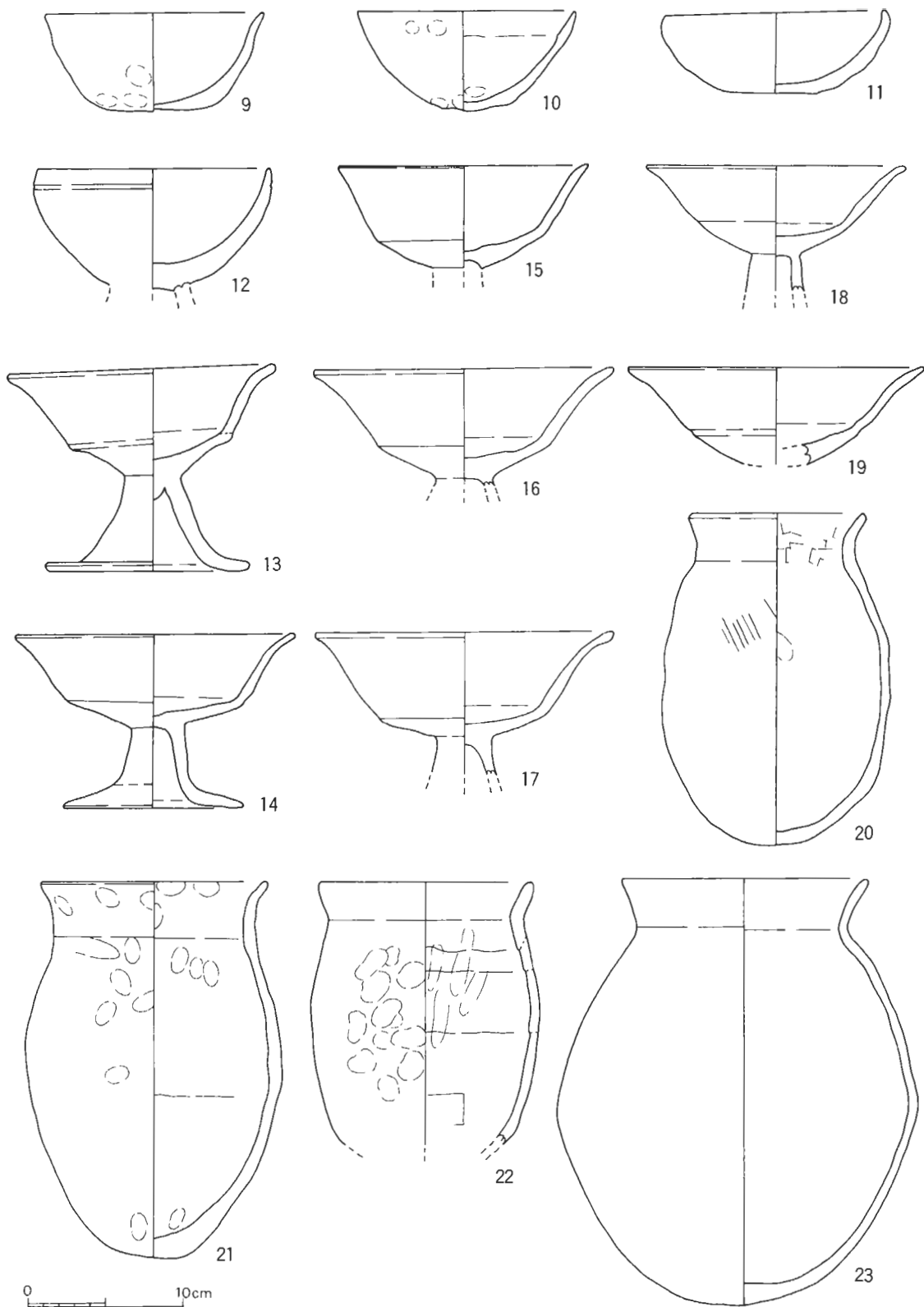
第 21 図 SF 11 出土遺物(3)



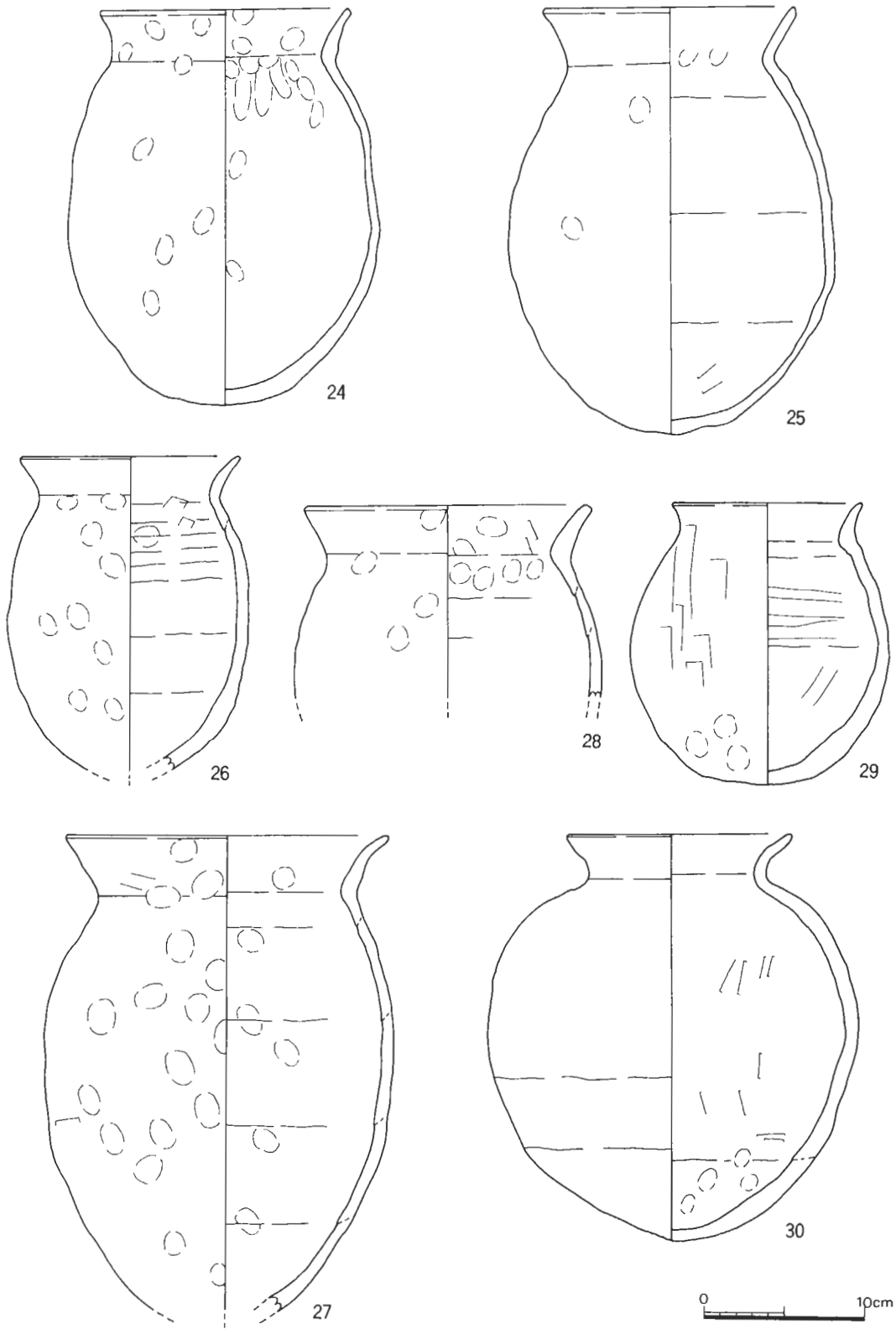
第22図 SF12 出土遺物



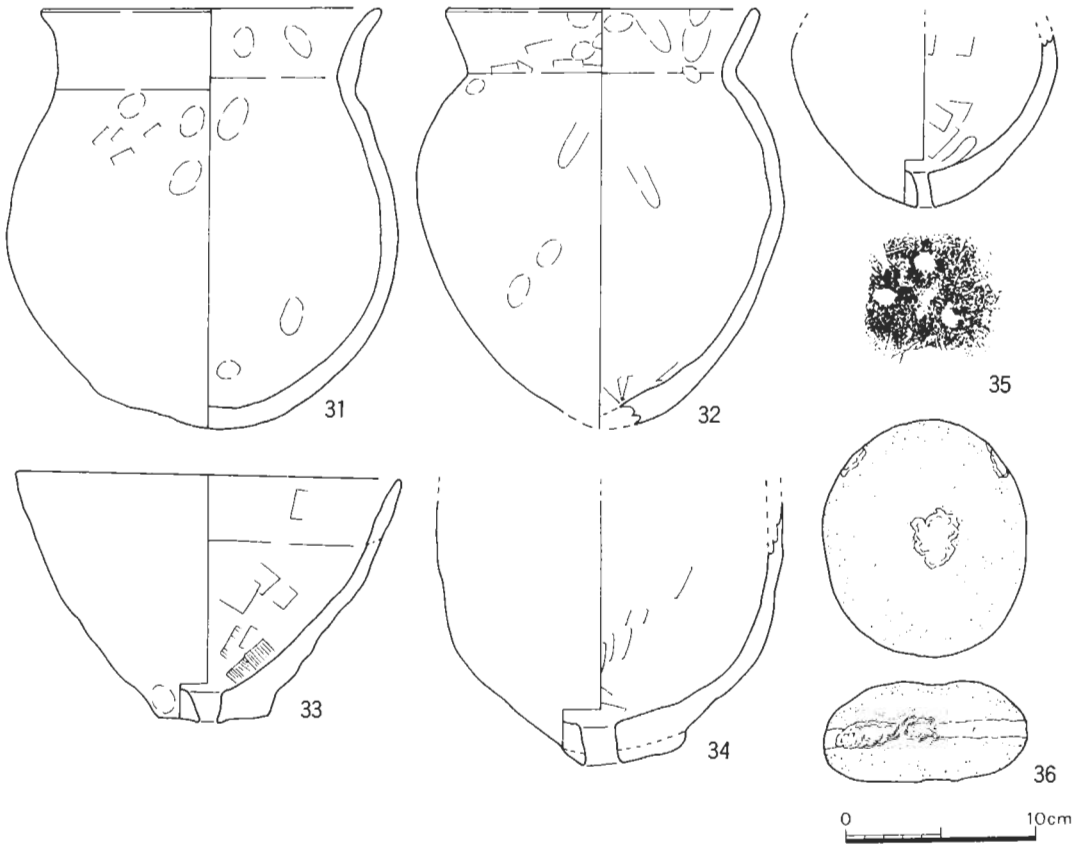
第23図 SF13 出土遺物(1)



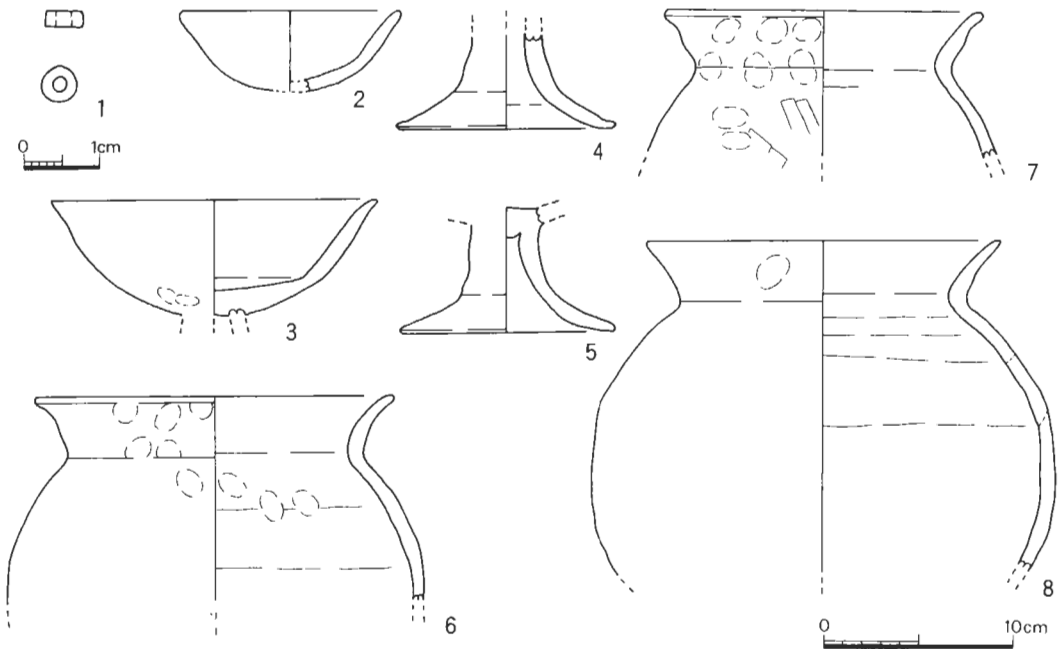
第 24 図 SF13 出土遺物(2)



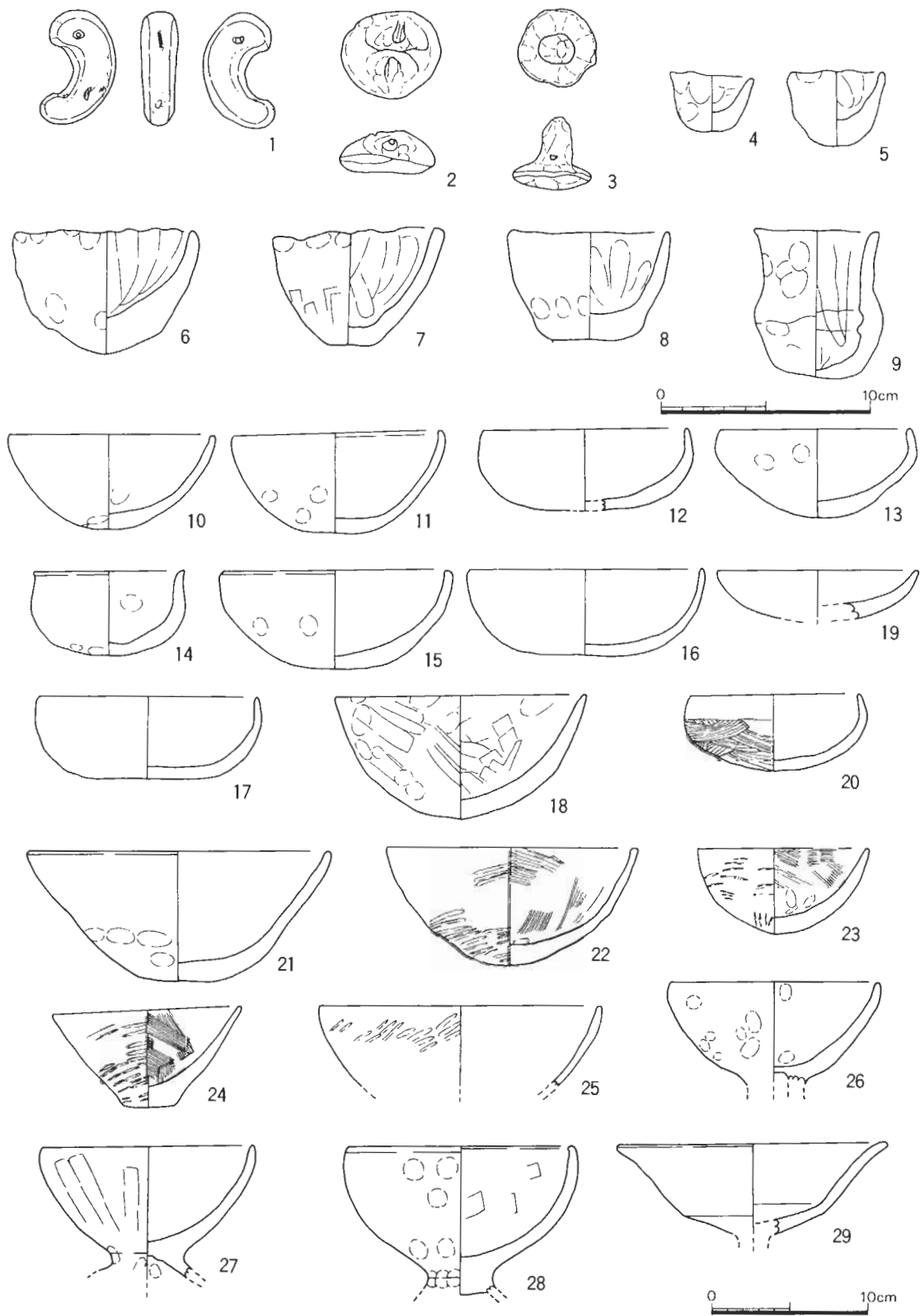
第 25 図 SF 13 出土遺物(3)



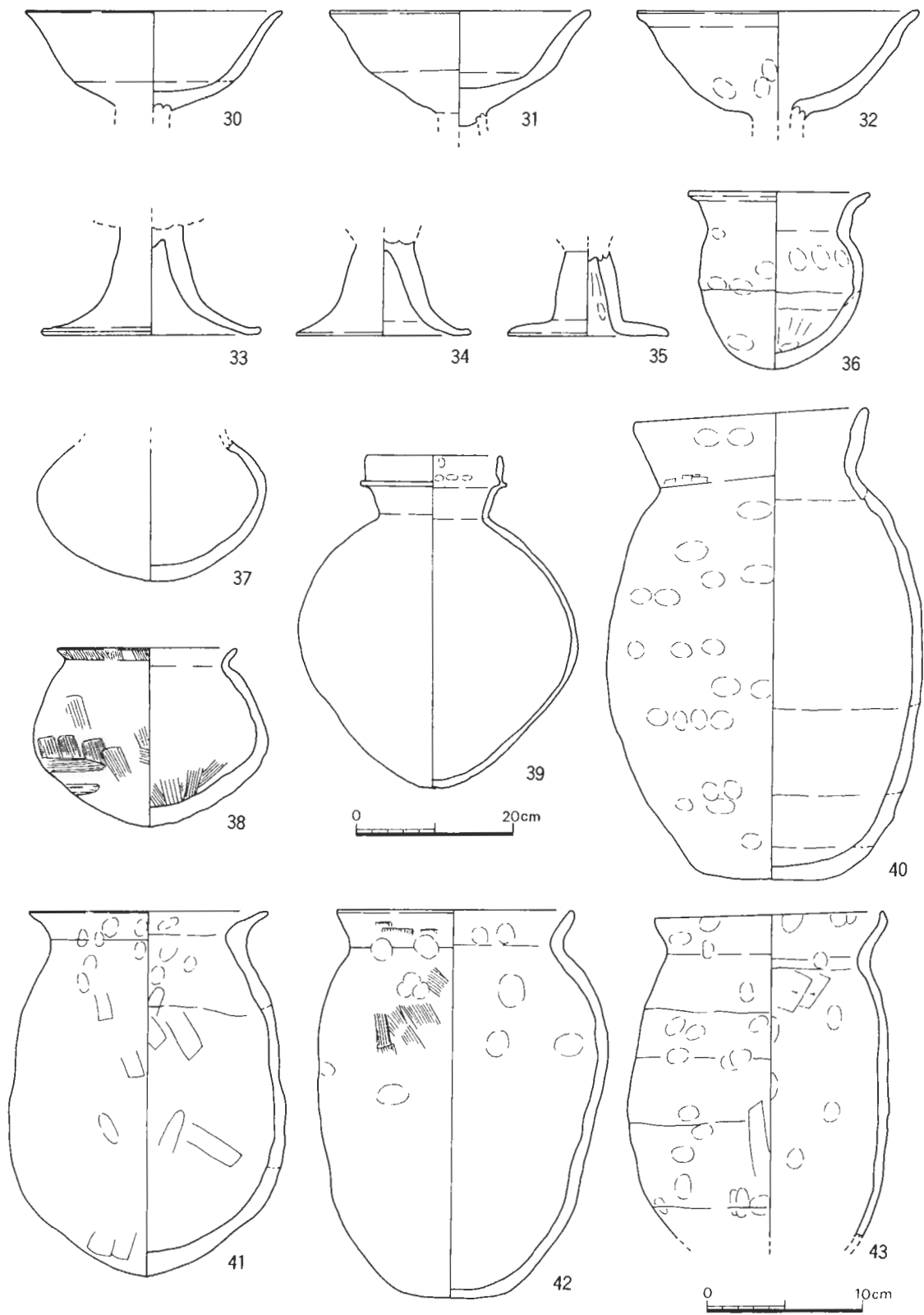
第 26 図 SF 13 出土遺物(4)



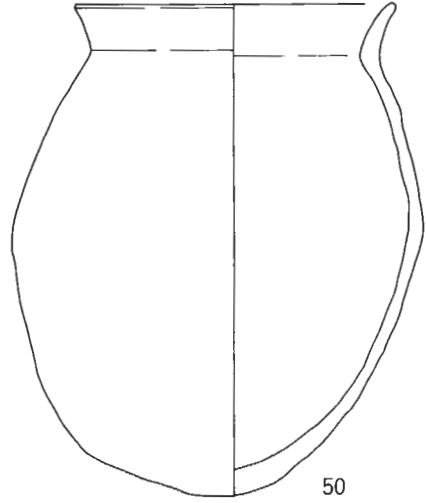
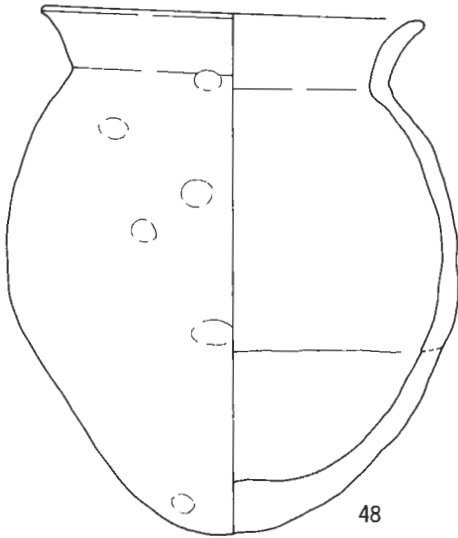
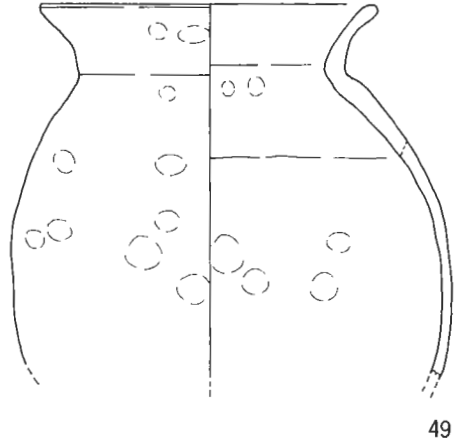
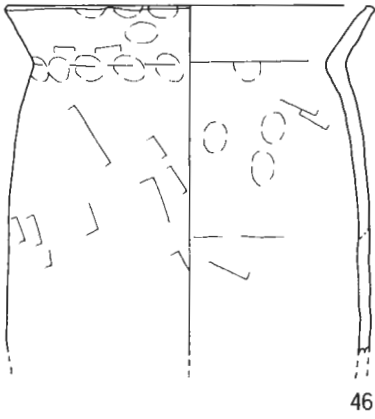
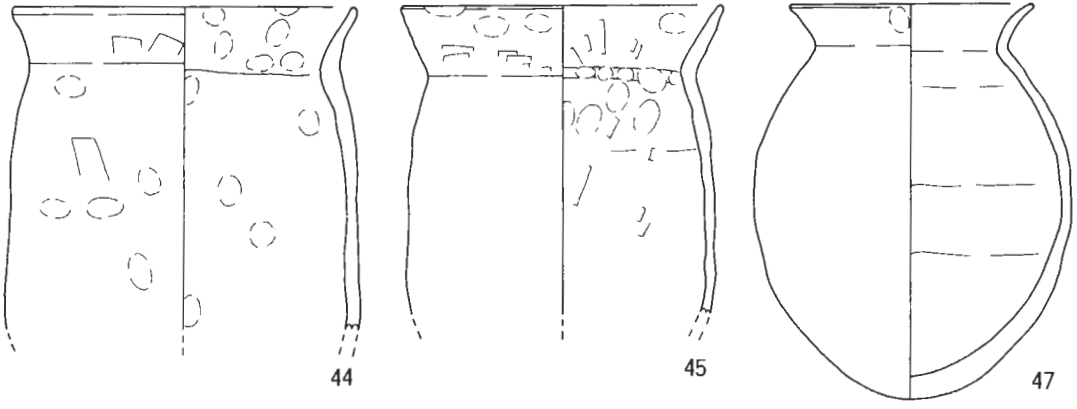
第 27 図 SF 14 出土遺物



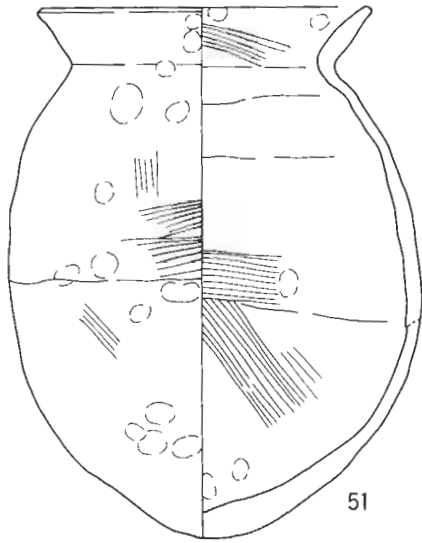
第28図 SF15 出土遺物(1)



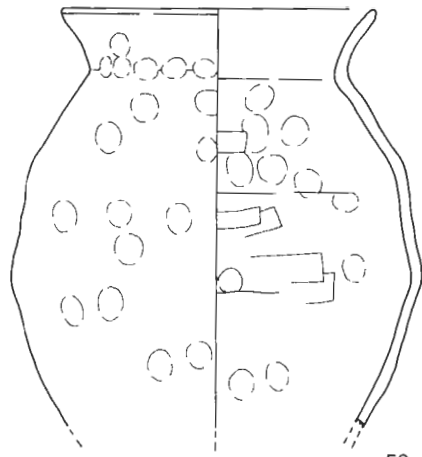
第 29 図 SF 15 出土遺物(2)



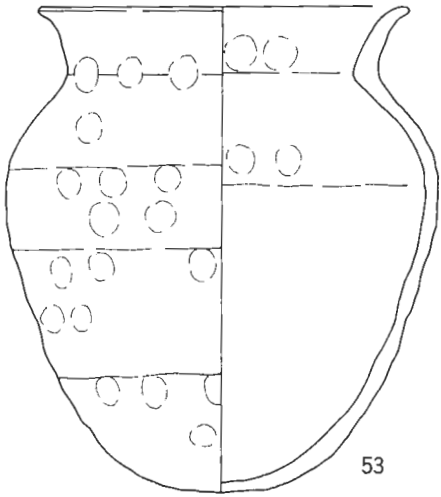
第30図 SF15 出土遺物(3)



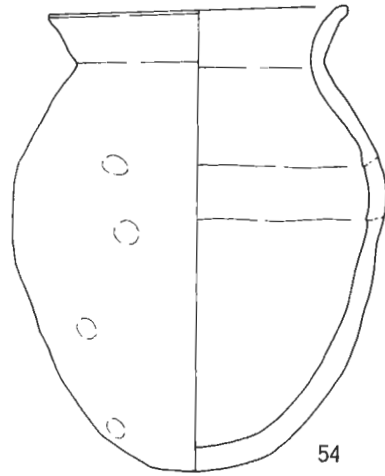
51



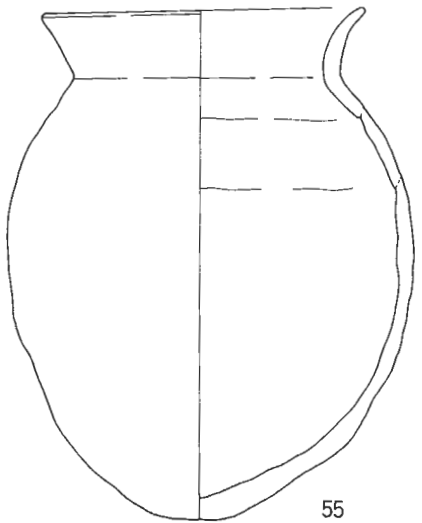
52



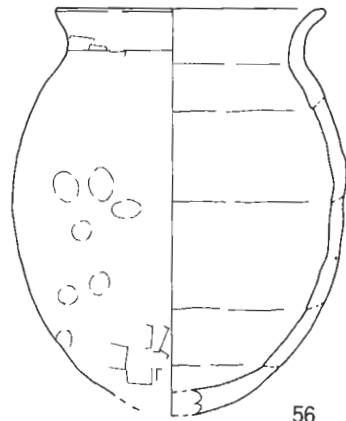
53



54



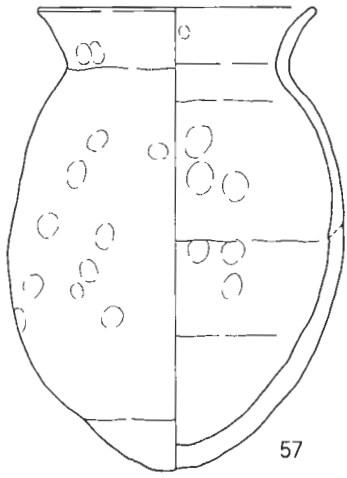
55



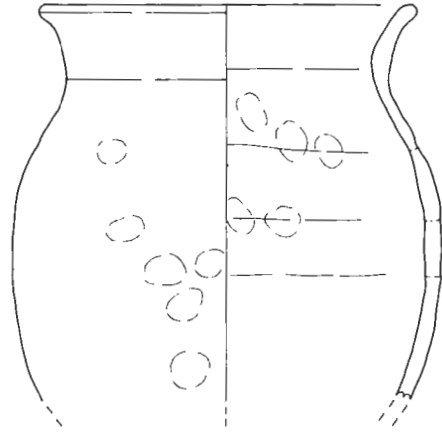
56



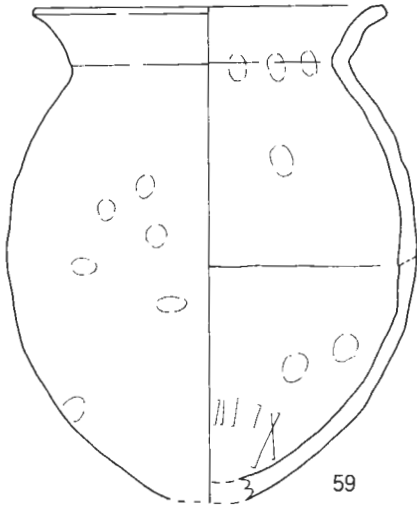
第31図 SF15 出土遺物(4)



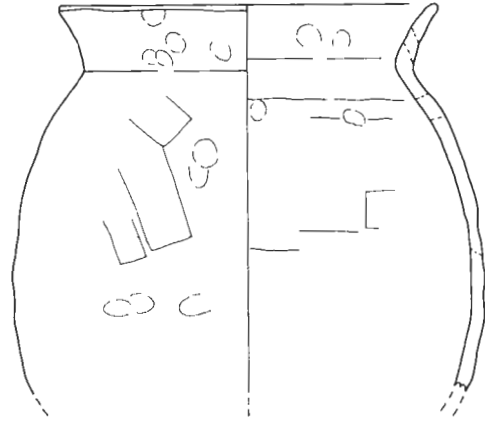
57



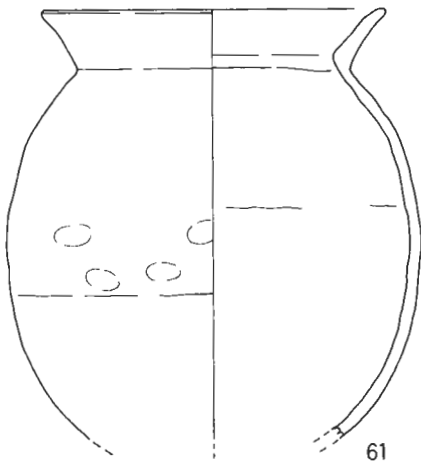
58



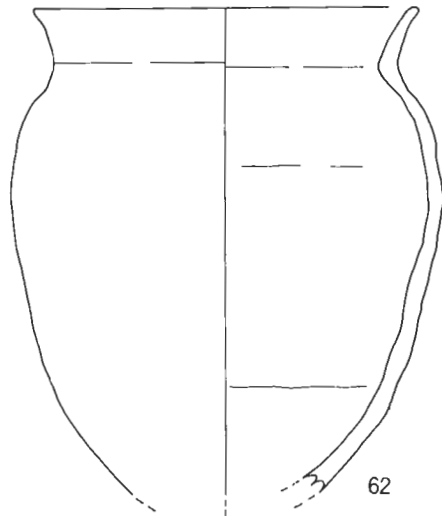
59



60



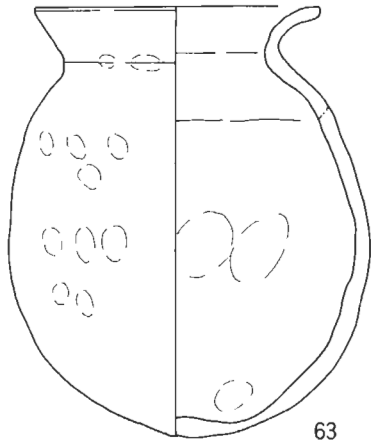
61



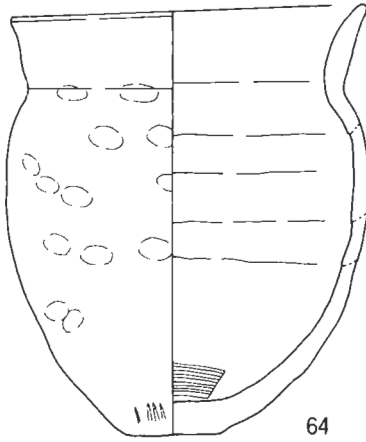
62



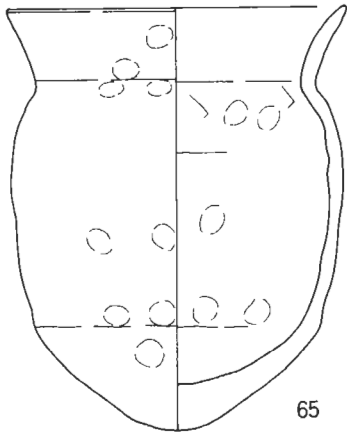
第32図 SF15 出土遺物(5)



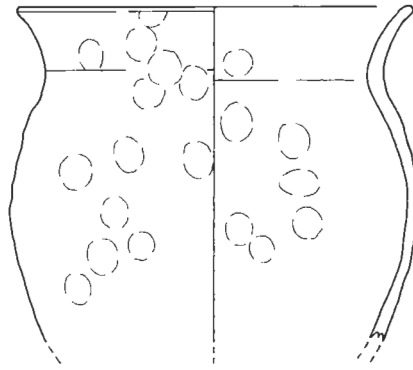
63



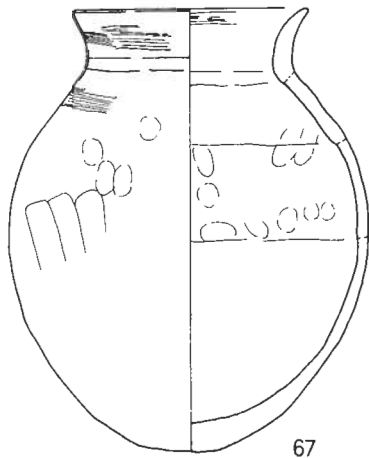
64



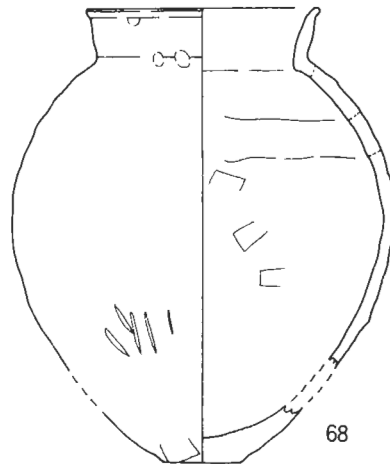
65



66



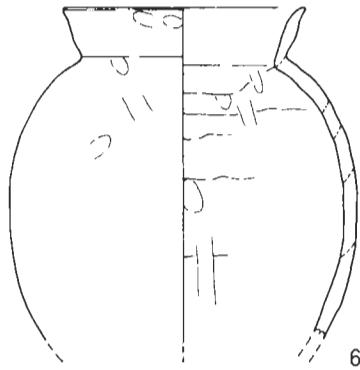
67



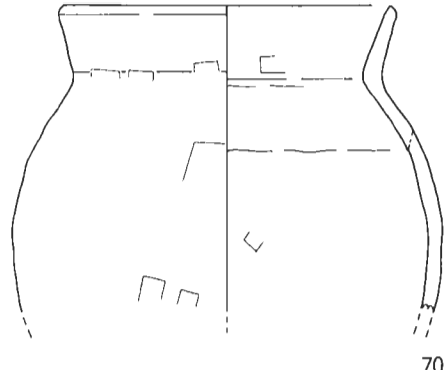
68



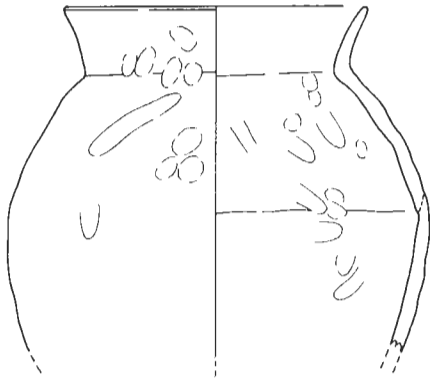
第33図 SF15 出土遺物(6)



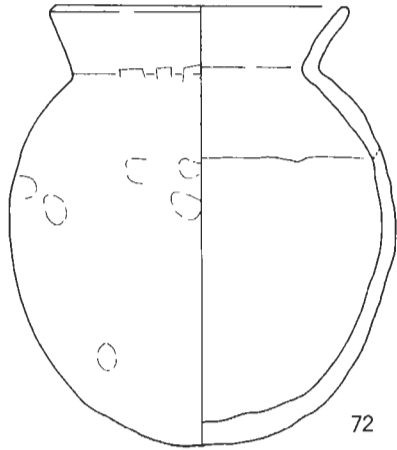
69



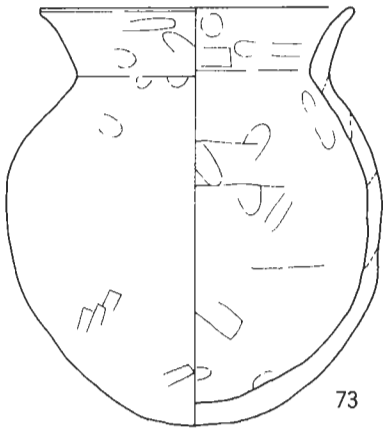
70



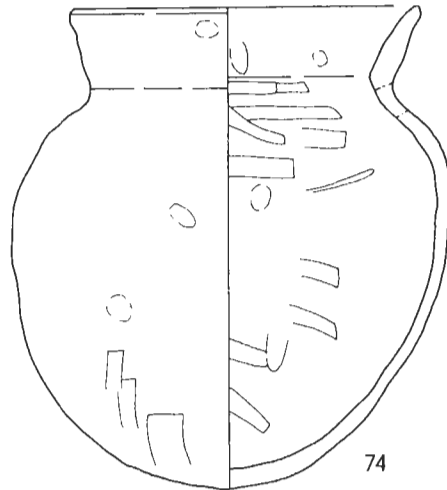
71



72



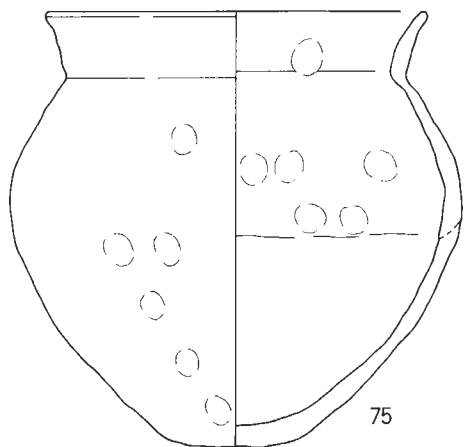
73



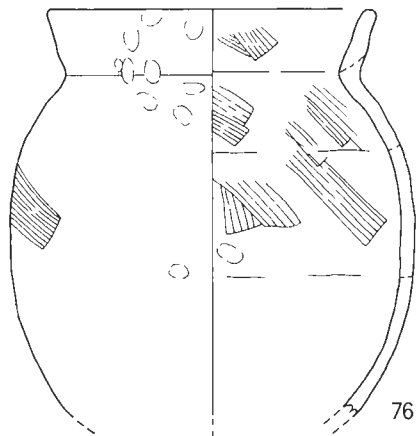
74



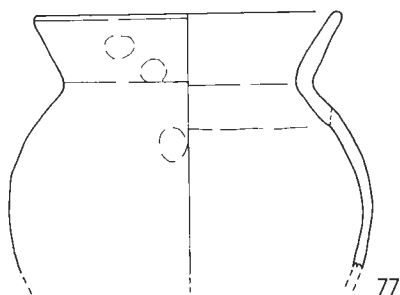
第 34 図 SF 15 出土遺物(7)



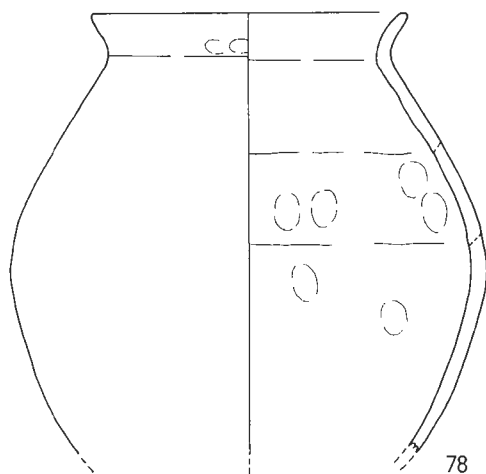
75



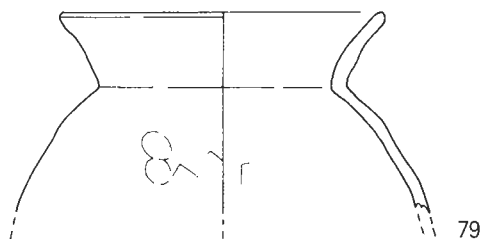
76



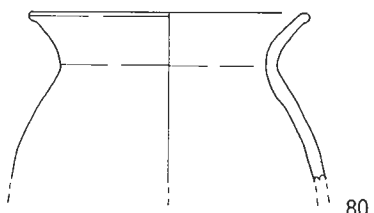
77



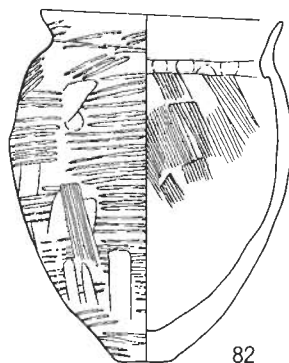
78



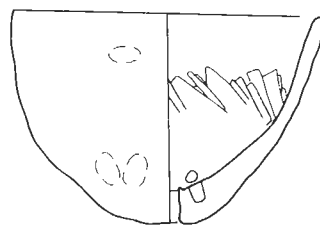
79



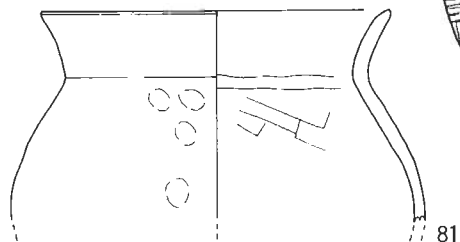
80



82



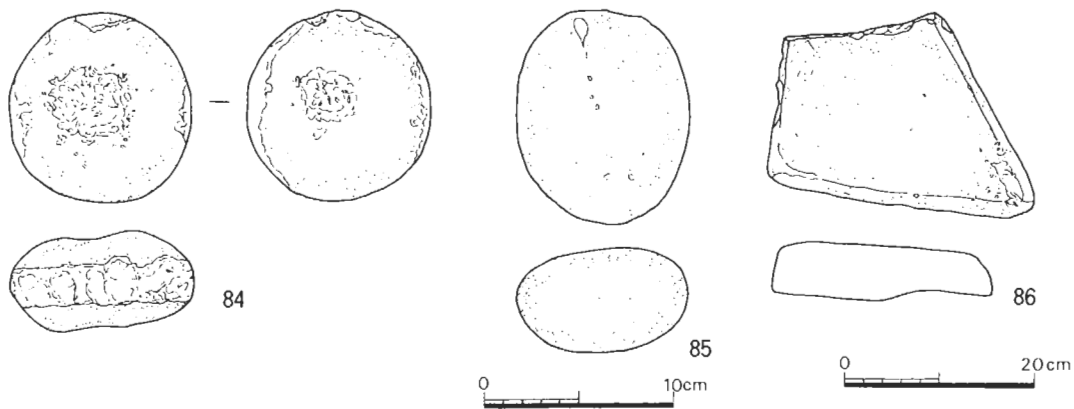
83



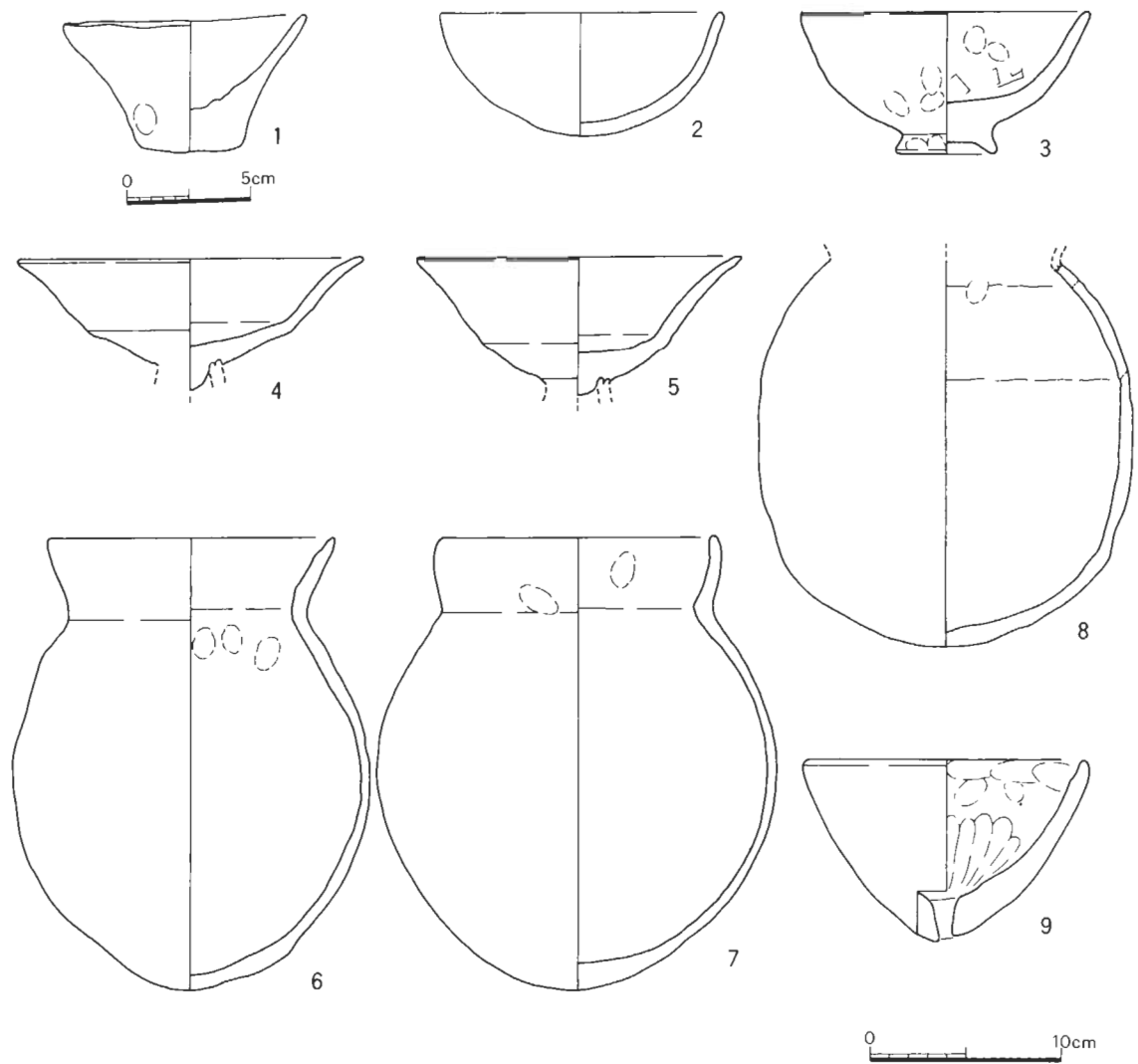
81



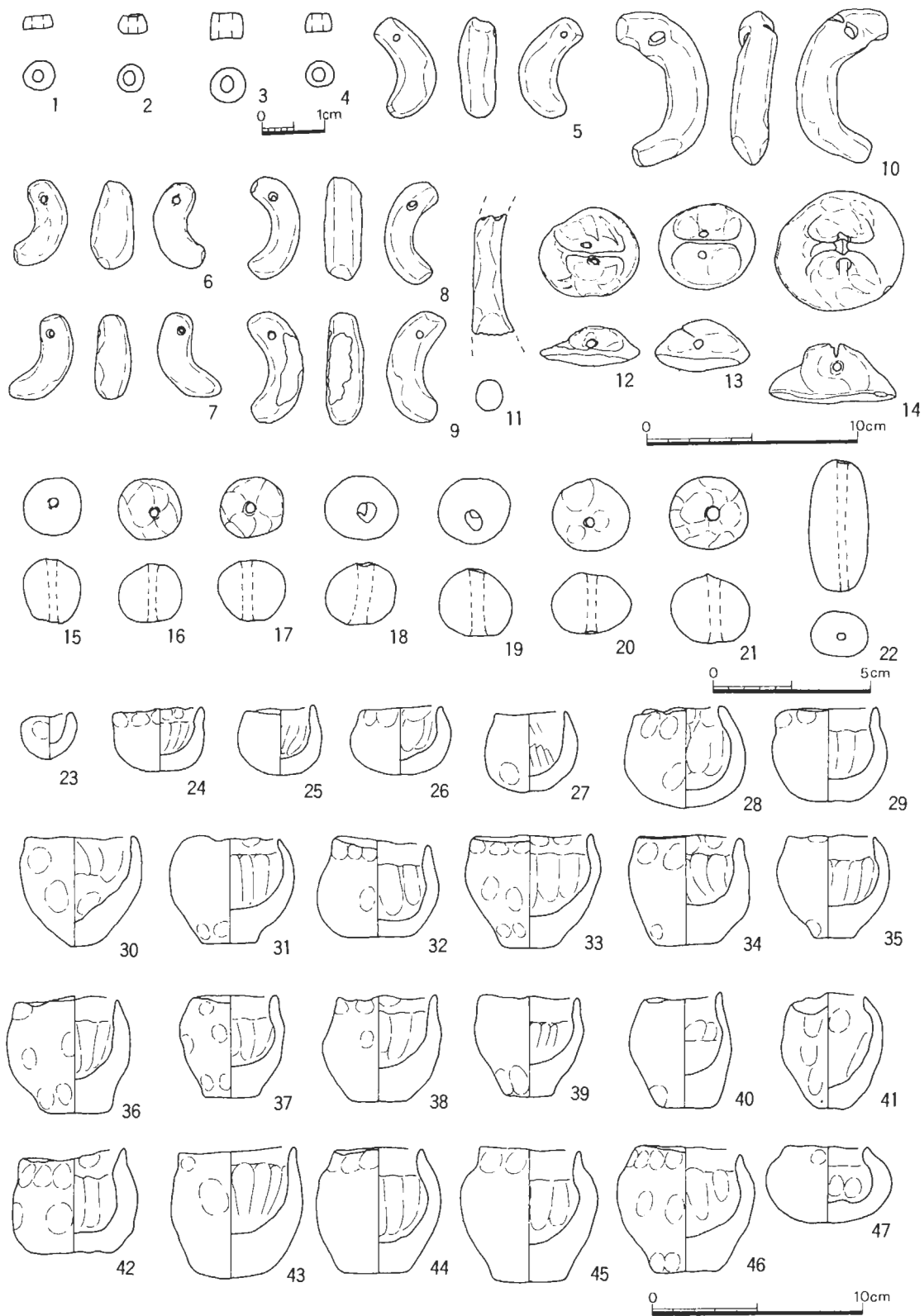
第35図 SF15 出土遺物(8)



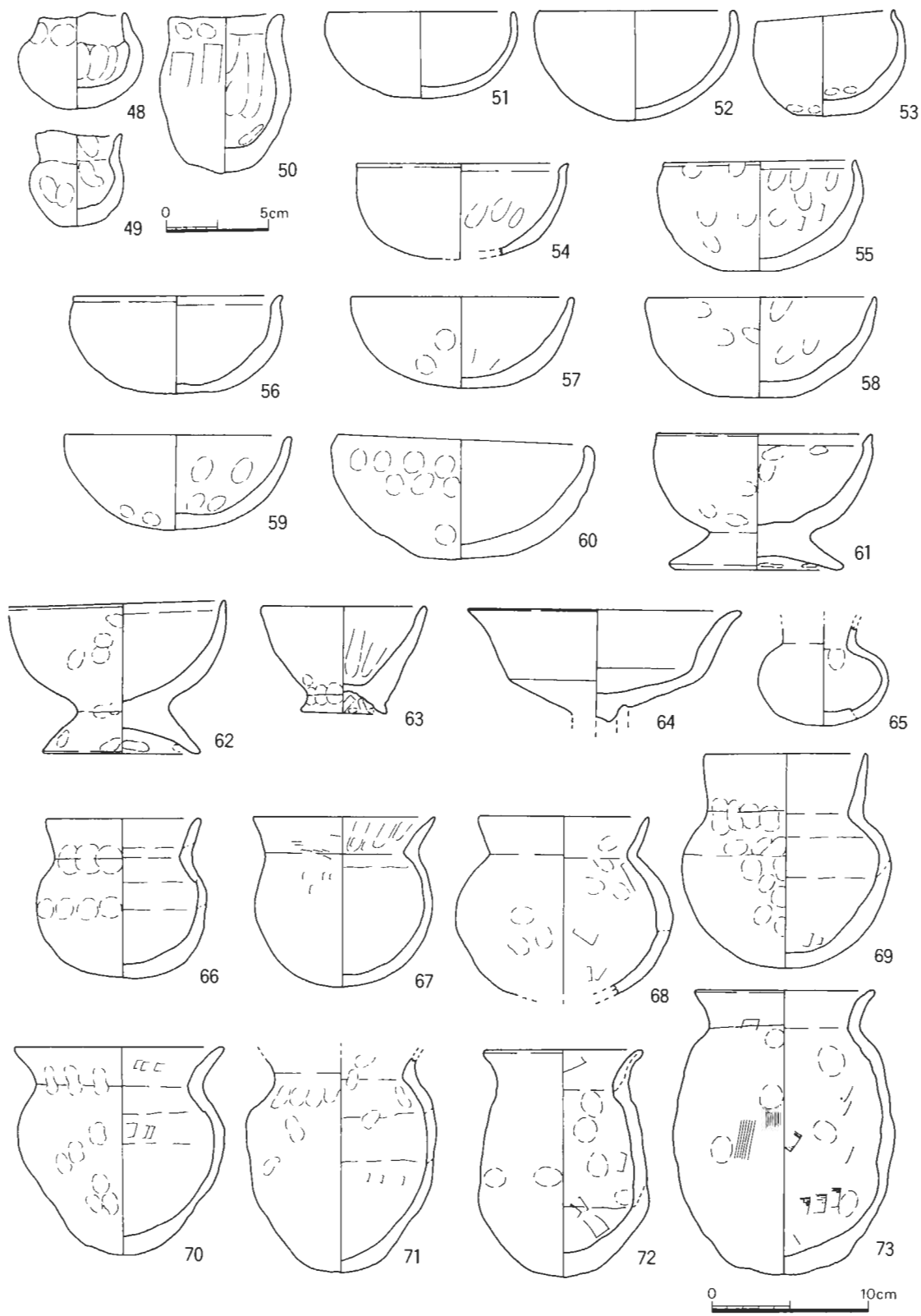
第36図 SF15 出土遺物(9)



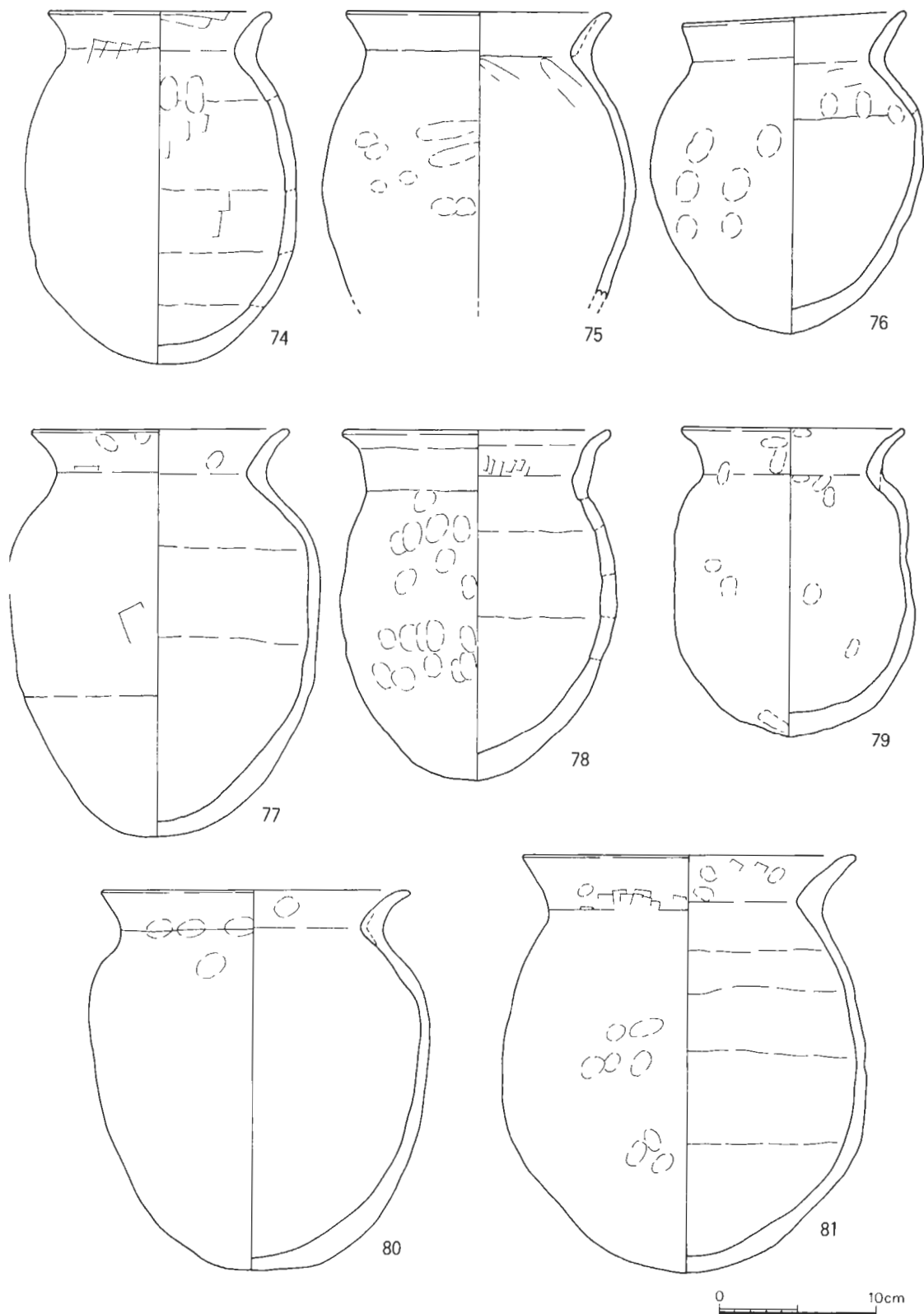
第37図 SF16 出土遺物



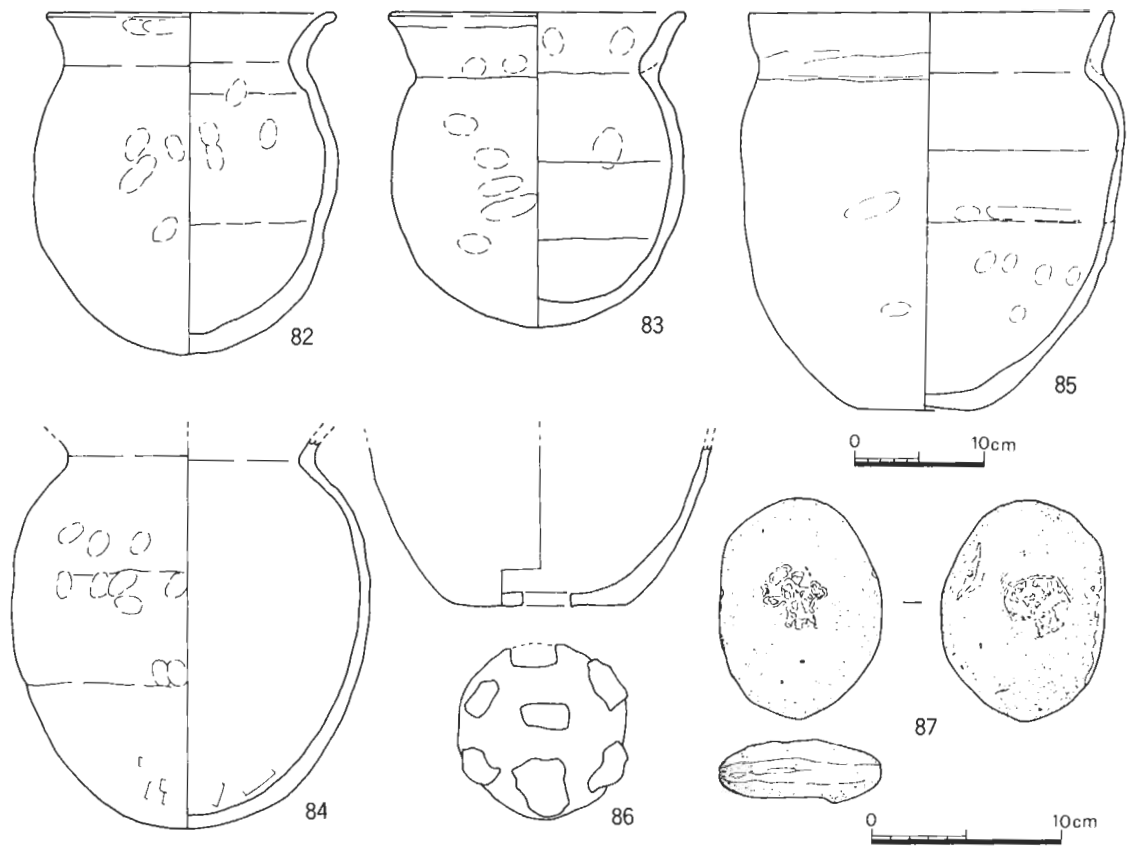
第38圖 SF17 出土遺物(1)



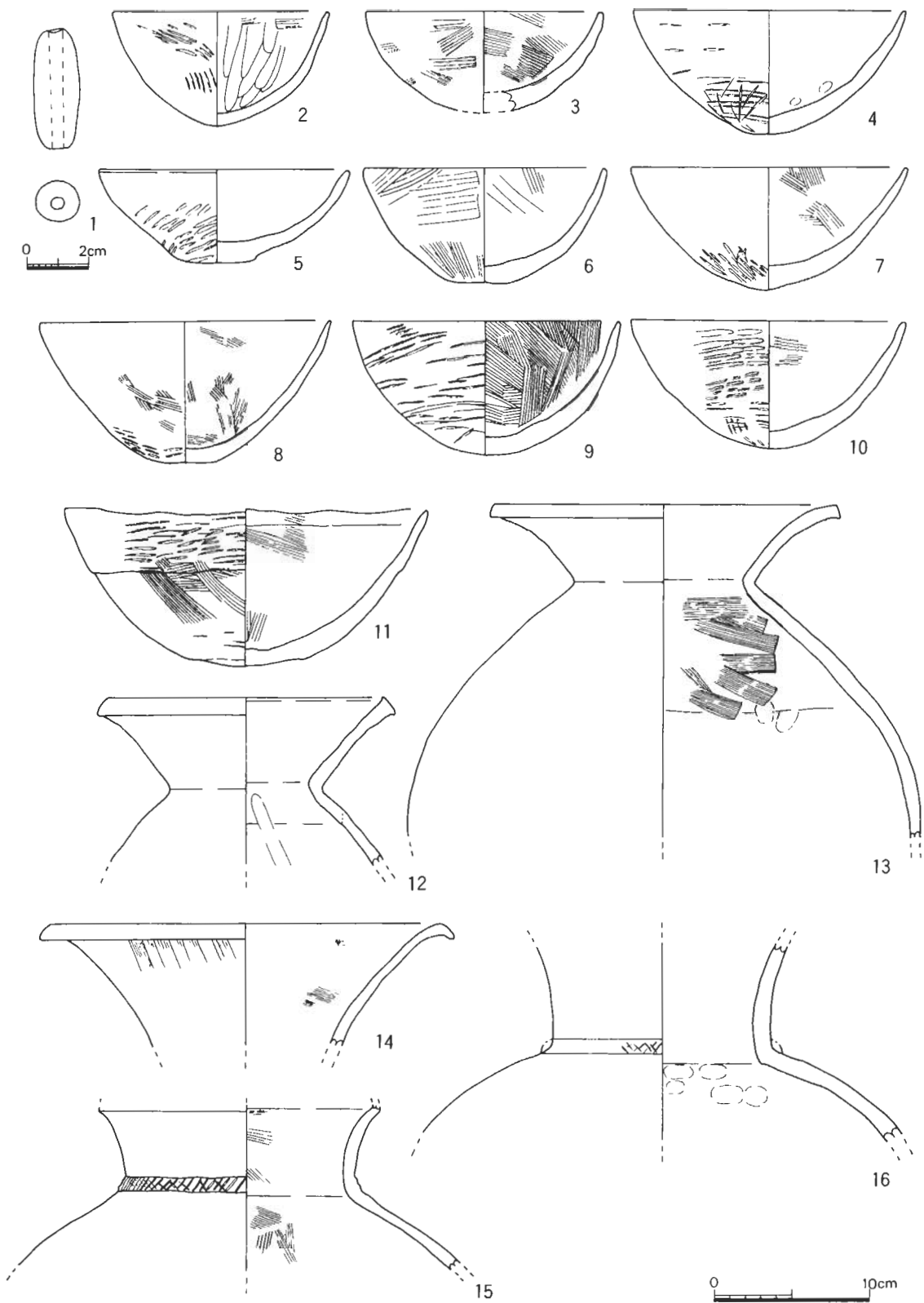
第 39 図 SF 17 出土遺物(2)



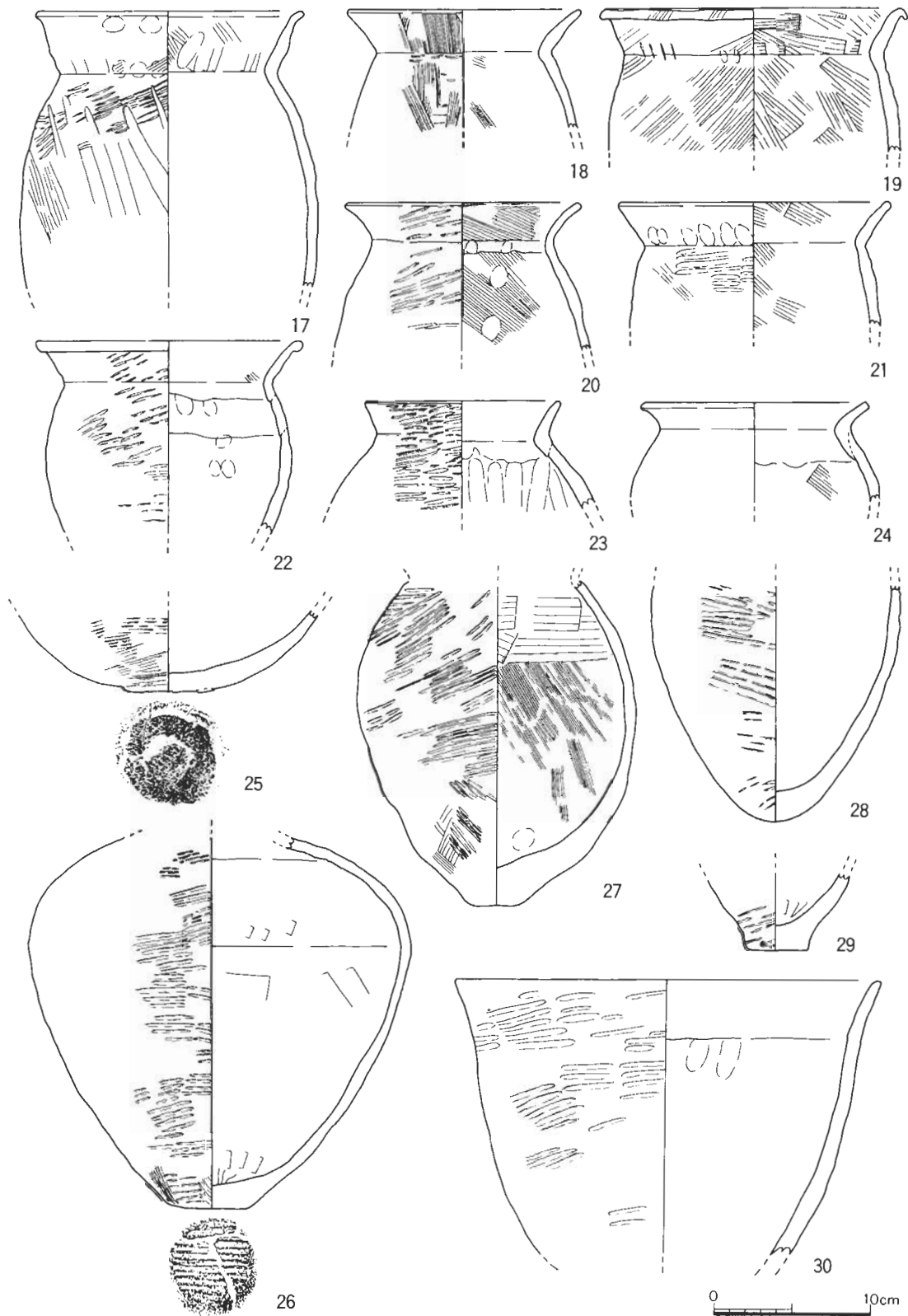
第 40 図 SF 17 出土遺物(3)



第 41 図 SF17 出土遺物(4)



第 42 図 SF 18 出土遺物(1)



第 43 図 SF 18 出土遺物(2)

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
18-73	SF 10	土製模造鏡	全長 4.1 全幅 4.7 全厚 2.2	楕円形の円板に有孔の鈕を有する。	整形は表面が指頭、ナデ、裏面ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	I A類
〃-74	〃	〃	全長 4.4 全幅 4.7 全厚 2.3	ほぼ円形を呈し、有孔の鈕を有する。	表面は指頭、ナデ、裏面はナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	〃
〃-75	〃	〃	全長 6.7 全幅 6.3 全厚 2.4	やや楕円形を呈する円盤に有孔の鈕を有する。	表面の整形は指頭、ナデ、裏面はナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	I B類
〃-76	〃	〃	全長 5.4 全幅 5.7 全厚 1.8	楕円形の円板で、鈕の形態は欠損していると思われ、不明である。	表面は指頭、ナデ、裏面はナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	〃
〃-77	〃	〃	全長 5.4 全幅 (3.6) 全厚 1.5	楕円形を呈するものと思われ、一部欠損する。また鈕も有孔を持つと思われるが欠損する。	整形は表面が指頭、ナデ、裏面もナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	〃
〃-78	〃	手握ね土器	2.6 2.6 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は、やや内湾気味である。やや小型で碗型を呈する。	整形は外面はナデ、内面は指ナデ、指頭である。胎土は精良で砂粒を含まない。	I A類
〃-79	〃	〃	3.7 3.7 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は直立気味に立ち上がる。	整形は粗く、外面がヘラケズリ、指頭、内面が指ナデ、指頭である。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	I B類
〃-80	〃	〃	4.8 3.0 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は僅かに内湾気味である。	整形は内外面共に、指頭、ナデである。胎土は精良で、砂粒を微量含む。	〃
〃-81	〃	〃	3.3 3.5 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持って立ち上がる。	整形は外面が指頭、ナデ、内面がヘラナデ、指ナデである。胎土は精良で、砂粒を微量含む。	〃
〃-82	〃	〃	4.1 3.8 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は直立気味である。	整形は外面がナデ、内面が指ナデ、指頭である。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	〃
〃-83	〃	〃	3.6 2.9 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は僅かに内湾気味、口縁端部が尖り気味である。碗型を呈する。	整形は外面が指頭、ナデ、内面は指ナデ、指頭である。胎土は精良で砂粒を含まない。	〃
〃-84	〃	〃	4.4 3.0 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持って、外傾気味に立ち上がる。碗型を呈する。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、指頭である。胎土は精良で砂粒を含まない。	〃
〃-85	〃	〃	3.0 4.2 — 1.2	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は直立する。碗型を呈する。	整形は外面が指頭、ナデ、内面は指ナデ、指頭である。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	〃
〃-86	〃	〃	5.2 4.5 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は直立気味である。碗型を呈す。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、指頭、口縁がナデである。胎土はやや精良で、砂粒を微量含む。	I C類
〃-87	〃	〃	4.2 3.4 — 1.4	僅かに平底気味の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は直立する。	外面の整形はナデ、僅かに指頭がみられ、内面が指ナデ、指頭である。胎土はやや精良で、砂粒を微量含む。	III A類
〃-88	〃	〃	5.0 5.0 — —	平底の底部より体部は開き気味で、口縁が僅かに内湾する。	整形は外面が指頭、ナデ、内面は指ナデである。胎土は精良で、砂粒を微量含む。	II B類

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
18-89	SF 10	手握ね土器		6.4 5.0 — 3.4	平底の底部より、体部は直線的に立ち上がる。	外面の整形は体部下部がヘラケズリ、内面が指ナデ、指頭である。胎土はやや精良で、砂粒を微量含む。	Ⅱ B 類
〃-90	〃	〃		6.0 5.3 — 2.9	平底の底部より、体部は外傾し、口縁がやや内湾気味である。	外面の整形はナデ、内面は強く指ナデする。胎土はやや精良で、砂粒を微量含む。	〃
〃-91	〃	〃		6.1 5.4 — 2.8	平底の底部より、体部は外傾気味に立ち上がる。	整形は、外面下部は指頭、体部はナデ、内面は指ナデ、指頭である。胎土はやや粗く、砂粒を微量含む。	〃
〃-92	〃	〃		6.1 6.3 — 3.0	平底の底部より、体部は外傾気味に立ち上がる。	整形は外面がナデ、内面が指ナデ、口縁が指頭である。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	Ⅱ C 類
〃-93	〃	〃		9.6 7.5 — 4.0	平底の底部より体部は外傾気味に立ち上がり、口縁は直立する。碗型のミニチュア土器である。	整形は指頭、ナデで口縁を強くヨコナデである。胎土はやや粗く、砂粒を微量含む。	Ⅵ C 類
〃-94	〃	〃		5.0 4.1 — 4.7	「ハ」字状に開いた翼から体部は直線的に立ち上がる。脚付碗型を呈する。	整形は粗く、外面は底部から脚部にかけてヘラケズリ、他は指頭、ナデ、内面は指ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	Ⅸ A 類
〃-95	〃	〃		4.0 4.8 — 3.6	「ハ」字状に開いた翼が付き、体部は僅かに丸味を持ち立ち上がる。脚付碗型を呈する。	整形は外面が脚部接合部を強く指頭し、内面は指ナデ、指頭である。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	〃
〃-96	〃	土師器 碗		12.0 5.3 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁はやや内湾気味に立ち上がる。	整形は内外面共にナデである。胎土はやや粗く、大粒の砂粒を少量含む。	Ⅱ A 1 類
〃-97	〃	〃		12.5 5.2 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は直立気味に立ち上がる。	整形は外面に僅かに指頭で他はナデである。胎土はやや粗く、白色鉱物粒を少量含む。	〃
〃-98	〃	土師器 脚付碗		— (4.4) — 5.3	碗の底部及び脚部のみが残存する。脚部は「ハ」字状に短かく開き、碗底部は丸味を持つ。	整形は碗底部内面はヘラケズリ、ナデ、他は指頭である。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	A 類
〃-99	〃	土師器 甕		13.4 22.6 — —	丸底の底部より胴部下端でくびれた後、胴部中央部は丸味を持ち、頸部はすぼまり、口縁は緩やかに外傾する。	整形は指頭及びナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	Ⅱ A 1 類
〃-100	〃	〃		17.0 (13.9) — —	胴部下部は欠損する。胴部は丸味を持ち、頸部はややくびれ、口縁は緩やかに外傾する。	外面の整形はヘラケズリ、内面はナデ及び指頭である。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	Ⅱ B 1 類
〃-101	〃	〃		17.0 (18.2) — —	底部は欠損する。胴部は強く丸味を持ち頸部は緩やかにくびれ口縁も短かく緩やかに外反する。	外面の整形はヘラケズリ及びナデ、指頭、内面はナデ、指頭である。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	Ⅲ A 3 類
〃-102	〃	叩き石		全長 12.7 全幅 10.4 全厚 7.1 重量 1395g	楕円形の自然礫を利用し、表裏面共に中心部に僅かに敲打し、また下部先端も僅かに敲打する。砂岩製である。		
〃-103	〃	板状礫		全長 18.1 全幅 7.9 全厚 1.3 重量 440g	揆型を呈し、左側縁を折損させ、打ち欠く。表裏面共に僅かに擦痕が認められる。砂岩製である。		
19-42	SF 11	土製模造鏡		全長 3.8 全幅 4.6 全厚 2.1	楕円形を呈し、鈕は孔を有する。	整形は表面が指頭、ナデ、裏面がナデである。胎土は精良で白色鉱物粒を少量含む。	I A 類

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
19-43	SF 11	土製模造鏡	全長 5.1 全幅 4.7 全厚 2.4	やや楕円形を呈し、鈕は孔を有する。	表面の整形は指頭、ナデ、裏面はナデである。胎土はやや粗く、砂粒を微量含む。	I A 類
ク-44	ク	ク	全長 4.3 全幅 4.9 全厚 2.1	やや楕円形を呈し、鈕は孔を有する。	整形は表面が指頭、ナデ、裏面はナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	ク
ク-45	ク	ク	全長 3.8 全幅 3.3 全厚 0.8	楕円形を呈し、鈕は部分的に欠損するもの、孔は有するものと思われる。	整形は表面が指頭、ナデ、裏面がナデである。胎土は精良である。	ク
ク-46	ク	ク	全長 4.0 全幅 4.5 全厚 1.5	やや隅丸方形に近い形状を呈し、鈕は孔を有する。	整形は表面が指頭、ナデ、裏面がナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	ク
ク-47	ク	ク	全長 3.9 全幅 4.2 全厚 1.4	楕円形を呈し、1/3 は欠損し、また鈕も欠損するもの、孔は有するものと思われる。	整形は表面が指頭、ナデ、裏面がナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	ク
ク-48	ク	ク	全長 5.1 全幅 5.3 全厚 2.6	ほぼ円形を呈し、やや高い鈕は孔を有する。	整形は表面が指頭、ナデ、裏面がナデである。胎土はやや精良で砂粒を微量含む。	I B 類
ク-49	ク	ク	全長 5.0 全幅 5.0 全厚 2.3	円形を呈し、鈕は孔を有する。	整形は表面が指頭、ナデ、裏面がナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	ク
ク-50	ク	ク	全長 4.7 全幅 5.1 全厚 2.5	楕円形を呈し、やや高い鈕は孔を有する。	整形は表面が指頭、ナデ、裏面がナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	ク
ク-51	ク	ク	全長 5.5 全幅 4.9 全厚 2.9	楕円形を呈し、やや高い鈕は孔を有する。	整形は表面が指頭、ナデ、裏面がナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	ク
ク-52	ク	ク	全長 5.5 全幅 5.7 全厚 2.4	ほぼ円形で鈕には孔を有する。	整形は表面が指頭、ナデ、裏面がナデである。胎土は精良である。	ク
ク-53	ク	ク	全長 (3.6) 全幅 5.4 全厚 2.0	楕円形を呈し、鈕は孔を有する。部分的に欠損する。	整形は表面が指頭、ナデ、裏面がナデである。胎土はやや精良で砂粒を微量含む。	ク
ク-54	ク	ク	全長 4.0 全幅 4.5 全厚 1.9	楕円形を呈し、1/3 程欠損する。鈕は僅かに残るが、孔は有しない。	整形は表面が指頭、ナデ、裏面がナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	II A 類
ク-55	ク	ク	全長 5.3 全幅 5.7 全厚 2.2	やや楕円形を呈し、孔を有しない小さな鈕がつく。	表面の整形が指頭、ナデ、裏面がナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	II B 類
ク-56	ク	ク	全長 5.2 全幅 4.6 全厚 1.8	楕円形を呈し、鈕は孔を有さない。	整形は表面が指頭、ナデ、裏面がナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	ク
20-65	ク	手握ね土器	3.5 1.9 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持って外傾する。やや小型のものである。	整形は外面がナデ、内面が指ナデである。胎土は精良である。	I A 類
ク-66	ク	ク	2.7 1.5 — —	小型で、丸底の底部より、体部は丸味を持って外傾する。	整形は内外面共にナデである。胎土はやや精良で、砂粒を微量含む。	ク

種別番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
20-67	SF11	手握ね土器	2.8 2.7 — 1.7	平底の底部より、体部はやや丸味を持ち、口縁は僅かに内湾する。小型である。	整形は内外面共にナデで、僅かに指頭がみられる。胎土は精良である。	I A類
〃-68	〃	〃	3.8 3.7 — 2.0	丸底の底部より、体部はやや丸味を持ち、口縁がやや内湾気味である。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、指頭である。胎土は精良である。	I B類
〃-69	〃	〃	3.9 3.6 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は直立気味である。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、ナデである。胎土は精良で、砂粒を微量含む。	〃
〃-70	〃	〃	5.6 3.2 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁はやや開き気味である。	整形は外面が指頭、ナデ、内面はナデである。胎土は精良で、砂粒を微量含む。	〃
〃-71	〃	〃	4.0 3.2 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁はやや内湾気味である。	整形は外面が僅かに指頭、他はナデ、内面は指ナデである。胎土はやや精良で、砂粒を微量含む。	〃
〃-72	〃	〃	3.8 4.1 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持って立ち上がる。	整形は内外面共にナデで、指ナデ、指頭が僅かにみられる。胎土は精良である。	〃
〃-73	〃	〃	3.8 3.1 — 1.5	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は直立気味に立ち上がる。	整形は内外面共に指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	〃
〃-74	〃	〃	3.8 3.1 — 1.0	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は直立気味に立ち上がる。	整形は内外面共にナデで、内面に僅かに指ナデがみられる。胎土はやや粗く、砂粒を微量含む。	〃
〃-75	〃	〃	3.4 3.9 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持って立ち上がる。	整形は内外面共に指頭、ナデである。胎土は精良で、砂粒を微量含む。	〃
〃-76	〃	〃	4.4 3.6 — —	丸底の底部より、体部はやや丸味を持って開く。	整形は内外面共に指ナデ、ナデである。胎土は精良で砂粒を微量含む。	〃
〃-77	〃	〃	3.8 3.7 — —	丸底の底部より、体部はやや丸味を持ち、口縁は直立気味に立ち上がる。	整形は内外面共に指ナデ、指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	〃
〃-78	〃	〃	4.6 3.5 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持たず、口縁は直立気味にやや外傾する。粗い造りである。	整形は外面が指ナデ、指頭で粗く、内面は指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	〃
〃-79	〃	〃	5.2 4.1 — 2.2	やや平底気味の底部より、体部は余り丸味を持たず、口縁は直立する。	整形は外面がナデ、内面が指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	I C類
〃-80	〃	〃	4.3 4.3 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁端部が僅かに内湾する。	整形は外面がナデ、内面が指ナデである。胎土は精良である。	〃
〃-81	〃	〃	5.0 4.3 — —	丸底の底部より、体部はやや丸味を持ち、口縁は直立気味である。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、指頭である。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	〃
〃-82	〃	〃	5.7 4.0 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は直立気味である。	整形は外面はナデ、内面は指ナデである。胎土はやや精良で、砂粒を微量含む。	〃

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
20-83	SF 11	手握ね土器	5.5 5.0 — —	やや尖り気味の丸底より、体部は丸味を持ち、口縁は直立する。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデである。胎土はやや精良で、砂粒を微量含む。	I C類
〃-84	〃	〃	4.2 4.6 — —	丸底の底部より体部は丸味を持ち直立気味に立ち上がる。ややI類でも深さのあるもの。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、指頭である。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	〃
〃-85	〃	〃	4.8 3.6 — —	やや平底気味の丸底で、体部はやや丸味を持ち、口縁は直立する。	整形は内外面共にナデで、僅かに指頭がみられる。胎土はやや粗く、砂粒を微量含む。	〃
〃-86	〃	〃	8.6 4.8 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は直立気味である。	整形は外面が指頭、ナデ、内面がナデで、僅かにヘラケズリがみられる。胎土は粗く砂粒を少量含む。	I D類
〃-87	〃	〃	3.7 4.7 — —	平底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は内湾する。	整形は外面の口縁端部が指頭、他はナデ、内面は指頭とナデである。胎土はやや精良で、砂粒を微量含む。	III A類
〃-88	〃	〃	5.2 4.9 — 2.8	平底の底部より、体部は開き気味に立ち上がる。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデである。胎土はやや精良で、砂粒を微量含む。	II A類
〃-89	〃	〃	5.2 5.2 — 3.5	平底の底部より、体部はやや丸味を持ち、直立気味に立ち上がる。	整形はやや粗く、外面は指頭、内面は指ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	II B類
〃-90	〃	〃	6.8 5.0 — 2.6	平底気味の底部より、体部はやや丸味を持って立ち上がり、口縁が僅かに内湾気味である。	整形は外面が口縁を強く指頭する。他は指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	VI B類
〃-91	〃	〃	8.5 5.9 — 3.0	平底の底部より、体部は丸味を僅かに持ち、口縁は内湾気味に立ち上がる。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、指頭である。胎土はやや精良で、砂粒を微量含む。	〃
〃-92	〃	〃	8.6 6.2 — 3.2	平底気味の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は直立気味である。やや大型である。	整形は内外面共に指頭、ナデである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	〃
〃-93	〃	〃	5.5 4.8 — 2.8	やや平底気味の底部より、体部は開いて立ち上がる。	整形は粗く、外面が指頭、内面が指ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	II B類
〃-94	〃	〃	(6.8) 6.1 — —	平底の底部より、体部は丸味を持たず開く。やや大型である。	整形は内外面共に指頭、ナデである。胎土は精良である。	VI A類
〃-95	〃	〃	6.6 3.7 — 2.0	平底の底部より、体部は外傾気味に立ち上がる。	整形は外面がナデ、内面が指ナデである。胎土は精良で、砂粒を微量含む。	II A類
〃-96	〃	〃	8.1 5.2 — 3.8	平底の底部より、体部は外反気味に立ち上がる。環型を呈する。	整形は外面が指頭、ナデ、内面がヘラナデ、指ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を微量含む。	VI類
〃-97	〃	〃	4.8 4.3 — —	平底気味の底部より、体部は丸味を持ち、口縁がややくびれる。	整形は外面口縁を強く指頭、内面は指頭、ナデである。胎土は精良である。	IV B類
〃-98	〃	〃	3.3 2.5 — 2.5	平底気味の底部より、体部は丸味を持ち、口縁端が僅かにくびれる。	整形は外面口縁が指頭、内面底部が指頭、他はナデである。胎土はやや粗く、白色鉱物粒を少量含む。	IV A類

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
20-99	SF 11	手捏ね土器	2.2 3.0 — —	壺型を呈する。底部は丸底で体部が強く丸味を持ち、口縁がすばまる。内面は指を押し込み円筒にする。	整形は口縁部を強く指ナデし、他はナデである。胎土は粗く、白色の鉱物粒を多量に含む。	Ⅳ A 類
◇-100	◇	◇	7.0 5.8 — 4.2	「ハ」字状に開いた脚より、底部はやや丸味を持ち、体部はやや開いて立ち上がる。脚付碗型を呈する。	整形は脚と碗とのくびれ部を強く指ナデ、碗外面が指頭、ナデ、内面が指ナデである。胎土はやや精良で、砂粒を微量含む。	Ⅸ B 類
◇-101	◇	◇	9.5 6.7 — —	脚部は短く「ハ」字状に開き、底部から口縁は余り丸味を持たず、外傾する。脚付碗型を呈する。	整形は指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	◇
◇-102	◇	◇	— (2.5) — —	脚部は欠損する。碗部は余り丸味を持たず、皿状を呈する。やや小型のものである。脚付碗型を呈する。	整形は内外面共に指頭である。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	Ⅸ C 類
◇-103	◇	土師器 碗	12.0 6.4 — 2.0	やや平底気味の丸底より、体部は余り丸味を持たず、口縁は外傾気味に立ち上がる。	整形は外面がヘラケズリ、ナデ、内面がナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	Ⅱ A 1 類
◇-104	◇	◇	12.0 5.2 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は直立気味に立ち上がる。	整形は内外面共にナデである。口縁部は強くナデる。胎土はやや精良で、砂粒を微量含む。	◇
◇-105	◇	◇	13.4 6.0 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は内湾気味に緩やかに立ち上がる。	整形は内外面共にナデである。胎土はやや精良で砂粒を微量含む。	◇
◇-106	◇	◇	9.0 6.9 — 5.0	平底の底部より、体部は丸味を持たず直立する。小型の碗である。	整形は外面が指頭、ナデ、内面がナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	Ⅳ A 1 類
◇-107	◇	◇	17.7 8.2 — —	やや大振りの碗で、平底の底部より、僅かに丸味を持って体部は立ち上がり、口縁も直線的に立ち上がる。	整形は内外面共に指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	Ⅳ C 1 類
◇-108	◇	土師器 脚付碗	— (4.3) — —	碗部の体部は欠損する。脚部はやや長めに「ハ」字状に開き、碗底部は僅かに丸味を持つ。	整形はナデで、僅かに指頭がみられる。胎土はやや精良で、砂粒を微量含む。	A 類
21-109	◇	土師器 甕	14.4 (22.7) 18.2 —	底部は欠損する。胴部は丸味を持たず頸部はくびれ、口縁は外傾擦る。	整形は内外面共にナデで、外面口縁端部を強く指ナデする。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	Ⅰ A 2 類
◇-110	◇	◇	14.8 21.3 — 7.5	平底の底部より、胴部は丸味を持たず直線的に立ち上がり、頸部はくびれず、口縁は短かく緩やかに外傾する。	整形は内外面共に指頭及びナデである。胎土はやや粗く、砂粒を多く含む。	Ⅰ C 1 類
◇-111	◇	◇	12.0 18.8 — —	やや尖り気味の丸底から胴部は丸味を持ち、頸部はくびれず、口縁は直立気味に外傾する。	整形は内外面共に指頭及びナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	Ⅱ B 1 類
◇-112	◇	◇	17.0 (19.0) — —	胴部下部は欠損する。胴部はやや丸味を持ち、頸部は緩やかにくびれ、口縁は直線的に立ち上がった後、外傾し、やや「コ」字状を呈する。	整形は内外面共に指頭及びナデで、僅かにヘラケズリを残す。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	◇
◇-113	◇	◇	16.0 21.4 16.8 —	丸底の底部より、胴部は丸味を持ち、頸部はくびれず、口縁は外傾する。	整形は全体的に粗く、外面がヘラナデ、内面はナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	Ⅱ C 1 類
◇-114	◇	◇	16.4 (11.5) — —	胴部下部は欠損する。胴部は丸味を持ち、頸部は余りくびれず、口縁は緩やかに外傾する。	整形は内外面共に指頭及びナデで僅かにヘラケズリがみられる。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	◇

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 法量 (cm) 底径	形態・文様	手法	備考
21-115	SF 11	土師器 甕	15.7 22.8 — —	丸底の底部より胴部は強く丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は緩やかに外傾する。	整形は内外面共に指頭及びナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	Ⅲ B 1 類
◇-116	◇	◇	16.2 22.0 19.0 —	丸底の底部より、胴部は強く丸味を持ち、頸部は緩やかにくびれ、口縁は直立気味に外傾する。	整形は内外面共にナデである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	Ⅲ B 2 類
◇-117	◇	◇	15.0 (11.0) — —	胴部中位は欠損する。体部は丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は直立気味に外傾する。	整形は内外面共に指頭、ナデである。胎土は精良で砂粒を微量含む。	Ⅱ ? 1 類
◇-118	◇	◇	17.0 (9.0) — —	胴部中位は欠損する。胴部はやや丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は外傾する。	整形は外面が指頭、ナデ、内面は口縁に僅かにヘラケズリがみられる。胎土は精良で砂粒を微量含む。	Ⅱ ? 2 類
◇-119	◇	◇	18.4 (6.2) — —	口縁部のみ残存する。頸部は強くくびれ口縁は直線的に外傾する。	整形は指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	Ⅲ 類
◇-120	◇	◇	17.0 (7.3) — —	口縁部のみ残存する。頸部はくびれず、口縁は直立気味である。	整形は内外面共に指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	
◇-121	◇	◇	(4.6) — 4.0	底面のみ残存する。底面は平底気味の丸底で大きく開く。	整形は外面が平行タタキ、内面はナデである。胎土は粗く、破碎レキ、砂粒を多量に含む。	
22-2	SF 12	有溝土製円板	全長 5.6 全幅 4.9 全厚 1.6 重量 42g	やや楕円形を呈する円板で表裏面共に格子状の溝を数条施す。	胎土はやや粗く、白色鉱物を少量含む。	
◇-3	◇	◇	全長 5.6 全幅 4.2 全厚 1.4 重量 31g	やや楕円形を呈する円板で、表裏面共に格子状の溝を数条施す。	胎土はやや粗く、白色鉱物を少量含む。	
◇-4	◇	土師器 高杯	17.8 (7.9) — —	脚部は欠損する。杯部は底部に段を有し、体部、口縁は外反して開く。	整形は外面底部に僅かに指頭がみられ、他はナデである。胎土は精良で砂粒を含まない。	I 類
◇-5	◇	土師器 甕	(16.0) (12.7) — —	胴部下位は欠損する。胴部は丸味を持ち、頸部は緩やかにくびれ、口縁は緩やかに外傾し、端部を丸く納める。	整形は内外面共に指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	Ⅱ A 1 類
◇-6	◇	◇	17.4 (11.3) — —	胴部中位以下は欠損する。胴部は強く丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は外反する。	整形は内外面共に指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	Ⅲ ? 3 類
◇-7	◇	◇	— (15.8) — 2.5	底部のみ残存する。丸底の底部で大きく開く。	整形は内外面共に指頭及びナデである。内面底部にはヘラケズリがみられる。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	
◇-8	◇	土師器 甌	13.4 10.3 — —	鉢型を呈する多孔の甌で、底部に4孔を穿つ。底部は丸底で、体部は丸味を持たず、口縁はやや内傾気味に立ち上がる。	外面の整形は粗いナデ、内面は口縁が指頭、体部、底部が指ナデである。胎土は粗く、砂粒を少量含む。	
◇-9	◇	叩石	全長 12.4 全幅 11.0 全厚 5.5 重量 1060g	楕円形のやや扁平な自然産で、表裏面共中心部及び側縁全体に敲打痕がみとめられる。砂岩製である。		
23-1	SF 13	手捏ね土器	4.8 3.8 — 3.0	平底の底部より、体部はやや丸味を持ち、立ち上がる。	整形はやや粗く、内外面共に指頭、ナデである。胎土はやや精良である。	Ⅱ A 類

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
23-2	SF 13	土師器 碗	13.6 5.2 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は直立気味である。	整形は内外面共にナデである。胎土はやや精良で砂粒を少量含む。	Ⅱ A 1 類
〃-3	〃	〃	3.8 5.5 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は直立気味に立ち上がる。	整形は内外面共に底部が指頭、他はナデである。胎土はやや精良で砂粒を微量含む。	〃
〃-4	〃	〃	12.4 6.3 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁はやや内湾気味に立ち上がる。やや深い碗である。	整形は内外面共にナデである。胎土はやや粗く、大粒の砂粒を多量に含む。	〃
〃-5	〃	〃	9.0 5.9 — —	小型の碗で、丸底の底部より体部は丸味を持ち、口縁は内湾気味に立ち上がった後、口縁端部を外反りさせる。	整形は内外面共に、底部が指頭で他はナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	Ⅱ A 3 類
〃-6	〃	〃	14.4 6.4 — —	丸底の底部より体部は丸味を持ち、口縁は直立気味に立ち上がる。	整形は内外面共にナデである。胎土はやや粗く、砂粒を多量に含む。	Ⅱ B 1 類
〃-7	〃	〃	15.0 6.5 — —	尖り気味の底部より、体部は丸味を持たず、口縁は直立気味である。	外面の整形は体部・底部が指頭、ナデ、内面は指頭、ナデでヘラケズリが僅かにみられる。胎土はやや精良で、砂粒を少量含む。	Ⅲ B 1 類
〃-8	〃	〃	17.2 7.0 — —	大振りの碗で鉢型に近い。底部はやや尖り気味で、体部は丸味を持ち、口縁は内湾気味に立ち上がる。	整形は内外面共にナデである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	Ⅲ C 1 類
24-9	〃	〃	14.3 6.3 — 6.0	平底の底部より、体部は余り丸味を持たず、口縁は直立気味に立ち上がり、口縁端部が僅かに外反する。	整形は外面底部脇が指頭、口縁は強くヨコナデ、他はナデである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	Ⅳ A 1 類
〃-10	〃	〃	14.1 6.4 — —	丸底気味の平底より、体部は丸味を持たず、口縁はやや外傾する。	外面の整形は指頭、ナデ、内面は指頭、ナデ、口縁を強くヨコナデする。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	Ⅳ B 1 類
〃-11	〃	〃	14.2 5.2 — 5.5	平底の底部より体部は丸味を持ち、口縁は内湾気味に立ち上がる。	整形は内外面共にナデである。胎土はやや粗く、大粒の砂粒を少量含む。	〃
〃-12	〃	土師器 脚付碗	14.8 (7.7) — —	脚部は欠損する。碗底部から体部は丸味を持ち、口縁はやや内湾する。	整形はナデで、口縁を強くナデする。胎土はやや粗く、砂粒を微量含む。	I 類
〃-13	〃	土師器 高坏	16.8 13.4 — 13.0	裾部はやや平坦で、脚部は膨らみを持ち、坏接合部ですぼまり、坏底部は段を有し、体部が外傾気味に立ち上がり、口縁は外反する。	整形は脚部内は粗く、他はナデである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	I C 類
〃-14	〃	〃	18.0 11.2 — 11.6	裾部は平坦で脚部はやや膨らみを持った柱状で坏底部は段を有し、体部、口縁は開く。	整形はナデである。胎土は粗く、大粒の破砕礫を多量に含む。	〃
〃-15	〃	〃	16.0 (6.5) — —	脚部は欠損する。坏底部に段を有し、体部、口縁は外反する。	整形は内外面共にナデである。胎土は粗く、大粒の破砕礫を多量に含む。	I 類
〃-16	〃	〃	19.0 (7.5) — —	脚部は欠損する。坏の底部はやや段を有し、体部、口縁は緩やかに外反し、開く。	整形は内外面共にナデである。胎土はやや粗く、大粒の砂粒を少量含む。	Ⅱ 類
〃-17	〃	〃	19.0 (9.2) — —	脚部は欠損する。坏底部にやや段を有し、体部、口縁は緩やかに外反する。	整形は内外面共にナデである。胎土はやや粗く、大粒の砂粒を少量含む。	〃

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
24-18	SF 13	土師器 高坏	16.2 (8.1) — —	脚部は欠損する。坏底部は僅かに段を有し、体部、口縁は緩やかに外反する。	整形は内外面共にナデである。胎土はやや粗く、大粒の砂粒を少量含む。	Ⅱ類
〃-19	〃	〃	18.8 (6.2) — —	脚部を欠損する。坏底部は僅かに段を有し、体部、口縁は開く。	整形は内外面共にナデである。胎土は粗く、砂粒を少量含む。	〃
〃-20	〃	土師器 甕	10.4 21.8 14.4 —	やや小型の甕で、丸底の底部より胴部は余り丸味を持たず、頸部はくびれず、口縁は緩やかに外傾する。	整形は粗く、指頭及びヘラケズリ、ナデである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	I A 1類
〃-21	〃	〃	14.4 24.9 16.4 —	やや平底気味の丸底から、胴部は僅かに丸味を持ち頸部はくびれず、口縁は緩やかに外傾する。	整形は内外面共にやや粗く、指頭である。胎土も粗く、砂粒を多量に含む。	I B 1類
〃-22	〃	〃	13.6 (17.4) — —	底部は欠損する。体部は丸味を持たず、頸部はくびれず、口縁はやや外傾気味に直立する。	外面の整形は指頭、ナデ、内面は指ナデ、僅かにヘラケズリがみられる。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	I C 1類
〃-23	〃	〃	15.8 28.1 23.0 —	丸底の底部より、胴部は丸味を持ち、頸部はすぼまり、口縁は緩やかに外傾する。	整形はナデである。器内は全体的に薄い。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	Ⅱ A 1類
25-24	〃	〃	15.4 25.2 19.6 —	丸底の底部より、胴部は丸味を持ち頸部はすぼまり、口縁は緩やかに外傾する。	整形は内外面共に指頭及びナデである。胎土はやや粗く、砂粒を多量に含む。	Ⅱ B 1類
〃-25	〃	〃	15.8 27.2 — 2.0	丸底の底部より、胴部は丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は外傾する。	整形は内外面共にナデで僅かに指頭がみられる。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	Ⅱ B 2類
〃-26	〃	〃	13.8 (20.8) — —	底部は欠損する。やや小型の甕である。胴部は丸味を持ち、頸部はすぼまり、口縁は緩やかに外傾する。	整形はやや丁寧で指頭及びナデ、僅かにヘラケズリがみられる。胎土は精良で砂粒を少量含む。	Ⅱ C 1類
〃-27	〃	〃	20.2 (31.6) — —	底部は欠損する。胴部は丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は外傾する。	整形は指頭及びナデで、僅かにヘラケズリがみられる。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	Ⅱ C 2類
〃-28	〃	〃	18.2 (12.1) — —	胴部下位以下は欠損する。胴部上位はやや丸味を持ち、頸部はややすぼまり、口縁は緩やかに外傾する。	整形は内外面共に丁寧で指頭及びナデである。胎土は精良で砂粒を少量含む。	Ⅱ C 1類
〃-29	〃	土師器 小型甕	12.0 17.8 — 4.0	丸底の底部より、胴部は強く丸味を持ち、頸部が緩やかにくびれ、口縁は緩やかに外傾し、壺形に近い。	外面の整形はタテヘラケズリ、ナデ、底縁は指頭、内面はヨコヘラケズリ、ナデである。胎土はやや精良で、砂粒を微量含む。	Ⅲ A 1類
〃-30	〃	土師器 甕	14.0 25.9 — —	やや尖り気味の丸底から胴部は強く丸味を持ち、頸部がくびれ、口縁は強く外反する。	外面の整形はナデ、内面はヘラケズリ、指頭及びナデである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	Ⅲ A 3類
26-31	〃	〃	17.6 22.6 20.5 —	丸底の底部より胴部は強く丸味を持ち、頸部はくびれず、口縁は緩やかに外傾する。	整形はヘラケズリ、指頭、ナデでやや粗い。胎土はやや粗く、砂粒を多量に含む。	Ⅲ B 1類
〃-32	〃	〃	16.0 (22.0) 19.3 —	底部の先端部を欠損する。丸底の底部より、胴部は強く丸味を持ち、頸部が強くくびれ、口縁は「く」字状に外傾する。	整形はやや丁寧で頸部にヘラケズリ、他は指頭及びナデである。胎土は粗く砂粒を多く含む。	Ⅲ B 2類
〃-33	〃	土師器 甕	20.4 13.0 — 6.2	鉢型の単孔の甕で、底部は平底で体部は余り丸味を持たず、大きく開く。	外面の整形は粗いナデ、内面はハケ、ヘラケズリ、ナデである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	

挿入番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
26-34	SF 13	土師器 甌	— (14.0) —	単孔の甌で、底部に円板状の粘土を貼付し、やや高台状にし、体部はやや丸味を持って立ち上がる。口縁部は欠損する。	外面の整形は粗いナデ、内面はヘラケズリ、ナデである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	
〃-35	〃	〃	— (9.2) — 1.0	3孔を穿った甌で、丸底の底部より、体部は丸味を持って立ち上がる。	外面の整形はナデ、内面はヘラケズリ、指ナデである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	
〃-36	〃	叩き石	全長 12.4 全幅 10.9 全厚 5.4 重量 1050g	楕円形はやや扁平な礫を使用し、表裏面共に中心部を敲打し凹む。また側縁も敲打する。花崗岩製。		
27-2	SF 14	土師器 碗	12.6 (4.0) — —	丸底の底部より、体部はやや丸味を持ち、口縁は開く。器高に比して、口縁が開く。	整形は内外面共にナデである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	V類
〃-3	〃	土師器 高杯	16.8 (6.1) — —	脚部は欠損する。坏底部外面には残らず、丸味を持つもの、内面には僅かに段を有する。体部、口縁は外傾する。	整形はナデである。胎土は粗く、砂粒を少量含む。	Ⅲ類
〃-4	〃	〃	— (5.0) — 11.5	脚部のみ残存する。裾部は立ち上がり、脚部は下部がやや膨らみを持つ。	整形は脚部内は粗く、他はナデである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	A類
〃-5	〃	〃	— (6.6) — 11.3	坏部は欠損する。裾部はやや平坦で、僅かに立ち上がり、脚部は柱状を呈する。	整形はナデである。胎土は粗く、砂粒を少量含む。	B類
〃-6	〃	土師器 甕	18.6 (10.9) — —	胴部中位以下は欠損する。胴部は丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は外傾する。	整形は内外面共に指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を微量含む。	Ⅱ?2類
〃-7	〃	〃	16.7 (7.8) — —	胴部上位以下は欠損する。胴部は丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は外傾する。	外面整形は、ヘラケズリ、指頭、ナデである。特に口縁は強くヨコナデを施す。内面はヨコナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	Ⅱ類
〃-8	〃	〃	18.4 (17.6) — —	胴部下位以下は欠損する。胴部は強く丸味を持ち、頸部も強くくびれ、口縁は「く」字状に外傾する。	整形は内外面共にナデで、僅かに指頭がみられる。胎土は精良で、砂粒を微量含む。	ⅢA2類
28-1	SF 15	石製 勾玉	全長 5.5 全幅 1.7 孔径 0.5~0.2 重量 40.2g	全長5.5cmを測る大型の勾玉で、頸部に表から裏へ穿孔する。	全体的に丁寧な仕上げで、僅かに擦痕がみられるのみである。石質は不明だが、濃緑色で養老石か碧玉製か。	
〃-2	〃	土製横造鏡	全長 4.6 全幅 4.1 全厚 2.1	ほぼ円形を呈し、やや低い鈕は孔を有する。	整形は表面は指頭、ナデ、裏面はナデである。胎土はやや精良で、砂粒を微量含む。	I A類
〃-3	〃	〃	全長 3.7 全幅 3.7 全厚 3.5	スタンプ状を呈する。柱状の鈕には孔を有する。	表裏面共に指頭、ナデである。胎土はやや精良で、砂粒を微量含む。	Ⅲ類
〃-4	〃	手捏ね土器	4.0 2.7 — —	平底丸味の丸底で底部から体部は直線的に外傾し、鉢型を呈する。	整形は内外面共に指頭である。胎土はやや精選で少量砂粒を含む。	I B類
〃-5	〃	〃	4.6 3.5 — 1.4	丸底の底部より、体部は丸味を持ってやや開き気味に立ち上がる。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデである。胎土は精良である。	〃
〃-6	〃	〃	8.5 5.8 — —	鉢型を呈する。丸底の底部より、体部はやや丸味を持って開く。大型である。	外面は指頭、内面は指ナデである。胎土は精良で砂粒を微量含むのみである。	I D類

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
28-7	SF 15	手捏ね土器	7.8 5.7 — 2.0	小さな平底を有する底部より、体部はやや丸味を持ち、外傾し立ち上がる。大型である。	外面下位はヘラケズリ、内面下位は指ナデ、他は指頭及びビナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	Ⅵ A 類
〃-8	〃	〃	7.6 5.1 — 4.6	平底の底部より、体部はやや丸味を持ち外傾し立ち上がる。やや大型である。	外面下位が指頭、内面は指ナデである。胎土は粗く、砂粒を多く含む。	〃
〃-9	〃	〃	6.0 7.0 — 4.0	壺型を呈する。平底の底部より、丸味を持ち、一旦くびれて直線的に立ち上がる。やや粗い造りで大型である。	整形は、外面が指頭、内面がヘラナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	Ⅵ B 類
〃-10	〃	土師器 碗	13.0 6.1 — —	丸底の底部より、やや丸味を持ち開き気味に立ち上がり、口縁端部はやや内湾させる。	整形は、口縁部内外面を強くヨコナデし、底部は指頭である。胎土はやや精良で砂粒を少量含む。	Ⅱ A 1 類
〃-11	〃	〃	13.0 6.6 — 4.2	平底気味の丸底の底部から、体部は内湾気味に立ち上がり更に口縁端部を若干内湾させる。やや深い碗である。	外面整形は体部下位に指頭、タテナデ、体部上位はヨコナデ、内面もヨコナデである。胎土はやや精選され、砂粒を少量含む。	〃
〃-12	〃	〃	13.0 5.2 — —	丸底気味の底部より丸味を持って立ち上がり、口縁は直立する。	外面の整形は底部から胴部までが粗いナデ、口縁及び内面は丁寧なナデである。胎土は精選で砂粒を少量含む。	〃
〃-13	〃	〃	12.2 5.6 — 1.5	丸底の底部より、体部は丸味を持たず外傾し、口縁は直立し、端部は内湾気味である。	底部及び体部は粗いナデ、口縁及び内面は丁寧なナデを施す。胎土は粗く、破砕礫 1~3 mm を多量に含む。	Ⅱ A 2 類
〃-14	〃	〃	9.6 5.4 — —	小型の碗で、丸底の底部より体部は丸味を持ち、口縁は直立気味に立ち上がり、口縁端部を鈎反りさせる。	外面底部の整形は指頭、内面に僅かに指頭のみられ、他はナデである。胎土は精良で砂粒を微量含む。	Ⅱ A 3 類
〃-15	〃	〃	14.8 6.3 — 4.0	丸底の底部より、体部から丸味を持って立ち上がり、口縁はやや直立気味に立ち上がる。	整形は内面及び外面口縁を強くナデ、外面体部は指頭である。胎土はやや粗く、砂粒を多く含む。	Ⅱ B 1 類
〃-16	〃	〃	14.8 5.6 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持って立ち上がり、口縁は直立気味に立ち上がる。	整形は内外面共にナデを施す。胎土は精良だが、砂粒を多量に含む。	〃
〃-17	〃	〃	14.0 5.3 — 8.0	丸底の底部より、体部はやや丸味を持ち、口縁は直立気味に立ち上がる。	整形は内外面共にナデである。胎土は精選で砂粒を少量含む。	Ⅱ B 1 類
〃-18	〃	〃	16.0 8.9 — —	丸底の底部より、体部はやや丸味を持ち、口縁は直線的に外傾する。やや深い碗である。	整形は内外面共にヘラケズリ、指頭、ナデでやや粗い。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	〃
〃-19	〃	〃	12.8 (3.1) — —	皿状の碗で、丸底より体部は開いて、口縁は緩やかに立ち上がる。	整形は内外面共にナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	V 類
〃-20	〃	〃	10.9 4.9 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は内傾気味に立ち上がる。	外面底部、体部はハケ、口縁を強くナデ、内面もナデである。胎土はやや精選で、砂粒を多く含む。	〃
〃-21	〃	土師器 鉢	19.2 8.4 — —	丸味を持った平底から、体部は直線的に外傾し、口縁に至る。	整形は内面及び外面上部はナデ、外面下位は指頭、底部はヘラナデか。胎土はやや粗く、砂粒を多く含む。	〃
〃-22	〃	〃	16.0 7.6 — —	タタキを有する碗で、やや尖り気味の底部より体部はやや丸味を持ち、口縁は緩やかに立ち上がる。	外面の整形はタタキ、内面はハケである。胎土は粗く、大粒の砂粒を多量に含む。	〃

押図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
28 - 23	SF 15	土師器 鉢	11.0 5.5 — —	小型の鉢で尖り気味の底部より、 体部はやや丸味を持ち、口縁は直 立気味に立ち上がる。	外面の整形はタタキ、内面はハ ケ、底部が指頭である。胎土は 精良で砂粒を含まない。	
〃 - 24	〃	〃	12.0 6.4 — 3.2	小型の鉢で、小さな平底より、体 部、口縁は直線的に外傾する。	外面の整形はタタキ、内面はハ ケである。胎土は精良で砂粒を 含まない。	
〃 - 25	〃	〃	17.8 (5.2) — —	底部は欠損する。体部はやや丸味 を持ち、口縁は緩やかに外傾する。	外面の整形はタタキ、内面はナ デである。胎土はやや粗く、砂 粒を多量に含む。	
〃 - 26	〃	土師器 脚付碗	13.2 (6.6) — —	脚部は欠損する。碗底部から体部 は丸味を持ち、口縁は僅かに内湾 する。	整形は指頭、及び粗いナデであ る。胎土はやや粗く、砂粒を少 量含む。	I類
〃 - 27	〃	〃	13.4 (8.6) — —	脚部は欠損する。碗底部から体部 は丸味を持ち、口縁は僅かに内湾 する。	整形は体部外面はヘラケズリ、 底部は指頭、他はナデである。 胎土はやや精良で、砂粒を微量 含む。	〃
〃 - 28	〃	〃	14.2 (9.6) — —	脚部は欠損する。底部から体部は 丸味を持ち、口縁はやや内湾する。	整形は碗内面にヘラケズリ、外 面は指頭が僅かにみられ、他は ナデである。胎土はやや精良で、 砂粒を微量含む。	〃
〃 - 29	〃	土師器 高坏	17.0 (5.8) — —	脚部は欠損する。坏底部に段を有 し、体部、口縁は外反する。	整形はナデである。胎土はやや 粗く、砂粒を少量含む。	〃
29 - 30	〃	〃	16.4 (6.5) — —	脚部は欠損する。坏底部はやや段 を有し、体部、口縁は外反する。	整形はナデである。胎土は粗く、 大粒の破砕礫を多量に含む。	II類
〃 - 31	〃	〃	16.6 (7.4) — —	脚部が欠損する。坏底部に僅かに 段を有し、体部、口縁は緩やかに 外反する。	整形はナデである。胎土はやや 粗く、砂粒を少量含む。	〃
〃 - 32	〃	〃	18.0 (7.0) — —	脚部は欠損する。坏底部は丸味を 持ち、内面にも段を有せず、体部、 口縁は直線気味に開く。	整形は外面底部が指頭、他はナ デである。胎土はやや粗く、砂 粒を少量含む。	III類
〃 - 33	〃	〃	— (6.9) — —	坏部は欠損する。裾部は開き立ち 上がる。	整形はナデである。胎土はやや 粗く、砂粒を少量含む。	A類
〃 - 34	〃	〃	— (6.2) — 11.0	坏部は欠損する。裾部はやや平坦 で、やや立ち上がり、脚部は影み を持つ。	整形はナデである。胎土は粗く、 砂粒を多量に含む。	B類
〃 - 35	〃	〃	10.0 (5.4) — —	坏部は欠損する。裾部は平坦で、 脚部はやや膨らみを持つ。	整形は脚部内はヘラナデ、指頭、 他はナデである。胎土は精良で、 砂粒を微量含む。	C類
〃 - 36	〃	土師器 小壺	11.7 11.4 — —	丸底の底部より体部は丸味を持っ て立ち上がり、頸部で若干くびれ 直立気味に立ち上がった後、口縁 端部が吻に開く。	外面整形は底部から体部下位は 粗くナデ、上位から頸部及び口 縁内面は強くナデの。胎土は精 良で砂粒を微量含む。	II類
〃 - 37	〃	土師器 壺	— (8.5) 14.8 —	口縁は欠損するが、長頸壺と考え られる。丸底の底部から体部は球 形を呈する。	内外面共に「冴」なナデ、また外 面は赤彩を施す。胎土はやや精 良で砂粒を少量含む。	III類
〃 - 38	〃	土師器 短頸壺	11.5 11.5 15.0 —	丸底から胴部が大きく中位で膨ら み、靠盤玉状を呈し、口縁は短か く、緩やかに外傾する。	外面整形は斜行ハケ及びヨコナ デ、胴部上位はヨコナデで少し ハケを残す。中位は斜行ハケ、 中位から下位にかけてはヨコハ ケ、下位・底部はナデ。胎土は 精選され、少量砂粒を含む。胴 部中位は黒変する。	IV類

挿入番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
29 - 39	SF 15	土師器 壺	17.5 43.4 36.2 2.6	丸底の底部より、胴部は大きく丸味を持ち、口縁は複合である。	整形はナデである。胎土は粗く、大粒の砂粒を多量に含む。	Ⅳ類
〃 - 40	〃	土師器 甕	14.8 30.5 20.2 6.0	平底の底部より、胴部は丸味を持ち、頸部はすぼまり、口縁は長く直立気味である。	整形はやや粗く指頭である。頸部に僅かにヘラケズリがみられる。胎土はやや粗く砂粒を多量に含む。	I A 1 類
〃 - 41	〃	〃	15.6 23.5 17.6 —	丸底の底部より、胴部下位が丸味を持ち、下膨れを呈し、中位から上位は丸味を持ち、頸部はくびれずに、口縁は短かく緩やかに外傾する。	整形は粗く、ヘラケズリ、指頭、ナデである。胎土は粗く砂粒を多量に含む。	I B 1 類
〃 - 42	〃	〃	15.0 25.5 — —	丸底より緩やかに立ち上がり、頸部も余りくびれず、口縁はやや「く」字状に外傾する。	外面の整形は口縁部及び胴部上位にハケが僅かに施され、また指頭もみられ、他はナデである。内面は指頭、ナデである。胎土はやや粗く砂粒を多量に含む。	〃
〃 - 43	〃	〃	14.6 (21.5) 16.7 —	底部は欠損する。胴部は余り丸味を持たず、また頸部もくびれず、口縁は外傾気味に緩やかに立ち上がり、頸部は若干内傾させる。	外面整形は指頭及びナデで、胴部中位にヘラナデを施し、内面胴部上位にも横位のヘラナデを施す。胎土はやや粗く、砂粒を多量に含む。	〃
30 - 44	〃	〃	18.0 (17.0) — —	胴部下位は欠損する。胴部は余り丸味を持たず、また頸部もくびれず、口縁は外傾気味に緩やかに立ち上がり、頸部は若干内傾させる。	外面整形は指頭及びナデで、口縁及び胴部上・中位にヘラナデを施す。内面にも僅かにヘラナデを施す。胎土はやや粗く砂粒を多量に含む。	I C 1 類
〃 - 45	〃	〃	17.0 (16.3) — —	底部は欠損する。胴部は丸味を持たず直立気味に立ち上がり、頸部もくびれず、口縁は外傾し、最大径を口縁に有する。	整形はやや粗く、外面、頸部をヘラケズリ、内面もヘラケズリ及び指頭で他はナデである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	I C 2 類
〃 - 46	〃	〃	19.4 (18.5) — —	底部は欠損する。胴部は直立気味に立ち上がり、頸部はくびれず、口縁は外傾し、最大径を口縁に有する。	整形は粗く、ヘラケズリ、指頭である。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	〃
〃 - 47	〃	土師器 小型甕	12.6 20.0 16.8 —	丸底の底部より胴部は丸味を持ち頸部がすぼまり、口縁は「く」字状に外傾する。	内外面共に整形は粗くナデの。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	Ⅱ A 2 類
〃 - 48	〃	土師器 甕	20.1 27.5 — —	丸底の底部より、胴部は強く丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁はやや直線気味に外傾する。	整形は内外面共に指頭を僅かに残すものの、丁寧なナデを施す。胎土は精良で砂粒を少量含む。	Ⅱ A 1 類
〃 - 49	〃	〃	18.0 (19.7) — —	底部は欠損する。胴部は強く丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は外傾して立ち上がる。	整形は内外面共にやや粗く、指頭及びナデである。胎土はやや粗く、砂粒を多量に含む。	〃
〃 - 50	〃	〃	16.6 26.5 — —	丸底の底部より、胴部は余り丸味を持たず頸部はくびれずに口縁は緩やかに外傾する。	整形は内外面共にやや丁寧なナデの。胎土はやや精良で砂粒を少量含む。	Ⅱ A 2 類
31 - 51	〃	〃	17.0 28.5 21.5 3.0	器型は丸底から胴部中位に最大径を持ち、頸部がすぼまり口縁は「く」字状に外傾する。ややⅡ類に近い器形を呈する。	外面整形は口縁部が指頭→ヨコナデ、胴部上部は指頭→斜行ハケ→斜行ナデ、中位は指頭→横ハケ→横ナデ、下位は指頭→斜行ハケ→斜行ナデである。内面も外面と同様にハケ目は粗い。胎土は砂粒を多量に含む。	〃
〃 - 52	〃	〃	16.4 (22.5) 21.4 —	底部は欠損する。胴部は余り丸味を持たず中位に最大径を持ち、頸部はくびれ、口縁は「く」字状に外傾する。	外面整形は指頭及びナデ、内面は指頭、ヘラケズリ、ナデである。胎土はやや精良で砂粒を少量含む。	〃

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
31 - 53	SF 15	土師器 甕	19.4 26.2 — 4.6	丸底の底部より胴部は余り丸味を持たず、上位がやや張り、頸部も余りくびれずに口縁は緩やかに外傾する。	整形はやや粗く内外面共に指頭及びナデである。胎土はやや粗く砂粒を多量に含む。	Ⅱ B 1 類
〃 - 54	〃	〃	15.8 24.4 19.7 —	丸底の底部より胴部はやや強く丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は外傾する。	整形は指頭を残し、やや粗くナデる。胎土はやや粗く、砂粒を多量に含む。	〃
〃 - 55	〃	〃	17.0 27.5 — 2.0	丸底の底部より、胴部は強く丸味を持ち、卵形を呈し、頸部は強くすばまり、口縁は緩やかに外傾する。	整形は内外面共にナデで指頭を消す。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	〃
〃 - 56	〃	〃	14.0 22.0 — —	底部が僅かに欠損する。丸底の底部より胴部は丸味を持ち、頸部はややくびれ、口縁は緩やかに外傾する。	整形は外面底部、頸部がヘラケズリ、他は指頭及びナデである。胎土はやや粗く砂粒を多量に含む。	〃
32 - 57	〃	〃	14.6 24.8 17.6 —	底部はやや尖り気味の丸底で、胴部は余り丸味を持たず、頸部も余りくびれずに口縁はやや反り気味に外傾する。	整形はやや粗く、指頭及びナデである。胎土はやや精良で砂粒を少量含む。	〃
〃 - 58	〃	〃	19.2 (21.1) — —	底部は欠損する。胴部は丸味を持たず、頸部もくびれず、口縁は一旦直立気味に立ち上がった後、緩やかに外傾する。	整形は内外面共に粗く指頭及びナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	〃
〃 - 59	〃	〃	18.3 27.0 — —	底部を若干欠損する。丸底の底部より胴部は丸味を持ち、頸部がくびれ、口縁は「く」字状に外傾する。	整形は指頭及びナデで底部内面にヘラケズリである。胎土はやや粗く砂粒を多く含む。	Ⅱ B 2 類
〃 - 60	〃	〃	20.0 (20.5) — —	底部は欠損する。胴部は丸味を持ち、頸部はくびれ口縁は「く」字状に外傾する。	整形は胴部内外面に僅かにヘラケズリ、他は指頭及びナデである。胎土は粗く砂粒を少量含む。	〃
〃 - 61	〃	〃	18.4 (22.8) — —	底部は欠損する。胴部は強く丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は「く」字状に外傾する。	整形はやや丁寧な外面に指頭を僅かに残し、他はナデである。胎土は精良で砂粒を多量に含む。	〃
〃 - 62	〃	〃	20.0 (26.2) 22.6 —	底部は欠損する。胴部は余り丸味を持たず、頸部はややくびれ、口縁は直立気味でやや外傾する。	整形は内外面共にやや粗くナデる。胎土はやや粗く、砂粒を多量に含む。	〃
33 - 63	〃	〃	15.0 23.0 — —	器形は丸底で、胴部下位に最大径を持ち、やや下膨れ気味で、頸部がすばまり、口縁は強く外反する。ややⅡ類に近い器形を呈する。	外面整形は口縁部がヨコナデ、胴部上位もヨコナデ、中位は斜行、タテのナデ、下位はタテナデ。また胴部上位から中位にかけて指頭も多くみられる。内面も外面整形と同様である。胎土は砂粒を多量に含む。	Ⅱ B 3 類
〃 - 64	〃	〃	18.5 22.7 — 5.0	平底の底部より緩やかに立ち上がり、頸部はすばまらず、直立気味に立ち上がる。最大径は胴部上位にあるものの、口径も同等に近い。内面には、輪積み痕を残す。	外面整形はヨコナデ、指頭、内面はヨコナデ、底部に少しハケ目が観察される。胎土は比較的精選され、砂粒を多量に含む。	Ⅱ C 1 類
〃 - 65	〃	〃	17.8 22.8 17.6 1.5	丸底の底部より、胴部は丸味を持たず、頸部はくびれずに口縁が直線的に外傾する。	整形は内外面共に丁寧で僅かに指頭を残す。胎土は精良で砂粒を微量含む。	〃
〃 - 66	〃	〃	21.1 (21.4) — —	胴部下位は欠損する。胴部は丸味を持ち、頸部はややすばまり、緩やかに外傾する。胴部上位に最大径を有し、また口縁も最大径に近い口径を有する。	外面整形は指頭及び若干のナデ、内面は指頭及び全体をヨコナデする。胎土は粗く砂粒を多量に含む。	〃

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
33-67	SF 15	土師器 甕	12.0 23.9 18.6 1.5	丸底の底部より、胴部は強く丸味を持ち卵形を呈し、頸部は強くくびれ、口縁は緩やかに外傾する。最大径は胴部中位に有する。	外面整形は口縁・肩部に若干ハケを残し、中位はヘラケズリ、下位から底部は粗くナデる。内面は口縁にハケ、他は指頭である。胎土は粗く砂粒を多量に含む。	Ⅲ A 1 類
〃-68	〃	〃	12.0 (24.5) — 4.0	平底の底部より、胴部は丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は直立気味に立ち上がり、頸部壺状の器形を呈する。	整形はナデ及び指頭、ヘラケズリが僅かにみられる。胎土は粗く砂粒を多量に含む。	〃
34-69	〃	〃	12.8 (17.5) — —	底部は欠損する。胴部は強く丸味を持ち、中位に最大径を有する。頸部はくびれ、口縁は直線的に外傾する。	整形は内外面共に指頭及びナデである。胎土はやや粗く、砂粒を多量に含む。	〃
〃-70	〃	〃	17.2 (16.2) — —	底部は欠損する。胴部は丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は緩やかに外傾する。	整形は外面の頸部及び胴部にヘラケズリを僅かに残し、他はナデである。胎土はやや粗く、砂粒を多量に含む。	〃
〃-71	〃	〃	16.0 (18.5) — —	底部は欠損する。胴部は強く丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は直線的に立ち上がる。	整形は内外面共に指頭及びナデである。胎土はやや粗く、砂粒を多量に含む。	〃
〃-72	〃	〃	15.5 23.2 — —	丸底の底部より、胴部は強く丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は「く」字状に外傾する。	整形は頸部にヘラケズリ、指頭を僅かに残し他はナデである。胎土はやや粗く、砂粒を多量に含む。	Ⅲ B 2 類
〃-73	〃	〃	16.6 22.4 19.7 —	丸底の底部より、胴部は強く丸味を持ち、頸部はくびれ口縁は直線的に外傾する。	外面整形は底部及び胴部下位はヘラケズリ、内面にはヘラナデ、また指頭及びナデである。胎土はやや精良で砂粒を多量に含む。	〃
〃-74	〃	〃	17.9 25.1 22.7 —	丸底の底部より、胴部は強く丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は直線的に外傾する。	整形は内外面共にヘラナデ、ナデを丁寧に施す。胎土は精良で砂粒を少量含む。	〃
35-75	〃	〃	20.0 23.3 — 3.5	丸底の底部より、胴部は強く丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は直線的に外傾する。	整形は内外面共に指頭及びナデである。胎土はやや粗く、砂粒を多量に含む。	〃
〃-76	〃	〃	17.4 21.4 — —	底部は欠損する。胴部は強く丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は直線的にやや外傾する。	外面整形は胴部中位に僅かにハケを残し、内面上位には、ハケを多用する。胎土はやや粗く、砂粒を多量に含む。	〃
〃-77	〃	〃	16.0 (13.6) — —	胴部下位は欠損する。胴部は丸味を持ち、頸部がすばまり、口縁は「く」字状に外傾する。	整形はナデ主体で、部分的に外面に指頭がみられる。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	〃
〃-78	〃	〃	16.2 (23.7) — —	底部は欠損する。胴部中位が強く張り、上位は丸味を持たず頸部に至り、口縁は短かく外傾する。	整形は内外面共にやや丁寧で、指頭及びナデである。胎土はやや精良で砂粒を少量含む。	Ⅳ 類
〃-79	〃	〃	17.5 (10.6) — —	胴部中位以下は欠損する。胴部は丸味を持ち、口縁がくびれ、口縁は長く「く」字状に外傾する。	整形は丁寧にヘラケズリ、指頭を僅かに残すのみで丁寧にナデる。胎土は精良で砂粒を微量含む。	Ⅱ ? 2 類
〃-80	〃	〃	14.6 (9.0) — —	胴部中位以下は欠損する。胴部はやや丸味を持ち、頸部がくびれ、口縁は緩やかに外傾する。	整形は内外面共にナデである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	Ⅱ ? 1 類
〃-81	〃	〃	18.8 (11.0) — —	胴部上位から口縁部のみ残存する。胴部は丸味を持ち、頸部はややくびれ口縁は外傾する。	外面整形はやや粗く、口縁内外面を丁寧にナデ、内面はヘラケズリ及びナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	〃

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
35-82	SF 15	土師器 小型甕	— — —	12.9 18.8 — —	尖底気味の小平底を有する底部から緩やかに立ち上がり、胴部も余り丸味を持たず、口縁はやや外傾気味に立ち上がる。	外面整形は全面叩きを施し、部分的にタテのヘラナデ、ハケが認められる。内面は胴部上位にハケを施し、他はナデ整形である。胎土は砂粒を多く含む。	Ⅲ類
〃-83	〃	土師器 甕	— — —	16.5 11.1 — —	鉢型の甕で底部に4孔を有するが、内1つは貫通していない。全体的にゆがみが大きく、楕円形を呈する。	外面整形はナデ及び指頭、内面は中位にヘラナデを巡らせ、他はナデである。胎土は少量砂粒を含む。	
36-84	〃	叩き石	全長 全幅 全厚 重量	10.0 9.7 4.5 722g	扁平な自然の円礫を使用し、表裏面共に中心部に敲打痕がみとめられ凹む。また側縁も敲打痕を残す。砂岩製である。		
〃-85	〃	〃	全長 全幅 全厚 重量	11.1 9.2 5.3 834g	楕円形の自然礫で表面のみに極く僅かに敲打痕が認められるのみである。砂岩製である。		
〃-86	〃	台石	全長 全幅 全厚 重量	20.5 28.4 5.7 5000g	大型の扁平な自然礫で、上部は意図的に折損させる。下部側面及び下部左右のコーナーに敲打痕がみられる。表面は余り使用痕は認められない。また裏面も同様である。砂岩製である。		
37-1	SF 16	手握ね土器	— — —	9.5 5.2 — 4.1	平底の底部より、体部は開き、更に口縁は大きく開く。やや大型で坏型を呈する。	整形はナデで、僅かに指頭を残す。胎土は粗く、大粒の砂粒を多量に含む。	Ⅳ類
〃-2	〃	土師器 碗	— — —	14.8 6.5 — 2.0	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は直立気味に立ち上がる。	整形は内外面共にナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	ⅡB1類
〃-3	〃	土師器 脚付碗	— — —	15.0 17.5 — —	輪高台状の脚より、碗底部、体部は丸味を持ち、口縁は直立気味に立ち上がる。	整形は内外面共に指頭、ナデ、内面に僅かにヘラケズリがみられる。胎土は粗く、砂粒を少量含む。	Ⅱ類
〃-4	〃	土師器 高坏	— — —	18.2 (7.0) — —	脚部は欠損する。坏底部には段を有し、体部、口縁は開く。坏部と脚部の接合は玉状の粘土塊による。	整形はナデである。胎土はやや粗く、大粒の砂粒を少量含む。	Ⅰ類
〃-5	〃	〃	— — —	16.9 (17.3) — —	脚部は欠損する。底部は僅かに段を有し、体部、口縁は外反する。坏部と脚部の接合は玉状の粘土塊による。	整形は内外面共にナデである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	Ⅱ類
〃-6	〃	土師器 甕	— — —	15.0 24.4 19.0 —	丸底の底部より、胴部は丸味を持ち、頸部は緩やかにくびれ、口縁は緩やかに外傾する。	整形は内外面共にナデで、内面に僅かに指頭がみられる。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	ⅡA1類
〃-7	〃	〃	— — —	14.4 24.5 21.1 —	丸底の底部より、胴部は強く丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は内湾する。	整形は内外面共にナデで僅かに指頭がみられる。胎土はやや粗く、砂粒を多量に含む。	Ⅳ類
〃-8	〃	〃	— — —	— (20.6) (20.0) —	口縁部は欠損する。丸底の底部より胴部は丸味を持つ。	整形は内外面共にナデである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	
〃-9	〃	土師器 甕	— — —	14.7 9.7 — —	鉢型の単孔の甕で、尖底の底部より、体部は開いて立ち上がる。	外面の整形は粗いナデ、内面は口縁を強くヨコナデ、体部は指ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	
38-12	SF 17	土製模造鏡	全長 全幅 孔径 重量	4.8 1.9 0.4 17g	不整形円形を呈し、鈕は孔を有する。	整形は表面は指ナデ、ヘラナデ、ナデ、裏面はナデである。胎土はやや精良で、砂粒を少量含む。	ⅠA類

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
38-13	SF17	土製模造鏡	全長 4.5 全幅 2.5 孔径 0.4 重量 22g	やや楕円形を呈し、やや高い鈕は孔を有する。	整形は表面は指頭、ナデ、裏面はナデである。胎土はやや精良で、白色鉱物粒を少量含む。	I A類
〃-14	〃	〃	全長 5.6 全幅 6.1 孔径 0.6 重量 47.8g	やや楕円形を呈し、鈕は孔を有する。	整形は表面が指頭、ナデ、裏面がナデである。胎土は精良である。	I B類
〃-23	〃	手握わ土器	2.4 2.1 — 0.4	丸底の底部より、体部は丸味を持って立ち上がり、内面に指を押し込んで成型し、小型のものである。	整形は内外面共にナデで、僅かに指頭がみられる。胎土は精良である。	I A類
〃-24	〃	〃	4.2 2.9 — 2.0	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁が僅かにくびれる。	整形は外面口縁が指頭、内面が指ナデ、口縁が指頭、他はナデである。胎土は精良である。	I B類
〃-25	〃	〃	3.3 3.1 4.0 —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は直立気味である。	整形は外面がナデ、内面が指ナデ、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	〃
〃-26	〃	〃	3.8 3.2 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持って立ち上がる。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、指頭である。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	〃
〃-27	〃	〃	3.4 3.7 — 1.2	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は直立気味に立ち上がる。	整形は外面が指頭、ナデ、内面がヘラナデ、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	〃
〃-28	〃	〃	4.2 4.7 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持って、やや内湾気味に立ち上がる。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、指頭である。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	〃
〃-29	〃	〃	4.7 4.5 — 2.0	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁はやや直立気味に立ち上がる。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、ナデである。胎土は精良である。	V類
〃-30	〃	〃	5.2 5.2 — 0.6	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は直立気味に立ち上がる。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、指頭である。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	I C類
〃-31	〃	〃	4.7 5.0 — 2.6	平底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は内湾気味に立ち上がる。	整形は外面がナデで、指頭を僅かに残す。内面は指ナデ、指頭、ナデである。胎土はやや粗く、白色鉱物粒を少量含む。	III B類
〃-32	〃	〃	4.6 4.6 5.8 —	やや平底気味の底部より、体部は丸味を持ち、口縁端部が僅かにくびれる。	整形は外面の口縁が指頭、内面が指ナデ、他はナデである。胎土は精良で砂粒を微量含む。	V類
〃-33	〃	〃	5.8 5.4 — 2.7	平底より体部は丸味を持ち、口縁端部が僅かにくびれる。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、指頭である。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	III B類
〃-34	〃	〃	4.8 5.2 — 2.8	平底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁端部が僅かにくびれる。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、指頭である。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	〃
〃-35	〃	〃	4.1 4.9 — 1.8	平底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁はやや内湾気味に立ち上がる。	整形は外面がナデで僅かに指頭、内面が指ナデ、ナデである。胎土はやや精良で、砂粒を微量含む。	〃
〃-36	〃	〃	4.9 5.6 — 3.4	平底の底部より、体部は丸味を持ち、直立気味に立ち上がる。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、ナデである。胎土は精良で、砂粒を微量含む。	〃

種目番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
38-37	SF 17	手握ねじ器		4.0 4.9 — 2.4	平底の底部より、体部はやや丸味を持ち、口縁は直立気味に立ち上がる。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、ナデである。胎土はやや精良で、白色磁物粒を少量含む。	Ⅲ B 類
〃-38	〃	〃		4.7 — 2.6	平底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁はやや直立気味に立ち上がる。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	〃
〃-39	〃	〃		4.6 4.8 — 2.3	平底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は直立気味に立ち上がる。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、ナデである。胎土は精良で、白色磁物粒を微量含む。	〃
〃-40	〃	〃		3.7 5.2 4.8 2.8	平底の底部より、体部はやや丸味を持ち立ち上がる。体部の深いものである。	整形は内外面共にナデで僅かに指頭がみられる。胎土は精良で砂粒を微量含む。	Ⅲ C 類
〃-41	〃	〃		3.6 5.6 — 1.6	小さな平底気味の底部より、体部は余り丸味を持たず立ち上がり、口縁は僅かに内湾する。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	〃
〃-42	〃	〃		4.5 5.0 — 3.8	平底の底部より、体部は余り丸味を持たず立ち上がり、口縁端部が僅かにくびれる。粗い造りである。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、指頭である。胎土はやや精良で砂粒を微量含む。	V 類
〃-43	〃	〃		5.5 6.1 — 1.0	平底の底部より、体部はやや丸味を持ち深く、口縁端部が僅かにくびれる。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	Ⅲ D 類
〃-44	〃	〃		4.2 6.0 6.0 3.2	平底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁端部が僅かにくびれる。	整形は外面口縁が指頭、他はナデ、内面が指ナデ、ナデである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	〃
〃-45	〃	〃		4.9 6.4 6.6 3.5	平底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁端部がくびれる。	整形は外面の口縁端部が指頭、他はナデ、内面が指ナデ、ナデである。胎土は精良である。	〃
〃-46	〃	〃		5.1 5.9 6.5 2.9	平底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁端部がややくびれる。	整形は外面が指頭、ナデ、内面が指ナデ、ナデである。胎土は精良である。	〃
〃-47	〃	〃		4.0 3.6 — 1.4	壺型を呈する。丸底の底部より、体部は強く丸味を持ち、口縁が内湾する。	整形は外面がナデ、僅かに指頭がみられ、内面が指頭、ナデである。胎土は、やや精良で、砂粒を微量含む。	Ⅳ B 類
39-48	〃	〃		4.2 4.3 — 1.6	壺型を呈し、丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁がくびれ短かく立ち上がる。	整形は外面口縁が指頭、内面がナデ、他はナデである。胎土は、やや粗く、砂粒を少量含む。	Ⅳ C 類
〃-49	〃	〃		4.2 4.4 4.6 —	壺型を呈する。やや平底気味の底部より、体部は丸味を持ち、頭部がくびれ、口縁が直立する。	整形は内外面共に指頭、ナデである。胎土はやや精良で、砂粒を微量含む。	Ⅴ A 類
〃-50	〃	〃		5.3 7.6 — —	甕型を呈し、やや平底の底部より、体部は余り丸味を持たず、口縁が僅かにくびれ、口縁端部が外反気味である。	整形は外面の口縁が指頭、体部がヘラケズリ、ナデ、内面が指ナデ、ナデである。胎土は精良で、砂粒を微量含む。	Ⅴ 類
〃-51	〃	土師器 碗		12.1 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は直立気味に立ち上がる。	整形は内外面共にナデである。胎土は精良で砂粒を微量含む。	Ⅵ A 1 類
〃-52	〃	〃		12.4 7.0 — 1.4	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は直立気味である。やや深い碗である。	整形は内外面共にナデである。胎土は精良で、大粒の砂粒を微量含む。	〃

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
39-53	SF 17	土師器 碗	9.0 6.4 — 4.0	やや平底気味の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は内湾気味に立ち上がり、口縁端部が外反りする。	整形は内外面共に底部に指頭がみられ、他はナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	ⅡA3類
〃-54	〃	〃	13.5 6.1 — —	平底気味の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は内湾気味に立ち上がり、口縁端部をやや外反りさせる。	整形は内面に僅かに指頭がみられ、他はナデである。胎土は精良で、砂粒を少量含む。	〃
〃-55	〃	〃	12.5 7.2 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は内湾気味に立ち上がり、口縁端部が僅かに外反りする。	整形は内外面共にナデで、内面に僅かにヘラケズリがみられる。胎土は精良で、砂粒を微量含む。	〃
〃-56	〃	〃	13.4 6.3 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部が外反りする。	整形は内外面共にナデである。胎土は精良で砂粒を微量含む。	〃
〃-57	〃	〃	14.4 5.8 — 3.0	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁はやや直立気味に立ち上がる。	外面の整形は指頭、ナデ、内面もナデで僅かにヘラケズリがみられる。胎土は精良で、砂粒を微量含む。	ⅡB1類
〃-58	〃	〃	14.7 6.6 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は直立気味に立ち上がる。	整形は内外面共に指頭、ナデである。胎土は精良で砂粒を含まない。	〃
〃-59	〃	〃	14.4 6.0 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は直立気味に立ち上がる。	整形は内外面共に僅かに指頭がみられ、他はナデである。胎土は精良で砂粒を微量含む。	〃
〃-60	〃	〃	16.0 7.5 — 5.4	やや平底気味の底部より体部は丸味を持ち、口縁はやや内湾気味である。	外面の整形は指頭、他はナデである。胎土は精良で、砂粒を微量含む。	ⅣB2類
〃-61	〃	土師器 脚付碗	13.6 8.8 — 10.6	長く「ハ」字状に開いた脚部より、碗の底部・体部は丸味を持ち、口縁はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部はやや外反する。	整形は指頭、ナデである。胎土は精良で、砂粒を微量含む。	ⅠB類
〃-62	〃	〃	14.0 9.8 — 10.0	長く「ハ」字状に開いた脚部から、碗の底部・体部は丸味を持ち、口縁はやや内湾気味に立ち上がり、口縁端部が僅かに外反する。	〃	〃
〃-63	〃	〃	10.6 6.8 — 5.5	短かく「ハ」字状に開いた脚部より、碗は丸味を持たず直立気味に外傾する。	整形は外面が指頭、ナデ、碗部内面が指ナデ、ヨコナデ、脚部内面がヘラケズリ、指頭である。胎土はやや精良で、砂粒を少量含む。	ⅢA類
〃-64	〃	土師器 高坏	17.4 (7.2) — —	脚部は欠損する。坏底部に強く段を有し、体部は外傾気味に立ち上がり、口縁が外反する。	整形はナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	Ⅰ類
〃-65	〃	土師器 小壺	— (6.5) 8.4 —	丸底の底部より、胴部は強く丸味を持ち、頸部はくびれる。口縁は欠損する。	外面の整形は丁寧なナデ、内面は指頭が僅かにみられ、ナデである。胎土は精良で、白色鉱物粒を少量含む。	V類
〃-66	〃	土師器 壺	10.0 10.3 — 3.0	丸底の底部より、胴部に強く丸味を持ち、頸部がくびれ、口縁は直立気味に立ち上がる。やや壺型に近い。	外面の整形は指頭、ナデ、内面はナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量、白色鉱物粒を多量に含む。	Ⅰ類
〃-67	〃	〃	11.7 11.0 — 11.5 —	丸底の底部より、胴部は強く丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は外傾する。	外面整形はヘラケズリ、ナデ、内面口縁はヘラケズリ、指頭他はナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量、白色鉱物粒を多量含む。	〃

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
39 - 68	SF 17	土師器 壺	11.0 (11.5) — —	底部は欠損するもの、丸底と考えられ、胴部は強く丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は「く」字状に外傾する。	整形は内外面共に指頭、ナデ、内面に僅かにヘラケズリがみられる。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	I 類
〃 - 69	〃	〃	10.3 13.8 13.6 —	丸底の底部より、胴部は丸味を強く持ち、頸部はくびれ、口縁は直立する。	外面の整形は指頭と丁寧なナデ、内面はナデとヘラケズリが僅かにみられる。胎土は精良で微砂粒を含む。	〃
〃 - 70	〃	〃	13.8 13.5 13.6 —	丸底の底部より、開いて立ち上がり、胴部上位に張りを持ち、頸部はややくびれ、口縁は外傾する。	外面の整形は指頭、ナデ、内面はヘラケズリ、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	II 類
〃 - 71	〃	〃	— 13.9 12.4 —	やや平底の底部より、やや丸味を持って立ち上がり、肩部が僅かに張る。口縁は欠損する。変型に近い。	整形は内外面共に指頭、ナデで内面に僅かにヘラケズリがみられる。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	〃
〃 - 72	〃	土師器 小型壺	10.0 14.6 10.8 —	丸底の底部より、胴部下位が丸味を持ち、頸部はくびれずに、口縁は緩やかに外傾する。	外面の整形は指頭、ナデ、内面はヘラケズリ、指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	I C 1 類
〃 - 73	〃	〃	11.4 18.5 14.2 2.0	丸底の底部より、胴部は丸味を持ち、頸部は緩くくびれ、口縁は緩やかに外傾する。	整形は内外面共にハケ、ヘラケズリ、指頭、ナデである。全体的にいびつな造りである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	II B 1 類
40 - 74	〃	土師器 壺	14.0 22.9 17.4 —	丸底の底部より、胴部は余り丸味を持たず、頸部は緩やかにくびれ、口縁は緩やかに外傾する。	外面整形は頸部がヘラケズリ、他はナデ、内面は胴部がヘラケズリ、他が指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	〃
〃 - 75	〃	〃	17.0 (18.3) — —	胴部下位以下は欠損する。胴部は丸味を持ち、頸部は緩やかにくびれ、口縁は緩やかに外傾する。	整形は内外面共に指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	〃
〃 - 76	〃	土師器 小型壺	14.0 20.0 17.4 —	丸底の底部より、胴部は丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は外傾する。小型壺の中でも比較的大型の分類に入る。	整形は内外面共に指頭、ナデである。胎土は精良で、砂粒を微量含む。	II B 2 類
〃 - 77	〃	土師器 壺	16.4 26.7 (19.9) —	丸底の底部より、胴部は閉き気味に立ち上がり、肩部がやや張り、頸部がくびれ、口縁は外傾する。	整形は内外面共にナデで、僅かにヘラケズリ、指頭がみられる。胎土はやや精良で、砂粒を少量含む。	〃
〃 - 78	〃	〃	16.6 22.9 17.8 —	丸底の底部より、胴部はやや丸味を持ち、頸部はややくびれ、口縁は直立気味に立ち上がった後、外傾し「コ」字状を呈する。	外面整形は指頭、ナデ、内面は口縁がヘラケズリ、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	II C 1 類
〃 - 79	〃	土師器 小型壺	14.0 19.8 15.1 —	丸底の底部より、胴部は余り丸味を持たず、頸部はくびれ、口縁は外傾する。全体的にややいびつである。	整形は内外面共に指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	II C 2 類
〃 - 80	〃	土師器 壺	19.6 25.0 — 2.0	丸底の底部より、胴部は僅かに丸味を持ち、肩部が僅かに張り、頸部は緩やかにくびれ、口縁は外傾する。	〃	〃
〃 - 81	〃	〃	21.2 27.4 23.1 —	丸底の底部より、胴部は強く丸味を持ち、頸部はすぼまり、口縁は外傾する。	外面整形は頸部がヘラケズリ、他は指頭、ナデ、内面は口縁にヘラケズリ、指頭、他は指頭である。胎土は精良で砂粒を微量含む。	III C 2 類
41 - 82	〃	土師器 小型壺	15.3 17.8 16.3 —	丸底の底部より、胴部は強く丸味を持ち、頸部は緩やかにくびれ、口縁は緩やかに外傾する。	整形は内外面共に指頭、ナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	III C 1 類

挿入番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
41 - 83	SF 17	土師器 小型甕	15.6 16.5 15.8 —	丸底の底部より、胴部は強く丸味を持ち、頸部は緩やかにくびれ、口縁は外傾する。	整形は内外面共に指頭、ナデである。胎土はやや精良で、砂粒を少量含む。	Ⅲ C 2 類
〃 - 84	〃	土師器 甕	— (20.6) 19.3 —	丸底の底部より、胴部は強く丸味を持つ。頸部はくびれる。口縁は欠損する。	外面整形は指頭、ナデ、底部にヘラケズリが僅かにみられる。内面はナデ、底部はヘラケズリである。胎土はやや粗く、砂粒を微量含む。	Ⅲ 類
〃 - 85	〃	土師器 大甕	27.9 30.5 — 10.0	平底の底部より、体部は丸味を持たず、開いて立ち上がる。頸部はくびれずに口縁は直立する。	整形はナデで、僅かに指頭、ヘラケズリがみられる。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	
〃 - 86	〃	土師器 甕	— (8.6) — 8.5	多孔式の甕で、平底の中央に1孔、回りに6孔を不整形長方形に大きく穿ち、体部は開いて立ち上がる。口縁は欠損する。	整形は内外面共にナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	
〃 - 87	〃	叩き石	全長 11.6 全幅 6.8 全厚 3.1 重量 470g	楕円形のやや扁平な自然産の表裏の中央部を敲打し、凹む。側縁部は僅かに敲打痕みられる。花崗岩製である。		
42 - 2	SF 18	鉢	14.1 7.4 — —	小型の鉢で、尖り気味の底部より、体部は僅かに丸味を持ち、口縁は開き気味に立ち上がる。	外面の整形はタタキ、ナデ、内面は強いナデ、ハケ、ヨコナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	
〃 - 3	〃	〃	15.0 6.5 — —	丸底の底部より、体部は丸味を持ち、口縁は緩やかに開き気味に立ち上がる。	整形は内外面共にハケである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	
〃 - 4	〃	〃	17.8 8.0 — —	尖り気味の底部より、体部は余り丸味を持たず、口縁は開く。	整形は外面がタタキ、ナデ、内面が指頭、ナデである。胎土は粗く、大粒の砂粒を多量に含む。	
〃 - 5	〃	〃	16.6 6.0 — 4.6	平底気味の小さな底部より、体部は僅かに丸味を持ち、口縁は開く。	外面の整形は下部がタタキ、口縁がナデ、内面はナデである。胎土は粗く、大粒の砂粒を多量に含む。	
〃 - 6	〃	〃	15.8 7.4 — 2.6	やや尖り気味の底部より、体部は僅かに丸味を持ち、口縁は開く。	整形は外面はハケで、体部・口縁は粗いハケ、内面はナデで僅かにハケがみられる。胎土は粗く、大粒の砂粒を多量に含む。	
〃 - 7	〃	〃	18.0 7.8 — 1.5	尖り気味の底部より、体部は余り丸味を持たず、口縁は開く。	外面の整形は底部がタタキ、他はナデ、内面はハケ、ナデである。胎土は粗く、大粒の砂粒を少量含む。	
〃 - 8	〃	〃	19.0 9.1 — —	平底気味の小さな底部より、体部は余り丸味を持たず、口縁は開く。	外面の整形は底部がタタキ、体部に僅かにハケがみられ、他はナデ、内面も僅かにハケがみられ、他はナデである。胎土は粗く、大粒の砂粒を多量に含む。	
〃 - 9	〃	〃	17.6 8.7 — —	尖り気味の底部より、体部は僅かに丸味を持ち、口縁は開く。	外面の整形はタタキ、内面はハケである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	
〃 - 10	〃	〃	17.6 8.3 — —	尖り気味の底部より、体部は余り丸味を持たず、口縁は開く。	外面の整形はタタキ、内面はハケ、ナデである。胎土は粗く、大粒の砂粒を少量含む。	
〃 - 11	〃	〃	24.0 15.2 — —	尖り気味の底部より、体部は丸味を持たず、口縁は大きく開く。	整形は外面体部に粘土帯がみられ、上はタタキ、ナデ下はハケ、内面はハケ、ナデである。胎土は粗く、砂粒を少量含む。	

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
42-12	SF 18	壺	18.4 (10.9) — —	胴部中位以下は欠損する。胴部は張りを持ち、頸部は強くくびれ、口縁はラッパ状に大きく開く。	整形は内外面共にナデである。胎土はやや粗く、砂粒を多量に含む。	
〃-13	〃	〃	22.2 (22.1) 33.6 —	胴部中位以下は欠損する。胴部に張りを持ち、頸部がくびれ、口縁はラッパ状に大きく開く。	外面の整形はナデ、内面は胴部上位が細かいソケである。胎土は粗く、大粒の砂粒を多量に含む。	
〃-14	〃	〃	25.6 (8.0) — —	口縁部のみ残存する。口縁はラッパ状に大きく開き、口縁端部を外に折り返す。	外面の整形は口縁上端と内面に僅かにハケがみられ、他はナデである。胎土は粗く、砂粒を多く含む。	
〃-15	〃	〃	— (11.8) — —	口縁端、胴部中位以下は欠損する。胴部上位は強く張りを持ち、頸部に斜格子の刻みを施した貼付突帯を付し、口縁は直立気味に緩やかに外反する。	外面の整形はナデ、内面はハケ、ナデである。胎土は粗く、破砕礫を多量に含む。	
〃-16	〃	〃	— (12.9) — —	口縁端、胴部中位以下は欠損する。胴部上位は強く張り、頸部に斜格子の刻みを施した貼付突帯を付し、口縁は直立する。	外面の整形はナデ、内面もナデで指頭が僅かにみられる。胎土はやや粗く、大粒の砂粒を少量含む。	
43-17	〃	甗	17.2 (17.7) — —	胴部下位は欠損する。胴部は丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は「く」字状に外傾する。	外面整形は胴部が平行タタキ、ヘラナデ、ヘラケズリ、ハケ、口縁が指頭、ハケ、ナデである。内面は口縁部がハケ、指頭、ヘラケズリで胴部はナデである。胎土はやや精良で砂粒を少量含む。	
〃-18	〃	〃	15.0 (7.6) — —	胴部中位以下は欠損する。胴部は丸味を持たず、頸部はくびれ、口縁は「く」字状に外傾する。	外面の整形はハケ、内面はナデ僅かにハケがみられる。胎土は粗く、大粒の砂粒を多量に含む。	
〃-19	〃	〃	19.2 (9.1) — —	胴部中位以下は欠損する。胴部は丸味を持たず、頸部は緩やかにくびれ、口縁は「く」字状に外傾し、口縁端部を外に折り返す。	整形は内外面共に斜位のハケである。胎土はやや精良で、砂粒を微量含む。	
〃-20	〃	〃	15.0 (9.4) — —	胴部中位以下は欠損する。胴部は余り丸味を持たず、頸部は緩やかにくびれ、口縁は「く」字状に外傾する。	外面の整形は余面が平行タタキ、内面がハケ、頸部の屈折部はヘラケズリ及び指頭である。胎土は精良で砂粒を微量含む。	
〃-21	〃	〃	17.2 (8.0) — —	胴部中位以下は欠損する。胴部は余り丸味を持たず、頸部はくびれずに、口縁が「く」字状に屈曲する。	外面の整形は胴部が平行タタキと僅かにハケ、口縁は指頭、内面はハケ、ナデである。胎土は精良で砂粒を微量含む。	
〃-22	〃	〃	26.4 (12.4) — —	胴部下位は欠損する。胴部は丸味を持ち、頸部はくびれ、口縁は「く」字状に外傾し、口縁端部を外方向に突き込むように彫らませる。やや小型の甗である。	外面の整形は平行タタキ、内面はナデで僅かにハケ、指頭がみられる。胎土はやや精良だが、大粒の砂粒を多量に含む。	
〃-23	〃	〃	12.6 (7.0) — —	胴部中位以下は欠損する。胴部は膨らみを持ち、頸部がすぼまり、口縁は「く」字状にやや直立気味に外傾する。	外面の整形は平行タタキ、内面は胴部がタテに強く指ナデを施す。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	
〃-24	〃	小型甗	14.3 (6.4) — —	胴部中位以下は欠損する。胴部はやや丸味を持ち、頸部がくびれ、口縁は外反する。	外面の整形はナデ、内面には僅かにハケがみられ、粗く仕上げる。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	
〃-25	〃	壺	— (5.3) — 5.9	底部破片で底に輪高台状に粘土紐を貼付する。底部は大きく開く。壺の底部と考えられる。	外面の整形は平行タタキ、内面は粗くナデである。胎土は粗く砂粒を多量に含む。	
〃-26	〃	〃	— (24.0) 24.9 5.4	小さな平底から大きく開いて立ち上がり肩部が強く張り、頸部はすぼまる。口縁は欠損する。甗と考えられる。	外面の整形は平行タタキ、底裏もタタキ、内面はナデで僅かにヘラケズリがみられる。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
43 - 27	SF 18	甕	— (20.8) — 3.0	口縁部は欠損する。小さな平底より、胴部は丸味を持って立ち上がる。	外面の整形は平行タタキ、内面の胴部上位は幅の広い横ハケ、中位以下はキメ細かい斜位のハケである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	
ク - 28	ク	ク	— (15.5) 15.8 —	尖り気味の丸底から余り開かず立ち上がり、口縁は欠損する。	外面整形は平行タタキ、内面はナデである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	
ク - 29	ク	ク	— (5.0) — 4.0	柱状の小高台を有する底部破片である。体部は開かず立ち上がる。	外面の整形は平行タタキ、内面がヘラケズリである。胎土はやや粗く、砂粒を少量含む。	
ク - 30	ク	甕	27.0 (17.5) — —	バケツ状の大型のもので、底部は欠損するもの、甕と思われる。体部は緩やかに外傾し、口縁は更に外傾する。	整形は外面が平行タタキ、内面がナデ、指ナデである。胎土は粗く、砂粒を多量に含む。	

第3節 古代・中近世

1 検出遺構

具同中山遺跡群の発掘調査は、調査対象地が広く調査の原因になった河川敷の掘削工事計画の制約等から2年度（1989・1990）に分けて調査を実施した。ここで述べる各遺構は調査区が隣接していることから、同時期・同性格のものを両年度に跨がって検出している。調査対象地の北部に位置するⅠ区と、広範囲に調査したⅡ区を便宜的に分けており、その中で古代から近世にかけての遺構を検出している。これらの遺構を各時期ごとに述べるべきであるが、調査時に層位を明確に把握し遺構を検出できなかつたものもあり、ここではⅠ区の北部に位置する遺構から順に遺構名を付し説明していくことにする。検出遺構は、掘立柱建物跡29棟、土坑31基、溝跡8条、集石遺構25基、火葬墓1基、水田址、柵列1列である。

1) 掘立柱建物跡

SB1（第45図）

第Ⅰ調査区の北東隅に位置する。B 33-20・25、B 34-16・21グリッドにかけて検出された。棟軸をN-84°-Wにとる建物跡であるが、桁行列のみ検出している。規模は不明であるが、推定では梁間2間・5.4m、桁行3間・6.5mの東西棟と考えられる。柱穴は、東西梁間の中間柱穴と南西隅の柱穴を確認できなかった。掘り方は、不整の円形を呈しており径60~80cmを測り大型である。深さは30~70cmを測り、まちまちであるが根石が配置されている柱穴も存する。底面の標高は、5.22~5.68mを測る。埋土は暗褐色粘質土である。遺物は、土師器・瓦質土器・須恵器・陶器片が出土しているが実測不可能である。

SB2（第45図）

第Ⅰ調査区の南東部に位置する。C 34-6・7グリッドにかけて検出された。棟軸をN-41°-Wにとる南北棟の建物跡である。規模は、梁間2間・2.46m、桁行2間・3.18mで南東隅の柱穴が欠損している。掘り方は、不整の円形を呈しており径30~58cmでやや小振りである。深さは10~30cmを測り、まちまちである。埋土は暗灰褐色粘質土である。遺物は、土師器片が出土しているが細片で実測不可能である。

SB3（第46図）

第Ⅰ調査区の中央部より南側に位置する。C 33-15、C 34-11グリッドにかけて検出したが、建物跡の南側は調査区外で未検出である。棟軸をN-25°-Wにとる南北棟の建物跡である。規模は、3間×2間以上で北側梁間3間で総長4.8mを測る。柱穴の掘り方は、おおむね円形を呈しており径40~60cmで、深さは30~40cmを測る。埋土は暗灰褐色粘質土である。遺物

は、土師器、瓦器片が出土しているが細片で実測不可能である。

SB 4 (第 46 図)

第 I 調査区の南東部に位置する。C 34-2・7 グリッドにかけて検出された。SB 2 と重複しているが、柱穴の切りあい認められないため、その先後関係は不明である。棟軸を N-1°-E にとりほぼ真北にとる南北棟の建物跡である。規模は、梁間 2 間・3.8 m、桁行 2 間・4.58 m 以上を測る。柱穴の掘り方は、円形を呈しており径 28~70 cm で南東の柱穴のみ大きく、深さは 10~45 cm を測りまちまちである。底面の標高は、4.9~5.28 m を測る。埋土は暗灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SB 5 (第 47 図)

第 II 調査区の北部に位置する。D 34-15・20, D 35-11・16 グリッドにかけて検出された。棟軸を N-18°-W にとる南北棟の建物跡である。規模は、梁間 2 間・3.72 m、桁行 3 間・6.44 m を測る。柱穴の掘り方は、円形を呈しており径 20~55 cm で大小のばらつきがある。深さは 10~36 cm を測る。底面の標高は、5.38~5.74 m である。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SB 6 (第 47 図)

第 II 調査区の北部で SB 5 に隣接して位置する。D 34-14・19・20 グリッドにかけて検出した。棟軸を N-19°-W にとる南北棟の建物跡である。規模は、梁間 2 間・4.0 m、桁行 3 間・4.2 m を測るが、桁行西側列の柱穴が 1 穴欠損している。柱穴の掘り方は、円形を呈し径 18~56 cm で大きさは比較的そろっている。底面の標高は、5.38~5.72 m を測る。埋土は灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SB 7 (第 48 図)

第 II 調査区の北西部に位置する。D 33-19・20・24・25 グリッドにかけて検出した。棟軸を N-20°-W にとる南北棟の建物跡である。規模は、梁間 2 間・3.36 m、桁行 3 間・4.24 m を測るがややゆがみを生じている。柱穴の掘り方は、円形を呈し径 15~55 cm で大小のばらつきがある。底面の標高は、5.30~5.58 m を測る。埋土は、青褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SB 8 (第 48 図)

第 II 調査区の北側中央部に位置する。E 34-3・4・8・9 グリッドにかけて検出した。棟軸を N-1°-W にとる南北棟の建物跡である。規模は梁間 1 間・2.84 m、桁行 2 間・4.45 m を測り小規模な建物跡である。梁間南東の柱穴の位置がややずれている。柱穴の掘り方は、円形を呈し径 25~35 cm である。底面の標高は 4.93~5.28 m を測る。埋土は茶褐色粘質土である。SB 9 と重複しているが先後関係は不明である。出土遺物は皆無である。

SB 9 (第 49 図)

第 II 調査区の北側中央部で SB 8 と重複して位置する。E 34-8・9 グリッドにかけて検出し

た。SB 8 との先後関係は柱穴の切りあい認められないため不明である。棟軸を N-79°-E にとる東西棟の建物跡である。規模は、梁間 1 間・2.46 m、桁行 2 間・4.09 m を測り、やや歪みを生じており、小規模なものである。柱穴の掘り方は、円形を呈し径 25~35 cm で大きさはほぼまとまりがある。底面の標高は、4.91~5.2 m を測る。埋土は茶褐色粘質土である。遺物は、P 1 から土師器皿と P 2 から須恵器蓋があり、その他には土師器片や瓦器片が出土しているが、細片で実測不可能である。

SB 10 (第 49 図)

第Ⅱ調査区の中央部やや北側に位置する。E 35-17・18・21・22 グリッドにかけて検出した。棟軸を N-72°-W にとる東西棟の建物跡である。規模は、梁間 2 間・3.0 m、桁行 4 間・6.62 m を測るがやや歪みが生じており、柱間寸法にばらつきがある。柱穴の掘り方は、円形を呈し径 27~40 cm を測りややばらつきがある。底面の標高は、2.96~3.32 cm を測り、埋土は灰褐色粘質土である。遺物は、P 1 から土師器杯が出土している。その他の柱穴から、土師器の細片が多く出土しているが実測不可能である。

SB 11 (第 50 図)

第Ⅱ調査区の中央部やや北側で SB 10 の南側に位置する。E 35-21・22、F 35-1・2 グリッドにおいて検出した。棟軸を N-77°-W にとる東西棟の建物跡である。規模は、梁間 3 間・3.92 m、桁行 3 間・5.94 m を測るが、梁間東側列の柱間総長が短い。柱穴の掘り方は、円形を呈し径 26~48 cm を測りやや大小のばらつきがある。底面の標高も 2.9~3.38 m で不統一である。埋土は暗灰褐色粘質土である。遺物は、P 1 から土師器杯、瓦器碗、土錘が出土している。P 2 から瓦器碗が出土している。その他では、土師器片が存在するが細片で実測不可能である。

SB 12 (第 50 図)

第Ⅱ調査区の中央部北側で、SB 11 の南西側に位置する。F 34-4・5・9・10 グリッドにかけて検出した。棟軸を N-8°-W にとる南北棟の建物跡である。規模は、梁間 3 間・4.76 m、桁行 3 間 5.24 m を測りやや正方形に近いものである。柱間寸法にややばらつきがあり、掘り方も円形及び不整形円形で径 28~63 cm を測り大小さまざまである。底面の標高は、4.72~5.2 m で不統一である。埋土は暗茶褐色粘質土である。遺物は、P 1 から瓦器碗、P 2 から土師器皿・杯、P 3 から土師器杯が出土している。その他は細片で多くは実測不可能であるが、土師器、瓦器、瓦質土器、砥石片が存在する。

SB 13 (第 51 図)

第Ⅱ調査区の中央部北側で、SB 11、SB 12 と重複して位置する。F 34-5・10、F 35-1・2・6・7 グリッドにかけて検出している。棟軸を N-88°-W にとる東西棟の建物跡である。規模は、梁間 3 間・5.18 m、桁行 3 間・6.65 m で、梁間の柱間寸法にばらつきがある。柱穴の掘り方は、円形を呈し 28~68 cm を測る。底面の標高は、2.9~3.2 m で、埋土は灰褐色粘質

土である。遺物は、P 1 から土師器小皿・杯・石鍋と P 2 から白磁皿・古銭が出土している。その他は土師器、瓦器片が存在するが細片で実測不可能である。

SB 14 (第 51 図)

第Ⅱ調査区の中央部北側で、SB 12 の南西側に位置する。F 34-7~9 グリッドにかけて検出した。棟軸を N-82°-E にとる東西棟の建物跡である。規模は、梁間 2 間・3.45 m、桁行 3 間・6.79 m を測る。柱穴の掘り方は、円形を呈し径 20~59 cm を測り、多少大小のばらつきが認められる。底面の標高は、5.26~5.48 m で均一である。埋土は茶褐色粘質土である。遺物は、P 1 から土師器杯が出土している。その他細片で、土師器、瓦器片があるが実測不可能である。

SB 15 (第 52 図)

第Ⅱ調査区の中央部北側で、SB 12 の南側に位置する。F 34-10・15 グリッドにかけて検出しており、SB 16 と重複しているが先後関係は不明である。棟軸を N-1°-W にとる南北棟の建物跡である。規模は、梁間 2 間・3.22 m、桁行 3 間・4.78 m で桁行東側でやや歪みがある。柱穴の掘り方は、円形を呈し径 26~38 cm を測りほぼ均一である。底面の標高は、3.13~3.57 m である。遺物は、細片が多く実測不可能であるが、土師器、瓦器片が出土している。

SB 16 (第 52 図)

第Ⅱ調査区の中央部北側で SB 15 と重複して位置する。F 34-9・10・15 グリッドにかけて検出している。SB 15 との先後関係は不明である。棟軸を N-8°-W にとる南北棟の建物跡である。規模は、梁間 2 間・3.35 m、桁行 2 間・3.2 m でやや歪みを生じ小規模な建物跡である。柱穴の掘り方は、円形を呈し径 24~66 cm を測りややばらつきがある。底面の標高は、5.02~5.22 m である。遺物は、土師器、青磁、瓦器、土錘片が出土しているが細片で実測不可能である。

SB 17 (第 53 図)

第Ⅱ調査区の中央部北東側に位置する。F 35-17・18・22・23 グリッドにかけて検出している。棟軸を N-88°-E にとる東西棟の建物跡である。規模は、梁間 2 間・3.02 m、桁行 3 間・3.88 m でやや歪みを生じており、柱間寸法もばらつきが多い。柱穴の掘り方は、円形を呈し径 26~48 cm を測る。底面の標高は 3.16~3.36 m である。遺物は、P 1 より須恵器皿が出土している。その他の遺物としては、土師器、瓦器、青磁片があるが細片で実測不可能である。

SB 18 (第 53 図)

第Ⅱ調査区の中央部東側に位置する。G 35-5、G 36-1・6 グリッドにかけて検出した。棟軸を N-30°-E にとる南北棟の建物跡である。規模は、梁間 2 間・3.0 m、桁行 2 間・3.47 m で、小規模なものであり、柱間寸法にもばらつきが見られる。柱穴の掘り方は、円形を呈し 24~43 cm を測るが大小さまざまである。底面の標高は、2.76~3.06 m である。遺物は、土師器が出土しているが細片で実測不可能である。

SB 19 (第 54 図)

第Ⅱ調査区の中央部東側に位置する。G 35-12~14 グリッド周辺で検出した。棟軸を N

-66°-Wにとる東西棟の建物跡である。規模は、梁間3間・5.4m、桁行3間・7.45mで、梁間東側列がそろっていない。桁行・梁間寸法とも、ばらつきがあり北側列の柱穴1つが欠損している。柱穴の掘り方は、円形を呈し径22~68cmを測る。底面の標高は、3.04~3.54mである。遺物は、土師器片が出土しているが細片で実測不可能である。

SB 20 (第54図)

第Ⅱ調査区の中央部に位置する。G 34-12・13・17・18グリッド周辺で検出した。SB 21と重複しているが、柱穴の切りあい関係が認められず先後関係は不明である。棟軸をN-7°-Wにとる南北棟の建物跡である。規模は、梁間3間・4.7m、桁行3間・5.1mで、梁間南側列ひとつの柱穴が欠損しており、桁行・梁間寸法とも、ばらつきがある。柱穴の掘り方は、円形を呈し径24~37cmを測る。底面の標高は、4.98~5.21mである。遺物は、P 1から須恵器甕が出土しており、その他瓦器、土師器、土錘、スラグがあるが細片で実測不可能である。

SB 21 (第55図)

第Ⅱ調査区の中央部でSB 20と重複して位置する。G 34-12・13・17・18グリッド周辺で検出した。SB 20との先後関係は、柱穴の切りあい関係が認められず不明である。棟軸をN-89°-Eにとる東西棟の建物跡である。規模は、梁間1間・2.80m、桁行2間・4.28mで、桁行北側列の並びが悪い小規模な建物跡である。柱穴の掘り方は、円形を呈し径23~47cmを測る。底面の標高は、5.0~5.34mである。遺物は皆無である。

SB 22 (第55図)

第Ⅱ調査区の中央部東側で、SB 19の南側に位置する。H 35-9・10・14グリッドにかけて検出したが、建物の南東側は調査区外で未検出である。棟軸をN-33°-Eにとる南北棟と考えられ、規模は3間×2間以上の建物跡である。西側桁行の総長は6.72mを測る。柱穴の掘り方は、円形を呈し径30~51cmを測り、比較的均一である。底面の標高は、3.33~3.42mを測る。埋土は、灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SB 23 (第55図)

第Ⅱ調査区の中央部東側で、SB 22の南西側に位置する。H 35-17グリッドで検出した。棟軸をN-43°-Wにとる建物跡である。規模は梁間1間・2.75m、桁行2間・5.77mを測り、やや歪みが生じている。柱穴の掘り方は、円形を呈し径27~40cmを測り、比較的均一である。底面の標高は、3.30~3.54mを測る。埋土は、灰褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SB 24 (第56図)

第Ⅱ調査区の南部で、SB 25と重複して位置する。柱穴の切りあい関係が認められないため先後関係は不明である。I 34-18・19・23・24グリッドにかけて検出した。棟軸をN-42°-Eにとる建物跡である。規模は梁間2間・3.45m、桁行3間・6.8mを測り、やや梁間西側列に歪みが生じている。柱穴の掘り方は、円形を呈し径30~98cmを測り、やや規模が大きくばら

つきもある。底面の標高は、4.80～5.25 m を測る。埋土は、灰褐色粘質土である。出土遺物は、土師器片、蓮弁文の青磁碗、瓦質土器の鍋片が出土しているが細片で実測不可能である。

SB 25 (第 56 図)

第Ⅱ調査区の南部で、SB 24 と重複して位置する。柱穴の切りあい関係が認められないため先後関係は不明である。I 34-18・22・23 グリッドにかけて検出した。棟軸を N-60°-W にとる建物跡である。規模は梁間 2 間・3.43 m、桁行 2 間・3.92 m を測るが、歪みが生じている。柱穴の掘り方は、円形を呈し径 31～44 cm を測り、比較的均一である。底面の標高は、4.95～5.20 m を測る。埋土は、灰褐色粘質土である。出土遺物は、土師器片、スラグが出土しているが細片で実測不可能である。

SB 26 (第 57 図)

第Ⅱ調査区の南部に位置する。I 34-24・25、J 34-4・5 グリッドにかけて検出したが、南側は調査区外のため未検出である。棟軸を N-62°-W にとる建物跡である。規模は梁間 2 間、桁行 3 間以上で梁間・4.10 m を測る。柱穴の掘り方は、円形を呈し径 29～67 cm を測り、やや規模が大きくばらつきもある。底面の標高は、4.50～5.05 m を測る。埋土は、灰褐色粘質土である。遺物は、P 1 から土師器杯、P 2 から備前摺鉢・東播系コネ鉢、P 3 から砥石・土錘が出土している。その他細片で、土師器片、鎬蓮弁文の青磁碗、瓦質土器の鍋片、東播系片口鉢、土錘、スラグがあるが実測不可能である。

SB 27 (第 57 図)

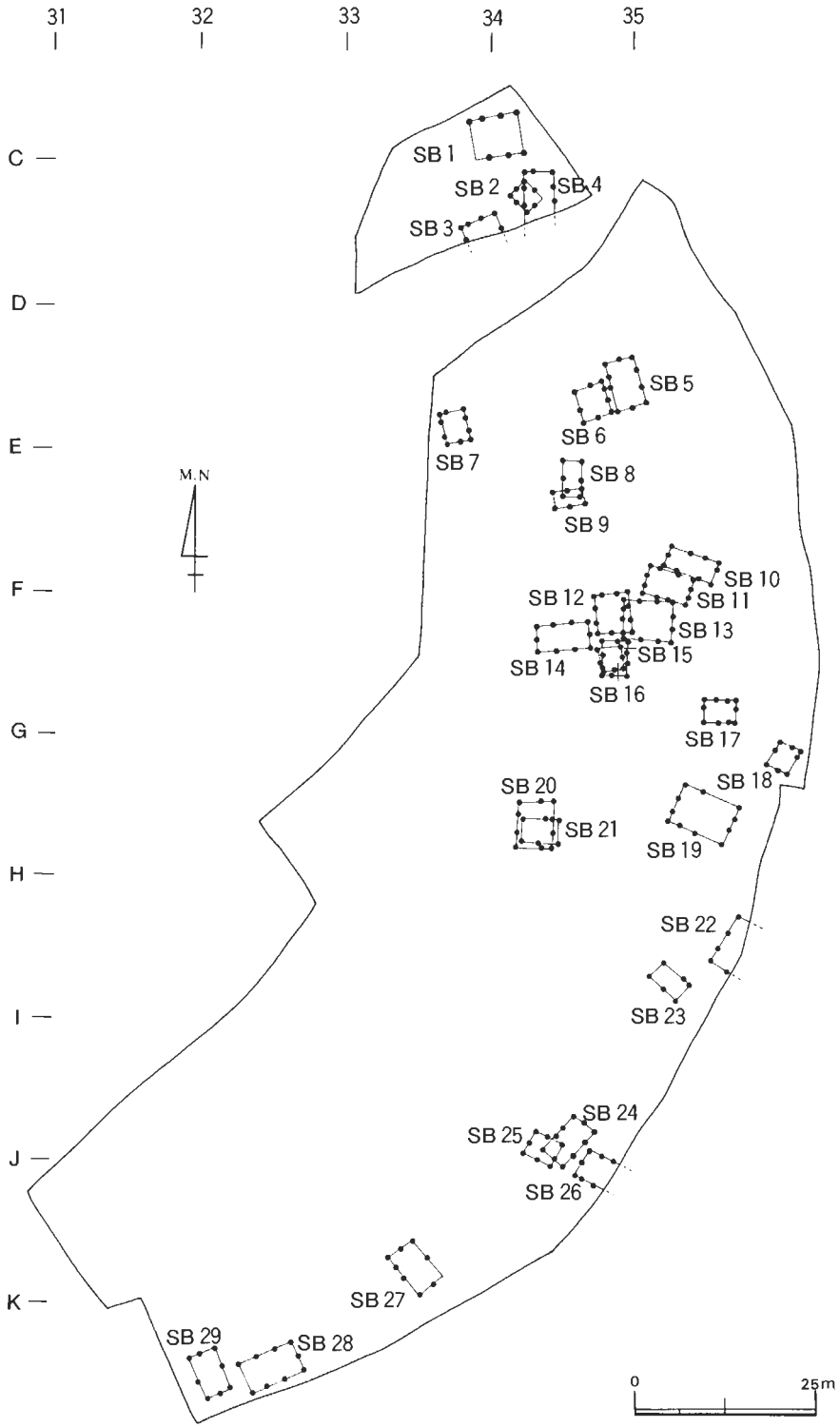
第Ⅱ調査区の南西部に位置する。J 33-13・18・19 グリッドにかけて検出した。棟軸を N-40°-W にとる建物跡である。規模は梁間 2 間・3.7 m、桁行 3 間・6.0 m を測り、東側梁間の柱穴ひとつが欠損しておりやや歪みが生じている。柱穴の掘り方は、円形を呈し径 33～47 cm を測り、比較的均一である。底面の標高は、4.89～5.12 m を測る。埋土は、茶褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SB 28 (第 58 図)

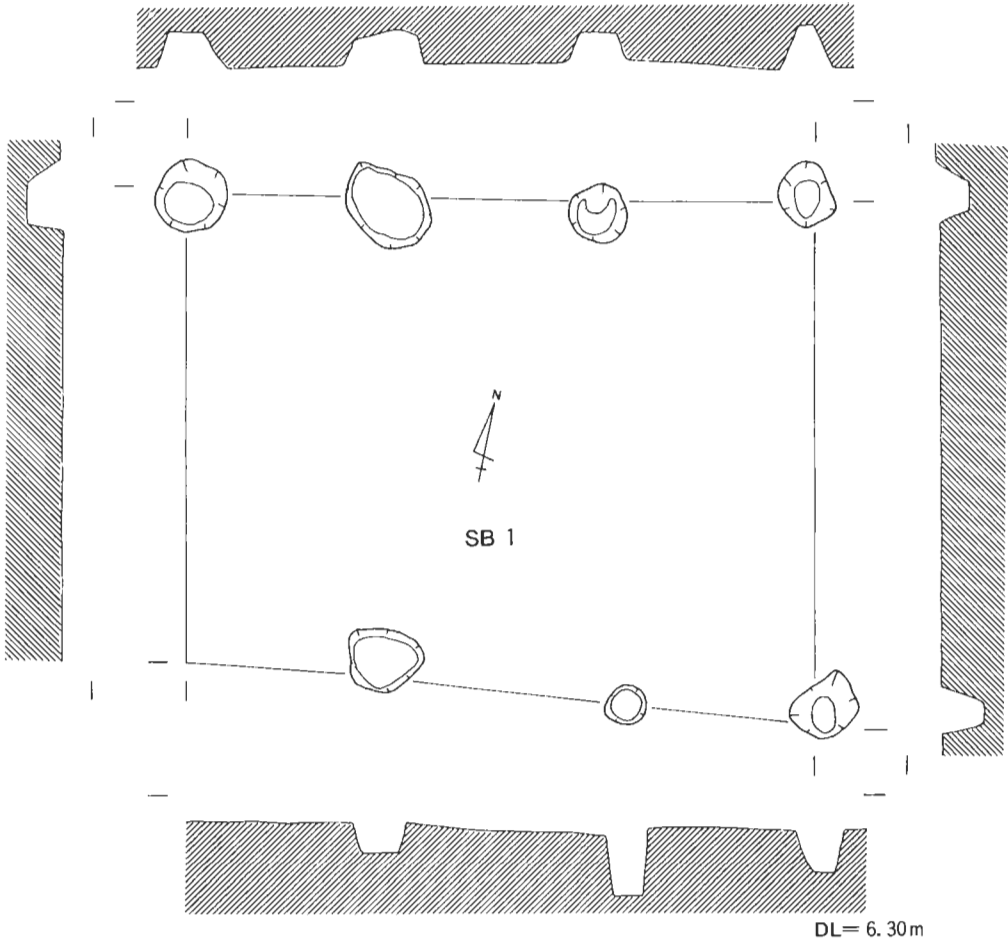
第Ⅱ調査区の南西部で SB 29 の東側に位置する。K 32-7～9・13・14 グリッドにかけて検出した。棟軸を N-62°-E にとる建物跡である。規模は梁間 2 間・4.3 m、桁行 3 間・7.55 m を測り、東側梁間の柱穴ひとつが欠損している。柱穴の掘り方は、円形を呈し径 36～60 cm を測り、比較的均一である。底面の標高は、4.90～5.15 m を測る。埋土は、茶褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SB 29 (第 58 図)

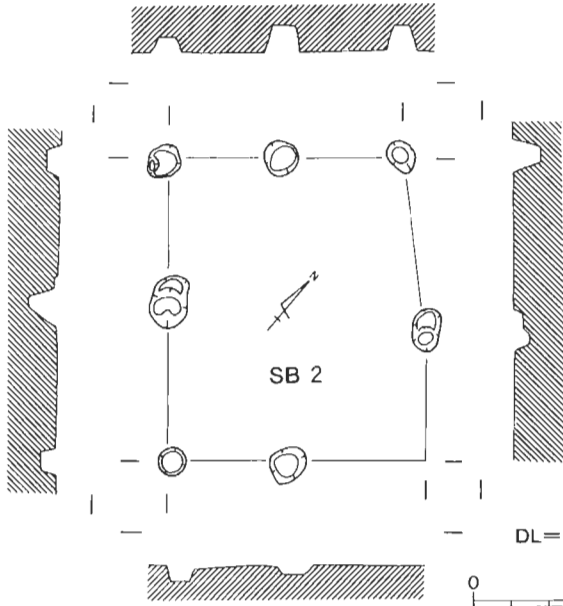
第Ⅱ調査区の南西部で SB 28 の西側に位置する。K 32-6・7・11・12 グリッドにかけて検出した。棟軸を N-26°-W にとる南北棟の建物跡である。規模は梁間 2 間・3.5 m、桁行 2 間・5.8 m を測るがやや歪みが生じている。柱穴の掘り方は、円形を呈し径 19～48 cm を測る。底面の標高は 4.90～5.45 m を測る。埋土は茶褐色粘質土である。出土遺物は皆無である。



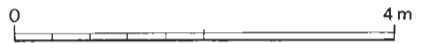
第 44 図 掘立柱建物跡配置図



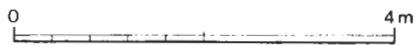
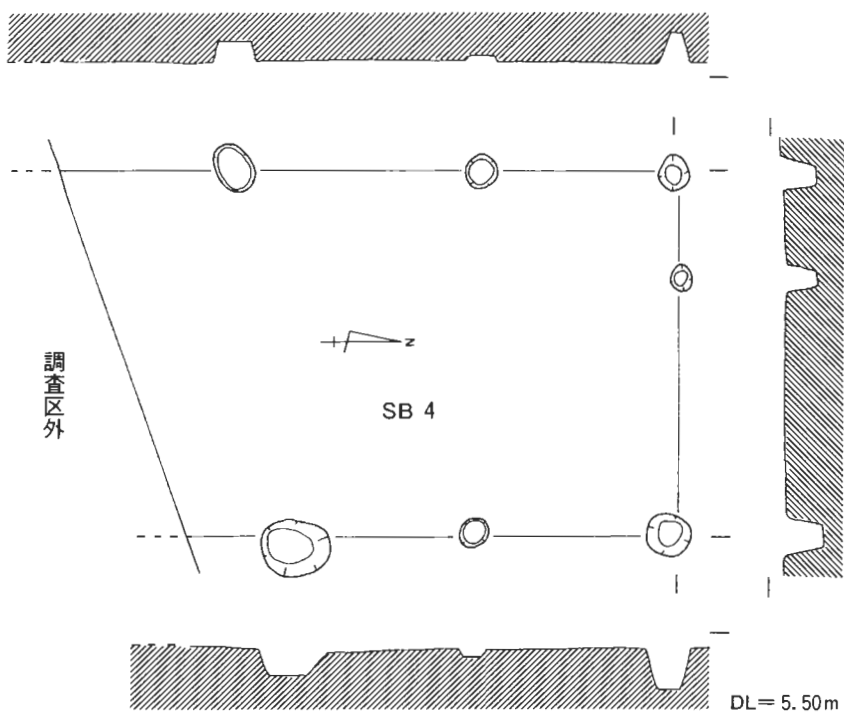
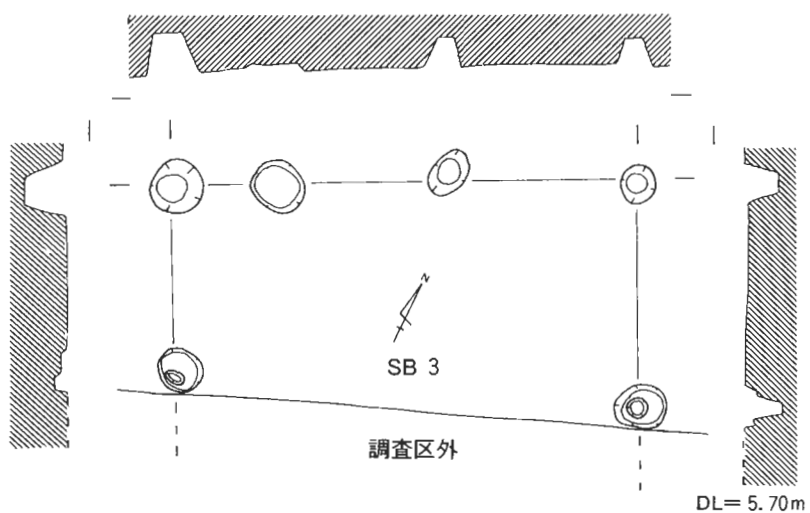
DL = 6.30m



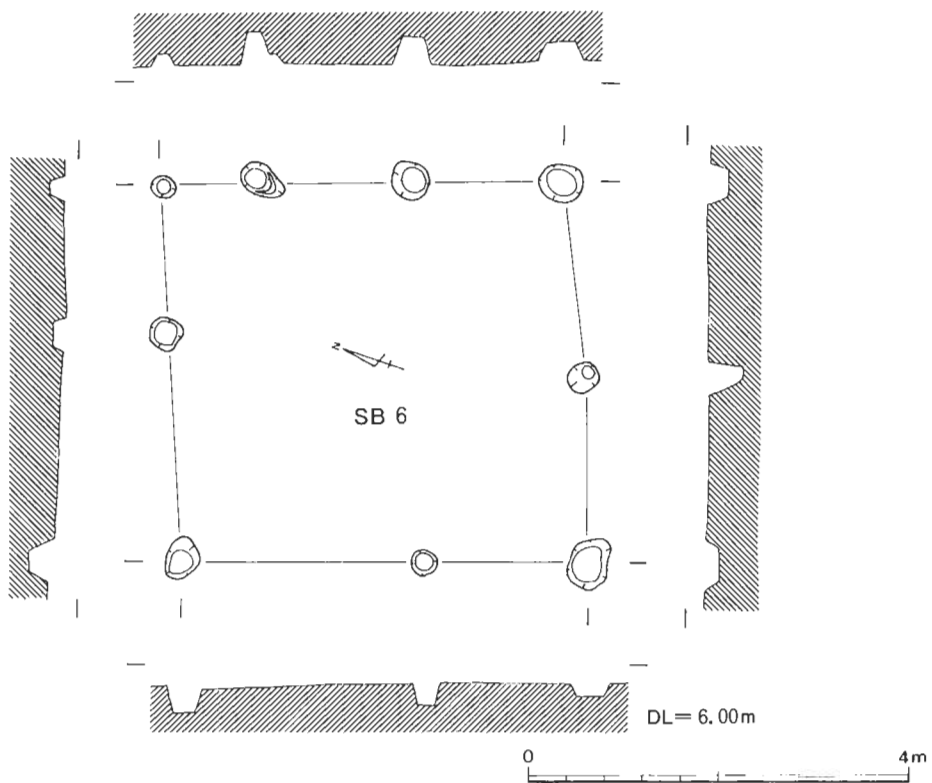
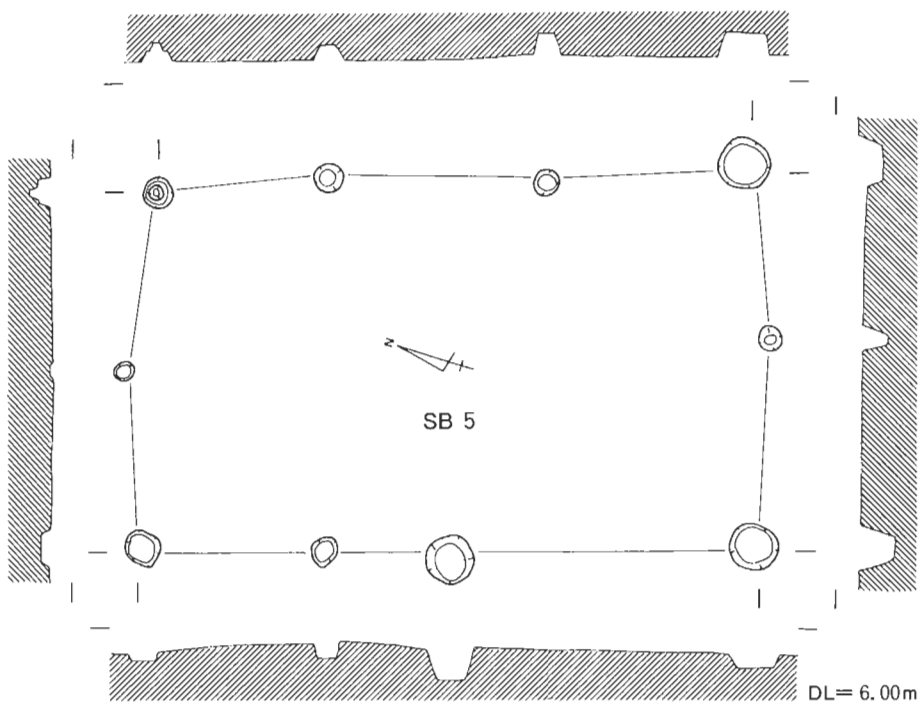
DL = 5.70m



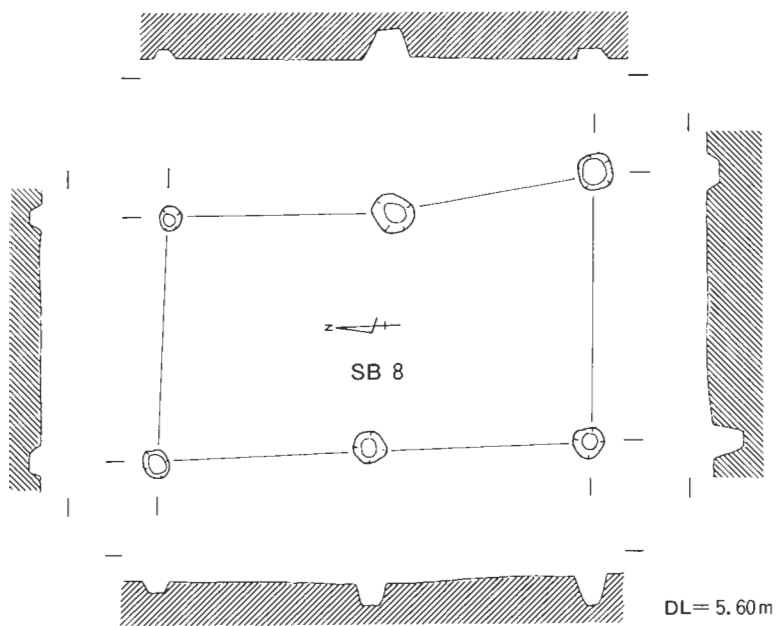
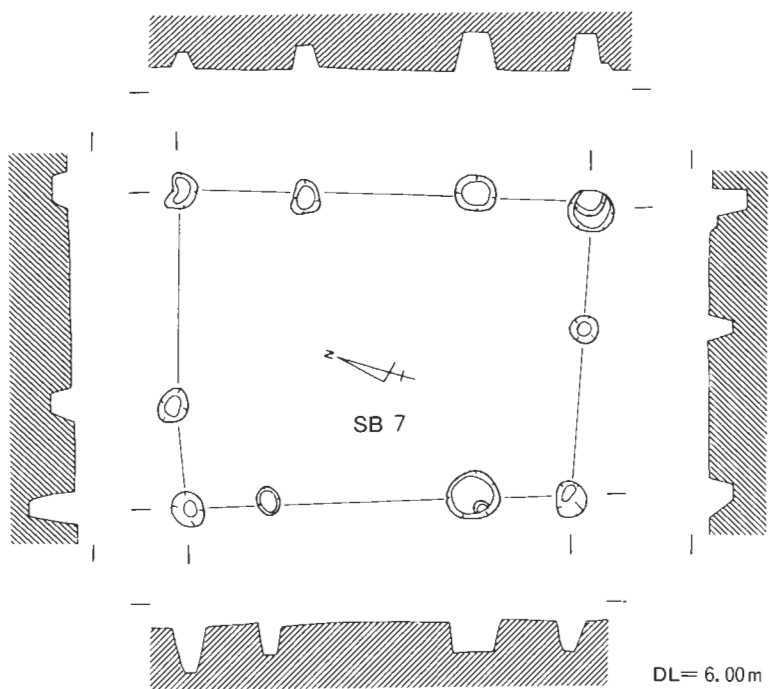
第 45 图 SB 1・2 实测图



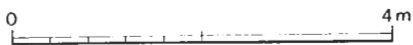
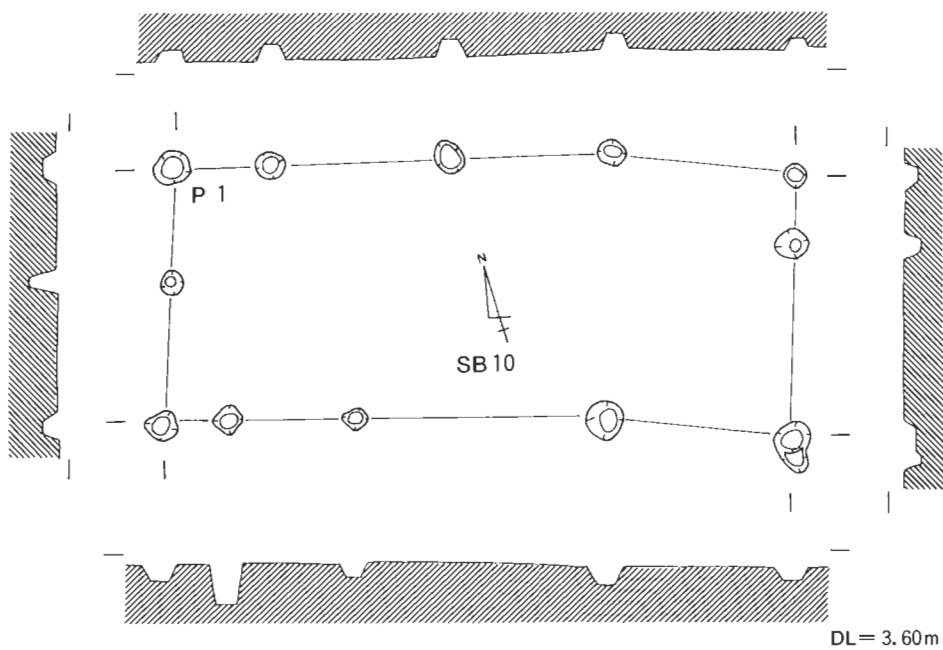
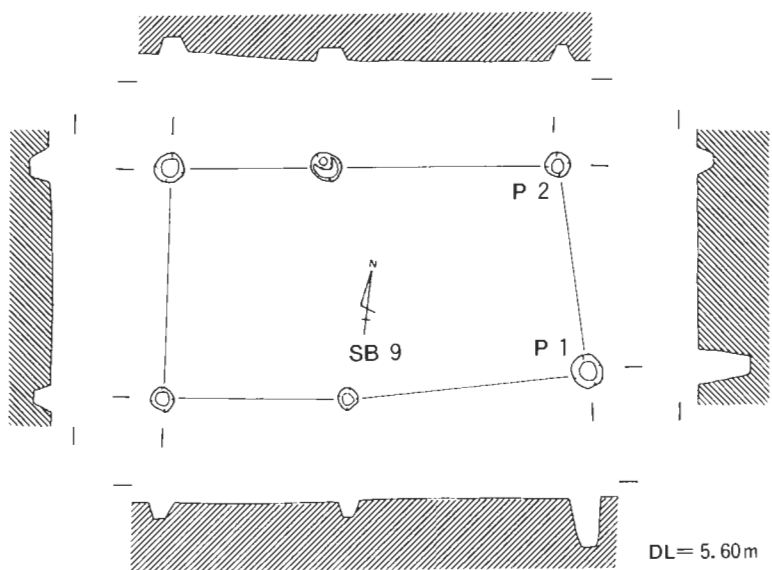
第46図 SB 3・4 実測図



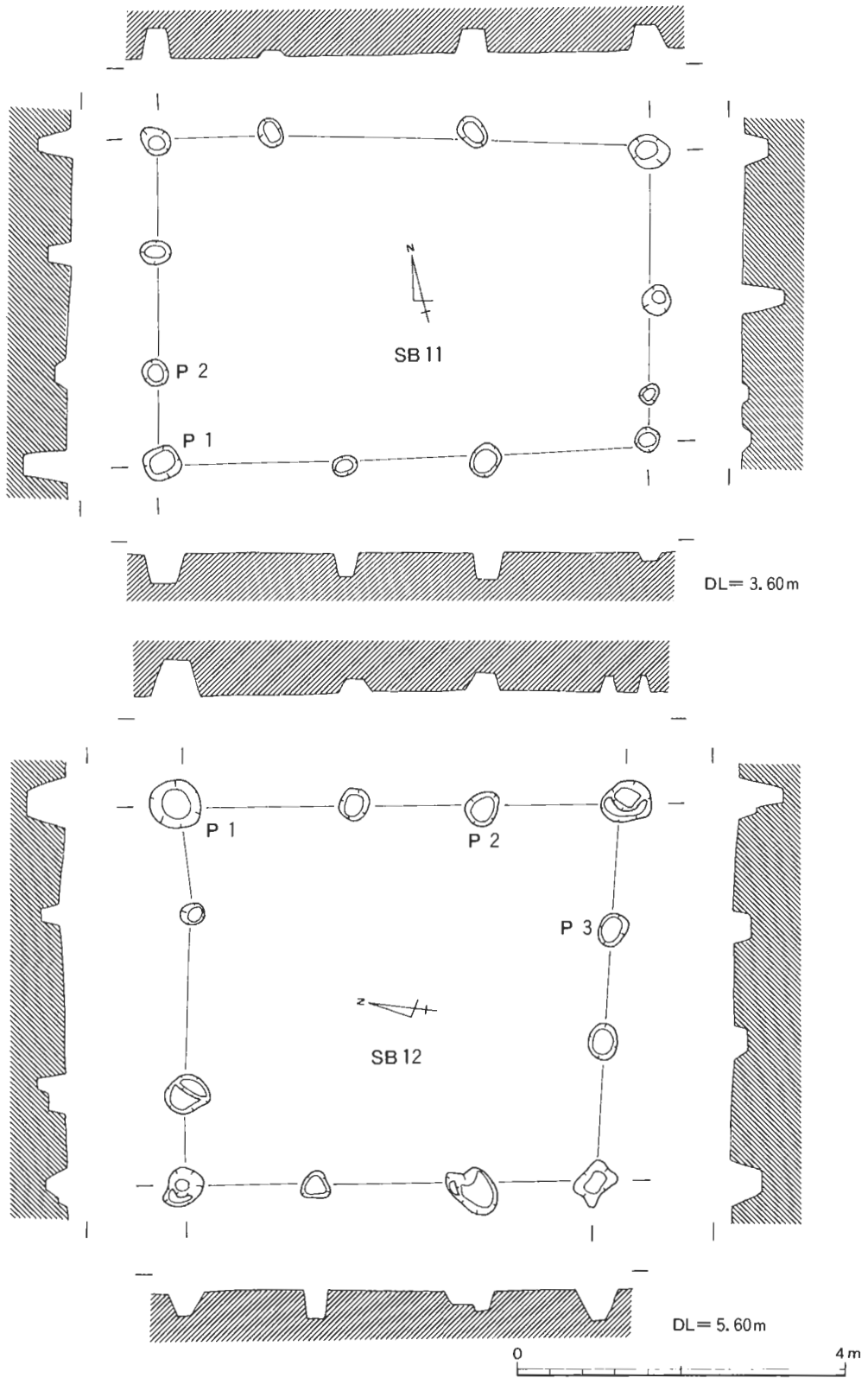
第 47 图 SB 5・6 实测图



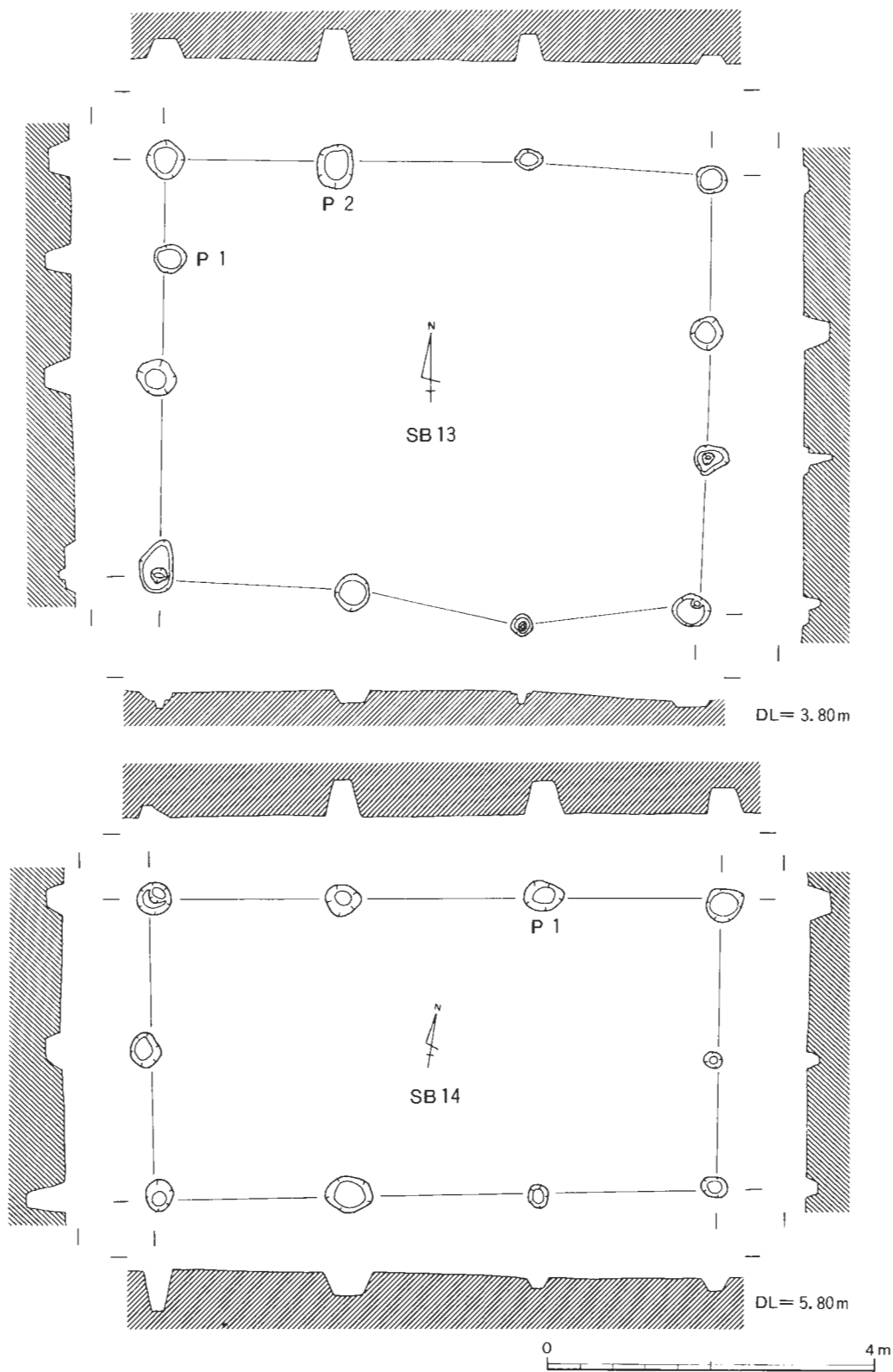
第 48 图 SB 7·8 实测图



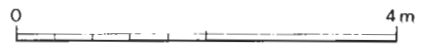
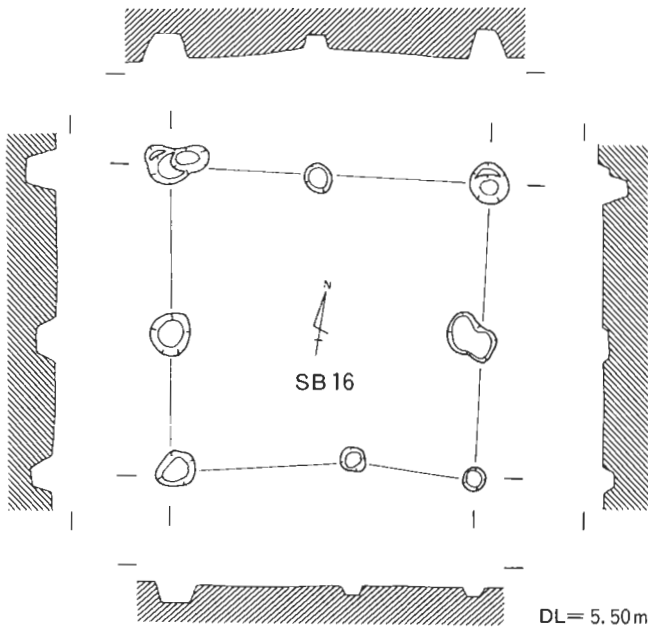
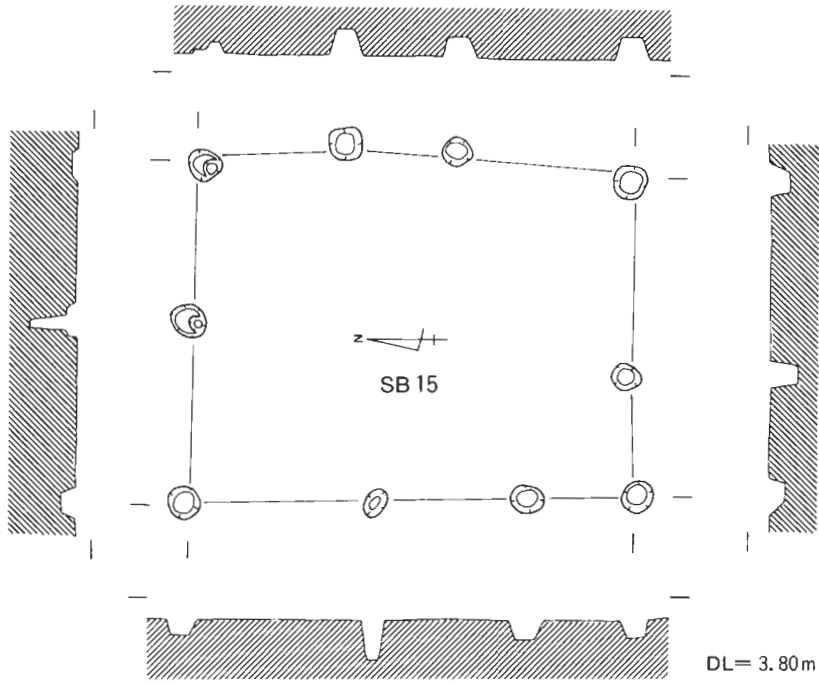
第 49 图 SB 9・10 实测图



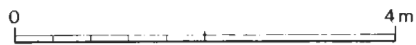
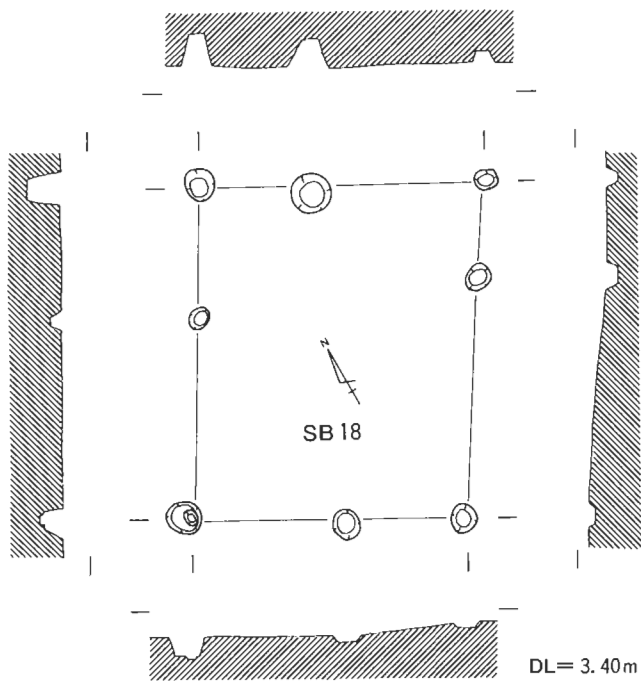
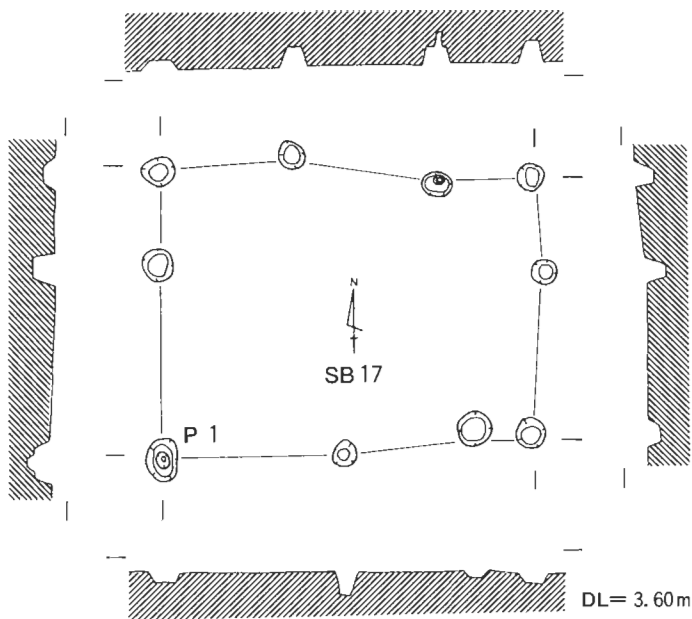
第 50 図 SB 11・12 実測図



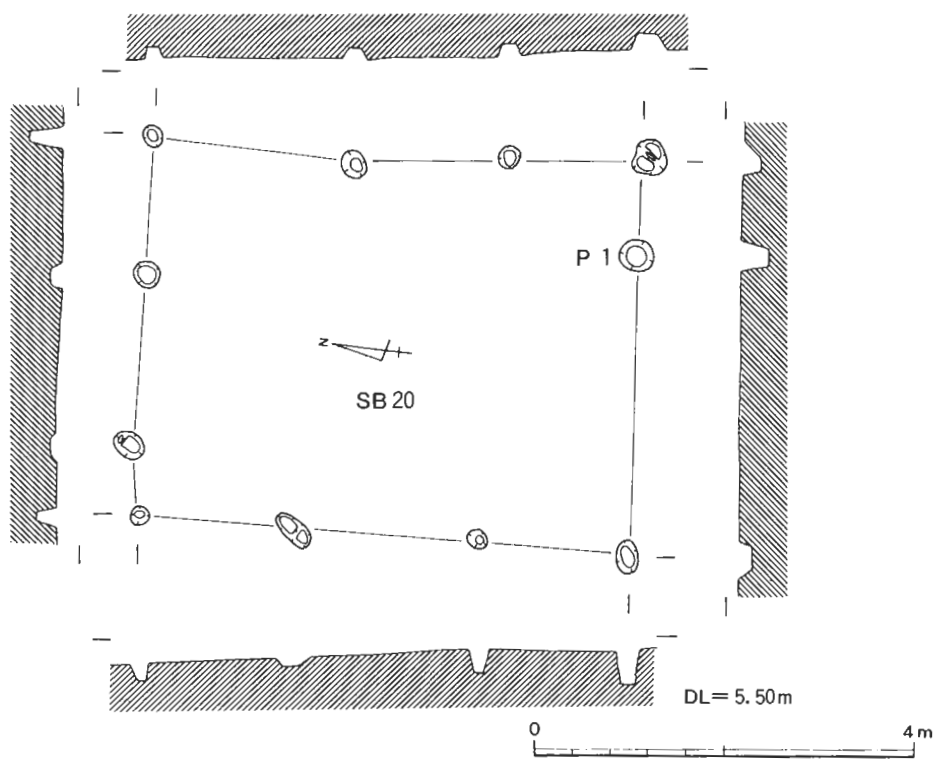
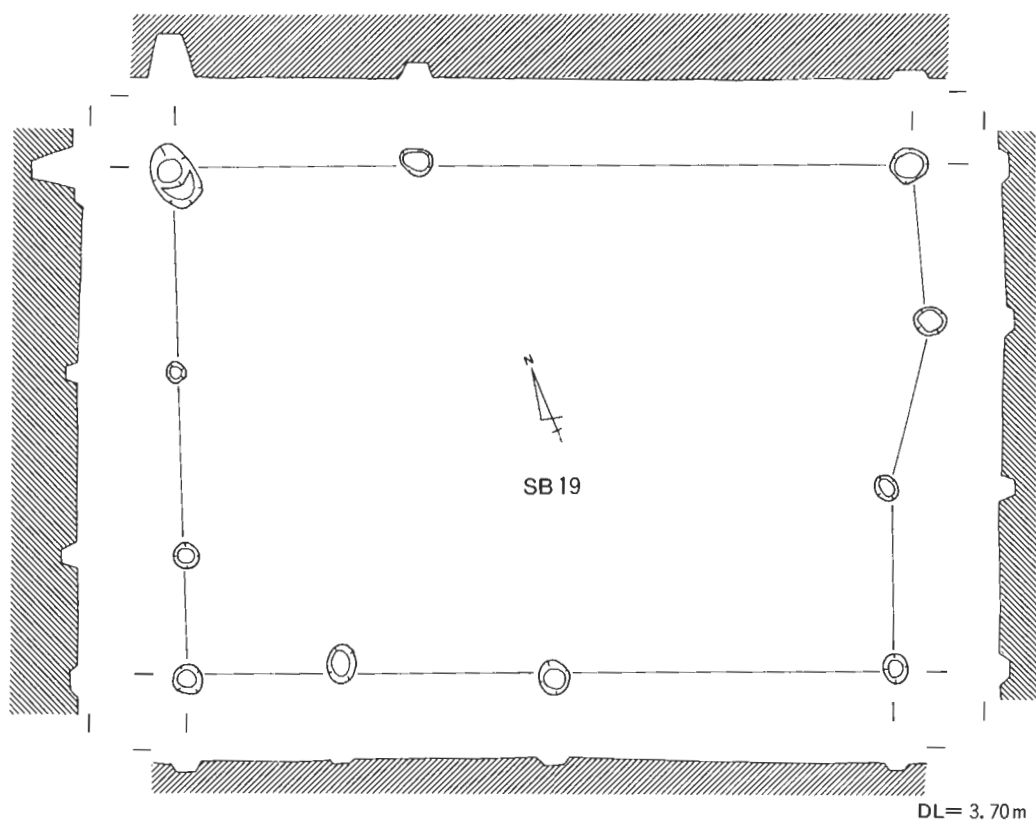
第 51 图 SB 13 · 14 实测图



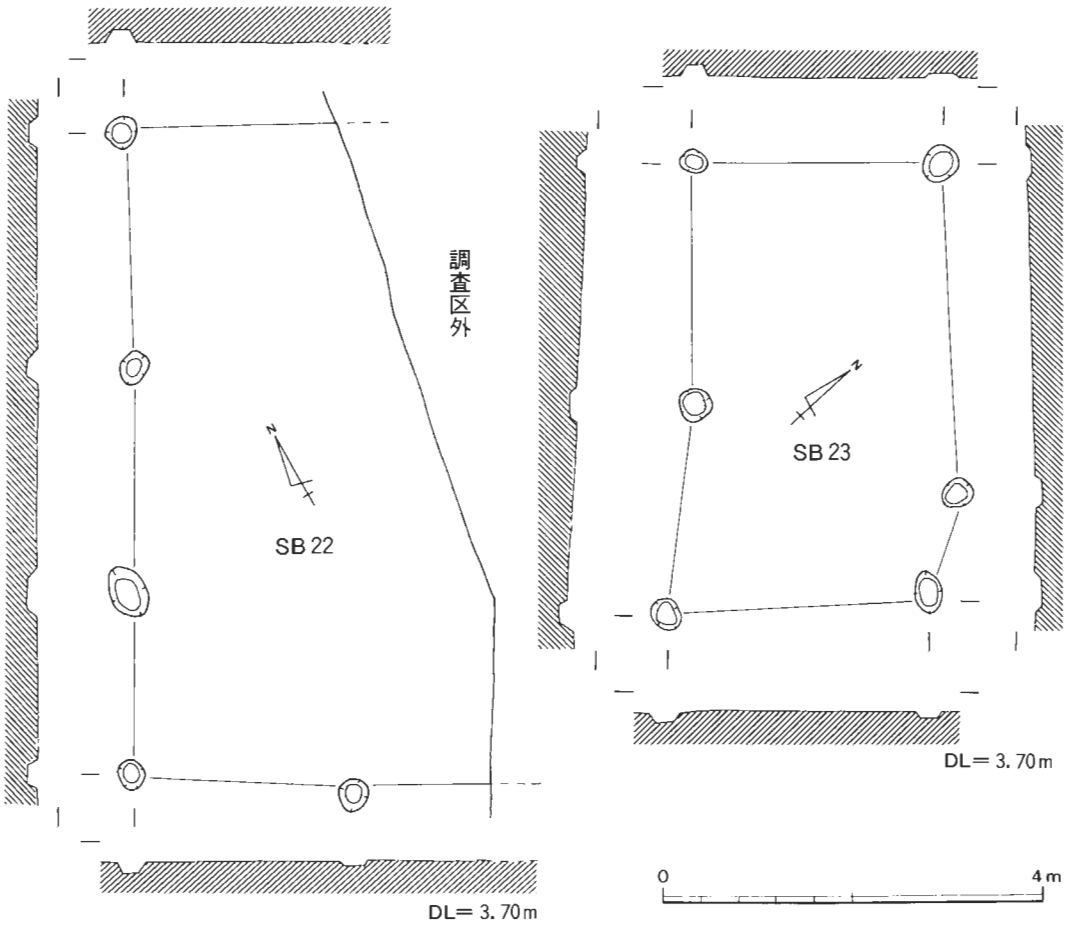
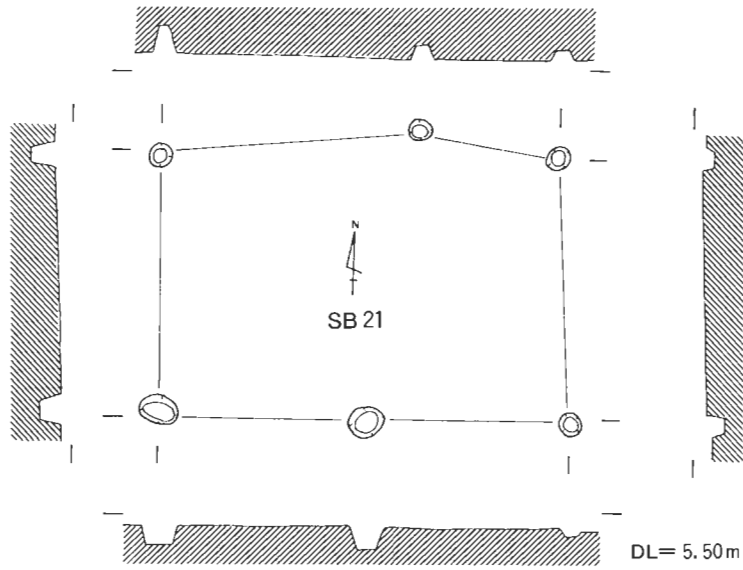
第 52 図 SB 15・16 実測図



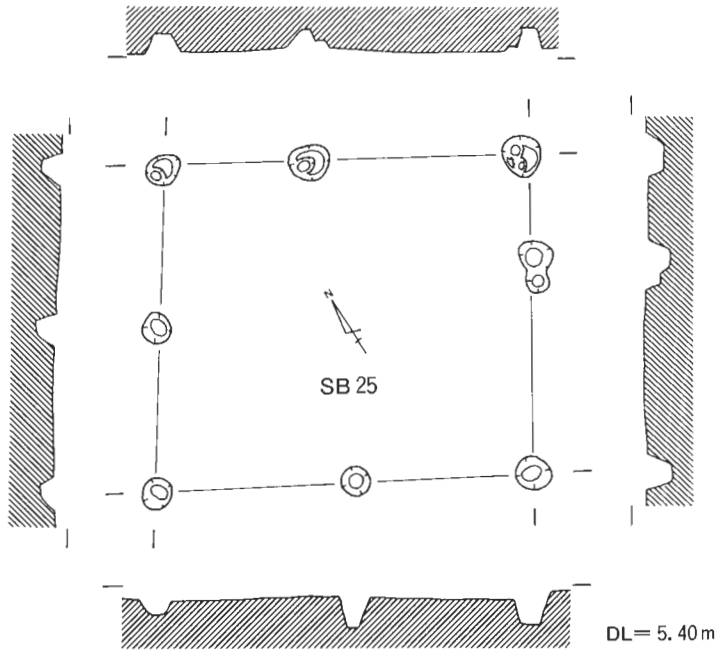
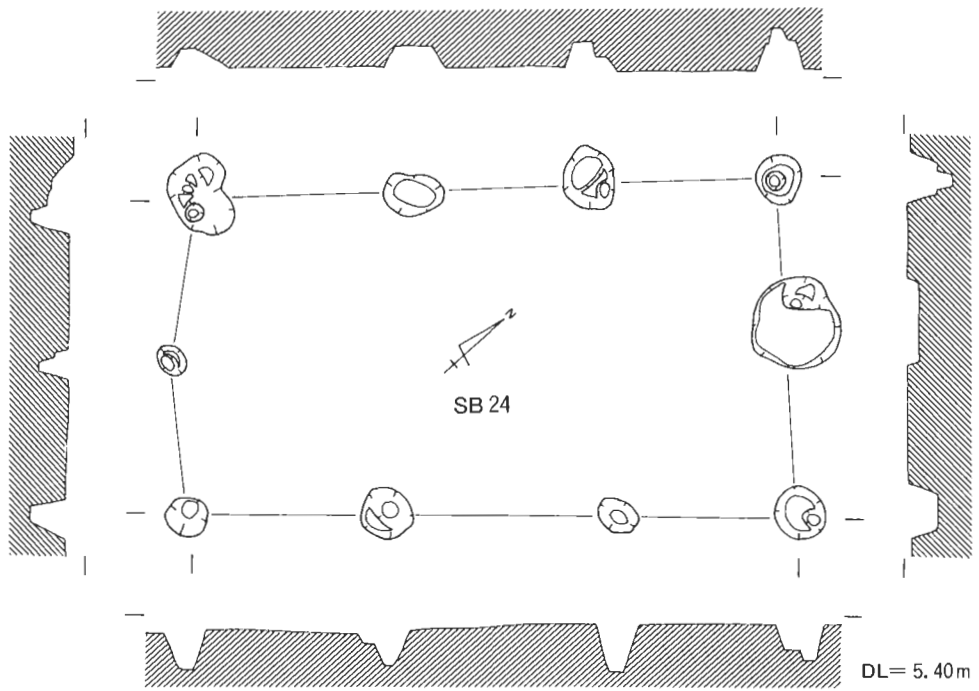
第 53 图 SB 17 · 18 实测图



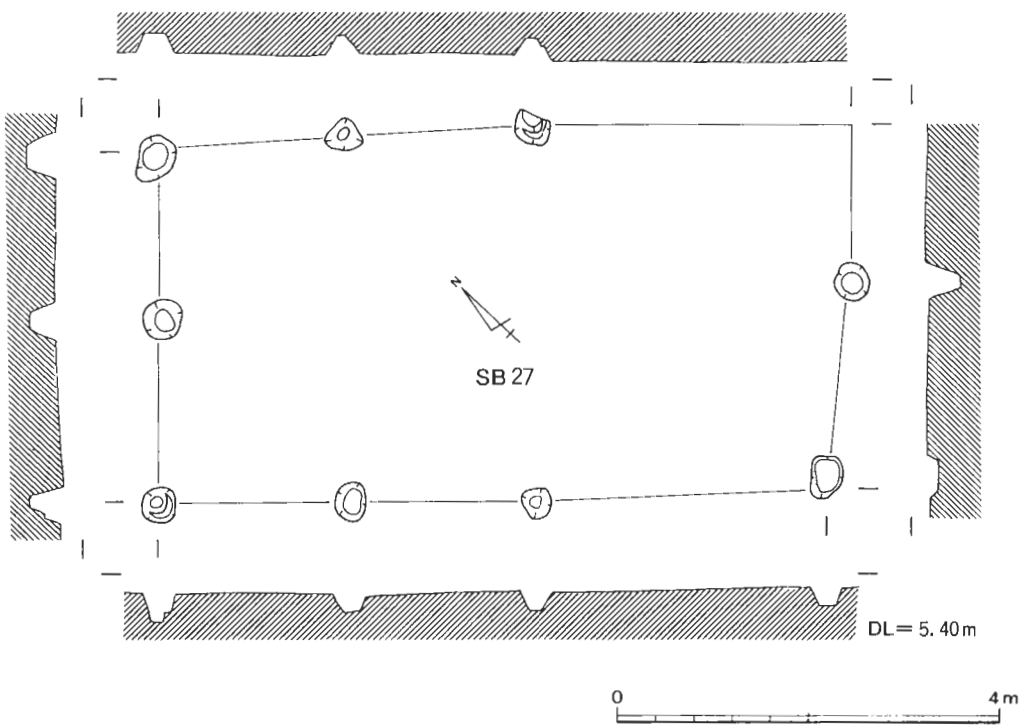
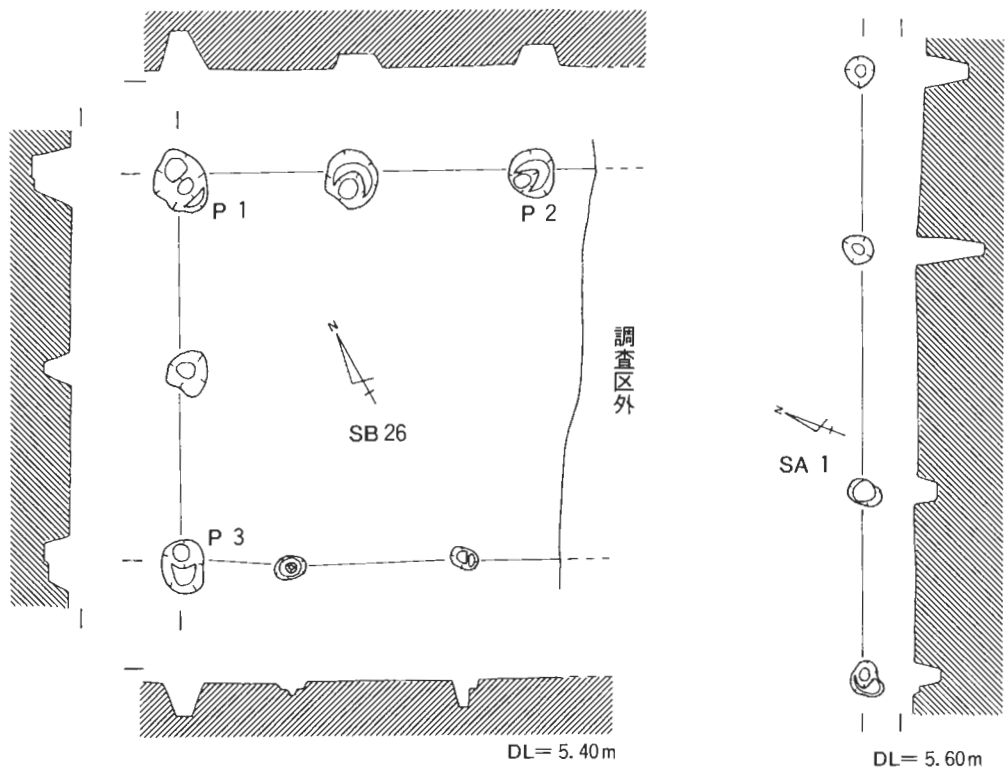
第 54 图 SB 19・20 实测图



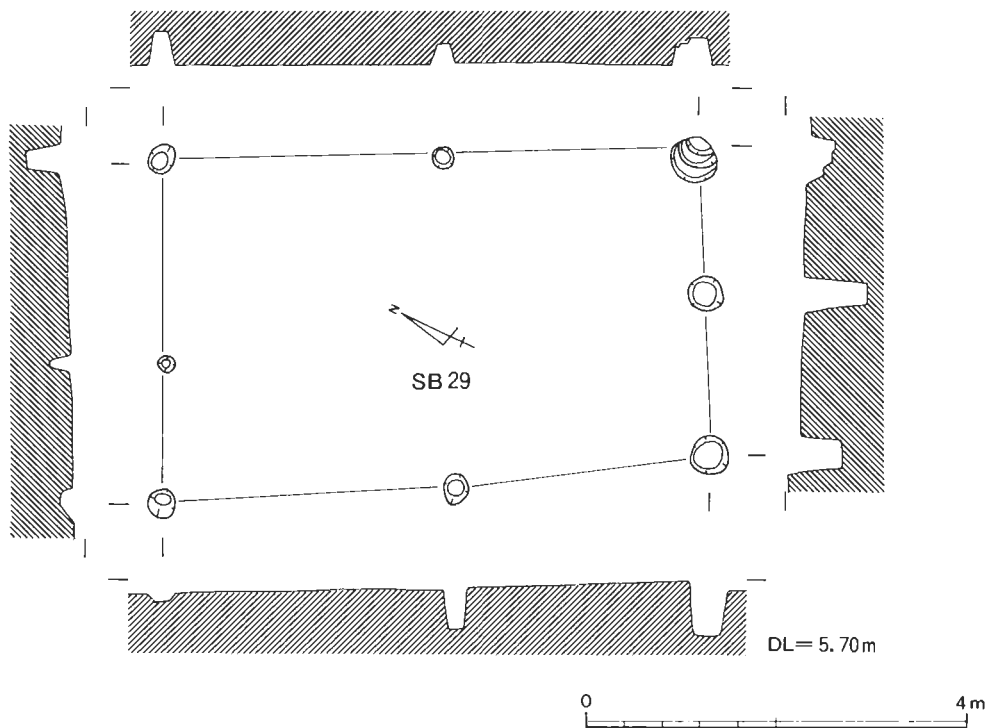
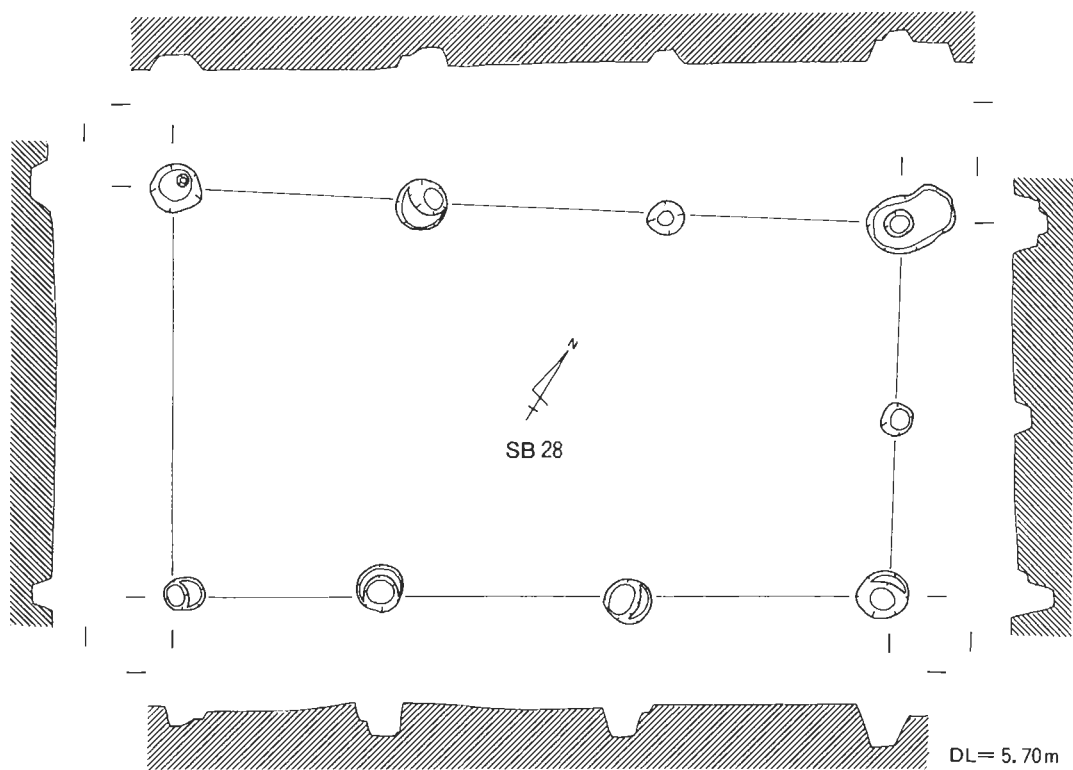
第55図 SB 21~23 実測図



第 56 图 SB 24 · 25 实测图



第 57 図 SB 26・27・SA 1 実測図



0 4m

第 58 图 SB 28・29 实测图

2) 土坑

SK 1 (第 59 図)

第 I 調査区の中央部西側に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長辺 1.21 m、短辺 0.74 m、深さは検出面から 41 cm を測る。長軸方向は N-15°-E である。断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦で標高 5.6 m を測る。壁は底面から急角度で立ち上がる。埋土は灰褐色粘質土単一層であった。遺物は、瓦器、土師器片が出土しているが細片で実測不可能である。

SK 2 (第 59 図)

第 I 調査区の中央部西側で SK 1 の南側に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長辺 1.61 m、短辺 0.93 m で、深さは検出面から 11~20 cm を測る。長軸方向は N-27°-E である。断面形は逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦で標高 5.81 m で壁は急角度で立ち上がる。埋土は灰褐色粘質土単一層であった。遺物は、瓦質土器、土師器片、スラグが出土しているが細片で実測不可能である。

SK 3 (第 59 図)

第 I 調査区の中央部西側で SK 2 の東側に位置する。平面形は不整円形を呈し、長辺 1.30 m、短辺 1.23 m で、深さは検出面から 24~25 cm を測る。長軸方向は N-14°-W である。断面形は逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦で標高 5.69 m で壁は急角度で立ち上がる。埋土は灰褐色粘質土単一層であった。遺物は、白磁皿、土師器片が出土しているが細片で実測不可能である。

SK 4 (第 59 図)

第 I 調査区の中央部やや西側で SK 5 の南東側に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長辺 1.48 m、短辺 1.14 m で、深さは検出面から 30 cm を測る。長軸方向は N-13°-W である。断面形は逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦で標高 5.7 m で壁は急角度で立ち上がる。埋土は灰褐色粘質土単一層であった。遺物は、土師器、瓦質土器片、スラグが出土しているが細片で実測不可能である。

SK 5 (第 59 図)

第 I 調査区の中央部やや西側で SK 4 の北西側に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長辺 1.83 m、短辺 1.08 m で、深さは検出面から 16~28 cm を測る。長軸方向は N-41°-E である。断面形は逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦で標高 5.7 m で壁は急角度で立ち上がる。埋土は灰褐色粘質土単一層であった。遺物は、伊万里の小杯が出土している。その他土師器、瓦器、土錘片が出土しているが細片で実測不可能である。

SK 6 (第 59 図)

第 II 調査区の北部やや西側で SK 7 の東側に位置する。平面形は円形を呈し、長辺 0.89 m、短辺 0.83 m で、深さは検出面から 6~28 cm を測る。断面形は逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦で標高 5.7 m で壁は急角度で立ち上がる。埋土は灰褐色粘質土単一層であった。遺物は、土

師器、瓦器、土錘片が出土しているが細片で実測不可能である。

SK 7 (第 59 図)

第Ⅱ調査区の北西部に位置する。平面形は不整形を呈し、長辺 4.73 m、短辺 1.95 m で、深さは検出面から 12~14 cm を測る。長軸方向は N-21°-E である。断面形は浅い逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦で標高 5.72~5.77 m で壁は急角度で立ち上がる。埋土は青茶色粘質土単一層であった。遺物は皆無である。

SK 8 (第 59 図)

第Ⅱ調査区の北西部で SK 7 の南側に位置する。平面形は長楕円形を呈し、長辺 3.05 m、短辺 0.52 m で、深さは検出面から 16~18 cm を測る。長軸方向は N-15°-W である。断面形は浅い逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦で標高 5.73~5.76 m で壁は急角度で立ち上がる。埋土は青茶色粘質土単一層であった。遺物は皆無である。

SK 9 (第 59 図)

第Ⅱ調査区の中央部やや北側に位置する。平面形は不整形を呈し、長辺 1.06 m、短辺 0.87 m で、深さは検出面から 27~40 cm を測る。長軸方向は N-18°-W である。断面形は浅い逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦で標高 4.50~4.55 m で壁は急角度で立ち上がる。埋土は青茶色粘質土単一層であった。遺物は須恵器、土師器、土錘片が出土しているが、細片で実測不可能である。

SK 10 (第 59 図)

第Ⅱ調査区の北東部に位置する。平面形は楕円形を呈し、長辺 2.38 m、短辺 1.09 m で、深さは検出面から 8 cm を測り浅い。長軸方向は N-22°-W である。断面形は浅い逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦で標高 3.09~3.11 m で壁はなだらかに立ち上がる。埋土は灰褐色粘質土単一層であった。遺物は皆無である。

SK 11 (第 59 図)

第Ⅱ調査区の北東部で SK 10 の南側に位置する。平面形は、L 字状に屈曲した不整形を呈し、長辺 2.38 m、短辺 1.09 m で、深さは検出面から 45~95 cm を測る。断面形は深い逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦で標高 2.25~2.78 m で壁は急角度で立ち上がる。埋土は灰褐色粘質土単一層であった。遺物は土師器杯、常滑焼甕、須恵器甕、東播系コネ鉢が出土している。

SK 12 (第 59 図)

第Ⅱ調査区の中央部の北側に位置する。平面形は楕円形を呈し、長辺 1.15 m、短辺 0.8 m で、深さは検出面から 6 cm を測り浅い。長軸方向は N-14°-E である。断面形は浅い逆台形状を呈し、底面はほぼ平坦で標高 3.42~3.50 m で壁はなだらかに立ち上がる。埋土は灰褐色粘質土単一層であった。遺物は土師器羽釜が出土しており、その他須恵器片があるが実測不可能である。

SK 13 (第 59 図)

第Ⅱ調査区の中央部の北側でSK 12の南側に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長辺1.41 m、短辺1.1 mで、深さは検出面から13~20 cmを測り浅い。長軸方向はN-89°-Eである。断面形は浅い船底形状を呈し、底面はほぼ平坦で標高4.98~5.04 mで壁はなだらかに立ち上がる。埋土は灰褐色粘質土単一層であった。遺物は土師器皿・杯、土錘があり、その他須恵器、土師器片が出土しているが細片で実測不可能である。

SK 14 (第59図)

第Ⅱ調査区の中央部の北側に位置する。平面形は不整三角形を呈し、長辺1.2 m、短辺0.76 mで、深さは検出面から17~28 cmを測る。断面形は浅い船底形状を呈し、底面は標高5.08~5.17 mで東側がやや深く壁はなだらかに立ち上がる。埋土は灰褐色粘質土単一層であった。遺物は、備前焼、土師器片が出土しているが実測不可能である。

SK 15 (第60図)

第Ⅱ調査区の中央部の東側に位置する。平面形は不整円形を呈し、長辺1.0 m、短辺0.9 mで、深さは検出面から17 cmを測り浅い。断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦で標高3.21~3.25 mで壁は急傾斜で立ち上がる。埋土は灰褐色粘質土単一層であった。出土遺物は皆無である。

SK 16 (第60図)

第Ⅱ調査区の中央部の東側に位置する。平面形は不整三角形を呈し、長辺2.19 m、短辺1.3 mで、深さは検出面から7~34 cmを測る。長軸方向はN-88°-Wである。断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦で標高4.89~5.15 mで壁は急傾斜で立ち上がる。埋土は灰褐色粘質土単一層であった。遺物は須恵器碗が出土している。

SK 17 (第60図)

第Ⅱ調査区の中央部の東側に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長辺1.52 m、短辺0.87 mで、深さは検出面から21~43 cmを測り北東部に掘り込みがある。長軸方向はN-31°-Eである。底面は平坦で北東部が標高3.24 m、南西部で2.93 mを測り、壁は急傾斜で立ち上がる。埋土は灰褐色粘質土単一層であった。遺物は東播系コネ鉢、土錘があり、その他瓦器、土師器片が出土しているが実測不可能である。

SK 18 (第60図)

第Ⅱ調査区の中央部に位置する。平面形は不整円形を呈し、長辺1.1 m、短辺0.98 mで、深さは検出面から11~16 cmを測り浅く柱穴に切られている。断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦で標高5.18~5.23 mで壁は急傾斜で立ち上がる。埋土は暗茶褐色粘質土単一層であった。遺物は瓦器、土師器、土錘片が出土しているが実測不可能である。

SK 19 (第60図)

第Ⅱ調査区の中央部に位置する。平面形は不整形を呈し、長辺2.06 m、短辺0.78 mで、深さは検出面から13~21 cmを測り浅く柱穴に切られている。断面形は逆台形状を呈し、底面は

平坦で標高 5.18～5.23 m で壁は急傾斜で立ち上がる。埋土は暗茶褐色粘質土単一層であった。遺物は瓦器、土師器、土錘片が出土しているが実測不可能である。

SK 20 (第 60 図)

第Ⅱ調査区の中央部の西側に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長辺 1.68 m、短辺 1.59 m で、深さは検出面から 16～22 cm を測り浅く柱穴に切られている。長軸方向は N-24°-E である。断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦で標高 5.24～5.32 m で壁は急傾斜で立ち上がる。埋土は茶褐色粘質土単一層であった。遺物は土師器片が出土しているが実測不可能である。

SK 21 (第 60 図)

第Ⅱ調査区の中央部の西側に位置する。平面形は不整形を呈し、長辺 2.58 m、短辺 1.67 m で、深さは検出面から 6～16 cm を測り浅い。底面は平坦で標高 5.65～5.72 m で壁は短く急傾斜で立ち上がる。埋土は茶褐色粘質土単一層であった。出土遺物は皆無である。

SK 22 (炉跡) (第 60 図)

第Ⅱ調査区の中央部の西側に位置する。遺構の西側半分が削平され全体の形状は不明である。残存している平面形は不整形を呈し、長辺 0.81 m、短辺 0.65 m を測る。深さは検出面から東部分 30 cm、西部分 10 cm を測る。底面の東部分は標高 5.68 m で壁は急傾斜で立ち上がる。西側部分は一段窪みをもち緩やかに立ち上がる。埋土は 4 層に分割でき、Ⅰ層は淡茶灰色土層で焼土ブロックを含む、Ⅱ層は暗茶灰色土層で炭化物・焼土・青灰色粘土をブロックで含む、Ⅲ層は淡茶褐色粘質土層、Ⅳ層は焼土である。遺物は、唐津皿が出土しており、その他白磁、青磁片があるが細片で実測不可能である。

SK 23 (第 60 図)

第Ⅱ調査区の中央部の西側に位置する。平面形は楕円形を呈し、長辺 1.27 m、短辺 0.93 m で、深さは検出面から 10～36 cm を測り西南部は一段浅くなっている。長軸方向は N-87°-E である。底面は平坦で標高 5.00～5.23 m で壁は短く急傾斜で立ち上がる。埋土は茶褐色粘質土単一層であった。出土遺物は皆無である。

SK 24 (第 60 図)

第Ⅱ調査区の中央部の西側に位置する。平面形は楕円形を呈し、長辺 1.44 m、短辺 1.06 m で、深さは検出面から 30 cm を測る。長軸方向は N-15°-W である。断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦で標高 5.00～5.09 m で壁は急傾斜で立ち上がる。埋土は茶褐色粘質土単一層であった。遺物は土師器杯が出土している。

SK 25 (第 60 図)

第Ⅱ調査区の中央部の西側で SK 24 の南側に位置する。平面形は円形状を呈し、長辺 0.74 m、短辺 0.72 m で、深さは検出面から 13～17 cm を測る。断面形は逆台形状を呈し、底面は平坦で標高 5.19～5.21 m で壁は急傾斜で立ち上がる。埋土は茶褐色粘質土単一層であった。遺物

は土師器杯が出土している。

SK 26 (第 60 図)

第Ⅱ調査区の中央部の南東側に位置する。平面形は不整形を呈し、長辺 2.28 m で、深さは検出面から 8~10 cm を測る。底面は平坦で標高 3.38~3.48 m で壁は緩やかに立ち上がる。埋土は茶灰色粘質土単一層であった。出土遺物は皆無である。

SK 27 (第 60 図)

第Ⅱ調査区の中央部の南東側で SK 26 の西側に位置する。平面形は不整形を呈し、長辺 1.3 m で、深さは検出面から 10~18 cm を測り浅い。断面は逆台形状を呈し、底面は平坦で標高 3.38~3.48 m で壁は短く急傾斜で立ち上がる。埋土は茶灰色粘質土単一層であった。出土遺物は土師器片、スラグが出土しているが実測不可能である。

SK 28 (第 60 図)

第Ⅱ調査区の南部に位置する。平面形は瓢箪形を呈し、長辺 1.78 m、短辺 0.4 m で、深さは検出面から 12~15 cm を測り浅い。断面は逆台形状を呈し、底面は平坦で標高 3.38~3.46 m で壁は短く急傾斜で立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土単一層であった。出土遺物は皆無である。

SK 29 (第 60 図)

第Ⅱ調査区の南部で SK 28 の南西側に位置する。平面形は楕円形を呈し、長辺 1.11 m、短辺 0.97 m で、深さは検出面から 9~10 cm を測り浅い。断面は逆台形状を呈し、底面は平坦で標高 5.27~5.30 m で壁は短く急傾斜で立ち上がる。埋土は暗褐色粘質土単一層であった。出土遺物は皆無である。

SK 30 (炉跡) (第 60 図)

第Ⅱ調査区の南西部に位置する。平面形は楕円形を呈し、長辺 0.39 m、短辺 0.27 m で、深さは検出面から 14~17 cm を測り浅く小規模である。断面は逆台形状を呈し、底面は平坦で標高 5.3~5.4 m で壁は比較的急傾斜で立ち上がる。埋土は茶褐色粘質土単一層であった。遺物は土師器皿が出土している。

SK 31 (炉跡) (第 60 図)

第Ⅱ調査区の西部に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長辺 0.90 m、短辺 0.78 m で、深さは検出面から 8~10 cm を測り浅く小規模である。断面は逆台形状を呈し、底面は平坦で標高 5.3~5.4 m で壁は比較的急傾斜で立ち上がる。埋土は茶褐色粘質土単一層であった。出土遺物は皆無である。

3) 火葬墓 (第 60 図)

調査区の南西部に位置する。H 33-21 グリッドにおいて検出した。平面形は不整円形を呈

する。規模は、長径 0.54 m、短径 0.52 m を測り深さは 17 cm である。骨臓器の埋納されている部分が、一段深く掘り込まれ東側は急に西側は緩やかに立ち上がる。蓋に使用した土師器の杯は、割れて埋土中に散在している状態で出土した。埋土は 5 層に分割され、Ⅰ層が暗褐色粘質土で炭化物・焼土を多く含む。Ⅱ層は暗茶褐色粘質土で締まりがあり、炭化物・焼土・白色骨片を少量であるが含む。Ⅲ層が茶褐色粘質土、Ⅳ層が暗褐色粘質土で炭化物を多量に含み、白色骨片を少量含む。Ⅴ層は茶褐色粘質土で粘性は強い。出土遺物は須恵器の骨臓器と蓋に使用された土師器杯であるが、骨臓器の中には骨片と歯が器の二分の一に納められていた。

4) 集石遺構

集石遺構としたものには、墓としての性格が考えられる遺構がある。その他は性格不明であるが、まとめて SX (集石遺構) とした。ここでは、主な集石遺構に付いて説明を加えていくことにする。

SX 1 (第 61 図)

第Ⅰ調査区の中央部西側に位置し、C 33-8 グリッドのⅥ層上面で検出した。規模は東西 2.0 m、南北 1.7 m を測り、15~50 cm の自然礫を方形状に配置している。集石内の掘り込みは認められず、内部がやや盛り上がっている。遺物は、備前焼の播鉢・甕、土師器、瓦器碗の破片やスラグが出土しているが細片で実測不可能である。

SX 2 (第 61 図)

第Ⅰ調査区の中央部やや西側に位置し、C 33-8・9 グリッドのⅤ層上面で検出した。規模は東西 1.90 m、南北 1.85 m の方形を呈している。周囲は、30~50 cm の比較的大きい自然礫を方形状に配置し、その中には 5~10 cm の河原石と 20~30 cm の自然礫を充填している。集石下部には掘り込みは認められない。出土遺物は皆無である。

SX 3 (第 62 図)

第Ⅰ調査区の中央部で、SX 2 の東側に位置し C 33-9 グリッドのⅥ層上面で検出した。規模は、南北 1.75 m、東西 1.4 m を測り、長方形を呈する。周囲に 30~40 cm 大の比較的大きい自然礫を配し方形状に区画している。中央部には、20~30 cm 大の自然礫及び 5~10 cm 大の河原石を充填している。集石内下部には掘り込みは認められない。遺物は、瓦器碗が出土している。

SX 4 (第 62 図)

第Ⅰ調査区の南東部に位置する。C 34-2・3 グリッドのⅥ層上面で検出した。規模は、一辺が 1 m を測り、方形状を呈する。周囲に 30~40 cm 大の比較的大きい自然礫を配し中央部にもやや小さい自然礫と河原石を配置している。集石内下部の掘り込みは明確ではないが礫の部分のみ掘り込んでいる。遺物は、備前焼甕・播鉢が出土しており、その他備前焼の播鉢・甕、

土師器、瓦器碗の破片やスラグが出土しているが細片で実測不可能である。

SX 7 (第 62 図)

第Ⅱ調査区の北西部に位置する。D 34-22 グリッドのⅣ層上面で検出した。集石の範囲は、東西 2.4 m、南北 1.5 m を測る。人頭大の自然礫が中央部に配置され、拳大の礫が周囲に散在している。遺物は、須恵系の壺やその他実測不可能であるが瓦質土器コネ鉢、土師器、瓦器片が出土している。

SX 8 (第 63・64 図)

第Ⅱ調査区の中央部北側に位置する。E 35-1・6・11 グリッドのⅣ層上面で検出した。集石の範囲は、南北 7.2 m、東西 2.7 m を測る。二ヶ所に集中して礫が配置されており、南部の集石は一辺 2.5 m を測り大型で径 30~40 cm 大の自然礫を方形に区画している。敷石内は拳大の自然礫及び、径 5~10 cm 大の河原石が散在している。その中で南西部には、集中して河原石を平面的に敷き並べている。北部集石は人頭大の自然礫を円形状に配石している。遺物は瓦質土器と土師器小皿、東播系コネ鉢、備前焼壺・甕・播鉢、常滑焼甕、瓦質土器甕・播鉢、コネ鉢、砥石、白磁皿・碗、青磁碗がありその他土師器、瓦器片、スラグが出土している。

SX 9 (第 62 図)

第Ⅱ調査区の中央部北側に位置する。E 34-15 グリッドのⅣ層上面で検出した。規模は南北 2.3 m、東西 2.5 m を測り、やや東西に長い方形を呈する。大型で径 30~40 cm 大の自然礫を方形に区画し緑石としている。敷石面は径 5~10 cm 大の河原石を平面的に敷き並べている。出土遺物は皆無である。

SX 10 (第 65 図)

第Ⅱ調査区の中央部北側で、SX 11 の北側に位置する。E 36-13・14・18・19 グリッドのⅣ層上面で検出した。上下の二面に集石が配置されており、その範囲は東西 4.6 m・南北 2.5 m を測り、東西に長く配石されている。上面の西側部分は 30~40 cm 大の自然礫を方形に配置しており、西側は 5~10 cm 大の河原石を積み重ねている。下面の集石は、やや大型の自然礫を長方形に配置されている。遺物は土師器杯、白磁碗が出土している。その他に常滑焼、土錘、東播系片口鉢、スラグが出土しているが実測不可能である。

SX 11 (第 66 図)

第Ⅱ調査区中央部北側で SX 10 の南側に位置する。E 34-18・23 グリッドのⅣ層上面で検出した。集石の範囲は、南北 3.5 m、東西 1.8 m を測る。南部は 30~50 cm 大の自然礫を方形に配置しており、その一辺は 1.2 m を測る。北側に集石が延びているが、拳大の自然礫及び河原石が平面的に配石されている。遺物は土師器小皿、常滑焼甕が出土している。その他瓦質土器が出土しているが実測不可能である。

SX 12 (第 66 図)

第Ⅱ調査区中央部やや北側に位置する。F 35-7 グリッドのⅣ層上面において検出した小規

模な集石遺構である。径30～40 cm大の自然礫を中心に10～20 cm大の礫を、東西1.0 m、南北1.3 mの範囲に配置されている。遺物は伊万里の皿が出土している。

SX 13 (第67図)

第Ⅱ調査区の中央部東側に位置する。F 35-15グリッドのⅣ層上面にかけて検出した。上面は径20～30 cm大の被覆礫が、一辺3 mを呈し方形に積み上げられている。下面は30～50 cm大の自然礫を方形に区画し縁石としている。規模は東西2.3 m、南北3.0 mを測る。中央部にも40～50 cm大の自然礫を方形に配置している。内部は5～10 cm大の河原石を充填しており層を成している。遺物は常滑焼甕、東播系コネ鉢、鉄釘、土錘、備前焼甕・播鉢、石製品で白・砥石が出土している。その他青磁、瓦質土器片、スラグが出土しているが実測不可能である。

SX 14 (第68図)

第Ⅱ調査区の中央部でSX 15の西側に位置する。F 34-24・25、F 35-21・22グリッドのⅣ層上面において検出した。集石の範囲は、東西10.0 m、南北1.5 mで東西に長い。径10～20 cm大の自然礫が集中して出土している。遺物は土師器皿・椀・羽釜、楠葉型の瓦器椀、青磁碗・皿、白磁碗、東播系コネ鉢、土錘、陶器播鉢、有孔石製品・砥石が出土している。その他常滑焼片も出土しているが実測不可能である。

SX 15 (第69図)

第Ⅱ調査区中央部東側に位置する。F 35-25・F 36-21グリッドにかけて検出した。SX 14と列をなす東西列の集石である。西側部分は、L字状に屈曲し一部北側に延びる。東西列の範囲は5.7 m、南北列3.2 mである。人頭大から拳大の自然礫を平面的に配置している。遺物は、土師器の茶釜、瓦質土器の羽釜、東播系コネ鉢、備前焼播鉢・甕、青磁碗、土錘、砥石が出土しておりその他、常滑焼片、スラグもある。

SX 16 (第66図)

第Ⅱ調査区中央部の南側に位置する。H 34-2グリッドのⅣ層上面において検出した。集石の範囲は、南北1.7 m、東西1.2 mの楕円形状の広がりを見せる。径20～30 cm大の自然礫が集中して配石されている。出土遺物は皆無である。

SX 17 (第66図)

第Ⅱ調査区の中央部南側に位置する。H 34-4グリッドにおいて検出した。集石は南北1.9 m、東西1.0 mの範囲に、人頭大から拳大の自然礫が散在している。遺物は、備前焼播鉢が出土しており、その他瓦質土器片、スラグがある。

SX 18 (第70図)

第Ⅱ調査区の中央部南側に位置する。H 35-1グリッド周辺のⅣ層上面で検出した。L字状に屈曲しており、東西列5.8 m、南北列4.1 mで幅は1.0～1.3 mの範囲で配置している。径30～50 cm大の自然礫は南北列に多く密集しており、東西列はやや小さい礫が散在している状

況である。遺物は瓦質土器羽釜，東播系コネ鉢，土師器小皿，備前焼播鉢が出土している。その他スラグ，常滑焼片があるが実測不可能である。

SX 19 (第 70 図)

第Ⅱ調査区の中央部南側で SX 18 の東側に位置する。H 35-3 グリッドでⅣ層上面において検出した。比較的小規模な集石遺構で，範囲は南北 1.0 m，東西 2.4 m を測る。径 40～60 cm 大の自然礫とその周辺に拳大の礫を集めている。遺物は，東播系コネ鉢，瀬戸美濃系天目茶碗，青磁皿が出土しており，その他備前焼，土師器，スラグがある。

SX 20 (第 70 図)

第Ⅱ調査区の中央部南側で，SX 17 のさらに南側に位置する。H 34-12・13 グリッドにおいて検出した。集石の範囲は，南北 2.0 m，東西 1.3 m で方形状を呈する。径 30～40 cm 大の自然礫を周囲に配置し，中央部には人頭大から拳大の河原石を充填している。出土遺物は皆無である。

SX 21 (第 71 図)

第Ⅱ調査区の南部に位置する。I 34-6・7・11・12 グリッドにかけてⅣ層上面で検出した。北側は拳大の自然礫が散在している状況で，南側は径 30～40 cm 大の自然礫を中心に方形状に人頭大から拳大の礫を配置している。遺物は瓦質土器鍋，備前焼播鉢，砥石があり，その他に実測不可能なものとして土師器，青磁，常滑焼片，スラグが出土している。

SX 23 (第 69 図)

第Ⅱ調査区の南部で，SD 6・7 に挟まれて位置する。J 33-4 グリッドのⅣ層上面において検出した。集石の範囲は，長辺 1.7 m，短辺 1.2 m に人頭大から拳大の自然礫を密集して配置している。中央部がやや盛り上がり，比較的大きい礫が集中している。遺物は，小刀，青磁碗がありその他常滑焼片が出土している。

SX 24 (第 72 図)

第Ⅱ調査区の西部に位置する。J 32-23・K 32-2 グリッド周辺の広い範囲で検出した。東西に長く検出しているが，東側は比較的集中しており径 10～20 cm 大の自然礫が密集している。西側は拳大の自然礫が散在している状況である。遺物は，瓦質土器播鉢，青磁碗，唐津大皿・皿，染付皿が出土している。

SX 25 (第 69 図)

第Ⅱ調査区の中央部北西側に位置する。G 33-20 グリッドで検出した小規模な集石遺構である。中央部に径 40 cm を測る自然石が配置され，その周囲に径 5～20 cm 大の自然礫が散在している。出土遺物は皆無である。

5) 溝跡 (付図 7, 8)

SD 1

調査区中央部のやや北側に位置する。F 35-12・17 グリッドにかけて検出した。南北の方向を示す溝で、長さ 5.1 m、幅は北側で 0.6~1.0 m、南側 1.3 m を測り溝幅が一定でない。さらに北側に延びるが、プランが明確でなく不明である。深さは平均 9~25 cm を測り全体的に浅い溝である。底面の標高は 3.47 m を測り、北側がやや浅くなっている。断面形は浅い逆台形状を呈し埋土は、茶灰色粘質土である。遺物は土師器小皿・椀、土錘が出土している。その他に土師器、瓦器片、スラグがあるが実測不可能である。

SD 2

調査区中央部のやや北側で、SD 1 の東側に位置する。F 35-13・14 グリッドにかけて検出した。長さ 4.0 m、幅は 0.9~1.5 m を測る。さらに北側に延びるがプランが不明確である。深さは平均 9~12 cm を測り全体的に浅い溝である。底面の標高は 3.31 m である。断面形は逆台形状を呈している。埋土は茶灰色粘質土である。遺物は土錘、瓦器皿が出土している。その他に土師器、瓦器片があるが実測不可能である。

SD 3

調査区中央部のやや南西側に位置する。G 33-25・H 34-1・6 グリッドにかけて検出した。南北方向の溝で、長さ 9.0 m、幅は 0.3~0.7 m を測る。深さは平均 9~18 cm を測り全体的に浅い溝である。底面の標高は北側で 5.19 m 南側で 5.17 m で南側がやや浅くなっている。断面形は逆台形状を呈し、埋土は茶灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SD 4

調査区中央部のやや南西側で、SD 3 の南東側に位置する。H 34-7 グリッドにかけて検出した。南北方向の溝であるが、南側はプランが不明確である。長さ 5.70 m、幅は 0.2~0.5 m を測る。深さは平均 7~27 cm を測り全体的に浅い溝である。底面の標高は北側で 5.20 m 南側で 5.06 m で南側に低くなっている。断面形は逆台形状を呈している。埋土は茶灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SD 5

調査区中央部の南西側に位置する。H 35-17・22 グリッドにかけて検出した。SD 4 と同じ方向の溝で、南側はプランが不明確である。長さ 3.5 m、幅は 0.5~1.0 m を測る。深さは平均 8~18 cm を測り全体的に浅い溝である。底面の標高は北側で 3.41 m 南側で 3.29 m を測り南側に低くなっている。断面形は逆台形状を呈している。埋土は茶灰色粘質土である。出土遺物はスラグが多い。

SD 6

調査区南部に位置する。南北方向の溝跡で、水田跡から接続して中筋川に延びて行く。長さ 22.4 m、幅は北側 2.08 m、南側 0.64 m を測り南に行くに従い狭くなっている。深さは平均 10~17 cm を測り浅い溝である。底面の標高は北側で 5.03 m、南側で 4.96 m を測り南側が低く

なっている。断面は逆台形状を呈し埋土は灰褐色粘質土である。遺物は土師器小皿，青磁瓶，東播系コネ鉢，砥石，土錘がある。その他には土師器，青磁片，スラグが出土しているが実測不可能である。

SD 7

調査区の南部に位置する。南北方向の溝跡でSD 6と同方向で蛇行している。長さ16 m，幅は0.48 mを測る。深さは平均して14～17 cmを測り浅い溝である。底面の標高は，4.79 mを測る。断面は逆台形状を呈し，埋土は茶灰色粘質土である。出土遺物は皆無である。

SD 8

調査区の南部に位置する。東西方向の溝で，遺構の東側は調査区外に延びる。検出範囲は，長さ4.5 m，幅は1.0 mである。深さは中央部で57 cmを測る。底面の標高は，4.5 mである。断面は逆台形状を呈し，埋土は灰茶色粘質土である。出土遺物は白磁皿，キセル，砥石である。

6) ピット群 (付図7, 8)

第Ⅰ調査区では，南側で集中してピット群を検出している。掘立柱建物跡が3棟建つがさらに調査区の南側にも延びておりピットも多くなる。第Ⅱ調査区では，調査区中央部に集中してピット群が存在する。ピットの密集度が高く，建物が数回建て替えられていることが分かる。その他はSD 6の東側に集中しており，他は散在している状況である。

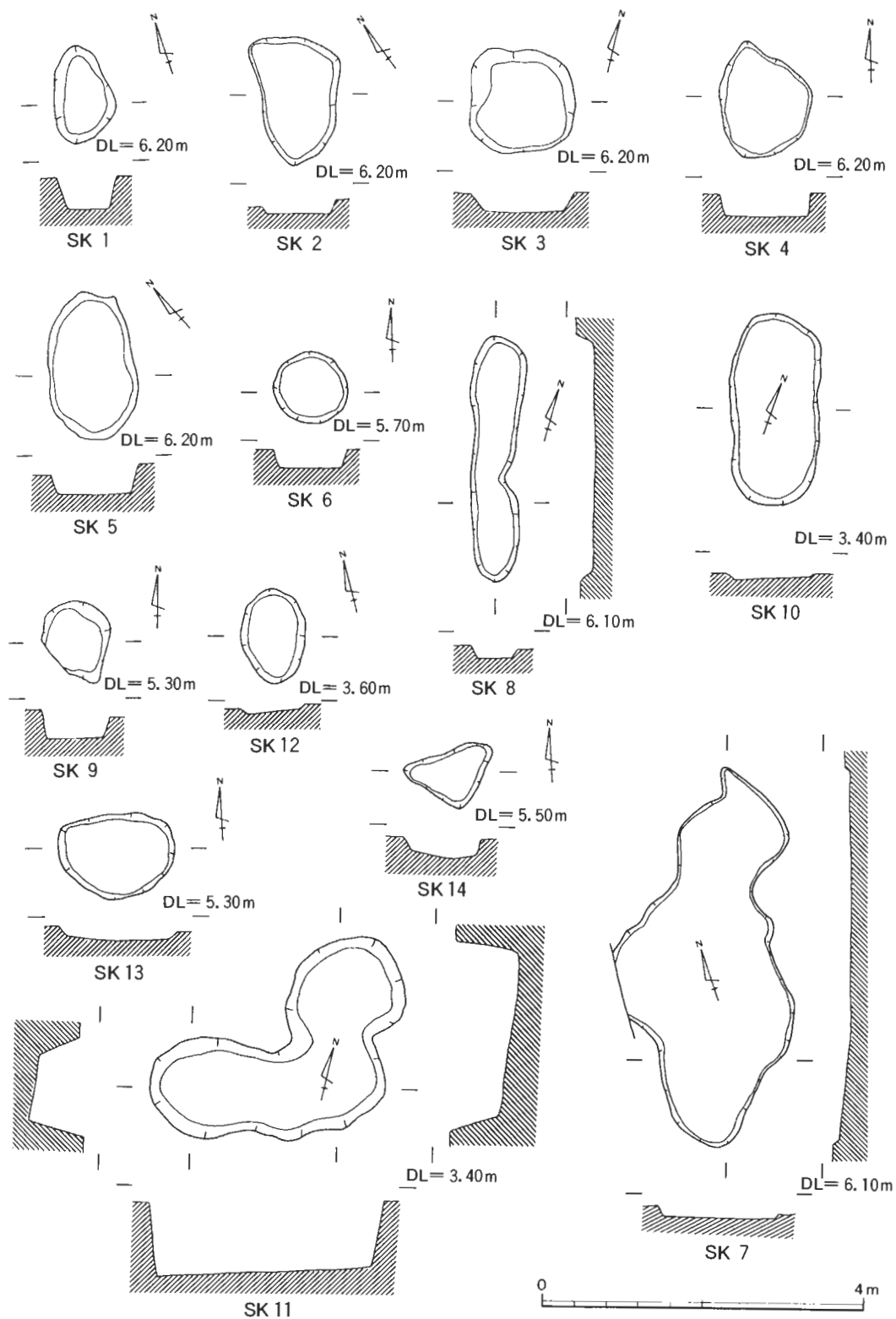
7) 水田跡 (付図8)

水田跡が明確に検出できたのは，第Ⅱ調査区南西部に位置する水田1のみで，南側の掘り込み部分が検出できた。その他水田1の北部に他の水田跡が広がっているが，青灰色粘質土を埋土とするため，明確に切りあい関係を掴むことができなかった。しかし杭跡を何列か検出されたことにより，中世から近世まで何度も耕作されていたことは明らかである。

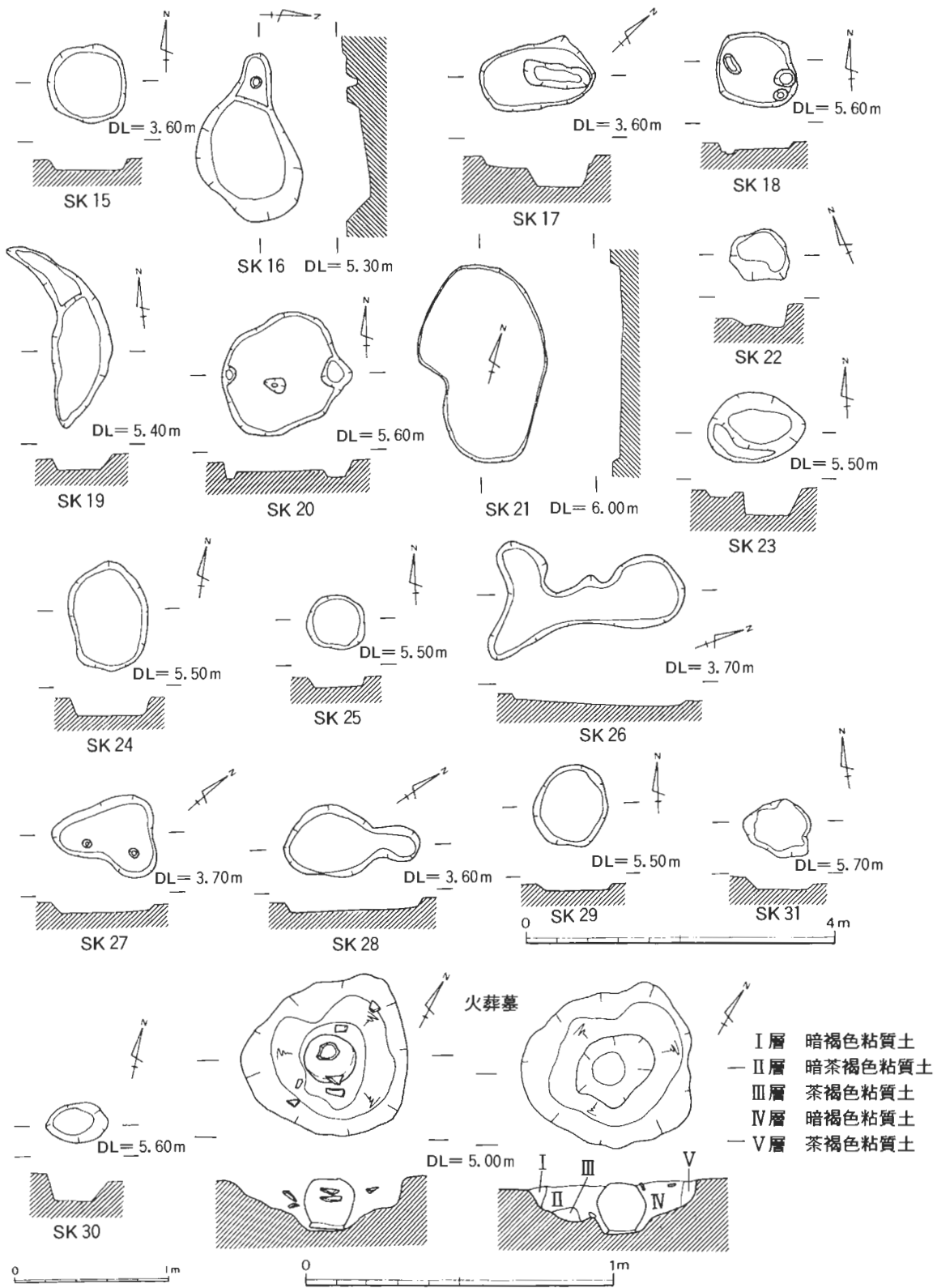
8) 欄列 (第57図)

SA 1

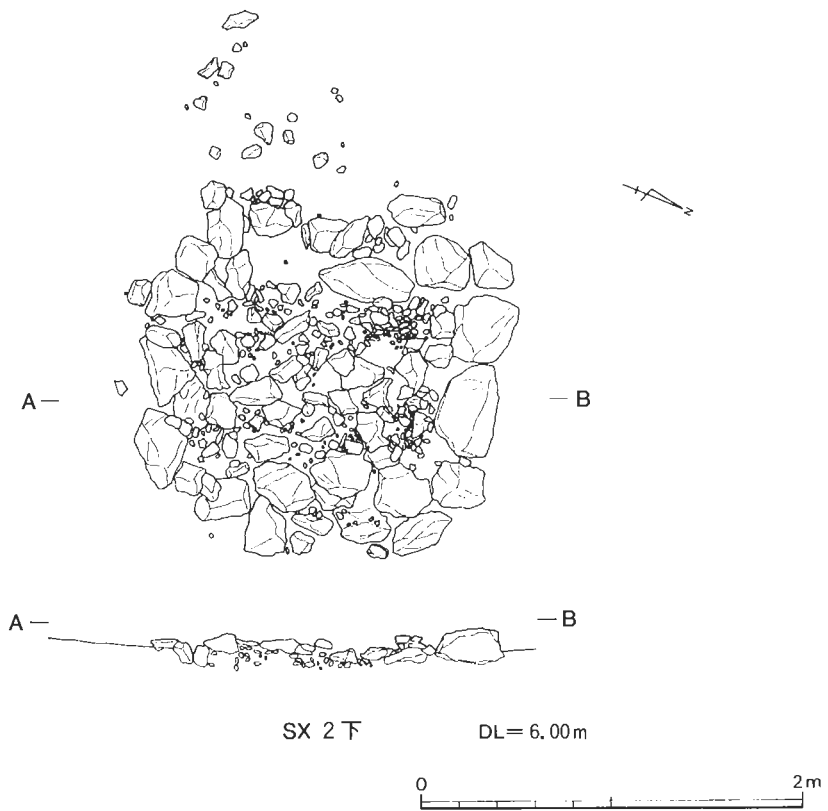
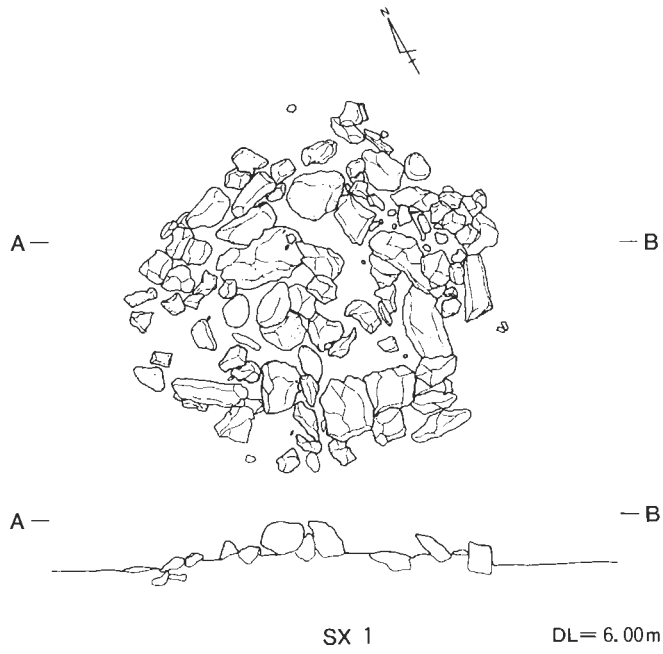
調査区南西部でSB 28の北側に位置する。K 32-3・4グリッドで検出した東西の塀跡である。方向はN-66°-Eである。規模は，東西3間・6.7 mを測り柱間寸法は1.9～2.5 mである。柱穴の掘り方は，円形状を呈し20～30 cmを測る。深さは検出面より30～70 cmで，埋土は茶灰色粘質土である。遺物は，土師器が出土しているが細片で実測不可能である。(松田)



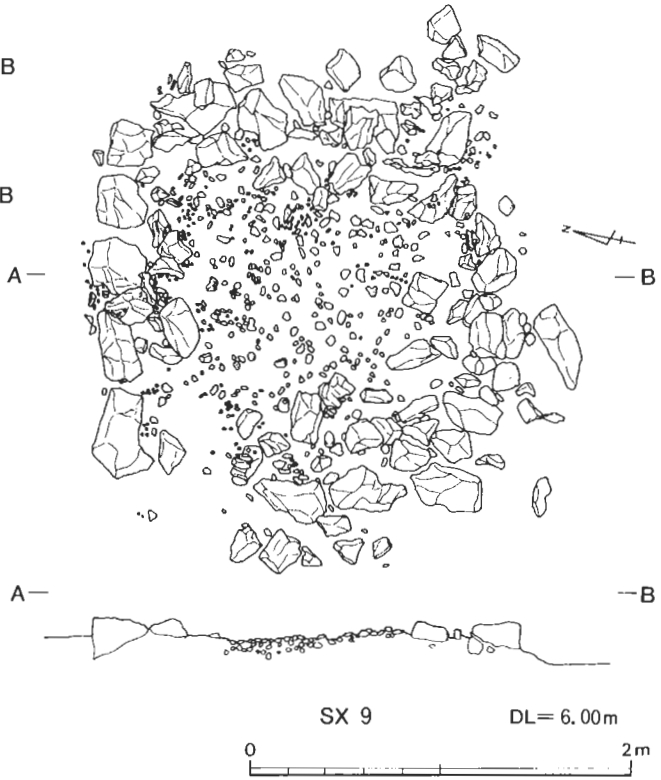
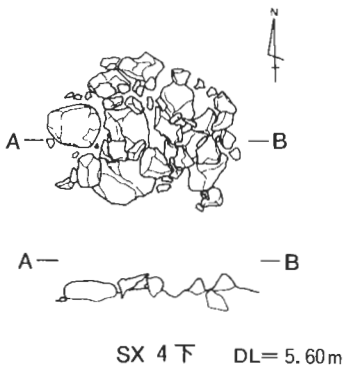
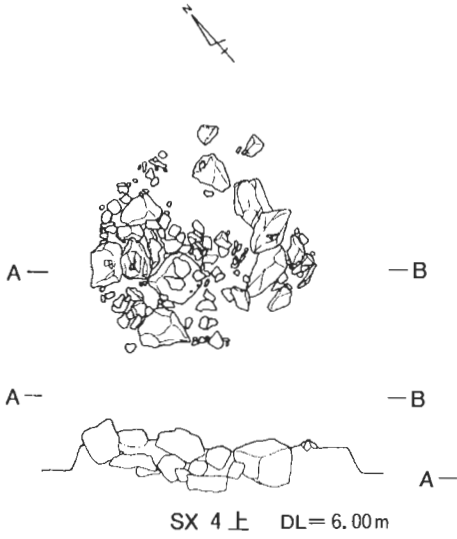
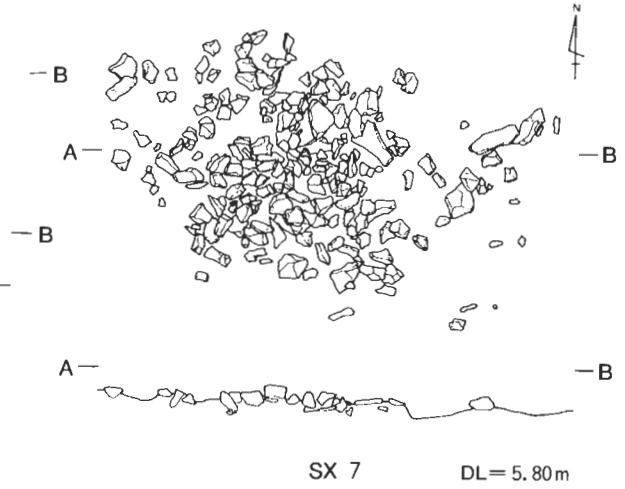
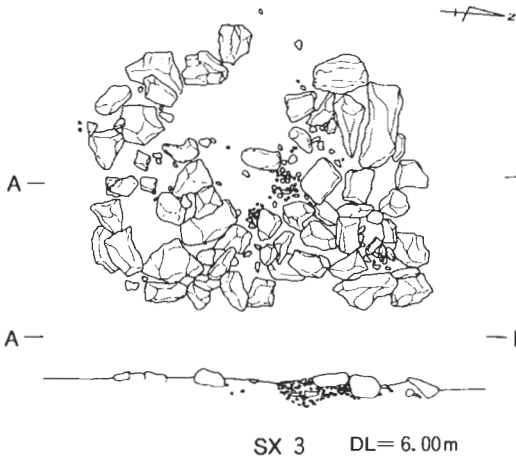
第 59 図 SK 1~14 実測図



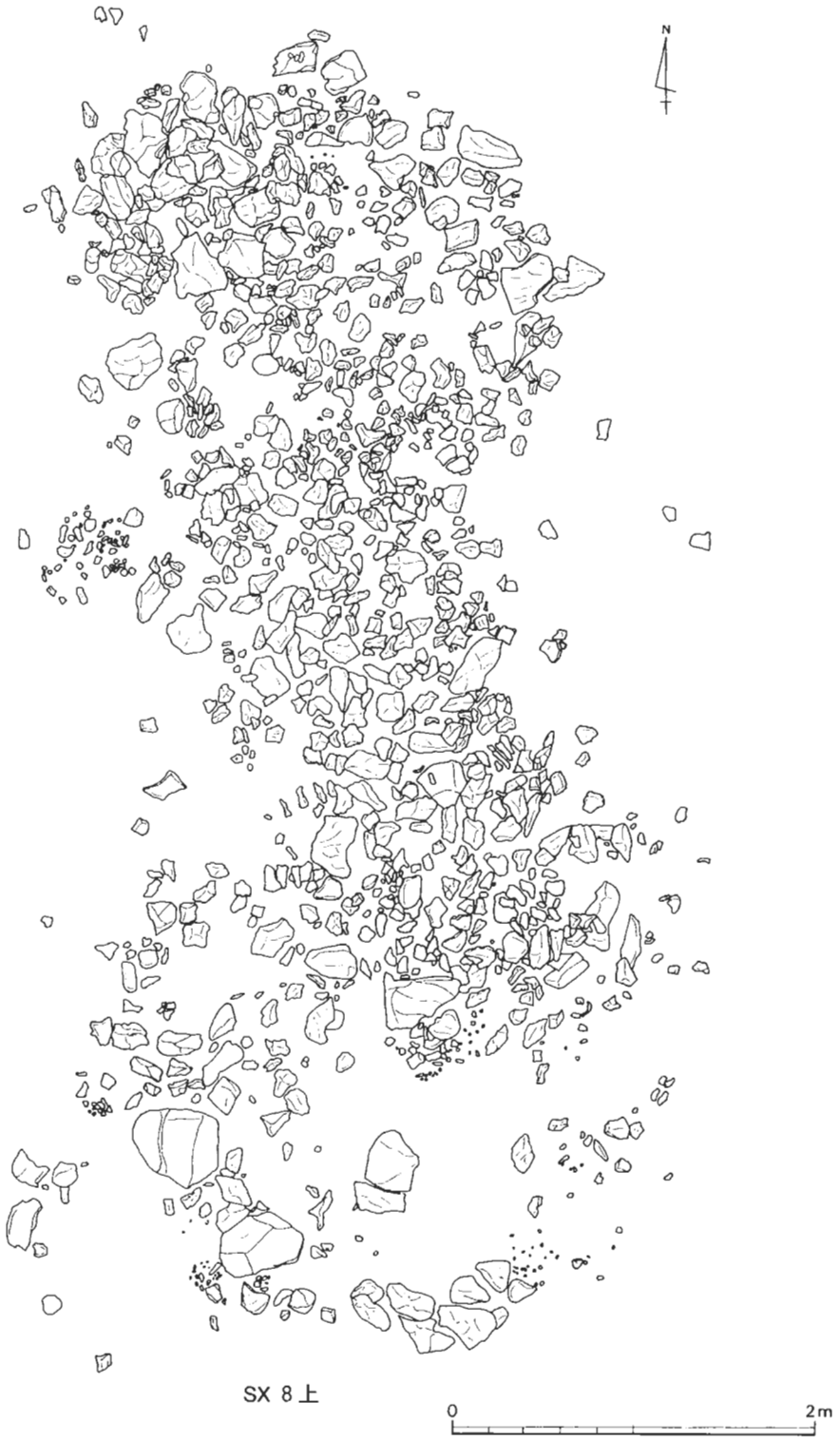
第 60 図 SK 15~31・火葬墓 実測図



第 61 図 SX 1・2 実測図



第62图 SX3·4·7·9 实测图

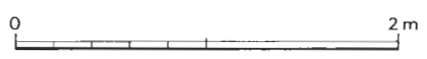
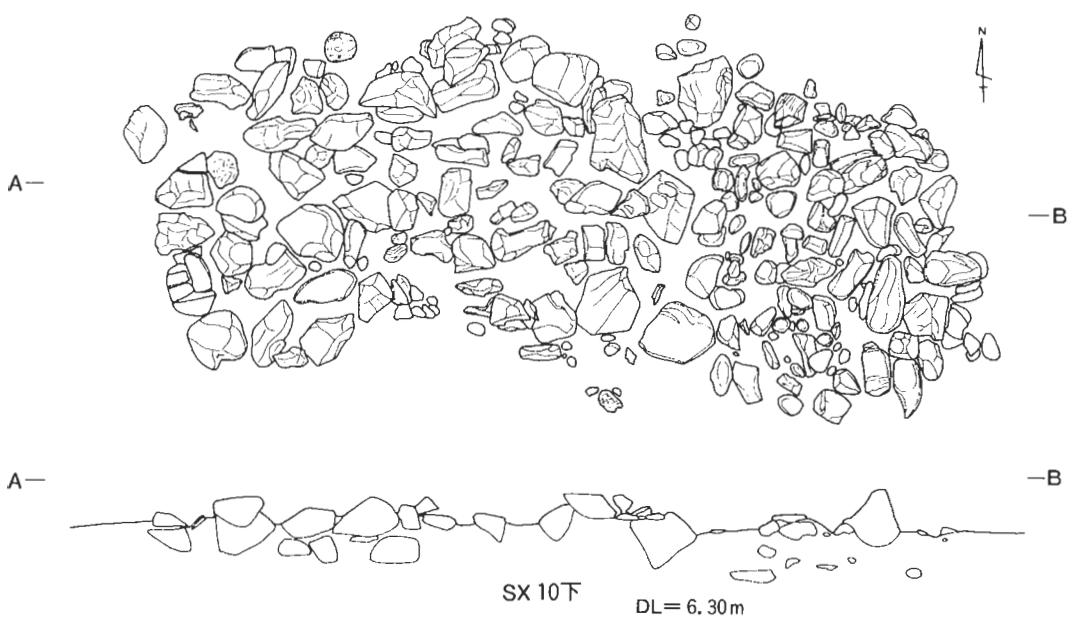
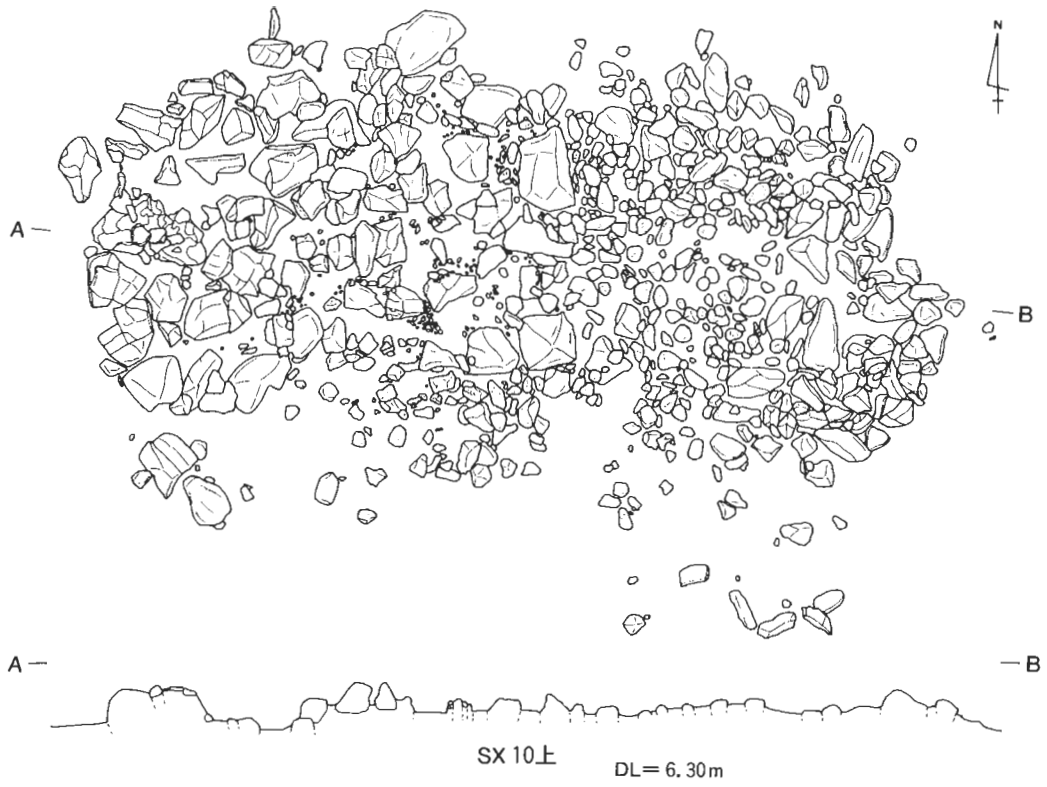


SX 8 上

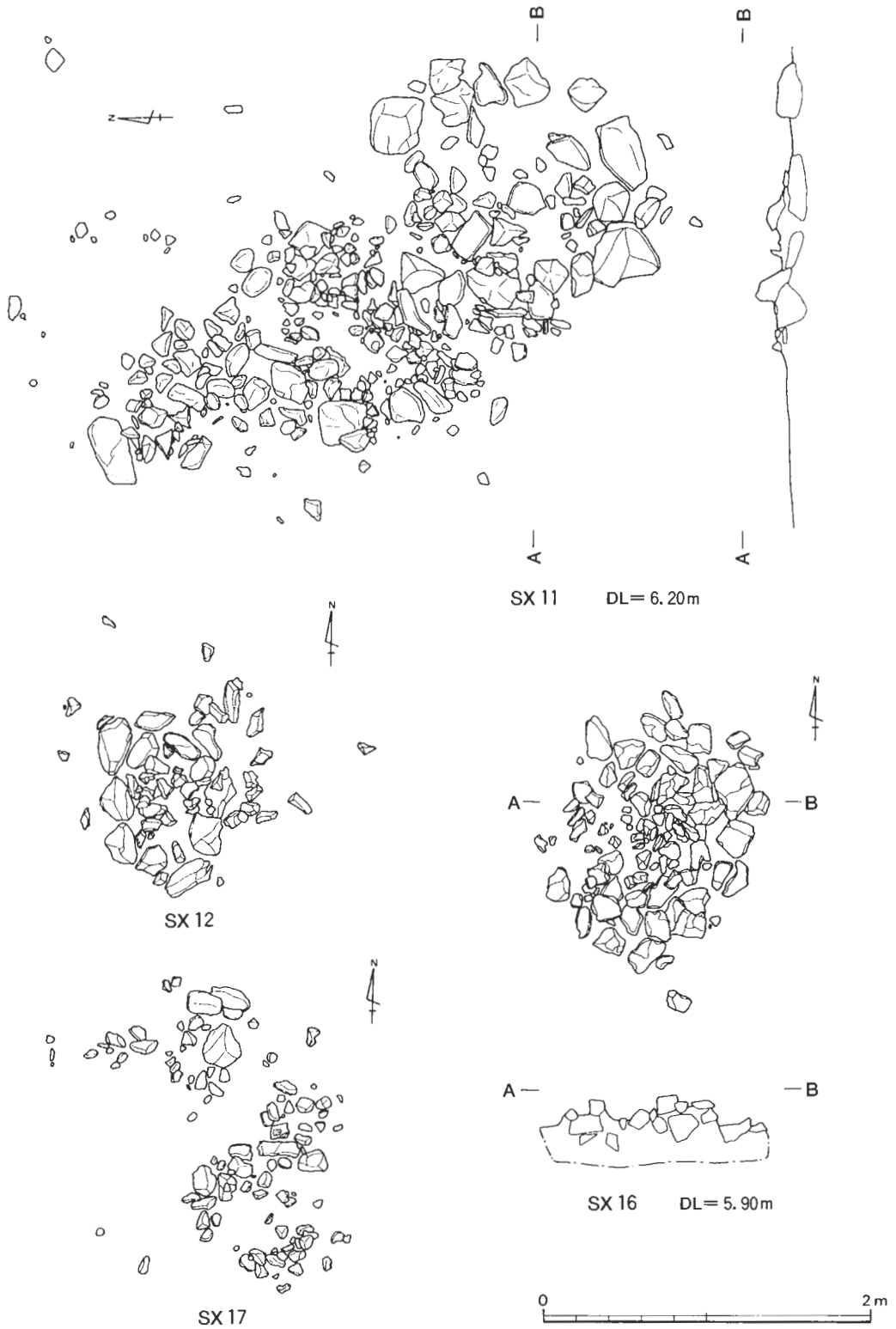
第63图 SX 8 上 实测图



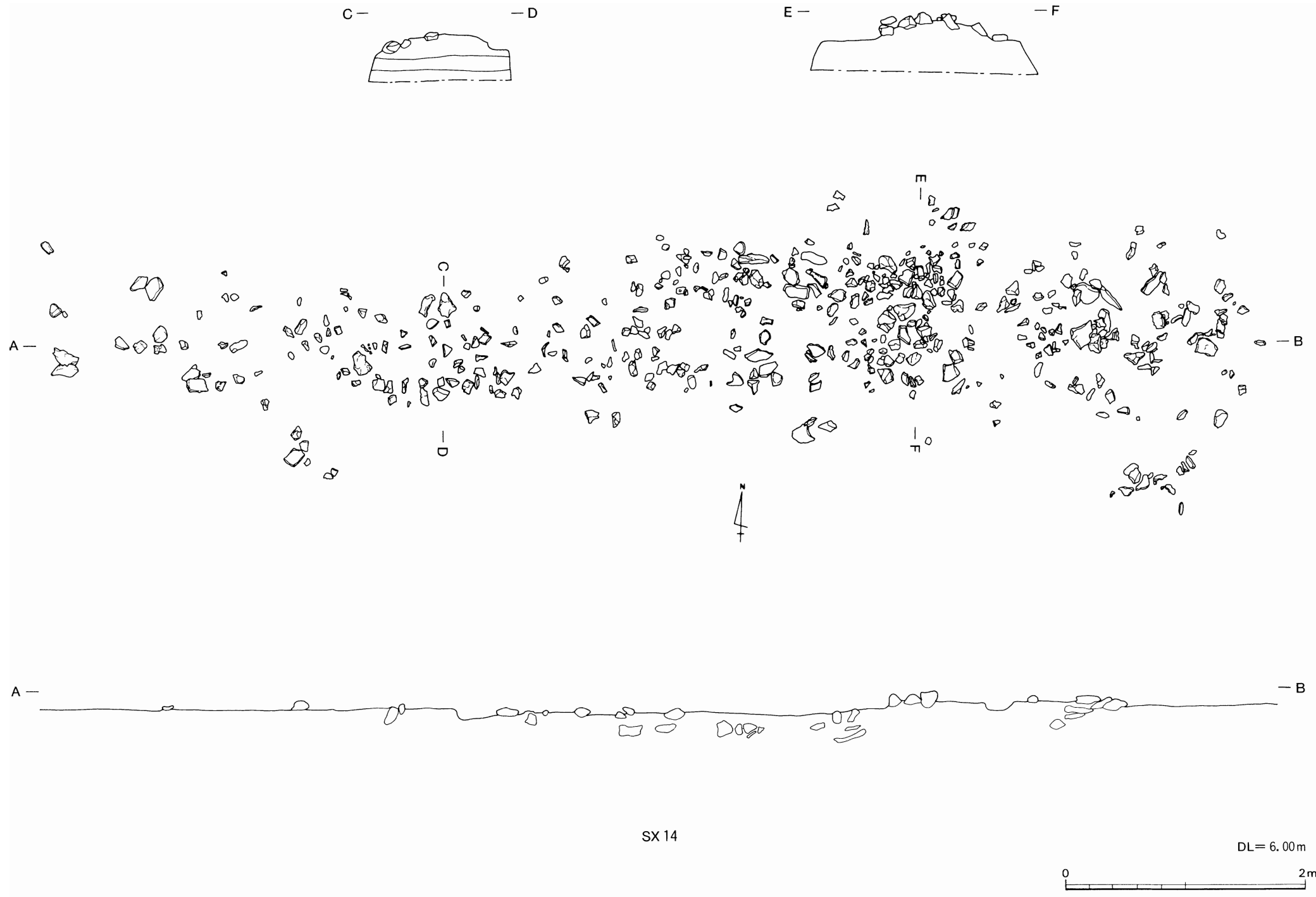
第64图 SX8 下 实测图



第 65 図 SX 10 実測図

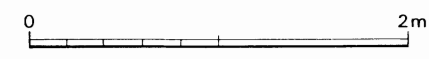


第66図 SX 11・12・16・17 実測図

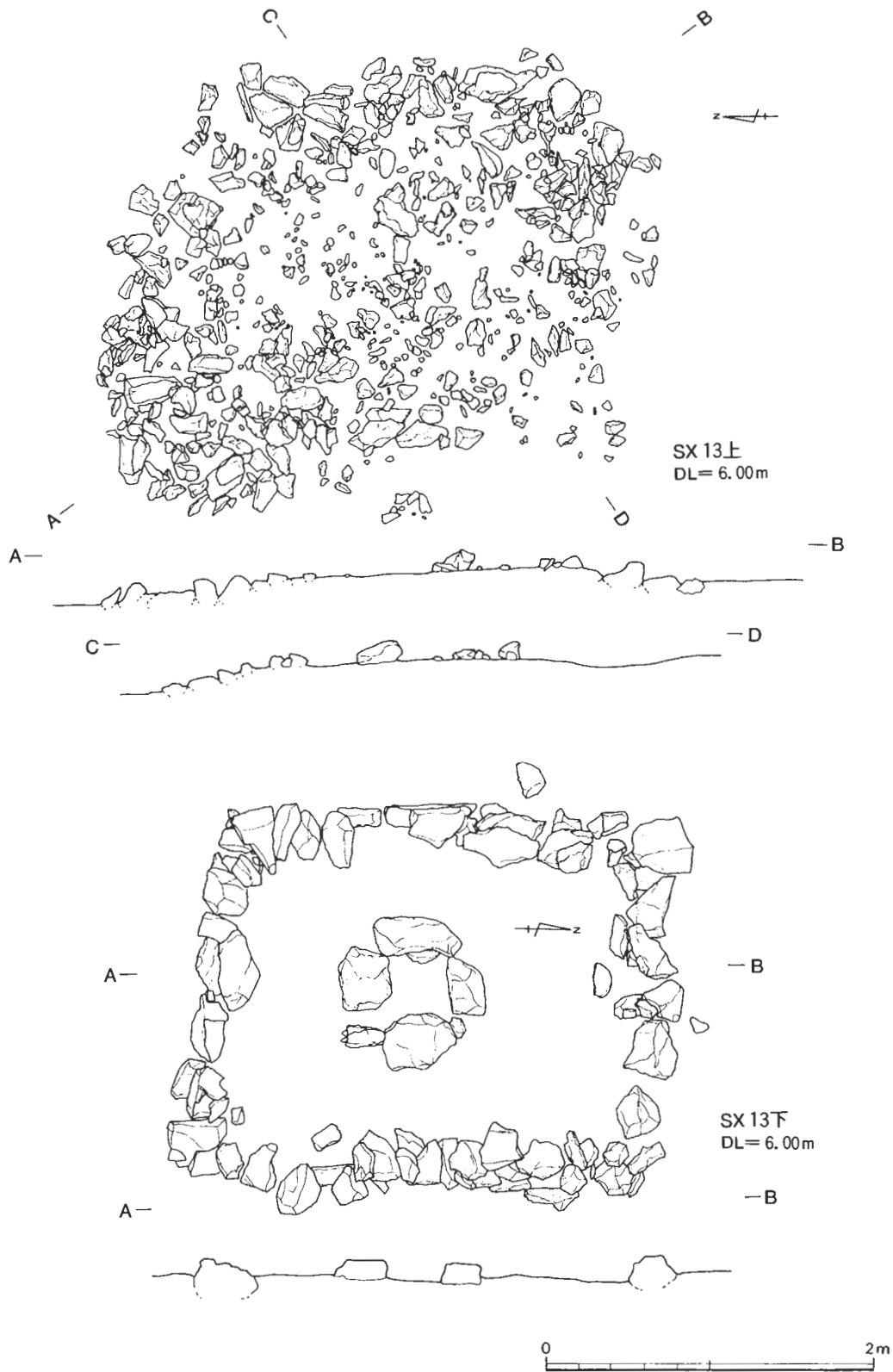


SX 14

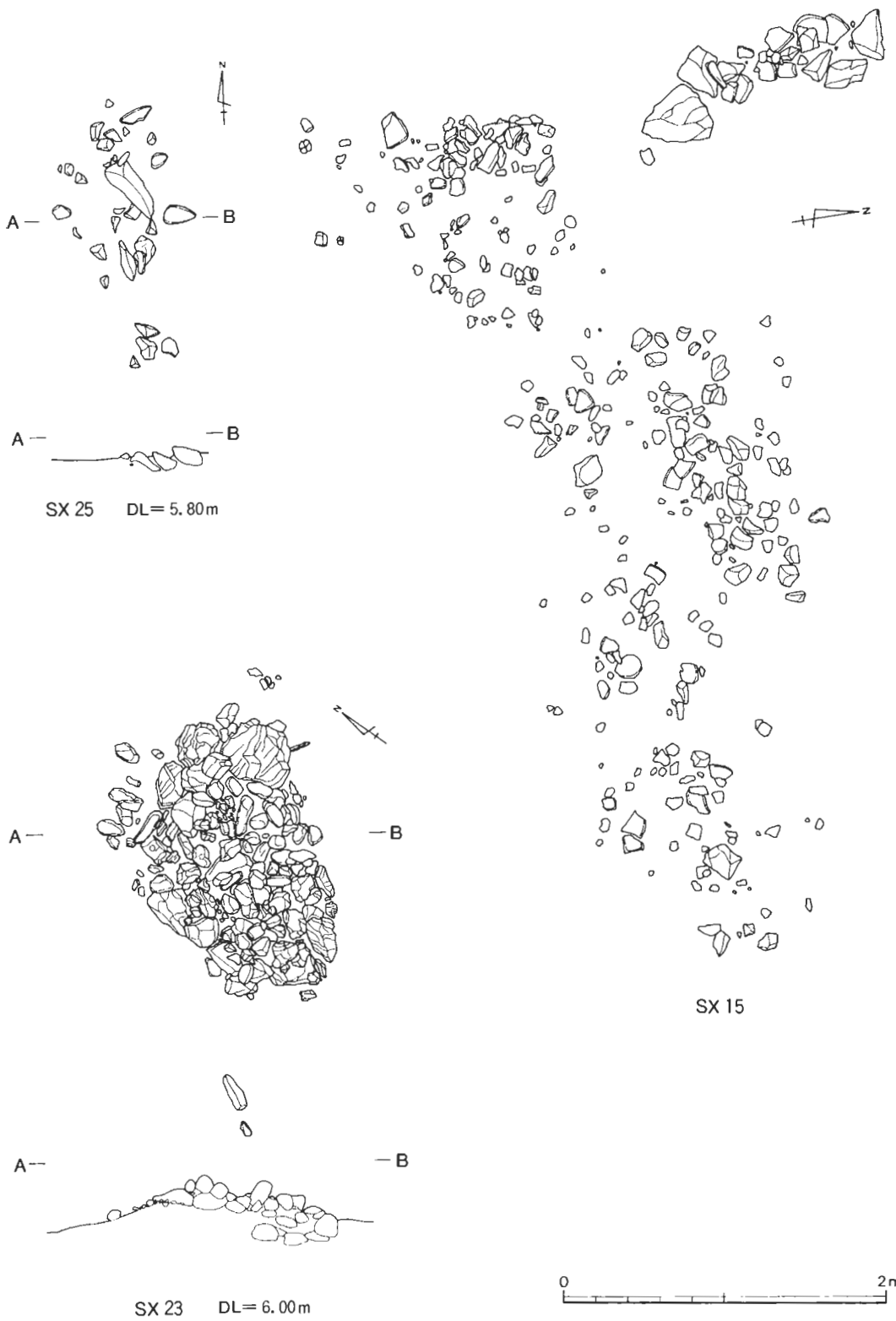
DL= 6.00m



第68图 SX 14 实测图



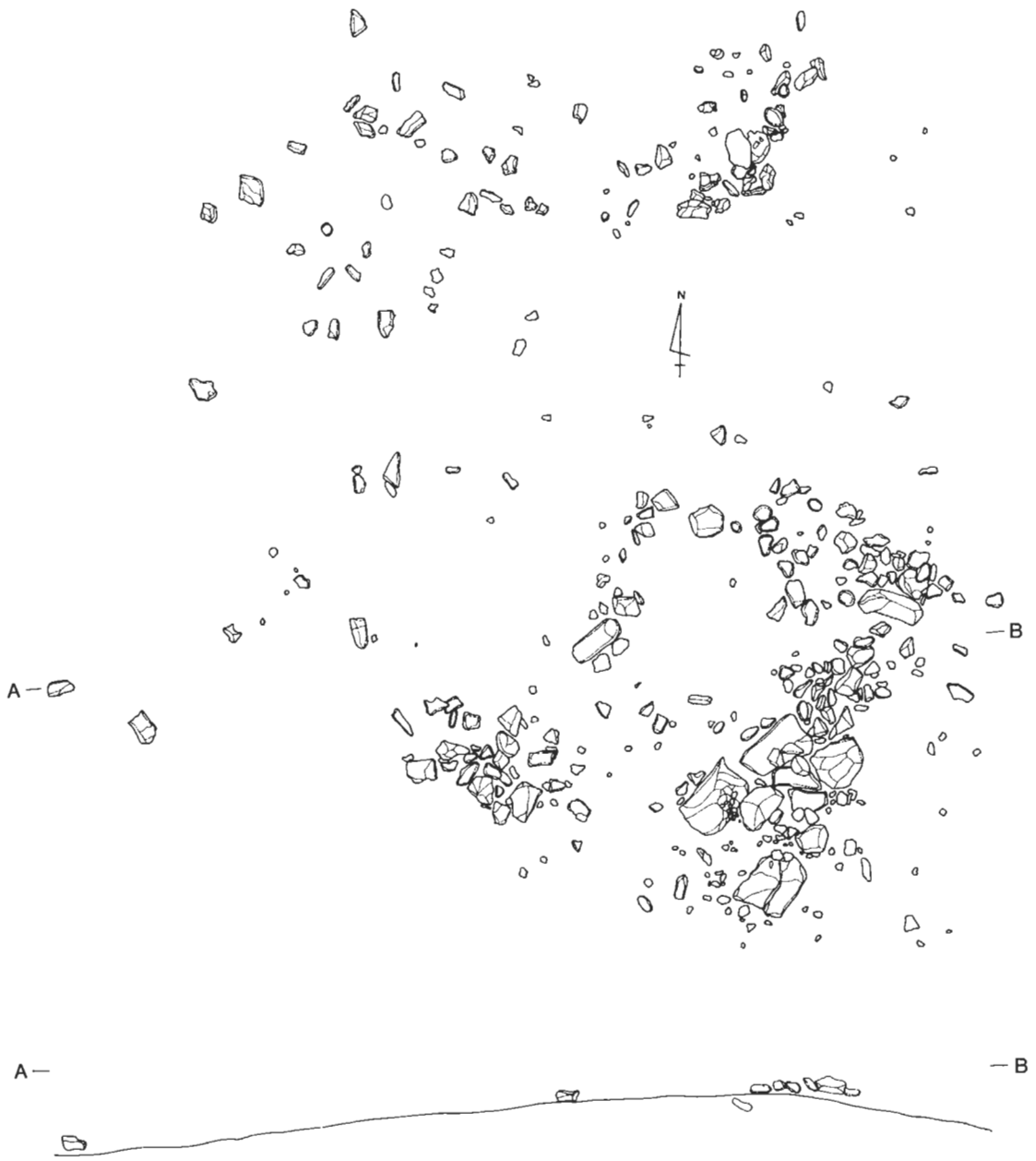
第 67 图 SX 13 实测图



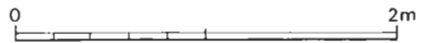
第 69 图 SX 15 · 23 · 25 实测图



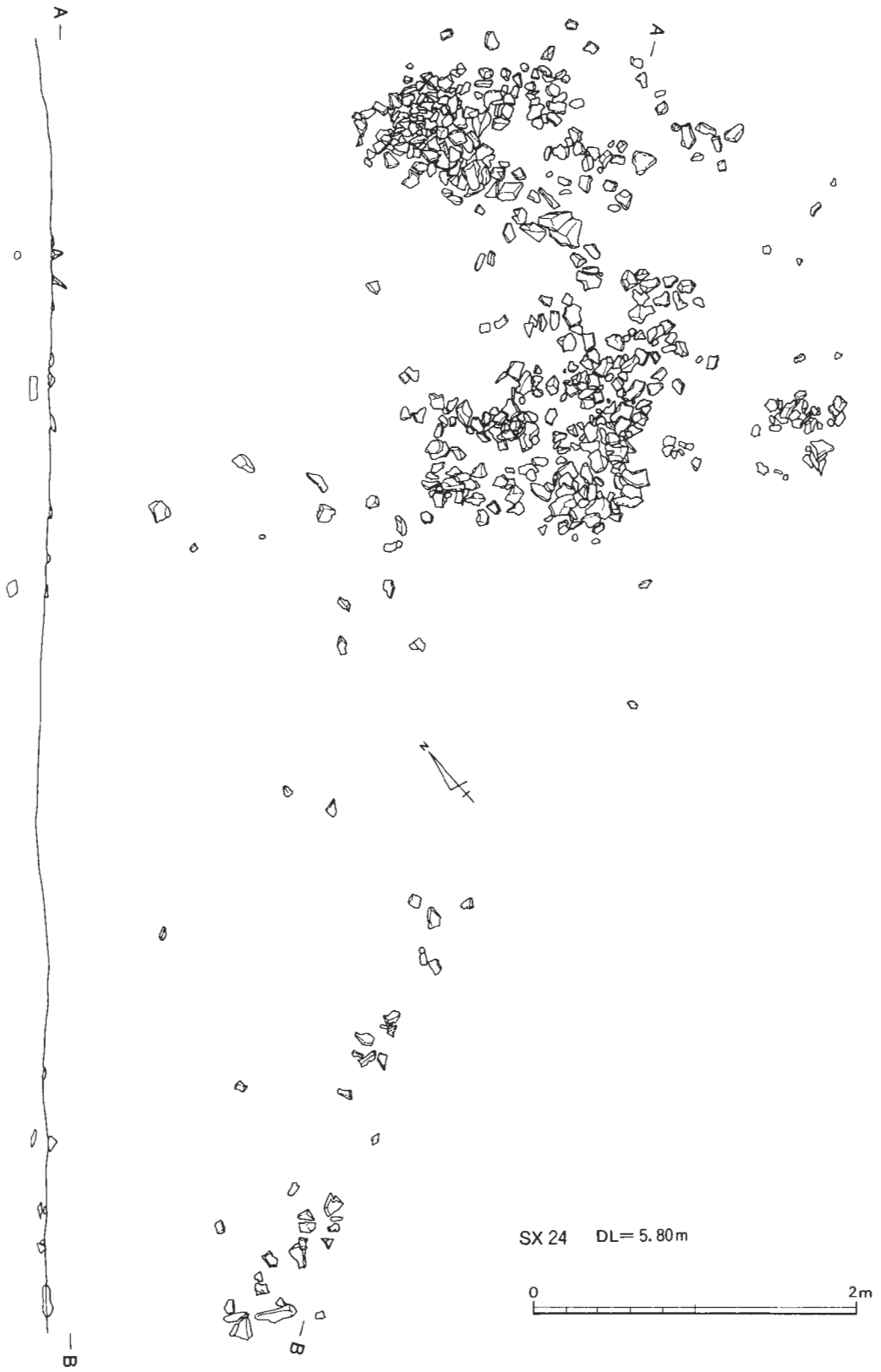
第 70 図 SX 18~20 実測図



SX 21 DL= 5.90m



第 71 図 SX 21 実測図



第72図 SX 24 実測図

2 遺構内出土遺物

遺構出土の遺物は、遺跡の性格から掘立柱建物跡や集石遺構・ピット群からのものが多い。遺構内の出土遺物は少ないが、遺物が出土している遺構ごとに説明をしていくことにする。尚土師器皿・杯・碗の分類は、遺構外での分類に基づく。さらに輸入陶磁器の分類は横田・森田編年を使用することにする。

1) 掘立柱建物跡出土遺物

SB 9 (第 73 図 1・2)

1 は回転台成形による土師器小皿である。口径 9.2 cm・器高 1.2 cm を測り C-I-a 類である。底部は平坦であるが円盤状の様な高台をもつ。摩耗が著しく底部外面の調整は不明である。2 は須恵器の蓋である。口径 13.7 cm・器高 2 cm を測り、天井部は平坦で口縁部は外下方に下り端部は屈曲する。

SB 10 (第 73 図 3)

3 は土師器杯 II-a 類である。口径 12.8 cm・器高 2.8 cm で、平坦な底部から屈曲し直線的に体部から口縁部にかけて外上方に立ち上がる。回転台成形で底部外面は回転ヘラ切りである。

SB 11 (第 73 図 4~7)

4・5 は和泉型の瓦器碗である。体部は、内湾気味に外上方に立ち上がり若干口縁部が外反する。内面にヘラミガキが施され、外面は口縁部がヨコナデで体部には指頭圧痕が残る。4 の口径は 15 cm, 5 は 13.6 cm である。6 は回転台成形の土師器小皿で C-II-a 類である。摩耗が著しく外底の調整は不明である。7 は 56 g を測る土錘である。

SB 12 (第 73 図 8~11)

8 は回転台成形の土師器小皿 C-IV-a 類である。口径 6.8 cm・器高 2.0 cm を測る。9 は、土師器杯 II-a 類である。口径 12.1 cm・器高 3.7 cm を測り、体部は直線的に外上方に立ち上がり口縁部を上方につまみあげる。外底は平行圧痕が残る。10 は土師器杯 I-b 類である。口径 13.4 cm・器高 3.7 cm を測り、体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。外底は回転糸切りが施される。11 は瓦器碗である。口径 14.0 cm を測り、体部は内湾して外上方に立ち上がり口縁部はヨコナデでやや外反し、内面はヘラミガキであるが摩耗が著しい。

SB 13 (第 73 図 12~16)

12 は土師器小皿 B-IV-a 類で、口径 6.3 cm・器高 1.0 cm を測る。外底は回転糸切りである。13 も土師器小皿で C-II-a 類である。口径 8.0 cm・器高 1.8 cm を測る。外底の調整は不明。14 は白磁皿の IX 類で、底部外面が露胎で一部に釉がかかる。15 は土師器杯 II-a 類で、口径 12.2 cm・器高 4.1 cm を測る。内面にロクロ痕が残り外底は回転糸切りである。16 は石鍋で

口径 31.0 cm を測り、口縁部は内傾するものである。古銭（第 111 図 4）は、聖宋元宝である。

SB 14 (第 73 図 17)

17 は土師器杯でⅣ-b 類である。口径 10.4 cm ・器高 3.6 cm を測る。器壁の厚い底部で体部は内湾して外上方に立ち上がる。全体的に摩耗が著しい。

SB 17 (第 73 図 18)

18 は須恵器皿で、口径 14.8 cm ・器高 1.8 cm を測る。口縁部は外上方に大きく開き、端部は軽くつまみあげている。外底はヘラ切りである。

SB 20 (第 73 図 25)

25 は須恵器の甕破片で、外面は平行タタキで内面はナデが施される。

SB 26 (第 73 図 19~24)

19 は東播系コネ鉢で、口径 31 cm を測り口縁部は肥厚し上方へ拡張される。20 は備前焼の播鉢で口径 32.3 cm を測り、口縁部の拡張は認められない。21 は土師器の杯で、口径 8.3 cm ・器高 4.1 cm を測る。底部の器壁が厚く内面にロクロ痕が残る。22 は土錘で全長 4.3 cm ・重量 5 g を測る。23 ・24 は砥石で断面方形を呈し 4 面を使用している。

2) 土坑出土遺物

SK 5 (第 73 図 26)

26 は伊万里の小杯で、口径 5.6 cm ・器高 3.5 cm を測る。内外面無文で高台脇まで施釉され外底は露胎である。

SK 11 (第 73 図 27~30)

27 は土師器杯で、底部は回転糸切りが施される。28 は常滑焼の甕である。口縁部「N」字状を呈する。29 は須恵器甕の胴部破片で、外面平行タタキを二度行う。内面はナデ調整である。30 は東播系コネ鉢である。口径 25.6 cm を測り口縁部は肥厚し外傾する面をなす。

SK 12 (第 74 図 1)

1 は土師器の羽釜である。口縁部下に方形の突帯が付く。

SK 13 (第 74 図 2~6・8)

2~5 は回転台成形の土師器の杯である。2 は口径 11.6 cm ・器高 2.7 cm を測り、体部は直線的に外上方に立ち上がる。全体的に摩耗が著しい。3 は口径 12.4 cm ・器高 2.4 cm を測り回転台成形で外底はヘラ切りである。4 は口径 13.6 cm ・器高 2.5 cm で、5 は口径 13.6 cm ・器高 3.1 cm を測る。両杯とも口縁部はヨコナデのためやや外反する。外底はヘラ切りである。6 は土師器の皿である。口径 19.0 cm ・器高 2.3 cm を測り、二段のヨコナデが施される。8 は土錘で全長 4.7 cm ・重量 14 g を測る。

SK 16 (第 74 図 7)

7は須恵器の円盤状高台の椀である。内外面灰白色を呈し焼成が悪い。外底には回転糸切りが施される。

SK 17 (第74図9・10)

9は土錘で、全長4.0cm・重量7gを測る。10は東播系コネ鉢である。口径24cmで口縁部は肥厚し拡張される。

SK 22 (第74図11)

唐津の皿である。口径13cm・器高3.8cm・底径5.2cmを測る。断面が逆台形状の削り出し高台で、体部中央で段を有し口縁部は外上方に立ち上がる。体部下半から高台部にかけて露胎で内面には呉須で文様が描かれる。

SK 24 (第74図12)

12は回転台成形の土師器杯である。円盤状の高台を有し体部は直線的に立ち上がる。全体的に摩耗が著しく調整不明である。

SK 25 (第74図13)

13は土師器杯のⅡ-b類である。口径12.6cm・器高4.0cmを測り体部は直線的に立ち上がる。摩耗が著しく外底の調整不明である。

SK 30 (第74図14)

14は土師器小皿のC-IV-a類である。口径6.6cm・器高1.6cmを測る。底部はやや上げ底状になる。外底は糸切りと考えられるが摩耗して不明である。

3) 火葬墓 (第74図15・16)

火葬墓からは、須恵器壺と土師器杯が出土している。16の須恵器壺は口縁部が欠損され骨臓器に転用されている。残存器高16.9cm、底径11cmを測り胴部上位に最大径がある。15の杯は骨臓器の蓋に使用されていた。回転台成形で口径6.2cm・器高1.8cmを測る。外底の調整は不明である。

4) 集石遺構出土遺物

SX 3 (第74図17)

17は和泉型の瓦器の椀である。口径12.7cm・器高3.3cm・底径3.4cmを測る。薄い紐状の貼付高台で体部は内湾し外上方に立ち上がる。口縁部はヨコナデで外反し、内面は平行線状のヘラミガキが施される。体部外面は指頭圧痕が残る。

SX 4 (第74図18・19)

18・19は備前焼の甕と播鉢である。18は口径32cmで、口縁部が玉縁状を呈する甕である。

19は体部が直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は肥厚し上方に拡張される。端部は内傾する面を有する。口縁部外面に一条の凹線と、内面に10本単位の条線が施される。

SX7 (第74図20)

20は須恵器の壺である。口径16cmを測り、肩が張り頸部は上方に口縁部はラッパ状に大きく開く。胴部外面に斜位と平行のタタキが施される。

SX8 (第74図21・22, 第75図1~14, 第76図1~3)

22は土師器小皿のC-Ⅳ-a類である。全体的に摩耗が著しい。21は瓦質土器のコネ鉢である。口径30cm・器高11.4cmを測る。内面に横方向のハケ目が施される。第75図1は東播系のコネ鉢で、口径25cmを測る。3は瓦質土器の甕で、口径26.6cmを測る。この甕は、アゾノ遺跡の炉跡から出土した甕と類似している。4は備前焼の甕で、口縁部玉縁状を呈する。2・5~7は備前焼壺である。すべて口縁部は玉縁状を呈する。口径は、5が15.3cm, 6が18.0cm, 7が16.7cm, 2が18cmを測る。8は備前焼播鉢で口径23cmを測り、口縁部は上方に拡張される。9は瓦質土器播鉢で、内面に条線が施される。11は白磁皿で、逆台形状の削り出し高台で体部外面まで施釉される。12は口禿げの白磁椀Ⅸ類で、口径11.4cmを測る。白濁色の釉が施される。10は青磁の椀でⅠ-4・a類である。口径15.8cmを測る。内面口縁部下に沈線とヘラ描きで分割された中に飛雲文が描かれる。13・14は砥石で13は断面方形を呈し14は楕円形状を呈し2面使用されている。第76図1~3は常滑の甕で「N」字状口縁を呈する。

SX10 (第75図15~18)

15~17は土師器杯でⅢ-a類である。口径11.6cm・器高3.0cm・底径7.2cmを測る。内面にロクロ痕が残る。16はⅢ-b類で、口径11.7cm・器高3.3cm・底径5.2cmを測る。体部は内湾して外上方に立ち上がり、外底は回転糸切りである。17はⅡ-b類で、口径12.2cm・器高3.1cm・底径5.2cmを測る。全体的に摩耗して外底の調整は不明である。18は白磁碗のⅣ類で、口縁部は玉縁状を呈する。

SX11 (第75図19, 第76図5)

19は土師器の小皿C-Ⅱ-b類である。口径8.7cm・器高1.8cmを測る。全体的に摩耗が著しく外底の調整不明。5は常滑の甕で「N」字状口縁を呈する。

SX12 (第76図6)

6は伊万里の皿である。三角形の削り出し高台で畳付けと外底に砂が溶着している。体部内面及び見込みに花卉文様が呉須で描かれる。

SX13 (第76図4・7~14)

4は常滑の甕である。口径37cmを測り口縁部は「N」字状口縁を呈する。10は土錘で、全長5.3cmで重量60gを量る。7は東播系コネ鉢である。口径25.6cmを測り口縁端部は肥厚し上下に拡張される。11は備前焼の甕で、口径28.8cmを測り口縁部は玉縁状を呈する。8は東播系コネ鉢の底部破片である。12は備前焼播鉢である。口径27.5cm・器高10.8cm・底径

13.8 cm を測る。口縁部は肥厚し上方に拡張される。内面に 8 条の条線と内底面にも 8 条の線描きが施される。13 は石臼で摩耗が著しい。14 は大型の置き砥石で 3 面使用されている。9 は先端部が屈曲しているが鉄釘である。

SX 14 (第 77 図 1~16)

1 は土師器小皿で C-IV-a 類である。2 は A 群の土師器碗である。3 も同様に A 群の土師器碗で、高台が「ハ」の字状に開く。4 は楠葉型の瓦器碗で、口径 17.6 cm を測る。口唇部内面に沈線が施され、内外面は丁寧なヘラミガキである。5 は土師器の羽釜で、口径 19 cm を測る。口縁部は内傾し鐔は水平に伸びる。口縁部内外面はヨコナデである。7 は同安窯系の皿で I-1 類である。外底は露胎で、見込みは櫛描きの雷光文が施される。8 は龍泉窯系の青磁皿 I-1・a 類である。外底は焼成前に釉を掻きとっており、体部中位で屈曲している。10 は東播系コネ鉢で、口径 28.6 cm を測る。口縁部は肥厚し上下に拡張される。11 は産地不明陶器の播鉢で、口径 31.2 cm・器高 11.7 cm を測る。口縁部は肥厚し内側に拡張される。内面は 7 条の条線が施され、外面は顕著にロクロ目が残る。6 は青磁碗である。見込みに花文のスタンプが施され、青緑色釉が高台外面まで施される。畳付け及び外底は露胎である。9 は白磁碗で、口径 16 cm を測る。灰白色の釉が高台脇までかかる。外面にヘラケズリが残る。12 から 14 は比較的大きめの土錘である。12 は全長 5.5 cm で重量 63 g, 13 は全長 5.0 cm で重量 30 g, 14 は全長 5.3 cm で重量 60 g を量る。15・16 は石製品で、15 の中央部には穿孔が入る不明石製品で、16 は断面方形の砥石である。

SX 15 (第 77 図 17~22, 第 78 図 1~10)

第 77 図 18 は瓦質土器の羽釜で、口径 18 cm を測る。口縁部は内傾し、端部はやや肥厚し鐔は水平に長く伸びる。胴部外面は横方向のヘラケズリ、口縁部外面は強いヨコナデで 2 条の凹線状になる。内面は斜位のハケ目が施される。17 は茶釜で口径 15 cm を測り、張りのある肩で双耳が付く。口縁部は直立して上方に立ち上がる。19 は東播系コネ鉢で、口径 27.4 cm を測る。口縁部は肥厚し上下に拡張される。20・22 は備前焼播鉢の底部破片である。21 は備前焼の播鉢の口縁部破片である。第 78 図 1・2 も同じく備前焼播鉢で、口縁部は肥厚し上下に拡張される。3 は備前焼甕の底部で、外面は縦位のヘラケズリ、下端部は横位のヘラケズリで内面は横位のハケ目が残る。4 は青磁碗で龍泉窯系の I-5・b 類である。外面は鎬蓮弁文が施され、見込みは一条の沈線が回る。釉は高台を乗り越えて外底まで一部かかる。5 から 7 は比較的大きめの土錘である。5 は全長 5.6 cm で重量 51 g, 6 は全長 6.2 cm で重量 90 g, 7 は全長 5.5 cm で重量 120 g を量る。8・9・10 は砥石である。

SX 17 (第 78 図 11)

11 は備前焼播鉢の底部破片で内面に条線が施される。

SX 18 (第 78 図 12~16)

12 は瓦質土器茶釜で、胴部中位に鐔をもち肩が張り口縁部は内傾する。端部はやや肥厚し、

口径 18 cm を測る。外面は、口縁部から胴上部にヨコナデで一部にヘラ記号が見られ罫下位は横位・斜位のヘラケズリが施される。内面は、口縁部から胴部上位はヨコナデ、下位はヘラナデが施される。15 は土師器小皿で、B-III-b 類である。底部外面に回転糸切りが施される。13・14 は東播系コネ鉢で、13 は口径 26.8 cm を測る。口縁部は肥厚し上下に拡張される。14 は口径 28 cm を測る。口縁部は肥厚し上下に拡張される。16 は備前焼播鉢の底部破片である。内面は 8 本単位に条線が下から上へ施される。

SX 19 (第 79 図 1~3)

1 は東播系コネ鉢で、口径 28 cm を測る。口縁部は肥厚し上方に拡張される。3 は青磁皿で、外底は露胎であるが一部高台内面まで釉がかかる。見込みは凹線の中に花文のスタンプが施される。2 は瀬戸美濃系の天目茶碗で、口径 12.8 cm を測る。体部外面下半は露胎で、その他は黒褐色の釉が施される。

SX 21 (第 79 図 4~7)

4・5 は瓦質土器の鍋で、4 は口縁部が外反し 5 は内傾する。体部外面には指頭圧痕が残る。6 は備前焼播鉢の口縁部破片で、口縁部はやや肥厚し斜めに切り取られる。7 は砥石である。

SX 23 (第 79 図 8・9)

9 は青磁碗の I-5・b 類で口径 16.5 cm を測る。暗緑色釉が施され、外面に鎗蓮弁文が施され、内外面に粗い貫入が入る。8 は小刀で長さ 20 cm を測る。

SX 24 (第 79 図 10~15)

10 は瓦質土器の播鉢で、口径 25 cm を測る。口縁部はやや肥厚する。内面は横位のハケ調整の後に条線が施される。東播系のコネ鉢を模倣して造られた在地の製品と考えられる。12 は青磁碗の底部破片である。見込みは花文がスタンプされ、外底は一部露胎で砂が溶着する。その他高台部は全面に緑色釉が施される。11 も青磁碗で、高台脇から高台部にかけて露胎である。その他淡青灰色の釉が施され内面に貫入が入る。見込みの外周に沈線と体部内面に縦の沈線が入る。15 は染付の皿である。見込みに玉取獅子の文様が描かれる。14 は唐津の皿で体部外面下半から高台部にかけて露胎で見込みに目跡が見られる。13 も唐津の大皿で外面体部下半まで施釉され高台部は露胎である。見込みに目跡が残る。

5) 溝出土遺物

SD 1 (第 79 図 16~27, 第 80 図 1・2)

16~18 は、回転台成形の土師器小皿である。16 は C-I-a 類、17・18 は B-I-a 類である。19 は土師器碗で、断面が逆台形状の高台を呈し、体部は内湾して外上方に立ち上がる形態を有する。20~27・第 80 図 1・2 は大型の土錘で 4.7~5.8 cm で重さ 50~60 g を量る。

SD 2 (第 80 図 3~5)

3・4は小型の土錘で、3は欠損しているが4の全長は4.6 cm、重さ7 gである。5の瓦器皿は体部で屈曲し口縁部は外反し、底部に指頭圧痕が残る。口径10.8 cm、器高1.7 cmを測る。

SD 6 (第 80 図 6~12)

6は土師器小皿でC-I-a類である。全体的に摩耗が著しく調整不明。7は青磁の瓶で口縁部が屈曲し垂下する。12は土錘で全長3.8 cmを測る。8・9は東播系コネ鉢で、体部は直線的に立ち上がり口縁部は肥厚し拡張される。8の口径は24 cm、9は26.4 cmである。10・11は砥石である。

SD 8 (第 80 図 13~15)

13は口禿げの白磁皿Ⅸ類で、口径10.9 cmを測る。14は近世のキセルで、15は断面方形で平面形が方形の砥石である。

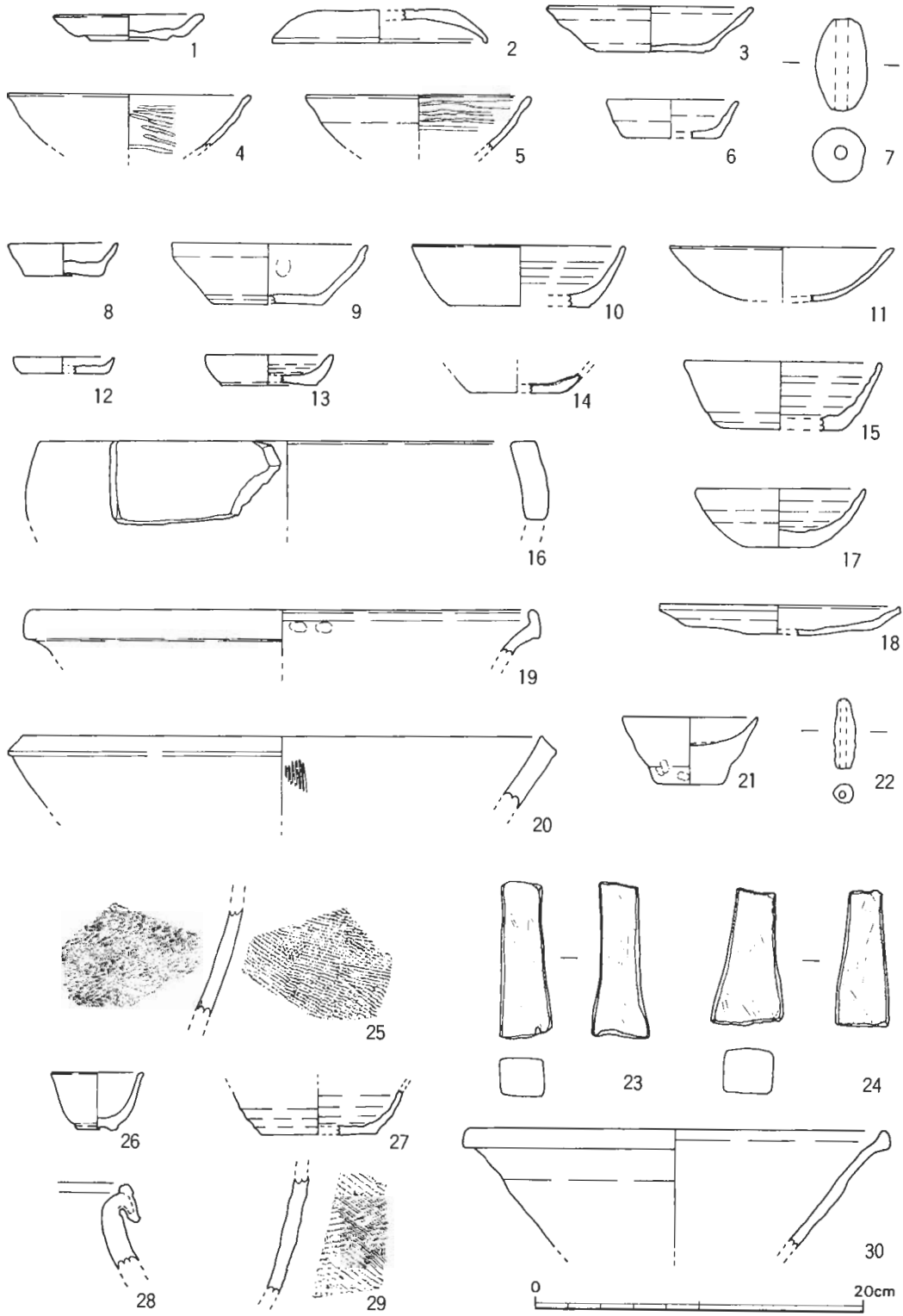
6) ピット出土遺物 (第 80・81・82・83 図)

60ピット内から実測可能な遺物が出土しているが、ここでは共伴関係の良好なピット内出土遺物の概要を説明して行くことにする。詳細は観察表を参照して頂きたい。

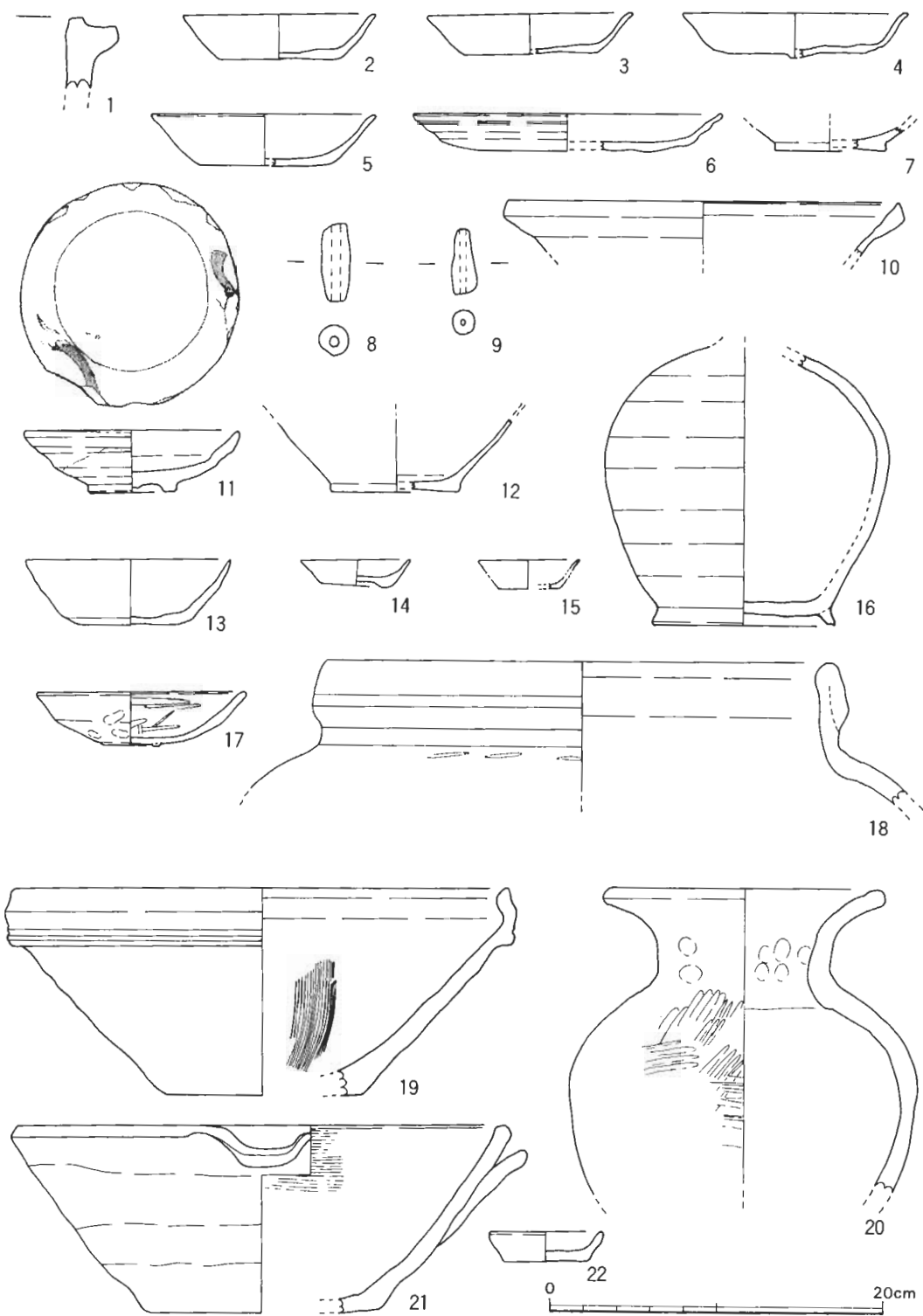
P 6からは回転台成形の土師器小皿のB-Ⅲ-a類とB-Ⅲ-b類が出土している。P 8からは東播系コネ鉢と土師器小皿B-II-a類が共伴している。P 13から土師器小皿C-Ⅲ-b類と杯II-b類が出土している。P 28からであるが、瓦器椀と土師器杯が共伴している。P 35から土師器小皿B-Ⅲ-b類、B-Ⅲ-a類、B-II-a類と土師器杯II-a類が共伴である。P 41から土師器杯II-b類と小皿B-Ⅲ-a類さらに瓦器小皿と瓦質土器の三足がある。P 43は土師器小皿・杯と備前焼播鉢が共伴している。P 56は土師器の羽釜と楠葉型の瓦器椀がある。P 54からは鈴と、P 59から口径が4.1 cmの銅椀が出土している。

7) 水田出土遺物 (第 83 図 21~26)

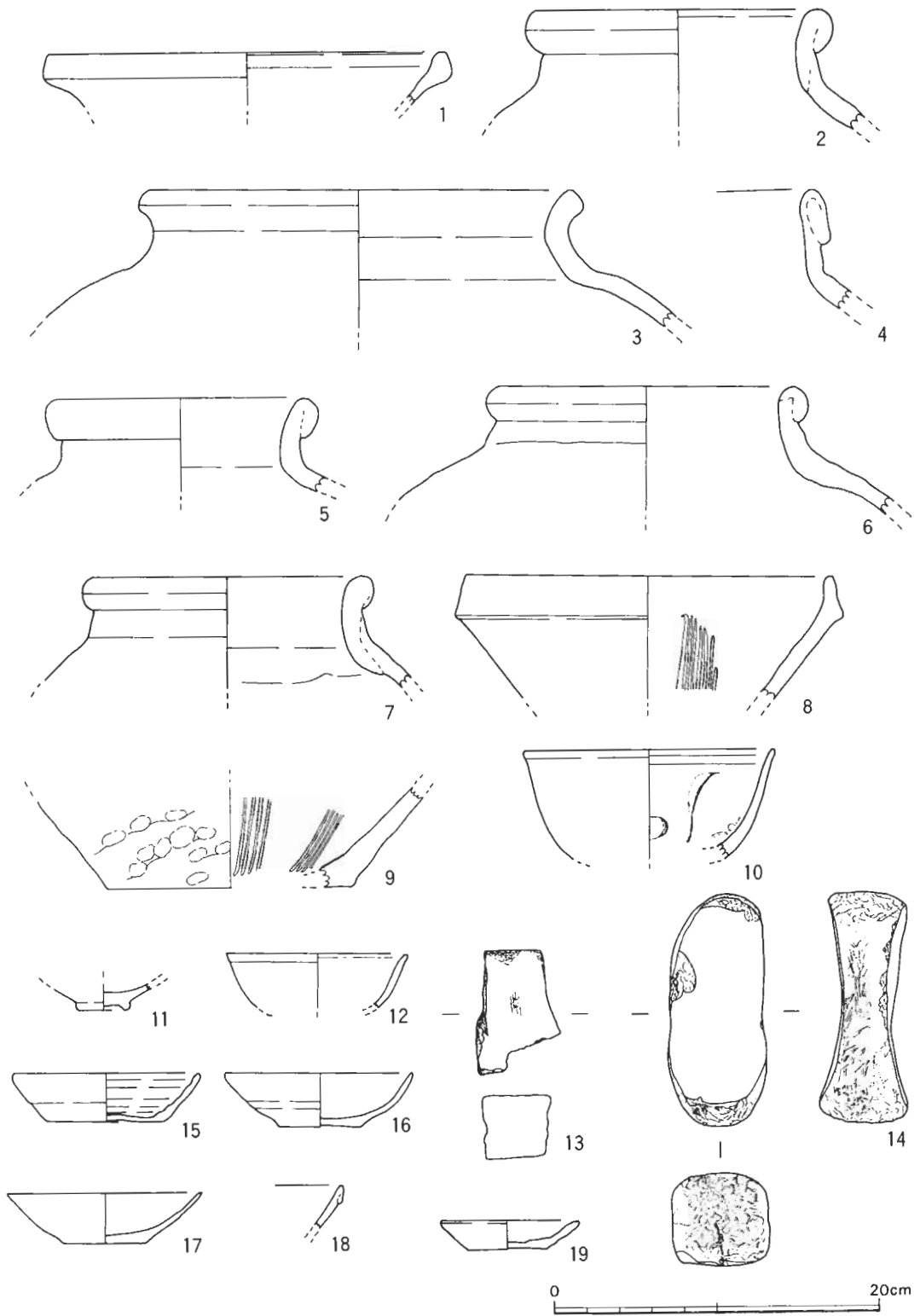
24は唐津の皿で、削り出し高台である。体部下半まで釉が施される。23は白磁碗のV-4-a類である。体部は内湾気味に外上方に立ち上がり口縁端部は短く水平に伸びる。白濁色の釉が施され荒い貫入が入る。内面に2条の浅い沈線が入る。26は唐津皿である。逆台形状の削り出し高台で、体部は内湾して外上方に立ち上がる。見込みは蛇ノ目釉ハギが施され内面と口縁部外面まで施釉される。25は青磁碗のI類である。器壁の厚い削り出し高台で、畳付け及び外底は露胎である。21・22は備前焼播鉢である。21の口径は26.4 cmで、口縁部は肥厚し上下に拡張される。22は口径30 cmで口縁部はやや肥厚し斜めに切り落とす。(松田)



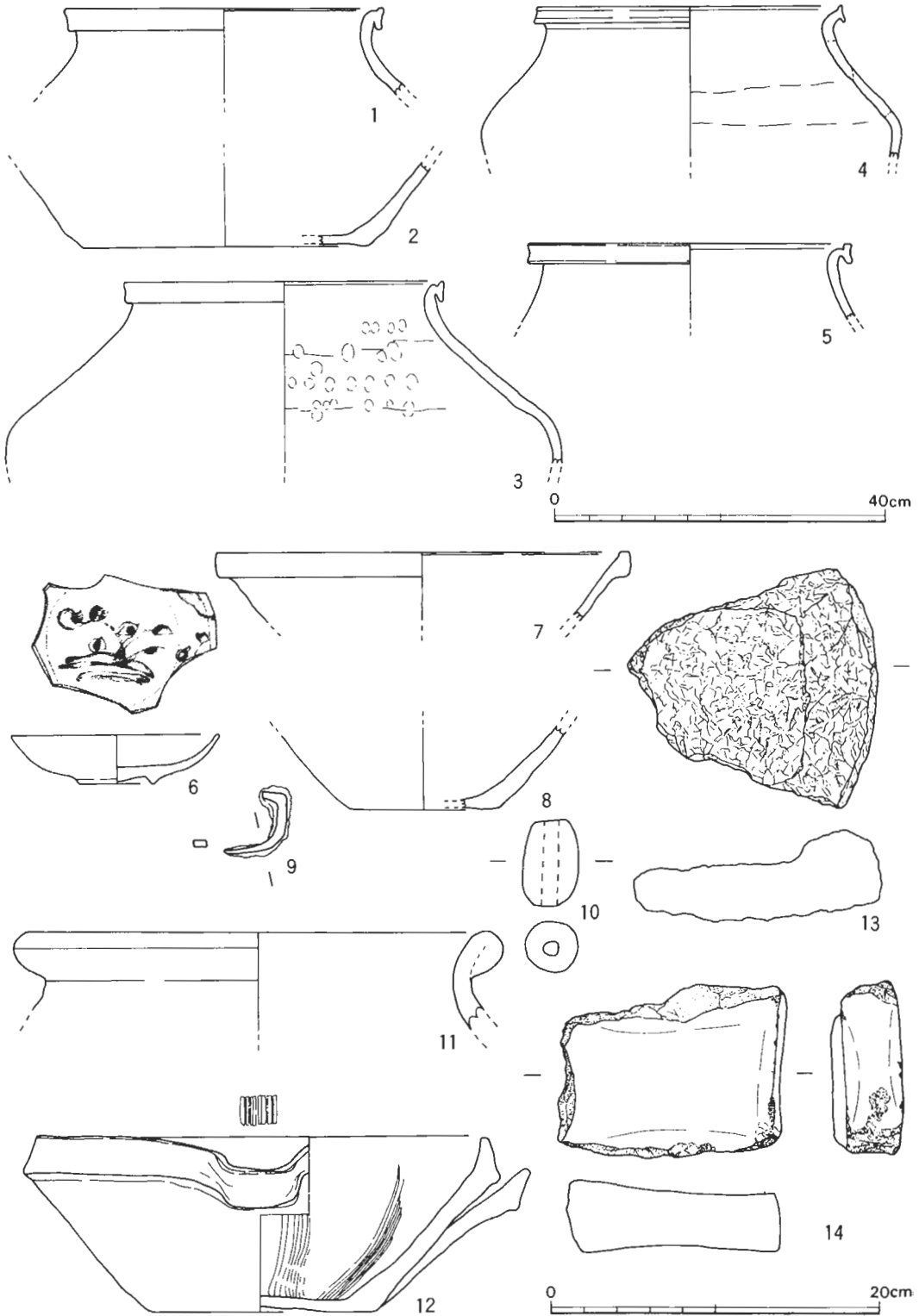
第73図 遺構出土遺物(1)



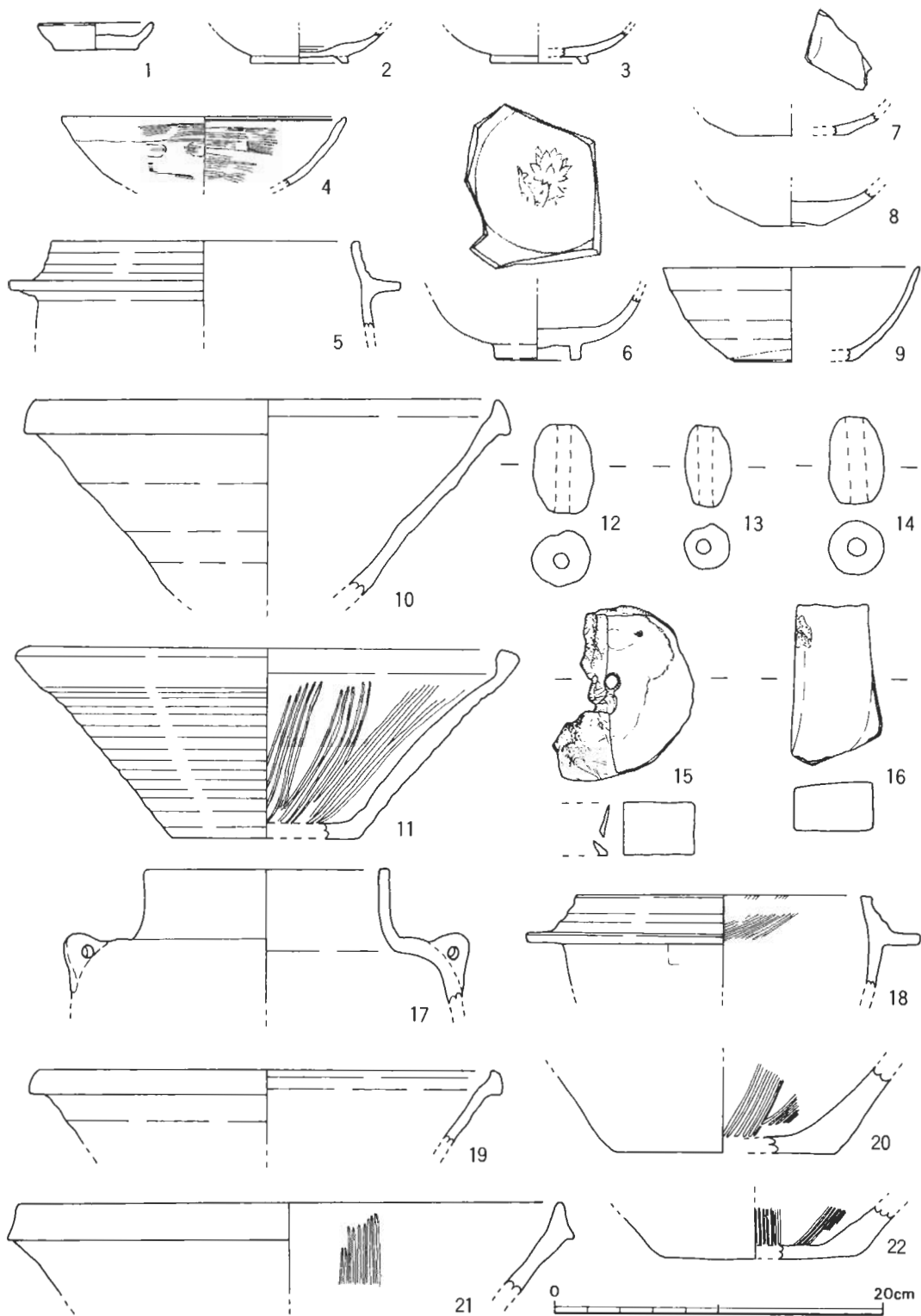
第74図 遺構出土遺物(2)



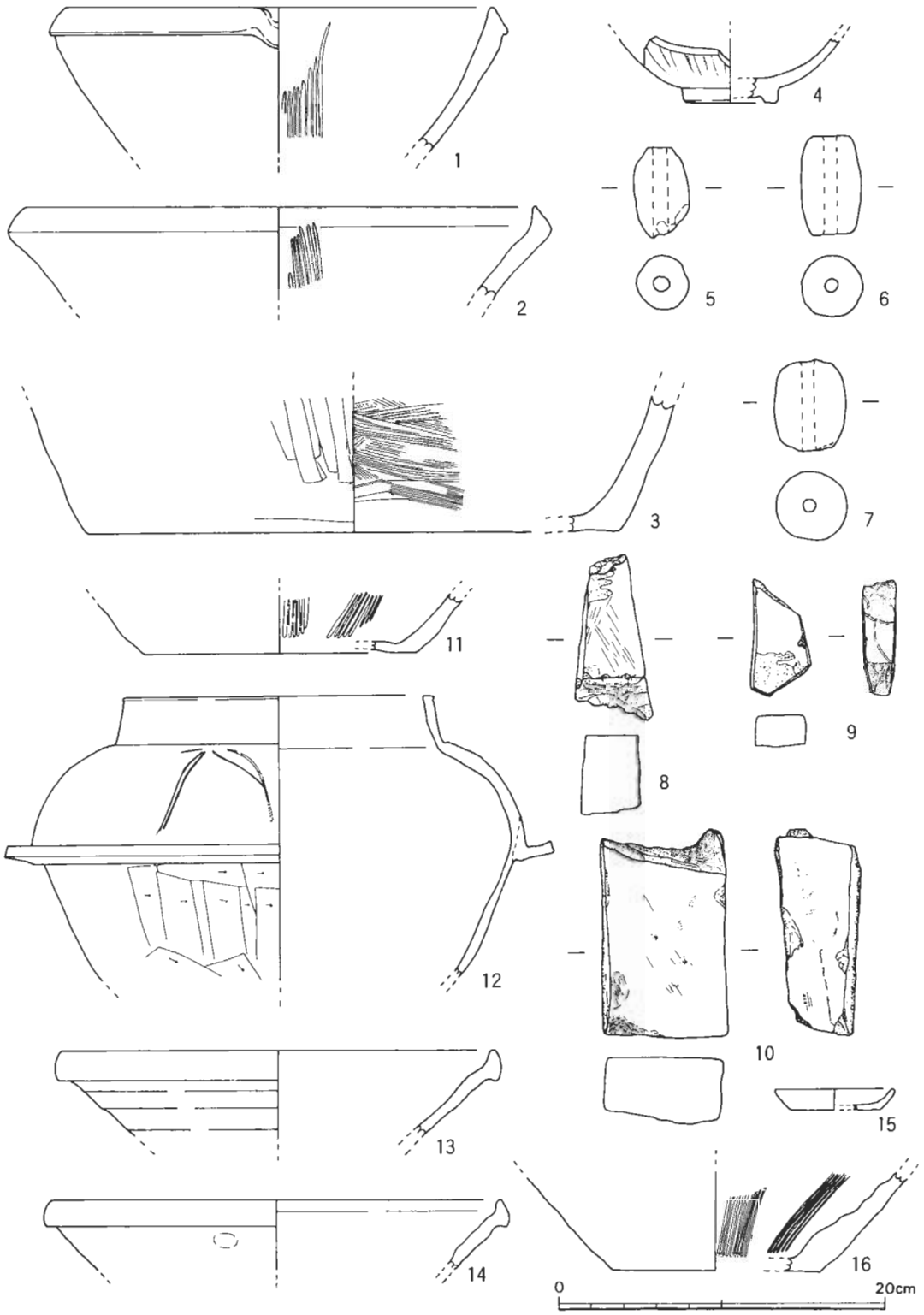
第 75 図 遺構出土遺物(3)



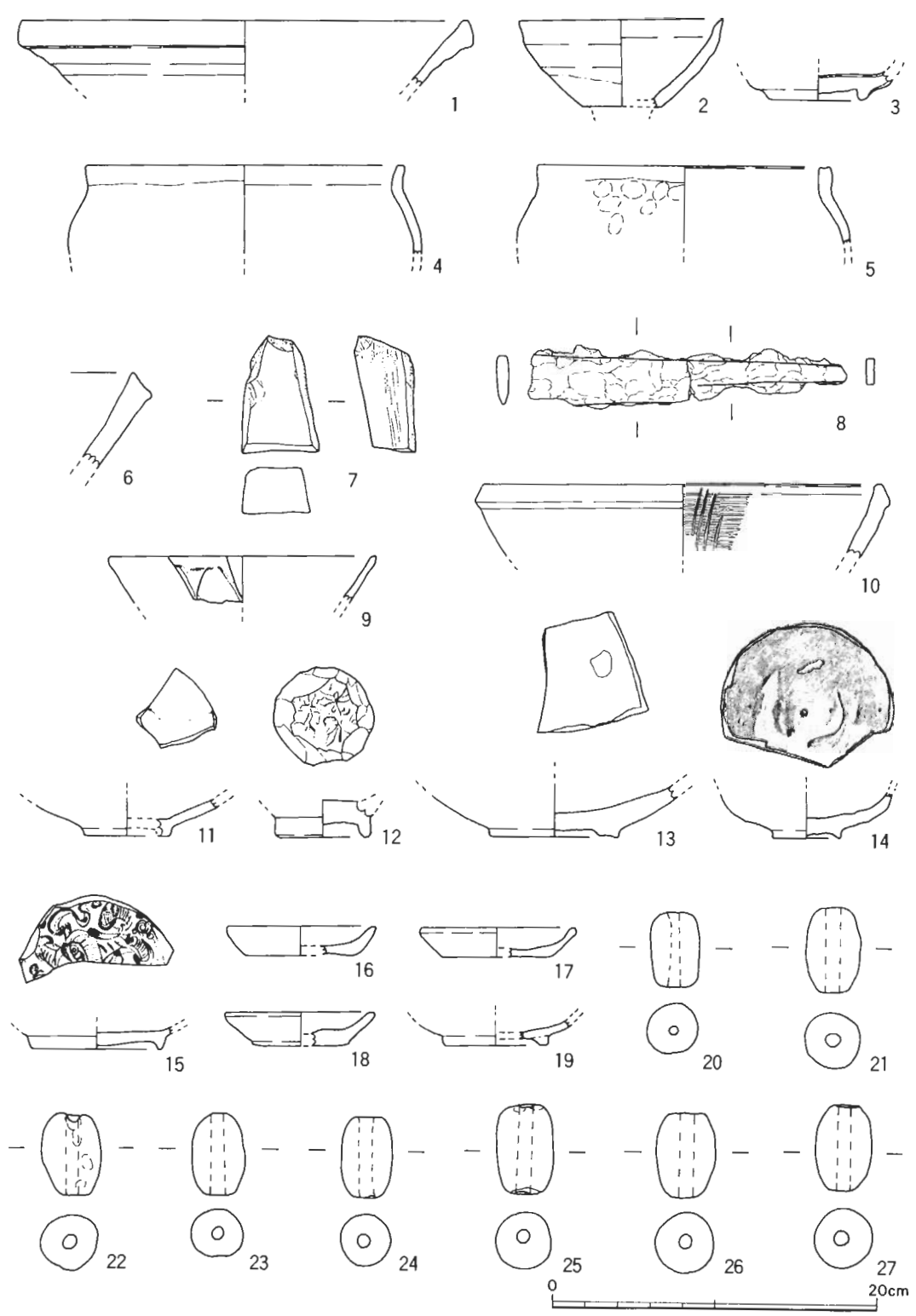
第76図 遺構出土遺物(4)



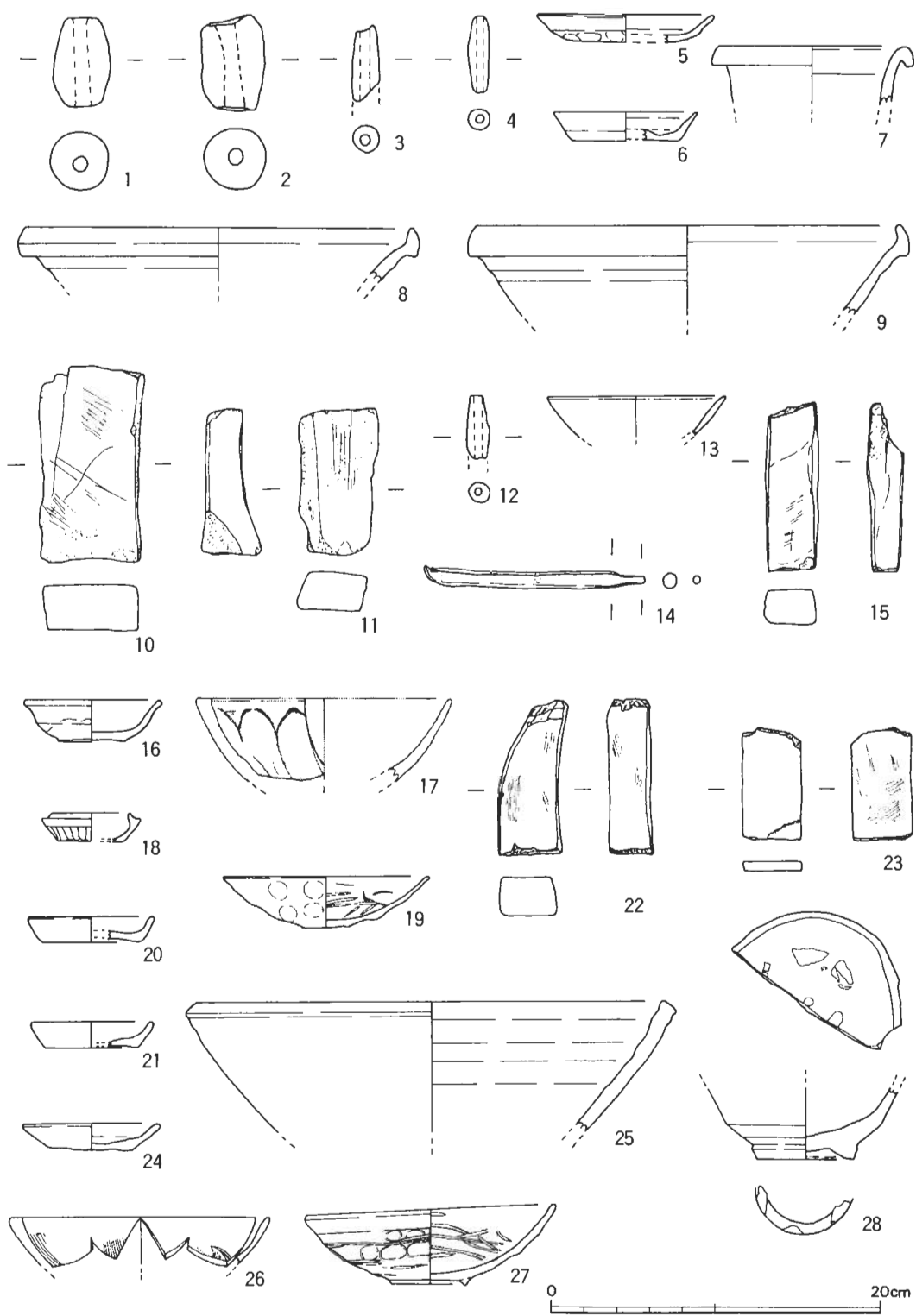
第77図 遺構出土遺物(5)



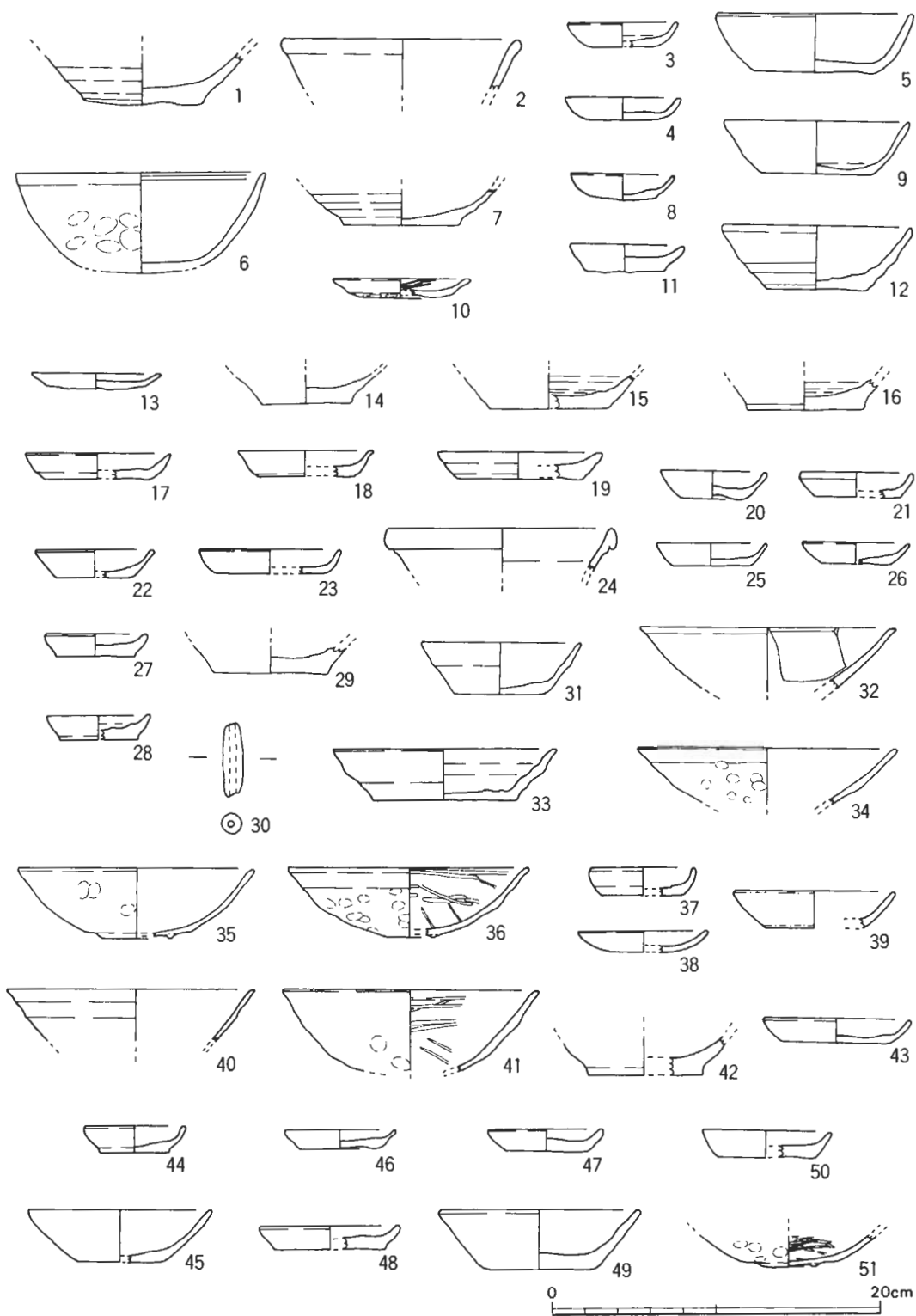
第 78 図 遺構出土遺物(6)



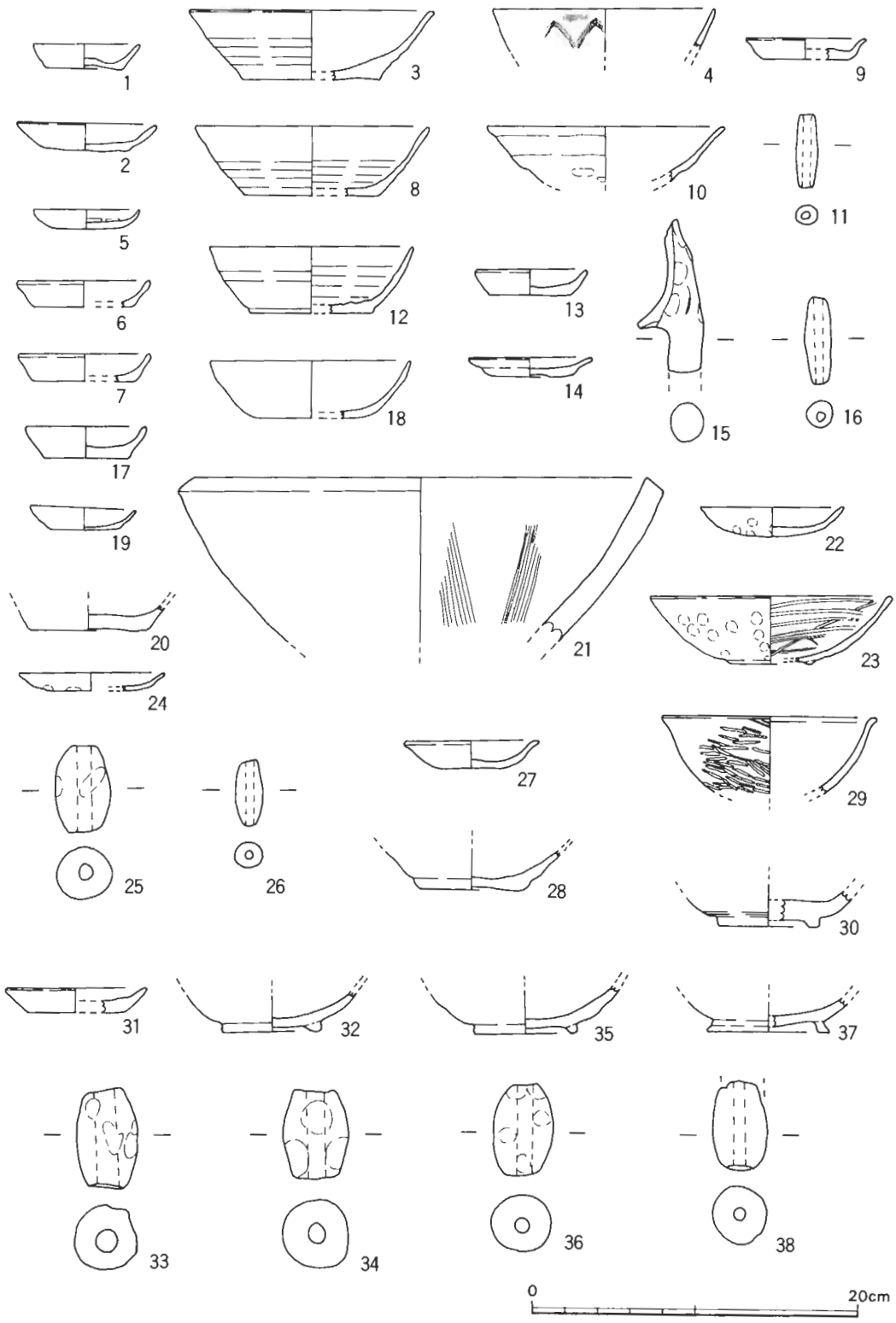
第 79 図 遺構出土遺物(7)



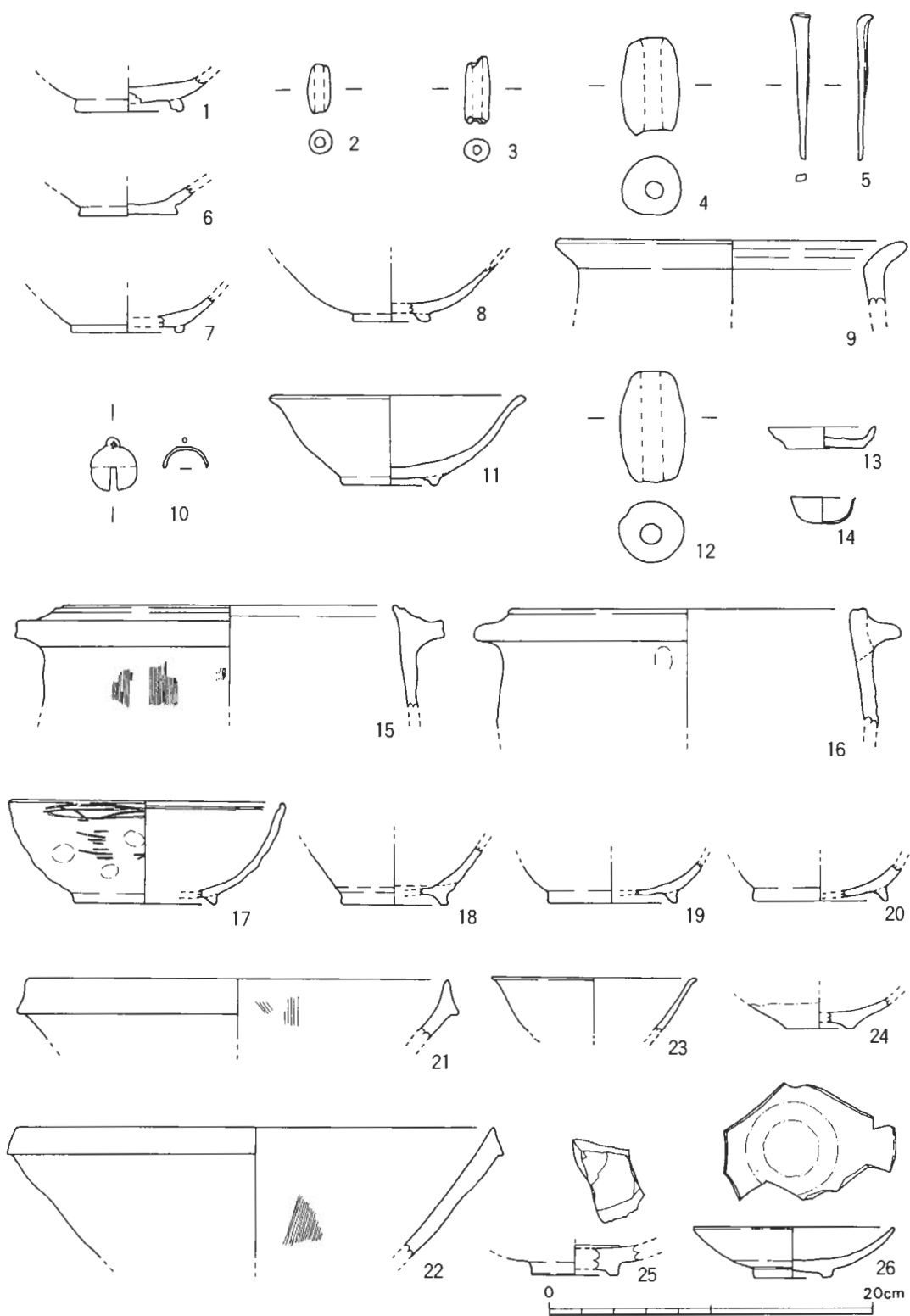
第 80 図 遺構出土遺物(8)



第 81 図 遺構出土遺物(9)



第 82 図 遺構出土遺物(10)



第 83 図 遺構出土遺物(11)

採図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
80-16	P 2	(薄口・美 濃系陶器) 皿	8.3 2.6 — 4.1	平坦な底部で、体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。	外底は回転系切り。 内面と体部下半まで施軸。	
◇-17	P 3	青磁 碗	15.8 (5.1) — —	体部は、内湾して外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。 外面に、竊塞弁文が施される。		
◇-18	P 4	白磁 合子	4.7 1.8 — 4.0	平坦な底部から、体部は内湾して外上方へ立ち上がり、受部は内傾して立ち上がる。	内面と外面体部のみ施軸される。	
◇-19	P 5	瓦器 椀	12.8 3.2 — 2.8	薄い紐状の貼付高台で、体部は内湾して外方向に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	口縁部はヨコナデ調整。 体部外面に指頭圧痕が残る、内面は平行線状のヘラミガキが施される。	
◇-20	P 6	土師器 小皿	7.6 1.6 — 5.8	体部は、直線的に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	外底は回転系切り。	B-III-a 類
◇-21	◇	◇ ◇	7.4 1.6 — 5.8	平坦な底部から、体部は内湾気味に外上方に立ち上がり口縁部にいたる。	◇	B-III-b 類
◇-22	P 1	砥石	全長 9.5 全幅 2.5 全厚 2.4 重量 145g	断面方形を呈する。4面とも使用されている。		
◇-23	P 7	◇	全長 6.8 全幅 3.7 全厚 0.6 重量 27.6g	断面扁平な長方形を呈する小型の仕上砥。 表裏面を使用している。		
◇-24	P 8	土師器 小皿	8.4 1.7 — 5.2	平坦な底部から、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反する。	外底は回転系切り。	B-II-a 類
◇-25	◇	東播系 コネ鉢	29.0 (8.0) — —	体部は、直線的に外上方に立ち上がり、端部は斜めに切り落とす。	回転ナデ調整。	
◇-26	P 9	青磁 碗	16.0 (3.0) — —	体部は、内湾して外上方に立ち上がり口縁部にいたる。 外面には縦位の櫛掻き、内面にも櫛掻き文が施される。		
◇-27	P 11	瓦器 椀	15.4 4.6 — 4.6	逆三角形の貼付高台で、体部は内湾して外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	外面は、突出した部分のみヘラミガキ、内面は平行線上のヘラミガキが施される。	
◇-28	P 10	(産地不明 陶器) 碗	— (4.4) — 6.0	器壁の厚い底部で、削り出し高台を呈し、体部下位で屈曲して立ち上がる。	見込みと炭付に胎土目が残る。	李朝か？
81-1	P 12	土師器 杯	— (3.2) — 7.4	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	外底はヘラ切り。	
◇-2	◇	青磁 碗	14.6 (3.1) — —	体部は、内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。 内外面は無文。	内外面に貫入が入る。	
◇-3	P 13	土師器 小皿	6.8 1.5 — 4.0	平坦な底部から内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	全体的に磨耗して不明。	

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
81-4	P 13	土師器 小皿	7.2 1.4 — 4.0	平坦な底部から内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	全体的に磨耗して不明。	
◇-5	◇	土師器 杯	12.0 3.6 — 7.3	平坦な底部から、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。		
◇-6	P 14	瓦器 碗	15.4 (6.1) — —	体部は内湾して外上方立ち上がり、口縁部にいたる。高台は欠損している。	体部外面に指頭圧痕が残る。全体に磨耗が著しい。口唇部内面に一条の沈線が施される。	
◇-7	P 15	土師器 杯	— (2.3) — 7.0	平坦な底部から、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。	内外面にロクロ痕が残る。外底には板状圧痕が残る。	
◇-8	◇	◇ 小皿	6.4 1.6 — —	丸底風の底部から体部に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	回転台成形。	
◇-9	P 16	◇ 杯	11.5 3.2 — 7.0	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	外底は回転糸切り。	Ⅲ-a類
◇-10	P 17	瓦器 小皿	8.4 1.3 — 4.4	平坦な底部から屈曲し、口縁部は外反する。	口縁部内外面はヨコナデ調整。底部外面には指頭圧痕が残る。	
◇-11	P 18	土師器 小皿	7.2 1.8 — 7.0	器壁が厚く平坦で、口縁部は短かく直線的に外上方に立ち上がる。	外底は回転糸切り。	B-Ⅲ-a類
◇-12	◇	◇ 杯	11.8 3.9 — 6.2	平坦な底部から、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	◇	
◇-13	P 19	瓦器 小皿	8.0 1.0 — 6.0	平坦に近い底部から、屈曲し大きく外上方に立ち上がり口縁部にいたる。	口縁部内外面はヨコナデ調整。	
◇-14	◇	土師器 杯	— (1.8) — 5.4	平坦な底部から、体部は直線的に外上方に立ち上がる。	外底は回転糸切り。	
◇-15	P 20	◇ ◇	— (2.1) — 7.4	◇	外底は回転糸切り。内面にはロクロ痕が残る。	
◇-16	◇	◇ ◇	— (1.9) — 7.2	◇	◇	
◇-17	P 21	◇ 小皿	9.0 1.6 — 6.4	平坦な底部から、直線的に外上方に立ち上がり口縁部にいたる。	外底は回転糸切り。	B-I-a類
◇-18	◇	◇ ◇	8.3 1.6 — 6.0	平坦な底部から、直線的に外上方立ち上がり、口縁部はやや外反する。	全体的に磨耗が著しく不明。	C-II-c類
◇-19	◇	◇ ◇	10.2 1.7 — 7.1	器壁の厚い平坦な底部から大きく外上方に立ち上がる。口縁部はつまみ上げている。	◇	C-I-a類

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
81-20	P 22	備前焼 小皿	6.4 1.7 — 3.8	上げ底の底部で、体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。	外面に溶塊?が付着する。回転ナデ調整。内面は不定方向のナデ。	
◇-21	P 23	土師器 小皿	7.0 1.5 — 5.4	平坦な底部から、直線的に外上方に立ち上がる。	外底は回転糸切り。	B-III-a類
◇-22	◇	◇ ◇	7.2 1.7 — 4.6	◇	底部は磨耗して不明。	C-III-a類
◇-23	◇	◇ ◇	8.8 1.5 — 7.0	◇	◇	C-II-a類
◇-24	◇	白磁 碗	14.0 (2.6) — —	体部は、直線的に外上方に立ち上がる。口縁部は、玉縁を呈する。		
◇-25	P 24	土師器 小皿	7.0 1.4 — 5.0	平坦な底部から、口縁部は直線的に外上方へ短かく立ち上がる。	底部の外面は板状圧痕がつく。回転ナデ調整。	B-III-a類
◇-26	◇	◇ ◇	6.6 1.3 — 4.2	平坦な底部から、口縁部は内湾して外上方に立ち上がる。	全体的に磨耗して不明。	C-IV-b類
◇-27	P 25	◇ ◇	6.2 1.4 — 5.0	平坦な底部から、口縁部は短かく外上方に立ち上がる。	◇	C-IV-a類
◇-28	P 26	◇ ◇	6.4 1.5 — 4.8	◇	回転ナデ調整。	B-IV-a類
◇-29	◇	◇ 杯	— (1.7) — 7.0	平坦な底部から、屈曲し体部は直線的に外上方に立ち上がる。	底部外面は回転糸切り。	
◇-30	◇	土鍾	全長 4.5 全幅 1.3 孔径 0.3 重量 8.0g			
◇-31	P 27	土師器 杯	9.8 3.2 — 6.0	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	底部外面は磨耗して不明。	V-a類
◇-32	◇	白磁 碗	16.0 (3.7) — —	体部は、内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。内面に櫛描文が施される。	内外面に貫入が入る。	
◇-33	P 28	土師器 杯	13.9 5.2 — 8.9	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	回転ナデ調整。底部は、回転糸切りの後に板状圧痕が残る。	I-a類
◇-34	◇	瓦器 碗	16.0 (3.4) — —	体部は、内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部はヨコナデの為に若干外反する。	体部外面に指頭圧痕が残る。内面は磨耗している。	
◇-35	P 29	◇ ◇	14.6 4.3 — 4.0	断面逆三角形の薄い貼付高台を呈し、体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部は若干外反する。	体部外面に指頭圧痕が残る。	

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
81 - 36	P 30	瓦器 碗	14.9 4.3 — 3.0	紐状の薄い貼付高台がつく。 体部は、内湾して外上方へ立ち上 がり、口縁部はやや外反する。	口縁部外面はヨコナデ調整。 体部外面には指頭圧痕が残る。 内面に團線状のヘラミガキと見 込みは平行線状のヘラミガキが 施される。	
〃 - 37	P 31	土師器 小皿	6.4 1.7 — 5.0	平坦な底部から、体部は内湾して 外上方に立ち上がる。	底部外面は回転糸切り。	
〃 - 38	〃	瓦器 小皿	8.0 1.4 — —	体部は、内湾気味に外上方に立ち 上がる。	口縁部内外面ナデ調整。	
〃 - 39	P 32	白磁 皿	10.0 (2.3) — 6.0	体部は、直線的に外上方に立ち上 がり口縁部にいたる。	口縁部は口売げである。 体部下半まで施軸される。	
〃 - 40	〃	瓦器 碗	15.0 (3.2) — —	〃	内外面ヨコナデ調整。	
〃 - 41	P 33	〃 〃	15.8 (5.0) — —	体部は、内湾して外上方へ立ち上 がる。	口縁部外面はヨコナデ調整。 体部外面は指頭圧痕が残る。 内面は平行線状のミガキが施さ れる。	
〃 - 42	〃	土師器 杯	— (2.4) — 7.2	円盤状高台を呈する。 体部は、内湾して外上方に立ち上 がる。	全体的に磨耗して不明。	
〃 - 43	P 36	〃 皿	9.0 1.4 — 6.6	平坦な底部から屈曲し、体部は直 線的に外方へ立ち上がる。	回転ナデ調整。 外底は回転糸切り。	B - I - a 類
〃 - 44	P 34	〃 〃	6.2 1.6 — 4.2	平坦な底部から、体部は内湾気味 に外上方へ立ち上がる。	底部は磨耗して不明。	C - IV - b 類
〃 - 45	〃	〃 杯	11.4 3.3 — 5.2	平坦な底部から屈曲し、体部は直 線的に外上方へ立ち上がり口縁部 にいたる。	〃	
〃 - 46	P 35	〃 小皿	7.0 1.2 — 4.9	平坦な底部から、体部は短かく外 上方へ立ち上がる。	口縁部内外面ヨコナデ調整。 底部外面は板状圧痕がつき、内 面は不定方向のナデ調整。	B - III - b 類
〃 - 47	〃	〃 〃	7.1 1.4 — 5.0	器壁の厚い底部から、体部は短か く外上方へ立ち上がる。	口縁部はヨコナデ調整。 底部外面は回転糸切り。内面は ロクロ痕が残る。	B - III - a 類
〃 - 48	〃	〃 〃	8.6 1.4 — 6.8	〃	底部外面は回転糸切り。	B - II - a 類
〃 - 49	〃	〃 杯	12.2 3.7 — 7.4	平坦な底部から屈曲し、体部は直 線的に外上方に立ち上がり口縁部 にいたる。	回転ナデ調整。	
〃 - 50	P 37	〃 小皿	8.0 1.6 — 6.0	器壁の厚い平坦な底部から、短か く口縁部に立ち上がる。	底部外面は回転糸切り。	B - II - a 類
〃 - 51	〃	瓦器 碗	— (1.9) — 3.0	断面三角形の薄い貼付高台で、 体部は内湾して外上方へ立ち上 がる。	外面は指頭圧痕が残る。 内面は團線状のヘラミガキが施 される。	

採図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
82-1	P 38	土師器 小皿	6.6 1.5 — 4.6	やや上げ底気味の底部で、体部は直線的に外上方に立ち上がり口縁部にいたる。	回転ナデ調整。 底部外面は回転糸切り。	B-IV-a類
〃-2	〃	〃 〃	10.7 1.6 — 5.0	平坦な底部から、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。	回転台成形。 底部外面はヘラ切り。	A-I-a類
〃-3	〃	〃 杯	15.0 4.3 — 8.6	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	内外面にロクロ痕が残る。 底部外面は回転糸切り。	
〃-4	〃	青磁 碗	14.0 (2.6) — —	体部は、直線的に立ち上がり口縁部にいたる。 外面に鑄造弁文が施される。	内外面に貫入が入る。	
〃-5	P 39	土師器 小皿	6.6 1.2 — 4.2	平坦な底部から、体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部はつまみ上げられる。	底部外面は回転糸切り。	B-IV-b類
〃-6	〃	〃 〃	8.2 1.6 — 6.0	平坦な底部から、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部はやや肥厚し丸みを有する。	回転ナデ調整。 底部外面は回転糸切り。	B-II-a類
〃-7	〃	〃 〃	8.2 1.7 — 6.4		底部外面は回転糸切り。	〃
〃-8	〃	〃 杯	14.4 4.3 — 8.4	平坦な底部から屈曲し、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。	内外面にロクロ痕が残る。 底部外面は磨耗して不明。	
〃-9	P 40	〃 小皿	7.4 1.3 — 6.1	器壁の厚い平坦な底部から、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。	全体的に磨耗して不明。	C-III-c類
〃-10	〃	瓦器 碗	14.6 (3.5) — —	体部は、内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は若干外反する。	口縁部外面はヨコナデ調整。他は磨耗して不明。	
〃-11	〃	土錘	全長 4.5 全幅 1.4 孔径 0.6 重量 9g			
〃-12	P 41	土師器 杯	12.8 4.1 — 7.8	平坦な底部から、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	底部外面は回転糸切り。 内外面にロクロ痕が残る。	
〃-13	〃	〃 小皿	7.0 1.5 — 5.2	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、端部は丸くおさめる。	底部外面は回転糸切り。	B-III-a類
〃-14	〃	瓦器 小皿	7.8 1.1 — 5.3	平坦な底部から、体部は大きく外上方に立ち上がり、端部は丸くおさめる。	口縁部内外面はヨコナデ調整。 底部外面は指頭圧痕が残る。	
〃-15	〃	瓦質土器 足釜	全長 (9.4) 全幅 2.1	瓦質土器の足釜の三足である。	外面には指頭圧痕が残る。	
〃-16	〃	土錘	全長 5.3 全幅 1.7 孔径 0.6 重量 12.5g			

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
82-17	P 42	土師器 小皿	7.4 2.0 — 5.4	平坦な底部から屈曲し、体部は直線的に外上方に立ち上がり口縁部にいたる。	全体的に磨耗が著しい。	C-III-a類
〃-18	〃	〃 杯	12.4 3.6 — 6.6	平坦な底部から、体部は内湾して外上方に立ち上がり口縁部にいたる。	〃	II-b類
〃-19	P 43	〃 小皿	6.5 1.4 — 4.0	平坦な底部から、体部は大きく外上方に立ち上がり、口縁部下で若干屈曲する。	回転台成形。	B-IV-b類
〃-20	〃	〃 杯	— (1.6) — 7.5	器壁の厚い平坦な底部から体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	外底は磨耗して不明だが、平行圧痕が残る。	
〃-21	〃	備前焼 橋鉢	28.4 (10.3) — —	体部は、内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁端部は外傾し斜位に切り落とされる。	内面には、7本単位の条線が施される。	
〃-22	P 44	瓦器 小皿	9.0 1.9 — —	丸底風の底部から、内湾気味に外上方に立ち上がる。	口縁部内外面ヨコナデ調整。体部外面に指頭圧痕が残る。	
〃-23	〃	〃 碗	15.0 4.2 — 5.0	丸味を帯びた帯状の貼付高台で、体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	口縁部内外面ヨコナデ調整。体部外面に指頭圧痕が残る。内面に平行線状のヘラミガキが施される。	
〃-24	P 45	〃 小皿	9.0 1.1 — —	丸底に近い底部から、口縁部は大きく外上方に立ち上がる。	口縁部内外面ヨコナデ調整。体部外面に指頭圧痕が残る。	
〃-25	〃	土鍾	全長 5.4 全幅 3.4 孔径 0.9 重量 52g			
〃-26	〃	〃	全長 4.1 全幅 1.7 孔径 0.5 重量 8g			
〃-27	P 46	土師器 小皿	8.2 1.7 — 4.0	平坦な底部から、体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	外底は磨耗が著しく不明。	C-II-c類
〃-28	〃	〃 杯	— (2.5) — 6.4	平坦に近い底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	外底は回転糸切り。	
〃-29	P 48	〃 碗	13.5 (4.8) — —	体部は、内湾して外上方に立ち上がり口縁部は外反する。	外面は丁寧なヘラミガキが施される。内面は不明。	
〃-30	〃	片磁 碗	— (2.3) — 6.3	器壁の厚い底部で削り出し高台を有し、高台脇で屈曲し体部は外上方に立ち上がる。 内外面無文である。	費付及び外底は露胎である。	
〃-31	P 47	土師器 小皿	8.8 1.5 — 6.0	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	外底は磨耗が著しく不明。	C-II-a類
〃-32	〃	〃 碗	— (2.4) — 6.2	断面逆台形状の貼付高台を有し、体部は内湾して外上方へ立ち上がる。	全体的に磨耗が著しく不明。	

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手 法	備 考
82-33	P 47	土鍾	全長 全幅 孔径 重量	6.2 3.8 1.4 85g			
ク-34	ク	ク	全長 全幅 孔径 重量	5.5 4.1 1.2 84g			
ク-35	P 49	土師器 椀	— (2.6) — 6.4		断面方形の貼付高台を有し、体部は内湾して外上方へ立ち上がる。	全体的に磨耗して不明。	
ク-36	ク	土鍾	全長 全幅 孔径 重量	5.6 3.6 0.9 75g			
ク-37	P 50	土師器 椀	— (1.8) — 7.6		「ハ」の字状に開く高い高台を有し、体部は内湾して外上方へ立ち上がる。	全体的に磨耗して不明。	
ク-38	ク	土鍾	全長 全幅 孔径 重量	5.6 3.4 0.7 55.2g			
83-1	P 51	土師器 椀	— (2.1) — 6.6		「ハ」の字状に開く高い高台で、体部は器壁が厚く外上方へ立ち上がる。	全体的に磨耗して不明。	
ク-2	ク	土鍾	全長 全幅 孔径 重量	3.0 1.4 0.6 5g			
ク-3	ク	ク	全長 全幅 孔径 重量	(4.2) 1.6 0.6 7.5g			
ク-4	ク	ク	全長 全幅 孔径 重量	5.7 3.6 1.2 67g			
ク-5	ク	鉄製品 釘	全長 全幅 全厚	9.0 0.8 0.5			
ク-6	P 52	須恵器 椀	— (1.8) — 6.2		円盤状高台を有し、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	外底は回転糸切り。	
ク-7	ク	土師器 ク	— (2.3) — 7.0		断面逆台形状の貼付高台を呈し、体部は内湾して外上方へ立ち上がる。	全体的に磨耗して不明。	
ク-8	P 53	ク ク	— (3.5) — 2.8		ク	ク	
ク-9	ク	ク 甕	22.2 (4.5) — —		長胴の甕で、口縁部は「く」の字状に外反する。	口縁部内外面ヨコナデ調整。	
ク-10	P 54	青銅製品 鈴	全長 全幅 全厚	3.4 2.8 0.2			

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手 法	備 考
83-11	P 55	土師器 椀		16.0 5.6 — 6.2	断面逆台形状の貼付高台を呈し、 体部は内湾して外上方へ立ち上がる。 口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。	全体的に磨耗して不明。	
ク-12	ク	土鍾		全長 6.9 全幅 4.2 孔径 1.3 重量 95g			
ク-13	P 58	土師器 小皿		6.8 1.4 — 4.8	平坦な底部から、体部は内湾気味 に外上方へ立ち上がる。	全体的に磨耗が著しく不明。	
ク-14	P 59	青銅製品 椀		11.1 1.6 — —			
ク-15	P 56	土師器 釜		20.9 (6.3) — —	胴部は直線的で、やや内傾して口 縁部にいたる。口縁部下に断面方 形状の鑄がつき、端部には浅い凹 線が施されている。	口縁部内外面はヨコナデ調整。 胴部外面は擬位のハケ調整。	
ク-16	ク	ク ク		22.6 (6.5) — —	胴部は直線的で、やや内傾し平坦 な口縁部にいたる。口縁部下に水 平にのびる鑄がつく。		
ク-17	ク	瓦器 椀		17.1 6.4 — 8.9	「ハ」の字状に開く貼付高台で、 体部は内湾して外上方へ立ち上 がる。	外面に丁寧なヘラミガキが施さ れる。全体的に磨耗が著しく不 明。口縁部内面に1条の沈線が 施される。	楠葉型
ク-18	P 57	土師器 椀		— (3.8) — 6.8	「ハ」の字状に開く貼付高台で、 体部は直線的に外上方へ立ち上 がる。	回転台成形。	
ク-19	ク	ク ク		— (2.6) — 8.2	「ハ」の字状に開く貼付高台で、 体部は内湾気味に外上方へ立ち上 がる。	全体的に磨耗が著しく不明。	
ク-20	ク	ク ク		— (2.2) — 8.4		ク	

3 遺構外の出土遺物

具同中山遺跡群の1989・1990年調査区からは、9～18世紀に亘る遺物が多量に出土している。各包含層から出土しているものであり、各層位ごとに説明しなければならないが調査区が川側に傾斜していることや土層の色調及びその土質から明確に出土層位を把握し取り上げることができなかった。ここでは、古代から近世に至る時期の出土遺物を種類及び器種ごとに説明を加えて在地産の供膳具である土師器類について形態分類をおこなうこととする。さらに他の遺物は、各種類・器種ごとに古相の遺物から個々の特徴を抽出し概略を述べていくことにする。遺構外の遺物は、土師器皿・杯・椀・甕・釜・鍋、瓦質土器鉢・釜・鍋・火鉢・甕、瓦器皿・椀、須恵器皿・蓋・杯・椀・壺・鉢、備前焼鉢・皿・壺、緑釉陶器皿、灰釉陶器椀、瀬戸美濃系陶器皿・天目茶碗、常滑焼甕、亀山焼甕、青磁皿・碗・小碗・香炉、白磁皿・杯・碗、青白磁合子、近世陶磁器小杯・皿・碗・鉢・甕、石製品で砥石、土製品は泥塔、鉄製品は釘・小刀・スラグ、渡来銭は永楽通宝等が出土している。その他では土錘が多量に出土している。尚各遺物の出土地点・層位等詳細は観察表を参照されたい。

1) 土師器

土師器は、皿・杯・椀の供膳具及び鍋・釜・甕の煮沸具が中心に出土している。ここでは、供膳具の形態分類をおこない、その他については個々の特徴を説明していくことにする。

皿：(第84図1～92) (第85図1～24)

皿は(第85図23)1点のみで、他はすべて小皿である。小皿の中に京都系の手捏ね成形によるもの3点(第85図20～22)が含まれており、皿と手捏ねによる小皿は形態分類から除外した。形態分類は、回転台成形による小皿で底部外面が回転ヘラ切りと糸切りによるものを大きくA・B群に大分類した。全体的に摩耗が著しく不明なものも存在するため、その製品をC群とした。さらに口径によりⅠ～Ⅵ類にし、体部から口縁部の形態によりa～c類と細分をおこなう。

A群(底部外面がヘラ切り)

分類	口径	体部から口縁部の形態	挿図番号
A-I-a	口径が9cm代を測る	直線的に外上方へ立ち上がる	(第84図5～15)
A-II-a	口径が8cm代を測る	直線的に外上方へ立ち上がる	(第84図1～3)
A-II-b	口径が8cm代を測る	内湾して外上方へ立ち上がる	(第84図4)

B群（底部外面が回転糸切り）

分類	口径	体部から口縁部の形態	挿図番号
B-I-a	口径が9 cm 代を測る	直線的に外上方へ立ち上がる	(第 84 図 58～61)
B-I-b	口径が9 cm 代を測る	内湾して外上方へ立ち上がる	(第 84 図 62)
B-II-a	口径が8 cm 代を測る	直線的に外上方へ立ち上がる	(第 84 図 50～56)
B-II-c	口径が8 cm 代を測る	口縁部は外反する	(第 84 図 57)
B-III-a	口径が7 cm 代を測る	直線的に外上方へ立ち上がる	(第 84 図 33～41)
B-III-b	口径が7 cm 代を測る	内湾気味に外上方へ立ち上がる	(第 84 図 42～45)
B-III-c	口径が7 cm 代を測る	口縁部は外反する	(第 84 図 46～49)
B-IV-a	口径が6 cm 代を測る	直線的に外上方へ立ち上がる	(第 84 図 19～27)
B-IV-b	口径が6 cm 代を測る	内湾気味に外上方へ立ち上がる	(第 84 図 28～32)
B-V-a	口径が5 cm 代を測る	直線的に外上方へ立ち上がる	(第 84 図 16)
B-V-b	口径が5 cm 代を測る	内湾して外上方へ立ち上がる	(第 84 図 17～18)

C群（全体的に摩耗が著しく底部外面の調整不明品）

分類	口径	体部から口縁部の形態	挿図番号
C-I-a	口径が9 cm 代を測る	直線的に外上方へ立ち上がる	(第 85 図 11～15)
C-I-b	口径が9 cm 代を測る	内湾して外上方へ立ち上がる	(第 85 図 16・17)
C-I-c	口径が9 cm 代を測る	口縁部は外反する	(第 85 図 18)
C-II-a	口径が8 cm 代を測る	直線的に外上方へ立ち上がる	(第 85 図 6～8・10)
C-II-c	口径が8 cm 代を測る	口縁部は外反する	(第 85 図 9)
C-III-a	口径が7 cm 代を測る	直線的に外上方へ立ち上がる	(第 84 図 84～91)
C-III-b	口径が7 cm 代を測る	内湾して外上方へ立ち上がる	(第 85 図 1～3, 第 84 図 92)
C-III-c	口径が7 cm 代を測る	口縁部は外反する	(第 85 図 4・5)
C-IV-a	口径が6 cm 代を測る	直線的に外上方へ立ち上がる	(第 84 図 67～78)
C-IV-b	口径が6 cm 代を測る	内湾して外上方へ立ち上がる	(第 84 図 79～83)
C-V-a	口径が5 cm 代を測る	直線的に外上方へ立ち上がる	(第 84 図 64)
C-V-b	口径が5 cm 代を測る	内湾して外上方へ立ち上がる	(第 84 図 65・66)
C-VI-b	口径が4 cm 代を測る	内湾して外上方へ立ち上がる	(第 84 図 63)

以上小皿の分類をおこなったが、底部外面へラ切りとしたA群は、A-I-a類がその多くを占め器高も平均すれば2 cm 前後の製品で、ほぼ同時期のものと考えられる。A-II-b類の器高は1.3 cm で、極端に浅いものである。B群は底部外面が回転糸切りの製品で法量の差が認

められⅠ～Ⅴ類に分けられる。B-Ⅰ-a類は、A-Ⅰ-a類と同形態で底部の調整のみであることから、A-Ⅰ-a類と同時期か次段階に位置付けられる製品と考えられる。出土点数も5点と少ない。B-Ⅱ-a・c類は、器高が1.2～1.7cmと浅くなっており、A-Ⅱ-a・b類と同じ傾向を示している。B-Ⅲ-a～c類は、比較的多く出土しており、B-Ⅲ-b類の器高は1.5～1.9cm内外で比較的均一である。B-Ⅲ-c類は、器高は浅くなっている。B-Ⅳ-a・cの器高は1.2～1.6cm内外のものが多く存在し、B-Ⅲ-a・b類よりさらに浅くなる傾向がある。B-Ⅳ-a・b類は点数が少ないが、器高はB-Ⅳ類と差が認められない。C群は摩耗が著しく底部外面の調整が不明なものであるが、A、B群のいずれかに属するものである。C-Ⅰ-a類は、A-Ⅰ-a類に、C-Ⅱ～Ⅳ類はB-Ⅱ～Ⅳ類に属するものと考えられる。その他柱状高台を有する小皿(第85図24)が1点出土しており、底部外面は摩耗が著しく不明であるが回転糸切りが施されている可能性が強い。

杯：(第85図25～57)

杯はすべて回転台成形によるもので、底部外面には回転糸切りが施されている。皿と同様に口径によってⅠ～Ⅳ類に大別し、体部から口縁部の形態によってa～c細分した。全体の形態を窺い知ることのできないもの(55～57)は除外した。

分類	口径	体部から口縁部の形態	挿図番号
Ⅰ-a	口径が13cm代を測る	体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる	第85図48～50
Ⅰ-b	口径が13cm代を測る	体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がる	第85図51・52
Ⅰ-c	口径が13cm代を測る	体部は内湾して立ち上がり口縁部は外反する	第85図53・54
Ⅱ-a	口径が12cm代を測る	体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる	第85図41～43
Ⅱ-b	口径が12cm代を測る	体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がる	第85図44～47
Ⅲ-a	口径が11cm代を測る	体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる	第85図31～38
Ⅲ-b	口径が11cm代を測る	体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がる	第85図39・40
Ⅳ-a	口径が10cm代を測る	体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる	第85図25～27
Ⅳ-b	口径が10cm代を測る	体部から口縁部にかけて内湾して立ち上がる	第85図28～30

土師器杯は、Ⅰ類のみ口縁部が外反する形態を有するものが存在し、その他は体部から口縁部にかけての立ち上がり直線的なものか内湾するものになる。底部の形態によって分類はしなかったが、円盤状の底部を有するものも存在する。器高を各類比較してみると、まとまりが認められず3.3～5cm前後のものが多く存在する。色調は全般的に浅黄橙色を呈する。

椀：(第86図1～34)

椀は、すべて回転台成形によるもので、底部の形状によって大きく分類できる。A群としたものは、輪高台を有する椀で体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は外反する形態であ

る。今回は細分しなかったが、高台部「ハ」の字状に開く貼付高台の製品が多い中、直線的な方形の高台も認められる。全体的に摩耗が著しいが、高台脇を削り外面にヘラミガキが残るもの(24)がある。椀の中で特徴として捉えることができるものは、底部外面に回転糸切り痕が残るもの(31~33)である。B群は底部破片が多いが円盤状高台を有するものである。底部外面は回転糸切りされるものが多いがその中で2点のみ(4・6)がヘラ切りである。底部回転糸切りされるものは、椀(11)でみられるように、体部が内湾して外上方に立ち上がり若干ではあるが口縁部が外反する形態を呈する。ヘラ切りのものは、器壁が厚く体部は直線的に外上方に立ち上がる形態である。椀の中で1点のみ在地産の黑色土器(34)がある。

甕：(第87図1~12)

口縁部が「く」の字状に外反する特徴をもつ甕である。長胴形の甕で口縁部に最大径を有するものが多い。口縁部ヨコナデの後斜位のハケ、同じく胴部外面は縦位・斜位のハケ調整が施される。内面は荒い横位のハケ調整が施される。色調はいずれも橙色から褐色を呈し0.5~1.5mmの砂粒を含むものが多い。胴部に最大径を有するものがやや古くなると考えられる。

釜：(第88図1~15, 第89図1~3)

釜は口縁部破片が多く出土しているが、いくつかのタイプに分けることができる。半球形の長い胴部から直立する口縁部からなり、口縁部下に幅の狭い鏝をめぐらす釜(1~5)がある。このタイプの胴部外面は縦位のハケ目が施される。これらは摂津C型に類似している。半球形の胴部から、口縁部が内傾するもの(6~8)は、肩部に幅の狭い鏝が付く。口縁部外面には、凹線状の段が付き胴部外面には横位のヘラ削りが施される。和泉・河内D型と呼称されているものである。今回の調査で比較的多く出土しているタイプ(第88図9~15, 第89図1~3)の特徴は、張りのある胴部から口縁部は内傾し肩部に断面三角形の鏝が付く。さらに口縁部内外面はヨコナデで、胴部外面には斜位のタタキが施される。

鍋：(第89図4)

土師器の鍋は、1点のみ出土している。胴部から口縁部にかけての破片であるが、胴部は内湾気味に外上方に立ち上がり口縁部は外反する。外面に指頭圧痕が残るものである。

2) 瓦質土器

瓦質土器は、鉢・釜・鍋・火鉢・甕が出土している。鉢及び鍋類が比較的まとまって出土している。

鉢：(第89図5~12)

播鉢とコネ鉢が存在するようであるが、細片のため明確ではない。体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部が肥厚して拡張されるもの(8~11)や、口縁部が外反するもの(12)が認められる。播鉢と確認できる内面に条線が施されるもの(6・9)は2点のみで、体部外面に

指頭圧痕が残る。その他は、内面に横位のハケ調整が施される製品が存在する。

釜：(第90図1～4・11・13)

瓦質土器の羽釜は、量的には少ない。土師器釜の和泉・河内D型の瓦質化したもの(1・2)と同形態で、内面に横位のヘラ削りが施されている。その他、張りのない胴部から口縁部に直立気味にやや内傾して立ち上がるものがある。この釜(3)は口縁下の鐙が断面三角形状の突帯を呈するもので、内外面に指頭圧痕が残る。茶釜として全体の形態を窺えるものはないが口縁部が直立して上方に立ち上がる茶釜(4)は、球形で胴部中程に鐙が付くものと考えられる。さらに肩部に把手が付くもの(11)が存在する。足釜で三足の一部(13)が出土している。

鍋：(第90図5～10)

口縁部破片が多いが、推定では平坦に近い底部から胴部は張りをもち内湾して上方に立ち上がる形態である。口縁部に若干差が認められ、口縁部が外反するもの(5・6)口縁部が内傾するもの(7～9)がある。その他には、胴部から内湾して口縁部にいたるものも認められる。

火舎：(第90図12)

1点のみ出土しており、口縁部は直立して上方に立ち上がり、外面に菊花文がスタンプされるものである。

甕：(第90図14)

甕の胴部破片で、外面に格子のタタキが施され、内面はナデ調整である。

3) 瓦器

搬入品の中で今回瓦器が多量に出土した。いずれも畿内の和泉型と楠葉型の瓦器であり、幡多地方はもちろん県内の遺跡と比較しても多量の出土である。

皿：(第91図1～18)

皿は、口径が8cm内外を測るもの(1～17)と、大振りで11cmを測るもの(18)がある。形態としては、平坦な底部から体部は内湾して外上方に立ち上がるもの(1～4)と、平坦な底部から、屈曲し口縁部が外反するタイプ(5～17)が認められる。

椀：(第91図19～44, 第92図1～33)

椀は、産地別で分類されている。和泉型と楠葉型の製品が出土している。和泉型は、高台部が段面逆三角形の薄い貼付高台で、体部は内湾して外上方に立ち上がり口縁部はヨコナデのため外反する。体部外面は指頭圧痕が残る。内外面摩擦が著しいものもあるが、内面は圏線状のヘラミガキの粗略化が進み、外面においては全くヘラミガキが施されないものが多い。内面は圏線状のヘラミガキが施され、見込みに平行線状のヘラミガキ(40～42)、圏線状ミガキと連結し一本の螺旋状になるもの(39)も見られる。楠葉型の瓦器椀(第92図18～33)は、体部が内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部の外反するものが少なく、端部内面に浅い沈線が施

される。内面に、密なヘラミガキが施されるものが存在するが、全体的に摩耗が著しい。

4) 須恵器

須恵器は、供膳具から貯蔵具が出土している。供膳具の一部を除いて古代末から中世に亘る土器群である。

皿：(第93図1~4)

回転台成形による皿で平坦な底部から体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部を上方につまみあげるもの(1~3)、外傾する面を有するもの(4)が出土している。いずれも口径は15cmを測り、器高は1.4~2.5cm内外である。底部外面は回転ヘラ切りである。

蓋：(第93図5~10)

平坦な天井部から屈曲して、口縁部にかけて下降するもの(5~7)、天井部から緩やかに下降するもの(8~10)がある。天井部が一部欠損しているもの(5)もあるが、すべて球形の鈕を有する。

杯：(第93図11~13)

杯は、底部外縁端に高台を貼付するものである。体部は直線的に外上方に立ち上がるもので回転ナデ調整が施される。

椀：(第93図14~25)

椀は、断面方形の貼付輪高台を有するもの(14~16)と、円盤状高台を有するもの(19・21~23)、無高台のもの(24・25)がある。いずれも回転台成形によるものであり、輪高台椀の底部外面は、ナデ調整である。円盤状高台を有する椀は、底部外面回転糸切りで、無高台の椀も同様に施されている。椀はすべて回転台成形による製品で、形態は体部が内湾して外上方に立ち上がり、口縁部が外反するタイプである。

壺：(第93図26)

壺は1点のみ出土している。頸部は上方に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。口縁端部は上方につまみ上げられ垂直な面をなす。

5) 東播系コネ鉢(第94図1~15, 第95図1~14)

体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は個々に差異が認められる。口縁部はほとんど肥厚しないが、端面の上下端を僅かにつまみ出しており、斜めに切り落としているもの(第94図2)が1点出土している。口縁端部がほぼ上方につまみ上げられ、端面が垂直に近くなるものや、つまみ上げの内側に凹線を残すものも存在する。その他口縁部の特徴から見れば、肥厚が大きくなり玉縁化するものがその多くを占める。

6) 備前焼 (第96図1~16)

備前焼は、調理具の播鉢が多く出土している。その他壺と皿が存在するが、量的に少ない。播鉢は、体部が直線的か、やや内湾して外上方に立ち上がるタイプのものである。口縁部に差異が認められ、端部は斜めに切り落とされるもの(1~4)、さらに口縁部が肥厚し端部が上方に拡張するもの(5~9・11・13)がある。口縁端部が上下に拡張されて広い面を有し凹状になるもの(10・12)は数少ない。皿(14)が一点出土しているが、平坦な底部から体部は内湾して外上方へ立ち上がるものである。底部外面は回転糸切りが施される。壺は肩部から口縁部にかけての破片であるが、頸部が上方に立ち上がり口縁部が玉縁を呈するもの(15・16)である。

7) 緑釉陶器 (第97図1)

一点のみ皿が出土している。高台部は断面方形状に削り出され、緑釉が全面に施釉される。

8) 灰釉陶器 (第97図2~4)

底部破片のもの(2)は、「ハ」の字状に開く高台で、見込みは露胎で内面は灰釉が施されている。底部外面には回転糸切りが残る。口縁部破片2点(3・4)は体部が内湾気味に外上方へ立ち上がり口縁部はやや外反するものである。全面に灰釉が施される。

9) 瀬戸美濃系陶器 (第97図5~10)

皿・卸し皿・天目茶碗が出土している。皿(5)は、体部で屈曲し口縁部は外反する。口縁部内外面のみ施釉されている。卸し皿(6)は、底部破片であるが内面に格子の卸し目が施されている。外底は、回転糸切りが施され重ね焼き痕が観察できる。口縁部破片のもの(7)は、端部が拡張されて端面には浅い凹線が入る。天目茶碗(8~10)は、削り出し高台で、高台脇は、さらに削り出している。完形品(10)は、体部が直線的に外上方に立ち上がり口縁部はくびれる。外面体部下半まで施釉されている。

10) 常滑焼 (第97図18)

常滑焼の底部破片と考えられるもの(18)があり、外面に縦位のヘラ削りが施される。

11) 亀山焼 (第 97 図 19)

口縁部破片で亀山焼かどうか認定し難いが、口縁部が「く」の字状に外反し、外面には格子のタタキと内面に波状のタタキが施される。

12) 輸入陶磁器

青磁

皿：(第 97 図 11~17, 第 98 図 1~10)

同安窯系の皿 (11~17) は、平坦な底部から屈曲し口縁部は外上方に立ち上がる。内面は、櫛描きのジグザグ文が施され、外底が露胎になるものがある。その他龍泉窯系のもの (第 98 図 1~7) は、稜花皿が多い。内外面無文の皿 (8~10) は見込みに段を有するもの (10) や蛇ノ目状に釉ハギを施されるもの (8) が存在する。

碗：(第 98 図 11~22, 第 99 図 1~30, 第 100 図 1~29, 第 101 図 1~17)

同安窯系の碗 (11~15) は、体部は内湾して外上方に立ち上がり、体部上位で若干内側に屈曲するタイプである。外面には細かい櫛目と内面は同様に雷光文が施されている。龍泉窯系の碗は、内面の文様が飛雲文で線描きの文様が施されるもの (16~22) が存在する。青磁の中でも量的に多く出土しているタイプが、外面に鎬蓮弁文や蓮弁が片切彫りされるもの (第 99 図 1~30) である。内外面が無文の碗 (第 100 図 1~12) は、体部が内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は外反するものである。口縁部が外反しない碗 (13~15) も存在する。外面に雷文帯が施される碗 (18・19・21) は内湾するタイプで、蓮弁文が施されるもの (17・20) は、口縁部が外反する。底部破片のものは、見込みに花文のスタンプや「金玉満堂」と刻印されたもの (第 101 図 5) が見られる。

香炉：(第 101 図 18)

口縁部破片が 1 点のみ出土している。胴部から直線的に上方に立ち上がり、口縁部が内側に肥厚する。内面は露胎で外面に細かい貫入が入る。

白磁

皿：(第 101 図 19~23, 第 102 図 1~11)

削り出し高台で、体部が内湾して外上方へ立ち上がり口縁部が外反する皿 (第 101 図 19・20) と基筒底の底部をもつもの (21) や内湾して立ち上がるもの (22・23) が存在する。その他には、平底で体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるタイプ (第 102 図 1~11) が出土している。この皿は、釉が体部下半までのものと外底まで施されるものがある。

碗：(第 102 図 12~40, 第 103 図 1~8)

体部が内湾して外上方に立ち上がるタイプで口縁部を外反させて端部を水平にするもの

(13・14)が見られる。その他は、口縁部が玉縁状を呈するものが多く出土している。底部の破片であるが体部下半まで釉が施され、浅く削り出して高台部を形成するもの(31～37)や、断面逆三角形の高い高台部を有するもの(38・39・40)がある。見込みに楯描きによる波状の文様をもつもの(第103図4・5)も見られる。

青白磁(第103図9～12)

合子のみ出土しており、口縁部外面に列点文(9)や、蓮弁状の文様(10・11)、無文のもの(12)が出土している。

13) 近世陶磁器(第103図13～21)

伊万里の小杯・碗・皿類と、唐津の皿・碗類が出土している。小杯(13)は、口縁部が外反するタイプで外面に丸ノミ状工具による蓮弁文が施されている。碗(14)は、口径が8.8cmとやや小振りである。外面に草花文が染付けられる。皿(17)は、内面に鶴文が染付けされている。唐津の皿類は、削り出し高台で見込みに胎土目が残るもの(19・21)がある。

14) 産地不明陶器(第103図22～27, 第104図1～11)

陶器の碗・鉢・搦鉢・甕等が出土している。碗の中で、見込みに胎土目をもつもの(22・24～27)は、李朝期の製品と考えられる。底部破片で、見込み蛇ノ目釉ハギが施される碗(第104図1)は、在地産で能茶山窯の製品である可能性が高い。逆台形状の削り出し高台の碗(2)は、甕付及び外底が露胎で腰が丸味を帯びている形態である。同形態を有する碗(3)は、全面に淡黄色釉が施され内外面に貫入が入る。この碗は京焼風陶器と考えられる。その他唐津系陶器と考えられる鉢(7・11)や、片口鉢(8・9)の形態を呈する製品、搦鉢(10)も見られる。

15) 土製品(第107図7, 第108～110図)

土製品では、土錘・泥塔が出土している。土錘は小型の製品で平均全長4.6cmを測り、重さ5.8gのものと大型品で平均全長5.8cmで重さ89.3gの製品が出土している。7の泥塔は高さ8.5cmを測り、型造りで底面に穴が穿たれる。形態は五輪塔が模されており片面に梵字が刻まれる。

16) 石製品(第105・106図, 第107図1～6)

砥石・石鍋・革帯装飾具(巡方)・硯・有孔石製品が出土している。砥石は、砂岩製が多く

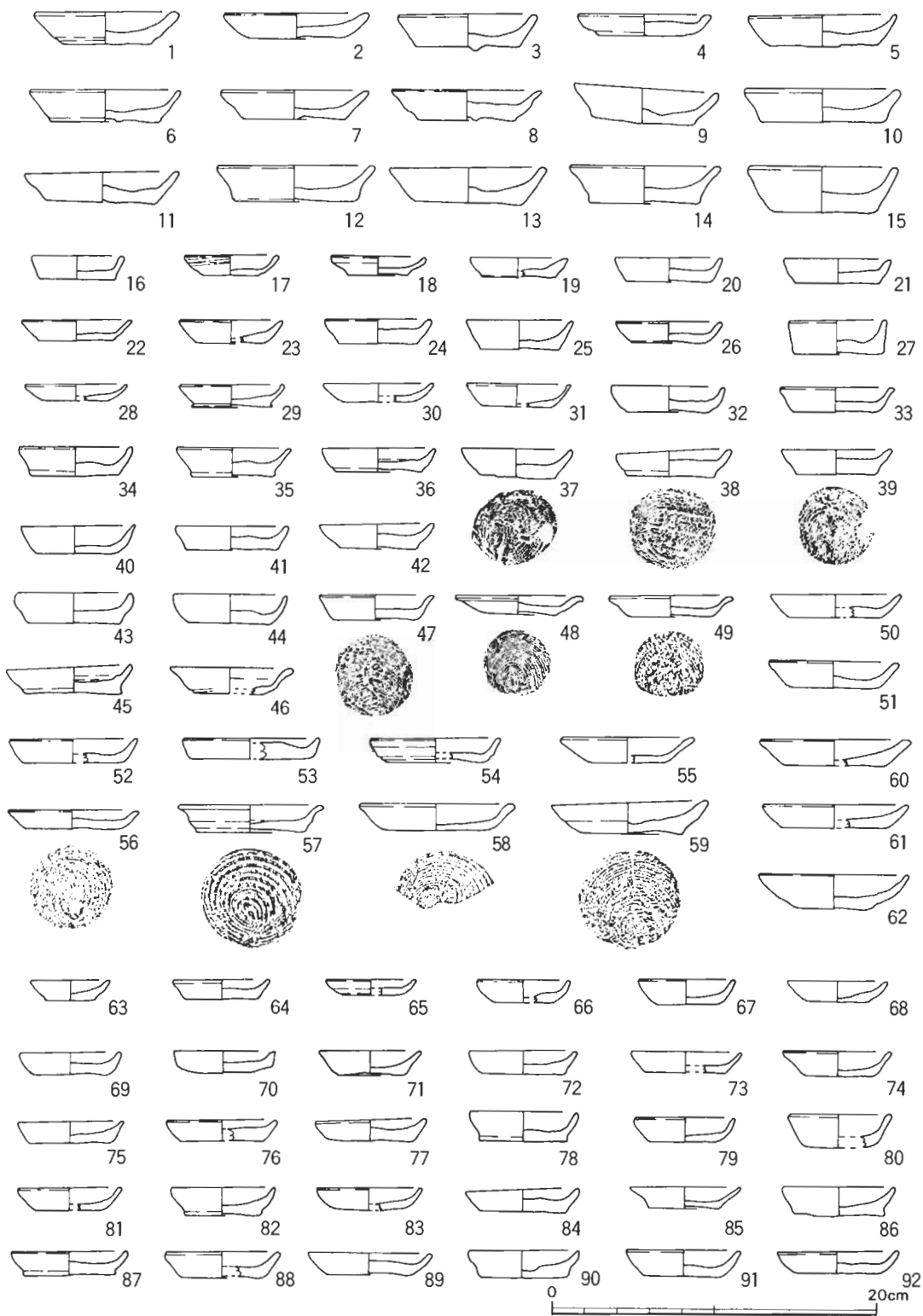
断面扁平な長方形を呈する小型の仕上砥や、方形状を呈するものが存在する。(第106図2)は表裏面に溝状の擦痕が残る。その他大型の置き砥石と考えられる製品も存在する。石鍋(第107図1)は口径12.8cmを測り、体部は直線的に立ち上がり端部は水平である。口縁部下に断面方形状の突帯が付く。革帯装飾具(2)は、正方形を呈し大きさは上場3.9×3.85cm、下場4.1×3.9cm、厚さ8.0mmを測る。断面は台形状を呈する。表面と4辺は良く磨かれており、裏面の四隅に2孔を一对とする潜り孔があいている。硯(5,6)は2面出土しており小型の製品である。断面長方形で陸部と海部の境は不明瞭である。有孔石製品は2点出土しているが、性格は不明である。断面方形で円柱状を呈し中央部に円孔が穿たれる。石臼(第106図10)は、上臼で挽き手穴が側縁の中央部に認められる。

17) 金属製品(第107図8~27)

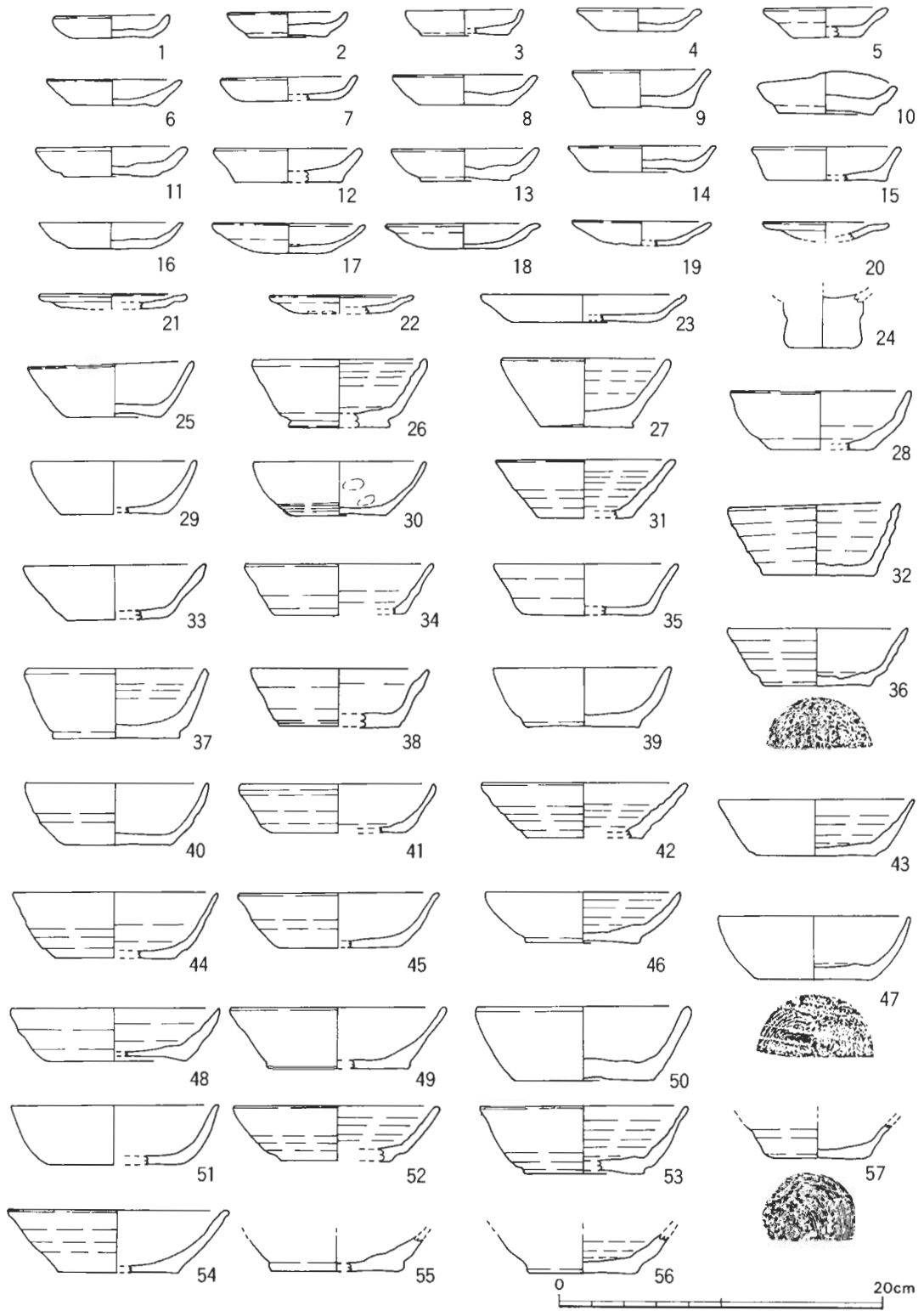
鉄釘・鉄鎌・鉄斧・環・小刀・不明金属製品・キセルが出土している。鉄釘は鋭角で頭部が折れる折頭釘とねじ釘がある。(20)の釘は打つ時に折り曲げられたものと考えられる。(9)の鉄鎌は先端部が二股になっており、全長が9.6cm、重さ25gを測る。(22)の鉄斧は断面方形を呈し全長9.4cm、幅3.4cmで重さ320gを測る。小刀は5振り出土しているが、片刃であり錆化が著しい。残存している長さは(23)が26cm、(24)が25cm、(25)が22cm、(26)が30cm、(27)が19.2cmを測る。(12・13)は青銅製品で(12)は菊花の型造り製品で、(13)は円筒状を呈する。

18) 古銭(第111図)

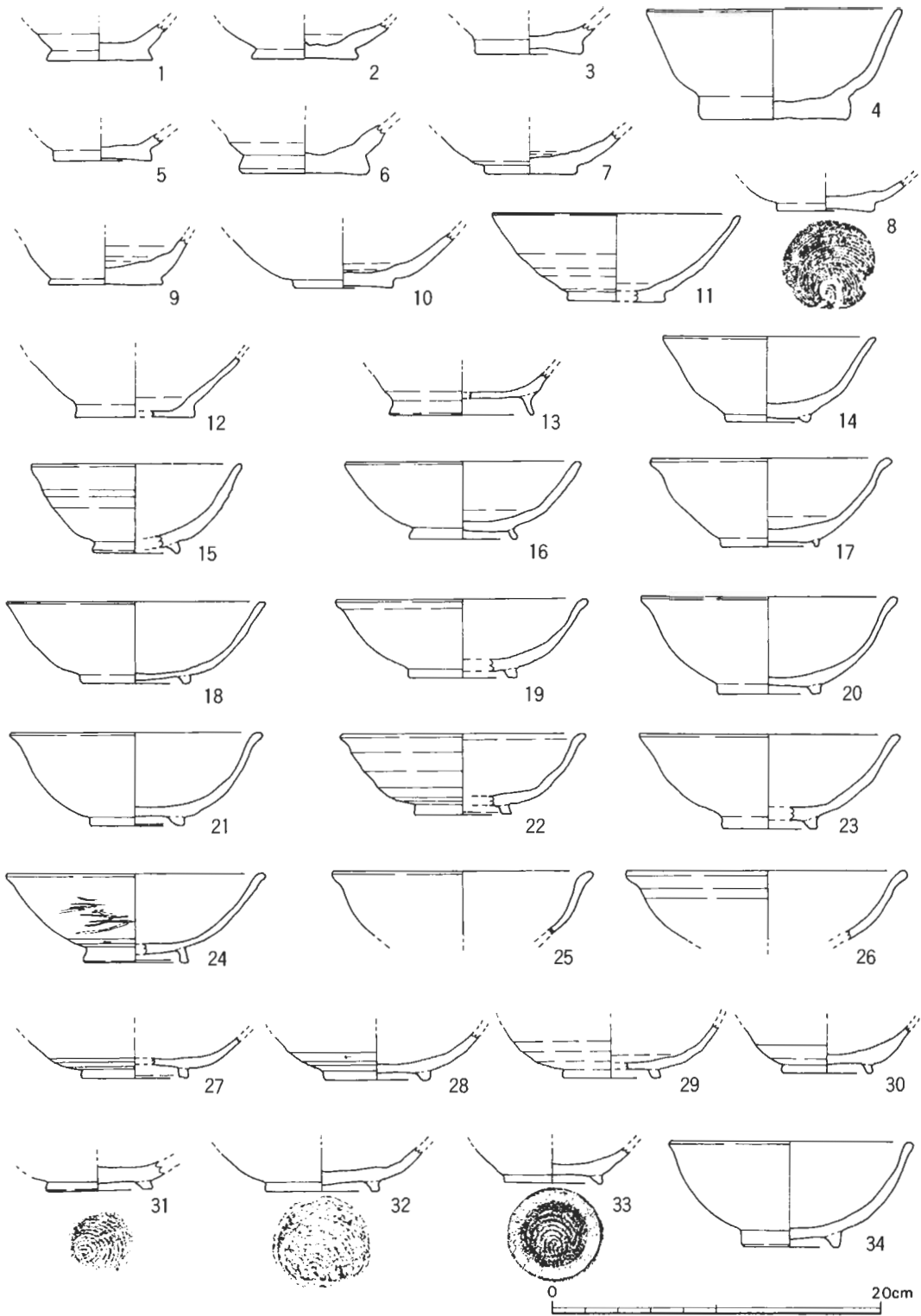
古銭は渡来銭と無名銭が出土している。渡来銭は(1~7)で無名銭が(8)である。(1~3)は包含層出土で銭種は、(1)が皇宋通宝、(2)は皇宋元宝、(3)は明の永楽通宝である。(4)はSB13から出土している聖宋元宝、(5)は天禧通宝、(6)は明の洪武通宝、(7)は永楽通宝で、K32-9グリッドのP4から出土している。さらに(8)のみ無名銭で同じくK32-9グリッドのP4からの出土である。(松田)



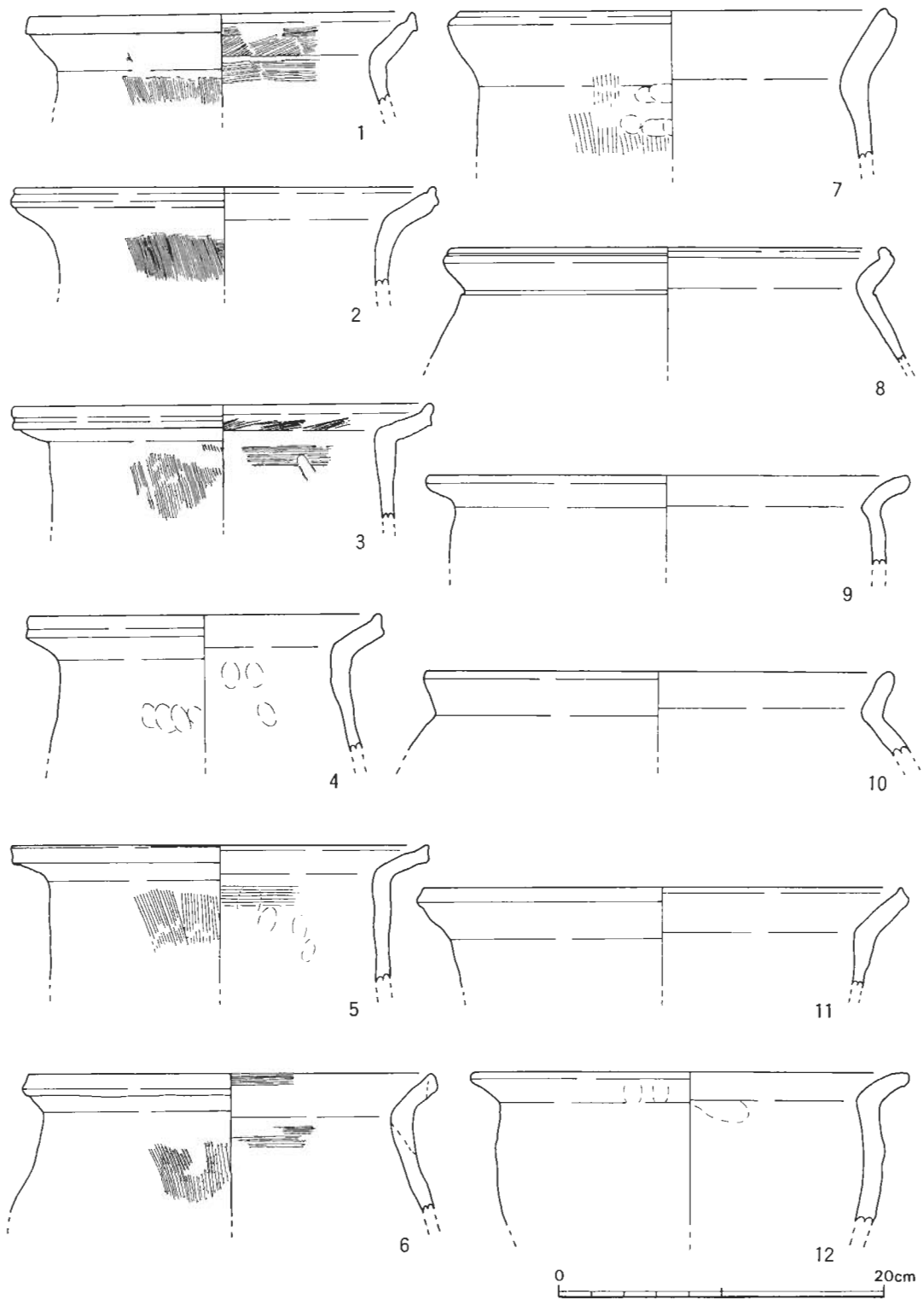
第84図 遺構外出土遺物(1)



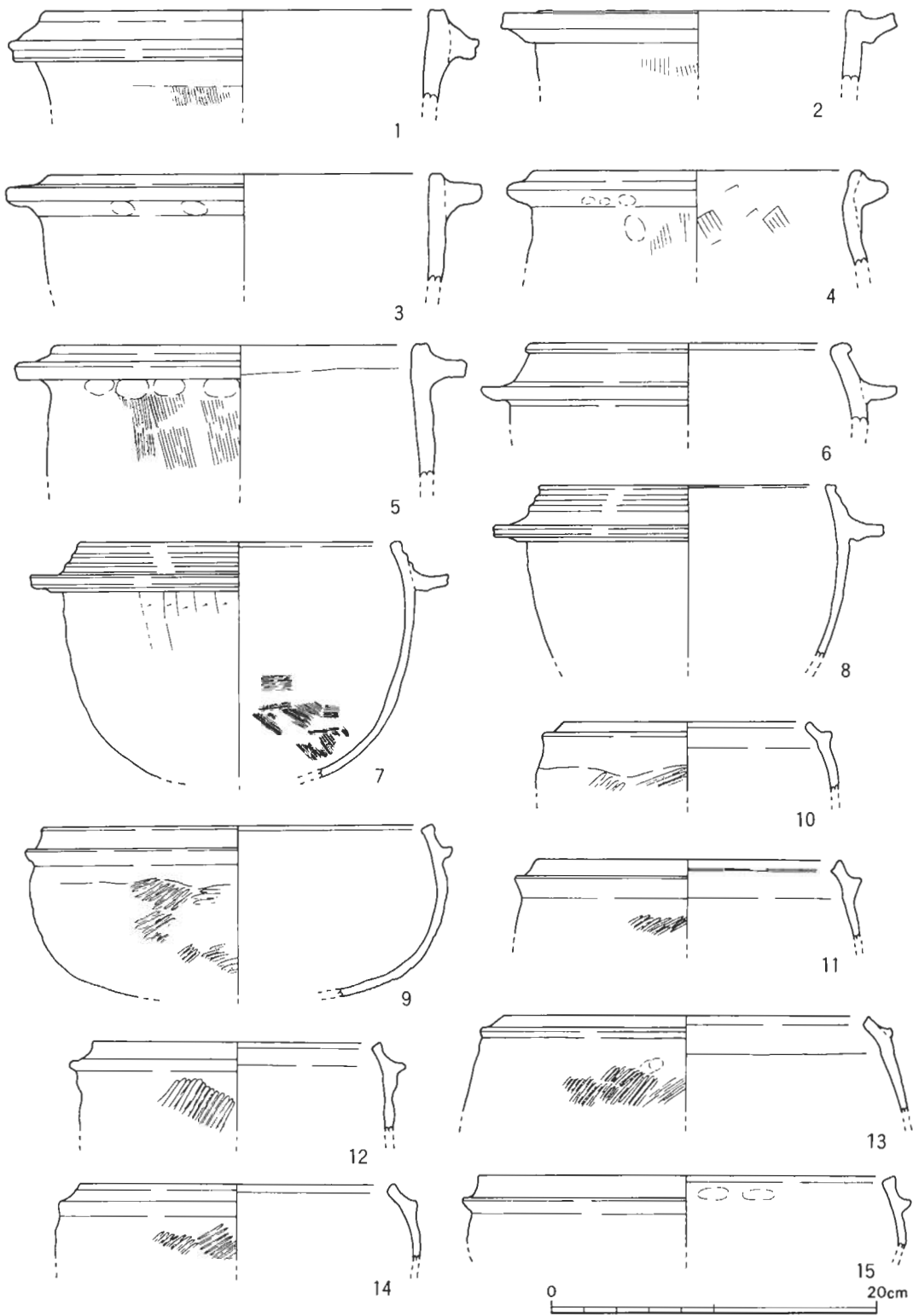
第 85 図 遺構外出土遺物(2)



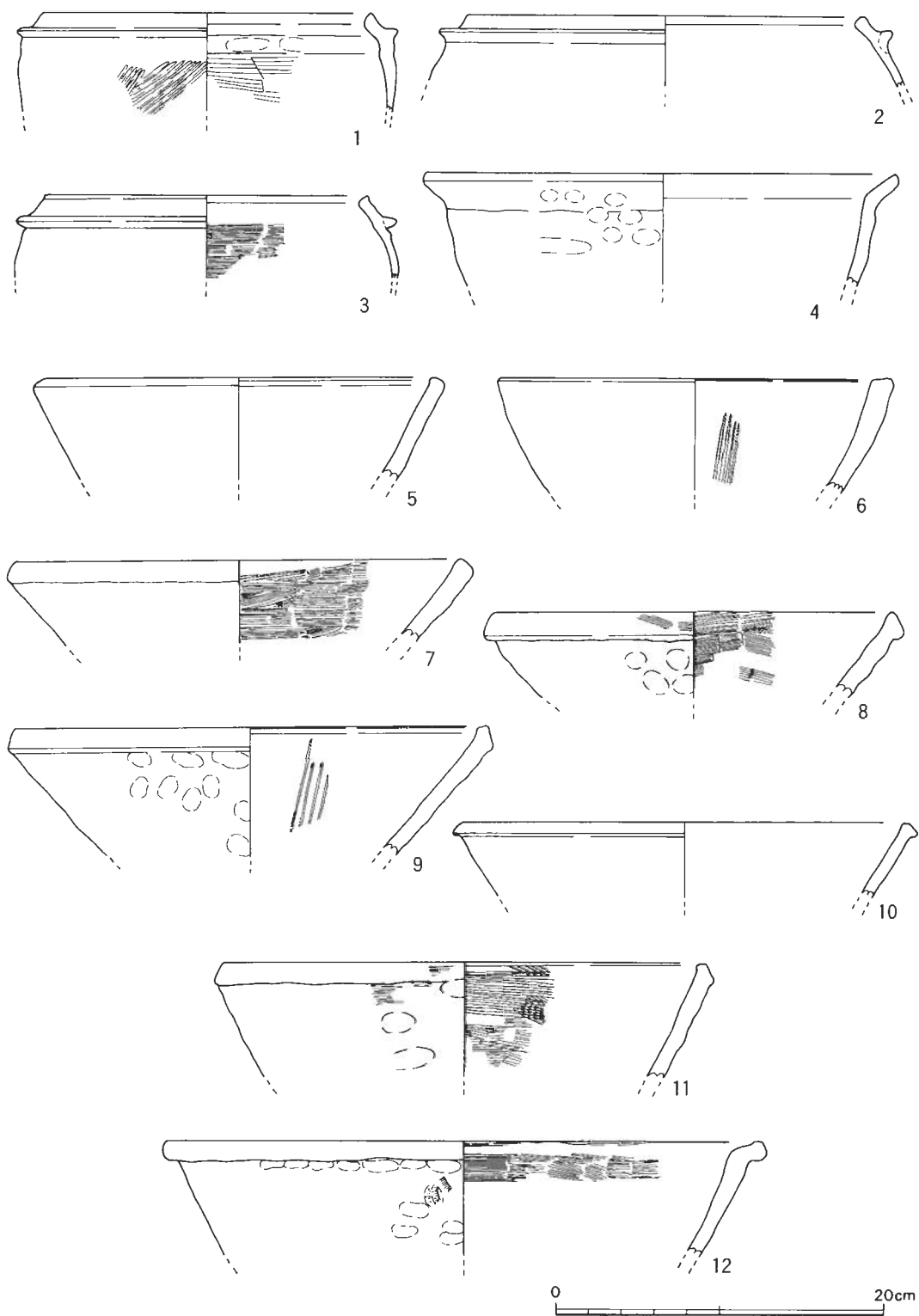
第 86 図 遺構外出土遺物(3)



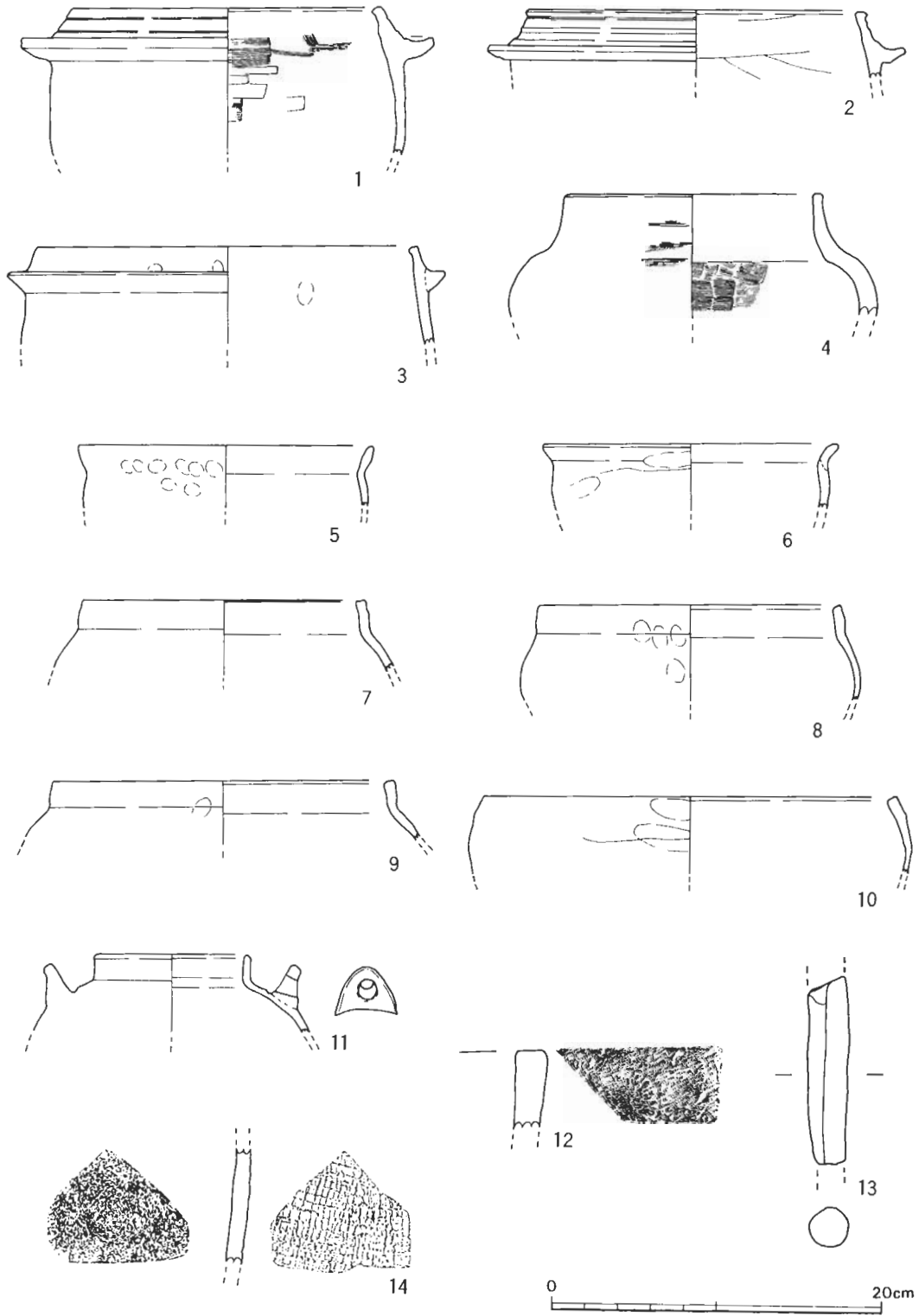
第 87 図 遺構外出土遺物(4)



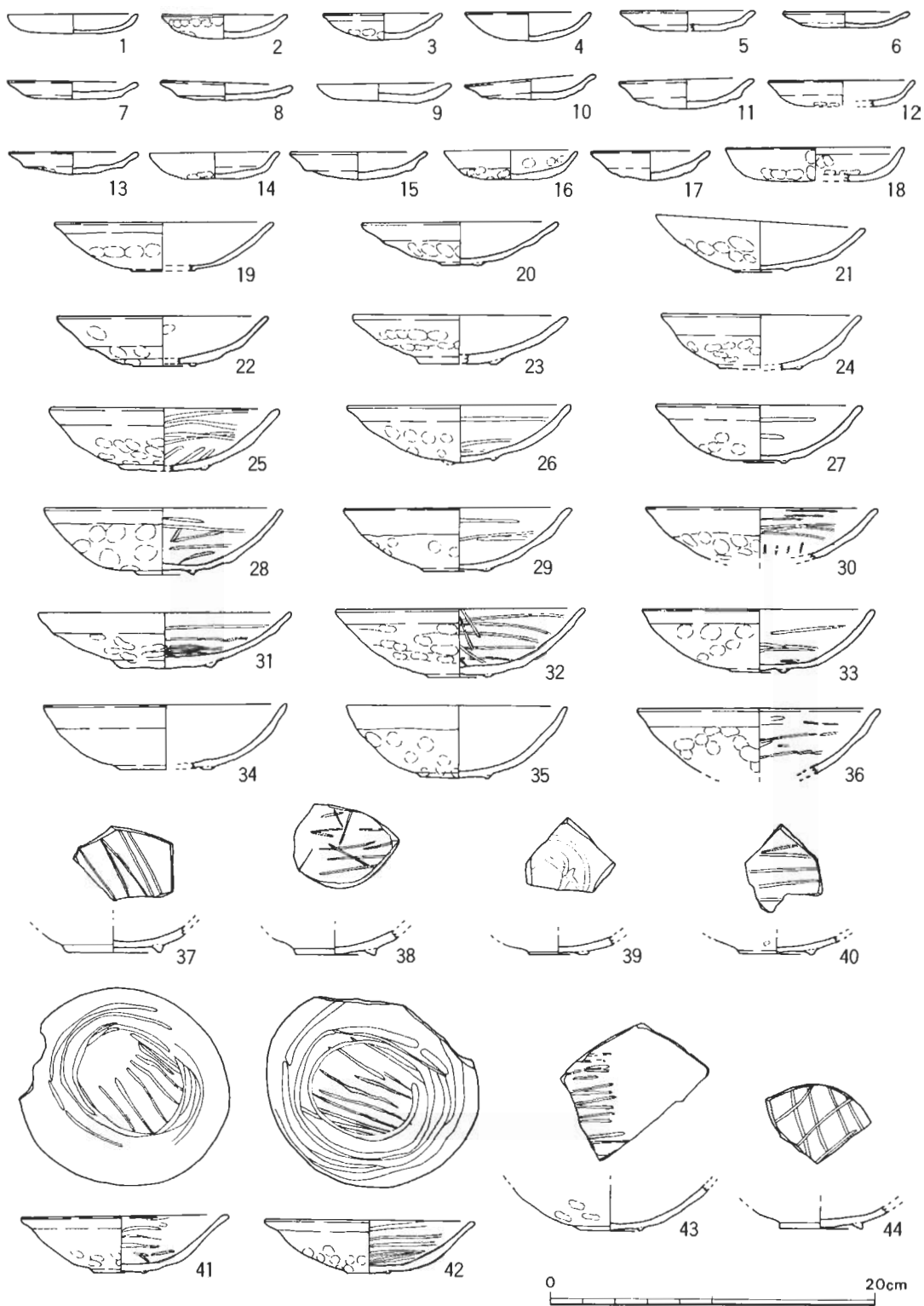
第 88 図 遺構外出土遺物(5)



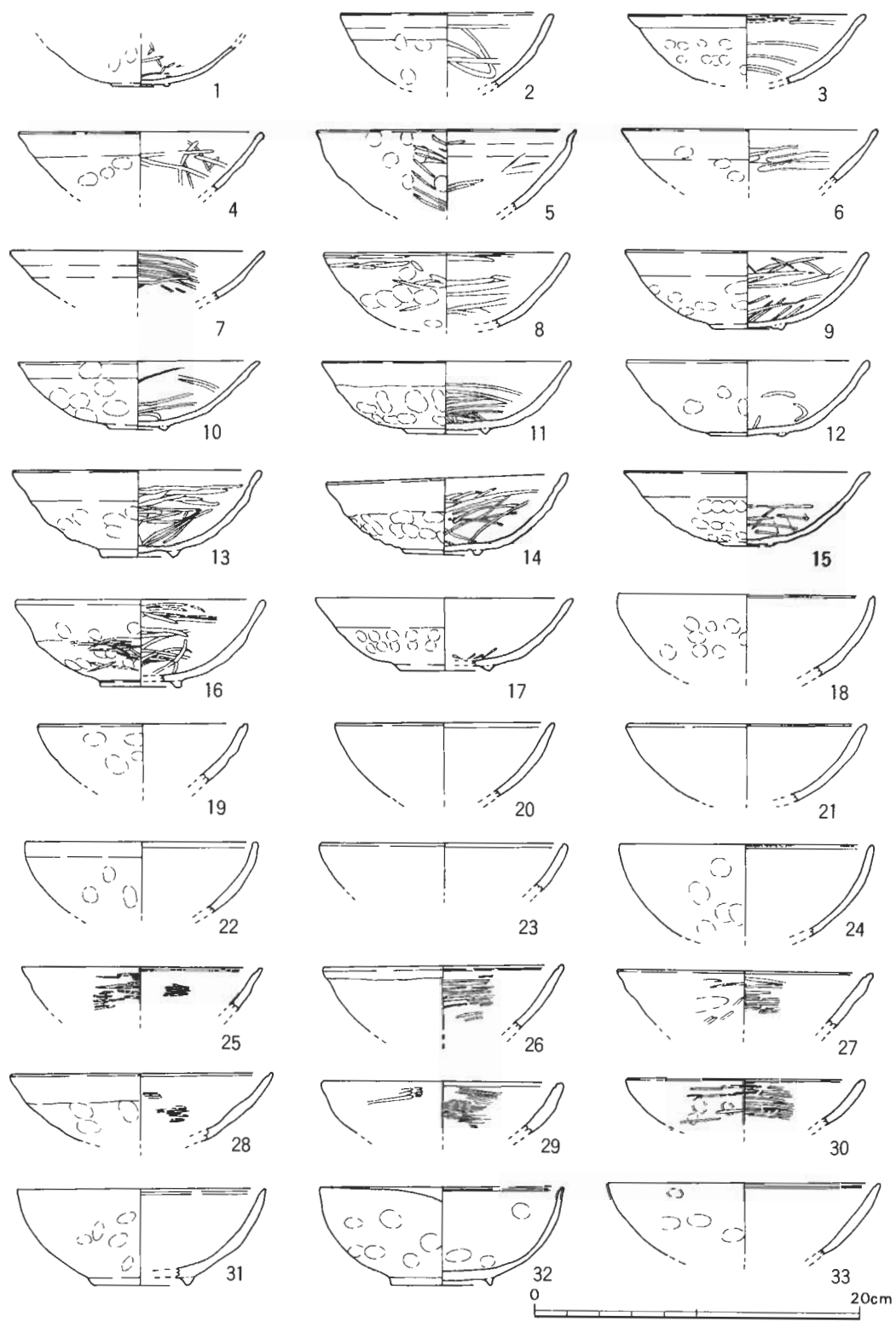
第 89 図 遺構外出土遺物(6)



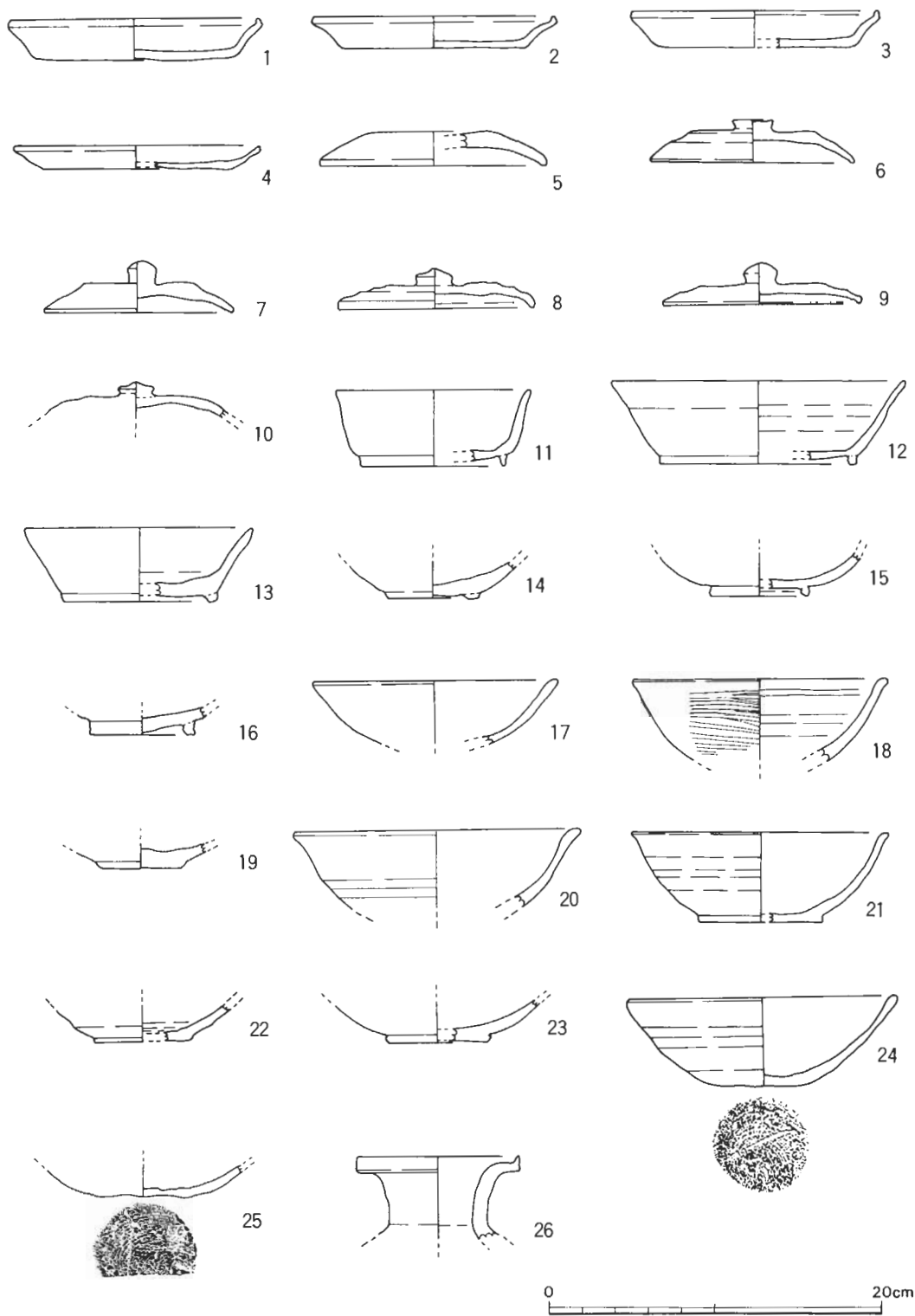
第 90 図 遺構外出土遺物(7)



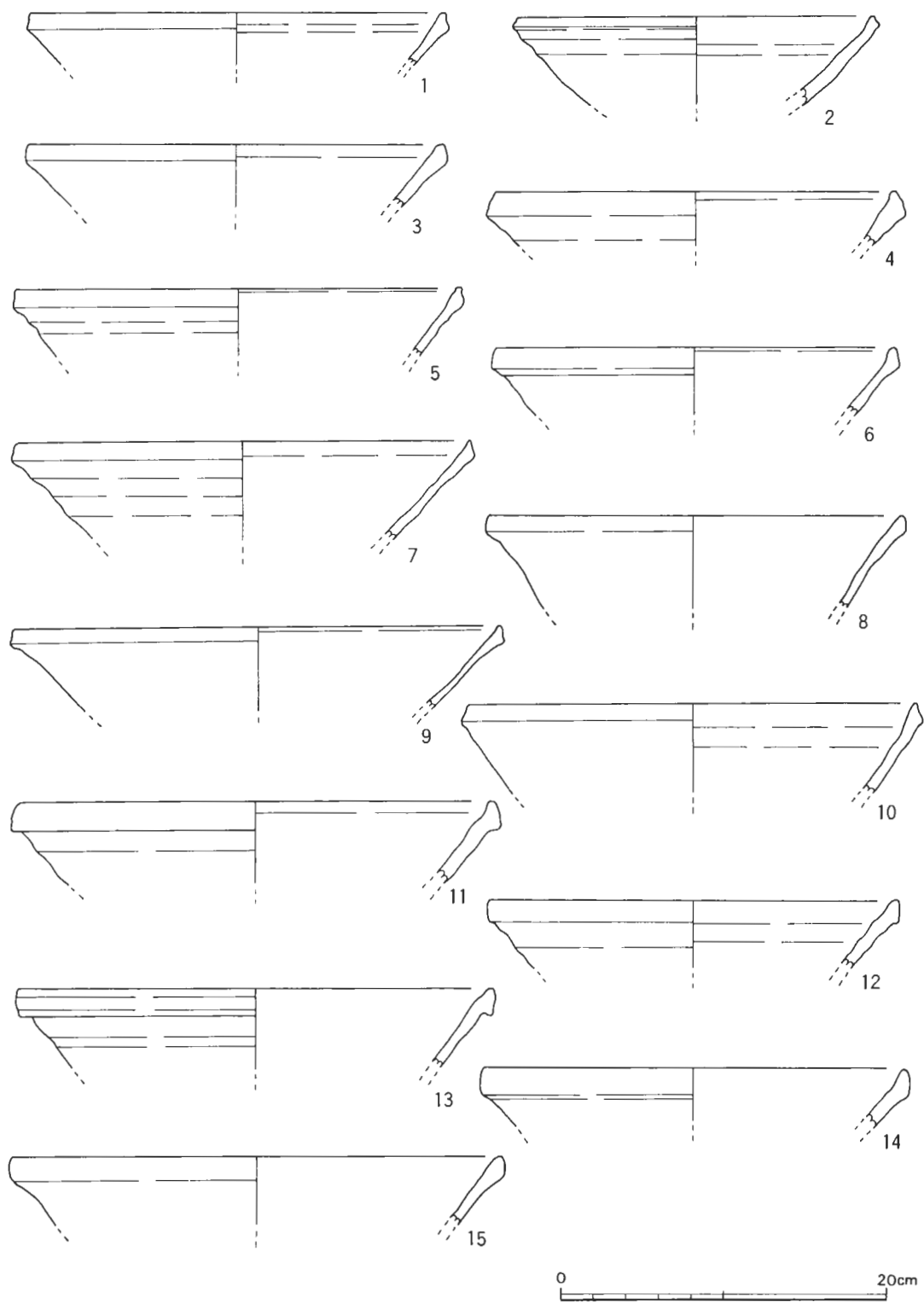
第91圖 遺構外出土遺物(8)



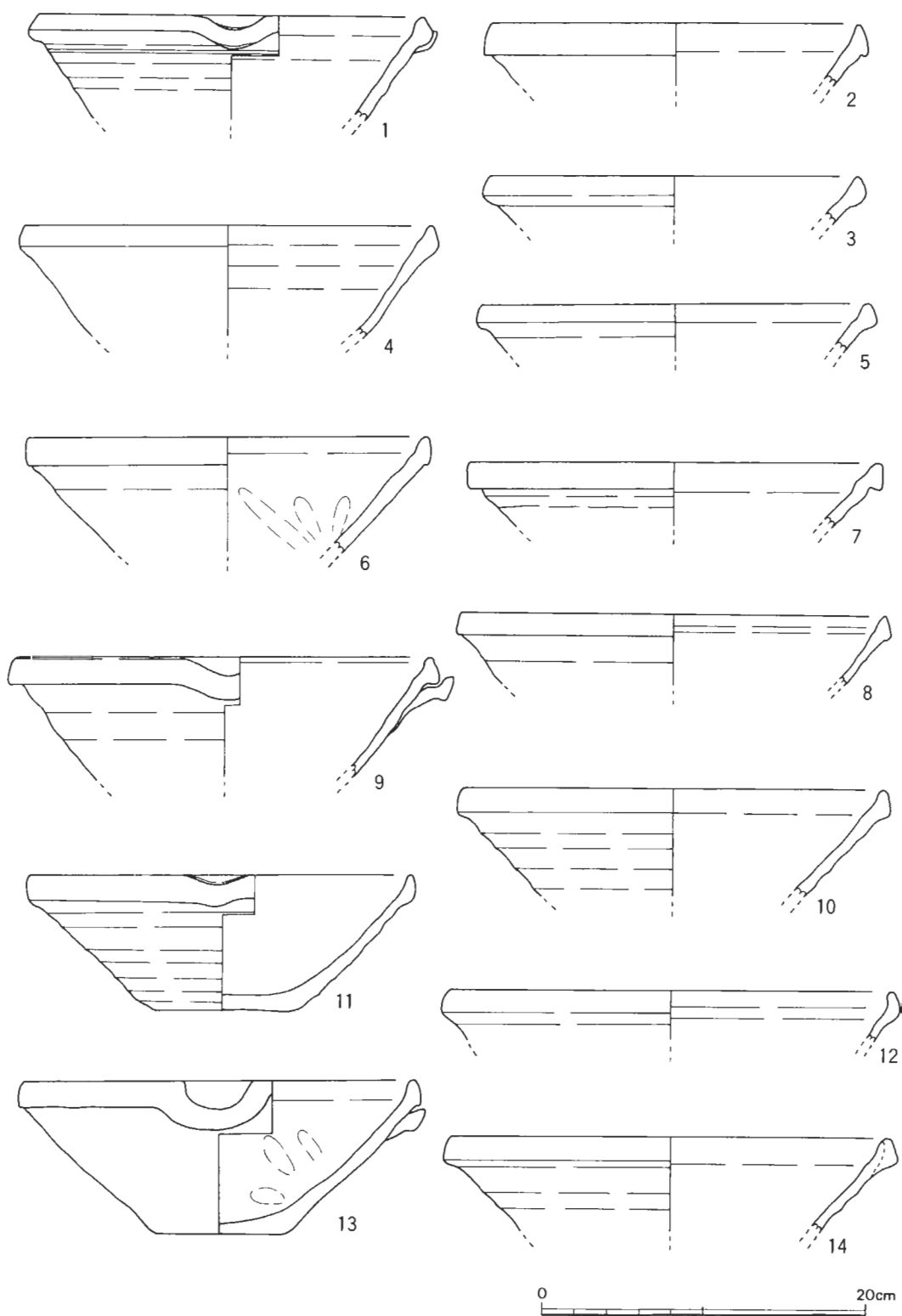
第 92 図 遺構外出土遺物(9)



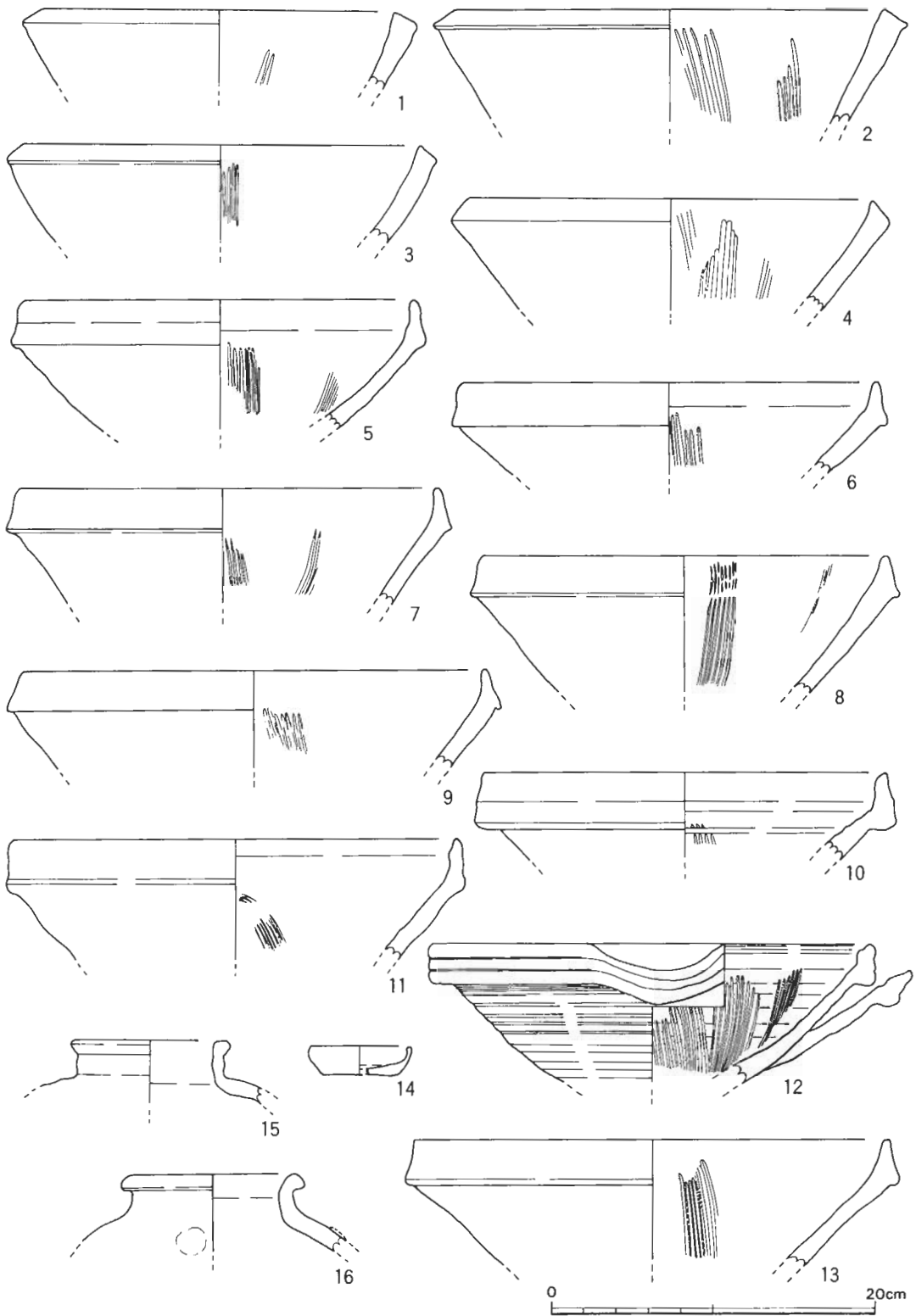
第 93 図 遺構外出土遺物(10)



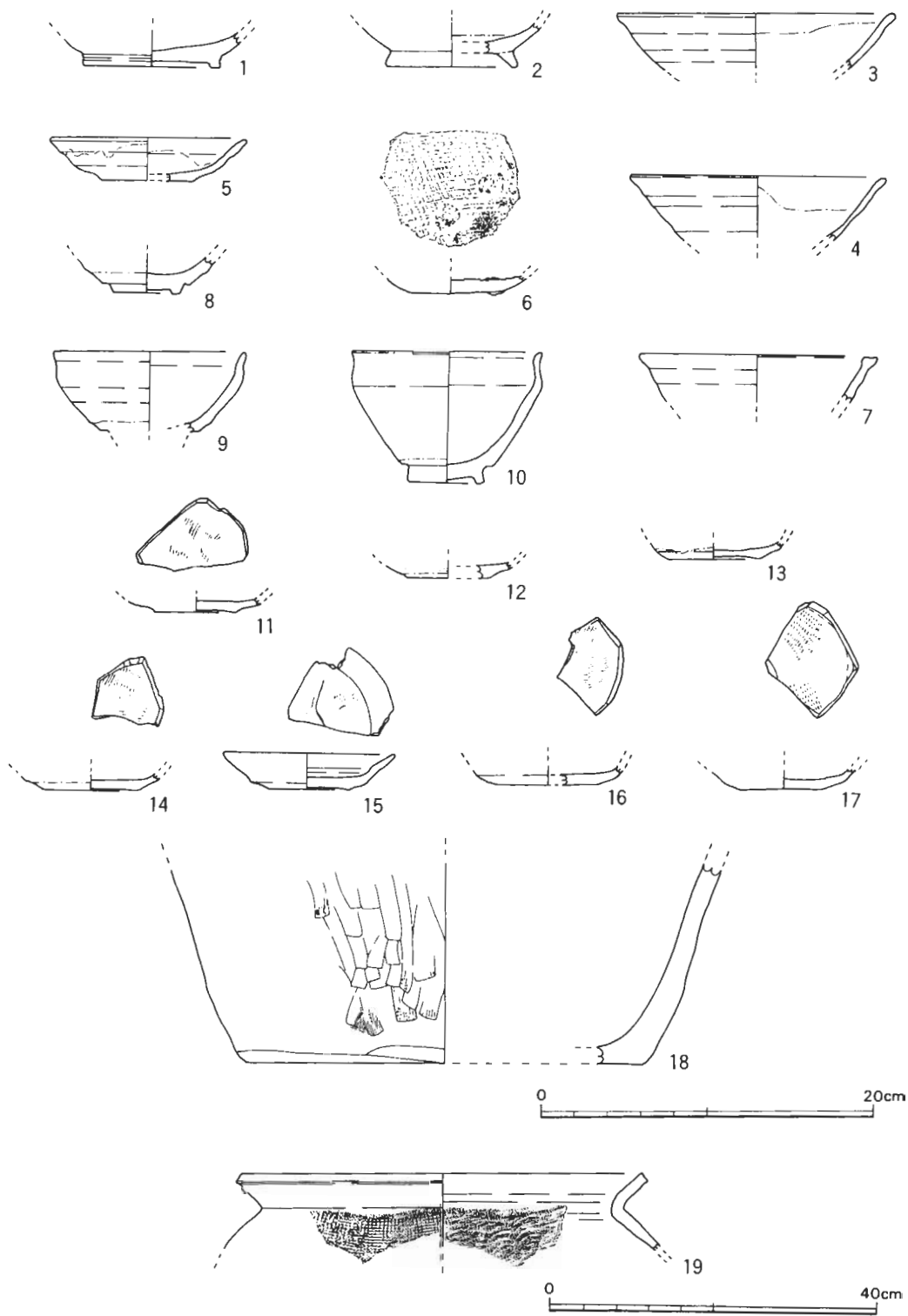
第 94 図 遺構外出土遺物(11)



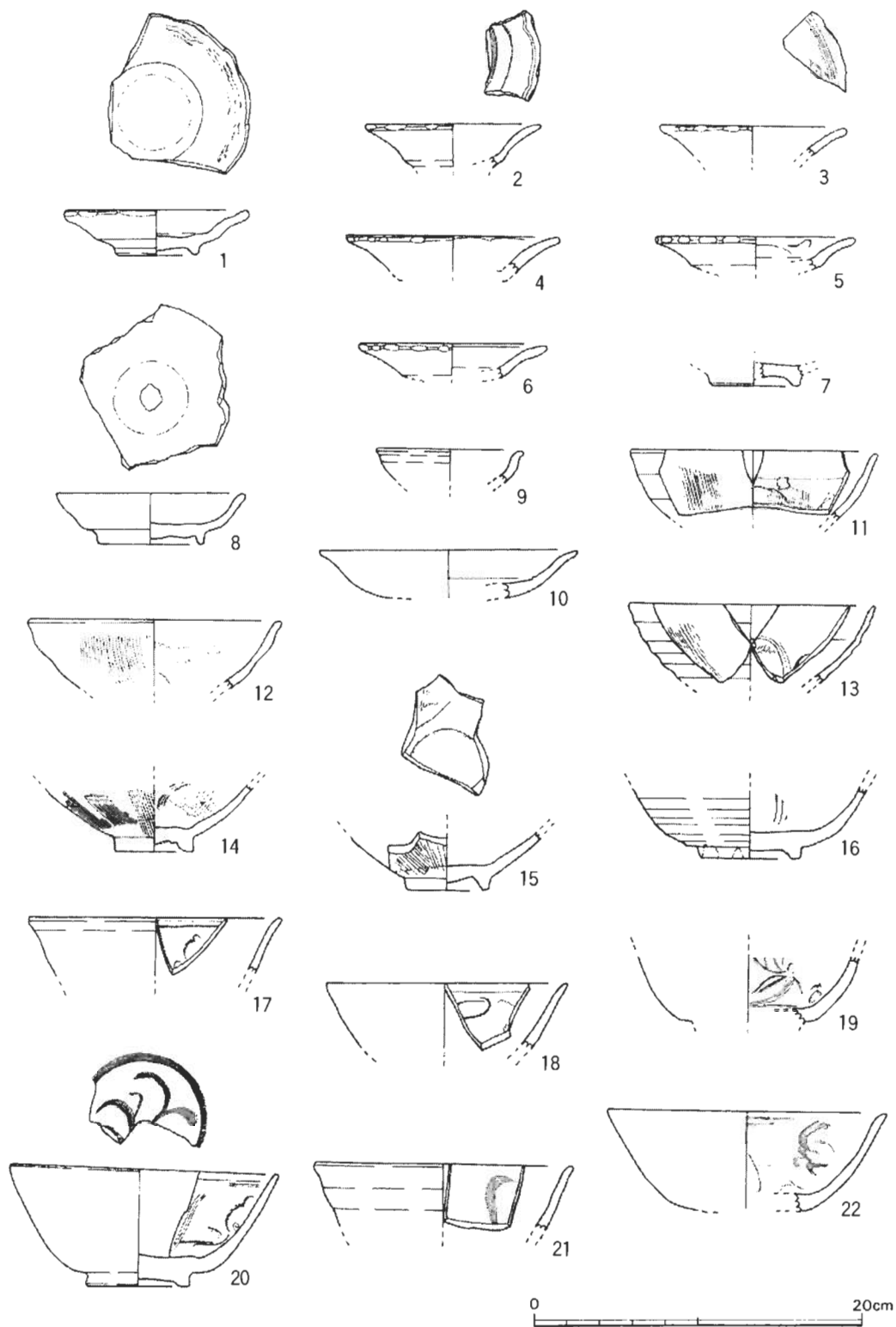
第 95 図 遺構外出土遺物(12)



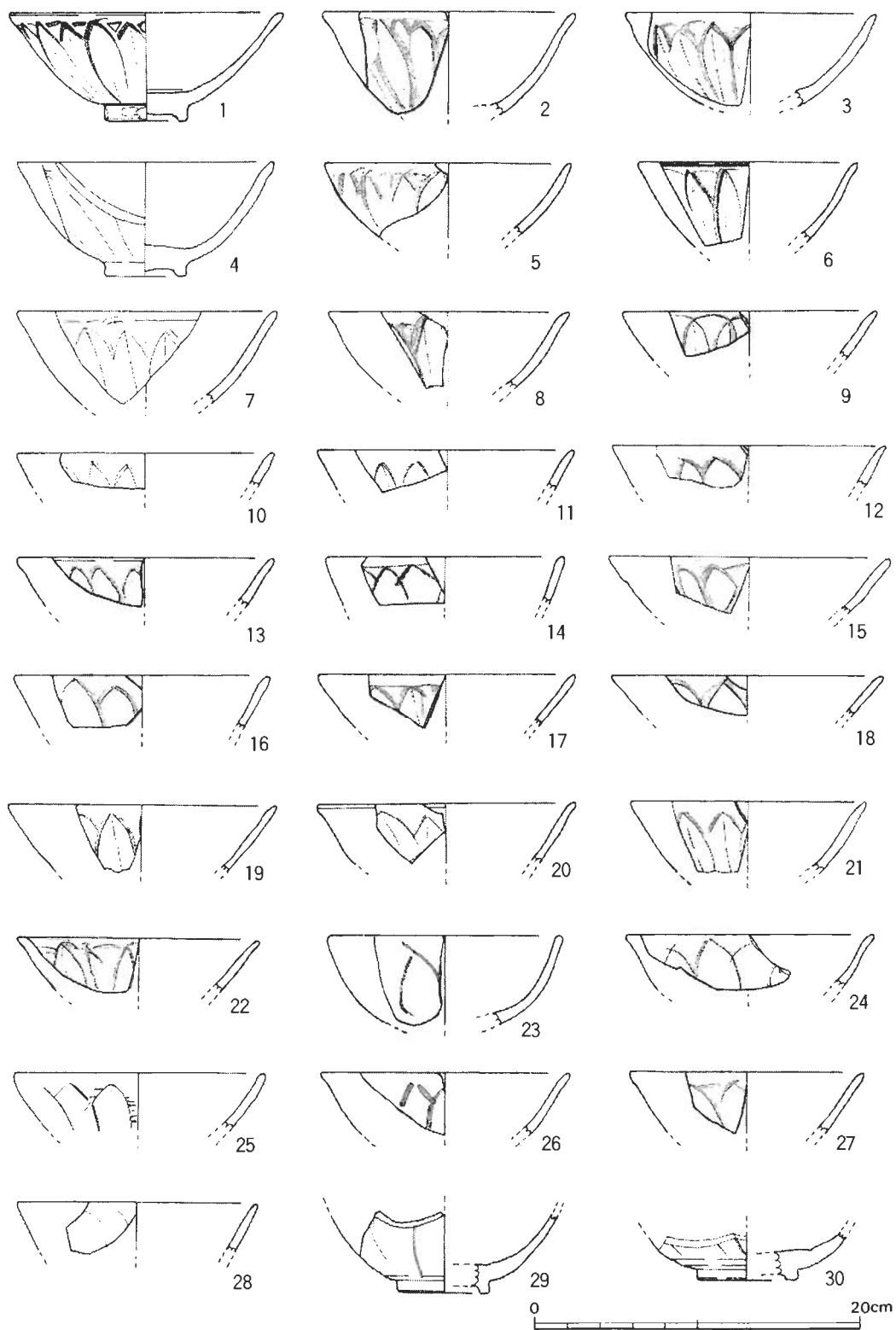
第96図 遺構外出土遺物(13)



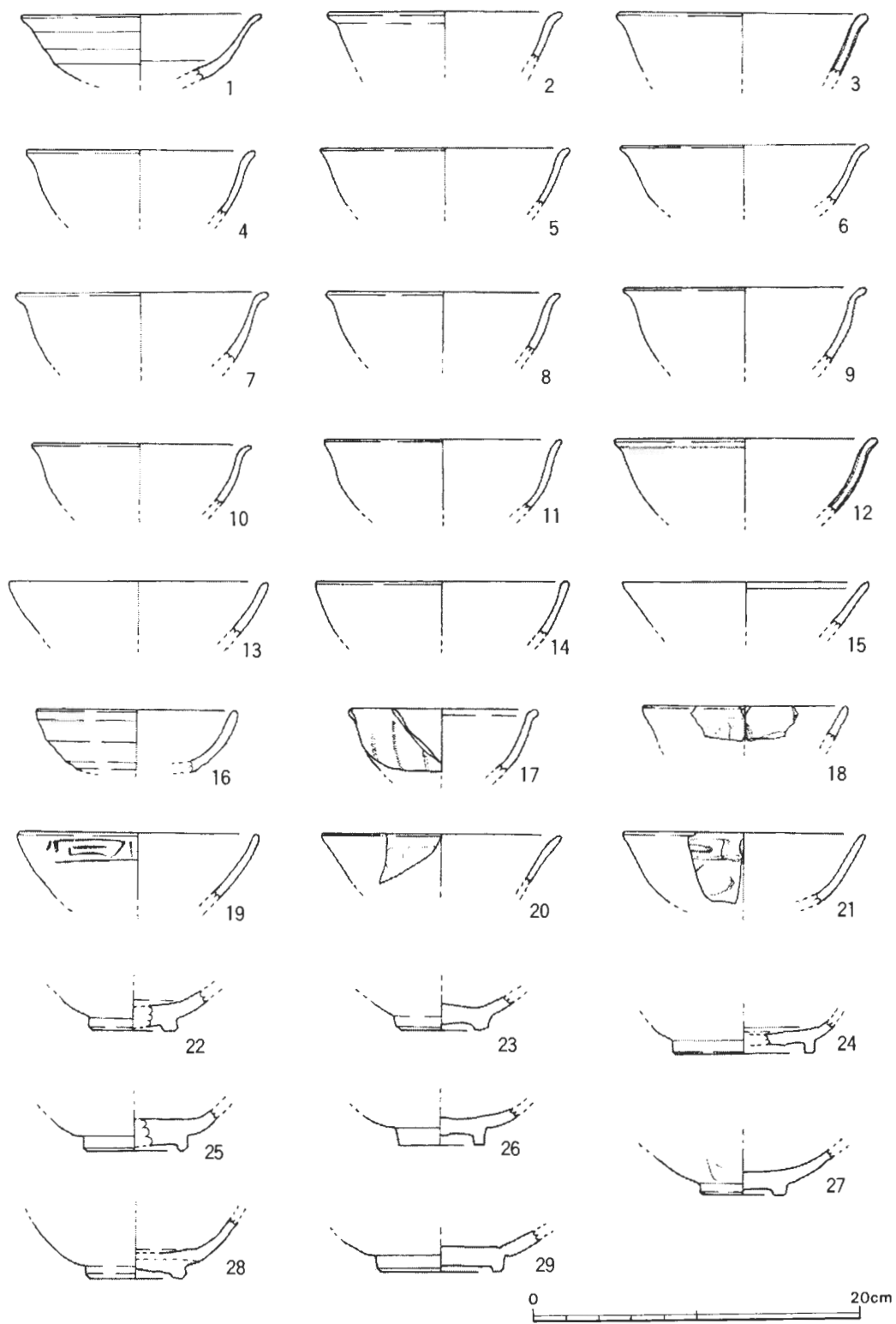
第 97 図 遺構外出土遺物(14)



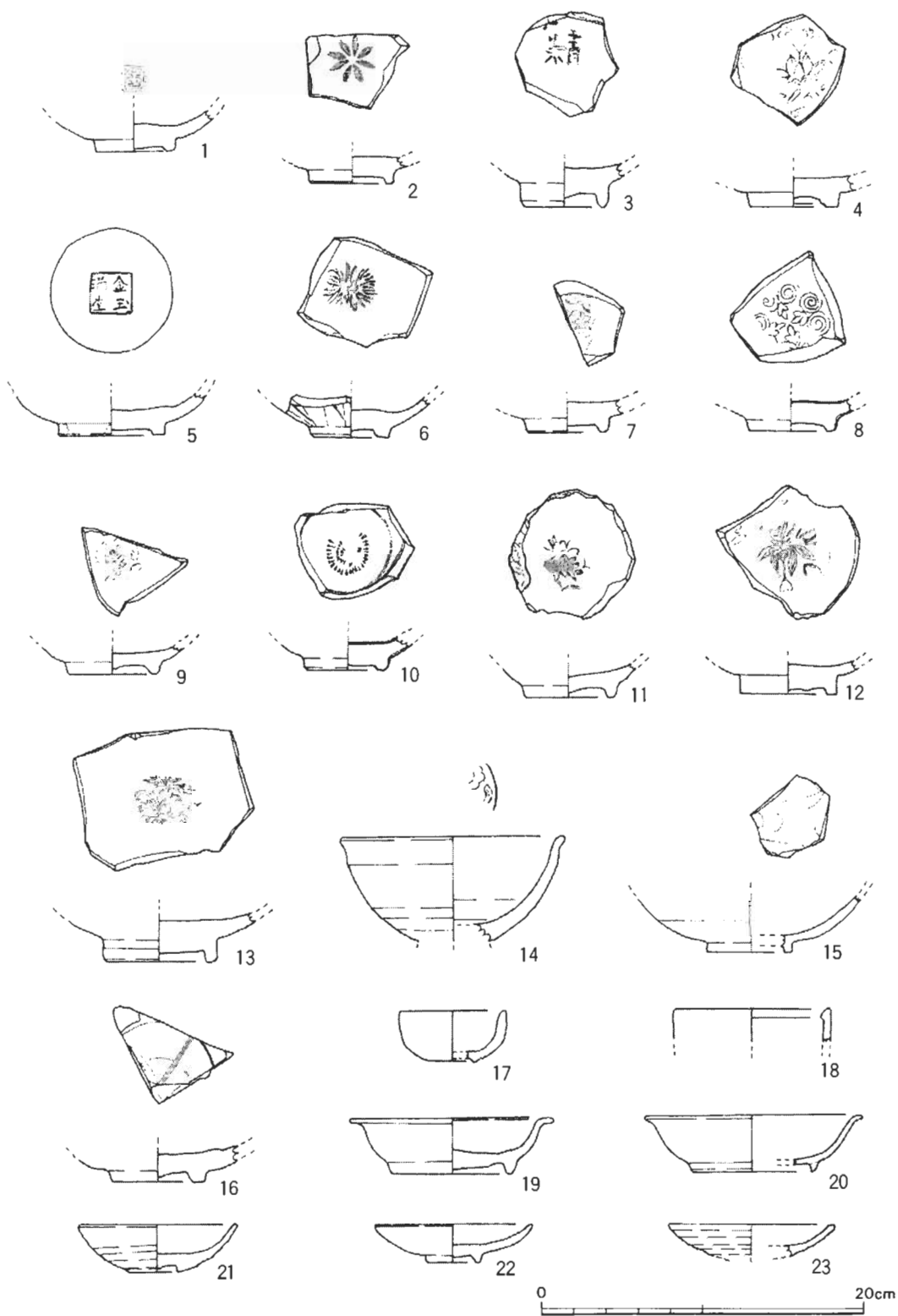
第 98 図 遺構外出土遺物(15)



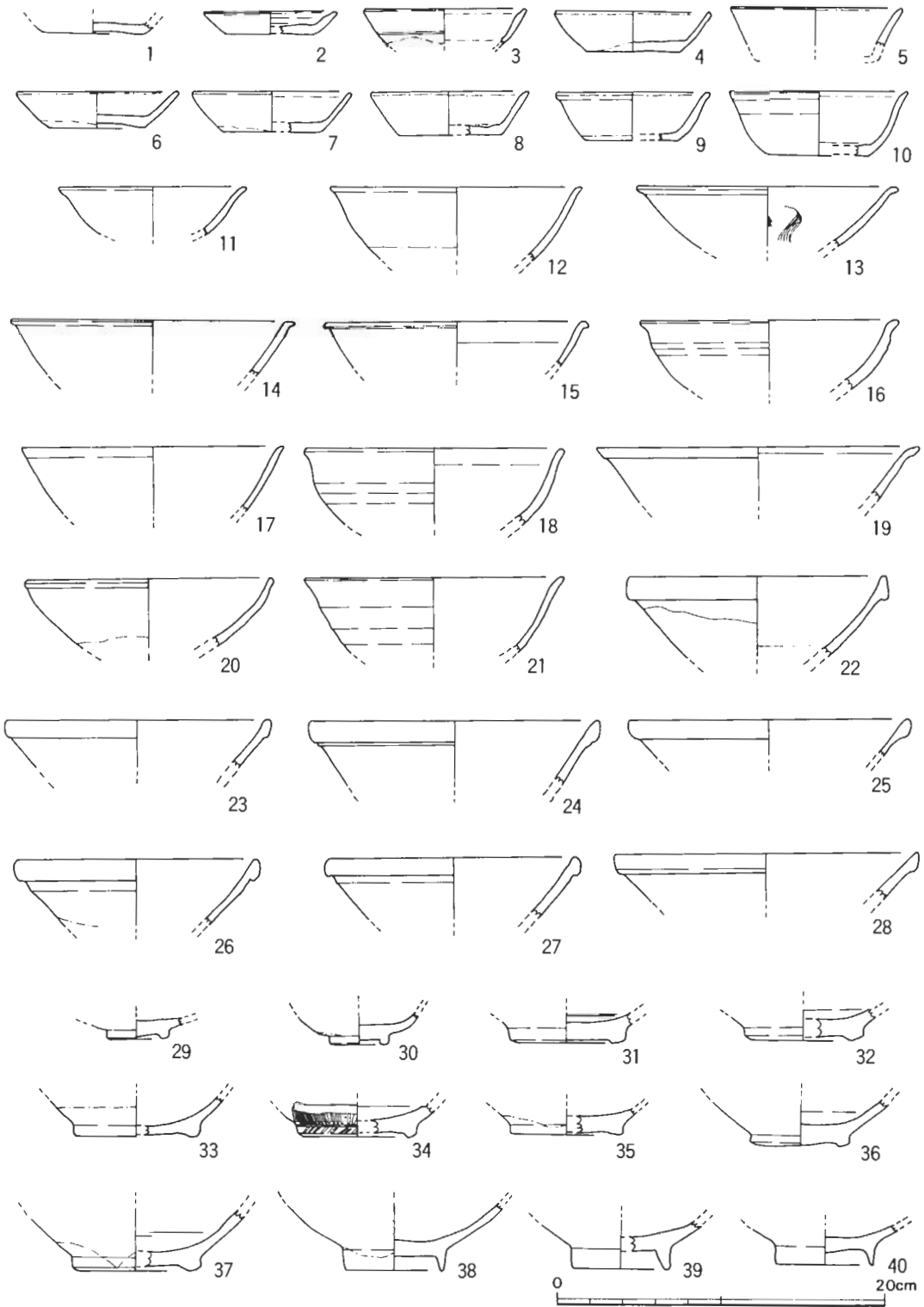
第 99 図 遺構外出土遺物(16)



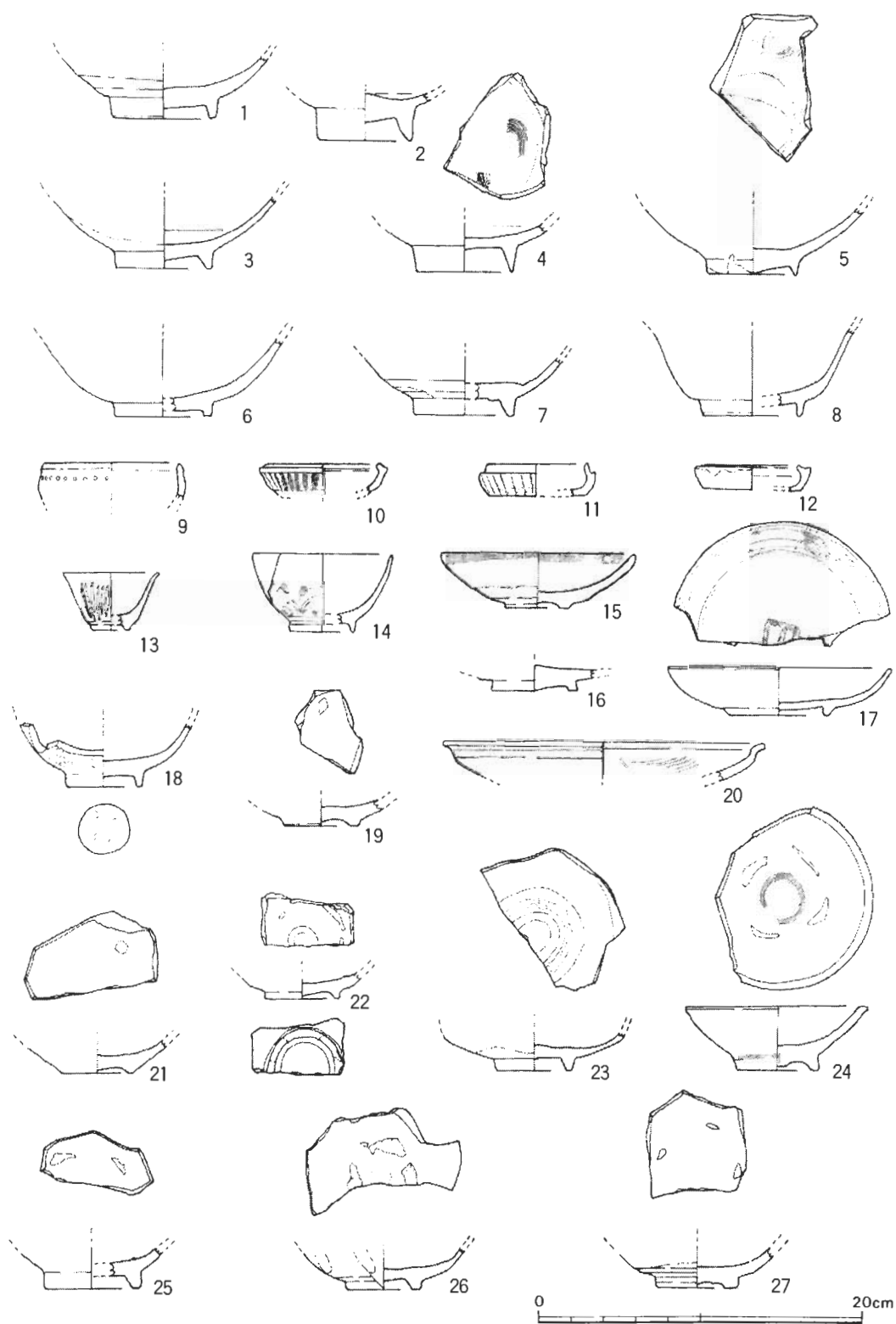
第100図 遺構外出土遺物(17)



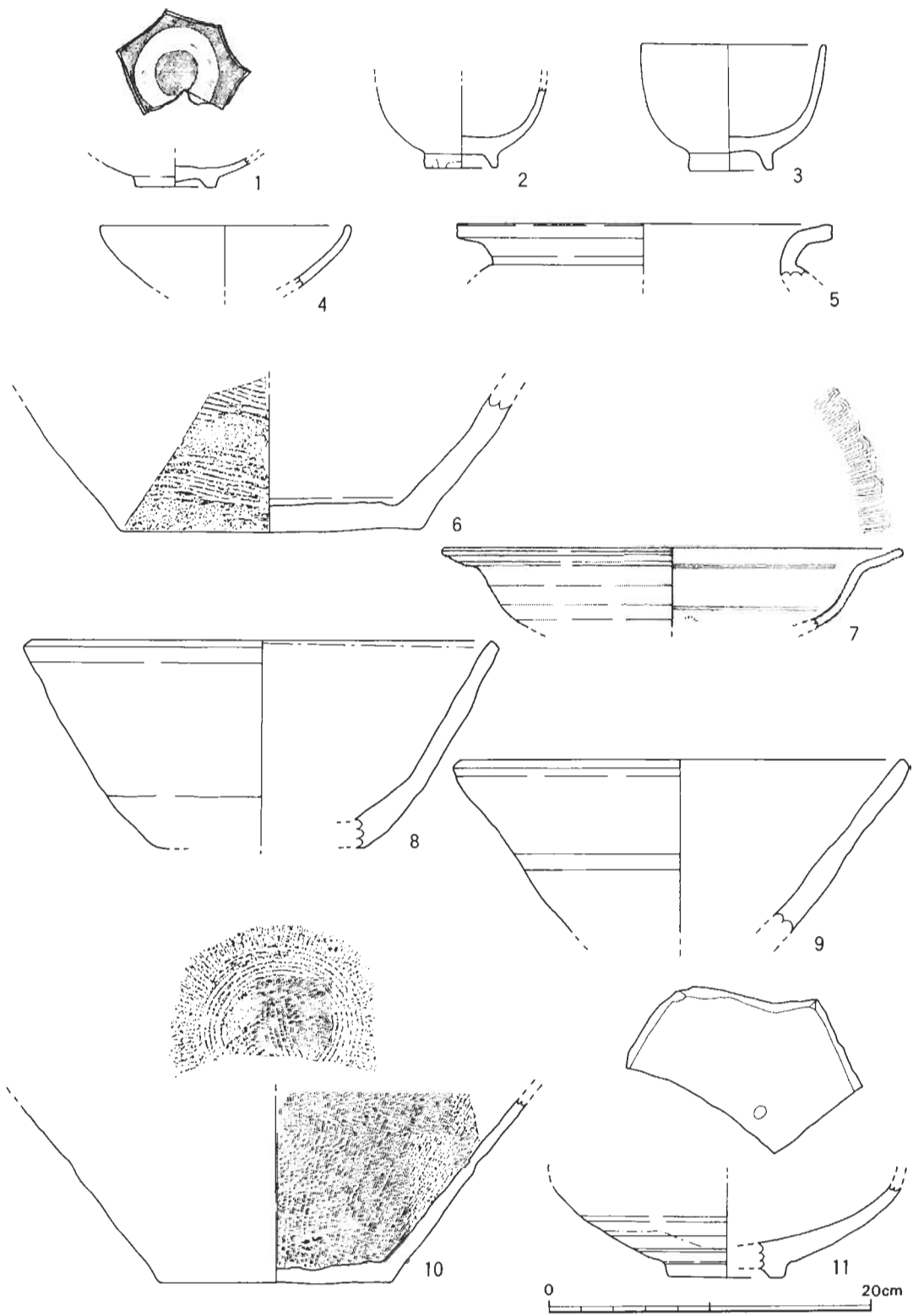
第101図 遺構外出土遺物(18)



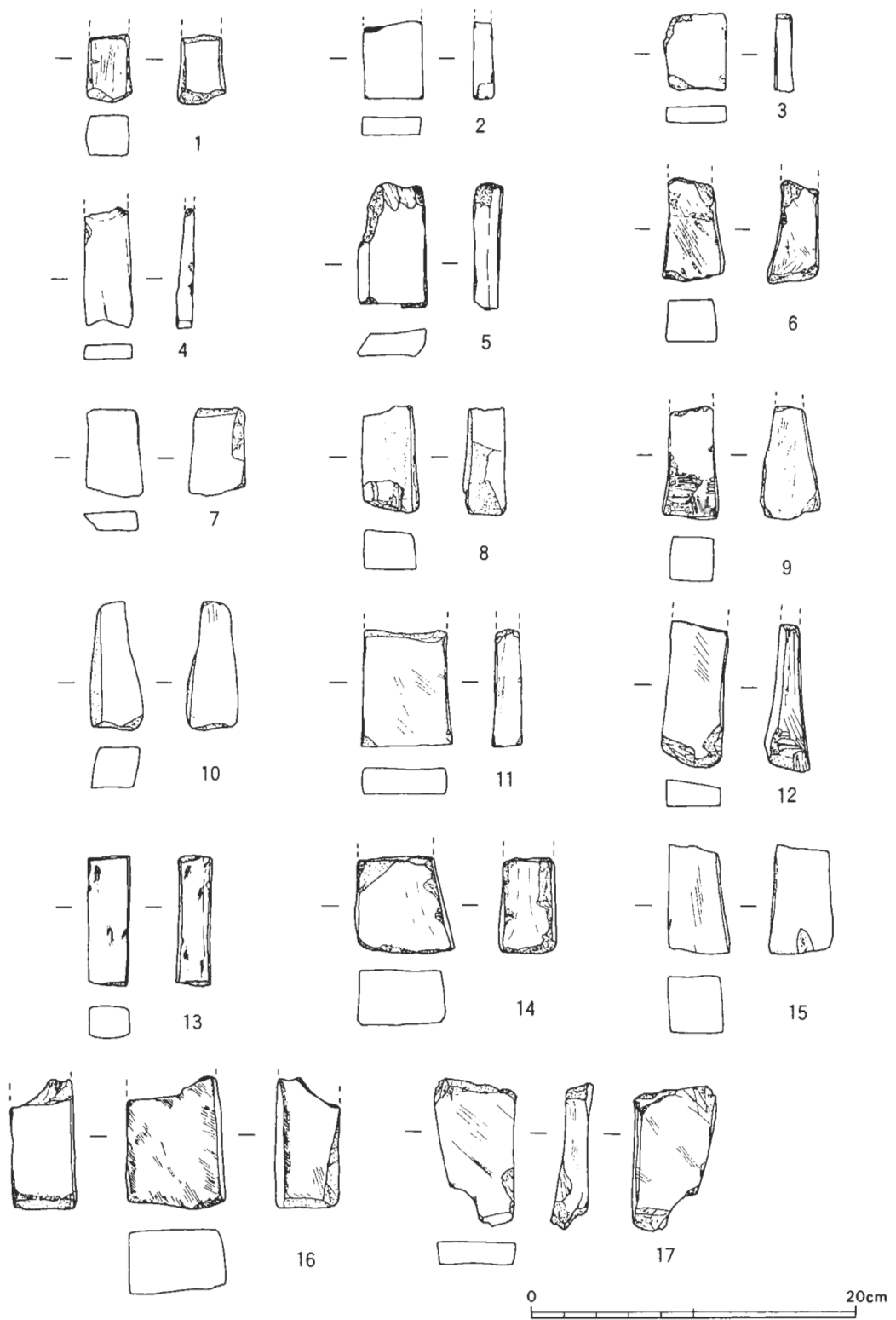
第102図 遺構外出土遺物(19)



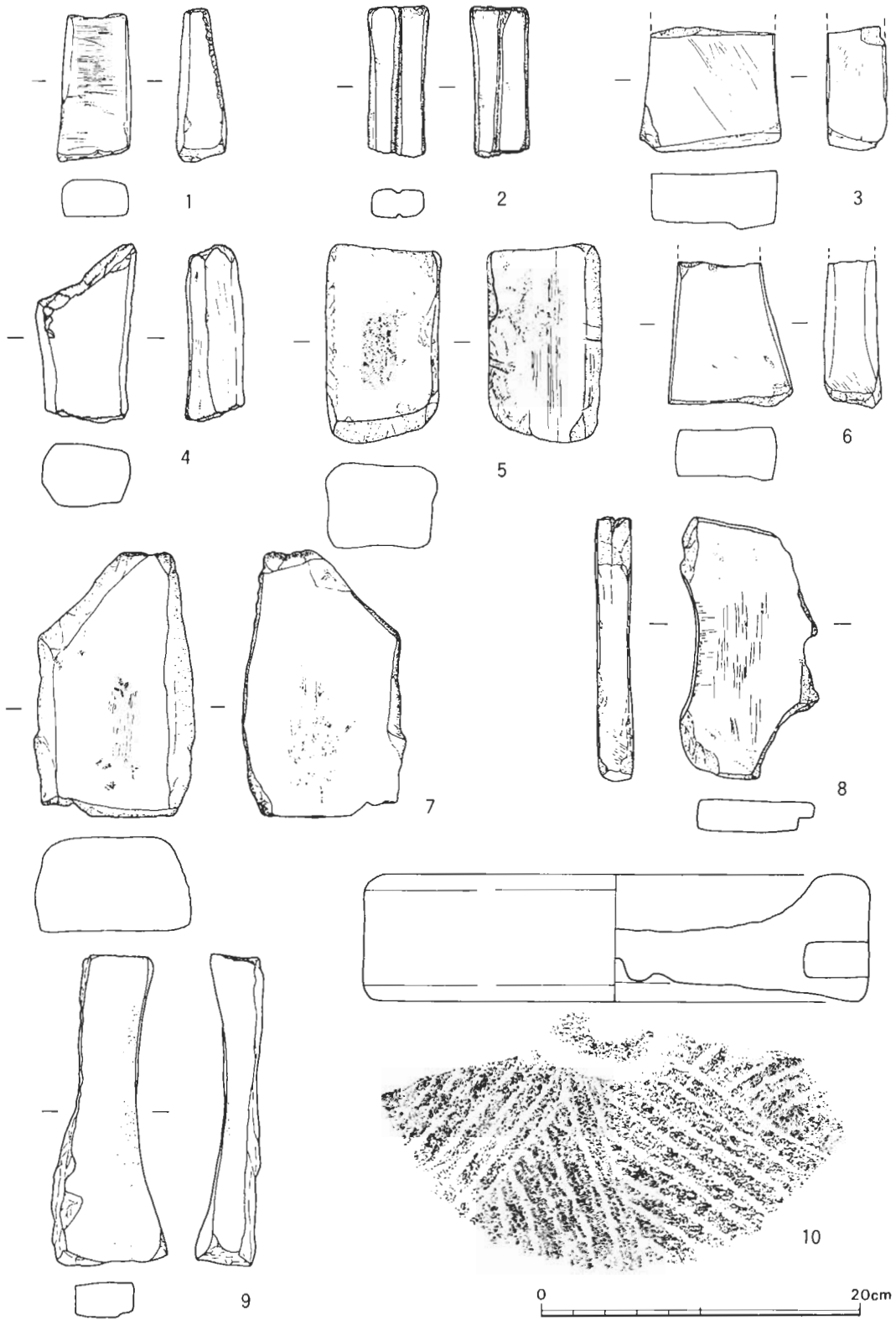
第103図 遺構外出土遺物(20)



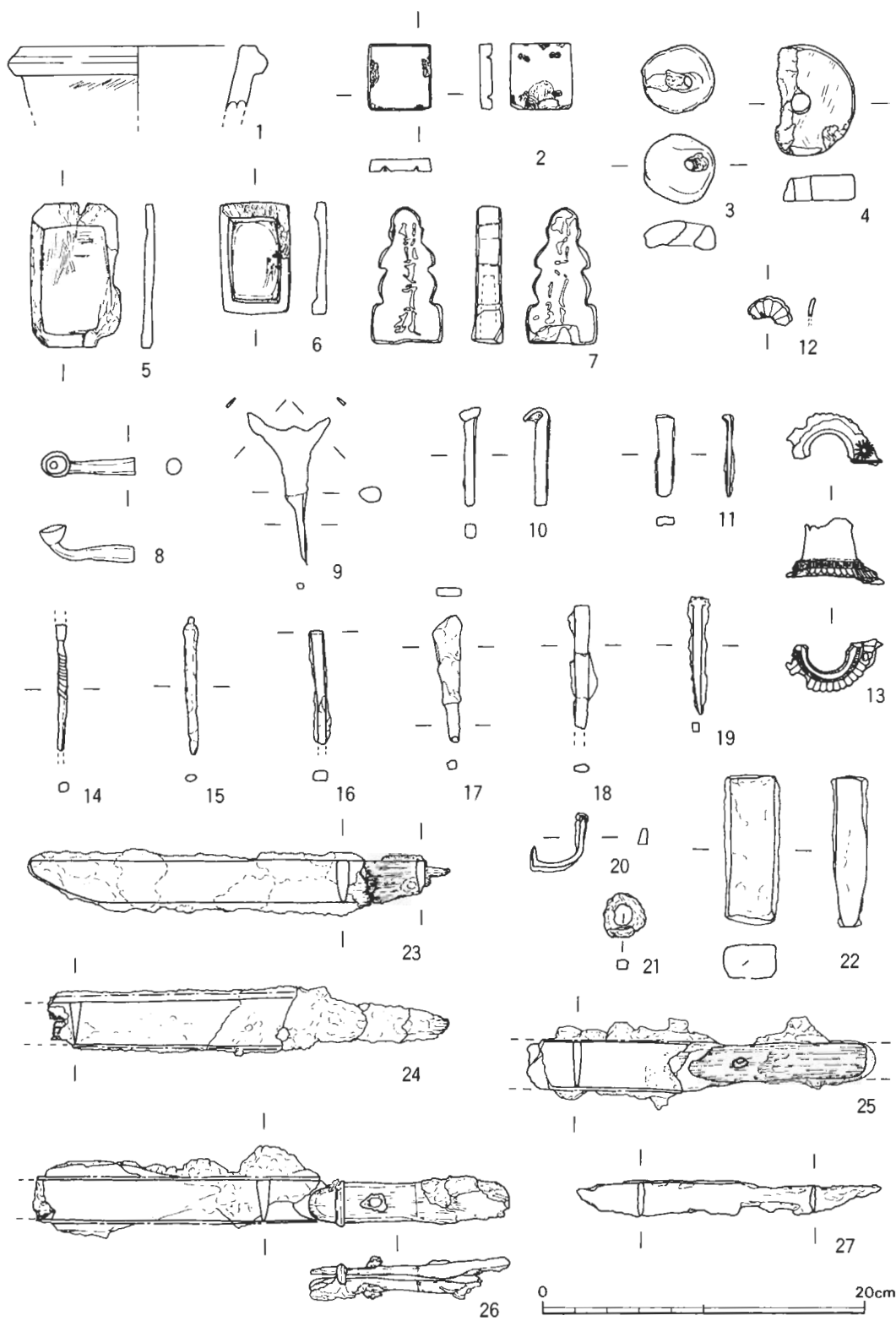
第 104 図 遺構外出土遺物(21)



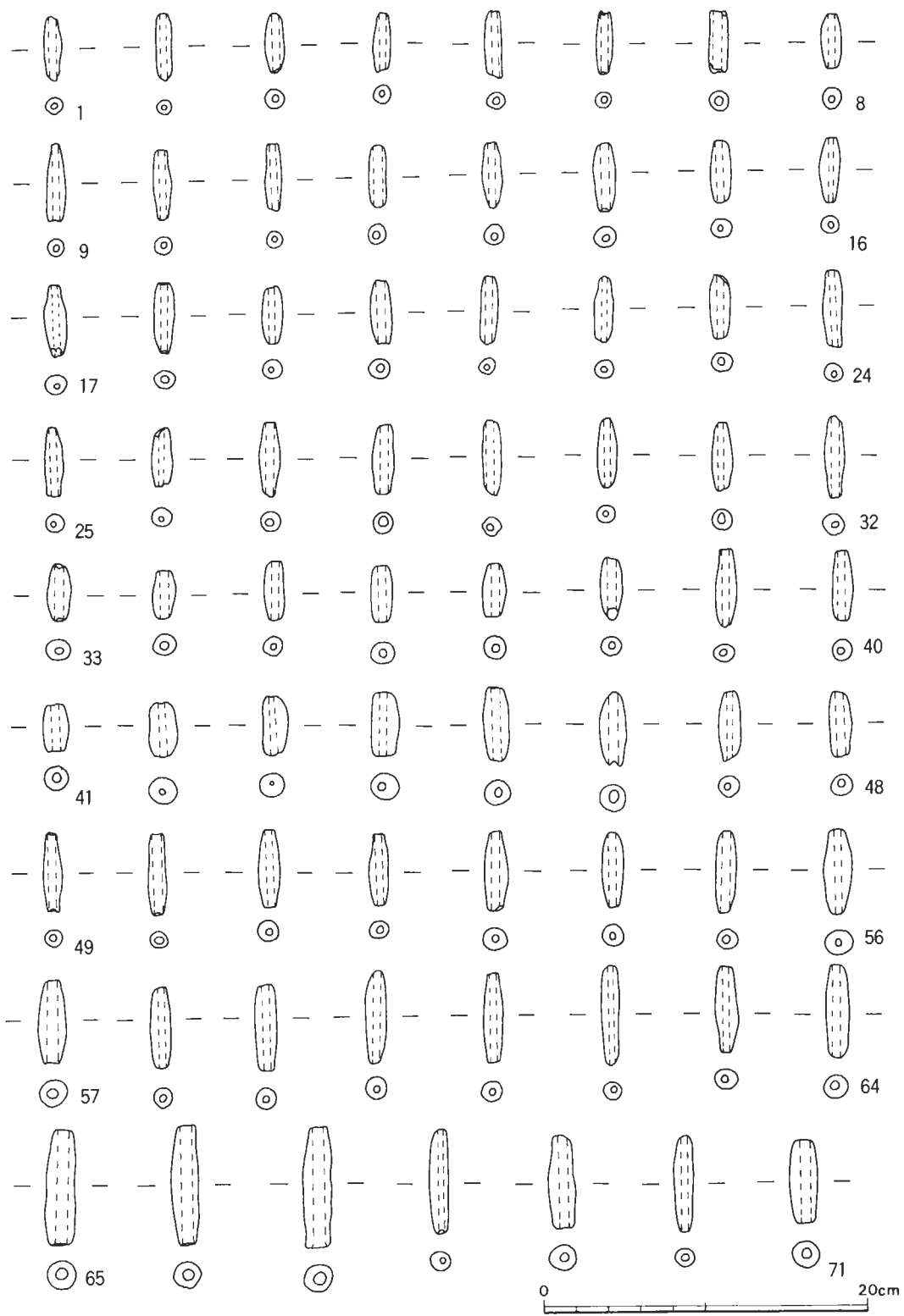
第 105 図 遺構外出土遺物(22)



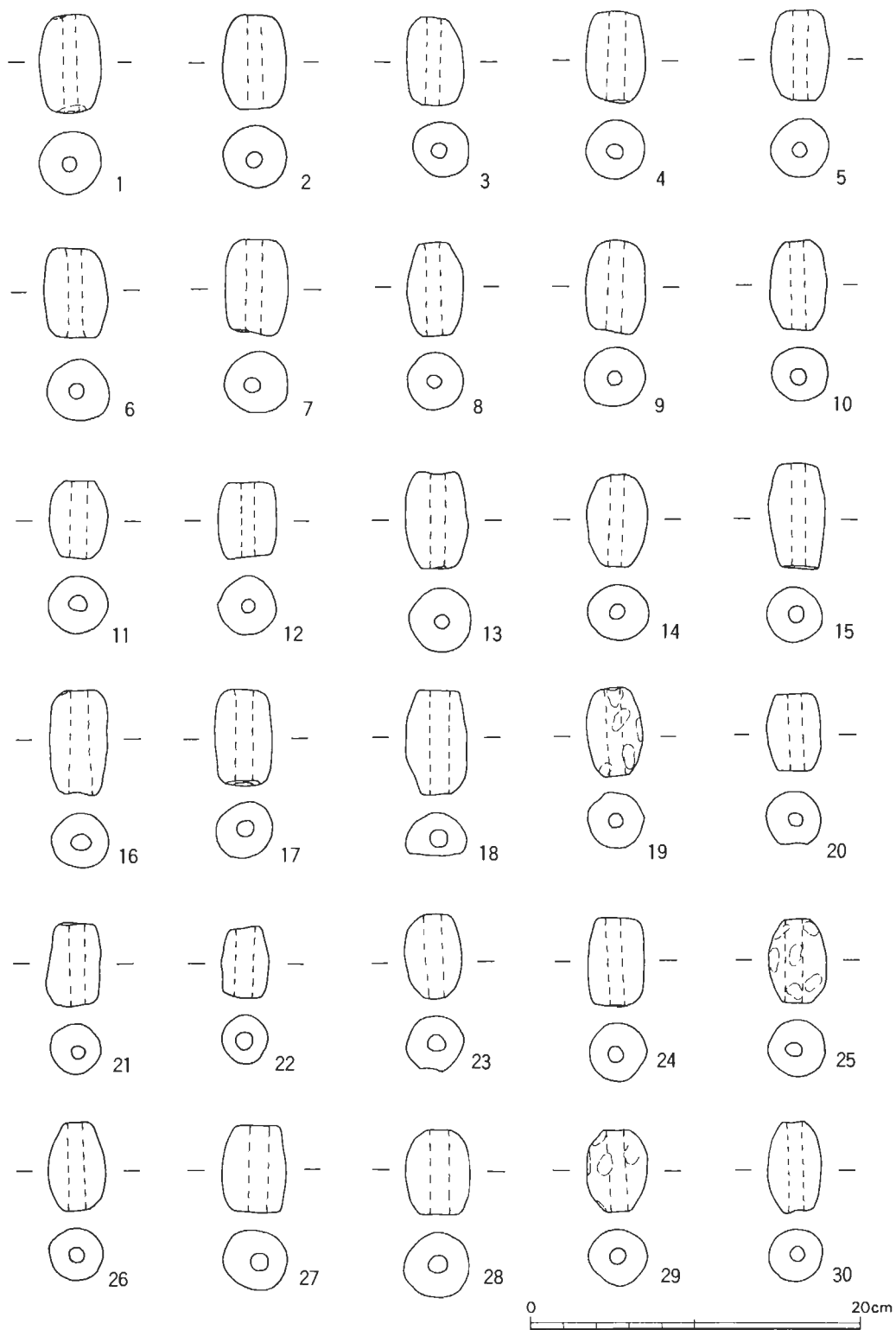
第106図 遺構外出土遺物(23)



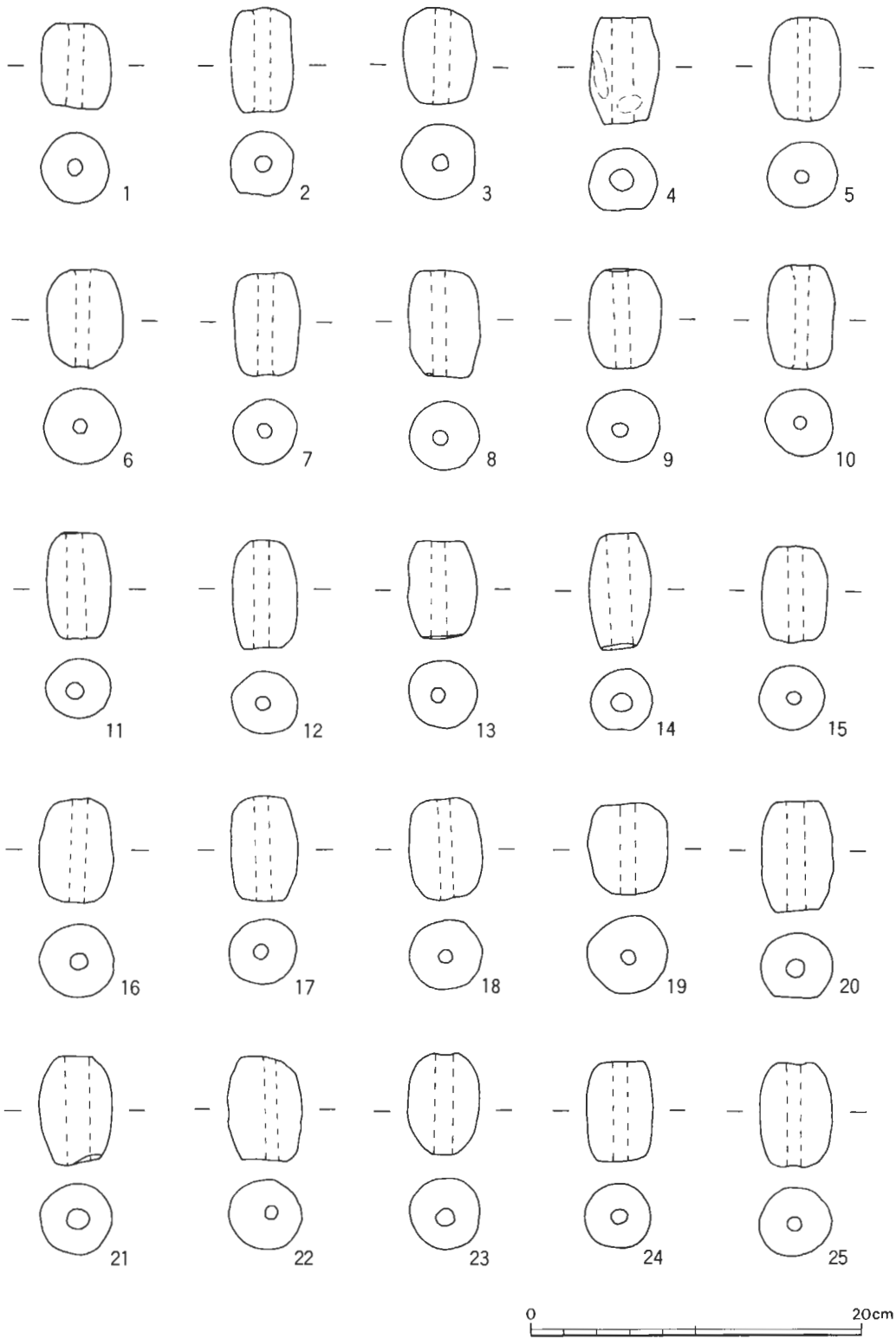
第107图 遺構外出土遺物(24)



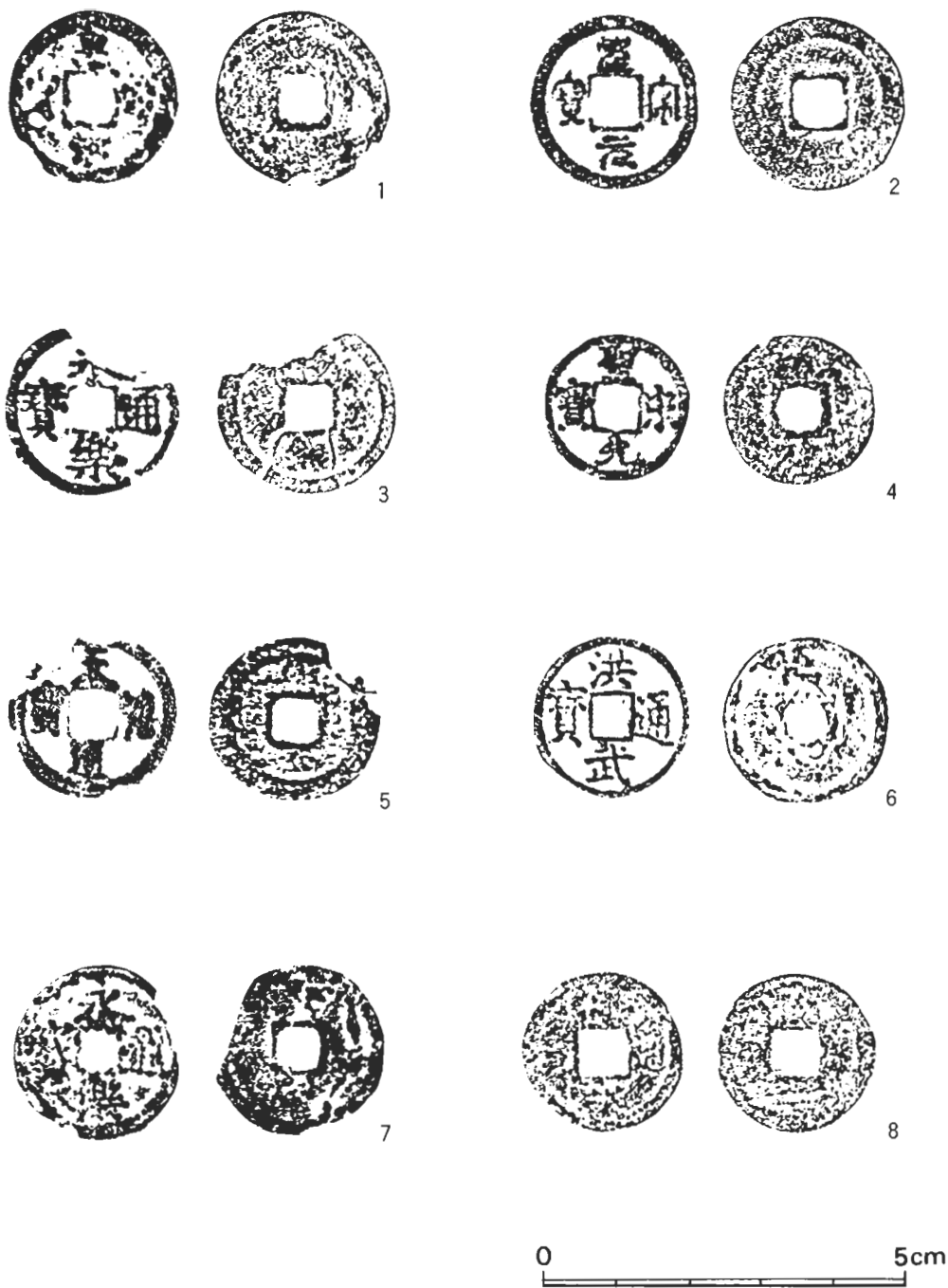
第 108 図 遺構外出土遺物(25)



第 109 図 遺構外出土遺物(26)



第110図 遺構外出土遺物(27)



第 111 圖 出土遺物

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
84 - 1	VI層	土師器 小皿	8.7 2.0 — 5.4	底部は平坦で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	外底は、ヘラ切り。	A-II-a類
◇ - 2	◇	◇ ◇	8.6 1.6 — 5.4	底部は平坦で、体部は短かく直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。器壁が厚い。	◇	◇
◇ - 3	◇	◇ ◇	8.5 2.2 — 6.5	底部は平坦で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	◇	◇
◇ - 4	IV層	◇ ◇	8.1 1.3 — 5.2	底部は平坦で、体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。底部が厚い。	外底は、ヘラ切り。回転台成形。	A-II-b類
◇ - 5	V層	◇ ◇	9.1 2.0 — 6.8	底部は平坦で、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	◇	A-I-a類
◇ - 6	VI層	◇ ◇	9.2 2.0 — 6.3	◇	◇	◇
◇ - 7	V層	◇ ◇	9.2 1.3 — 6.4	平坦な底部から屈曲して体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く収める。	◇	◇
◇ - 8	VI層	◇ ◇	9.4 1.9 — 6.2	底部の器壁は厚く、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	◇	◇
◇ - 9	◇	◇ ◇	9.0 2.2 — 6.4	平坦な底部から屈曲して体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く収める。	◇	◇
◇ - 10	◇	◇ ◇	9.6 2.1 — 7.8	底部の器壁は厚く平坦で、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	◇	◇
◇ - 11	V層	◇ ◇	9.7 1.8 — 6.9	平坦な底部から屈曲して体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	◇	◇
◇ - 12	IV層	◇ ◇	9.6 2.2 — 7.9	底部は平坦で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	◇	◇
◇ - 13	V層	◇ ◇	9.1 2.1 — 6.8	◇	◇	◇
◇ - 14	VI層	◇ ◇	9.2 2.3 — 7.0	◇	◇	◇
◇ - 15	◇	◇ ◇	9.0 2.9 — 6.8	器壁が厚く平坦な底部から屈曲して体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸く収める。	◇	◇
◇ - 16	VI層	◇ ◇	5.8 1.4 — 4.8	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	外底は、回転糸切り。	B-V-a類

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手 法	備 考
84-17	V層	土師器 小皿		5.8 1.2 — 3.4	平坦な底部から、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	外底は、回転糸切り。	B-V-b類
◇-18	◇	◇ ◇		5.7 1.2 — 3.8	平坦な底部から、体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	見込みはナデ、他は回転ナデ調整。外底は糸切り後、平行圧痕が認められる。	◇
◇-19	IV層	◇ ◇		6.2 1.2 — 4.6	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	外底は回転糸切り。回転台成形。	B-IV-a類
◇-20	V層	◇ ◇		6.7 1.5 — 5.2	平坦な底部から、体部は短かく直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	◇	◇
◇-21	◇	◇ ◇		6.6 1.5 — 5.2	◇	◇	◇
◇-22	◇	◇ ◇		6.8 1.3 — 4.6	底部の器壁は薄く平坦で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	◇	◇
◇-23	III層	◇ ◇		6.4 1.4 — 4.0	平坦な底部から、体部は短かく直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	◇	◇
◇-24	V層	◇ ◇		6.5 1.5 — 4.9	底部の器壁は厚く平坦で、体部は短かく直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	◇	◇
◇-25	◇	◇ ◇		6.6 1.8 — 5.0	平坦な底部から、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	◇	◇
◇-26	◇	◇ ◇		6.5 1.3 — 4.4	◇	◇	◇
◇-27	◇	◇ ◇		6.0 2.1 — 5.8	平坦な底部から屈曲して、体部は直線的に上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	◇	◇
◇-28	◇	◇ ◇		6.2 1.0 — 4.0	平坦な底部から、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	◇	B-IV-b類
◇-29	◇	◇ ◇		6.2 1.5 — 5.2	◇	◇	◇
◇-30		◇ ◇		6.8 1.2 — 4.0	平坦な底部から、体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	◇	◇
◇-31	V層	◇ ◇		6.6 1.4 — 4.2	◇	◇	◇
◇-32	◇	◇ ◇		6.8 1.6 — 5.2	◇	◇	◇

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
84-33	V層	土師器 小皿	7.0 1.6 — 5.2	平坦な底部から、体部は短かく直線的に外上方へ立ち上がる。 口縁部はやや外反する。	外底は回転系切り、回転台成形。	B-III-a類
◇-34	◇	◇ ◇	7.0 1.8 — 5.6	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	◇	◇
◇-35	◇	◇ ◇	7.0 1.8 — 5.2	◇	◇	◇
◇-36	◇	◇ ◇	7.0 1.5 — 5.2	◇	◇	◇
◇-37	◇	◇ ◇	7.0 1.8 — 4.8	◇	◇	◇
◇-38	◇	◇ ◇	7.2 1.8 — 5.5	器壁が厚く平坦な底部から、体部は短かく外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	外底は回転系切り後、板状圧痕がつく。回転台成形。	◇
◇-39	◇	◇ ◇	7.0 1.5 — 4.8	◇	外底は回転系切り。回転台成形。	◇
◇-40	◇	◇ ◇	7.2 1.7 — 5.0	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	◇	◇
◇-41	◇	◇ ◇	7.0 1.5 — 5.8	◇	◇	◇
◇-42	◇	◇ ◇	7.2 1.5 — 4.7	平坦な底部から、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	◇	B-III-b類
◇-43	◇	◇ ◇	7.0 1.8 — 5.6	◇	◇	◇
◇-44	◇	◇ ◇	7.0 1.8 — 5.2	◇	◇	◇
◇-45	◇	◇ ◇	7.9 1.9 — 6.1	◇	◇	◇
◇-46	◇	◇ ◇	7.8 1.6 — 4.3	平坦な底部から屈曲して、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	◇	B-III-c類
◇-47	◇	◇ ◇	7.0 1.6 — 5.2	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部はやや外反する。	◇	◇
◇-48	◇	◇ ◇	7.6 1.2 — 4.4	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。	◇	◇

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
84-49	V層	土師器 小皿	7.5 1.3 — 4.6	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。	外底は回転糸切り、回転台成形。	B-III-c類
〃-50	〃	〃 〃	8.2 1.4 — 5.8	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	〃	B-II-a類
〃-51	〃	〃 〃	8.1 1.7 — 5.4	〃	〃	〃
〃-52	VI層	〃 〃	8.0 1.2 — 6.0	平坦な底部から、体部は短かく直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	〃	〃
〃-53	V層	〃 〃	8.4 1.3 — 7.6	器壁が厚く平坦な底部から、体部は短かく直線的に立ち上がり、口縁部にいたる。	〃	〃
〃-54	〃	〃 〃	8.0 1.5 — 5.8	上げ底気味な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	〃	〃
〃-55	VI層	〃 〃	8.0 1.6 — 4.8	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	外底は、回転糸切り。	〃
〃-56	〃	〃 〃	8.0 1.2 — 6.0	平坦な底部から、体部は短かく直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	〃	〃
〃-57	〃	〃 〃	8.8 1.7 — 6.6	平坦な底部から、体部は外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。	〃	B-II-c類
〃-58	〃	〃 〃	9.3 1.7 — 6.4	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	〃	B-I-a類
〃-59	〃	〃 〃	9.7 1.9 — 6.4	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。端部は丸くおさめる。	〃	〃
〃-60	〃	〃 〃	9.3 1.6 — 6.3	〃	〃	〃
〃-61	V層	〃 〃	9.0 1.4 — 6.6	〃	〃	〃
〃-62	III層	〃 〃	9.4 2.1 — 4.4	平坦な底部から、体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	回転台成形であるが、全体的に磨耗して調整は不明。	B-1-b類
〃-63	V層	〃 〃	4.8 1.2 — 3.0	平坦な底部から、やや内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	外底は板杖圧痕が残る。	C-VI-b類
〃-64	〃	〃 〃	5.8 1.2 — 4.5	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。	外底は磨耗が著しく不明。回転台成形。	C-V-a類

挿入番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
84 - 65	V層	土師器 小皿	5.6 1.0 — 3.4	平坦な底部から、体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	全体的に磨耗して不明。	C-V-b類
〃 - 66	〃	〃 〃	3.6 1.4 — 3.6	〃	〃	〃
〃 - 67	〃	〃 〃	6.0 1.6 — 3.6	平坦な底部から、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。	回転台成形であるが、底部外面は磨耗して不明。	C-IV-a類
〃 - 68	III層	〃 〃	6.4 1.3 — 4.0	平坦な底部から、大きく開いて外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	全体的に磨耗が著しく不明。	〃
〃 - 69	V層	〃 〃	6.2 1.4 — 4.6	平坦な底部から、体部は短かく直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	〃	〃
〃 - 70	V層下	〃 〃	6.3 1.4 — 3.0	〃	〃	〃
〃 - 71	〃	〃 〃	6.4 1.5 — 4.2	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	〃	〃
〃 - 72	V層	〃 〃	6.6 1.5 — 4.7	〃	〃	〃
〃 - 73	〃	〃 〃	6.7 1.3 — 5.0	〃	全体的に磨耗して不明である。	〃
〃 - 74	〃	〃 〃	6.8 1.6 — 4.5	〃	全体的に磨耗しているが、外底に板状圧痕のみ確認できる。	〃
〃 - 75	III層	〃 〃	6.6 1.3 — 5.0	〃	全体的に磨耗して不明である。	〃
〃 - 76	V層	〃 〃	6.7 1.8 — 5.2	器壁は厚く平坦な底部から、体部は短かく直線的に立ち上がる。	〃	〃
〃 - 77	〃	〃 〃	6.8 1.5 — 5.0	〃	〃	〃
〃 - 78	V層下	〃 〃	6.8 1.9 — 5.6	〃	〃	〃
〃 - 79	V層	〃 〃	6.4 1.5 — 4.2	平坦な底部から、体部は内湾して外上方に立ち上がり口縁部にいたる。	〃	C-IV-b類
〃 - 80	〃	〃 〃	6.2 2.1 — 3.4	平坦な底部から、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	〃	〃

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
84 - 81	V層	土師器 小皿	6.2 1.4 — 4.1	平坦な底部から、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	全体的に磨耗して不明である。	C-IV-b類
◇ - 82	◇	◇ ◇	6.7 1.7 — 4.8	◇	◇	◇
◇ - 83	◇	◇ ◇	6.5 1.4 — 4.0	底部は丸みがあり、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	◇	◇
◇ - 84	V層下	◇ ◇	7.0 1.4 — 5.4	平坦な底部から、体部は短かく直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	◇	C-III-a類
◇ - 85	III層	◇ ◇	7.0 1.4 — 4.4	◇	◇	◇
◇ - 86	V層	◇ ◇	7.0 1.8 — 5.7	◇	◇	◇
◇ - 87	◇	◇ ◇	7.2 1.5 — 5.8	◇	◇	◇
◇ - 88	◇	◇ ◇	7.0 1.6 — 5.0	◇	◇	◇
◇ - 89	◇	◇ ◇	7.6 1.4 — 5.0	◇	◇	◇
◇ - 90	◇	◇ ◇	7.0 1.7 — 5.8	◇	◇	◇
◇ - 91	◇	◇ ◇	7.0 1.6 — 4.8	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	回転台成形であるが、磨耗が著しく不明。	◇
◇ - 92	◇	◇ ◇	7.6 1.4 — 5.6	平坦な底部から、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	全体的に磨耗して不明。	◇
85 - 1	◇	◇ ◇	7.0 1.4 — 4.6	やや上げ底気味の底部から、体部は内湾して外上方に立ち上がる。	回転台成形。内外面にロクロ痕が残る。	C-III-b類
◇ - 2	◇	◇ ◇	7.4 1.6 — 4.9	器壁の厚い底部で、体部は内湾して外上方に立ち上がる。	全体的に磨耗して不明。	◇
◇ - 3	◇	◇ ◇	7.2 1.6 — 5.3	平坦な底部から、体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。	回転台成形。外底は回転糸切りであるが、磨耗して不明。	◇
◇ - 4	VI層	◇ ◇	7.5 1.4 — 4.3	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。	全体的に磨耗して不明。	C-III-c類

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
85-5	V層	土師器 小皿		7.8 1.8 — 4.2	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。	全体的に磨耗して不明。	C-III-c類
ク-6	III層	ク ク		8.6 1.6 — 5.6	平坦な底部から、大きく直線的に開いて立ち上がる。	回転台成形で、外底は磨耗して不明。	C-II-a類
ク-7	VI層	ク ク		8.4 1.5 — 5.9	平坦な底部から、体部は直線的に外上方に短く立ち上がり、口縁部にいたる。	ク	ク
ク-8	ク	ク ク		8.9 1.8 — 5.6	ク	ク	ク
ク-9	ク	ク ク		8.6 2.3 — 6.0	平坦な底部から、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	回転ナデ調整。外底は磨耗して不明。	ク
ク-10	ク	ク ク		8.9 2.6 — 6.0	底部はやや上げ底で、体部は直線的に短く立ち上がる。	ク	ク
ク-11	ク	ク ク		9.4 1.8 — 6.0	平坦な底部から、体部は直線的に立ち上がる。	全体的に磨耗が著しく不明。	C-I-a類
ク-12	V層	ク ク		9.2 2.1 — 7.0	ク	ク	ク
ク-13	VI層	ク ク		9.2 2.0 — 5.6	ク	ク	ク
ク-14	ク	ク ク		9.4 1.6 — 6.6	底部はやや上げ底で、体部は直線的に外上方に立ち上がる。	ク	ク
ク-15	ク	ク ク		9.2 2.0 — 7.6	平坦な底部から屈曲して、体部は外上方へ立ち上がり、端部は丸くおさめる。	ク	ク
ク-16	III層	ク ク		9.0 1.6 — 5.0	平坦な底部から、体部は内湾して外上方に立ち上がる。	回転台成形であるが、全体的に磨耗して不明。	C-I-b類
ク-17	VI層	ク ク		9.3 1.9 — —	丸みを有した底部から、内湾して立ち上がり口縁部にいたる。端部はやや肥厚する。	回転ナデ調整。外底は磨耗して不明。	ク
ク-18	ク	ク ク		9.8 1.5 — —	丸みを有した底部から、体部は外上方へ開き、口縁部は外反する。	全体的に磨耗して不明。	C-I-c類
ク-19	ク	ク ク		8.8 1.5 — —	丸底風の底部で、体部は大きく開く。	丁寧な手握ね成形である。	D-II-a類
ク-20	V層	ク ク		7.6 1.0 — —	「て」の字状口縁の、京都系の皿である。	ク	ク

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
85-21	V層	土師器 小皿	9.0 0.9 — —	「て」の字状口縁の、京都系の皿である。	丁寧な手握ね成形である。	
◇-22	V層	◇ ◇	8.9 1.1 — —	◇	手握ね成形である。 全体的に磨耗が著しい。	
◇-23		◇ 皿	12.8 1.7 — 8.6	平底で、体部は外上方に短く立ち上がり、口縁部は、端部で内側に若干折り曲げる。	回転台成形であるが、全体的に磨耗が著しい。	
◇-24	IV層	◇ 柱状高台皿	— (3.1) — 4.0	柱状高台の台部である。	磨耗が著しく不明。	
◇-25	◇	◇ 杯	10.5 3.3 — 6.0	平底に近い底部から屈曲し、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	全体的に磨耗が著しい。	IV-a類
◇-26	V層	◇ ◇	10.8 4.2 — 6.4	平坦な円盤状高台を有する。体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	全体的に磨耗が著しいが、内面にロクロ痕が残る。	◇
◇-27	VI層	◇ ◇	10.6 5.3 — 5.8	平坦な底部から、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	外底は回転糸切。内面にロクロ痕あり。	◇
◇-28	V層	◇ ◇	10.4 3.7 — 5.4	平坦な底部から、体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	回転台成形である。	IV-b類
◇-29	IV層	◇ ◇	10.2 3.3 — 6.4	◇	外底は磨耗して不明である。	◇
◇-30	V層	◇ ◇	10.6 3.4 — 5.7	◇	外面体部下半にヘラの沈線。 外底は回転糸切り。	◇
◇-31	III層	◇ ◇	11.1 3.5 — 6.0	平底から屈曲し、直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。	回転台成形で、内外面にロクロ痕が残る。	III-a類
◇-32	V層	◇ ◇	11.0 4.5 — 7.2	◇	回転ナデ調整。 外底は回転糸切り。	◇
◇-33	◇	◇ ◇	11.5 3.4 — 6.0	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	全体的に磨耗が著しく不明。	◇
◇-34	◇	◇ ◇	11.8 3.2 — 8.2	体部は直線的に外上方に立ち上り、口縁部にいたる。	外底は回転糸切りである。	◇
◇-35	◇	◇ ◇	11.4 3.2 — 7.6	平坦な底部から屈曲し、直線的に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	回転台成形。外底は回転糸切り。	◇
◇-36	◇	◇ ◇	11.4 3.6 — 6.8	◇	◇	◇

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
85-37	V層	土師器 杯	11.0 4.4 — 8.0	円盤状高台を有し、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	全体的に磨耗が著しいが、内面にロクロ痕が残る。	Ⅲ-a類
◇-38	◇	◇ ◇	11.2 3.6 — 7.8	平坦な底部で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部はやや外反する。	ロクロナデ。	◇
◇-39	◇	◇ ◇	11.2 4.7 — 7.0	平坦な底部から、体部は内湾して外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	回転台成形で、外底は磨耗が著しく不明。	Ⅲ-b類
◇-40	◇	◇ ◇	11.5 3.9 — 6.8	◇	外底は回転糸切り後、板状圧痕が残る。	◇
◇-41	◇	◇ ◇	12.2 3.1 — 4.4	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	全体的に磨耗が著しく不明。	Ⅱ-a類
◇-42	Ⅲ層	◇ ◇	12.7 3.4 — 7.2	平底から屈曲し、直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	回転台成形。	◇
◇-43	V層	◇ ◇	12.2 3.5 — 7.5	◇	外底は磨耗が著しく不明。	◇
◇-44	◇	◇ ◇	12.8 4.1 — 7.5	平坦な底部から、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	外底は回転糸切り。	Ⅱ-b類
◇-45	Ⅵ層	◇ ◇	12.3 3.4 — 7.2	平坦な底部から、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部はやや外反し、端部は丸くおさめる。	外底はヘラ切り。	◇
◇-46	V層	◇ ◇	12.2 3.2 — 7.3	平坦な底部から、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	全体的に磨耗が著しく不明だが内面にロクロ痕が残る。	◇
◇-47	◇	◇ ◇	12.0 4.0 — 7.4	◇	外底は回転糸切りの後、板状圧痕が認められる。	◇
◇-48	V層下	◇ ◇	13.2 3.3 — 8.6	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	内外面にロクロ痕が残る。全体的に磨耗が著しく不明。	Ⅰ-a類
◇-49	V層	◇ ◇	13.6 3.6 — 8.7	◇	外底は回転糸切りである。全体的に磨耗が著しく不明。	◇
◇-50	Ⅵ層	◇ ◇	13.4 4.6 — 8.7	器壁が厚く平坦な底部から屈曲し体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。	全体的に磨耗が著しく不明。	◇
◇-51	V層	◇ ◇	13.0 3.7 — 8.0	平坦な底部から、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	底部は、回転糸切りの後指頭圧痕がつく。	Ⅰ-b類
◇-52	◇	◇ ◇	13.0 3.4 — 7.0	◇	内外面にロクロ痕が残る。	◇

採函番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
85-53	V層	土師器 杯	13.0 4.2 — 7.6	やや器壁の厚い底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は若干外反する。	外底は回転糸切り。	I-c類
◇-54	◇	◇ ◇	13.6 3.9 — 7.6	平坦な底部から、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。口縁部は外反する。	全体的に磨耗が著しく不明。	◇
◇-55	◇	◇ ◇	— (2.2) — 8.0	円盤状高台を有し、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	外底は回転糸切り。	
◇-56	◇	◇ ◇	— (2.4) — 7.0	◇	全体的に磨耗が著しく不明。	
◇-57	III層	◇ ◇	— (2.3) — 5.8	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	外底は、回転糸切り痕が顕著である。	
86-1	V層	◇ 瓶	— (2.2) — 8.6	円盤状高台を有する。	磨耗が著しく不明。	
◇-2	VI層	◇ ◇	— (2.2) — 6.6	◇	外底は回転糸切り。	
◇-3	V層下	◇ ◇	— (1.9) — 6.6	◇	磨耗が著しく不明。	
◇-4	VI層	◇ ◇	15.7 6.7 — 9.0	円盤状の高台から、腰部で張りをもち、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	外底はヘラ切り。回転ナデ調整。	
◇-5	V層	◇ ◇	— (1.6) — 6.0	円盤状高台を有する。	外底は磨耗が著しく不明。	
◇-6	◇	◇ ◇	— (3.0) — 8.2	◇	外底はヘラ切り。	
◇-7	◇	◇ ◇	— (2.7) — 5.7	円盤状高台を有し、体部は外上方へ内湾して立ち上がる。	内底面にロクロ痕が確認できる。全体的に磨耗が著しく不明。	
◇-8	VI層	◇ ◇	— (1.9) — 6.0	円盤状高台を有し、体部は大きく外上方へ立ち上がる。	回転ナデ調整。	
◇-9	◇	◇ ◇	— (2.9) — 7.0	器壁の厚い円盤状高台を有し、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。	外底は回転糸切り。内面にロクロ痕あり。	
◇-10	◇	◇ ◇	— (3.4) — 6.0	円盤状高台を有し、体部は大きく外上方へ立ち上がる。	外底は回転糸切り。全体的に磨耗して不明。	
◇-11	◇	◇ ◇	15.2 5.4 — 6.0	円盤状高台の底部で、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	全体的に磨耗しているが、回転台成形である。	

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
86-12	V層	土師器 甌	— (3.6) — 7.4	円盤状高台の底部で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	全体的に磨耗が著しく不明。	
◇-13	VI層	◇ ◇	— (2.6) — 9.0	「ハ」の字状に開く比較的高い断面方形形状の貼付高台である。	◇	
◇-14	V層	◇ ◇	13.4 5.3 — 5.0	「ハ」の字状に開く貼付高台で、体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部はなめらかに外反する。	◇	
◇-15	VI層	◇ ◇	12.6 1.5 — 5.4	「ハ」の字状に開く断面方形形状の貼付高台を呈する。体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部はやや外反する。	◇	
◇-16	◇	◇ ◇	14.4 4.7 — 6.6	「ハ」の字状に開く断面方形形状の貼付高台を呈する。体部は内湾して外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	回転ナデ調整。 一部焼成が還元焼成になる。 外面に火障が残る。	
◇-17	V層	◇ ◇	14.8 5.4 — 6.2	断面逆台形状の底の高台を呈する。体部は内湾して外上方に立ち上がる。口縁部は強い横ナデで、外反し、端部は丸くおさめる。	全体的に磨耗が著しく不明。 体部は内湾して外上方に立ち上がる。口縁部は強い横ナデで、外反し、端部は丸くおさめる。	
◇-18	VI層	◇ ◇	15.8 5.0 — 6.6	断面が逆台形状の貼付高台で、体部は内湾して、口縁部は若干外反する。	回転ナデ調整。他は磨耗して不明。	
◇-19	◇	◇ ◇	15.4 4.8 — 6.6	断面が逆台形状の貼付高台で、体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。	全体的に磨耗が著しく不明。	
◇-20	V層	◇ ◇	15.8 5.9 — 6.2	貼付の輪高台で、体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部はやや肥厚して外反する。	◇	
◇-21	◇	◇ ◇	15.1 5.7 — 5.7	断面方形形状の貼付高台で、体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	底部の外面はナデ。体部内面にナデ。 高台脇は、ヘラ削り。	
◇-22	VI層	◇ ◇	14.8 5.0 — 6.0	◇	外底に一部糸切痕が残る。 高台脇にヘラ削り。	
◇-23	◇	◇ ◇	18.0 5.0 — 6.0	断面逆台形状の貼付高台で、体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	回転ナデ調整。	
◇-24	◇	◇ ◇	15.6 5.5 — 6.4	比較的高い、断面方形形状の貼付高台で、体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。	外面は横位のヘラ磨き、内面にも一部ヘラ磨きが認められる。 高台脇はヘラ削り。	
◇-25	V層	◇ ◇	16.0 (4.0) — —	体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	全体的に磨耗が著しく不明。	
◇-26	◇	◇ ◇	17.0 (4.3) — —	◇	全体的に磨耗が著しく不明。 回転ナデ調整。	
◇-27	VI層	◇ ◇	— (2.5) — 6.6	断面方形形状の貼付高台である。	高台脇にヘラ削り。 回転ナデ調整。	

棟号番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
86-28	VI層	土師器 碗	— (2.9) — 6.3	—	断面逆台形状の貼付高台で、体部は内湾して外上方へ立ち上がる。	高台脇にヘラ削り。他は磨耗が著しく不明。	
〃-29	V層	〃 〃	— (3.4) — 6.0	—	「ハ」の字状に開く断面方形形状の貼付高台で、体部は内湾して外上方へ立ち上がる。	回転台成形。全体的に磨耗して不明。	
〃-30	〃	〃 〃	— (3.0) — 5.6	—	「ハ」の字状に開く比較的高い断面方形形状の貼付高台を有する。体部は内湾して外上方に立ち上がる。	外面の高台脇にヘラ削りが施される。	
〃-31	VI層	〃 〃	— (1.7) — 6.6	—	「ハ」の字状に開く高台を有する。	外底は回転系切りの後ナデ消している。高台脇はヘラ削り。	
〃-32	〃	〃 〃	— (2.7) — 7.0	—	断面逆台形状の貼付高台で、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。	外底は回転系切り。全体的に磨耗して不明。	
〃-33	〃	〃 〃	— (2.2) — 6.0	—	断面逆台形状の貼付高台である。	〃	
〃-34	〃	〃 〃	14.7 6.5 — 5.9	—	断面方形形状の貼付高台で、体部は内湾して外上方へ立ち上がる。口縁部は外反する。	内面に黒色処理。内面にヘラ磨きが認められるが、磨耗が著しく不明。	
87-1	〃	〃 甕	24.0 (5.8) — —	—	口縁部は、「く」の字状に外反し、端部はやや拡張し、面を有する。	口縁部外面はヨコナデ、内面は斜位のハケ調整。胴部外面は縦位のハケ、内面はハケとナデ調整。	
〃-2	V層下	〃 〃	26.0 (5.5) — —	—	口縁部は、「く」の字状に外反し、端部は面をなし、凹線が入る。	口縁部内外面ヨコナデ調整。胴部外面縦位のハケ目、内面は横位のハケとナデ調整。	
〃-3	VI層	〃 〃	26.0 (7.2) — —	—	口縁部は、「く」の字状に外反し、端部は肥厚し、上下に拡張する。胴部は直線的にのびる。	口縁部内外面ヨコナデ調整。胴部外面縦位のハケ、内面は横位のハケ調整。	
〃-4	V層	〃 〃	22.0 (7.6) — —	—	長胴で、口縁部は、「く」の字状に外反し、端部は上下に拡張され面をなし凹線が施される。	胴部内外面に指頭圧痕が残る。	
〃-5	VI層	〃 〃	26.2 (8.7) — —	—	長胴で、口縁部は、「く」の字状に外反する。端部はやや肥厚し、面を有する。	口縁部内外面はヨコナデ調整。胴部外面は縦位のハケ、内面は横位のハケ調整。	
〃-6	VI層上	〃 〃	25.4 (8.7) — —	—	口縁部は、「く」の字状に外反し、端部は面をなす。	〃	
〃-7	VI層	〃 〃	26.4 (9.2) — —	—	口縁部は、「く」の字状に外反し、端部は凹む。	口縁部内外面はヨコナデ調整。胴部外面は縦位のハケ調整。	
〃-8	〃	〃 〃	27.0 (7.1) — —	—	口縁部は、「く」の字状に外反し、端部は肥厚し上方に拡張され面をなす。一条の凹線が入る。	口縁部はヨコナデ調整。胎土に金雲母が混入する。	
〃-9	〃	〃 〃	30.0 (5.5) — —	—	口縁部は、「く」の字状に外反する。胴部の張りがない長胴甕である。	全体的に磨耗して不明。	

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
87-10	Ⅵ層	土師器 甕	29.0 (5.0) — —	口縁部は、「く」の字状に外反する。 肩部は張りがある。	口縁部内外面ヨコナデ調整。	
〃-11	V層	〃 〃	30.0 (6.2) — —	口縁部は、「く」の字状に外反する。 口縁端部は、外傾する面を有する。	全体的に磨耗が著しく不明。	
〃-12	〃	〃 〃	27.0 (9.5) — —	口縁部は、「く」の字状に外反する。	〃	
88-1	Ⅵ層	〃 釜	23.2 (5.8) — —	口縁部下に断面方形形状の鑿がつく。 端部は浅い凹線が施される。	胴部外面に縦位のハケ調整。	
〃-2	〃	〃 〃	18.6 (4.2) — —	口縁部下に断面方形形状で外上方へのびる鑿がつく。	口縁部内外面はヨコナデ調整。 胴部外面は縦位のハケ調整。	
〃-3	〃	〃 〃	23.2 (6.6) — —	体部は直線的で、口縁部下に断面方形形状の鑿がつく。	全体的に磨耗して不明。	
〃-4	〃	〃 〃	20.0 (5.8) — —	体部は直線的で、口縁部下に断面三角形の水平にのびる鑿がつく。	内外面ハケ調整。	
〃-5	〃	〃 〃	21.6 (8.3) — —	体部は直線的で、口縁部下に断面方形形状の鑿がつき、端部には浅い凹線が施される。	口縁部内外面はヨコナデ調整。 胴部外面は縦位の荒いハケ調整。	
〃-6	Ⅲ層	〃 〃	19.2 (5.0) — —	内傾する口縁部下に、水平にのびる鑿を有する。口縁端部はやや肥厚する。	口縁部内外面はヨコナデ調整。 鑿の下から煤が付着している。	
〃-7	〃	〃 〃	21.0 (14.7) — —	底部は丸底で、内湾して胴部にいたる。口縁部は内傾し、端部は肥厚する。口縁部下に、断面方形形状の鑿を有する。口縁部外面には3条の凹線が施される。	胴部外面は横位のヘラ削り。内面下半部には、横位、斜位のハケ調整。	
〃-8	Ⅵ層	〃 〃	17.0 (10.8) — —	口縁部は内傾して立ち上がり、端部はやや肥厚する。口縁部下に断面方形形状の鑿が水平につく。 口縁部外面には、2条の凹線が施される。	胴部外面には煤が付着する。	
〃-9	V層	〃 〃	24.2 (10.7) — —	胴部は張りがあり、口縁部は内傾し、端部は肥厚する。 口縁部下に突帯を有する。	口縁部内外面と突帯下はヨコナデ調整。胴部外面は斜位のタタキ。	
〃-10	Ⅳ層	〃 〃	15.4 (4.3) — —	口縁部は内傾し、端部はさらに内傾する面を有する。 口縁部下に上方にのびる突帯がつく。	口縁部内外面はヨコナデ調整。 胴部外面上位はヨコナデ、その他は斜位のタタキが施される。 胴部外面に煤付着。	
〃-11	Ⅱ層	〃 〃	19.0 (5.0) — —	口縁部は内傾し、端部は肥厚する。 肩部には、三角形の突帯部を有する。	口縁部内外面はヨコナデ調整。 胴部外面は斜位のタタキ、内面はナデ調整。 突帯下に煤付着。	
〃-12	〃	〃 〃	18.0 (5.5) — —	〃	口縁部内外面はヨコナデ調整。 胴部外面は斜位のタタキ、内面はナデ調整。	

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
88-13	V層	土師器 釜	23.0 (6.0) — —	口縁部は内傾し、端部は肥厚する。胴部には、三角形の突帯部を有する。	口縁部内外面はヨコナデ調整。胴部外面は斜位のタタキ、内面はナデ調整。	
◇-14	◇	◇ ◇	19.4 (4.8) — —	◇	口縁部内外面はヨコナデ調整。胴部外面は斜位のタタキ、内面はナデ調整。突帯下に煤付着。	
◇-15	◇	◇ ◇	26.2 (4.5) — —	◇	口縁部内外面ヨコナデ調整。	
89-1	IV層	◇ ◇	20.4 (6.0) — —	◇	口縁部内外面はヨコナデ調整。胴部外面は斜位のタタキ、内面は横位のハケ調整。	
◇-2	◇	◇ ◇	24.6 (4.4) — —	◇	口縁部内外面はヨコナデ調整。	
◇-3	◇	◇ ◇	20.0 (5.0) — —	張りのある胴部から、内傾する口縁部を有する。端部はさらに内傾する面を有する。 — 口縁部下に水平にのびる貼付の突帯を有する。	口縁部内外面はヨコナデ調整。胴部内面は横位のハケ調整、外面の磨耗が著しい。	
◇-4	V層下	◇ 鍋	29.2 (7.0) — —	体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部は「く」の字状に外反する。	外面に指頭圧痕が残る、煤が付着する。	
◇-5	III層	瓦質土器 鉢	24.1 (6.3) — —	体部は直線的に外上方に立ち上がり口縁部にいたる。端部はやや肥厚する。	内外面磨耗が著しく調整不明。	
◇-6	V層	◇ ◇	24.6 (7.0) — —	体部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。口縁端部は水平である。	回転台成形で、内面に4本単位の条線が施される。	
◇-7	◇	◇ ◇	27.8 (5.1) — —	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁端部はやや肥厚する。	内面は横位のハケ調整。	
◇-8	VI層	◇ ◇	25.0 (5.3) — —	◇	内面と口縁部は横位のハケ調整、体部外面には指頭圧痕が残る。	
◇-9	III層	◇ ◇	29.2 (8.0) — —	体部は直線的に外上方に立ち上がる。口縁端部は肥厚してやや上方に立ち上がる。	内面に4本単位の条線が施される。外面に指頭圧痕が残る。	
◇-10	◇	◇ ◇	27.0 (4.6) — —	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。端部は、肥厚し垂下する。		
◇-11	◇	◇ ◇	29.6 (7.1) — —	体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。端部は肥厚し拡張される。	内外面は横位のハケ調整であるが、外面には指頭圧痕が残る。他は磨耗が著しい。	
◇-12	V層	◇ ◇	36.4 (7.1) — —	体部は直線的に外上方に立ち上がる。口縁部は大きく外反し端部は肥厚し玉縁状になる。	口縁部内面は横位のハケ調整、外面は斜位のハケ目と指頭圧痕が残る。	
90-1	III層上	◇ 釜	19.0 (9.0) — —	口縁部は内傾し、端部はさらに内傾する面を有する。頸は断面方形で水平に突出する。胴部の張りはみられない。	口縁部内外面はヨコナデ調整、胴部内面は、横位のハケ調整が施されている。外面に煤が付着する。	

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
90-2	Ⅳ層	瓦質土器 釜	19.2 (3.1) — —	口縁部は内傾し、端部は肥厚する。 鈎はやや上方に突出する。	口縁部外面はヨコナデ、内面は ハケ状工具による横位のナデ調 整が施される。	
〃-3	V層下	〃 〃	23.4 (6.1) — —	口縁部は内傾する。 断面三角形の鈎が水平に突出す る。	胴部外面に指頭圧痕が残る。	
〃-4		〃 〃	15.0 (7.6) — —	胴部下位は欠損しているが、やや 張りのある胴部から、口縁部は内 傾気味である。端部は平坦な面を もつ。	口縁部内外面はヨコナデ調整。 胴部内面は横位のハケ調整が施 される。	
〃-5	Ⅲ層	〃 鍋	18.0 (3.8) — —	口縁部は外反する。	内面はナデ調整で、外面には指 頭圧痕が残る。	
〃-6		〃 〃	18.0 (4.0) — —	胴部から上方に立ち上がり、口縁 部は外反する。	内外面ナデ調整、指頭圧痕が残 る。	
〃-7	Ⅲ層	〃 〃	17.4 (4.5) — —	張りのある胴部から、口縁部は内 傾して立ち上がる。端部は水平な 面を有する。	全体的に磨耗が著しく不明。	
〃-8	Ⅳ層	〃 〃	18.2 (5.9) — —	胴部は内湾して立ち上がり、上位 に最大径を有する。 口縁部は内傾して立ち上がり、端 部も内傾する。	全体的に磨耗が著しいが頸部を 中心に指頭圧痕が残る。	
〃-9	Ⅲ層	〃 〃	21.0 (3.9) — —	口縁部は内傾し、端部はさらに内 傾する面を有する。	〃	
〃-10	V層	〃 〃	25.6 (4.7) — —	内湾した胴部から、さらに内傾す る口縁部にいたる。端部は内傾し 平坦な面を有する。	全体的に磨耗が著しく不明。	
〃-11	Ⅳ層	〃 釜	9.2 (4.7) — —	口縁部は直立し、端部は丸い。 肩部に把手がつく。		
〃-12	V層	〃 火舎	— (4.6) — —	口縁部が直立して上方に立ち上が る。	外面に菊花文がスタンプされる。	
〃-13		〃 足釜	全長 (11.5) 全幅 2.5 全厚 2.3	三足の脚部である。		
〃-14	V層	〃 甕	— (6.2) — —		外面に格子のタタキが施される。 内面はナデ調整。	
91-1	V層下	瓦器 皿	8.0 1.2 — —	平坦な底部で、体部は内湾して外 上方に立ち上がる。	全体的に磨耗して不明。	
〃-2	Ⅵ層	〃 〃	7.8 1.5 — —	丸底風の底部から内湾気味に立ち 上がり、口縁部は外反する。	口縁部外面はヨコナデ調整。 外面には指頭圧痕が残る。	
〃-3	V層	〃 〃	7.4 1.7 — —	丸底から、口縁部は内湾気味に外 上方へ立ち上がる。	〃	

挿図番号	選構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法尊 (cm)	形態・文様	手法	備考
91-4	V層	瓦器 皿	8.0 1.8 — —	丸底から、口縁部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。	口縁部はヨコナデ、他はナデ調整。	
◇-5	V層下	◇ ◇	8.2 1.3 — —	平坦な底部から屈曲して立ち上がり、口縁部は外反する。	◇	
◇-6	V層	◇ ◇	8.0 1.0 — —	平坦に近い底部から、外上方へ大きく開いて立ち上がり、口縁部は外反する。	◇	
◇-7	◇	◇ ◇	8.2 1.1 — —	◇	口縁部はヨコナデ、他はナデ調整。 外底には指頭圧痕が残る。	
◇-8	◇	◇ ◇	7.1 1.1 — —	◇	口縁部内外面ヨコナデ調整。 見込み及び外底はナデ調整。	
◇-9	◇	◇ ◇	8.5 1.1 — —	◇	口縁部内外面ヨコナデ調整。 見込み及び外底はナデ調整。 底部には指頭圧痕が残る。	
◇-10	◇	◇ ◇	8.2 1.7 — —	◇	口縁部内外面ヨコナデ調整。 内底はナデ、外底は不定方向のヘラ削り。	
◇-11	◇	◇ ◇	8.3 1.9 — —	丸底風の底部から、外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内外面はヨコナデ調整。	
◇-12	V層下	◇ ◇	9.2 1.6 — —	◇	口縁部内外面はヨコナデ調整。 底部には指頭圧痕。	
◇-13	V層	◇ ◇	7.9 1.3 — —	やや丸味を帯びた底部から屈曲して、口縁部は外反気味に立ち上がる。	全体的に磨耗が著しく不明。	
◇-14	V層下	◇ ◇	8.0 1.5 — —	平坦な底部から屈曲して、口縁部は外反気味に立ち上がる。	口縁部内外面はヨコナデ調整。 底部には指頭圧痕が残る。	
◇-15	V層	◇ ◇	8.4 1.7 — —	丸底風の底部から外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内外面はヨコナデ、他はナデ調整。	
◇-17	◇	◇ ◇	7.6 1.8 — —	丸味を帯びた底部から屈曲して立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内外面はヨコナデ調整。	
◇-18	V層下	◇ ◇	11.2 2.0 — —	平坦な底部から、体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。	全体的に磨耗しているが、内外面に指頭圧痕が残る。	
◇-19	V層	◇ 椀	13.6 3.0 — 3.8	薄い緒状の貼付高台。 体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部はヨコナデの為やや外反する。	全体的に磨耗しているが、体部外面に指頭圧痕が残る。	和泉型
◇-20	◇	◇ ◇	12.2 2.6 — 2.6	◇	口縁部内外面はヨコナデ調整。 体部外面に指頭圧痕が残る。	◇

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
91-21	V層下	瓦器 椀	13.1 3.1 — 3.2	薄い紐状の貼付高台。 体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部内外面はヨコナデ調整。 体部外面に指頭圧痕が残る。	和泉型
〃-22	VI層	〃 〃	13.4 3.1 — 3.6	断面が逆三角形の紐状の貼付高台。体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部はヨコナデにより若干外反する。	〃	〃
〃-23	V層下	〃 〃	13.3 3.0 — 4.8	紐状の貼付高台。 体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	〃	〃
〃-24	VI層	〃 〃	12.3 3.3 — 4.9	薄い紐状の貼付高台。 体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部はヨコナデにより若干外反する。	〃	〃
〃-25	V層	〃 〃	14.7 4.8 — 5.0	断面が逆三角形の紐状の貼付高台で、体部は内湾して外上方へ立ち上がる。口縁部はヨコナデにより若干外反する。	口縁部外面はヨコナデ、内面及び見込みは平行線状のヘラミガキが施される。 体部外面に指頭圧痕が残る。	〃
〃-26	VI層	〃 〃	14.0 3.6 — 2.8	〃	口縁部外面はヨコナデ、体部外面は指頭圧痕が残る。内面は螺旋状にヘラミガキが施される。	〃
〃-27	〃	〃 〃	13.0 3.5 — 2.1	〃	〃	〃
〃-28	〃	〃 〃	15.0 4.1 — 3.5	〃	〃	〃
〃-29	〃	〃 〃	14.2 4.0 — 3.7	〃	〃	〃
〃-30	〃	〃 〃	14.4 (3.3) — —	体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部はヨコナデにより若干外反する。	口縁部外面はヨコナデ、体部外面は指頭圧痕が残る。内面には圏線状のミガキ、見込みに平行線状のヘラミガキが施される。	〃
〃-31	V層	〃 〃	15.7 3.5 — 5.8	断面が逆三角形の貼付高台で、体部は内湾し、外上方に大きく立ち上がり口縁部にいたる。	口縁部外面はヨコナデ、体部は指頭圧痕が残る。内面は、側面の圏線状のミガキと連続して一本の螺旋状を呈する。高台よりも底部が突出する。	〃
〃-32	〃	〃 〃	15.4 4.2 — 4.0	高台は、鋭さを失う断面半円形状を呈し、体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部は若干外反する。	体部外面は指頭圧痕が残る。内面及び見込みは平行線状のヘラミガキが施される。 口縁部外面はヨコナデ調整。	〃
〃-33	VI層	〃 〃	14.6 3.9 — 3.2	断面が逆三角形の紐状の貼付高台で、体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部はヨコナデにより若干肥厚する。	口縁部はヨコナデ調整。 体部外面は指頭圧痕が残る。内面は螺旋状のヘラミガキが施される。	〃
〃-34	V層	〃 〃	15.2 4.0 — 5.4	薄い紐状の貼付高台で、体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	全体的に磨耗して不明。	〃
〃-35	V層下	〃 〃	13.8 4.5 — 4.2	断面三角形の貼付高台である。体部は内湾して外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	口縁部外面はヨコナデ調整。 体部外面は指頭圧痕が残る。内面は磨耗して不明。	〃
〃-36	V層	〃 〃	15.0 (4.0) — —	体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部はヨコナデにより若干外反する。	口縁部外面はヨコナデ調整。 体部外面は指頭圧痕が残る。内面は、間隔のある圏線状のヘラミガキが施される。	〃

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
91-37	V層	瓦器 碗	— (1.7) — 6.0	断面三角形の貼付高台で、体部は内湾して外上方へ立ち上がる。	見込みには平行線状のヘラミガキが施される。	和泉型
〃-38	VI層	〃 〃	— (1.6) — 5.0	〃	〃	〃
〃-39	V層	〃 〃	— (1.2) — 3.6	高台は低い逆台形状の貼付高台である。	〃	〃
〃-40	〃	〃 〃	— (1.1) — 4.8	〃	〃	〃
〃-41	〃	〃 〃	13.1 3.5 — 3.2	紐状の薄い貼付高台で、体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部はヨコナデにより外反する。	体部外面に指頭圧痕が残る。内面は圈線状のヘラミガキ。見込みには平行線状のヘラミガキが施される。	〃
〃-42	〃	〃 〃	13.0 3.3 — 2.5	〃	〃	〃
〃-43	〃	〃 〃	— (2.9) — 4.0	断面三角形の薄い貼付高台で、体部は内湾して外上方へ立ち上がる。	体部外面に指頭圧痕が残る。見込みには平行線状のヘラミガキが施される。	〃
〃-44	〃	〃 〃	— (1.4) — 5.2	〃	見込みに格子状のヘラミガキが施される。	〃
92-1	V層下	〃 〃	— (2.6) — 3.4	〃	体部外面に指頭圧痕が残る。内面にはヘラミガキが施される。	〃
〃-2	〃	〃 〃	13.2 (4.6) — —	体部は内湾して外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	口縁部外面は、2段のヨコナデと、体部外面には指頭圧痕が残る。内面は平行線状と斜位のヘラミガキが施される。	〃
〃-3	〃	〃 〃	14.8 (4.2) — —	体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部は若干外反する。	口縁部外面はヨコナデ調整。体部外面に指頭圧痕が残る。内面は平行線状のヘラミガキが施される。	〃
〃-4	V層	〃 〃	15.2 (3.6) — —	体部は直線的に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	口縁部外面はヨコナデ調整。体部外面に指頭圧痕が残る。内面は不定方向のヘラミガキが施される。	〃
〃-5	V層下	〃 〃	16.4 (5.0) — —	体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部外面はヨコナデ調整。全体的に磨耗が著しいが、内外面共ヘラミガキが施される。体部外面に指頭圧痕が残る。	〃
〃-6	〃	〃 〃	16.0 (3.3) — —	体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	口縁部外面はヨコナデ調整。体部外面に指頭圧痕が残る。内面には平行線状のヘラミガキが施される。	〃
〃-7	V層	〃 〃	16.0 (3.0) — —	〃	〃	〃

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 法量 (cm) 底径	形態・文様	手 法	備 考
92 - 8	V層下	瓦器 碗	15.2 (4.6) — —	体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	口縁部外面はヨコナデの後ヘラミガキが施される。体部外面には指頭圧痕が残り、突出した処にヘラミガキ、内面は、平行線状のヘラミガキが施される。	和泉型
〃 - 9	V層	〃 〃	15.2 4.8 — 4.4	断面が逆三角形の貼付高台で、体部は内湾して外上方に立ち上がり口縁部は若干外反する。	口縁部外面はヨコナデ調整。内面及び見込みに平行線状のヘラミガキが施される。体部外面には指頭圧痕が残る。	〃
〃 - 10	VI層	〃 〃	15.0 4.2 — 3.4	〃	〃	〃
〃 - 11	V層	〃 〃	15.5 4.5 — 4.9	〃	口縁部外面はヨコナデ調整。内面は圈線状のヘラミガキ。見込みに平行線状のヘラミガキが施される。体部外面には指頭圧痕が残る。	〃
〃 - 12	〃	〃 〃	15.2 4.7 — 4.4	〃	見込みにヘラミガキが施される。他は磨耗して不明。	〃
〃 - 13	〃	〃 〃	15.4 5.4 — 4.6	〃	口縁部外面はヨコナデ調整。体部外面には指頭圧痕が残る。内面は丁寧なヘラミガキが施される。	〃
〃 - 14	〃	〃 〃	15.2 5.3 — 4.6	〃	〃	〃
〃 - 15	〃	〃 〃	15.4 4.6 — 3.0	断面が半円形状の貼付高台で、体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部外面はヨコナデ調整。体部外面には指頭圧痕が残る。内面及び見込みに平行線状のヘラミガキが施される。	〃
〃 - 16	V層下	〃 〃	15.0 5.4 — 5.1	断面が逆台形状の貼付高台で、体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	口縁部外面はヨコナデ調整。体部外面には指頭圧痕が残り、突出部にはヘラミガキが認められる。内面には丁寧なヘラミガキが施される。	〃
〃 - 17	V層	〃 〃	16.0 4.5 — 5.6	断面が逆三角形の貼付高台で、体部は内湾して外上方に立ち上がり口縁部にいたる。	口縁部外面は2段にヨコナデ、体部外面には指頭圧痕が残る。内面は磨耗して不明だが、見込みは平行線状のヘラミガキが施される。	〃
〃 - 18	V層下	〃 〃	16.0 (5.0) — —	体部は内湾して外上方へ立ち上がる。口唇部内面に一条の沈線が施される。	体部外面に指頭圧痕が残る。全体的に磨耗している。	楠葉型
〃 - 19	V層	〃 〃	13.0 (3.8) — —	〃	全体的に磨耗が著しいが、内外面ヘラミガキが施されている。	〃
〃 - 20	V層下	〃 〃	13.7 (4.6) — —	〃	全体的に磨耗が著しい。	〃
〃 - 21	VI層	〃 〃	14.8 (4.8) — —	〃	〃	〃
〃 - 22	V層	〃 〃	14.4 (4.5) — —	〃	全体的に磨耗が著しく不明な部分もあるが、内面は密なヘラミガキで外面は口縁部ヨコナデ、体部は指頭圧痕が残る。	〃

博岡番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手法	備考
92-23	VI層	瓦器 椀	15.3 (2.9)	— —	体部は内湾して外上方へ立ち上がる。口唇部内面に一条の沈線が施される。	全体的に磨耗して不明。	楠葉型
〃-24	〃	〃 〃	15.8 (5.8)	— —	〃	全体的に磨耗が著しいが、体部外面に指頭圧痕が残る。	〃
〃-25	V層	〃 〃	15.0 (2.7)	— —	〃	内外面は丁寧なヘラミガキが施される。	〃
〃-26	VI層	〃 〃	15.0 (4.0)	— —	〃	内外面は丁寧なヘラミガキが施される。 全体的に磨耗が著しい。	〃
〃-27	〃	〃 〃	16.0 (3.4)	— —	体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり、口唇部内面に一条の沈線が施される。	内外面にヘラミガキが施される。	〃
〃-28	〃	〃 〃	16.2 (4.2)	— —	〃	内外面にヘラミガキが施される。 体部外面には指頭圧痕が残る。	〃
〃-29	VI層	〃 〃	15.0 (3.3)	— —	器壁が厚く、体部は内湾して外上方に立ち上がる。口唇部内面に一条の沈線が施される。	内外面に丁寧なヘラミガキが施される。 全体的に磨耗が著しく不明。	〃
〃-30	V層	〃 〃	14.8 (2.9)	— —	体部は内湾して外上方に立ち上がり口縁部にいたる。 口唇部内面に沈線が残る。	〃	〃
〃-31	〃	〃 〃	15.6 6.0 — 5.6	— — — —	断面逆三角形の貼付高台。体部は内湾して外上方に立ち上がる。 口唇部内面に一条の沈線が施される。	体部外面に指頭圧痕が残る。	〃
〃-32	〃	〃 〃	15.2 6.1 — 6.4	— — — —	〃	体部外面に指頭圧痕が残る。 全体的に磨耗している。	〃
〃-33	〃	〃 〃	17.7 (4.5)	— —	〃	〃	〃
93-1		須恵器 皿	15.5 2.5 — 12.4	— — — —	平坦な底部から、体部は直線的に外上方に立ち上がり、口縁端部は上方につまみ上げる。	回転ナデ調整。	
〃-2		〃 〃	14.8 2.0 — 11.4	— — — —	〃	〃	
〃-3	VI層下	〃 〃	15.2 2.2 — 12.6	— — — —	〃	〃	
〃-4	VI層	〃 〃	15.2 1.4 — 11.4	— — — —	平坦な底部から、体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。	〃	
〃-5	〃	〃 蓋	14.0 2.0 — —	— — — —	平坦な天井部から、口縁部は外下方へ下る。	〃	

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
93 - 6	VI層	須恵器 蓋	12.6 2.5 — つまみ径 2.4	天井部は平坦で、口縁部は外下方へ下る。 中央部に擬宝珠形のつまみがつく。	回転ナデ調整。	
〃 - 7		〃 〃	11.6 3.1 — つまみ径 1.8	〃	回転ナデ調整。 外面に自然釉がかかる。	
〃 - 8	VI層	〃 〃	12.2 2.4 — つまみ径 2.3	天井部は平坦で、口縁部は下方に折り曲げられる。 中央部に擬宝珠形のつまみがつく。	回転ナデ調整。	
〃 - 9	〃	〃 〃	12.0 2.5 — つまみ径 2.0	天井部は平坦で、口縁部は外下方へ下る。 中央部に擬宝珠形のつまみがつく。	〃	
〃 - 10	IV層	〃 〃	— (2.2) — つまみ径 2.2	〃	〃	
〃 - 11	VI層	〃 杯	11.8 4.6 — 8.8	「ハ」の字状に開く貼付高台で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	〃	
〃 - 12		〃 〃	17.8 5.1 — 12.0	断面方形の貼付高台で、体部から口縁部にかけて直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。	〃	
〃 - 13	VI層	〃 〃	14.2 4.5 — 9.4	〃	〃	
〃 - 14	V層	〃 碗	— (2.3) — 5.6	低い逆台形状の貼付高台を有し、体部は内湾して外上方へ立ち上がる。	全体的に磨耗が著しく不明。	
〃 - 15		〃 〃	— (2.7) — 5.8	断面方形の貼付高台で、体部は内湾して外上方へ立ち上がる。	高台脇にヘラ削り。	
〃 - 16	V層	〃 〃	— (1.2) — 6.4	断面方形の輪高台をもつ。	外底は回転ナデ調整。	
〃 - 17	〃	〃 〃	15.0 (3.9) — —	体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部はやや外反する。	回転ナデ調整。	
〃 - 18	〃	〃 〃	15.4 (5.0) — —	〃	回転ナデ調整。 内外面にヘラミガキが比較的丁寧に施される。 内外面に火摩。	
〃 - 19	〃	〃 〃	— (1.5) — 4.7	円盤状高台を呈し、体部は外上方に立ち上がる。	外底は回転糸切りが施される。	
〃 - 20	VI層	〃 〃	17.1 (4.8) — —		回転ナデ調整。	
〃 - 21	〃	〃 〃	15.6 5.5 — 7.6	円盤状高台を呈し、体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	回転ナデ調整。 外底は回転糸切りが施される。 焼成が不良で灰白色を呈する。	

挿入番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
93-22	V層	須恵器 椀	— 2.2 — 6.0	円盤状高台を呈し、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。	回転ナデ調整。 外底は回転糸切り。 外面に火傷。	
◇-23	V層	◇ ◇	— (2.5) — 6.1	円盤状高台を呈し、体部は内湾して外上方に立ち上がる。	回転ナデ調整。 外底は磨耗が著しく不明。	
◇-24		◇ ◇	16.4 5.4 — 5.9	平坦な底部から、体部は内湾して外上方へ立ち上がる。口縁部は若干肥厚して端部は丸くおさめらる。	回転ナデ調整。 外底は回転糸切り。	
◇-25	V層	◇ ◇	— (2.0) — 6.0	平坦な底部から、体部は大きく開く。	外底は回転糸切り。	
◇-26	Ⅲ層	◇ 壺	9.8 (5.1) — —	頸部は上方に立ち上がる。口縁部は水平に強く屈曲し、端部は上方につまみ上げられ面を有する。	回転ナデ調整。	
94-1	V層	東播系 コネ鉢	26.0 (3.2) — —	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は肥厚し、上方に拡張され面取りされる。口縁端部は凹線状になる。	◇	
◇-2	◇	◇ ◇	22.0 (5.5) — —	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は斜めに切り落としている。	◇	
◇-3	◇	◇ ◇	26.0 (3.9) — —	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は肥厚する。	◇	
◇-4	◇	◇ ◇	25.0 (3.4) — —	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は肥厚し上方に拡張される。	◇	
◇-5	◇	◇ ◇	28.0 (4.2) — —	◇	◇	
◇-6	Ⅲ層	◇ ◇	25.0 (4.2) — —	◇	回転ナデ調整。 口縁部外面のみ自然釉がかり、重ね焼きの痕跡がみられる。	
◇-7	V層	◇ ◇	25.0 (5.9) — —	◇	回転ナデ調整。	
◇-8		◇ ◇	26.0 (5.8) — —	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部はやや肥厚する。	◇	
◇-9	V層下	◇ ◇	30.4 (5.2) — —	◇	◇	
◇-10	◇	◇ ◇	27.6 (5.6) — —	◇	◇	
◇-11	V層	◇ ◇	29.6 (5.1) — —	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は肥厚し、上下に拡張される。	◇	

挿図番号	遺構番号	器種	法量 (cm)	口径 器高 胴径 底径	形態・文様	手 法	備 考
94-12	V層	東播系 コネ鉢	— — —	25.6 (4.3)	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は肥厚し、上下に拡張される。	回転ナデ調整。	
◇-13	◇	◇ ◇	— — —	29.6 (5.0)	◇	◇	
◇-14	◇	◇ ◇	— — —	26.2 (3.3)	◇	◇	
◇-15	IV層	◇ ◇	— — —	30.6 (4.3)	◇	◇	
95-1		◇ ◇	— — —	24.2 (6.5)	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は肥厚し、上方に拡張される。	◇	
◇-2	IV層	◇ ◇	— — —	23.6 (4.3)	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は肥厚し、上下に拡張される。	◇	
◇-3	III層	◇ ◇	— — —	19.2 (3.0)	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は肥厚して、上方に滑らかな立ち上がりを有する。	◇	
◇-4	V層	◇ ◇	— — —	25.6 (6.9)	◇	◇	
◇-5		◇ ◇	— — —	24.0 (3.0)	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は肥厚して、上方に拡張される。	◇	
◇-6	V層	◇ ◇	— — —	25.0 (7.2)	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は肥厚して、上下に拡張される。	回転ナデ調整。 内面一部に斜位の指ナデ調整がみられる。 外面に一部煤が付着している。	
◇-7	VI層	◇ ◇	— — —	26.0 (4.0)	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は肥厚し上下に拡張する。	回転ナデ調整。	
◇-8	V層	◇ ◇	— — —	26.8 (4.4)	◇	◇	
◇-9	◇	◇ ◇	— — —	26.0 (7.5)	◇	◇	
◇-10	◇	◇ ◇	— — —	26.4 (6.7)	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は肥厚し上方に拡張される。	◇	
◇-11		◇ ◇	— — —	24.2 8.5 — 8.5	底部は平底。 体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は肥厚し上方に拡張される。	◇	
◇-12		◇ ◇	— — —	28.0 (3.1)	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は肥厚し上方に拡張される。	◇	

挿入番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
95-13	V層	束播系 コネ鉢	24.6 9.5 — 8.4	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。口縁部は肥厚し上方に拡張される。	回転ナデ調整。 内面一部に斜位の指ナデ調整が施される。 外面に一部煤が付着している。	
〃-14	IV層	〃 〃	27.6 (5.9) — —	〃	〃	
96-1	V層	備前焼 播鉢	22.0 (4.8) — —	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は外傾する面を有する。	内面には条線が施されるが単位は不明。	
〃-2	III層	〃 〃	27.0 (7.0) — —	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は外傾し斜位に切り落とされる。	回転台成形で内面に5本の条線が施される。	
〃-3	IV層	〃 〃	25.0 (5.1) — —	〃	回転台成形で、内面には条線が施される。	
〃-4		〃 〃	25.5 (6.8) — —	〃	内面には8本単位の条線が施される。	
〃-5	VI層	〃 〃	24.4 (8.1) — —	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は肥厚し上方に拡張される。	内面には7本単位の条線が下から上へ施される。	
〃-6	V層	〃 〃	26.4 (5.7) — —	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は肥厚し上下に拡張される。	〃	
〃-7	〃	〃 〃	27.0 (7.3) — —	〃	内面には条線が施されるが、単位は不明。	
〃-8		〃 〃	25.5 (8.6) — —	〃	内面には8本単位の条線が施される。	
〃-9		〃 〃	29.0 (6.1) — —	〃	内面には7本単位の条線が施される。	
〃-10	III層	〃 〃	25.3 (5.4) — —	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は上下に拡張され上方に立ち上がる。	回転ナデ調整が施され、内面に4本の条線が残る。	
〃-11	〃	〃 〃	28.0 (7.7) — —	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は肥厚し上方に立ち上がる。	内面に8本単位の条線が施される。	
〃-12	VI層	〃 〃	27.6 (8.7) — —	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は肥厚し上方に立ち上がる。 内面に2条の凹線が施される。	下から上へ10本単位の条線が施される。	
〃-13	〃	〃 〃	30.0 (7.6) — —	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は肥厚し上方に拡張される。	内面に8本単位の条線が施される。	
〃-14	V層	〃 小皿	6.3 1.8 — 4.6	平坦な底部から、体部は内湾し、口縁部は上方に立ち上がる。	底部外面は回転糸切り。	

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
96-15	IV層	備前焼 壺	8.4 (4.0) — —	頸部は直立して上方に立ち上がり、 口縁部は肥厚して玉縁状を呈する。		
〃-16		〃 〃	10.4 (4.9) — —	肩部は張って胴部に大きく開く。 頸部は上方に立ち上がり、端部は やや肥厚し玉縁状を呈す。 肩部に把手状の突起がみられる。		
97-1		緑釉陶器 碗	— (2.3) — 8.4	断面方形形状の削り出し高台である。	全面に緑釉が施される。	
〃-2		灰釉陶器 碗	— (2.2) — 8.0	三日月状高台を有する。	内面に灰釉がかかる。	
〃-3	VI層	〃 〃	17.0 (3.4) — —	体部は内湾して外上方へ立ち上がり、 口縁部は外反する。	口縁部内面に灰釉がかかる。 回転ナデ調整。	
〃-4	〃	〃 〃	15.9 (3.9) — —	〃	〃	
〃-5	V層	瀬戸・美濃系陶器 皿	11.7 2.5 — 5.5	平坦な底部から内湾して外上方へ 立ち上がり、口縁部は外反する。	口縁部内外面まで施釉される。 外底は回転糸切り。	
〃-6	III層	〃 卸し皿	— (1.2) — 5.7	平坦な底部から大きく外上方に開く 体部をもつ。	外底は回転糸切りが施され、重ね 焼き痕が観察できる。 見込みは格子状の卸し目が施され、 目跡がつく。	
〃-7	V層	〃 皿	14.6 (2.9) — —	体部は直線的に外上方へ立ち上がる。 口縁端部は肥厚し面を有する。 端面は凹線状になる。	内外面施釉される。	
〃-8	III層	〃 天目茶碗	— (2.2) — 4.0	削り出し高台で、高台脇は削り出される。	体部下半から露胎。	
〃-9		〃 〃	11.6 (4.9) — —	体部は内湾して外上方に立ち上がり、 口縁部下で屈曲し端部は外反する。 高台脇は削り出される。	高台脇は露胎。	
〃-10	III層	〃 〃	11.8 8.0 — 4.7	体部は直線的に外上方へ立ち上がり、 口縁部下で屈曲し端部は外反する。	体部下半迄施釉。	
〃-11	V層下	青磁 皿	— (0.9) — 4.9	平坦な底部から体部は大きく開く。 見込みに雷光文が施される。	〃	同安樂系
〃-12	〃	〃 〃	— (2.0) — 5.0	平坦な底部から体部は大きく開く。	〃	〃
〃-13	〃	〃 〃	— (1.0) — 5.4	平坦に近い底部から、体部下半で 屈曲し外上方に立ち上がる。	外面体部下半迄施釉。 内面に貫入が入る。	同安樂系 【-1・b類】
〃-14	V層	〃 〃	— (1.0) — 5.5	〃 見込みに雷光文が施される。	外面体部下半迄施釉。	〃

杯図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
97-15	V層	青磁 皿	10.5 2.2 — 4.8	平坦な底部から体部中位で屈曲して、口縁部はさらに外上方にのびる。体部と見込みの境に段を有す。見込みに片彫りが施される。	外面体部下半迄施軸。	同安窯系 I-1・b類
〃-16	〃	〃 〃	— (1.1) — 6.0	平坦な底部から、体部下半で屈曲する。見込みに構描きによる文様と雷光文が施される。	底部は露胎。	〃 I-2・b類
〃-17	III層	〃 〃	— (1.2) — 5.2	平坦な底部から、体部下半で屈曲し外上方に立ち上がる。見込みに雷光文が施される。	底部の外面は回転ヘラ削り。見込みから体部下位迄淡青灰色軸が施軸される。底部は露胎。	〃 I-1・b類
〃-18	〃	常滑焼 甕	— (12.2) — 24.4	平坦な底部から、外上方に立ち上がり胴部にいたる。	外面は、胴部下位まで縦位のヘラ削り、底部は横位のヘラ削りが施される。内面はハケの後ナデ調整。	
〃-19	IV層	亀山焼 甕	49.8 (9.2) — —	口縁部は「ハ」の字状に外反する。	外面は格子のタタキ、内面は波状のタタキが施される。	
98-1	III層	青磁 皿	11.0 2.8 — 5.2	逆台形状の高台がつき、腰部で屈曲し、体部は外反して外上方へ大きく立ち上がる。端部は稜花である。内面には、口縁に沿って2-3本の弧線が施される。	内面見込みは円形状の露胎で他は施軸される。外面は贅付及び外底は露胎である。	
〃-2	V層	〃 〃	11.0 (2.6) — —	腰折れで体部は外反して外上方へ立ち上がる。口縁端部は稜花である。内面にヘラ描きが施される。		
〃-3	III層	〃 〃	11.6 (1.8) — —	外反する口縁部で、端部は稜花である。内面にヘラ描きが施される。		
〃-4	〃	〃 〃	13.2 (2.2) — —	〃		
〃-5	V層	〃 〃	12.3 (2.1) — —	体部下半で屈曲し、外反して口縁部にいたる。口縁端部は稜花である。内面にヘラ描きの花文が施される。		
〃-6	〃	〃 〃	11.6 (2.0) — —	体部下半で屈曲し、外反して口縁部にいたる。端部は稜花である。口縁部内面に一条の沈線が施される。		
〃-7	〃	〃 〃	9.0 (2.0) — —	逆台形の削り出し高台である。	外底は露胎。	
〃-8	IV層	〃 〃	11.6 3.1 — 6.6	削り出し高台で、腰部で屈曲し、体部は直線的に外上方に立ち上がり口縁部にいたる。端部は丸くおさめる。	見込みは蛇ノ目軸ハギ。外面は贅付まで施軸。外底は無軸。内外面に荒い貫入が入る。	
〃-9	V層	〃 〃	— (1.5) — 5.8	体部は内湾し、口縁部は外反する。内外面無文である。		
〃-10	〃	〃 〃	16.0 (3.9) — —	体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。見込みに段を有する。内外面無文である。	内外面に貫入が入る。	

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
98-11	V層	青磁碗	15.4 (4.2) — —	体部は内湾して外上方へ立ち上がり、体部中で屈曲して、口縁部はやや外反する。口縁部下位内面に沈線が施される。外面は擬位の櫛掻き文、内面は雷光文と櫛掻き文が施される。		同安窯系 I-1・b類
◇-12	◇	◇	15.3 (4.2) — —	体部は内湾して外上方に立ち上がり、体部上位で若干内側に屈曲して、口縁部はやや外反する。外面は擬位の櫛掻き文・内面は雷光文が施される。		◇
◇-13	◇	◇	15.3 (4.8) — —	体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部にいたる。口縁部内面下位に沈線が施される。外面は擬位の櫛掻き文、内面は雷光文と櫛掻き文とが施される。		◇
◇-14	V層下	◇	— (4.2) — 4.9	比較的高い台形状の削り出し高台。体部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。体部と見込みの境に段を有する。外面は擬位の櫛掻き文、内面は櫛掻きの花文と雷光文が施される。	外面体部下位まで施軸される。	◇
◇-15	◇	◇	— (3.6) — 5.0	断面が逆台形状の削り出し高台。体部は直線的に外上方に立ち上がる。内外面に櫛掻きが施される。	◇	◇
◇-16	V層	◇	— (3.2) — 6.2	断面が方形形状の削り出し高台。体部は内湾して外上方へ立ち上がる。内面は、2条の沈線で分割される。	高台部は、畳付及び外底が露胎。	龍泉窯系
◇-17	◇	◇	15.4 (3.6) — —	体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。口縁部内面に、2条の沈線と飛雲文が施される。		龍泉窯系 I-4・a類
◇-18	◇	◇	15.0 (4.1) — —	体部は、内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反する。内面に草花文が施される。		龍泉窯系 I-2類
◇-19	VI層	◇	— (4.2) — —	腰部で屈曲し、体部は内湾して外上方に立ち上がる。内面に草花文が施される。見込みに1条の沈線が施される。		
◇-20	V層下	◇	16.5 7.5 — 6.2	器壁の厚い削り出し高台。腰部で屈曲し、体部は直線的に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。内面に2条の沈線で5分割され、その中に飛雲文が施され、見込みに文様を片切り彫りしている。	軸は畳付をこえて施軸。外底のみ露胎。	龍泉窯系 I-4類
◇-21	V層	◇	15.6 (4.0) — —	体部は、直線的に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。内面に、片切り彫りによる文様が施されている。		◇
◇-22	◇	◇	17.4 (6.1) — —	腰部で屈曲して、体部は直線的に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。体部内面に飛雲文が施されている。		龍泉窯系 I-4・a類
99-1	◇	◇	17.0 6.7 — 4.8	器壁の厚い断面方形形状の削り出し高台。体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部はやや外反する。外面に鑄造弁文が施されている。	内外面にやや貫入が入って、畳付及び外底は露胎。	龍泉窯系 I-5・b類
◇-2	V層	◇	15.5 (6.3) — —	体部は、内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は若干外反する。端部は丸くおさめる。外面に、鑄造弁文が施される。		◇

挿入番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
99-3	V層	青磁 碗	15.6 (5.7) — —	体部は、内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は若干外反する。端部は丸くおさめる。外面に、竊蓮弁文が施される。		龍泉窯系 I-5・b類
◇-4	◇	◇ ◇	15.6 (3.2) — 5.0	器壁の厚い断面方形の削り出し高台。体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は若干外反する。外面に、竊蓮弁文が施される。	高台壘付及び外底は露胎。	◇
◇-5	◇	◇ ◇	15.4 (4.5) — —	体部は内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。外面に竊蓮弁文が施される。		◇
◇-6		◇ ◇	13.6 (4.9) — —	体部は、内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部はやや外反する。外面に竊蓮弁文が施される。		◇
◇-7	◇	◇ ◇	16.1 (5.7) — —	◇		◇
◇-8	◇	◇ ◇	15.0 (4.7) — —	◇		◇
◇-9	皿層	◇ ◇	14.8 (2.8) — —	体部から口縁部にかけて直線的に外上方に立ち上がる。外面に竊蓮弁文が施される。	荒い貫入が入る。	◇
◇-10	V層	◇ ◇	16.0 (2.2) — —	◇		◇
◇-11	◇	◇ ◇	16.0 (2.5) — —	◇	内外面に貫入が入る。	◇
◇-12	◇	◇ ◇	17.0 (2.6) — —	◇		◇
◇-13	V層下	◇ ◇	15.8 (3.1) — —	◇		◇
◇-14	皿層	◇ ◇	14.6 (3.0) — —	◇	磨耗が著しく不明。	◇
◇-15	V層	◇ ◇	17.4 (3.4) — —	◇		◇
◇-16	◇	◇ ◇	16.0 (3.4) — —	◇	内外面に貫入が入る。	◇
◇-17	◇	◇ ◇	16.0 (3.3) — —	◇		◇
◇-18	◇	◇ ◇	17.0 (2.5) — —	◇		◇

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
99-19	V層	青磁碗	16.6 (4.2) — —	体部から口縁部にかけて直線的に外上方に立ち上がる。 — 外面に鑄蓮弁文が施される。	内外面に貫入が入る。	龍泉窯系 I-5・b類
◇-20		◇ ◇	16.0 (3.7) — —	◇		◇
◇-21	V層	◇ ◇	14.6 (4.4) — —	体部は、内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は若干外反する。 外面に鑄蓮弁文が施される。		◇
◇-22	◇	◇ ◇	15.0 (3.3) — —	◇		◇
◇-23	◇	◇ ◇	14.2 (5.6) — —	体部は、内湾して外上方に立ち上がり口縁部にいたる。端部は丸くおさめる。外面は、丸ノミ状工具により簡略された蓮弁文が施され、内面は無文である。	内外面に貫入が入る。	
◇-24	◇	◇ ◇	15.1 (3.4) — —	体部は、内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部は若干外反する。 外面に鑄蓮弁文が施される。		
◇-25	◇	◇ ◇	15.5 (3.6) — —	体部は、内湾して外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。 外面に鑄蓮弁文が施される。		龍泉窯系 I-5・b類
◇-26	◇	◇ ◇	15.4 (3.9) — —	体部は、内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部は若干外反する。 外面に、丸ノミ状工具による蓮弁文が施される。内面は口唇部に浅い1条の沈線が施される。		
◇-27	◇	◇ ◇	14.5 (3.7) — —	体部は、直線的に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。 外面に鑄蓮弁文が施される。		龍泉窯系 I-5・b類
◇-28	V層下	◇ ◇	14.8 (3.0) — —	体部から口縁部にかけて直線的に外上方に立ち上がる。 — 外面に、ヘラ描きの蓮弁文が施される。		
◇-29	V層	◇ ◇	— (4.9) — 5.7	断面方形状の削り出し高台。 体部は、内湾して外上方へ立ち上がる。外面に片切り彫りの蓮弁文が施される。	髷付及び外底は露胎。	
◇-30	◇	◇ ◇	— (3.0) — 6.4	◇	高台胎は、ヘラ削りされ、その後施釉される。髷付と外底は露胎であるが、一部髷付まで釉がかかる。	
100-1	IV層	◇ ◇	15.0 (4.1) — —	体部は、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。 内外面無文である。 内面に1条の沈線が施される。		
◇-2	V層	◇ ◇	14.3 (3.0) — —	体部は、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。 内外面無文である。		
◇-3	IV層	◇ ◇	15.2 (3.8) — —	◇	内外面に貫入が入る。	

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
100-4	IV層	青磁 碗	14.0 (4.0) — —	体部は、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。 — 内外面無文である。	内外面に貫入が入る。	
◇-5	V層	◇ ◇	15.4 (3.6) — —	◇		
◇-6	III層	◇ ◇	15.6 (3.8) — —	◇	内外面に貫入が入る。	
◇-7		◇ ◇	15.4 (3.4) — —	◇	◇	
◇-8	III層	◇ ◇	14.3 (3.8) — —	◇		
◇-9	IV層	◇ ◇	14.9 (4.7) — —	◇	内外面に細かい貫入が入る。	
◇-10	III層	◇ ◇	13.4 (3.8) — —	◇	内外面に荒い貫入が入る。	
◇-11	V層	◇ ◇	14.6 (4.4) — —	◇		
◇-12	◇	◇ ◇	16.2 (4.6) — —	◇	内外面に貫入が入る。	
◇-13	IV層	◇ ◇	16.0 (3.4) — —	体部は、内湾して外上方に立ち上がり口縁部にいたる。 — 内外面無文である。	内外面に荒い貫入が入る。	
◇-14	◇	◇ ◇	15.3 (3.4) — —	◇		
◇-15	III層	◇ ◇	15.2 (2.8) — —	体部は、直線的に外上方に立ち上がる。口縁部内面に1条の沈線が施される。		
◇-16	V層	◇ ◇	12.3 (3.8) — —	体部は、内湾して外上方に立ち上がり口縁部にいたる。	外面にロクロ痕が残る。	
◇-17	IV層	◇ ◇	11.3 (3.9) — —	体部は、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部はやや肥大して外反する。 — 外面には、丸ノミ状工具による漉弁文が施される。内面は無文。	内外面に貫入が入る。	
◇-18	III層	◇ ◇	12.6 (2.2) — —	体部から口縁部にかけて直線的に外上方に立ち上がる。 — 口縁部外面に雷文帯が施される。		
◇-19	V層	◇ ◇	15.1 (4.2) — —	体部は、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は丸くおさめる。 — 口縁部外面に雷文帯が施される。		

種別番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
100-20	V層下	青磁 碗	15.0 (3.1) — —	体部から口縁部にかけて直線的に外上方に立ち上がる。 — — 外面に竊蓮弁文が施される。	内外面に貫入が入る。	
〃-21		〃 〃	14.8 (4.4) — —	体部は、内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部は若干外反する。 — — 外面は、雷文帯と蓮弁が施される。		
〃-22	III層	〃 〃	— (2.5) — 5.1	断面逆台形状の削り出し高台。	外底のみ露胎で、見込みから高台畳付まで青緑色釉が施されている。	龍泉窯系
〃-23	V層下	〃 〃	— (2.2) — 5.8	〃	高台外面まで施釉され、外底、畳付は露胎。 内外面に貫入が入る。	
〃-24	IV層	〃 〃	— (2.1) — 8.9	断面方形形状の直立した削り出し高台で、体部は内湾して外上方に立ち上がる。	見込みは円形状に露胎、外面は高台畳付まで青緑色釉が施される。	
〃-25	V層	〃 〃	— (2.6) — 6.5	〃	高台部畳付及び外底は無釉であるが、一部釉が残る。 内外面無文で青味を帯びた緑色釉が施される。	龍泉窯系 I-1類
〃-26	〃	〃 〃	— (2.3) — 5.3	〃	畳付から外底は露胎。	
〃-27	V層下	〃 〃	— (2.9) — 5.2	断面方形形状の削り出し高台で、体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。	畳付及び外底は露胎であるが、一部釉がかかる。	
〃-28		〃 〃	— (3.8) — 5.8	器壁の厚い底部で、断面方形形状の削り出し高台を有す。体部は内湾して外上方に立ち上がる。		
〃-29	V層	〃 〃	— (2.5) — 7.6	器壁の厚い削り出し高台で、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。 — — 見込みに浅い沈線が施される。	高台畳付及び外底は露胎。	
101-1	〃	〃 〃	— (2.6) — 5.0	断面方形形状の削り出し高台で、体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。 — — 見込みに「国」がスタンプされる。	〃	龍泉窯系 I類
〃-2	〃	〃 〃	— (1.7) — 5.0	断面方形形状の削り出し高台である。 見込みに花文のスタンプが施される。	畳付をこえて内側まで施釉される。	
〃-3	〃	〃 〃	— (2.7) — (5.0)	器壁が厚い削り出し高台を呈す。 見込みに「精」のスタンプが施される。 — — (5.0)	見込みから畳付をこえて高台内面まで施釉される。 内外面に貫入が入る。	龍泉窯系 I-5・d類
〃-4	〃	〃 〃	— (1.9) — 5.5	断面逆台形状の削り出し高台。 見込みに印花文がスタンプされる。	高台部及び外底は露胎。	龍泉窯系 I-5・c類
〃-5	〃	〃 〃	— (2.6) — 6.6	器壁が厚く断面方形形状の削り出し高台で、体部は内湾して外上方へ立ち上がる。 — — 見込みは沈線内に「金玉満堂」のスタンプが施される。	畳付及び外底は露胎。	龍泉窯系 I-5・d類

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
101-6	V層	青磁碗	— (2.6) — 4.6	断面逆台形状の削り出し高台で、 体部は内湾して外上方へ立ち上がる。 — 外面に簡潔弁文、見込みに印花文のスタンプが施される。	髹付及び外底は露胎。	
〃-7	〃	〃	— (2.0) — 4.6	器壁が厚く、断面逆台形状の削り出し高台。 — 見込みに印花文がスタンプされる。	〃	
〃-8	〃	〃	— (2.0) — 5.4	〃	外底は露胎。	
〃-9	IV層	〃	— (1.8) — 5.9	断面逆台形状の削り出し高台。 — 見込みに印花文がスタンプされる。	〃	
〃-10	V層	〃	— (1.7) — 5.4	器壁が厚く高台の削りは浅い。 — 見込みに印花文がスタンプされる。	高台外面まで施釉され、髹付に一部釉がかかる。	
〃-11	〃	〃	— (2.1) — 5.6	断面逆台形状の削り出し高台。 — 見込みに印花文がスタンプされる。	高台内面まで施釉され、外底は輪状に釉をかきとり露胎。	龍泉窯系 B類
〃-12	IV層	〃	— (1.9) — 6.2	浅い削り出し高台で、高台脇も浅く削り出している。 — 見込みに印花文がスタンプされる。	外面は露胎。	
〃-13	〃	〃	— (3.2) — 6.6	器壁が厚く、断面方形形状の削り出し高台で、体部は内湾して外上方に立ち上がる。 — 見込みに印花文がスタンプされる。	髹付及び外底は露胎。 内外面に貫入が入る。	
〃-14	V層	〃	13.8 (6.6) — —	体部は、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。 — 見込みに1条の沈線が施され、中に印花文がスタンプされる。	体部下半は露胎。	
〃-15	〃	〃	— (4.7) — 5.4	断面方形形状の削り出し高台で、体部は内湾して外上方に立ち上がる。 — 体部外面中に1条の沈線が施される。内面に横書き文様が施される。	高台外面まで施釉。	
〃-16	III層	〃	— (1.8) — 5.8	断面逆台形状の削り出し高台。 — 見込みに草花文が施される。 — 外底中央部に肥巾が残る。	見込み及び高台外面まで淡青灰色釉が施される。	
〃-17	V層	小碗	6.6 3.2 — 2.7	底い高台を有し、体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は上方に立ち上がる。	髹付に砂が溶着する。 内外面に荒い貫入が入る。	
〃-18	IV層	香炉	9.8 (2.0) — —	体部は、直線的に上方に立ち上がり、端部は内側に肥厚する。	内面は露胎。 外面に細かい貫入が入る。	
〃-19	II層	白磁皿	12.8 3.5 — 7.6	逆三角形形状の削り出し高台で、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。	髹付のみ削り出され砂が溶着する。その他は全面に施釉される。	伊万里か？
〃-20	III層	〃	13.7 3.5 — 7.6	体部は、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は端反りである。	全面施釉して、髹付のみ釉をかきとる。	

挿入番号	遺構番号	器種	口径 器高 口径 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
101-21	IV層	白磁 皿	9.8 3.0 — 2.8	蒼筒底で、体部は内湾気味に外上方に立ち上がり口縁部にいたる。	底部のみ露胎で、他は全面白濁色釉が施される。 外面にロクロ痕が残る。	
〃-22	〃	〃 〃	10.0 2.4 — 3.3	削り出し高台部から、体部は内湾気味に大きく開いて外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	内面及び外面高台部まで施釉。 部分的に高台外面まで白濁色釉が施される。	
〃-23	〃	〃 〃	10.5 (2.0) — —	体部は、内湾して外上方に立ち上がり口縁部にいたる。 — 内外面無文である。	外面にロクロ痕が残る。 内外面に貫入が入る。	
102-1	VI層	〃 〃	— (0.8) — 6.2	平坦な底部から屈曲して外上方に立ち上がる。	体部下半から外底にかけて露胎。	Ⅸ類
〃-2	〃	〃 〃	8.1 1.4 — 5.3	平坦な底部から屈曲し、口縁部は外上方に直線的に立ち上がる。	口縁端部は口禿げ。 内外面に貫入が入り、白濁色釉が施される。	〃
〃-3	V層下	〃 〃	9.8 (2.2) — —	体部は、直線的に外上方へ立ち上がる。	体部下半まで施釉。 口縁端部は口禿げである。	〃
〃-4	V層	〃 〃	9.6 2.5 — 5.8	平坦な底部から、屈曲して体部は直線的に外上方に立ち上がり口縁部にいたる。	〃	〃
〃-5	〃	〃 〃	10.6 (2.4) — —	体部は、直線的に立ち上がり口縁部にいたる。	口縁端部は口禿げである。	〃
〃-6	〃	〃 〃	9.9 2.2 — 5.8	やや上げ底風の底部であるが平坦である。体部は直線的に外上方に立ち上がり口縁部にいたる。	体部下半及び外底は露胎。 口縁端部は口禿げである。	〃
〃-7	〃	〃 〃	10.0 2.5 — 6.0	平坦な底部から屈曲して、体部は直線的に外上方へ立ち上がり口縁部にいたる。	外底は露胎。 口縁端部は口禿げである。	〃
〃-8	〃	〃 〃	9.7 2.7 — 6.2	〃	〃	〃
〃-9	IV層	〃 〃	9.2 3.0 — 5.6	平坦な底部から屈曲して、体部は直線的に外上方に立ち上がり、端部は短かく外反する。	端部は内側に掛けて釉が削りとられ口禿げである。 体部下半から外底にかけて露胎。	〃
〃-10	〃	〃 〃	11.0 3.9 — 6.2	平坦な底部から、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。 見込みに段を有す。	口縁端部は口禿げである。	〃
〃-11	V層	〃 〃	11.1 (3.0) — —	体部は、内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	〃	〃
〃-12	〃	〃 碗	15.6 (4.5) — —	体部は、内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は短かく水平に外折する。		Ⅵ類
〃-13	〃	〃 〃	16.0 (3.8) — —	体部は、内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁端部は短かく水平に外折する。 — 内面に櫛掻きの文様が施される。		

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手法	備考
102-14		白磁碗	16.5 (3.3) — —	体部は、直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は短かく水平に外折する。		
◇-15	V層下	◇ ◇	15.4 (2.8) — —	体部は、直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は短かく水平に外折する。 体部内面に浅い沈線。		
◇-16	IV層	◇ ◇	16.0 (4.3) — —	体部は、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。		
◇-17		◇ ◇	16.0 (4.1) — —	体部は、内湾気味に外上方に立ち上がり、口縁部は若干外反する。		
◇-18	III層	◇ ◇	16.0 (4.1) — —	体部は、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は外反する。	体部外面にヘラ削りが施される。	
◇-19	V層	◇ ◇	20.0 (3.4) — —	体部は、直線的に外上方に立ち上がり、口縁部は屈曲して短かく外反する。		
◇-20		◇ ◇	15.0 (4.3) — —	体部は、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は小さい玉縁を呈する。	体部下半まで施釉される。	
◇-21		◇ ◇	15.6 (4.6) — —	体部は、内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。	外面にロクロ痕が残る。	
◇-22		◇ ◇	16.0 (5.0) — —	体部は、直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は玉縁を呈する。 見込みに沈線をもつ。	内面は全面施釉。外面は体部中程まで施釉される。	IV類
◇-23		◇ ◇	16.0 (2.9) — —	体部は、直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部は玉縁を呈する。		◇
◇-24		◇ ◇	16.0 (4.0) — —	◇		◇
◇-25		◇ ◇	17.4 (2.3) — —	◇		◇
◇-26		◇ ◇	14.6 (4.1) — —	◇	体部外面中位まで白濁色釉が施される。	◇
◇-27	VI層	◇ ◇	15.0 (3.9) — —	◇		◇
◇-28	V層	◇ ◇	18.7 (2.9) — —	◇		◇
◇-29		◇ ◇	— (1.2) — 3.5	断面逆台形状の削り出し高台である。	内面は、白濁色釉が施される。 高台脇から外底まで露胎。	

棟号番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 法量 (cm)	形態・文様	手法	備考
102-30		白磁碗	— (2.0) — 3.6	断面方形形状の削り出し高台である。	体部下半迄白濁色釉が施される。 細かい貫入が入る。	
〃-31	V層	〃 〃	— (1.9) — 6.9	器壁が厚く、幅広く削り出した高台である。 見込みに沈線状の浅い段を有する。		
〃-32		〃 〃	— (1.9) — 7.4	底部は、浅い削り出し高台で、見込みに段をもつ。	外面は露胎である。	
〃-33	V層	〃 〃	— (2.5) — 7.4	底部は浅い削り出しで、低い高台をもつ。体部は、直線的に外上方へ立ち上がる。	見込みから体部外面下半まで施釉される。	
〃-34	〃	〃 〃	— (2.1) — 7.4	逆台形状の浅い削り出し高台で、体部は内湾して外上方へ立ち上がる。	外面は無釉。	
〃-35	VI層	〃 〃	— (1.7) — 7.0	底部は、浅い削り出しで低い高台を有する。	見込みから高台脇まで施釉される。	
〃-36	〃	〃 〃	— (2.9) — 6.2	底部は、浅い削り出しの低い高台で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	内面と体部外面下半まで施釉される。	
〃-37	V層	〃 〃	— (3.8) — 8.0	断面逆台形状の浅い削り出し高台で、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。 体部内面下位に段を有する。	体部外面下半まで施釉される。	
〃-38	〃	〃 〃	— (4.2) — 6.0	細く比較的高い高台で、体部は内湾気味に外上方へ大きく立ち上がる。 見込みに浅い段を有す。	高台脇まで施釉され、一部外面まで施釉される。	V類
〃-39	〃	〃 〃	— (3.1) — 6.0	比較的高い削り出し高台で、鬘付の幅は狭い。	外面は露胎、内面は施釉される。	
〃-40	〃	〃 〃	— (2.5) — 6.0	細く比較的高い削り出し高台を呈し、鬘付の幅は狭い。	見込から体部外面下半まで施釉される。	
103-1	V層下	〃 〃	— (3.8) — 6.5	比較的高い削り出し高台で、体部は内湾して外上方へ立ち上がる。	高台部は露胎で、高台脇まで施釉される。	
〃-2	V層	〃 〃	— (2.9) — 5.8	直立した高い削り出し高台で、見込みに沈線が施される。	高台外面まで施釉、鬘付及び外底は露胎。	V類
〃-3	VI層	〃 〃	— (4.5) — 6.0	高台は外面垂直、内面は斜めに削り出され、体部は内湾して外上方へ立ち上がる。 見込みに段を有す。	体部下半まで施釉される。	
〃-4	V層	〃 〃	— (3.1) — 6.0	細く高い逆三角形の高台である。 見込みに櫛で花文が施される。	高台外面まで施釉され、内面及び外面は露胎である。	V・b類
〃-5	〃	〃 〃	— (4.2) — 5.6	断面逆三角形の削り出し高台で、体部は内湾して外上方へ立ち上がる。 内面に櫛描き文が施される。	高台外面まで施釉される。	

種目番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
103-6	V層	白磁碗	— (4.9) — 6.0	断面方形形状の削り出し高台で、体部は内湾して外上方に立ち上がる。	畳付及び外底は露胎。青白色に近い発色。	Ⅸ類
〳-7	VI層	〳 〳	— (3.7) — 6.2	高台は外面垂直、内面斜めに削り出され、体部は、内湾気味に外上方に立ち上がる。 見込みに段を有す。	体部下半まで施軸される。	
〳-8	V層下	〳 〳	— (5.4) — 6.0	比較的高い高台から、腰部で屈曲し、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がる。	高台畳付は軸を削る。 外底は露胎。	
〳-9	V層	青白磁合子	8.3 (1.3) — —	体部から口縁部にかけて内湾気味に上方に立ち上がる。 体部の外面上位に烈点状の突起が施される。	口縁端部は内外露胎。	
〳-10	IV層	〳 〳	7.0 (1.9) — —	体部は内湾して外上方へ立ち上がり、受部は内傾し立ち上がる。 外面には蓮弁文が施される。	受部は無軸で、内面及び外面は施軸される。	
〳-11	V層	〳 〳	6.1 2.0 — 5.9	底部は平底で、体部は内湾して立ち上がり、受部は内傾して立ち上がる。 外面には蓮弁文が施される。	受部及び外底は露胎で、内面及び外面は施軸される。	
〳-12	〳	〳 〳	5.6 1.6 — 6.1	体部は、内湾して外上方へ立ち上がり、受部は内面に突出する。	体部外面上位と内面に施軸される。	
〳-13	〳	近世陶磁器 小杯	6.0 3.6 — 2.2	断面逆台形状の削り出し高台で、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。 体部外面に、丸ノミ状の工具により蓮弁が施される。	高台脇まで施軸される。	伊万里焼
〳-14	II層	〳碗	8.8 4.9 — 4.0	逆三角形形状の削り出し高台で、体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。 外面に草花文、高台脇に3条の界線が施される。	全面に施軸される。	〳
〳-15	〳	〳皿	12.2 3.9 — 4.0	断面逆台形状の削り出し高台で、体部は内湾して外上方に立ち上がり、口縁部にいたる。	体部下半まで施軸される。	唐津焼
〳-16	III層	〳碗	— (1.6) — 5.4	「ハ」の字状に開く削り出し高台。	内面及び高台脇まで施軸される。	〳
〳-17	V層	〳皿	14.0 3.0 — 6.1	削り出し高台で、体部は内湾して外上方に立ち上がり口縁部にいたる。 内面に鶴文、見込み圏線内にも文様が染付けられる。		伊万里焼
〳-18	III層	〳碗	— (3.9) — 4.7	断面方形形状の削り出し高台で、体部は内湾して外上方に立ち上がる。 外面に文様、外底に文字が染付けられる。	全面に施軸される。	〳
〳-19	II層	〳皿	— (1.2) — 2.3	断面逆台形状の削り出し高台で、体部は内湾して外上方へ立ち上がる。	内面は施軸される。 見込みに胎土目が残る。	唐津焼
〳-20	〳	〳 〳	20.1 (2.4) — —	体部は内湾して外上方へ立ち上がり、口縁部は屈曲して大きく外反する。 内面に栴檀き文が施される。		伊万里焼

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 底径 (cm)	形態・文様	手 法	備 考
103-21	Ⅲ層	近世陶磁器 皿	— (2.0) — 4.4	削り出し高台で、体部は内湾気味に外上方に立ち上がる。	内面は濁緑色の釉が施され、胎土目が残る。	唐津焼
ク-22	V層	産地不明 陶器 碗	— (1.0) — 4.8	「ハ」の字状に開く逆台形状の高台を有す。体部は内湾して外上方へ立ち上がる。	全面施釉後畳付のみ削りとり、見込みと畳付に胎土目が残る。	
ク-23	Ⅲ層	ク 皿	— (1.6) — 4.8	逆台形状の高台を有し、口縁部下で屈曲し上方へ立ち上がる。	体部下半まで施釉される。見込みは、蛇ノ目状釉ハギで砂着着。	
ク-24		ク ク	11.6 4.0 — 5.2	断面逆台形状の削り出し高台で、体部は内湾気味に外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。	全面に施釉される。見込みに4ヶ所と、畳付に胎土目が残る。	
ク-25	V層	ク ク	— (1.6) — 5.8	断面逆台形状の削り出し高台を呈す。	畳付のみ露胎で他は施釉。見込みに胎土目が残る。	
ク-26	Ⅱ層	ク ク	— (2.6) — 4.6	断面逆台形状の削り出し高台で、体部下位で屈曲し外上方へ立ち上がる。	体部下半まで施釉される。見込みに胎土目が残る。	
ク-27	Ⅲ層	ク 碗	— (2.7) — 5.0	断面逆台形状の削り出し高台で、体部は内湾して外上方へ立ち上がる。		
104-1	V層	ク 皿	— (1.8) — 5.0	断面逆台形状の削り出し高台から、体部は外上方に大きく開く。	見込みは蛇ノ目状釉ハギ。外面は露胎である。	
ク-2	Ⅲ層	ク 碗	— (5.1) — 4.4	断面逆台形状の削り出し高台から、胎部は内湾して外上方に立ち上がる。	高台外面まで施釉され、畳付及び外底は露胎。	
ク-3	ク	ク ク	11.7 7.9 — 5.2	「ハ」の字状に開く高台で、体部は内湾し、口縁部は上方に立ち上がる。	全面に施釉される。内外面に貫入が入る。	
ク-4	V層	ク ク	15.0 (3.9) — —	体部は、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部はやや内傾する。	内外面無文である。	
ク-5	ク	ク 壺	23.8 (3.2) — —	口縁部は大きく外反する。口縁端部は垂直な面を有する。	ロクロナデ調整。	
ク-6	Ⅵ層	ク ク	— (8.8) — 19.2	平坦な底部から体部は直線的に外上方に立ち上がる。	胴部下位の外面に平行のタタキが施され、底部内面に指頭圧痕が残る。	
ク-7	Ⅱ層	ク 盤	28.8 (5.1) — —	体部は、内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は大きく外反する。口縁部と体部の境、体部と底部の境に白象嵌の圏線、口縁部内面にも雷文を白象嵌が施される。		
ク-8	V層	ク 鉢	29.0 (13.0) — —	体部は、直線的に外上方へ立ち上がり端部は斜位に切り落とす。	ロクロナデ調整。	
ク-9	Ⅵ層	ク ク	28.0 (10.9) — —			

挿図番号	遺構番号	器種	口径 器高 胴径 法量 (cm) 底径	形態・文様	手 法	備 考
104-10		産地不明 陶器 擂鉢	— (11.6) — 14.8	平坦な底部から、体部は直線的に外上方へ立ち上がる。	内面には、全面に条線が施される。内底面は、格子状に条線が施される。	
◇-11	Ⅲ層	◇ 鉢	— (6.0) — 7.2	断面逆台形状の削り出し高台を呈し、体部は、内湾して外上方へ立ち上がる。	体部下半まで施釉される。見込みに目跡が残る。	大皿か？

土 錘 計 測 表

遺物 番号	全長 (cm)	直径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	遺物 番号	全長 (cm)	直径 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)
22- 1	4.0	1.1	0.4	3	22-64	5.9	1.5	0.5	10.8
22- 2	4.1	1.0	0.4	5	22-65	7.2	1.8	0.7	9.9
22- 3	3.7	1.2	0.4	3.8	22-66	7.5	1.8	0.6	9.7
22- 4	3.7	1.1	0.4	3.2	22-67	7.5	1.7	0.7	9.6
22- 5	4.2	1.1	0.4	3.3	22-68	6.6	1.3	0.3	8
22- 6	3.9	1.0	0.4	3	22-69	5.9	1.7	0.6	11
22- 7	3.9	1.2	0.6	5	22-70	6.0	1.2	0.4	6.6
22- 8	3.4	1.2	0.4	4.8	22-71	5.3	1.7	0.6	9.5
22- 9	4.8	1.1	0.4	4.4	23- 1	6.1	3.8	0.9	84.5
22-10	4.4	1.1	0.4	4	23- 2	5.8	3.9	1.0	87.5
22-11	4.2	1.1	0.3	3.6	23- 3	5.5	3.5	0.9	62.9
22-12	3.9	1.2	0.6	3	23- 4	5.6	3.7	1.1	75
22-13	4.1	1.2	0.4	4	23- 5	5.5	3.7	0.9	75
22-14	4.2	1.4	0.5	6.2	23- 6	5.5	3.9	0.9	85
22-15	4.0	1.3	0.4	5.5	23- 7	5.8	4.0	1.0	85
22-16	4.1	1.2	0.4	4.7	23- 8	5.7	3.5	1.0	66
22-17	4.4	1.4	0.4	8	23- 9	5.7	3.8	0.9	80
22-18	4.5	1.3	0.4	5.8	23-10	5.4	3.5	0.9	62.3
22-19	3.6	1.3	0.4	3.5	23-11	4.9	3.7	1.1	60
22-20	4.0	1.3	0.5	5.2	23-12	4.7	3.6	0.8	66
22-21	4.2	1.1	0.4	4.1	23-13	6.0	3.9	1.0	85
22-22	4.0	1.2	0.4	4	23-14	5.7	3.8	0.9	68.4
22-23	4.0	1.3	0.4	3.5	23-15	6.5	3.5	0.9	74
22-24	4.8	1.2	0.3	6.6	23-16	6.4	3.5	1.2	80
22-25	4.3	1.1	0.4	4	23-17	6.0	3.5	1.1	71.6
22-26	3.7	1.2	0.3	5	23-18	6.4	3.8	1.2	52.5
22-27	4.6	1.2	0.4	5.1	23-19	5.4	3.5	0.9	60
22-28	4.4	1.3	0.6	6	23-20	4.7	3.3	0.9	53.7
22-29	4.7	1.2	0.5	5	23-21	5.2	3.2	0.9	53.5
22-30	4.4	1.2	0.4	3.5	23-22	4.5	2.9	1.1	32.5
22-31	4.3	1.3	0.4	4.5	23-23	5.3	3.5	1.1	60
22-32	5.1	1.3	0.5	5.8	23-24	5.5	3.6	1.0	80
22-33	3.7	1.4	0.4	5.7	23-25	5.2	3.6	1.1	60
22-34	3.0	1.4	0.5	4.8	23-26	5.5	3.6	1.0	60
22-35	3.2	1.2	0.4	4.5	23-27	5.4	4.0	1.2	80
22-36	3.5	1.5	0.5	5.4	23-28	5.2	4.1	1.2	80
22-37	3.4	1.4	0.5	5.1	23-29	5.0	3.8	0.9	70
22-38	3.9	1.4	0.5	4.4	23-30	5.6	3.3	0.9	53.7
22-39	4.8	1.3	0.4	5.8	24- 1	5.2	4.3	0.9	105
22-40	4.5	1.3	0.4	6	24- 2	6.3	3.9	1.0	97
22-41	3.0	1.5	0.5	5.2	24- 3	5.8	4.6	1.0	102.8
22-42	3.5	1.8	0.4	7.2	24- 4	6.5	4.2	1.3	95.5
22-43	3.7	1.1	0.3	5.7	24- 5	6.3	4.5	0.9	125
22-44	4.1	1.8	0.5	9.3	24- 6	5.9	4.2	0.8	122
22-45	4.6	1.7	0.5	4.3	24- 7	6.3	4.1	0.9	120
22-46	4.7	1.7	0.7	9.8	24- 8	6.5	4.3	1.0	120
22-47	4.4	1.4	0.4	4	24- 9	6.0	4.4	1.0	120
22-48	4.2	1.4	0.5	7.2	24-10	6.3	4.1	0.8	125
22-49	4.9	1.2	0.5	4	24-11	6.5	4.0	1.1	110
22-50	5.2	1.2	0.6	6.2	24-12	6.2	4.0	0.9	105
22-51	4.9	1.3	0.4	6.5	24-13	6.0	4.4	0.9	115
22-52	4.5	1.2	0.4	4	24-14	7.1	3.8	1.3	95
22-53	4.9	1.5	0.5	9	24-15	5.4	4.1	0.9	90
22-54	4.7	1.3	0.4	7	24-16	6.5	4.6	1.0	131.6
22-55	5.1	1.2	0.5	4	24-17	6.5	4.2	0.9	101
22-56	5.4	1.8	0.4	4.5	24-18	6.2	4.6	0.8	124
22-57	5.2	1.8	0.7	9.4	24-19	5.6	4.9	0.9	130
22-58	5.1	1.2	0.4	7.2	24-20	6.3	4.5	1.1	120
22-59	5.4	1.3	0.4	9	24-21	6.7	4.5	1.4	120
22-60	5.8	1.35	0.4	9	24-22	6.4	4.5	0.8	119.2
22-61	5.6	1.3	0.4	7.8	24-23	6.3	4.4	1.1	120
22-62	6.2	1.1	0.3	6.1	24-24	6.2	4.1	0.9	110
22-63	5.4	1.4	0.4	6.9	24-25	6.4	4.4	0.8	125

第4章 総括

1) 古墳時代

須恵器

本遺跡群出土の須恵器については『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』の中でも報告しているが、今回もほぼ同数出土しており、さらに遺構の広がり予想される。これらは前回同様古式須恵器の範疇で捉えられるものが大半を占めており、中央政権との密接な繋がりが想定される。また、これだけ纏まって出土する遺跡は県下では今のところ本遺跡と同市古津賀遺跡、大方町早咲遺跡、安芸市横田遺跡など特定の場所に限られる。

これら須恵器の器種別出土比率をみると杯（蓋・身）の72%を筆頭に高杯（有蓋高杯・無蓋高杯）の16%、甕の5%、甗の4%、壺の2%の順となっており、前回同様杯の占める割合が圧倒的に多くなっている。これは祭祀という用途に起因するものと思料される。

以下まずこれら須恵器を時期別に記述し、次に刻線のある須恵器について若干みてみたい。

1. 時期区分

I期

本遺跡群では最も古い段階のもので、今回の調査で初めて設定したものである。出土例は極めて少なく、杯蓋A類（1点）のみであるが形態的にII期の杯蓋B類とは識別できる。前回出土の甗の中にもこの期のものが含まれる可能性がある。在地産ではなく、陶邑からの搬入品ではなかろうか。

II期

I期と大きな時期的隔たりはないものと考えられ、この期のものも陶邑からの搬入品とみられる。全体の3%で前回と合わせても全体の9%である。杯蓋B類、杯身A類、無蓋高杯A類、甗A類がこの期に属するとみられる。全般に作り、焼成とも丁寧である。今回の出土量が僅かであったのは祭祀場所が時期的に移動したためではなかろうか。このことは次のIII期、IV期における出土量の逆転からいえよう。

III期

前回の調査の際最も出土量が多かった時期で、全体の36%を占めていたが、今回は16%にとどまった。その要因には前述のことが考えられよう。杯では蓋のC類、身のB類、有蓋高杯A類、無蓋高杯B類、甗B類、長頸壺、短頸壺A類、甕A類がこの期に属する。この期の須恵器から前段階に比べ焼成、胎土がやや粗悪になった感があり、在地等での生産開始を暗示しているかのようである。

Ⅳ期

今回最も出土量が多かった時期で、全体の66%と圧倒的比率を占め、前回と合わせても46%と全体のはほぼ半数を占める。杯では蓋のD類、身のC類、有蓋高杯B・C類、無蓋高杯C類、甕C類、短頸壺B類、甕B類がこの期に属す。特に前回の調査に比べ有蓋高杯の出土が目立った。全般に作りが粗雑になる。

Ⅴ期

この時期から出土量が激減し、その比率は8%となり10%に満たない。前回と合わせても12%程度である。祭祀行為の終焉をむかえる時期ではなかろうか。杯では蓋のE類、身のD類、甕のC類がこの期に属す。

Ⅵ期

前段階以上に出土量が減り、全体に占める割合は3%になる。杯の蓋のF類、身のE類がこの期に属する。

Ⅶ期

前段階同様その出土は僅かで、杯の形態でこの期の存在を知ることができる程度である。杯蓋G類、杯身F類がこの期に該当する。

Ⅷ期

Ⅶ期同様その出土は僅かで、杯身の形態変化でこの期を設定できる程度である。遺構からはⅦ期以降のものは出土していない。杯身のG類が該当する。

以上本遺跡群出土の須恵器を8期に細分し述べてきた。時期的には5世紀後半から6世紀末ないし7世紀初頭までの時期を当てはめることができよう。なかでも中心となるのは5世紀末から6世紀初頭にかけての時期であり、Ⅲ期とⅣ期が該当する。この時期極めて盛んに祭祀行為が行われている。また、祭祀行為を行った場所は川岸に近いところから時期が新しくなるにつれて離れる傾向があるようで、前回に比べ今回Ⅳ期に属するものが倍以上多く出土したのはそれを物語っている。この河川敷き一帯で執り行われた祭祀行為の盛行は、一方では必需品である須恵器の供給においても新たな展開をなしたのではないかと思料される。すなわち、陶邑一元からの供給では賅いきれず、在地での生産という新たな方向に転換せざるを得なかったのではなかろうか。視覚的にはその変化を看守し得るのではあるが、感覚的域を脱し得ず、今後科学的分析により証明されなければならないであろう。それについては別稿に譲ることとし、ここでは須恵器の在地生産の開始を示唆するに留めたい。ただし、一般的に在地生産の開始時期はまさにこの時期であり、いみじくも本遺跡群の盛行と時を同じくするのである。なお、ここでいうところの各期を陶邑編年と比較すると、Ⅰ期がⅠ型式2段階、Ⅱ期がⅠ型式3段階、Ⅲ期がⅠ型式4段階、Ⅳ期がⅠ型式5段階、Ⅴ期がⅡ型式1段階、Ⅵ期がⅡ型式2段階、Ⅶ期がⅡ型式3段階、Ⅷ期がⅡ型式4・5段階にほぼ対応できるようである。また、時期的にはⅠ・Ⅱ期が5世紀後半、Ⅲ・Ⅳ期が5世紀末から6世紀初頭、Ⅴ期が6世紀前半、Ⅵ・Ⅶ期が6世

表1 刻線のある須恵器一覧表

番号	器種	部位	刻線	遺構	備考
7	杯身C類	底部外面		遺構外出土	
8	杯身D類	〃		〃	
23	〃	〃		SF 1	受部近く
44	杯身C類	〃		SF 2	
51	甕B類	〃		SF 3	
57	杯身C類	〃		SF 4	
59	〃	〃		〃	
76	杯蓋D類	天井部外面		SF 6	
79	杯身C類	底部外面		〃	
83	〃	〃		〃	
84	〃	〃		〃	
114	〃	〃		SF 7	
115	〃	〃		〃	
145	〃	〃		遺構外出土	

紀後半、Ⅷ期が6世紀末から7世紀初頭にはほぼ該当するのではないかと推考され得る。

2. 刻線のある須恵器

今回の調査では14点の刻線のある須恵器が出土しており、これらの大半は「ヘラ記号」などと呼称されているものであるが、中にやや特殊なものもあることから一項を設けまとめてみたい。

刻線の施された器形は杯身が12点を数え圧倒的に多く、他は杯蓋の1点(76)、甕の1点(51)である。施された部位の多くは底部外面ないし天井部外面で13点を数え、1点(23)のみ底部外面でも受部に近い所に施されたものがある。刻線の本数は1本から多いのでは16本を数える。1本のもは単なる線分状のもので44と114がそれに当たる。2本のもは十文字に交差させたもので、8、59、83、145がそれに当たる。3本のもは3種類の施文があり、3線が平行するもの(57)、2線と1線を「キ」字状に交差させたもの(51、79)、三又状をなすもの(76)がある。4本のもは115の1点で1本の長線に直交する位置で3本の平行する短線を引いたものである。5本のもは7の1点で二つの二又の接点を結ぶものである。6本のもは6線を平行させて引いたもので23がそれに当たる。7~15本のもは発見されていない。16本のもは1本の長線に15本の短線を直交させたものである。以上7通り、9種類を確認することができた。所謂このヘラ記号の性格については諸説があるが今回出土のものをみる限り、一見模様ふうに見える7や76は別にして他のものは十や二十のような個数を表示したもののよ

表2 具同中山遺跡群出土須恵器時期別，器種別一覧表

時期	杯蓋	杯身	杯	有蓋 高杯	無蓋 高杯	甗	壺	甕	数	'90	'89	%
I	A 1								1	1		1
II	B 3	A			A	A 1			4	3	16	9
III	C 11	B 3		A 3	B 2	B 2	2	A 3	26	16	36	26
IV	D 31	C 45	1	B・C 13, 7	C 1	C 1		B 2	104	66	26	46
V	E 3	D 8						C 1	13	8	15	12
VI	F 3	E 2							5	3	5	4
VII	G	F 1							1	1	2	1
VIII		G 3							3	2		1
数	52	62	1	23	3	6	2	8	157	100	100	100
%-1	33	39	1	14	2	4	2	5	100			
'90 (%)		72	1	16		4	2	5	100			
'89 (%)		76			6	7	2	9	100			
Total (%)		74	1	11		5	2	7	100			

うにもみえるのであるが，飽くまでも消費地での出土状態であり，絶対数も少なく多くを語ることはできず，今回は資料紹介に留めたい。今後資料の追加をまって整理，検討し他日を期したいと思う。(廣田)

参考文献

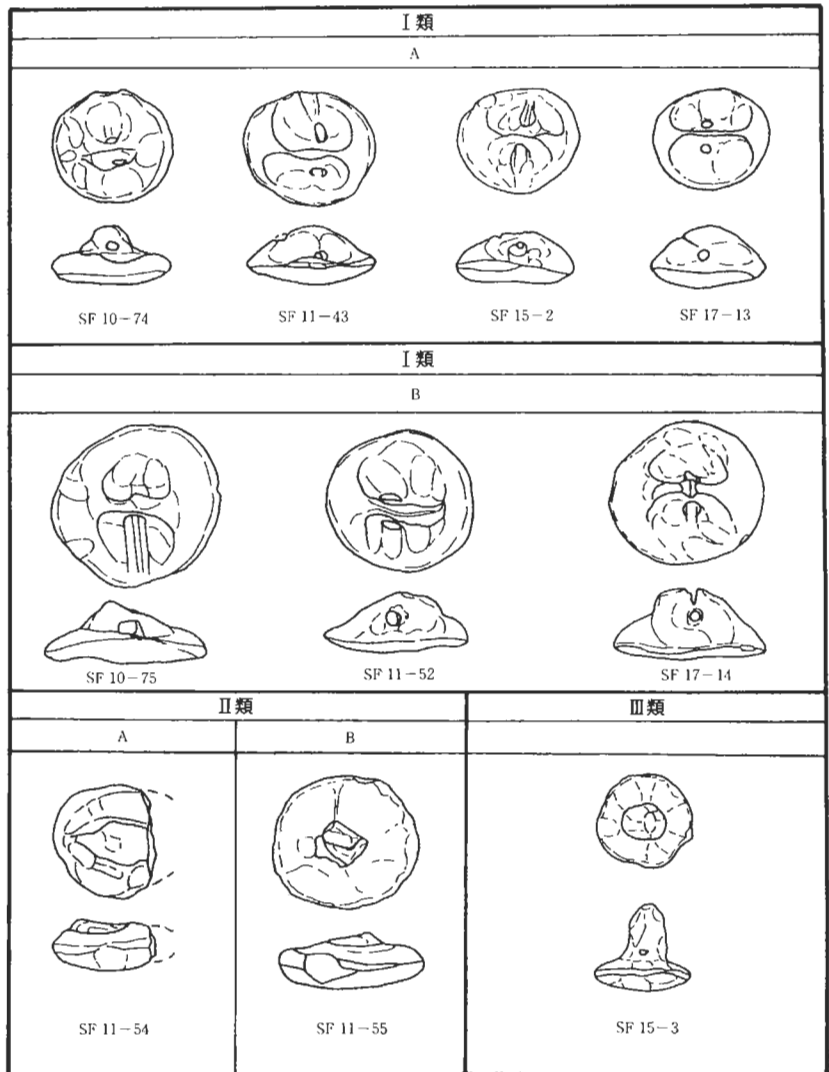
- 『陶邑』I～VI 大阪文化財センター 1976～1989
 中村 浩 『和泉陶邑窯の研究』柏書房 1981

2) 祭祀遺物及び土師器の分類

本年度調査ではSFは9ヶ所確認している。前回の調査でもSFは9ヶ所、SX（集中地点）を7ヶ所検出し、本年度と合わせて25ヶ所となっている。ここでは分類可能な土製模造鏡、手捏ね土器の祭祀遺物、土師器の碗、脚付碗、高坏、壺、甕について、形態分類を行った。

1. 土製模造鏡（第112図）

総点数は25点で、SF 10, 11, 15, 17 から出土しており、SF 11 からの出土が最も多く15点である。次いでSF 10 から5点、SF 17 から3点、SF 15 から2点である。分類は鈕の形態により3分類し、更に大きさによりA（4cm前後）、B（5cm以上）と細分を行った。Ⅰ類は鈕に孔を有するもの、Ⅱ類は孔を有さないもの、Ⅲ類は柱状の鈕でスタンプ状を呈するものである。Ⅲ類はSF 15 から1点出土したのみである。ⅠA類が11点と最も多く、次いでⅠB類が10点、ⅡA類が1点、ⅡB類2点と鈕に孔を有するものが大半を占めている。



第112図 土製模造鏡分類

2. 手捏ね土器 (第 113, 114 図, 表 3)

総点数は 92 点で SF 別では SF 11 が 38 点と最も多く全体の 41 % を占め, 次いで SF 17 の 28 点, SF 10 の 18 点, SF 15 の 6 点, そして SF 13, 16 の各 1 点である。SF 12, 14, 18 からは出土していない。分類は I ~ X 類までは器形により行い, 更に主として法量により細分可能なものについては細分類を設けてアルファベット A, B を付した。

I 類; 丸底で体部にやや丸味を持ち, 口縁がほぼ直立するもの。法量により A ~ D に細分した。

II 類; 平底気味で体部にやや丸味を持ち, 口縁端部が僅かに内湾気味のもの。法量により A ~ C に細分した。

III 類; 平底気味で体部にやや丸味を持ち, I・II 類に比べ器高の高いもの。法量により A ~ D に細分した。

IV 類; 丸底で体部に丸味を持ち, 口縁端部が強くくびれるもの。法量により A ~ C に細分した。

V 類; 平底で体部にやや丸味を持ち, 口縁端部がくびれ, やや箱形を呈するもの。

VI 類; 平底で口縁がやや開き, 箱形を呈するもの。法量により A ~ C に細分した。

VII 類; 平底で口縁が大きく開き, 坏型を呈するもの。

VIII 類; 丸底で頸部を有し, 壺型を呈するもの。法量により A, B に細分した。

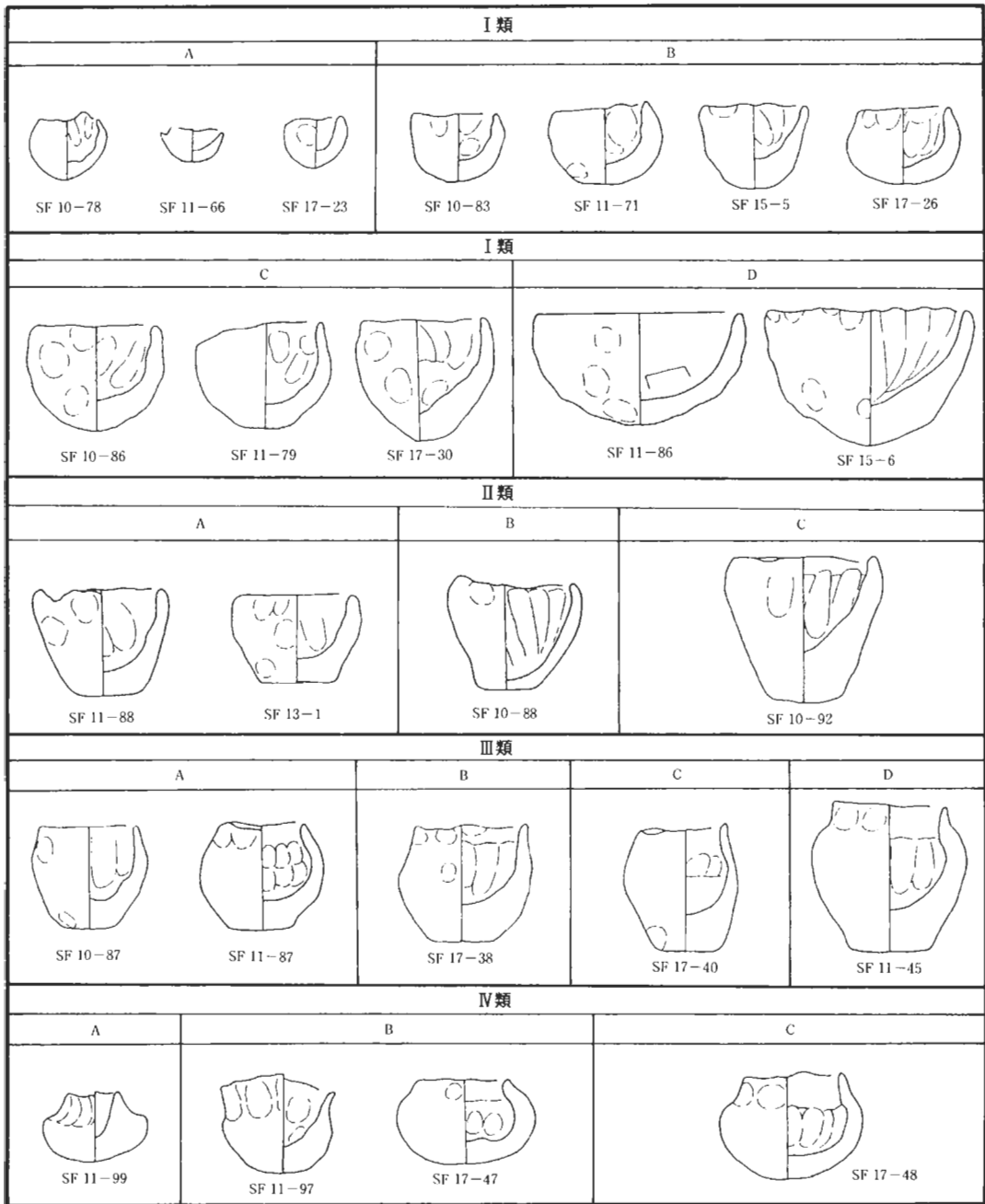
IX 類; 脚の付くもので脚付碗型を呈するもの。碗部の形態の相違により A ~ C に細分した。

X 類; 甕型を呈するもの。

以上 I ~ X 類まで分類した中で I 類に含まれるものが最も多く 41 点で全体に占める割合は約 45 % である。次いで III 類の 16 点, II 類の 9 点, VI 類の 7 点である。X 類は 1 点のみであった。細分の中では I B 類の 25 点が最も多く, 他は 10 点以下である。

表 3 手捏ね土器の分類

分類 遺構	I 類				II 類			III 類				IV 類			V 類	VI 類			VII 類		VIII 類			IX 類			X 類	合計
	A	B	C	D	A	B	C	A	B	C	D	A	B	C		A	B	C		A	B	A	B	C				
SF 10	●	●●●●●	●			●●●●●		●										●				●●						18
11	●●●	●●●●●	●●●●●		●●	●●		●				●●	●			●	●●●		●				●●	●				38
12																												0
13							●																					1
14																												0
15		●●		●												●●												6
16																									●			1
17	●	●●●●●	●						●●●●●	●●●●●		●	●	●●●													●	28
合計	5	25	9	2	3	6	1	2	8	2	4	2	2	1	3	3	3	1	2	1	1	2	2	1	1	1	1	92

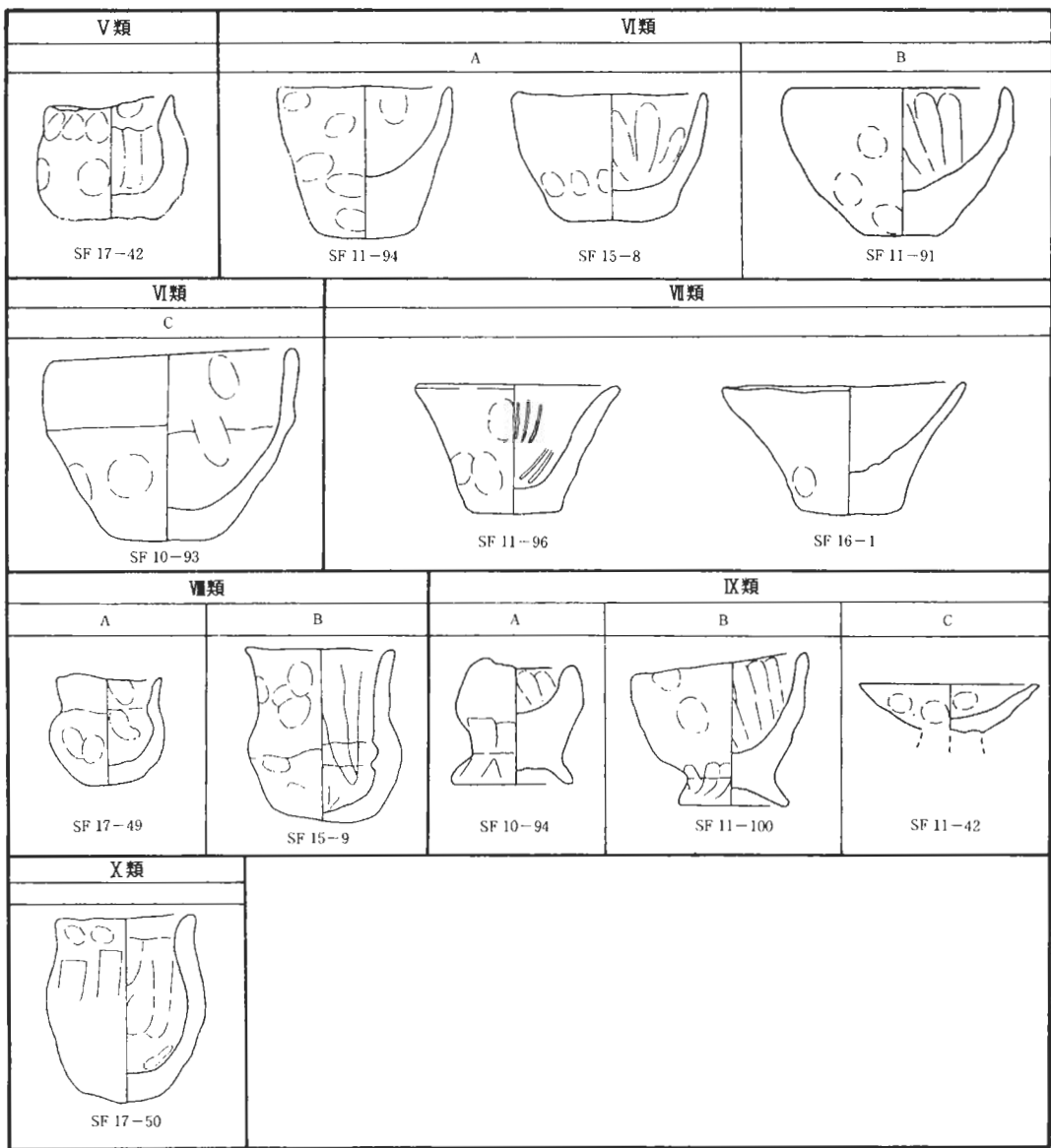


第113図 手捏ね土器分類(1)

3. 土師器碗 (第115, 116図, 表4)

実測可能な総点数は39点である。SF 13, 15, 17から各10点ずつ出土しており、SF 11から5点、SF 10から2点、SF 14, 16から各1点、SF 12からは出土していない。

分類は各部位の組み合わせにより形態分類を行った。底部形態により丸底はI類、尖底気味のものをII類、平底のものIII類、口径の大きさによりA類は14cm以下のもの、B類は14~16cm、C類は16cm以上のもの、口縁形態により1類はほぼ直立するもの、2類は内湾気味のもの、

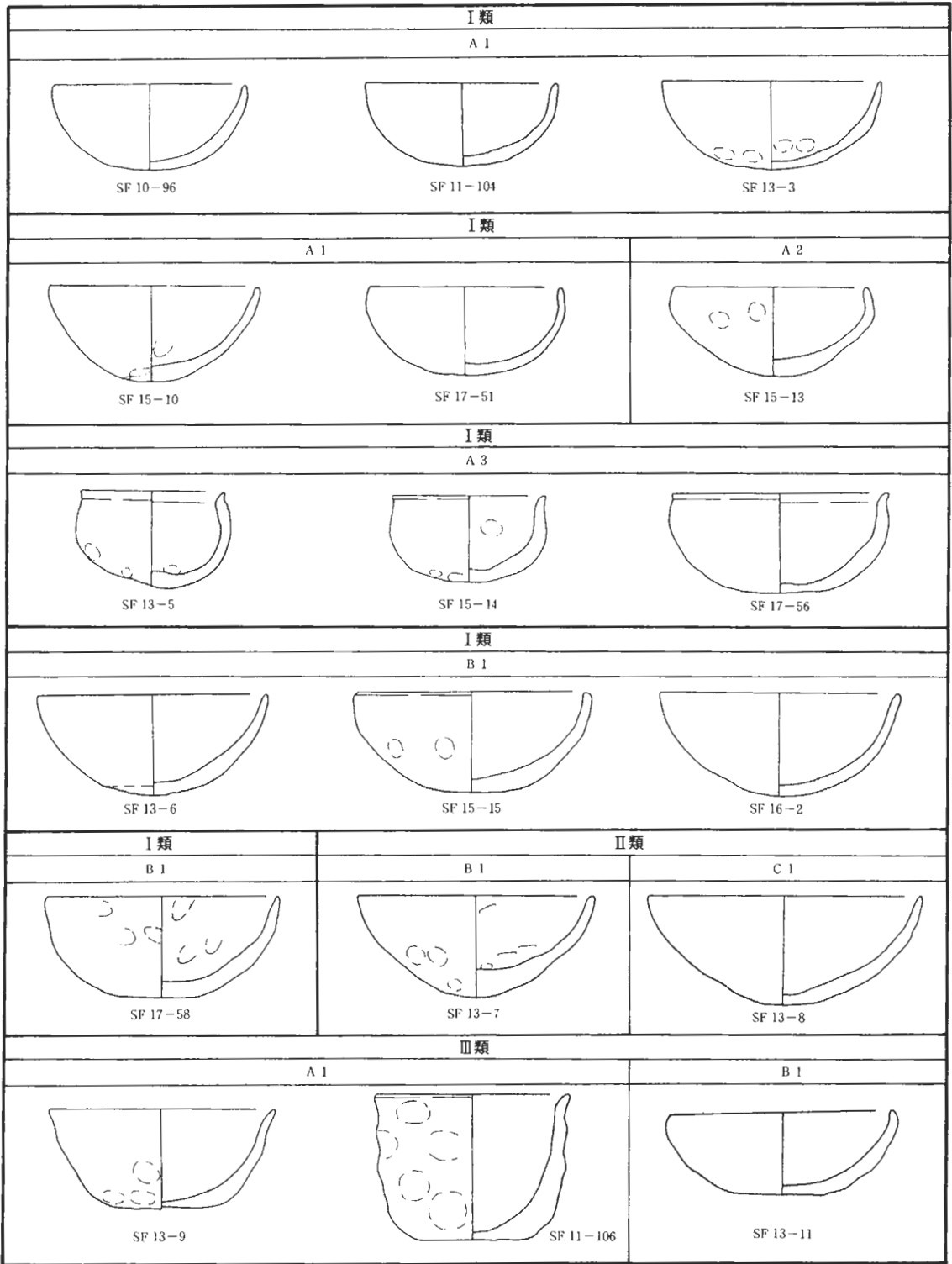


第 114 図 手捏ね土器分類(2)

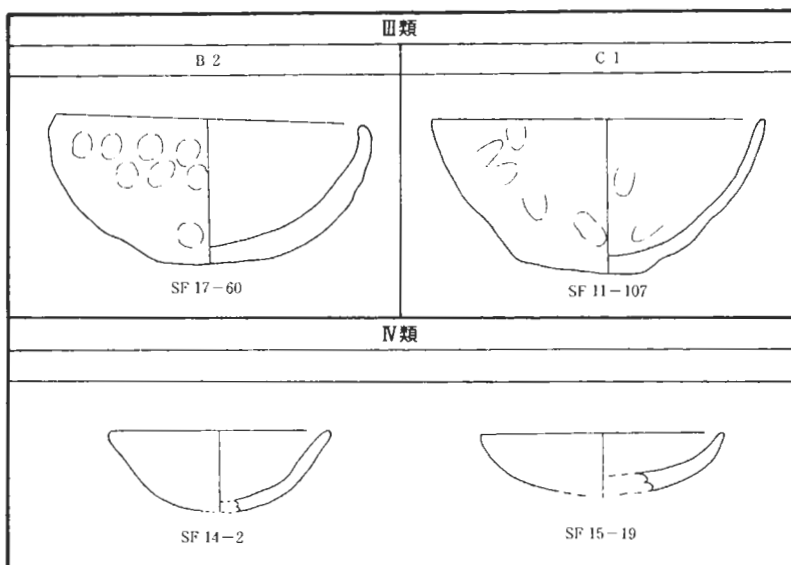
3類は端部がくびれるもの。以上の3点により形態の細分を設けた。但し、IV類は皿型に近いもので、別の分類基準を設けた。IA1類が最も多く13点、次いでIB1類が9点、IA3類が6点で他の類については1,2点と比較的少ない。IA1類についてはSF10, 11, 13, 15, 17から2,3点と万遍なく出土する傾向にあり、IA3類にSF17の4点及びIB1類にSF15の4点が比較的纏っている。

表 4 土師器碗の分類

分類	I類				II類			III類				IV類	合計	
	A1	A2	A3	B1	B1	C1	A1	B1	B2	C1				
SF 10	••													2
11	•••						•			•				5
12														0
13	•••		•	•	•	•	•	••						10
14												•		1
15	•••	•	•	••••								•		10
16				•										1
17	••		••••	•••						•				10
合計	13	1	6	9	1	1	2	2	1	1	2			39



第115図 土師器碗分類(1)



第116図 土師器碗分類(2)

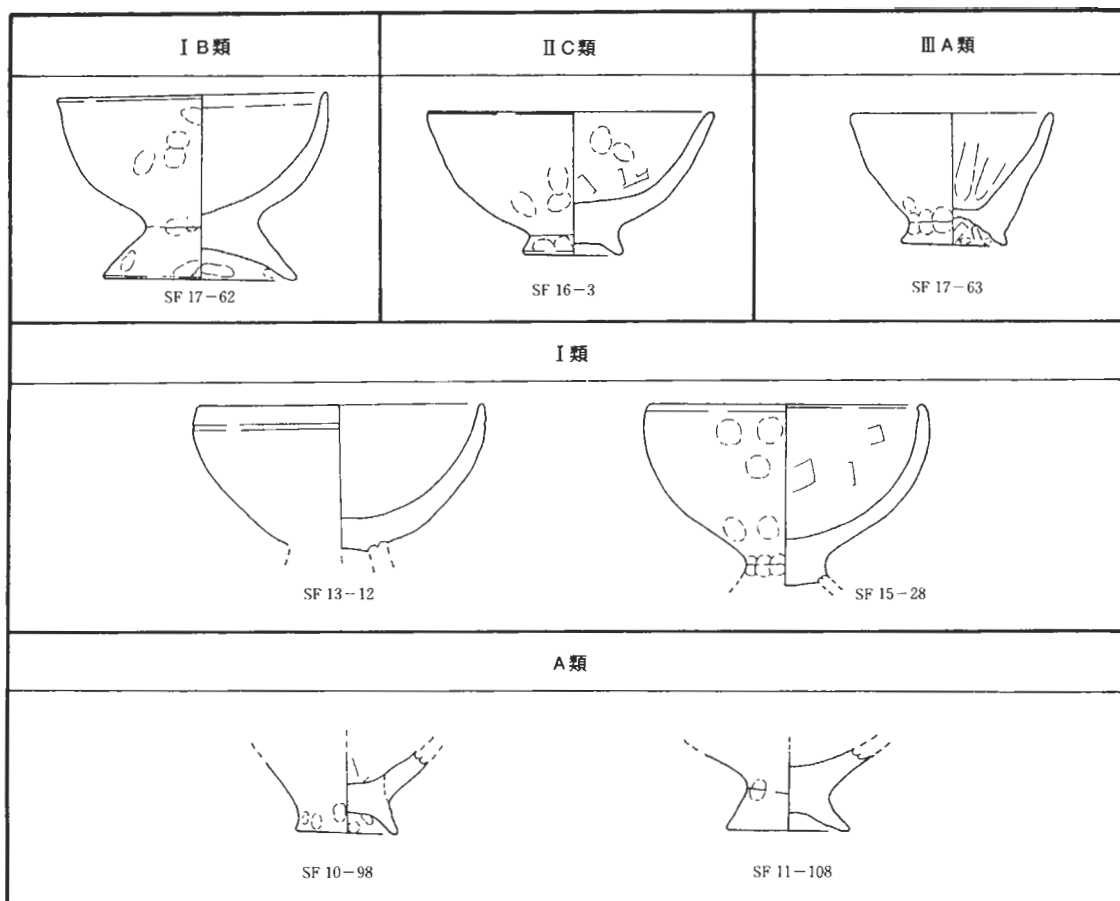
4. 土師器脚付碗 (第117図)

総点数は10点と分類を行わなかった甑に次いで最も少ない。SF別出土数はSF 15, 17から各3点, SF 10, 11, 13, 16からは各1点, SF 12, 14からは出土していない。

分類基準は碗部と脚部の形態分類を行い、その組み合わせにより分類を設けた。碗部形態によりⅠ類は底部・体部に丸味を持ち、口縁が内湾気味のもの、Ⅱ類は底部・体部に丸味を持ち、口縁が直立気味のもの、Ⅲ類は底部・体部が直立気味に外傾するものである。脚部はA類が短かく「ハ」字状に開くもの、B類が長く「ハ」字状に開くもの、C類が輪高台状のものである。碗部と脚部の分類の全ての組み合わせはみられず、ⅠB、ⅡC、ⅢA類のみの分類組み合わせがあったのみであり、碗部Ⅰ類が4点と比較的多く、その中でSF 15が3点を占めていた。

5. 土師器高杯 (第118図)

総点数は21点でSF別出土数はSF 13, 15が7点, SF 14が3点, SF 16が2点, SF 12, 17が各1点で, SF 10, 11からの出土はみられなかった。分類は脚付碗と同様に杯部と脚部の形態分類の組み合わせによる。杯部のⅠ類は底部に段を有するもの、Ⅱ類は底部にやや稜を持つもの、Ⅲ類は底部に丸味を持つもの、脚部の形態分類は裾部の立ち上がり具合により、A類が裾が開き立ち上がるもの、B類は裾がやや平坦でやや立ち上がるもの、C類は裾が平坦なものである。完形品に近いものはSF 13から2点出土しているだけであり、杯部と脚部の分類組み合わせは先のSF 13のⅠC類のみで他は全て部分的な分類が可能なだけであった。杯部はⅡ類の底部に稜を持つものが最も多く7点で、その中でSF 13が4点を占めている。脚部についてはSF 14, 15のみで、それも、A, B, C類共に1, 2点であり、また他のSFから出土しておらず、詳細は不明である。



第 117 図 土師器脚付碗分類

6. 土師器壺 (第 119 図)

総点数 11 点と脚付碗に次いで少ない。SF 別にみると SF 17 から 7 点、SF 15 から 4 点で他の SF からは出土していない。分類は形態により I ~ VII 類まで分けた。

I 類；丸底の底部より胴部は丸味を持ち、頸部がやや長く直立気味に立ち上がるもの。

II 類；丸底の底部より胴部は I 類に比べ丸味を持たず、口縁が外反気味でやや甕型を呈するもの。

III 類；丸底の底部より胴部は強く丸味を持ち、長頸壺と考えられるもの。

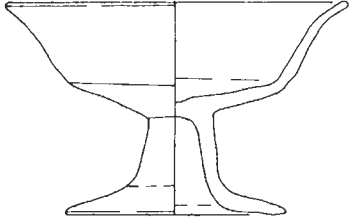
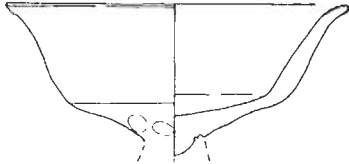
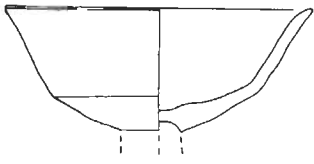
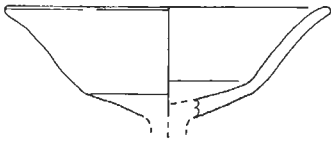
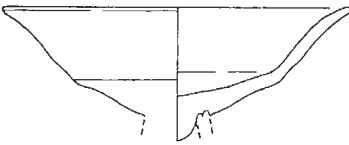

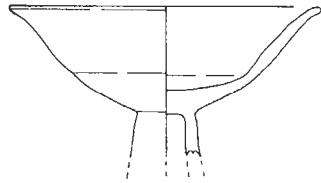
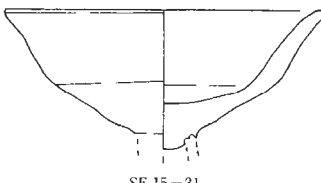
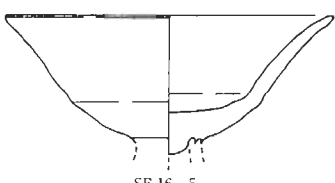
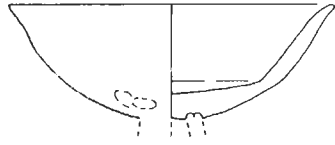

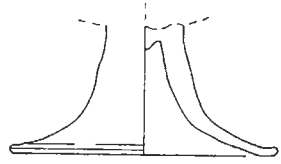
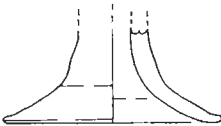
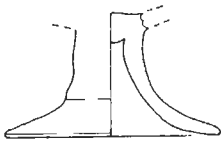
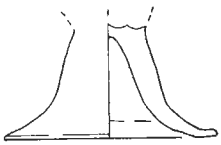

IV 類；短頸壺で丸底の底部より胴部が強く張るもの。

V 類；小壺で丸底の底部より胴部に丸味を持ち、器高は 10 cm 前後と考えられるもの。

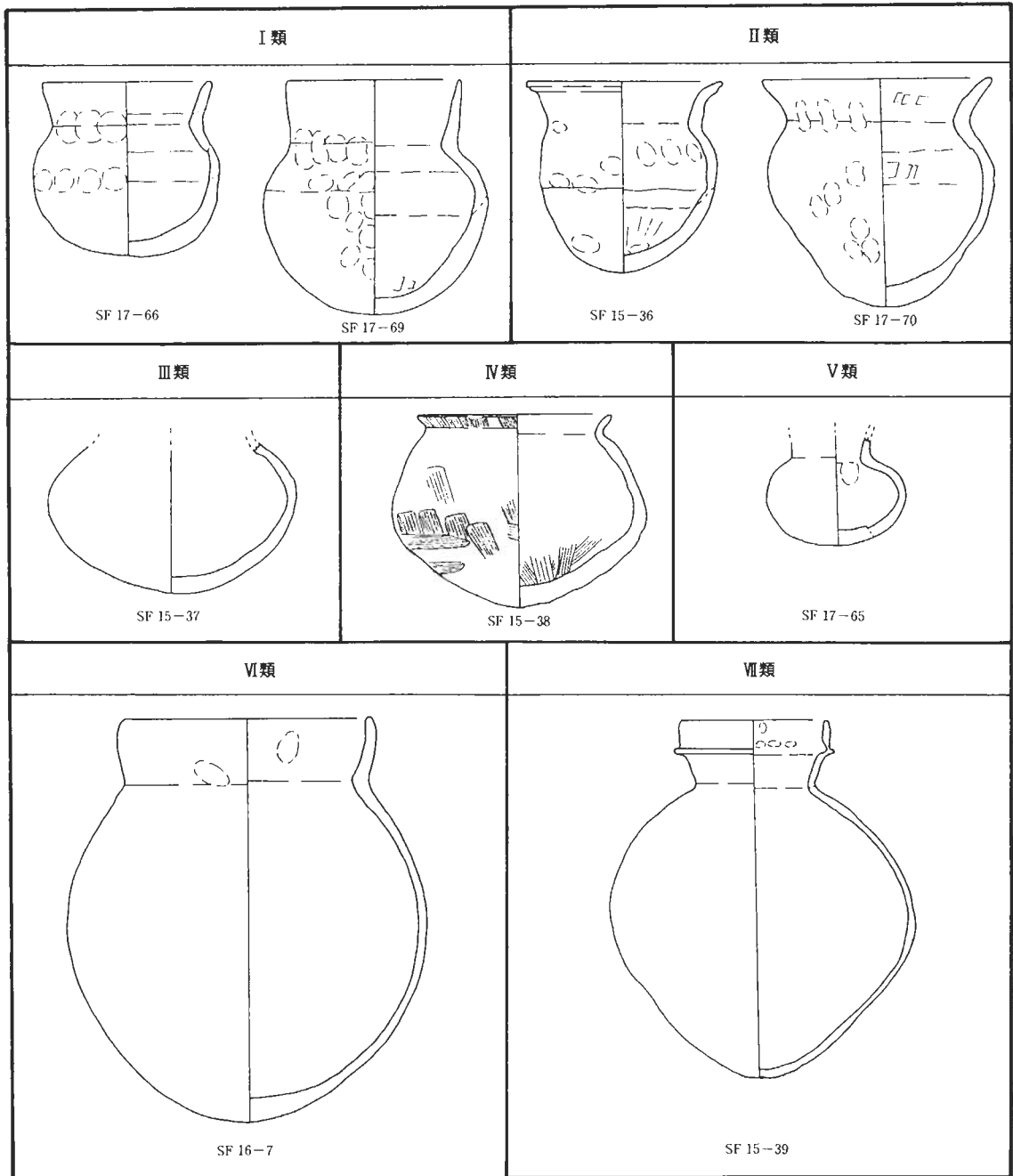
VI 類；丸底の底部より胴部は丸味を持ち、頸部はくびれ口縁が内湾するもの。

VII 類；複合口縁で丸底の底部より胴部が強く張るもの。

以上 I ~ VII 類の中で、I 類が最も多く 4 点で全て SF 17 からの出土である。次いで II 類の 3 点で SF 17 から 2 点、SF 15 から 1 点である。III ~ VII 類については各 1 点ずつ出土したに留まる。

<p style="text-align: center;">I C類</p>  <p style="text-align: center;">SF 13-14</p>	<p style="text-align: center;">I類</p>  <p style="text-align: center;">SF 12-4</p>  <p style="text-align: center;">SF 13-15</p>	
<p style="text-align: center;">I類</p>  <p style="text-align: center;">SF 15-29</p>  <p style="text-align: center;">SF 16-4</p>  <p style="text-align: center;">SF 17-64</p>		
<p style="text-align: center;">II類</p>  <p style="text-align: center;">SF 13-18</p>  <p style="text-align: center;">SF 15-31</p>  <p style="text-align: center;">SF 16-5</p>		
<p style="text-align: center;">III類</p>  <p style="text-align: center;">SF 14-3</p>  <p style="text-align: center;">SF 15-32</p>	<p style="text-align: center;">A類</p>  <p style="text-align: center;">SF 15-33</p>	
<p style="text-align: center;">A類</p>  <p style="text-align: center;">SF 14-4</p>	<p style="text-align: center;">B類</p>  <p style="text-align: center;">SF 14-5</p>  <p style="text-align: center;">SF 15-34</p>	<p style="text-align: center;">C類</p>  <p style="text-align: center;">SF 15-35</p>

第 118 図 土師器高杯分類



第119図 土師器壺分類

7. 土師器甕 (第120~123図, 表5)

本報告書に掲載したものについては77点で、SF別ではSF15の38点が最も多く全体の約49%と半数程を占めている。次いでSF13の13点、SF17の12点、SF11の8点である。SF10は3点、SF16は2点、SF12, 14は各1点ずつと少ない。

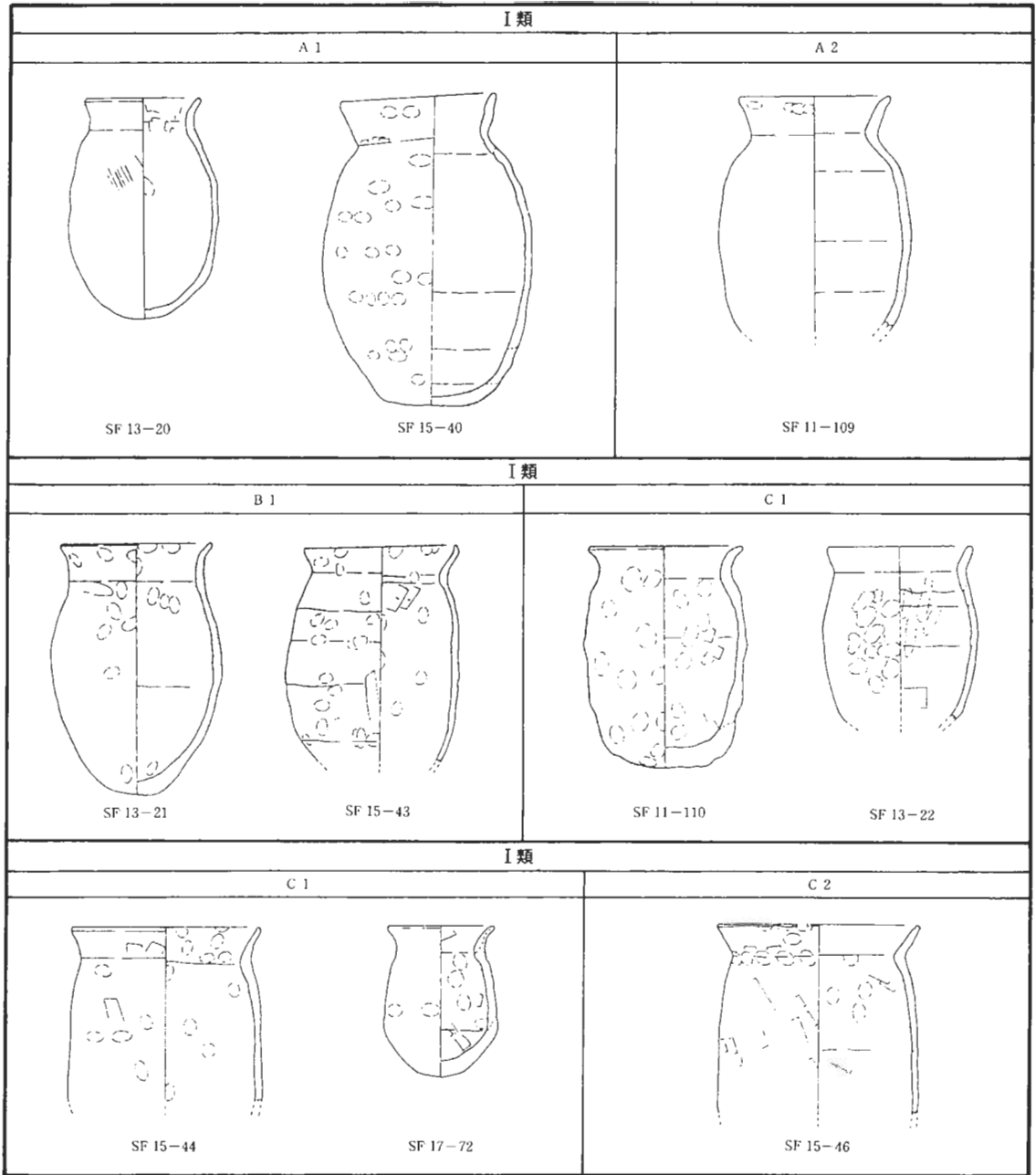
分類は大きく長胴甕I類、通常の甕II類、胴張り甕III類と分け、更らに口径÷胴部径の数値

により0.6~0.7をA類, 0.8前後をB類, 0.9以上をC類とした。また口縁の形態により, 緩やかに外傾するもの1類, 「く」字状に外傾するもの2類, 外反するもの3類とし, それぞれの分類の組み合わせにより細分類を設けた。Ⅰ類は総数13点, Ⅱ類42点, Ⅲ類22点となっており, 細分の中ではⅡB1類が13点と最も多く, SF15より6点出土し, 次いでⅢB2類が8点と同様にSF15に6点と多い。ⅡB2類及びⅡC1類が共に7点でSF15より4点, 3点とSF15にまとまる傾向がみられ, 他のものについてはばらつきが認められる。

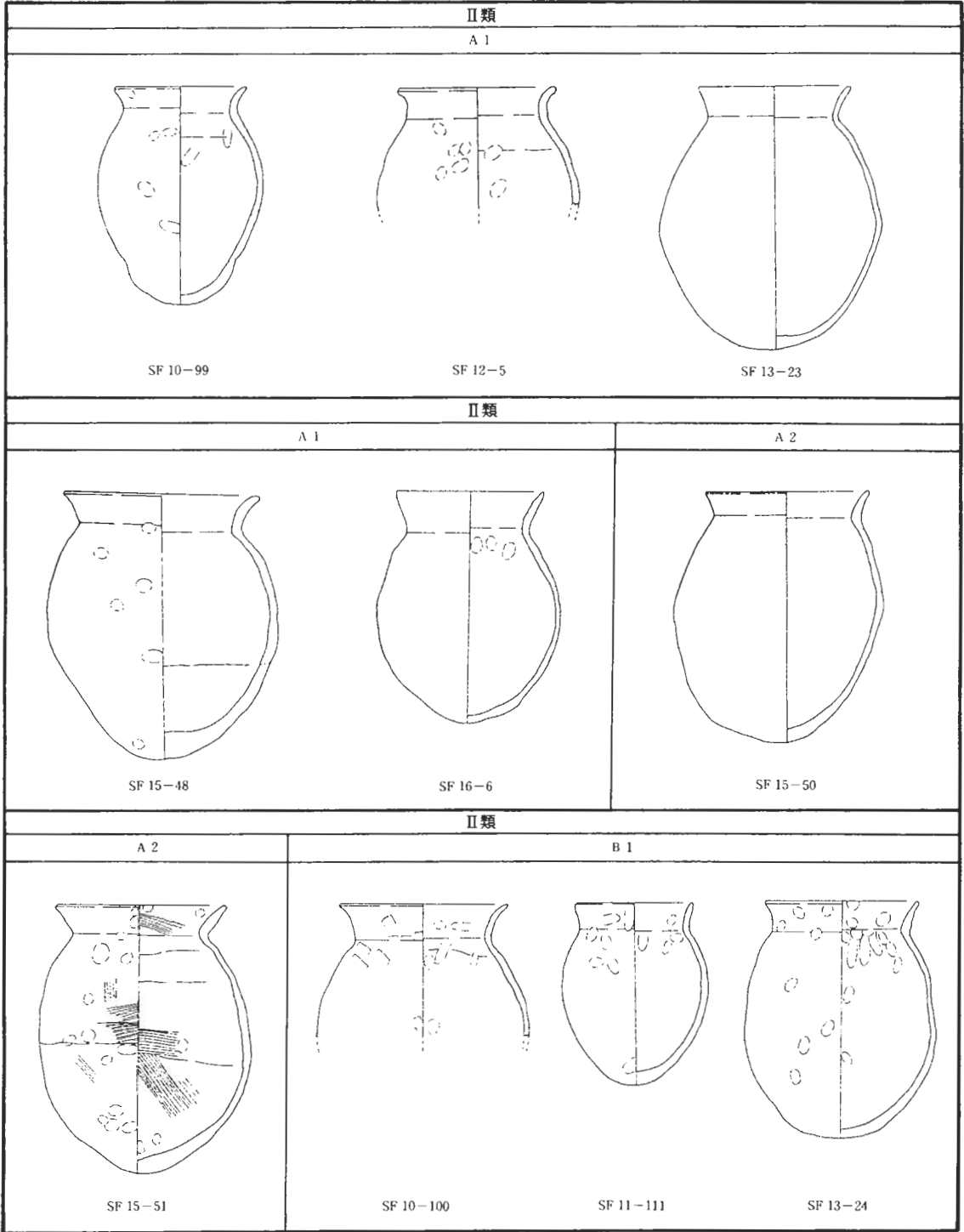
以上, 各器種についての分類を試みたものの, その時期的差異はSF18の弥生時代後期末を除いて, 須恵器の時期区分でのⅢ・Ⅳ期に大部分が含まれることからして, 各分類の時期的差異を抽出することは困難である。(前田)

表5 土師器甕の分類

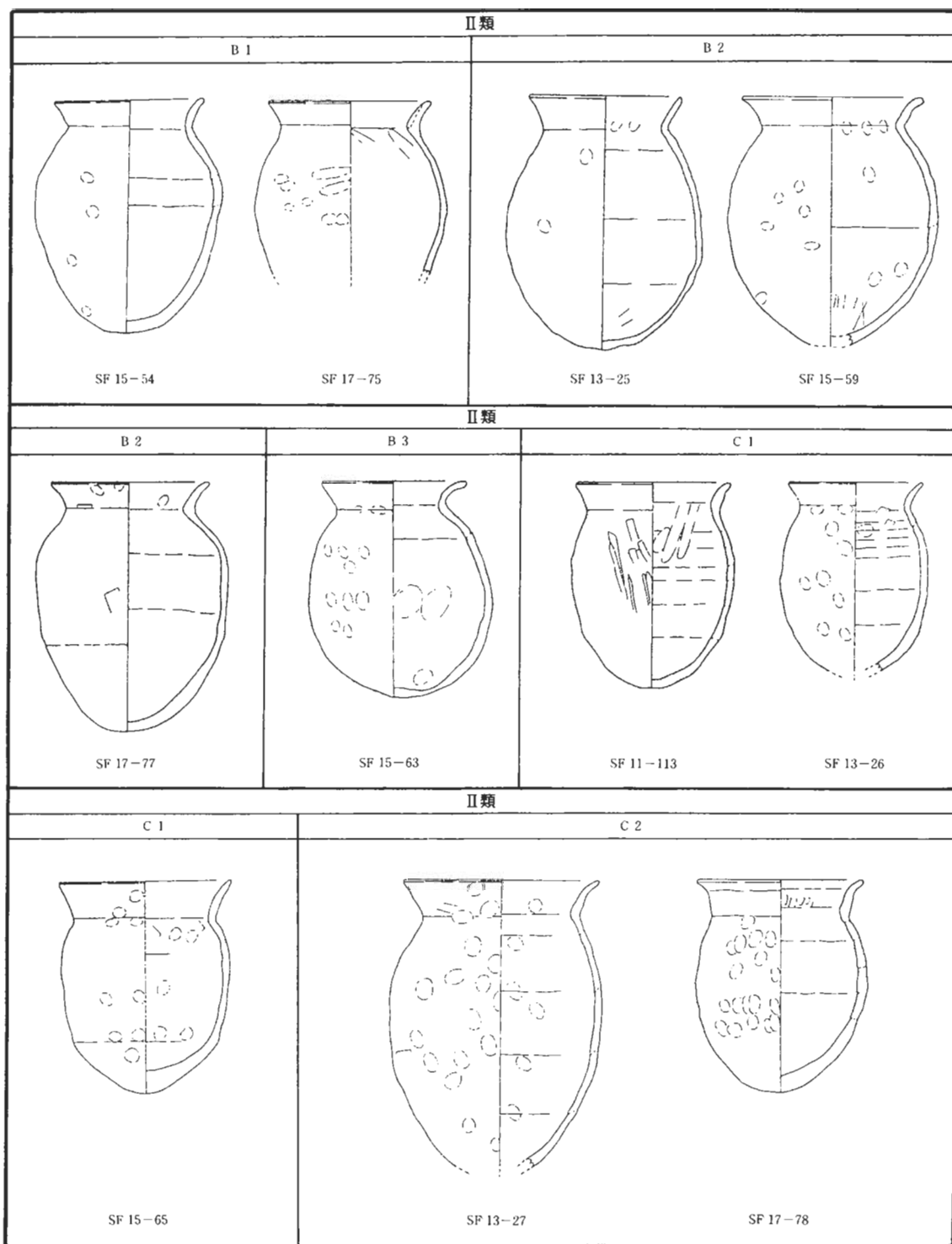
分類 遺構	Ⅰ類					Ⅱ類							Ⅲ類							合計
	A1	A2	B1	C1	C2	A1	A2	B1	B2	B3	C1	C2	A1	A2	A3	B1	B2	C1	C2	
SF 10						•		•							•					3
11	•			•				••			••					•	•			8
12						•														1
13	•		•	•		•		•	•		••	•	•		•	•	•			13
14														•						1
15	•		•••	•	••	••	•••••	•••••	•••••	•	•••		•••••			•••••				38
16						•														1
17				•				•••	••			•••						•	••	12
合計	2	1	4	4	2	6	4	13	7	1	7	4	6	1	2	2	8	1	2	77



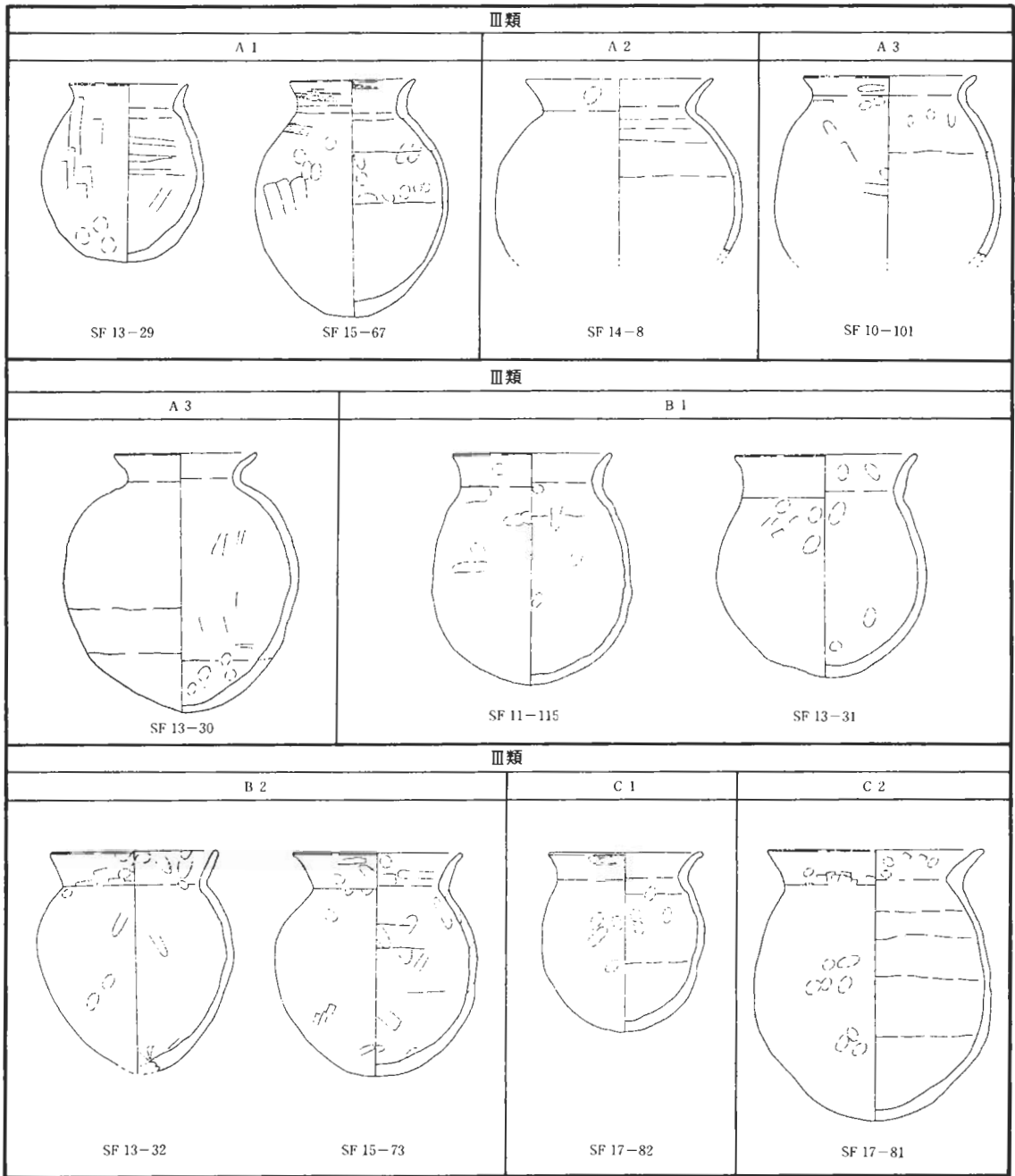
第120図 土師器甕分類(1)



第 121 図 土師器壺分類(2)



第122図 土師器甕分類(3)



第 123 図 土師器甕分類(4)

3) 古代～近世

1. 検出遺構

具同中山遺跡群の中で今回調査した範囲は、従来東神木、ボケ遺跡⁽¹⁾と呼称されていた地点で古墳時代の河川祭祀として有名である。対岸には、中世の地震跡を検出したアゾノ遺跡や古代の律令的な官制の祭祀場と考えられている風指遺跡⁽²⁾が存在する。昭和61年度の調査では、古墳時代の祭祀跡が大規模に検出されており⁽³⁾、古代から中世の遺構・遺物は数少ない状況であった。今回昭和61年度の調査区に隣接する地点では、にわかには古代から中世の遺構・遺物が多く検出されている。平成元年・2年度調査において検出された遺構は、掘立柱建物跡29棟、土坑31基、溝跡8条、集石遺構25基、火葬墓1基、水田址、柵列1列である。ここでは、出土遺物から各遺構の時間的位置付けを試み、集落変遷の画期と各時代の景観を俯瞰していくことにする。

掘立柱建物跡は29棟検出されているが、出土遺物により概ね時期を抽出でき得るものとしてSB12～14, 17, 20, 26がある。その中で古代末の建物として、出土遺物から捉えることができるものとしてSB17, 20がある。その他中世前半の時期としてSB12, 後半の時期としてSB26があげられる。しかし出土遺物の共伴関係で明確に時期を掴める建物跡は少なく、主に主軸方向及び建物の重複関係より考察していくことにする。

主軸方向を見ると、古代末のSB17がN-88°-Eをとり、その周囲に存在し軸方向を同じくする建物としてSB13, 15があげられる。さらにSB20も同時期と考えたい。中世の建物としてSB12が存在するが、その主軸方向はN-8°-Wをとる南北棟である。SB12の西側に隣接するSB14は東西棟であるがN-82°-Eをとり、SB12と併存する建物と考えられる。SB12の北側に位置するSB9, 南側に位置するSB21も同時期に存在した可能性が強い。中世で明確な時期を抽出することはできないが、第Ⅱ調査区の北部に位置するSB5, 6, 7は主軸方向も同じで同時期に存在した建物の可能性が強い。さらに第Ⅱ調査区の南部に位置するSB27, 28, 29, SA1はⅢ層で検出しており中世末の建物跡と考えられる。

以上大雑把に掘立柱建物跡の時期を考えてきたが、概ね古代末から中世末までの変遷をとらえることができる。中世では、13世紀を中心に調査区中央部に建物跡が集中し、15～16世紀になると南・北側に散在し小規模化している傾向が窺い知れる。掘立柱建物跡の変遷としては、一部不明なところもあるが、SB8, 13, 15, 17, 20 → SB9, 12, 14, 21 → SB3, 5, 6, 7, 25, 26 → SB1, 27, 28, 29が考えられる。

火葬墓は1基のみ検出しているが、骨蔵器とされている須恵器から平安時代後期の頃と考えられる。古代末の集落は、第Ⅱ調査区の中央部に集中して検出しており、さらに包含層からは革帯装飾具（巡方）が出土しており、若干後述するが火葬墓との関係を今後解明していく必要がある。高知県内で奈良時代から平安時代における骨蔵器が出土した例として、奈良時代で県

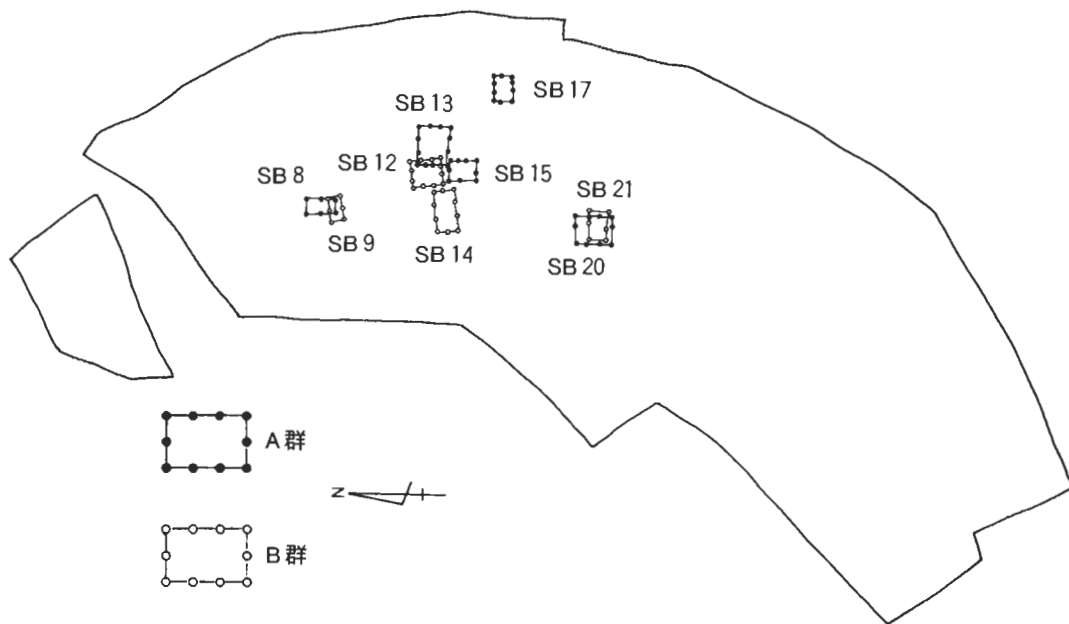
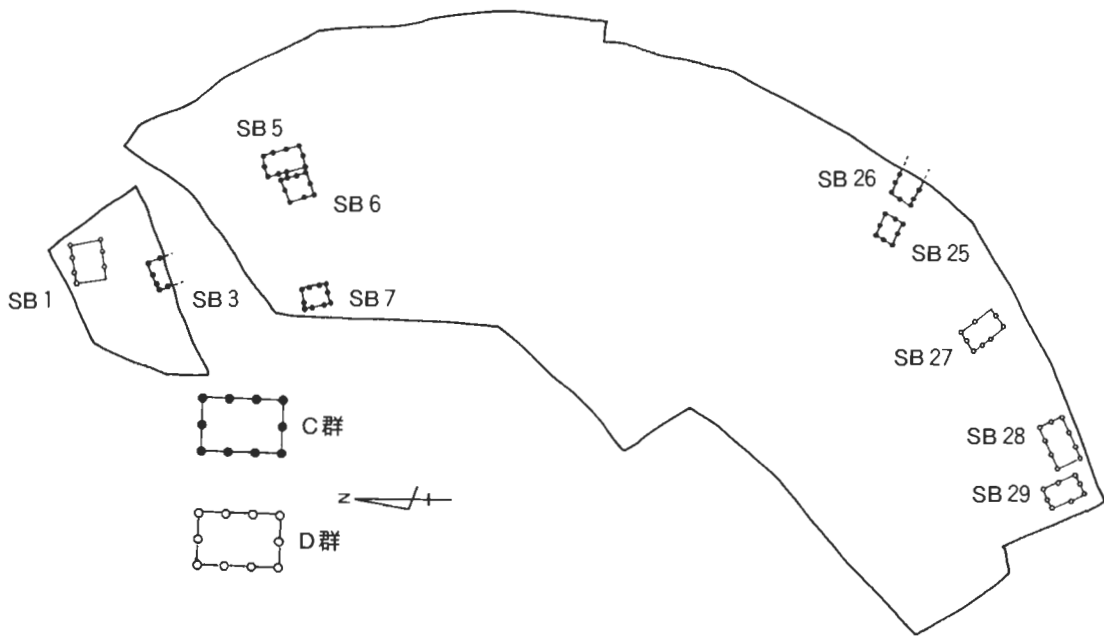
内最古の骨蔵器として南国市稲生出土⁽⁴⁾の須恵器壺があげられる。さらに平安時代になると同市稲生からと久礼田から出土している。その他香美郡夜須町野神出土の骨蔵器もある。骨蔵器として明確にでき得ないが、高知市桂浜から平安時代後期の須恵器壺⁽⁵⁾が発見されており、出土地点・状況等から骨蔵器に利用された可能性が強い。高知県においては、前述したとおり偶然発見された骨蔵器の資料紹介がなされているのみで、墳墓構造を明らかにした研究はなされていない。発掘調査で墳墓構造の一部を知り得たものとして、南国市の金地遺跡⁽⁶⁾と本遺跡の火葬墓のみである。

集石遺構は25基検出したが、中世墓と明確に捉えられるものとして第Ⅰ調査区のSX1, 2, 3, 4, 第Ⅱ調査区のSX8, 9, 10, 13が存在し、その他は性格不明である。中世墓の構築場所としては、第Ⅱ調査区の中央部やや北側で掘立柱建物跡及びPit群が密集する周囲に存在する。中世墓で方形の基壇部が明確に検出でき得たのは、SX2, 9, 13のみである。SX8・10などは、複数の墓が隣接して存在し、さらに礫によって覆われている。出土遺物は、中世墓の被覆礫に混って常滑焼の甕、白磁区類の皿、土師器杯・皿、瓦質土器の羽釜、スラグ等が出土している。いずれも14世紀から15世紀にかけての遺物群で、中世墓の成立は14世紀初頭の頃と考えられる。鎌倉時代を中心に集落が盛行し、その後この地は墓域に変遷している様子がわかる。中世墓に関しては、調査例が少なく香山寺川平山中世墓⁽⁷⁾のみである。香山寺は、中世寺院として長宗我部地検帳にも記載されており、さらに古くは南仏上人が隠居した寺とされている。中世後半では、幡多庄本家一条氏の帰依を受けていた真言宗豊山派の金剛福寺に属している。さらに香山寺の寺領は、具同村を中心にして五町四段余とされている⁽⁸⁾。本遺跡の対岸に位置し、風指・アゾノ遺跡の所在する森沢村は、「足摺領」(金剛福寺領)の一部に含まれていることから香山寺の寺領と考えられる。中世墓については、埋葬方法や上部構造が宗派により規制を受けているかの検討が必要である⁽⁹⁾。今回検出した中世墓と香山寺の中世墓は、埋葬方法や墓構造に類似する点がみられ、今後の中世墓研究に貴重な資料を提供でき得たものと考えられる。

各遺構の成果、問題点を述べてきたが、本遺跡の古代から近世にかけて若干の集落の変遷及び画期を考えていきたい。

I 期

奈良時代が空白となっており、I期で掘立柱建物跡が出現してくるのは平安時代後半の時期である。第Ⅱ調査区の中央部でSB8, 13, 15, 17, 20が初現であり、これらのグループをA群とする。それ以前は、対岸に位置する風指遺跡で9~10世紀に位置付けられる遺物群が出土し、律令的な官制の祭祀と考えられている。その祭祀跡の終焉と本遺跡のA群建物跡の出現がほぼ同時期かそれに近い時期を設定できる可能性がある。火葬墓と包含層から出土した巡方は、明確な時期は不明であるが、ほぼ前述した時期あたりと考えておく。



第 124 图 掘立柱建物跡変遷図

Ⅱ期

古代末から中世初頭にかけての時期で、SB 9, 12, 14, 21 が考えられ、これらのグループを B 群とする。B 群は、A 群とほぼ同じ場所に構築されており、集落の性格も同じと考えてよい。調査区中央部には密集して Pit 群が存在し、他にも数棟建物跡が増える可能性がある。この集落は、ほぼ 13 世紀代を通して存在しており最盛期を迎えているが、後半になると集落は衰退し北側と南側に分散していく。

Ⅲ期

14 世紀初頭から 15 世紀にかけての時期である。時期が不明の建物跡も存在するが、SB 3, 5, 6, 7, 25, 26 などを C 群とした。第Ⅱ調査区の調査部に前時期の建物が集中しているが、これらの建物が廃絶され、第Ⅱ調査区の北部や、南西部に移動し小規模化してくる。尚 A・B 群の存在した場所は、14 世紀前半には方形の基礎をもった中世墓が出現してくる。この時期本遺跡では墓地化が始まり大きな画期となっている。

Ⅳ期

16 世紀代の時期である。SB 1, 27~29 が考えられ、D 群とした。これらの建物跡は、さらに北・南西部に移動し集落が小規模化してくる様相である。水田跡も広範囲に検出しており、16 世紀後半には清閑な農村の景観を垣間見ることができる。その後近世も同様に水田地として現存に至っている。

2. 出土遺物

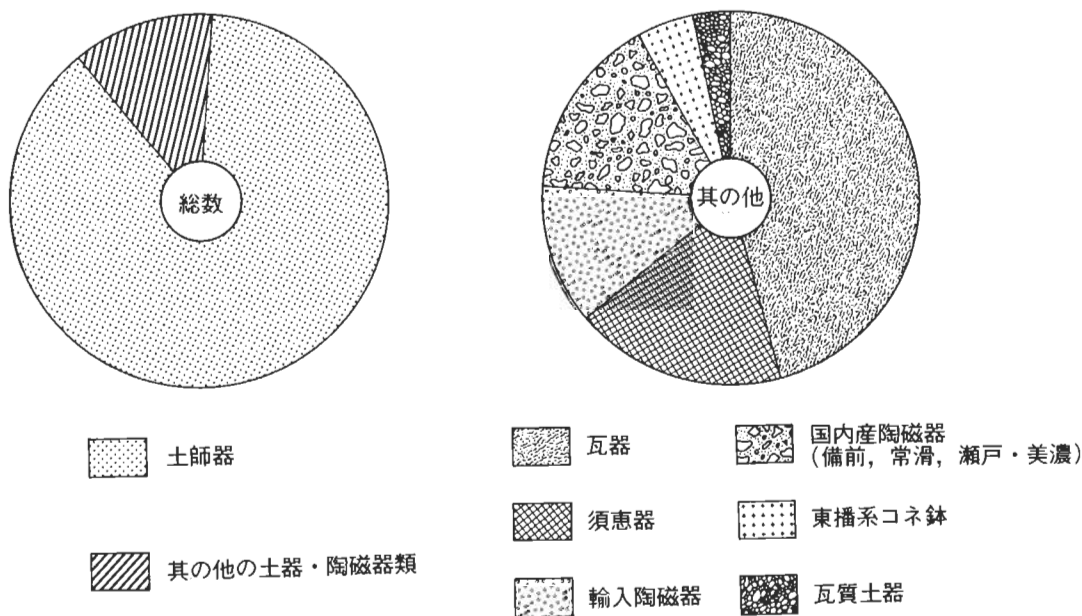
本遺跡から出土した遺物は、包含層出土のものが多く各遺構から良好な共伴資料は数少ない。ここでは、存地土器である土師器を中心に考察し、遺構で示した各期ごとに各器種の変遷を述べていくことにする。

土師器で供膳具は、小皿、杯、椀が出土している。

小皿、杯については、第Ⅳ節の分類に従い述べることにする。小皿は大きく A・B 群に分類したが、A 群は底部がヘラ切りで口径によってⅠ・Ⅱ類に、さらに形態によって a・b 類に分類している。県内で底部ヘラ切り小皿が出土する遺跡として土佐国衛跡、曾我遺跡、田村遺跡、十万遺跡、アゾノ遺跡、風指遺跡等があげられる。その中で良好な共伴資料を得ることができた遺構は、国衛の SX 5, 10, 9, 11⁽¹⁰⁾である。皿は、10 世紀前半で消滅し 10 世紀後半頃から小皿が出現してくる。四国の香川を除く 3 県は、ほぼ同時に出現しており、香川のみは 11 世紀代にはいる⁽¹¹⁾。本遺跡で出土している小皿の A 群は 11 世紀代にはヘラ切りから糸切りの変化が認められるため、A 群は 10 世紀後半から 11 世紀代におさえておく。B 群の中で、B-Ⅰ, Ⅱ類は、法量及び形態に A 群との差が認められず、底部外面の調整のみヘラ切りから糸切りに変化しているので、11 世紀代の時期を考えることができる。B-Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類は、それ以降で明確な時期は不明である。

皿は、数点出土しているが、国衛でSX5の時期と考えられ10世紀前半頃までの時期と考えられる。その後皿は消滅し、再出現してくるのは13世紀前半頃である。しかし回転台成形ではなく、手捏ねの製品が瓦器碗と共伴して国衛のSK119から出土している⁽¹²⁾。さらに13世紀後半から14世紀にかけては、十万遺跡⁽¹³⁾のSK11から比較的まとまって出土している。国衛出土の手捏ね皿は、十万遺跡の皿と比べると丁寧な造りをしており、13世紀前半頃から土佐において少量ではあるが京都系の手捏ね皿が出現し、14世紀以降になると土佐の中央部を中心に広範に出土するようになる。

杯は、すべて底部回転糸切りで、口径によってⅠ～Ⅳ類とし口縁部の形態により細分している。杯はすべて中世の所産と考えられるが、13～14世紀代の土師器杯に関しては不明なところが多い。高知県中央部の遺跡で、僅かに十万遺跡、国衛から良好な資料が出土しているのみである。十万遺跡のSK11から、土師器杯・皿が出土しており、鎗蓮弁文碗が伴出している。13世紀後半から14世紀初頭にかけての時期と考えられる。この土師器杯の特徴は、底部回転糸切りで口径12cm内外、器高3.6cm、底部6cm内外のものが多く、本遺跡群のⅡ類の範中におさまるものである。細かい時期を設定できないが、Ⅱ類は概ね13世紀後半から14世紀前半の時期を捉えることができ、Ⅰ類はそれ以前の時期と考えられる。15世紀後半から16世紀にかけては、幡多地方では栗本城跡⁽¹⁴⁾、中村城跡⁽¹⁵⁾から土師器杯が出土している。この両城跡出土の杯とⅢ・Ⅳ類の杯は、法量及び形態が異なることから、時期差を考えることができる。以上の点からⅢ・Ⅳ類は、14世紀中頃から15世紀中頃にかけての時期を想定できる。



グラフ1 具同中山遺跡群古代・中世出土遺物比率

表6 土師器小皿法量表

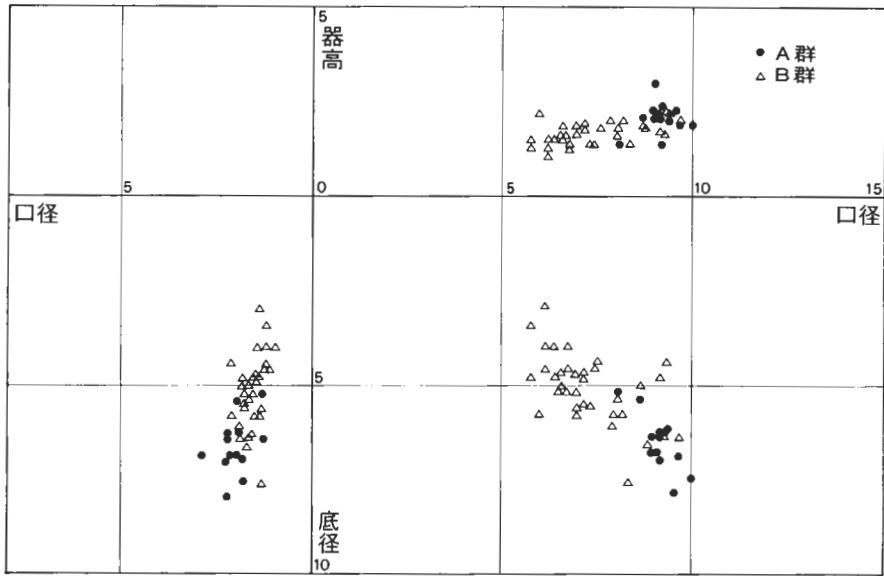
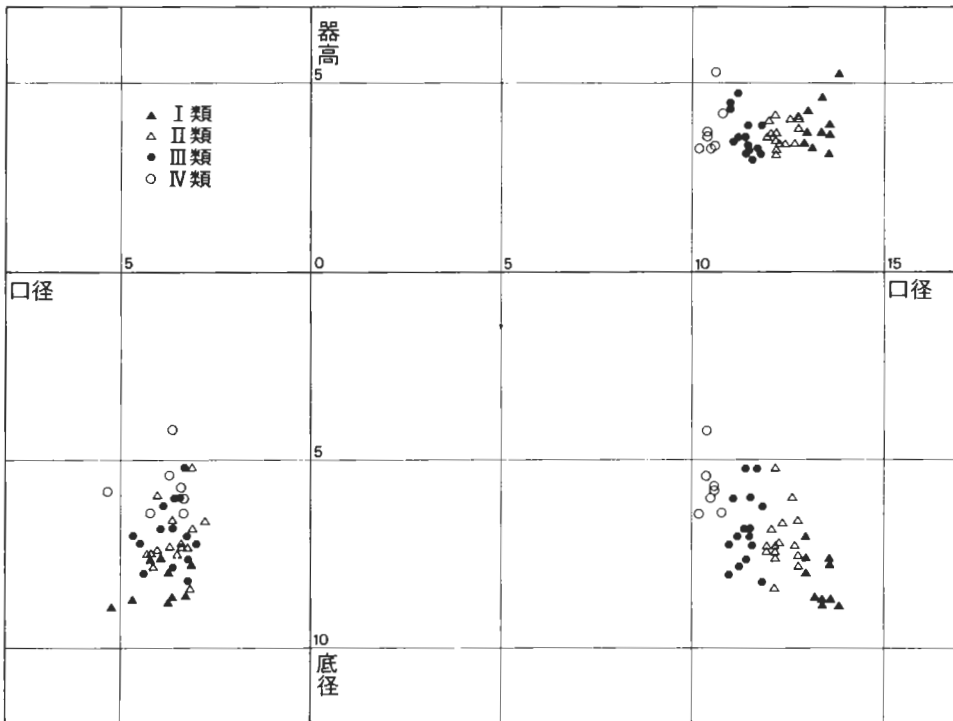


表7 土師器杯法量表



单位：cm

碗は、A群を輪高台の碗、B群を円盤状高台の碗とした。両碗とも回転台形成によるものでA群の底部外面には、回転糸切りが明確に残るものも存在し防長系碗と呼ばれているものである⁽¹⁶⁾。B群は、底部が円盤状を呈し体部は内湾して外上方に立ち上がるものである。県内でも、古代末の時期に出土する土器群である⁽¹⁷⁾。出現の時期は、国衙のSX9からの共伴資料より⁽¹⁸⁾、10世紀中頃と考えられる。底部外面がヘラ切りのものが先行し、その後糸切りのものが広範に出現してくる。10世紀後半から11世紀前半にかけて、十万遺跡SD2、田村遺跡SK31⁽¹⁹⁾、国衙SX11等の遺構から、円盤状高台の碗が出土している。11世紀後半になると、ほぼ県内ではこの円盤状高台の碗は見られなくなる。B群の碗が消滅に向う過程で次にA群の碗が出現してくる。野市町曾我遺跡⁽²⁰⁾のSK5から、円盤状の高台部分が形骸化した碗と、輪高台で底部外面に回転糸切りを有する碗が白磁Ⅱ類と共伴していることから、11世紀後半の時期を考えることができるA群の碗がどの時期まで続くかは不明であるが、12世紀後半から13世紀にかけて瓦器碗が多量に搬入されていることから、遅くとも13世紀の初めには、消滅している可能性が強い。土佐におけるA群の碗は、すべて防長系の範中におさまるもので吉備系（早鳥式土器）の土師器碗⁽²¹⁾は認められない。

煮沸具は、土師器の甕・釜・鍋・瓦質土器の鍋・釜が出土している。

甕は、口縁部が「く」の字状に外反するものが多い。長胴甕のタイプで10世紀代まで盛行する。釜は半球形の長い体部から直立する口縁部からなり、口縁部下に鏝をめぐらすタイプである。これは摂津C型⁽²²⁾と畿内で呼称されているものであり、県内では10世紀後半から11世紀前半頃の遺跡から多く出土するものである。さらに和泉、河内D型か播磨型の釜が出土しており、14～15世紀にかけての製品と考えられる。この遺跡では13世紀代にみられる鍋釜が少ない。

瓦質の製品は、コネ鉢、搦鉢、釜、鍋がみられる。釜を除いてすべて在地産の製品と考えられる。13世紀を中心に鉢類は東播系コネ鉢⁽²³⁾が搬入されており、完形品も今回出土した。この時期コネ鉢はすべて東播磨産のもので統一されるようである。その後備前焼の搦鉢が多く搬入されるが、その移行期に瓦質のコネ鉢、搦鉢がみられるようになる。東播系コネ鉢が搬入されなくなる14世紀前半以降で、備前焼Ⅳ期からⅤ期⁽²⁴⁾の製品が出土している。これらの点から、瓦質土器の鉢類は14世紀中頃から15世紀初頭の時期に比定することができる。

以上、在地土器を中心に考察をしてきたが、出土遺物の概略を各期ごとに述べていきたい。

I期……9世紀後半から11世紀中葉

土佐においては、須恵器の供膳具からの撤退が始まり緑釉陶器・黒色土器A類など畿内からの搬入が認められる時期である。本遺跡からは、畿内産は出土していないが、11世紀代に在地産の黒色土器A類が存在する。I期の初頭は、須恵器の皿・蓋・杯が若干残るがこれ以降は消滅していく。

次に円盤状高台の碗が10世紀中葉から出現し、10世紀後葉から11世紀初頭まで盛行する。

土師器の皿については、皿が10世紀前半頃まで存在するが徐々に小皿に移行する。土師器杯・小皿の底部外面は、ヘラ切りから糸切りに変化してくるが、その時期は11世紀前後である。煮沸具は、I期の初頭で口縁部が外反する長胴甕タイプのものが多い。その後10世紀後半になると、摂津C型と呼称され口縁部下に鏝を有する釜が占めてくる。貯蔵具は、須恵器の甕が存在し、口縁部が外反し端部がやや肥厚するもの(第93図26)で、胴部外面に平行のタタキが施されるものである。その他は胴部破片で細片がなく不明である。

II期……11世紀後半から13世紀後半

碗形態に多くの変化が認められる時期である。11世紀後半から12世紀にかけて、在地産黒色土器碗及び円盤状高台碗B群が消滅し、輪高台のA群土器が盛行する。輸入陶磁器では、白磁碗IV類⁽²⁵⁾が搬入され、楠葉型の瓦器碗も存在する。13世紀においては、土師器碗A群が消滅し、楠葉型から和泉型の瓦器碗⁽²⁶⁾が搬入されるようになる。土師器は杯・皿のみとなる。輸入陶磁器は同安窯系から龍泉窯系の製品に移行される。13世紀後半になると輸入陶磁器は一定の供給体制が確立されたものと考えられる。調理具は、東播磨産のコネ鉢が使用される。煮沸具は、この時期不明であるが、土師器の鍋で体部が内湾し口縁部の外反するもの(第89図4)や、瓦質土器で胴部に張りをもち、内湾して上方に立ち上がる形態で口縁部が「く」の字状に外反するもの(第90図6)などが存在する。貯蔵具は、常滑焼の甕が多く搬入される。この時期の特徴としては、古代から中世の転換期を迎へ、遠隔地であるこの集落にも流通圏の拡大によって商業ルートにのった各地からの製品が搬入されていることである。

III期……14世紀初頭から15世紀

瓦器碗が消滅するが、輸入陶磁器は以前として搬入される。供膳具の中で土師器碗は既にII期でなくなり、杯・小皿のみとなる。高知県中央部では、手捏ねの皿が広範にみられる時期でもあるが、中村を中心とした幡多地方では手捏ねの皿が認められない⁽²⁷⁾。杯・小皿の形態変化はなく、やや口径が狭くなっていく特徴がある。調理具は、II期の段階で多くの東播系コネ鉢が搬入されているが徐々に少なくなり、III期になると在地産で瓦質土器のコネ鉢や播鉢が出現してくる。さらに備前焼が搬入され始め、15世紀後半になると在地産瓦質土器が備前焼播鉢に淘汰され消滅していく。煮沸具は、土師器が少なく15世紀後半になると播磨地方で多くみられる口縁部下に断面三角形の鏝が付く釜がみられる。この釜は、在地産で土佐の15世紀後半から16世紀の中世遺跡で数多く出土しているものである⁽²⁸⁾。瓦質土器の製品は多く、羽釜は和泉・河内D型と呼称されているものが搬入されている。鍋類は在地産で占めている。貯蔵具は、II期からIII期の前半頃まで常滑焼が占めるが、備前焼播鉢と共に甕・壺類が搬入され始め15世紀代ではその多くが備前焼となってくる。

IV期……16世紀以降

IV期は、本遺跡が水田化され農村の景観が広がる時期で、遺構・遺物も数少ない。16世紀代では、供膳具の土師器杯・小皿が残りやや小型化してくる。碗形態の製品は、輸入陶磁器も

みられなくなることから、それを補うものとして木製品を考えざるを得ない。皿類は、数少ないが輸入陶磁器の白磁で端反りの皿が出土している。調理具は以前として備前焼の播鉢が若干残る。土佐の中央部では在地産の土師質土器播鉢が⁽²⁹⁾みられるが、本遺跡では認められない。貯蔵具も不明であるが、備前焼が占めるであろう。江戸時代にはいっても、景観は変化なく水田化が広がる。遺物としては、伊万里、唐津の製品が使用される。Ⅳ期の出土遺物の内容を語るには、資料不足で不明な点が多く、本遺跡の性格を如実に現わしていると考えられる。

(松田)

- 注1 本遺跡は、昭和20年代の堤防工事に際し発見され、祭祀遺物が出土したということで、出土地点の小字名をとって東神木、ボケ遺跡という名称で呼ばれていた。昭和61年の調査で、範囲以上に遺跡が存することから、広域的に具同中山遺跡群と呼ぶことにした。
- 注2 出原恵三、松田直則「風指・アゾノ遺跡」『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ、高知県教育委員会、1989年。
- 注3 出原恵三、松田直則、廣田佳久「古津賀遺跡・具同中山遺跡群」『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅰ、高知県教育委員会、1988年。
- 注4 「南国市史」上巻、南国市、1979年。
- 注5 岡本健児『高知県史考古編』高知県、1968年。
- 注6 吉原達生『金地遺跡』南国市教育委員会、1992年。
- 注7 中村市教育委員会『香山寺川平山中世墓調査概要』1987年。
- 注8 『長宗我部地検帳』幡多郡中、高知県立図書館、1964年。
- 注9 是光吉基「中国・四国」『新版仏教考古学講座』第7巻墳墓、1984年。
- 注10 廣田佳久『土佐国衙発掘調査報告書』第8集——松ノ下・金屋地区の調査——高知県教育委員会、1988年。
- 注11 片桐孝浩「第5章——古代から中世にかけての土器様相——」『川津元結遺跡』香川県埋蔵文化財研究会、1992年。
- 注12 廣田佳久『土佐国衙発掘調査報告書』第11集——金屋地区の調査——高知県教育委員会、1991年。
- 注13 高橋啓明、出原恵三、吉原達生『十万遺跡発掘調査報告書』香我美町教育委員会、1988年。
- 注14 木村剛朗『栗本城跡』中村市教育委員会、1985年。
- 注15 松田直則他『中村城跡』中村市教育委員会、1985年。
- 注16 百瀬正恒、橋本久和「中世平安京の土器様相と各地への展開」『考古学ジャーナル』No.299、1988年。
- 注17 松田直則「土佐における古代末から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究』Ⅴ 日

本中世土器研究会，1989年。

注18 注10に同じ。

注19 高知県教育委員会『田村遺跡群』第6分冊，1986年。

注20 高橋啓明・吉原達生『曾我遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会，1989年。

注21 注16に同じ。

注22 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所，1982年。

注23 萩野繁春「財産目録に顔を出さない焼物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第25集，国立歴史民俗博物館，1990年。

注24 間壁忠彦，葎子「備前焼研究ノート(1)～(4)」『倉敷考古館研究集報』第1・2・5・18号 倉敷考古館，1966・1968・1984。

注25 森田 勉，横田賢次郎「大宰府出土の輸入陶磁器について — 形態分類と編年を中心として —」『九州歴史資料館研究論集』4，九州歴史資料館，1978年。

注26 尾上 実「南河内の瓦器椀」『古文化論叢』1983年。

注27 松田直則「高知県における中世土器の様相 — 15・16世紀を中心にして —」『中近世土器の基礎研究』Ⅲ，日本中世土器研究会，1987年。

注28 土佐の15・16世紀の遺跡から，少なくとも数点は出土しており，東部は安芸市から，幡多の中村市まで全域で認められるもので，姫路市の加茂遺跡で出土する釜のタイプである。

注29 南国市の田村遺跡群から出土しているが，土佐全域で認められるものではない。

参考文献

上田秀夫「14～16世紀の青磁椀の分類」『貿易陶磁研究』No 2，日本貿易陶磁研究会，1982年。

宇野隆夫「後半期の須恵器」『史林』67-6，史学研究会，1984年。

萩野繁春「西日本における中世須恵器系陶器の生産資料と編年」『福井考古学会誌』3，福井考古学会，1985年。

鋤柄俊夫「畿内における古代末から中世の土器 — 模倣系土器の展開 —」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ，日本中世土器研究会，1988年。

中野良一「愛媛県における古代末から中世の土器様相」『中近世土器の基礎研究』Ⅳ，日本中世土器研究会，1988年。

高橋啓明「土佐の奈良・平安時代」『研究紀要』第15号，高知県立高知追手前高等学校，1991年。

森島康雄「中河内の羽釜」『中近世土器の基礎研究』Ⅵ，日本中世土器研究会，1990年。

兵庫県教育委員会『相生市・緑ヶ丘窯址群』1987年。

姫路市教育委員会 「加茂遺跡」『姫路市文化財調査報告』V, 1975 年.
徳島県教育委員会 『中島田遺跡・南島田遺跡』1989 年.

写真図版



調査区近景（中筋川対岸より）



調査区近景（中筋川下流より）

写真 2 弥生・古墳時代祭祀跡



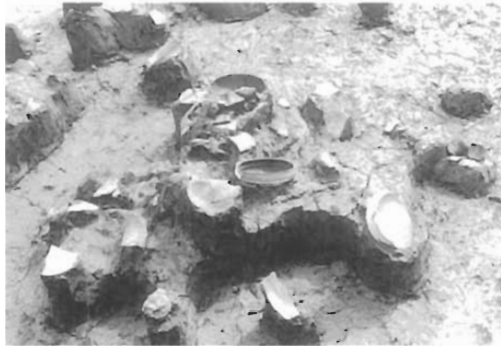
SF 10 全景



SF 10 遺物出土状況(1)



SF 10 遺物出土状況(2)



SF 10 遺物出土状況(3)



SF 10 遺物出土状況(4)



SF 11 全景



SF 11 遺物出土状況(1)



SF 11 遺物出土状況(2)



SF 11 遺物出土状況(3)



SF 11 遺物出土状況(4)

写真 4



SF 12 全景



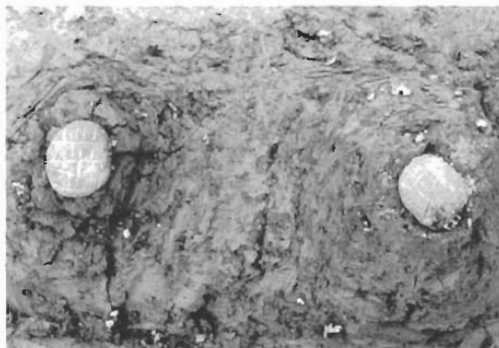
SF 12 遺物出土状況(1)



SF 12 遺物出土状況(2)



SF 12 遺物出土状況(3)



SF 12 土製有溝円板出土状況



SF 13 全景



SF 13 遺物出土状況(1)



SF 13 遺物出土状況(2)

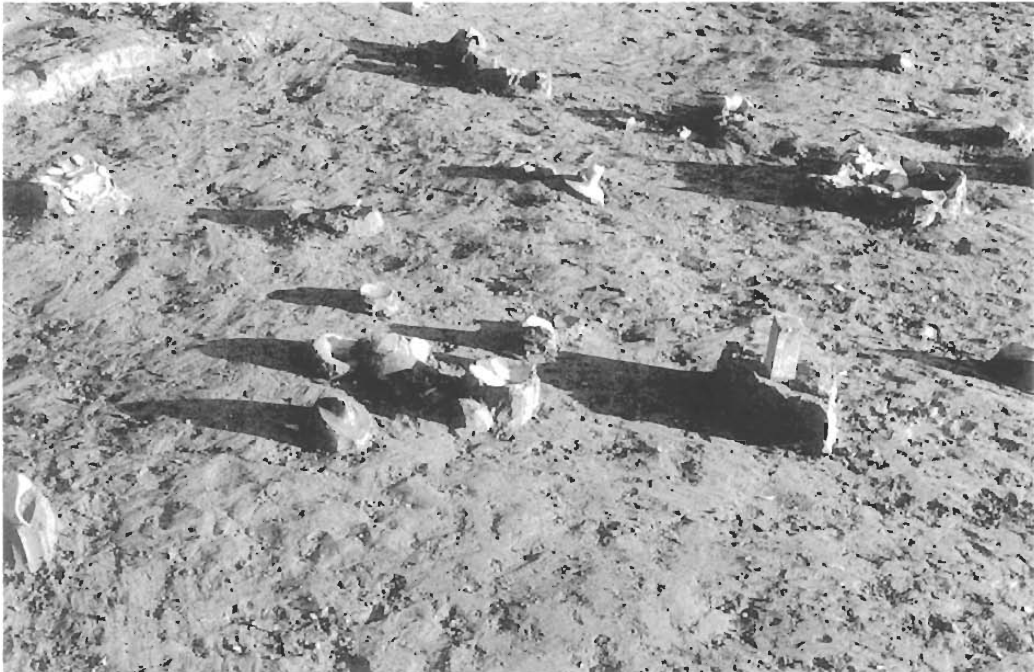


SF 13 遺物出土状況(3)



SF 13 磔出土状況

写真 6



SF 14 全景



SF 14 遺物出土状況(1)



SF 14 遺物出土状況(2)



SF 14 遺物出土状況(3)



SF 14 遺物出土状況(4)



SF 15 全景



SF 15 遺物出土状況(1)



SF 15 遺物出土状況(2)



SF 15 遺物出土状況(3)

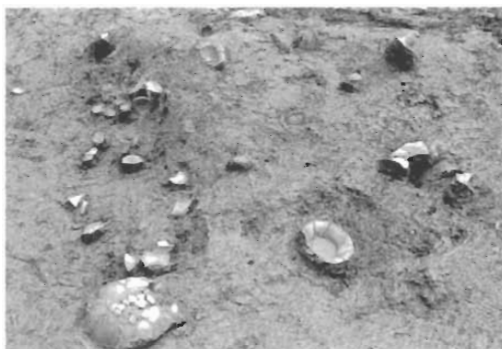


SF 15 勾玉出土状況(4)

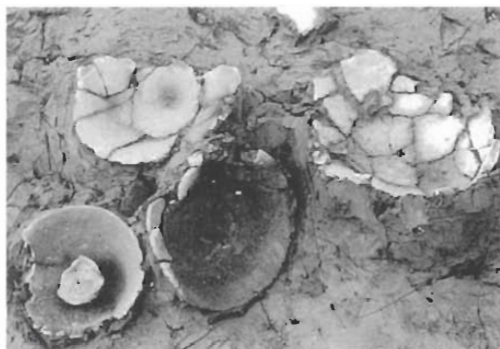
写真 8



SF 16 全景



SF 16 遺物出土状況(1)



SF 16 遺物出土状況(2)



SF 16 遺物出土状況(3)



SF 16 遺物出土状況(4)



SF 17 全景



SF 17 遺物出土状況(1)



SF 17 遺物出土状況(2)



SF 17 遺物出土状況(3)



SF 17 遺物出土状況(4)

写真 10



SF 18 全景



SF 18 遺物出土状況(1)



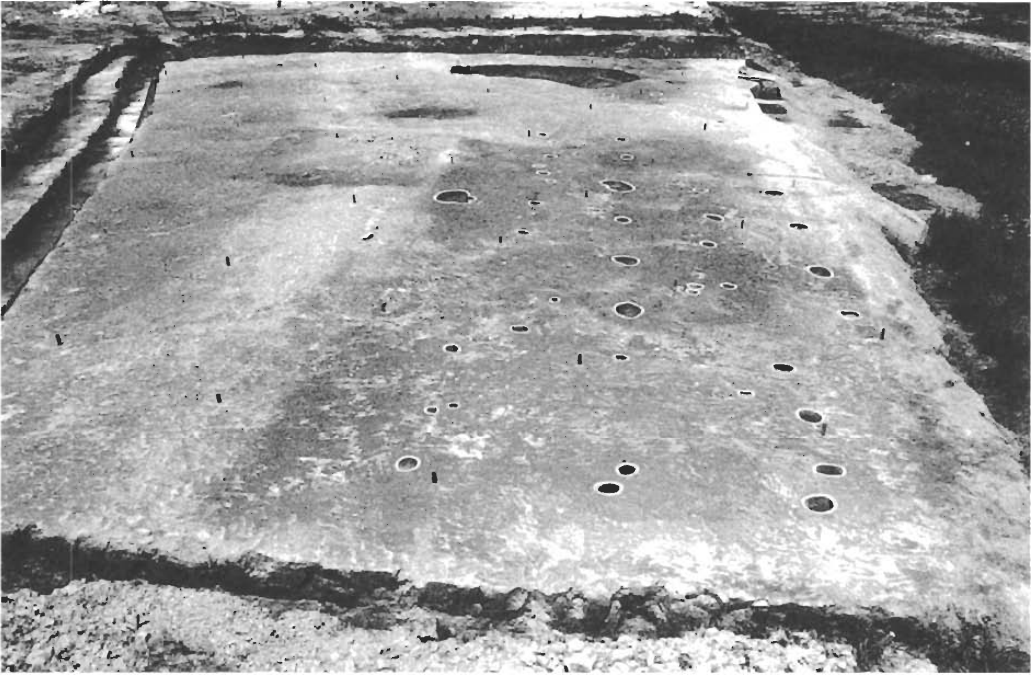
SF 18 遺物出土状況(2)



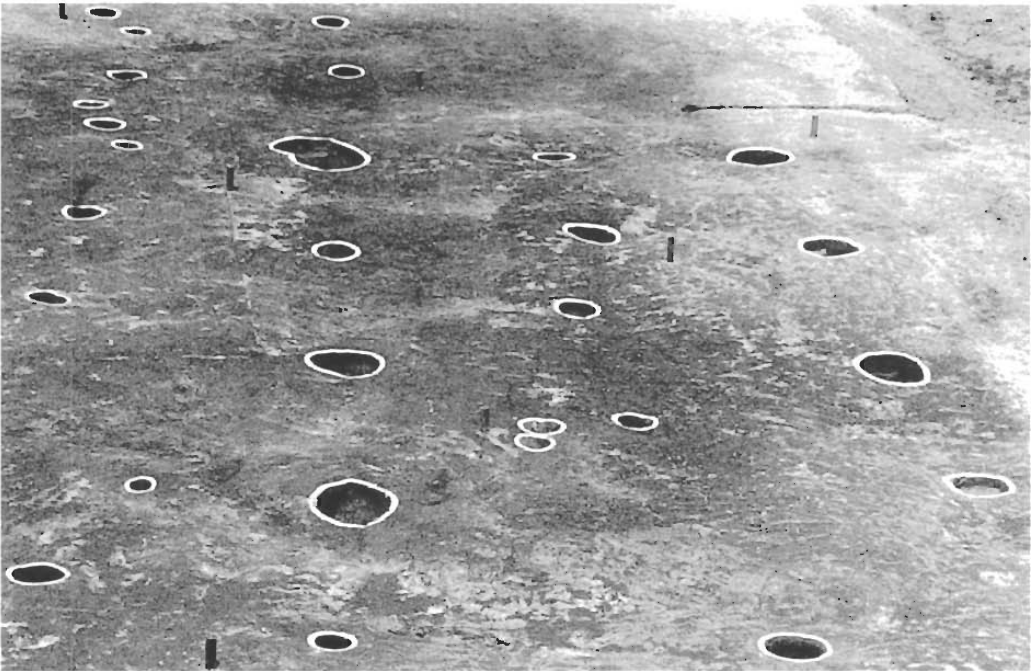
SF 18 遺物出土状況(3)



SF 18 遺物出土状況(4)



Ⅱ区 南側部 (SB 28・29)



Ⅱ区 南側部 (SB 28)

写真 12



Ⅱ区 中央部・I～J-32～33 グリッド周辺 (西より)



同上 (北より)



Ⅱ区 中央部・G～H-33～35 グリッド周辺 (西より)



Ⅱ区 北側部・上層・D～E-35～36 グリッド周辺 (北より)

写真 14



Ⅱ区 北側部・D～E-35～36 グリッド周辺 (北より)



Ⅱ区 中央部・F～G-34～36 グリッド周辺 (西より)



Ⅱ区 北側部・D～E-34～35 グリッド周辺 (北より)

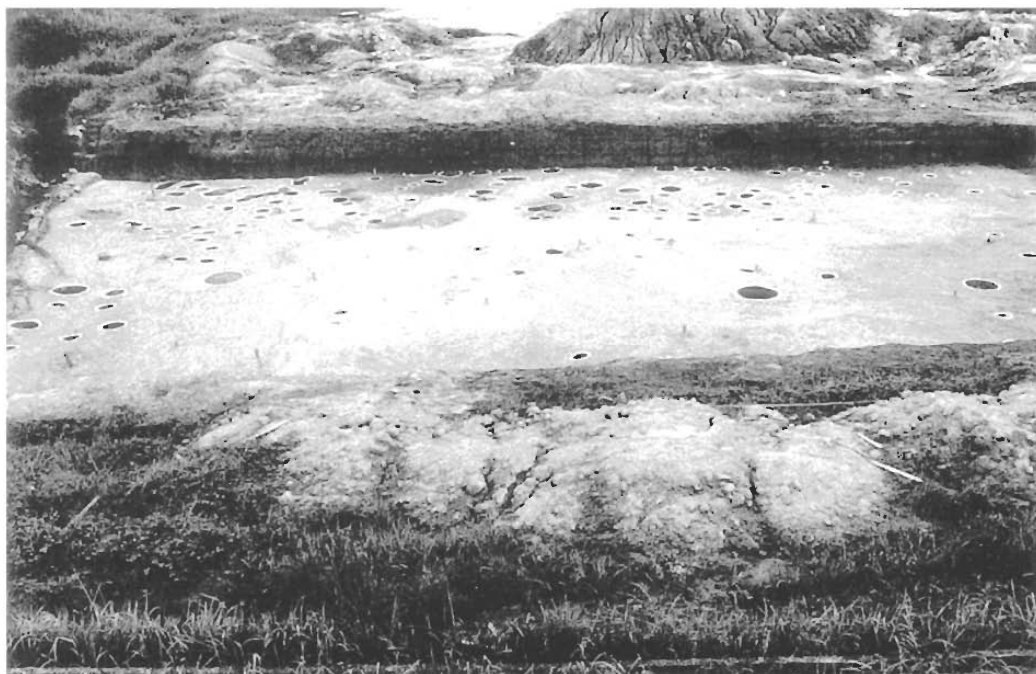


Ⅱ区 北側部・D-34 グリッド周辺 (西より)

写真 16



I区 上層 (北より)



I区 下層 (北より)



SX 2



SX 3



SX 7

写真 18



SX 8



SX 9



SX 10



SX 12



SX 13・上面



SX 13・下面



SX 15



SX 16



SX 18



SX 20



SX 21



SX 23

写真 22 水田跡



J-31~32 グリッド



J-32 グリッド



I-32 グリッド

写真 23 水田跡



I-34 グリッド



F~G-32~33 グリッド

写真 24 火葬墓



骨臓器埋納状況



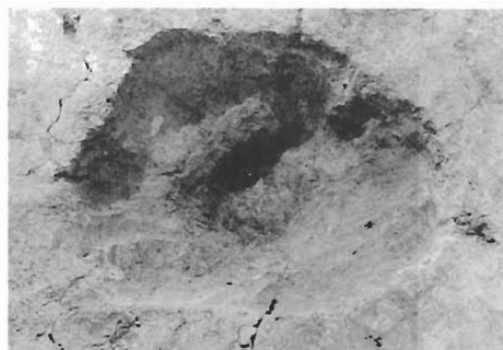
確認状況



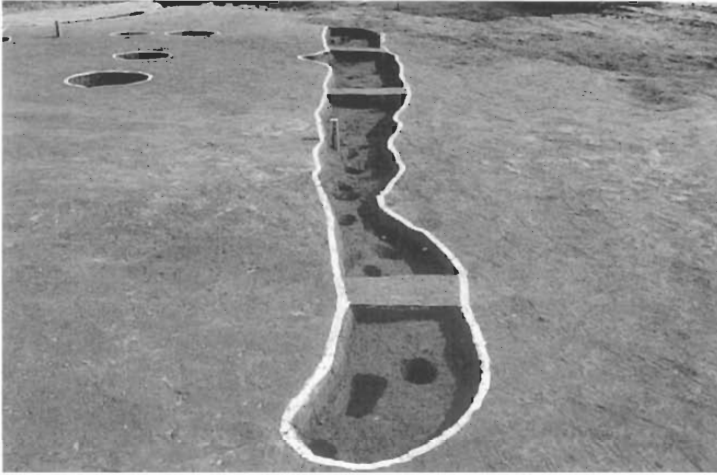
半截状況



骨臓器埋納状況（上より）



埋納土坑完掘状況



SD 3 (北より)

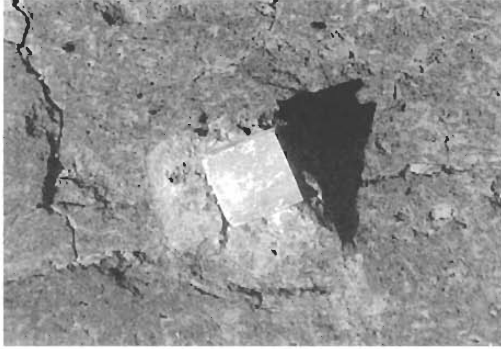


SD 6 (北より)



SD 8 (東より)

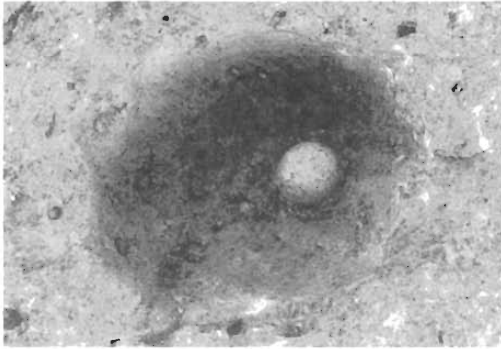
写真 26 遺物出土状況



革帯装飾具 (巡方)



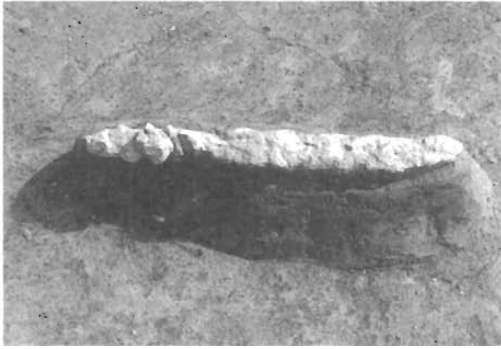
泥塔



銅碗 (ピット 59)



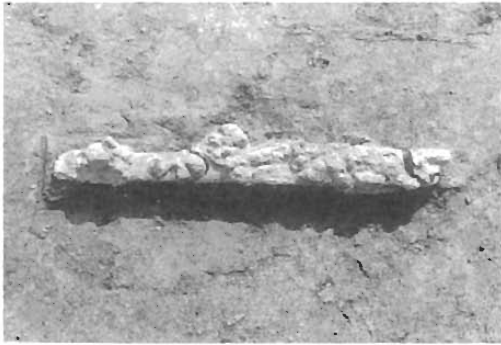
硯



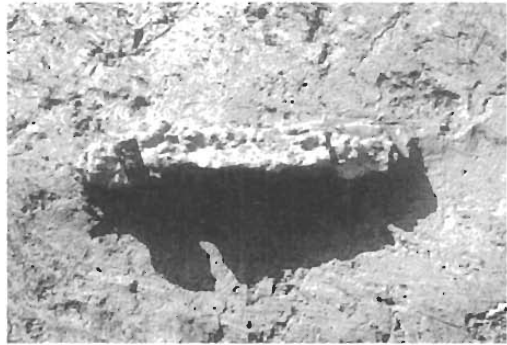
小刀



小刀



小刀



小刀



青磁碗



天目茶碗



コネ鉢



瓦器碗



土師器碗(1)



土師器碗(2)



土師器碗(4)



土師器碗(5)



土師器碗 (6)



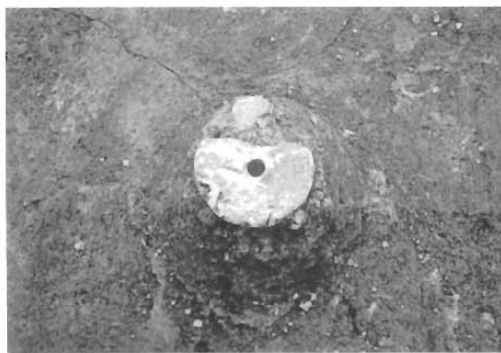
須恵器甕



石鍋



石鍋・土師器碗



石製紡錘車



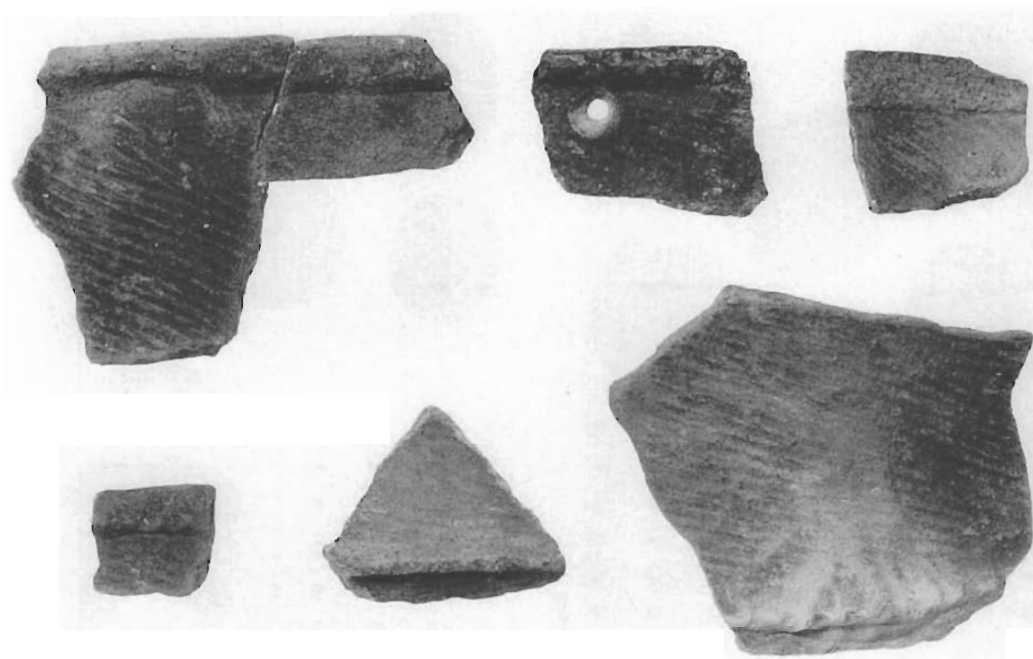
土錘 (1)



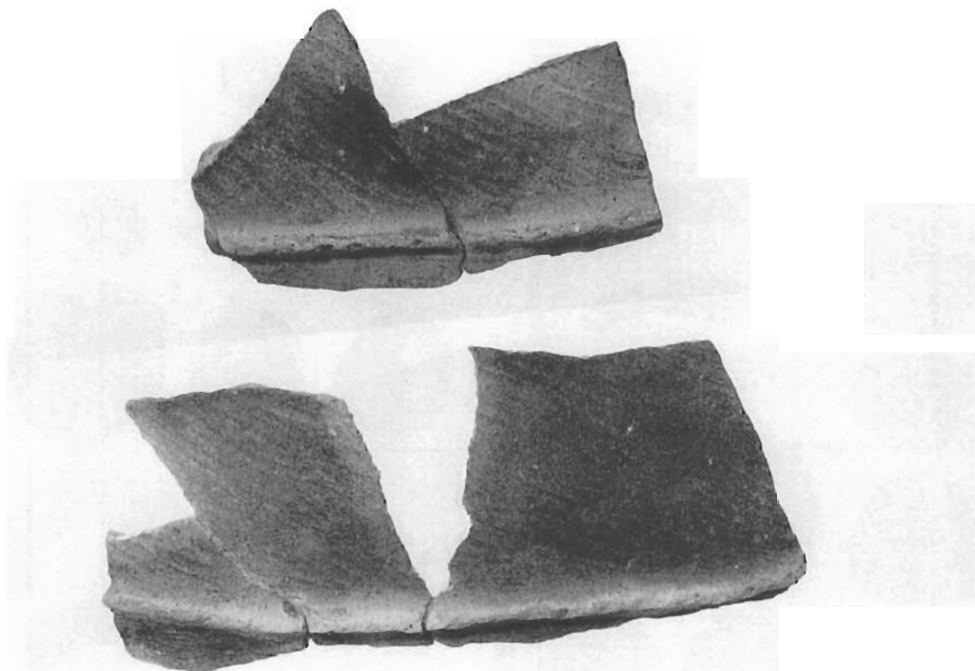
土錘 (2)



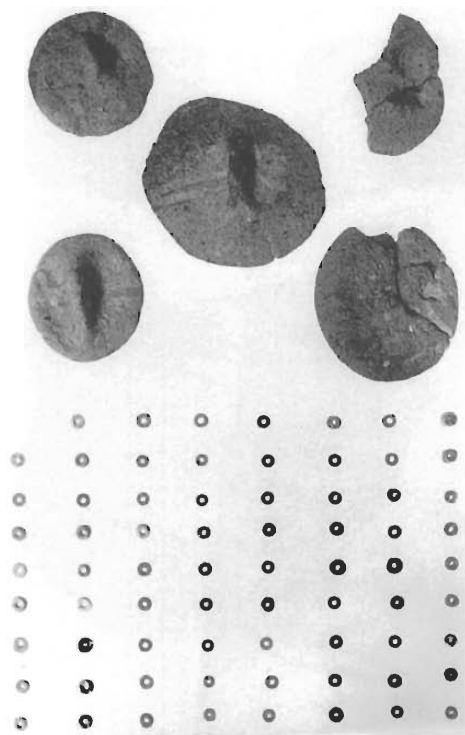
古銭



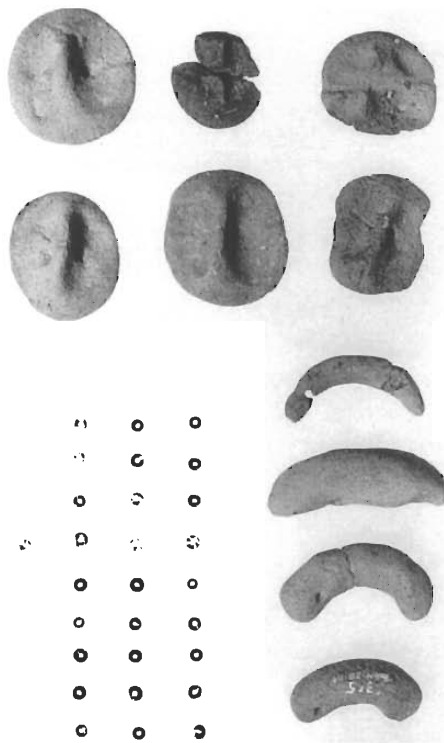
縄文時代晚期土器(1)



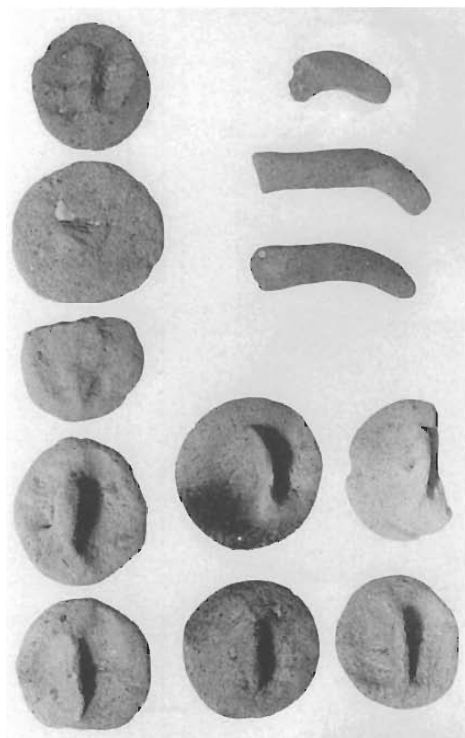
縄文時代晚期土器(2)



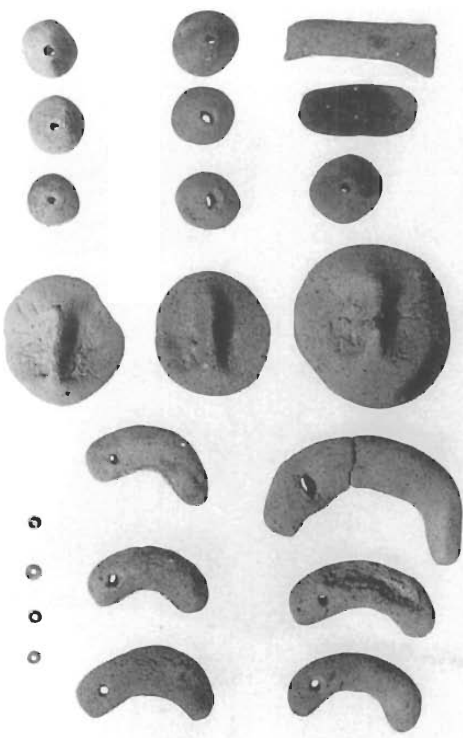
SF 10 祭祀遺物



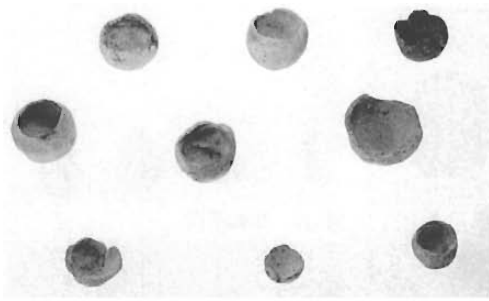
SF 11 祭祀遺物(1)



SF 11 祭祀遺物(2)



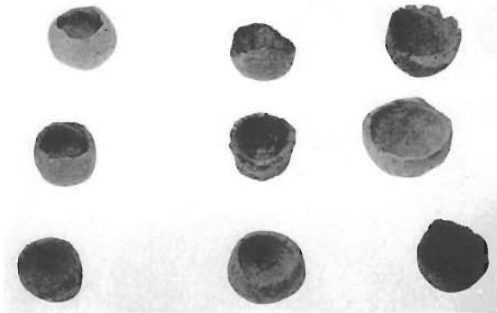
SF 17 祭祀遺物



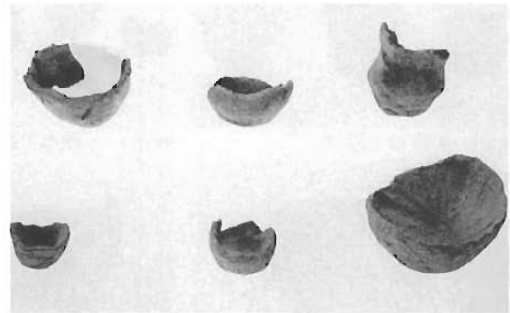
SF 11 手捏ね土器(1)



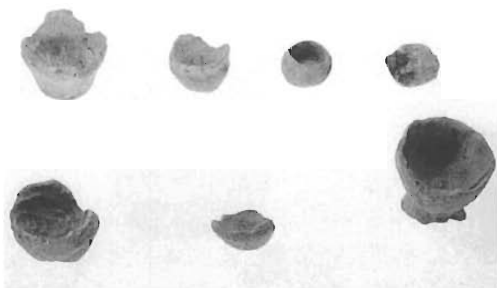
SF 15 祭祀遺物



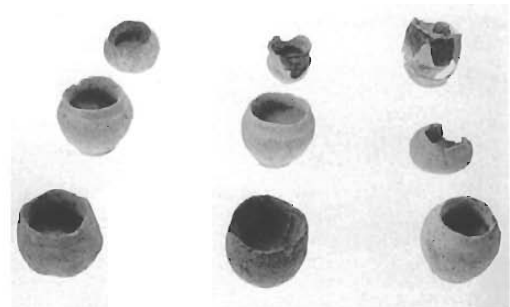
SF 11 手捏ね土器(2)



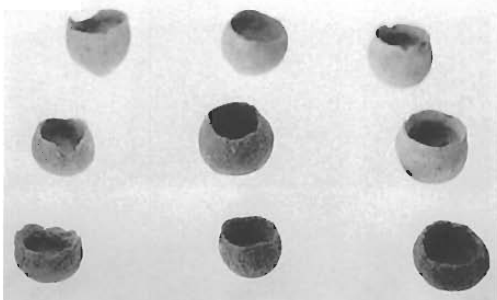
SF 15 手捏ね土器



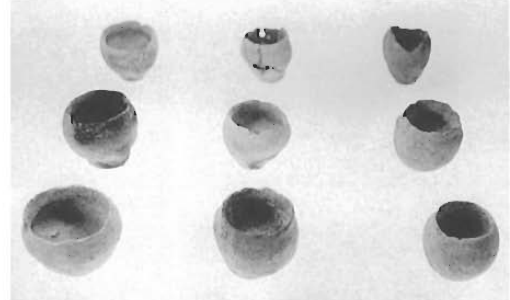
SF 11 手捏ね土器(3)



SF 17 手捏ね土器(1)

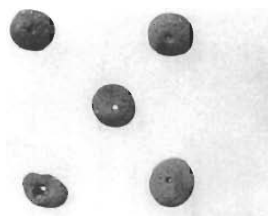


SF 17 手捏ね土器(2)

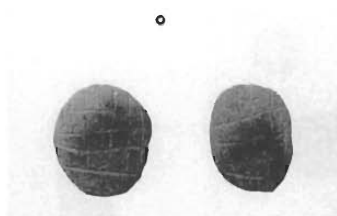


SF 17 手捏ね土器(3)

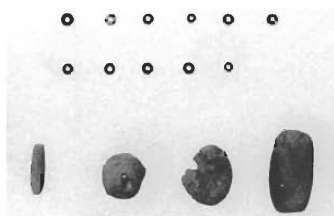
写真 32



SF 11 土製玉



SF 12 白玉・有溝円板



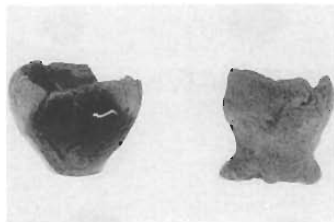
SF 12 祭祀遺物



SF 10 手捏ね土器(1)



SF 10 手捏ね土器(2)



SF 10 手捏ね土器(3)



SF 10-93



SF 11-91



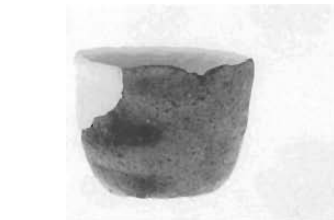
SF 11-94



SF 11-101



SF 11-102



SF 11-106



SF 13-1



SF 10-102



SF 10-103



SF 12-9



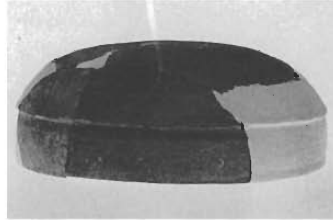
SF 13-36



SF 15-84



SF 10-須 13



SF 10-須 21



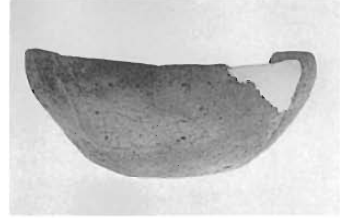
SF 10-須 30



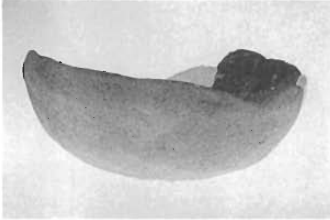
SF 10-須 31



SF 10-須 32



SF 10-96



SF 10-97



SF 11-須 35



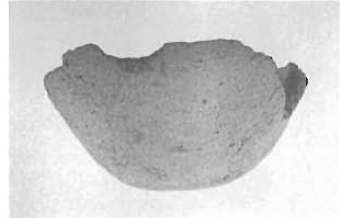
SF 11-須 44



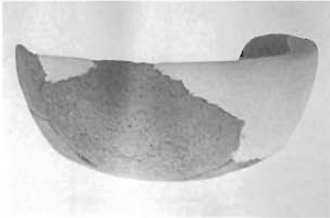
SF 11-須 45



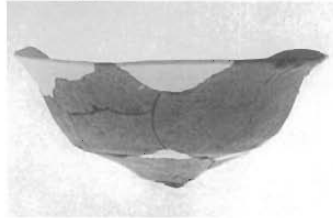
SF 11-須 46



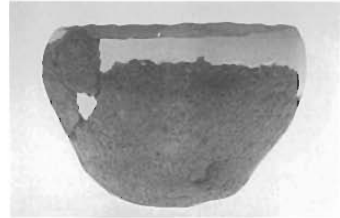
SF 11-103



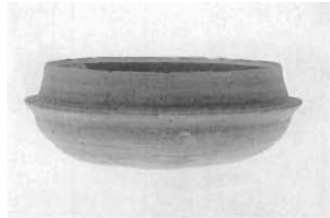
SF 11-105



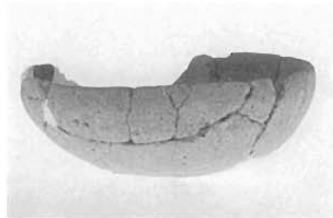
SF 12-4



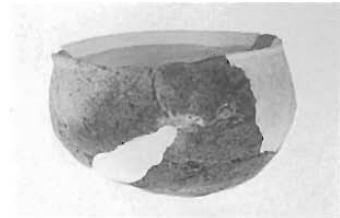
SF 12-8



SF 13-須 59

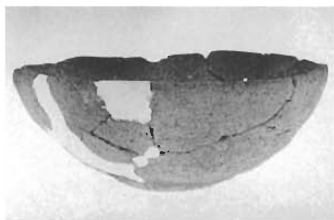


SF 13-2

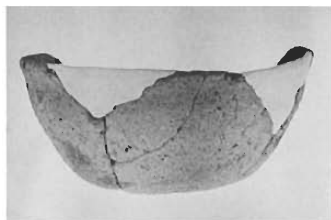


SF 13-5

写真 34



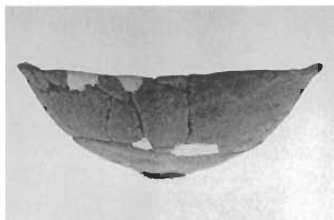
SF 13-8



SF 13-9



SF 13-12



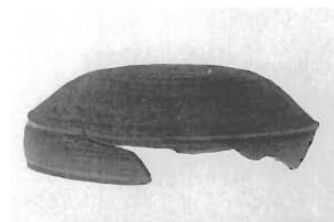
SF 14-3



SF 14-28



SF 15-須 66



SF 15-須 72



SF 15-須 79



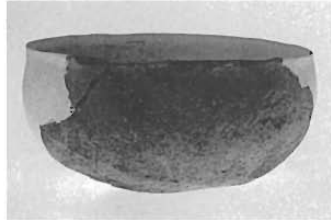
SF 15-須 96



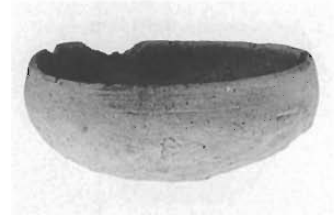
SF 15-須 100



SF 15-10



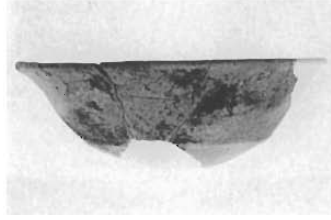
SF 15-14



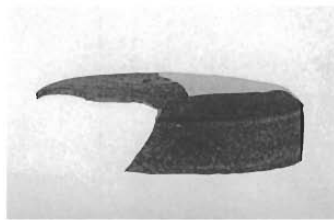
SF 15-20



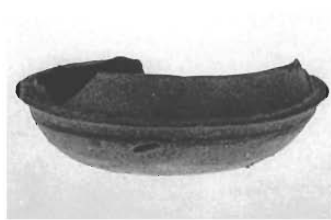
SF 15-24



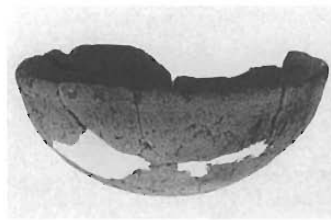
SF 15-29



SF 16-須 108



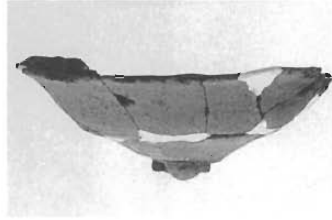
SF 16-須 114



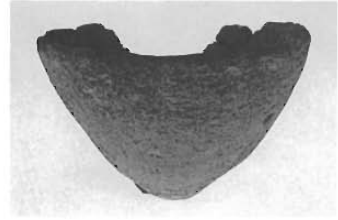
SF 16-2



SF 16-3



SF 16-4



SF 16-9



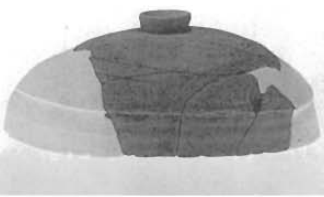
SF 17-須 118



SF 17-須 120



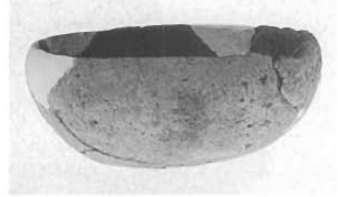
SF 17-須 132



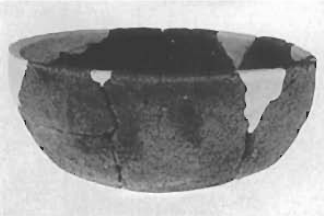
SF 17-須 133



SF 17-須 134



SF 17-51



SF 17-54



SF 17-61



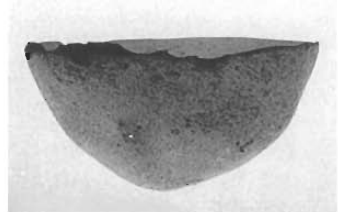
SF 17-62



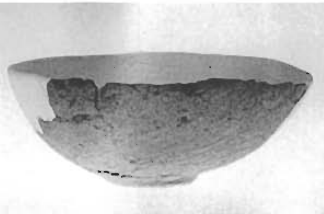
SF 17-65



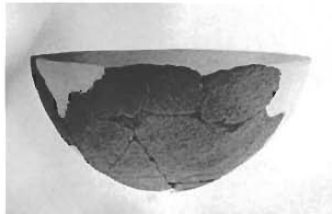
SF 17-66



SF 18-2



SF 18-5



SF 18-9



SF 18-11

写真 36



遺構外-須 16



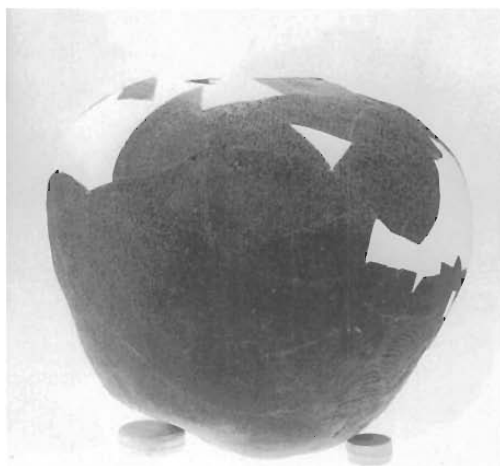
SF 13-須 63



SF 15-須 106



SF 15-須 107



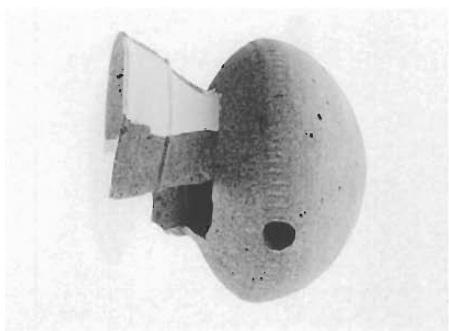
SF 17-須 137



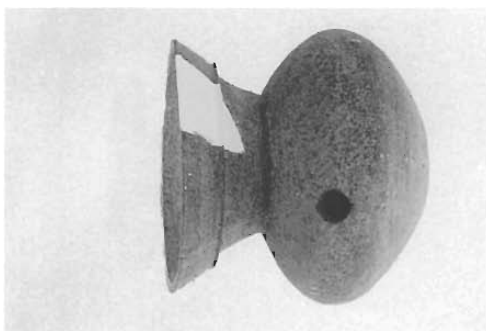
SF 17-須 138



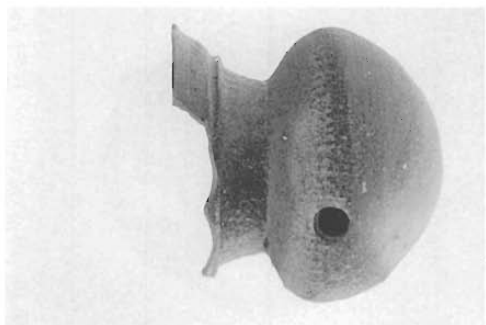
SF 17-須 139



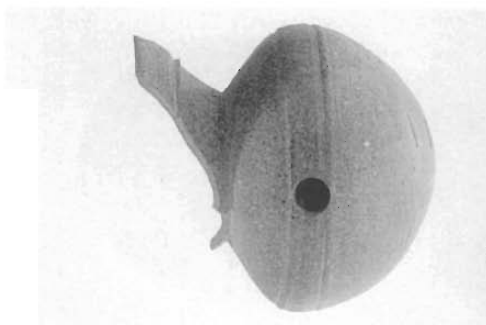
SF 12-須 51



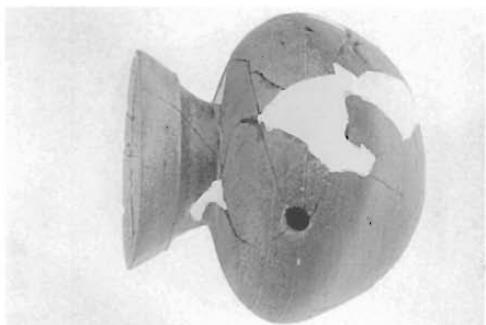
SF 13-須 62



SF 15-須 102



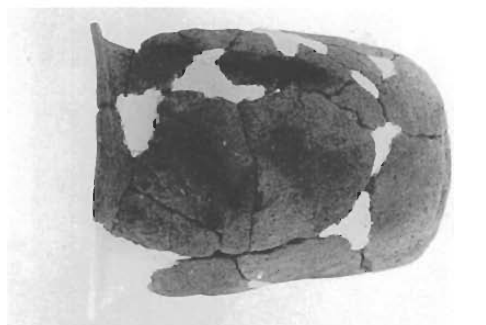
SF 15-須 103



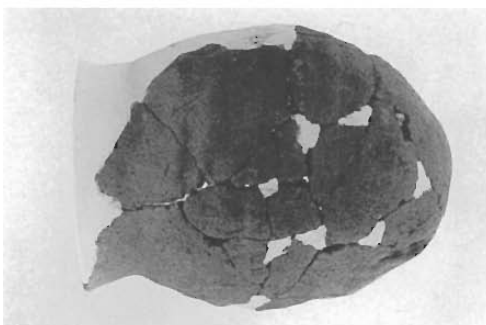
SF 15-須 157



SF 10-99



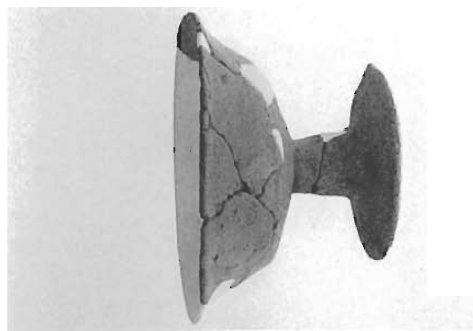
SF 11-110



SF 11-113



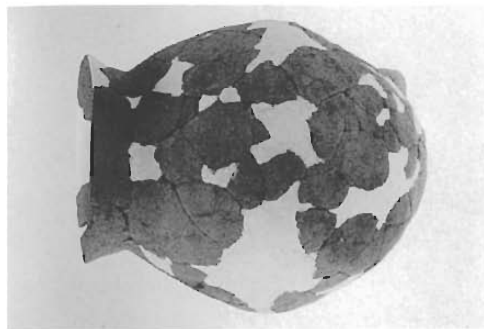
SF 13-13



SF 13-14



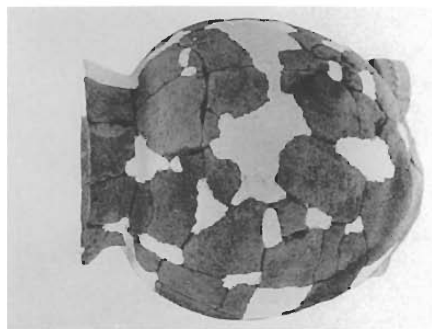
SF 13-20



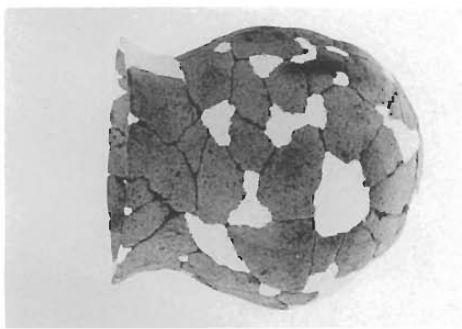
SF 13-23



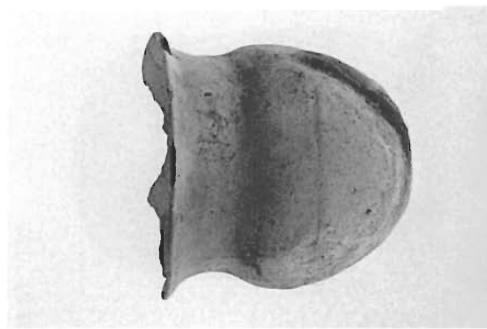
SF 13-29



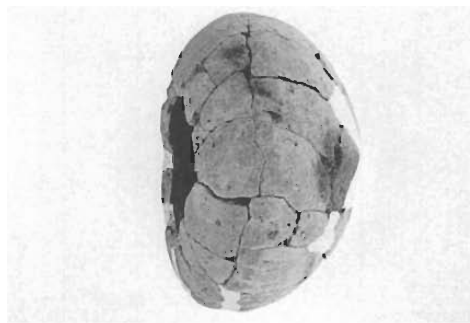
SF 13-30



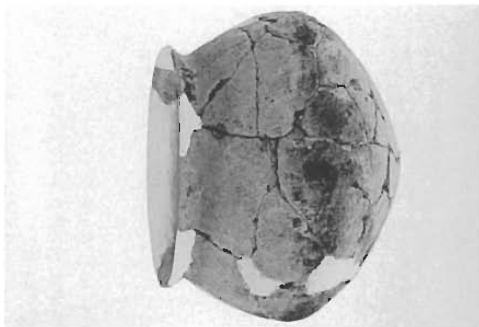
SF 13-31



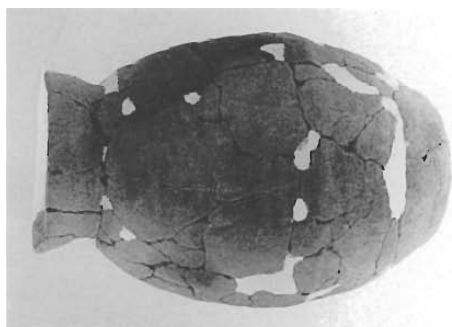
SF 15-36



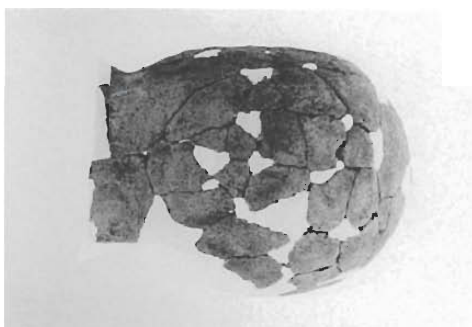
SF 15-37



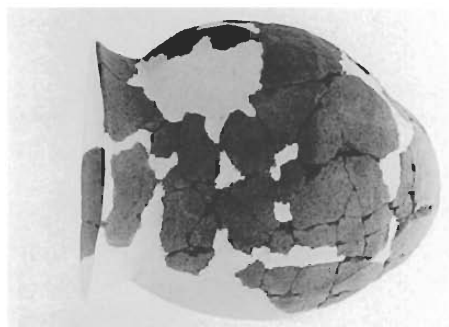
SF 15-38



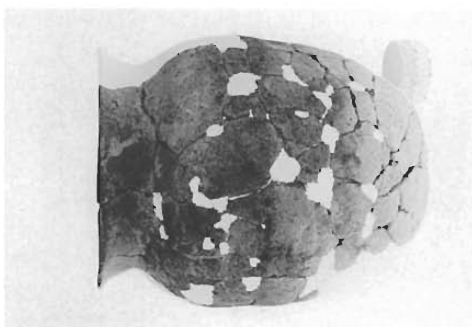
SF 15-40



SF 15-41



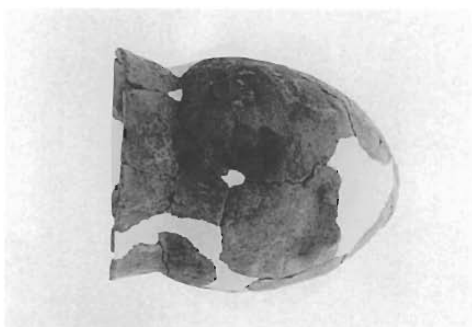
SF 15-48



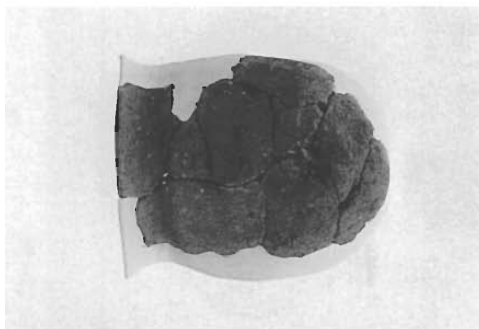
SF 15-53



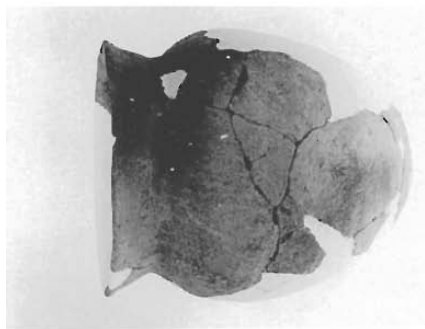
SF 15-63



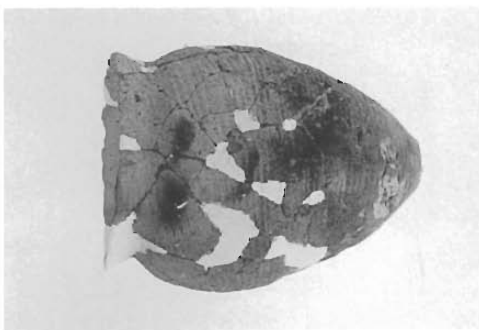
SF 15-64



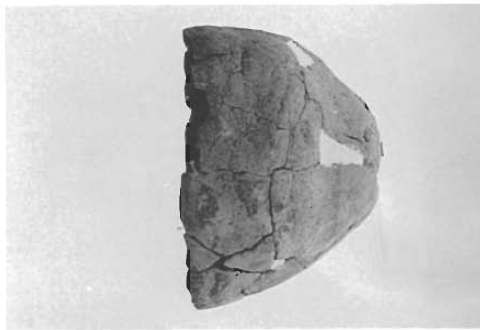
SF 15-67



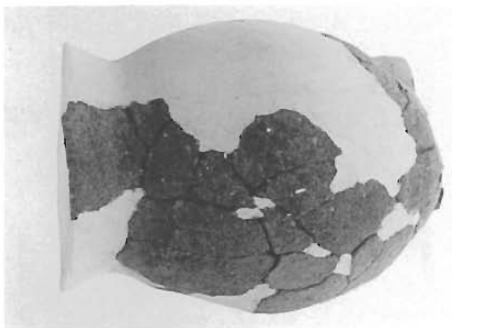
SF 15-74



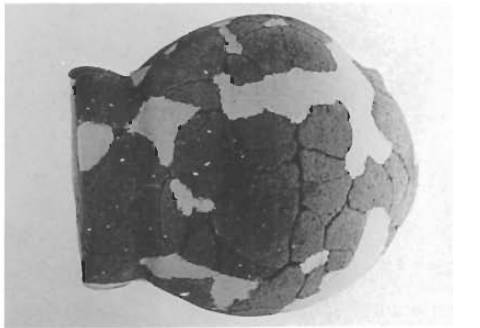
SF 15-82



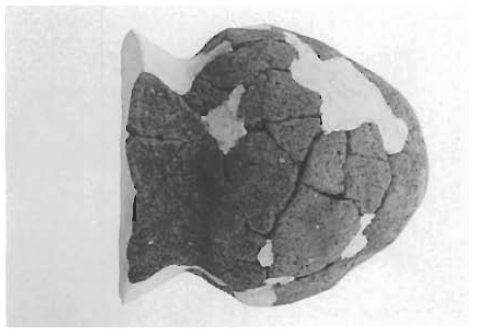
SF 15-83



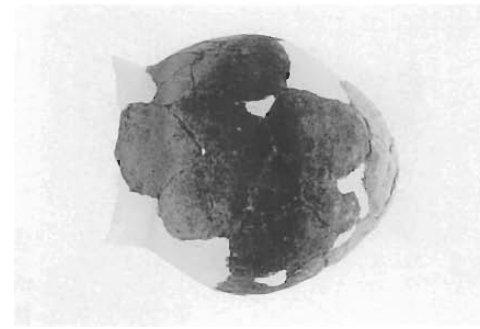
SF 16-6



SF 16-7



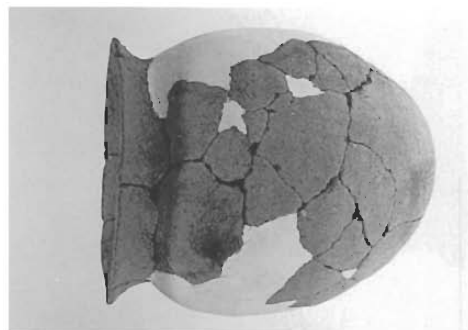
SF 17-70



SF 17-72



SF 17-77



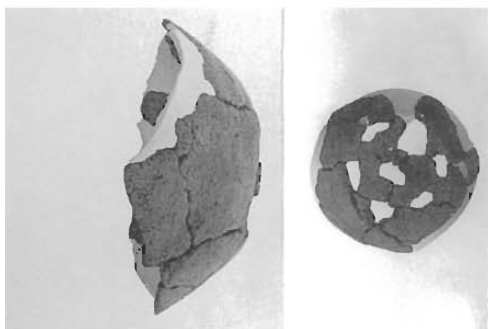
SF 17-80



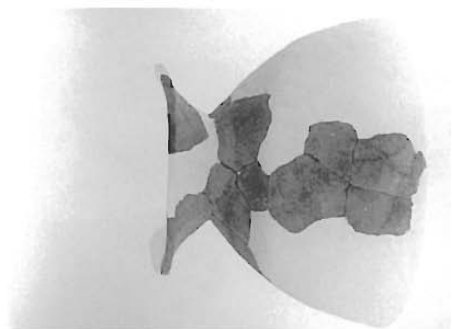
SF 17-81



SF 17-85



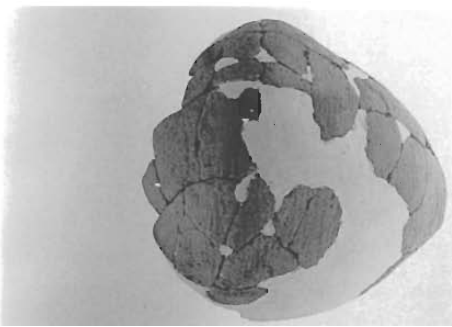
SF 17-86



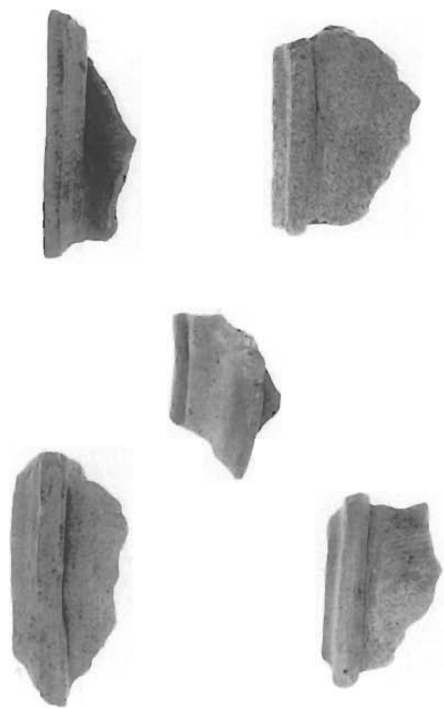
SF 18-13



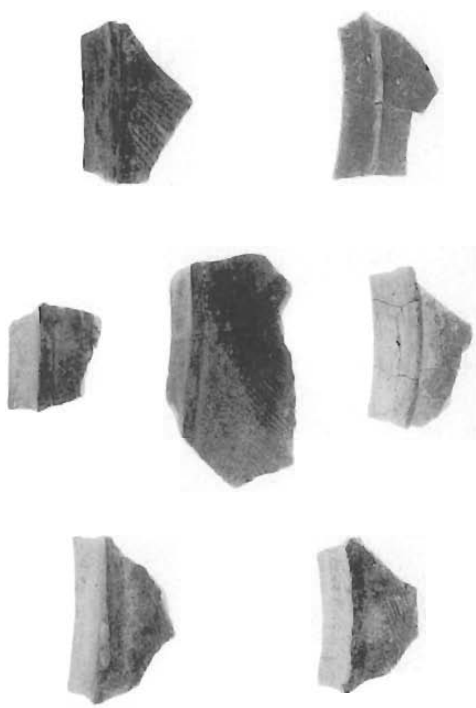
SF 18-24



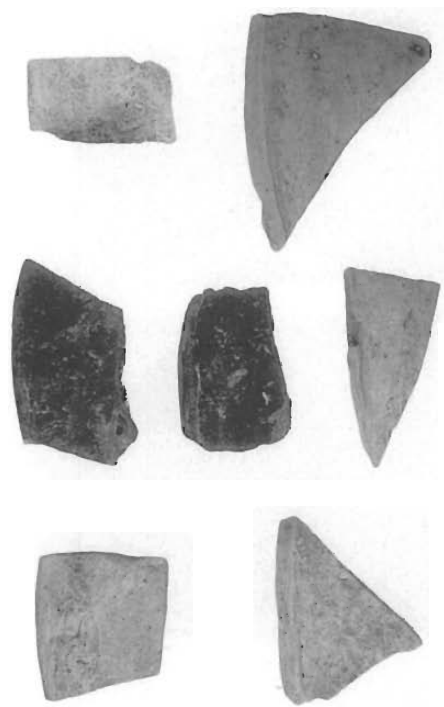
SF 18-26



第 88 图 1~4, 6



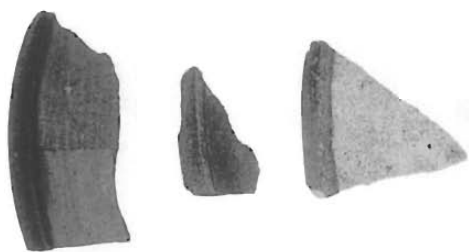
第 88 图 11~15, 第 89 图 2, 3



第 89 图 5~11



第 93 图 14~17, 19, 20, 22, 23



第94图11~14, 第95图1~4

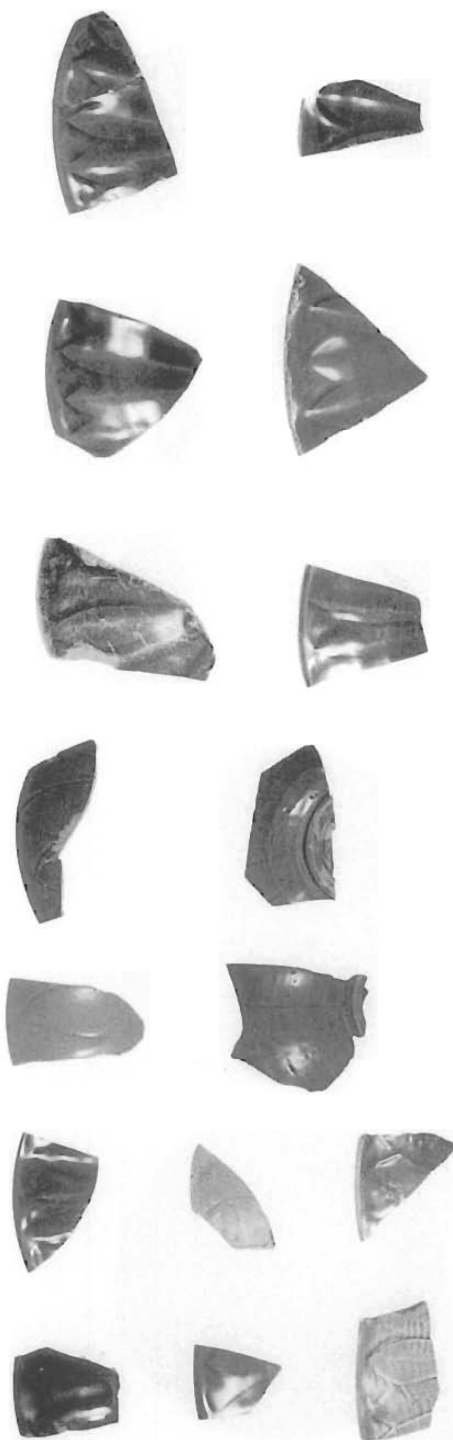
第98图2~7, 9, 10



第87图1~5



第93图20



第 99 图 21~30

第 99 图 2, 3, 5~8

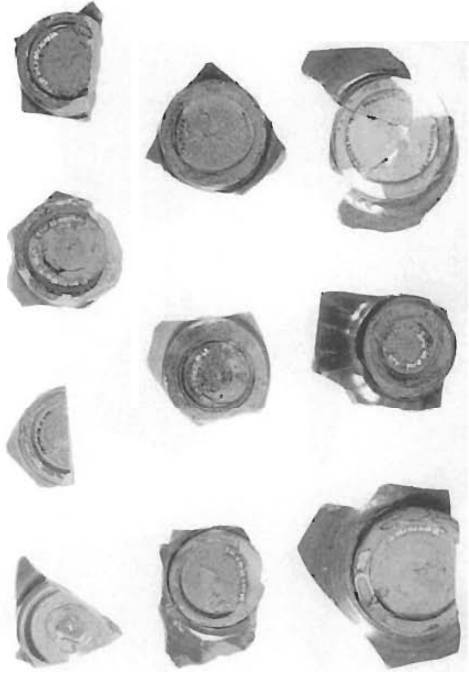


第 100 图 1~10, 12, 13

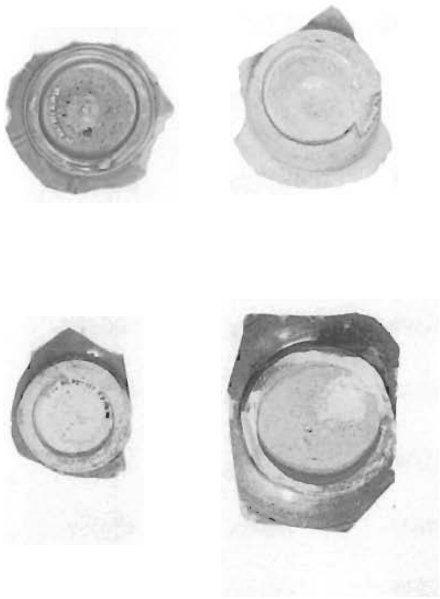
第 99 图 9~20



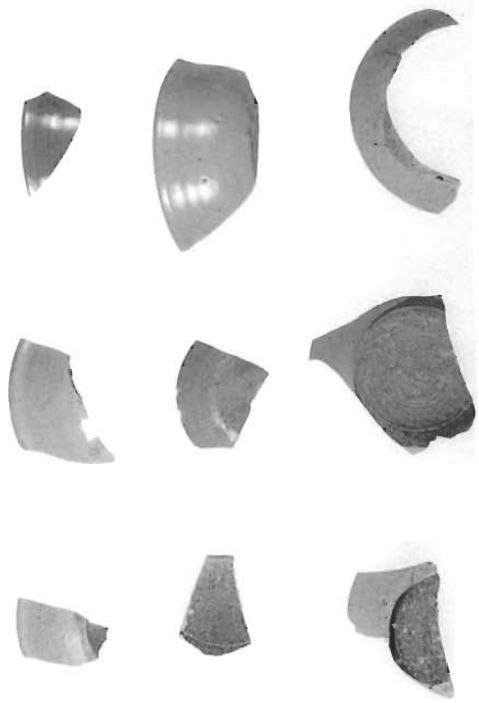
第100图14~25, 28, 29



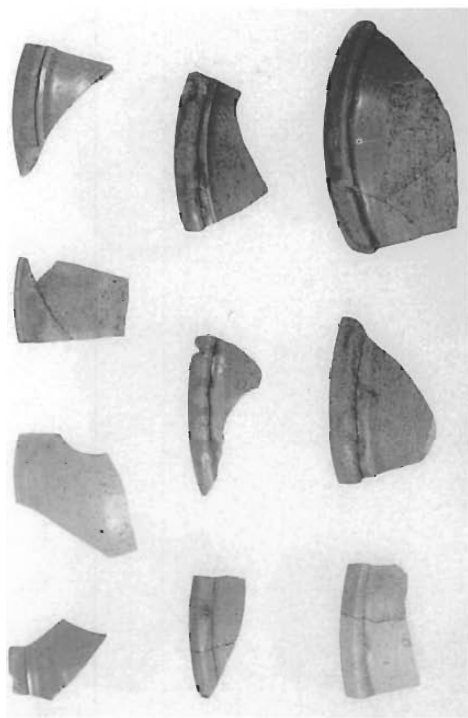
第100图27, 第101图1~9



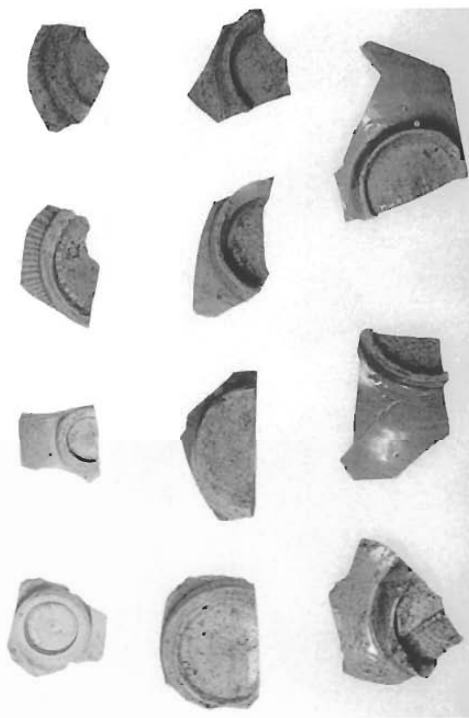
第101图10~13



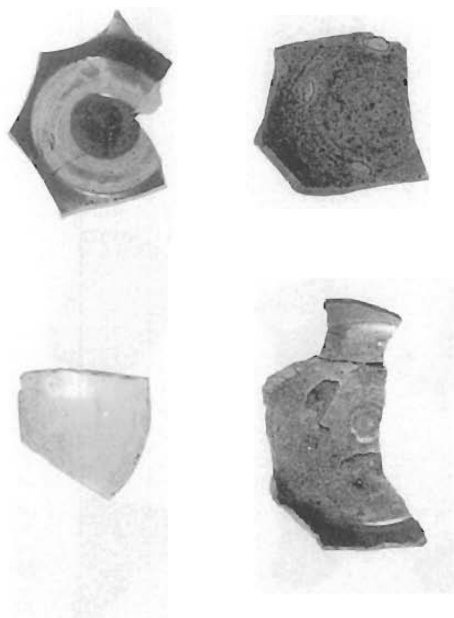
第102图1~5, 7, 9~11



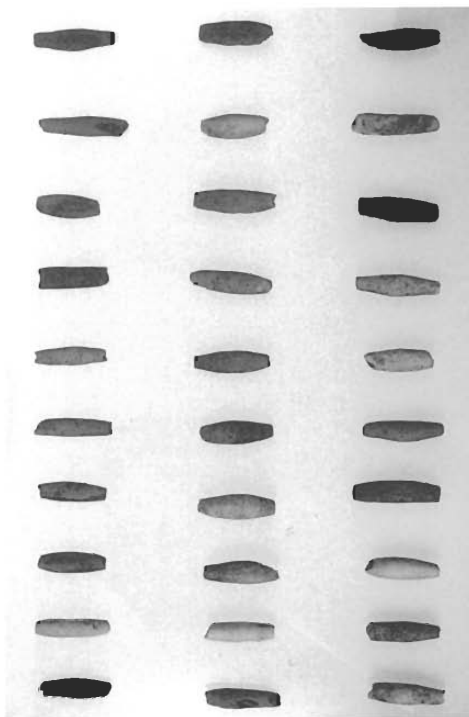
第102図19~28



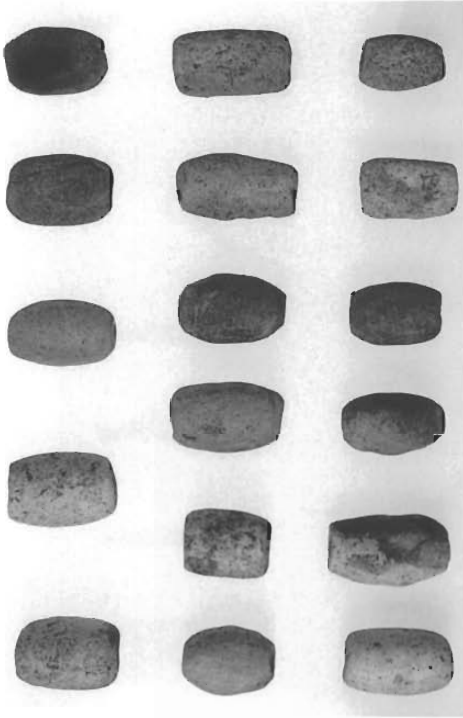
第102図29~32, 34, 35, 40, 第103図4~6



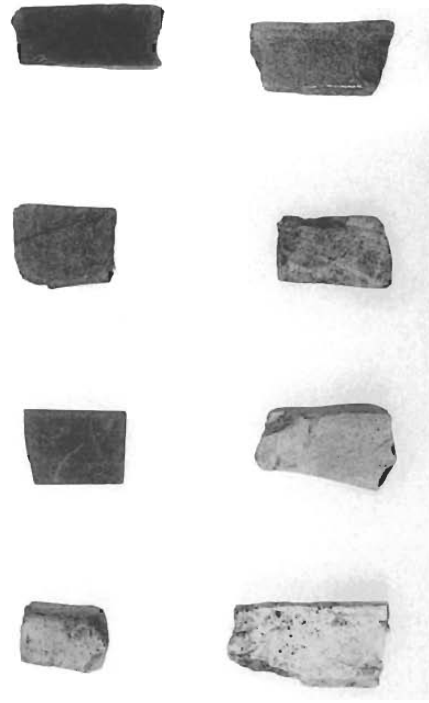
第103図26, 27, 第104図1, 4



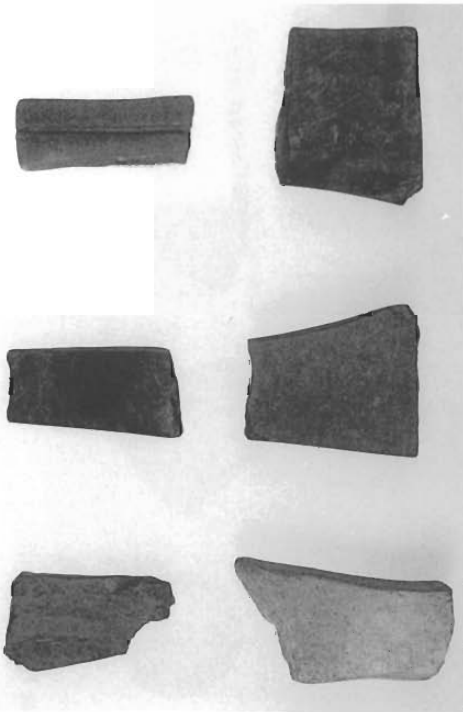
第108図1~30



第109图 6~22



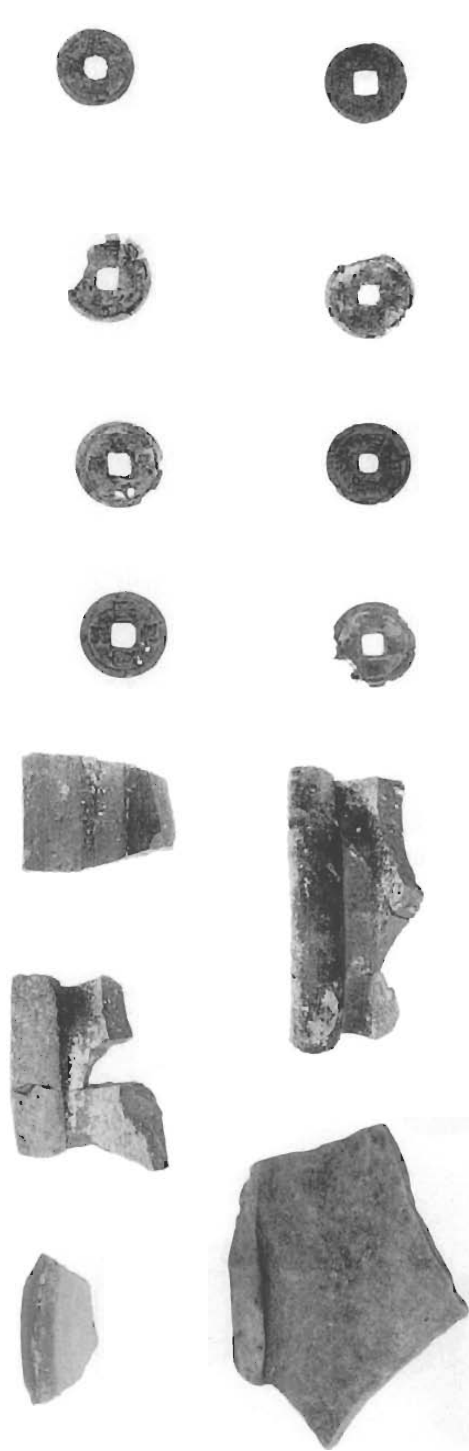
第105图 1~8



第105图 17, 第106图 1~6



第107图 1, 3~6



第75図1~5

第111図1~8



第79図9~13, 15

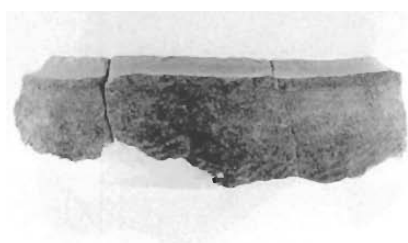
第107図8~22



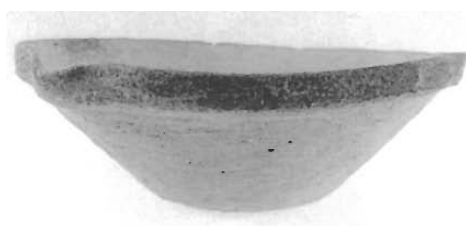
第 77 图 5



第 88 图 7



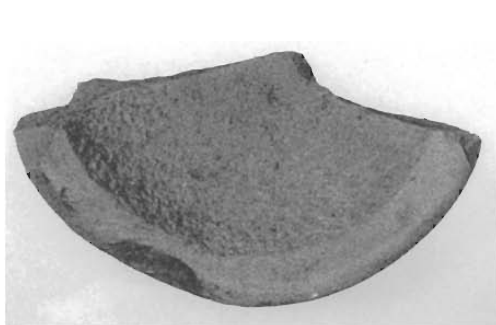
第 88 图 10



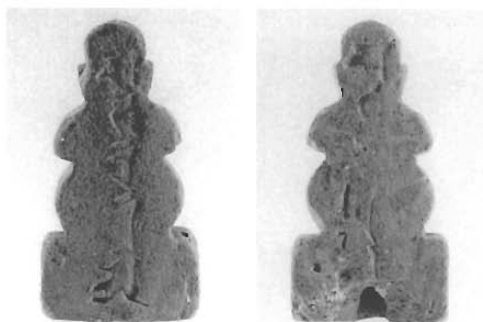
第 95 图 11



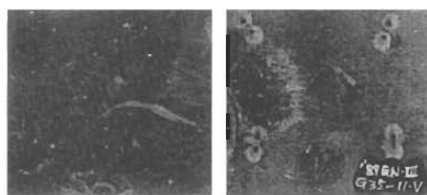
第 95 图 13



第 106 图 10



第 107 图 7



第 107 图 2

写真 50



第 74 图 16



第 74 图 21



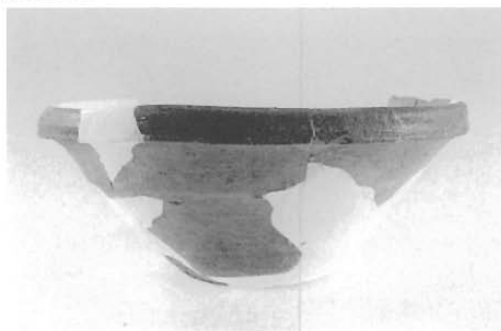
第 76 图 3



第 76 图 4



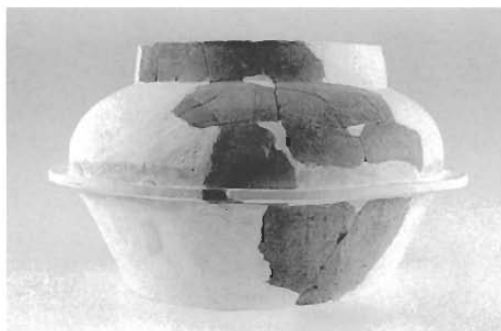
第 76 图 12



第 77 图 10



第 77 图 11



第 78 图 12



第 84 图 1



第 84 图 2



第 84 图 7



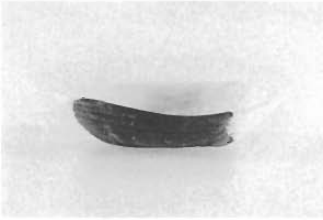
第 84 图 9



第 84 图 11



第 84 图 13



第 84 图 17



第 84 图 27



第 84 图 31



第 84 图 33



第 84 图 38



第 84 图 40



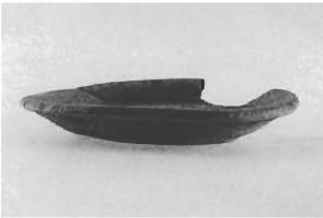
第 84 图 42



第 84 图 45



第 84 图 46



第 84 图 48



第 84 图 54



第 84 图 56

写真 52



第 84 図 59



第 84 図 70



第 84 図 71



第 84 図 72



第 84 図 74



第 84 図 84



第 84 図 92



第 85 図 25



第 85 図 32



第 85 図 40



第 85 図 54



第 86 図 4



第 86 図 16



第 86 図 22



第 86 図 23



第 86 図 24



第 86 図 34



第 91 図 3



第 91 図 8



第 91 図 9



第 91 図 10



第 91 図 15



第 91 図 26



第 91 図 27



第 91 図 28



第 91 図 29



第 91 図 33



第 91 図 41



第 92 図 42



第 92 図 10



第 92 図 11



第 92 図 13



第 92 図 14



第 92 図 32



第 93 図 2



第 93 図 4

写真 54



第 93 図 6



第 93 図 7



第 93 図 8



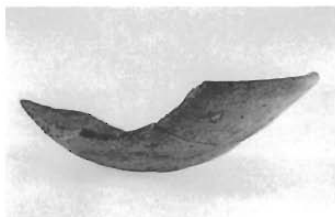
第 93 図 9



第 93 図 12



第 93 図 21



第 93 図 24



第 96 図 14



第 97 図 10



第 98 図 1



第 98 図 8



第 98 図 14



第 98 図 16



第 98 図 20



第 99 図 1



第 101 図 19



第 101 図 20



第 102 図 6



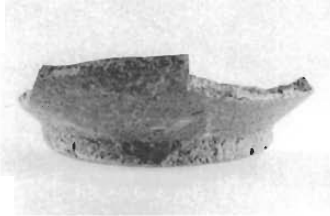
第 102 图 8



第 102 图 33



第 102 图 36



第 102 图 37



第 102 图 38



第 103 图 2



第 103 图 3



第 103 图 15



第 103 图 24(外)



第 103 图 24(内)



第 104 图 3



第 73 图 1



第 73 图 6



第 73 图 10



第 73 图 13



第 73 图 26



第 74 图 5

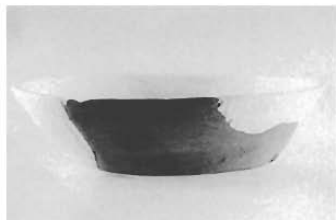


第 74 图 11

写真 56



第 74 图 17



第 75 图 15



第 75 图 16



第 75 图 17



第 77 图 6



第 79 图 16



第 79 图 17



第 80 图 18



第 80 图 24



第 80 图 27



第 80 图 28



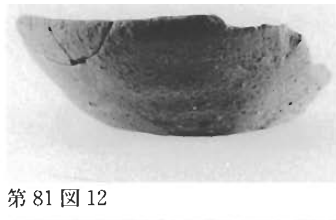
第 81 图 3



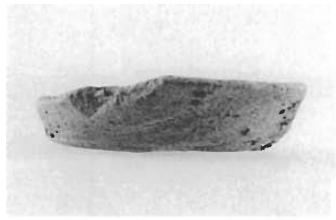
第 81 图 9



第 81 图 11



第 81 图 12



第 81 图 18



第 81 图 20



第 81 图 21



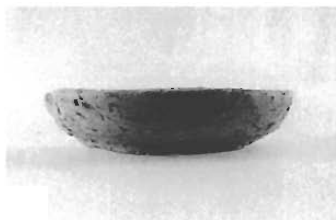
第 81 图 25



第 81 图 31



第 81 图 37



第 81 图 44



第 81 图 46



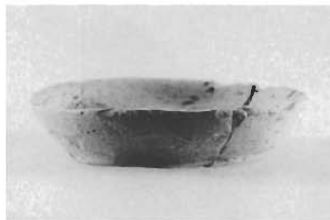
第 81 图 47



第 81 图 48



第 81 图 50



第 82 图 1



第 82 图 2



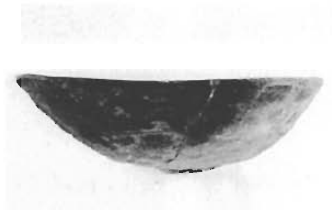
第 82 图 12



第 82 图 19



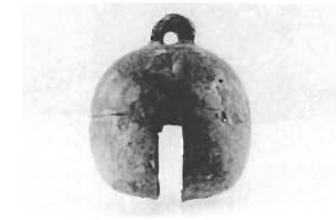
第 82 图 22



第 82 图 23



第 82 图 35



第 83 图 10



第 83 图 11



第 83 图 14

写真 58 調査スナップ



発掘参加者



体験学習



清掃



実測作業



遺構確認作業



フィルムカード



作業員さん



夏の休憩

後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ

具同中山遺跡群

第1分冊

発行日 1992年3月31日

編集・発行 高知県教育委員会
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

印刷 (有)西村謄写堂

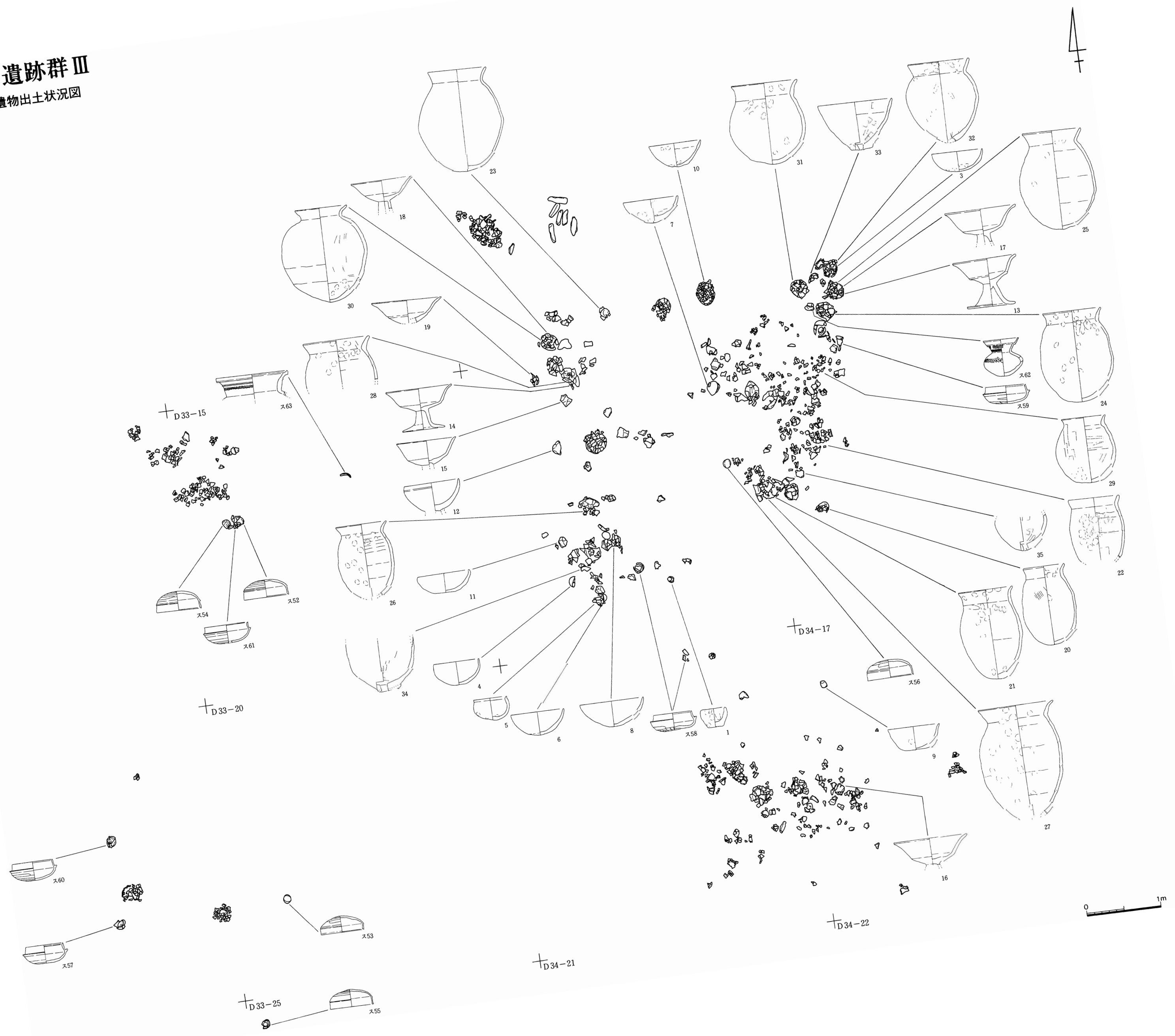
具同中山遺跡群Ⅲ

付図1 SF11 遺物出土状況図



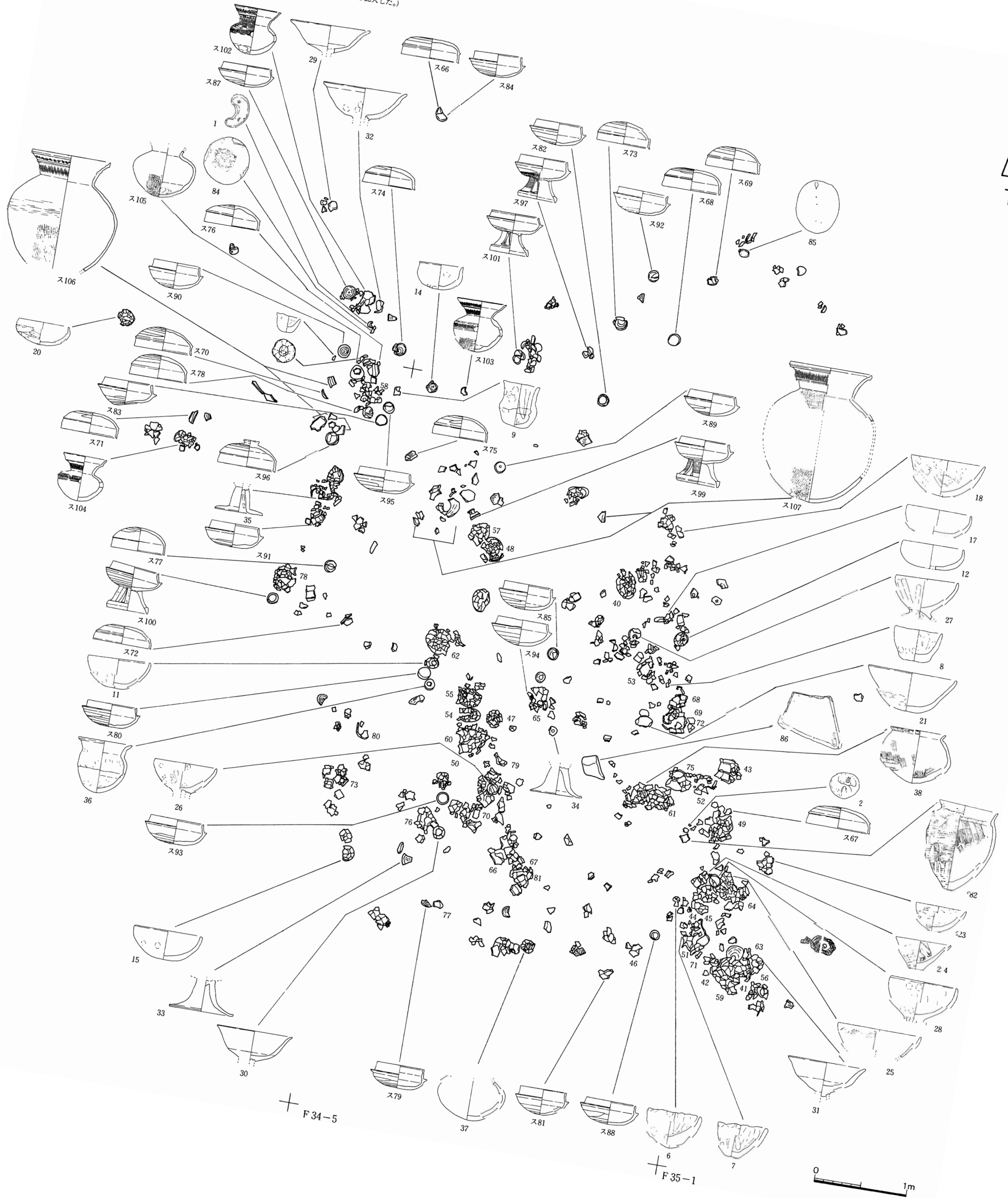
具同中山遺跡群Ⅲ

付図2 SF13遺物出土状況図



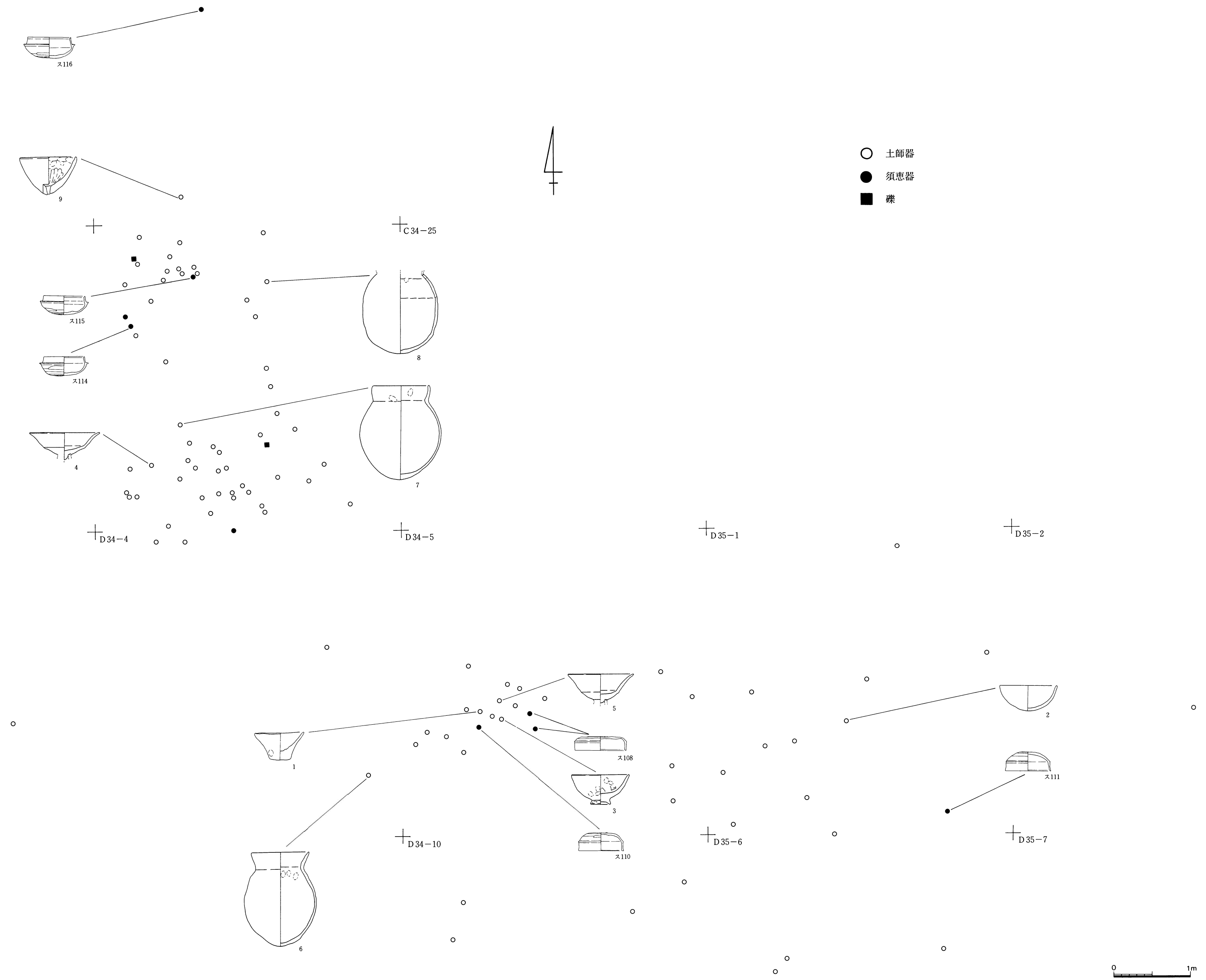
具同中山遺跡群Ⅲ

付図3 SF15 遺物出土状況図 (注:土師器については図示は省略した。遺物番号のみを記入した。)



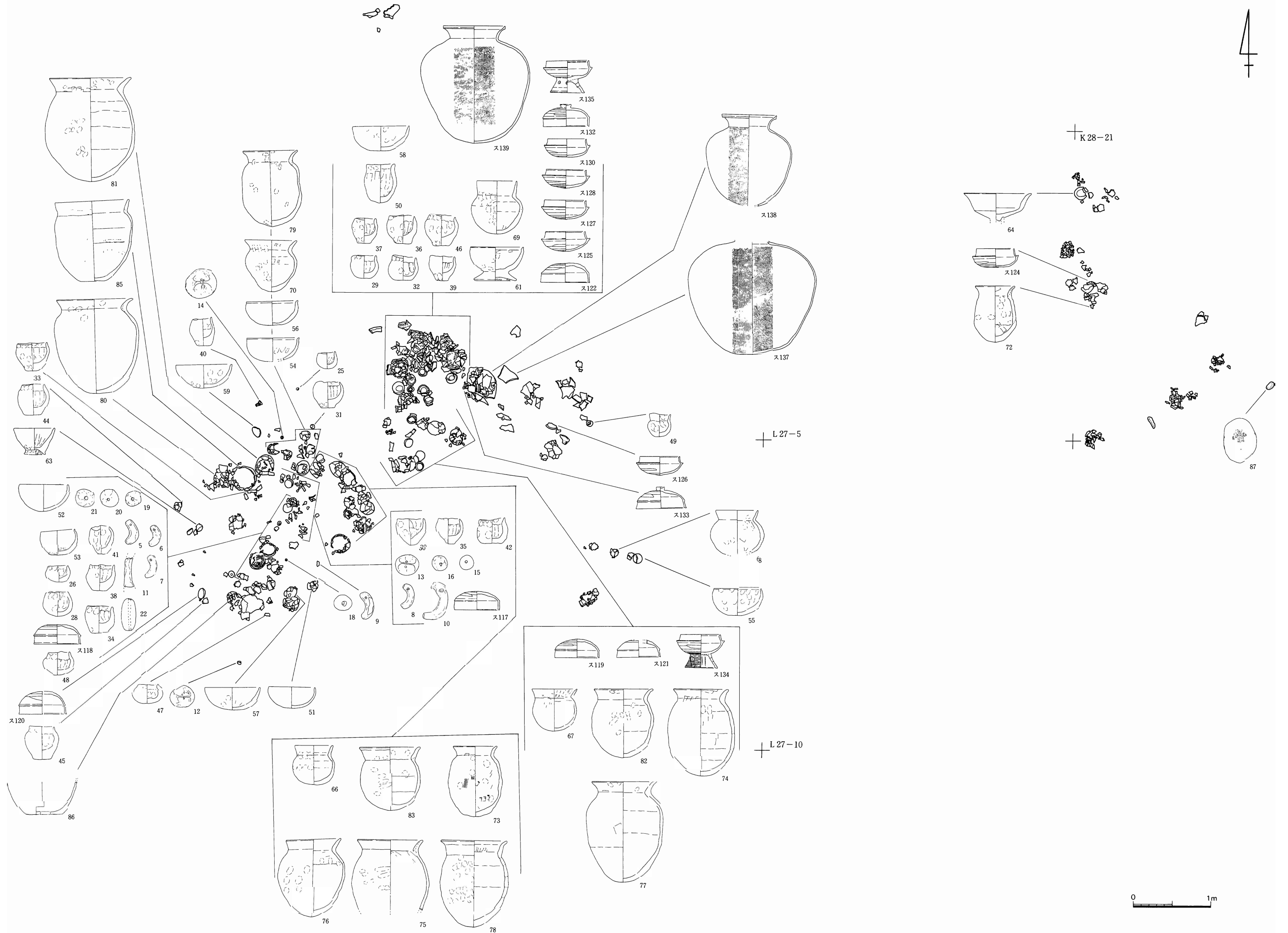
具同中山遺跡群Ⅲ

付図4 SF16 遺物出土状況図



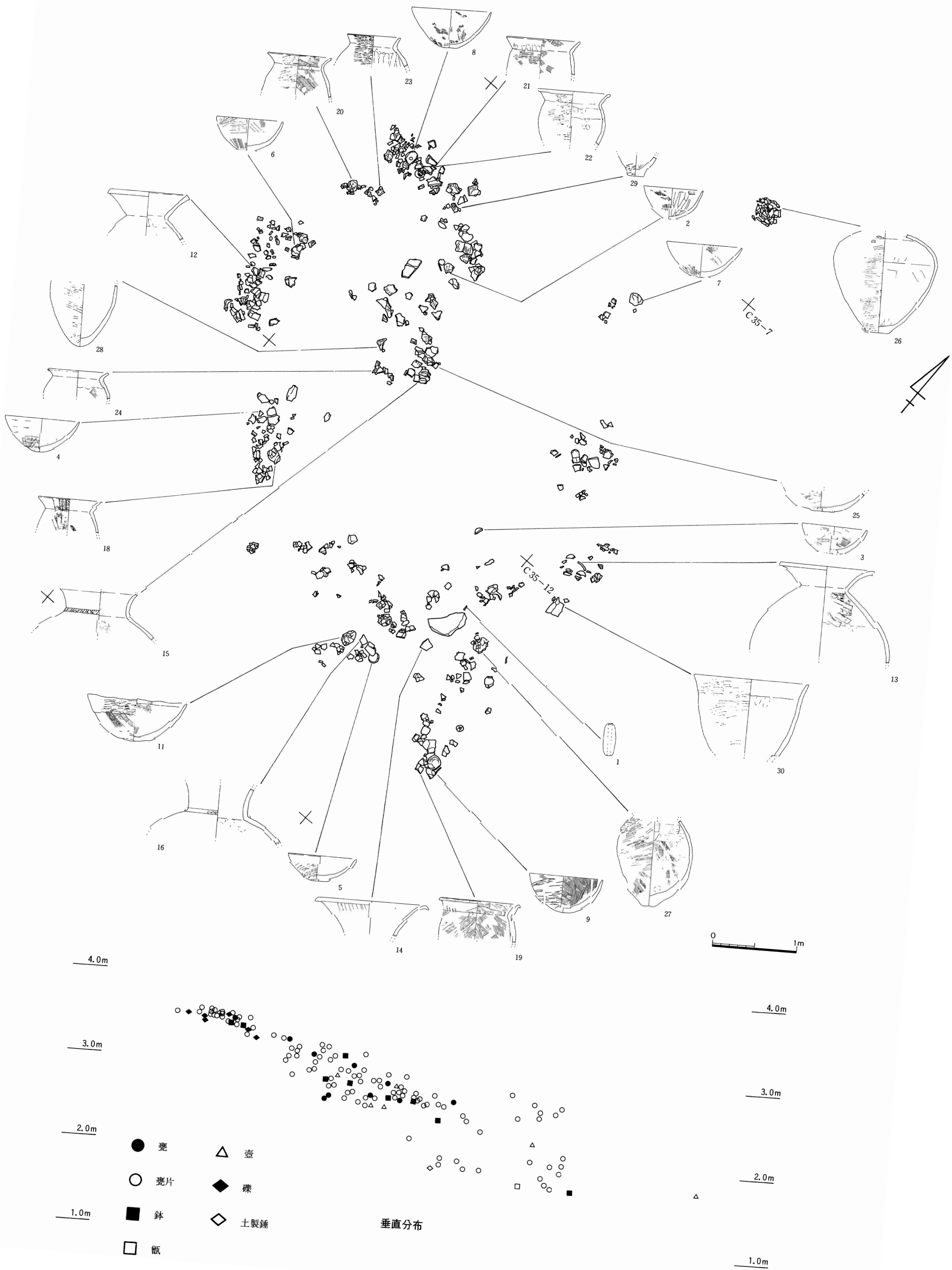
具同中山遺跡群Ⅲ

付図5 SF17 遺物出土状況図



具同中山遺跡群Ⅲ

付図6 SF18 遺物出土狀況図



具同中山遺跡群Ⅲ

付図7 古代・中世遺構全体図(1)



具同中山遺跡群Ⅲ

付図8 古代・中世遺構全体図(2)



具同中山遺跡群Ⅲ

付図9 SF20 遺物出土状況図

